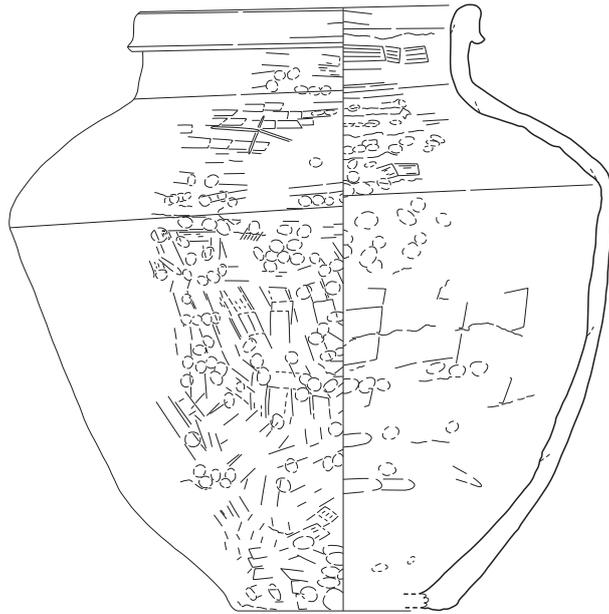


もり やま じょう せき に の へい い せき
森山城跡・二ノ堀遺跡

県道甲殿弘岡上線建設に伴う発掘調査報告書



2023.3

高知県
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

森山城跡・二ノ堀遺跡

県道甲殿弘岡上線建設に伴う発掘調査報告書

2023.3

高知県

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

森山城跡は、高知市春野町にある中世の山城で、仁淀川を望む重要な場所に位置しています。春野町には山城が多く、これまで芳原城跡や吉良城跡、木塚城跡など多くの調査が行われ、中世山城を考古学的に解明し大きな成果があがっています。

今回の調査では、山城が機能していた時期を確認すると共に、大造成をして曲輪を造り出すなど、山城の構造の一端を知ることができました。さらに、自然流路や湿地など自然地形を生かし、守りを固めていたことも判りました。縄張り調査や文献資料だけでは語れない、地域の歴史を紐解く資料として、この報告書を活用して頂ければ幸いです。

また、多くの方が当時に思いを馳せ、より山城や歴史に興味を持ち、埋蔵文化財の価値を再認識して頂くきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に従事してくださった皆様、また、調査にあたって多大なご協力を頂きました地域の皆様方、高知県・高知県教育委員会・高知市教育委員会をはじめとする関係諸機関及び関係各位に厚く御礼申し上げます。

公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
所長 松田直則

例言

1. 本書は県道甲殿弘岡上線の建設に伴い、令和2・3年度に実施した森山城跡と二ノ堀遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査及び整理作業は、高知県の委託を受け、公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査地は、高知市春野町森山中に位置する。
4. 調査は、令和2年5月7日～令和3年1月22日及び令和3年5月6日～12月2日に実施した。
5. 調査・整理作業体制は以下の通りである。

令和元年度

総括：所長 松田直則
総務：次長兼総務課長 和田安弘，総務係長 吉森和子
調査総括：調査課長兼調査第一班長 吉成承三
調査担当：専門調査員 徳平涼子，調査員 下木千佳
調査補助員：大原直美
事務補助員：廣内美登利，今田琴美

令和2年度

総括：所長 松田直則
総務：次長兼総務課長 橋田歩，総務係長 吉森和子，総務主査 門田香織
調査総括：調査課長兼調査第一班長 吉成承三
調査担当：調査第三班長 池澤俊幸，専門調査員 徳平涼子
調査補助員：大原直美，別役昌彦
事務補助員：今田琴美，奥宮千恵子，廣内美登利
整理作業員：加来安由美，田島歩，畑平裕美，横山めぐみ

令和3年度

総括：所長 松田直則
総務：次長兼総務課長 橋田歩，総務主査 門田香織
調査総括：調査課長 吉成承三
調査担当：専門調査員 徳平涼子，田代雅美
調査補助員：大原直美
事務補助員：今田琴美，岩川翔子
整理作業員：黒岩佳子，芝野美穂，畑平裕美，渡辺佳奈

令和4年度

総括：所長 松田直則
総務：次長兼総務課長 橋田歩，総務主査 門田香織
調査総括：調査課長 吉成承三

調査担当：専門調査員 徳平涼子

調査補助員：大原直美

事務補助員：今田琴美，奥宮千恵子，廣内美登利

整理作業員：岡宗真紀，加来安由美，黒岩佳子，横山めぐみ，渡辺佳奈

6. 本書の執筆は，第V章をパリノ・サーヴェイ株式会社，その他の執筆及び編集は徳平が行った。
7. 本書に掲載した現場写真は池澤，徳平，田代，遺物写真は徳平が撮影した。
8. 遺構については，SB(掘立柱建物跡)，SA(塀・柵列跡)，SK(土坑跡)，SD(溝跡)，SX(大型土坑跡)，P(ピット)，SR(自然流路跡)で表記した。また，掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており，方位Nは世界測地系のGNである。遺構番号は各遺跡ごとに通し番号とした。
9. 遺物については，原則として縮尺1/3，瓦については縮尺1/5で掲載し，一部の遺物については縮尺を変えているが，各挿図にはスケールを記している。また，遺物番号は通し番号とし，挿図と写真図版の遺物番号は一致している。
10. 調査にあたっては，地元住民の方々に遺跡に対するご理解とご協力を頂き，厚く感謝の意を表したい。
11. 整理作業及び発掘作業については，多くの方々に労を厭わず作業に従事して頂いた。感謝の意を表したい。
12. 出土遺物は「20-2HM」「21-2HM」と注記し，高知県立埋蔵文化財センターで保管している。
13. 金属製品の保存処理についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。木製品については，徳平が行った。
14. 自然科学分析については，パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

本文目次

第I章 序章

1. 調査の契機と経過	1
2. 調査の方法	2
3. 調査日誌抄録	3

第II章 遺跡の環境

1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
3. 森山城跡の概要	8
4. 二ノ堀遺跡の概要	9
5. 『長宗我部地検帳』にみる森山	9

第III章 二ノ堀遺跡の調査成果

1. A区	13
(1) 調査概要	13
(2) 基本層序	13
(3) 堆積層出土遺物	16
(4) 検出遺構と出土遺物	19
2. B区(二ノ堀遺跡・森山城跡)	62
(1) 調査概要	62
(2) 基本層序	63
(3) 堆積層出土遺物	65
(4) 検出遺構と出土遺物	71

第IV章 森山城跡の調査成果

1. C区	139
(1) 調査概要	139
(2) 基本層序と堆積層出土遺物	140
(3) 検出遺構と出土遺物	180
2. D区	217
(1) 調査概要	217
(2) 基本層序	217
(3) 堆積層出土遺物	220
(4) 検出遺構と出土遺物	223

第V章 自然科学分析

1. 試料	227
2. 分析方法	228

(1) 珪藻分析	228
(2) 花粉分析	229
(3) 植物珪酸体分析	229
(4) 微細物分析・種実分析	229
(5) 貝同定	230
(6) 土壤理化学分析	230
3. 結果	230
(1) 珪藻分析	230
(2) 花粉分析	233
(3) 植物珪酸体分析	233
(4) 微細物分析・種実分析	234
(5) 貝同定	236
(6) 土壤理化学分析	239
4. 考察	240
(1) C区(丘陵部)	240
(2) D区(裾部)	241
第VI章 まとめ	
1. 森山城跡	249
(1) 遺構について	249
(2) 森山城跡裾部の様相について	253
(3) 出土遺物について	253
2. 二ノ堀遺跡	255
(1) 出土遺物について	255
(2) 検出遺構について	256
(3) 森山城跡との関係について	257
3. 春野町における森山城跡	257
遺物観察表	261
写真図版	301

付図目次

付図1	二ノ堀遺跡 A区下面遺構平面図(S=1/200)
付図2	二ノ堀遺跡 A区上面遺構平面図(S=1/200)
付図3	二ノ堀遺跡・森山城跡 B・C区中世下面遺構平面図(S=1/200)
付図4	二ノ堀遺跡・森山城跡 B・C区中世上面遺構平面図(S=1/200)
付図5	二ノ堀遺跡・森山城跡 B・C区近世遺構平面図(S=1/200)

第I章 序章

1. 調査の契機と経過

高知県が計画する県道甲殿弘岡上線建設工事区間内の高知市春野町森山には、周知の埋蔵文化財として森山城跡が所在する。森山城跡の工事により影響を受ける部分について、記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することになり、平成31年5月31日付けで高知県と公益財団法人高知県文化財団が業務委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

令和元年6月24日には、調査地の用地取得が遅れる見込みとなり、現地調査が部分中止となった。令和2年1月6日に再着手となり、その後、令和2年1月から2月にかけて森山城跡の立木伐採を委託により実施し、令和2年5月7日より発掘調査を開始した。

また、県道甲殿弘岡上線工事区間内の森山地区については、埋蔵文化財の有無を確認するため、令和2年1月31日、2月3・4日に高知県教育委員会により試掘調査が行われた。その結果、森山城跡の東側に設定したトレンチ(TR-1～5)では中世の遺物包含層と遺構が確認され、森山城跡の裾部に設定したトレンチ(TR-6)では、低湿地の状況を呈していることから森山城跡に伴う堀跡であると推測された。この試掘調査の結果を受け、森山城跡の東側についても本調査が必要と判断された。これを受け、業務変更契約を行い、森山城跡東側をA区として令和2年11月から令和3年1月まで本発掘調査を実施した。令和3年度には森山城跡北側をB区として新たに業務委託契約を締結し、令和3年5月から10月に本発掘調査を実施した。

さらに、令和3年1月28日には森山城跡の西側の試掘調査が行われ、森山城跡の堀跡の肩とみられる部分が確認され、埋土からは曲物が出土した。この結果を受け、森山城跡の西側についても本発掘調査が必要と判断され、業務変更契約を行い、森山城跡西側をD区として令和3年10月から



図1 試掘調査位置図(S=1/2,000)

2. 調査の方法



図2 調査区位置図(S=1/2,000)

12月まで本発掘調査を実施した。

本調査は、調査対象地を地形等によってA～D区の調査区に分け、発掘調査を実施した。森山城跡(C区)の発掘調査は令和2年5月より開始し、11月に上面の調査を完了した。令和2年11月から令和3年1月まで二ノ堀遺跡(A区)の調査を行い、その後、補足調査として森山城跡の下面の調査を行った。令和3年度は5月から10月に二ノ堀遺跡及び森山城跡(B区)の調査、10月～12月に森山城跡西側(D区)の調査を行った。

試掘調査の結果を受け、令和3年4月には森山城跡及び二ノ堀遺跡の範囲が拡大され、A-2・3区及びB区が二ノ堀遺跡、B区及びD区が森山城跡となった。

2. 調査の方法

C区の調査前の状況は密に樹木や竹が茂っており、立木伐採及び搬出を高知緑化建設㈱に委託して実施した。また、調査にあたり、詳細な微地形データを取得し現況図を得るため、レーザー測量を㈱四航コンサルタントに委託し、地形図を作成した。

調査は、原則として遺物包含層までは重機を用い、遺物包含層は人力で掘削した。なお、遺物包含層でも遺物が少ない箇所や薄い部分については作業効率を考慮し、重機を用いた。また、森山城跡では重機が侵入できない箇所が多く、表土から人力で掘削した箇所もある。

測量は、県道甲殿弘岡上線建設に伴い設置された3級・4級基準点等を用いた。森山城跡の各曲輪にはこれらの基準点を用い、タカチ測建に委託して基準点No.1～3を設置した。基準点は世界測地系である。

また、平地部の調査ではA1(X=54560, Y=2680)を原点として20mグリッドを設定し、A1グリッドを4mグリッドに細分し、A1-1～25と呼称し測量を行った。C区については、丘陵地形であり、グリッドの設定が困難であるため調査地を地形に沿って細分し、地区名を付けて遺物を取り上げた。

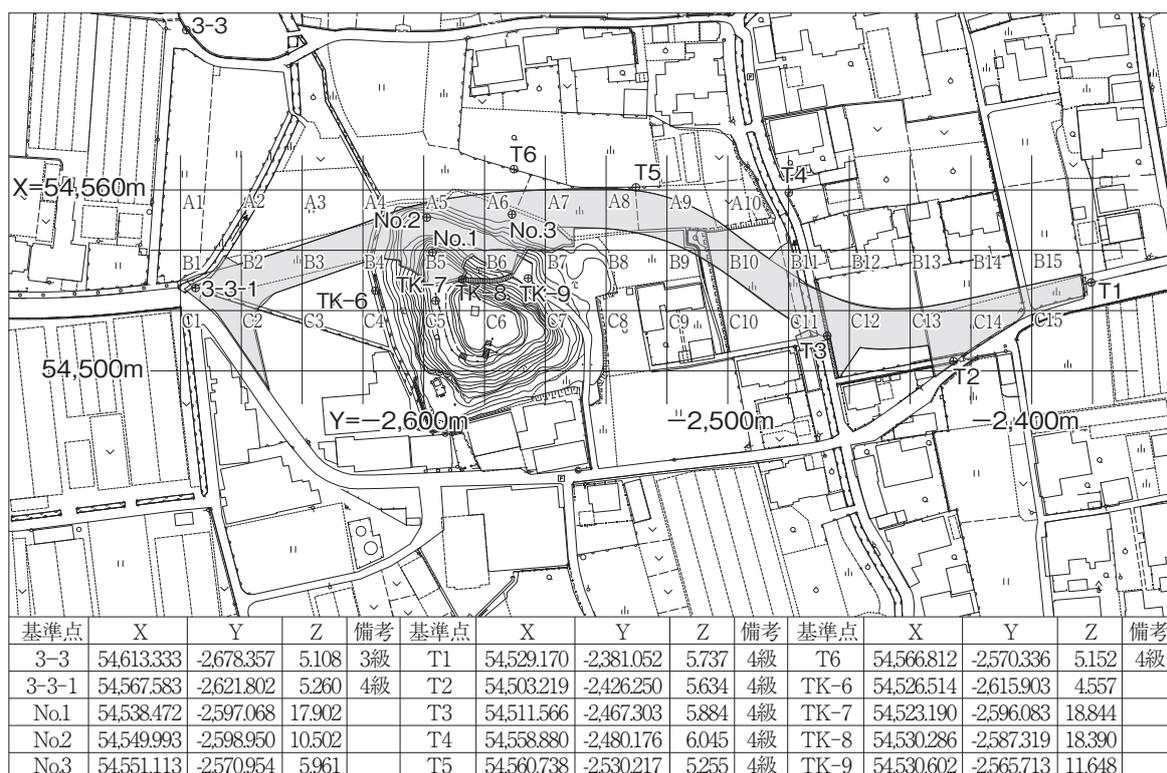


図3 グリッド設定図(S=1/2,500)

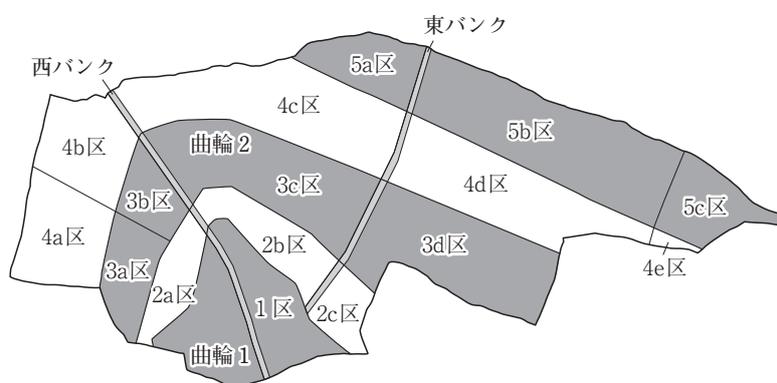


図4 C区地区位置図

3. 調査日誌抄録

令和2年度

令和2年度はC区の森山城跡丘陵部より調査を始め、その後A区の調査を行いながらC区下面の調査を行った。

事前準備(令和2年4月27日～5月6日)

現場事務所を設置し、電気工事、水道工事を行い、事務所に備品・道具等を搬入する。

C区(令和2年5月7日～令和3年1月22日 実働128日)

1・2区より人力で表土掘削を開始した。2～5区は西部から北部、東部と調査を進め、基本は人力掘削で、表土の一部は重機を併用して調査を行った。10月28日に上面の遺構の調査を完了し、航空写真撮影及び測量を行った。

3. 調査日誌抄録

引き続き、3～5区について下面の調査を行った。令和3年1月22日に、下面の遺構調査を完了し、ドローンによる写真撮影を行った。5区については令和3年度に補足調査を行った。

A-1区(令和2年11月4日～11月30日 実働13日)

重機による表土掘削の後、遺物包含層掘削及び遺構検出を行い、2面の遺構の調査を行った。11月9日に上面、11月26日に下面の調査を終了した。

A-2区

(令和2年12月21日～令和3年1月18日 実働16日)

重機による表土掘削の後、遺物包含層掘削及び遺構検出を行い、1面の遺構の調査を行った。令和3年1月13日に遺構の調査を終了した。

A-3区(令和2年11月4日～12月19日 実働27日)

重機による表土掘削の後、遺物包含層掘削及び遺構検出を行い、遺構の調査を行った。調査区南部については2面の遺構の調査を行った。

令和3年度

令和3年度はB区東側のB-1区、西側のB-2区、D区の順に調査を行った。

事前準備(令和3年4月27日～5月6日)

現場事務所を設置し、電気工事、水道工事を行い、事務所に備品・道具等を搬入する。

B-1区(令和3年5月6日～8月10日 実働54日)

重機による表土掘削の後、遺物包含層掘削及び遺構検出を行い、2面の遺構の調査を行った。7月9日に上面、8月3日に下面の調査を終了した。

B-2区(令和3年8月10日～10月19日 実働42日)

重機による表土掘削の後、遺物包含層掘削及び遺構検出を行い、1面の遺構の調査を行った。8月30日に遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構の調査を開始した。10月5日に遺構の調査を完了し、遺構完掘状態の写真撮影を行った。

D区(令和3年10月8日～12月2日 実働34日)

重機による表土掘削の後、遺物包含層掘削及び遺構検出を行い、1面の遺構の調査を行った。10月19日に遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構の調査を開始した。11月18日に遺構の調査を完了し、遺構完掘状態の写真撮影を行った。埋め戻しを行い、全ての調査を完了した。



C-2区作業風景



A区測量風景



B-1区作業風景



D区作業風景

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 地理的環境

森山城跡のある高知市春野町は高知市南西部に位置し、東西に带状をなす北部山地、中央低地、南部丘陵からなっている。北部山地は烏帽子山を主峰とする標高358mの不入山脈の一部であり高知平野と吾南を分けている。南部丘陵は標高143mの高森山を主峰とする妙見山脈であり、その南側には太平洋が広がる。北部山地と南部丘陵に囲まれた中央低地は吾南平野とも呼ばれ、西を流れる一級河川である仁淀川や春野町中央部を流れるかつて仁淀川の分流であった新川川の堆積平野となっている。古来より仁淀川は水害が多い川として知られ、中央低地に木ノ瀬や古川・諸木瀬・中川原等の小字が残っていることから明らかなように、新川川も仁淀川とともに乱流し土砂を堆積していたものとみられる。中央低地は旧中州や自然堤防・後背湿地・谷・低地等の複雑な地形が入り組んでいる。森山城跡は中央低地の西部に位置し、標高23.6mの独立した小丘陵に立地する。森山城跡の東及び南東には二ノ堀遺跡が隣接し、森山城跡のある小丘陵の東は田園、南は集落がみられ、南東は森山南城跡のある丘陵裾部まで広がり、深い谷地形となり湧水がみられ低湿地となっている。

2. 歴史的環境

春野町の歴史は縄文時代後期より始まり、この時期の遺物は山根遺跡⁽¹⁾や西分増井遺跡群⁽²⁾など新川川中流域で確認されている。山根遺跡からは縄文時代後期前葉の松ノ木式土器、西分増井遺跡群からは縁帯文成立期の土器や後期中葉・晩期の土器が出土している。西分増井遺跡群は高知平野では数少ない縄文時代の遺跡であり、遺物が比較的まとまって出土しているほか、後期の土坑も確認されている。

弥生時代には、仁淀川河口に位置する仁ノ遺跡⁽³⁾で弥生時代前期前半の遺物が出土している。前期中葉には西分増井遺跡群で松菊里型住居跡が確認されているほか、前期末の竪穴式住居跡3棟や山根遺跡でも1棟が確認されている。その後、中期には西分増井遺跡群で僅かに遺物が出土してお



図5 森山城跡位置図

2. 歴史的環境



図6 周辺の遺跡地位置図(S=1/35,000)

り、木塚城跡⁽⁴⁾ではまとまった遺物や遺構が丘陵上で確認されている。後期になると西分増井遺跡群で集落が展開される。この集落からは銅矛や銅戈・銅鐸・中国鏡・仿製鏡など青銅器が多く出土したほか、後期から古墳時代初頭の竪穴式住居跡から鉄製品や多量の鉄片が出土し、鍛冶関連遺構も確認されており、鉄器などの工房を備えた拠点集落と捉えられる。西分増井遺跡群周辺の東江曲遺跡⁽⁵⁾や馬場末遺跡⁽⁶⁾でも弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が出土している。また、仁ノ遺跡からは弥生時代から古墳時代にかけての近畿や四国各地からの搬入品が多く出土しており、仁淀川上流域や内陸部への流通拠点となっていたと想定される。

表1 周辺の遺跡一覧表(図6の番号に対応)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	森山城跡	中世	22	大芝遺跡	近世	43	西畑城跡	中世
2	二ノ堀遺跡	弥生～近世	23	芳原西之谷遺跡	古墳	44	仁ノ城跡	中世
3	巖島遺跡	古代～中世	24	蔵遺跡	弥生	45	寺見ヶ谷遺跡	古代～中世
4	奥谷遺跡	弥生	25	下室屋遺跡	古代～中世	46	仁ノ遺跡	弥生～古代
5	八幡宮西ノ城	中世	26	東ノ原北遺跡	古代～中世	47	久保田遺跡	古代
6	吉良屋敷跡	弥生～中世	27	東ノ原南遺跡	古代～中世	48	大谷遺跡	古墳～古代
7	吉良城跡	中世	28	捨ヶ森城跡	中世	49	秋山遺跡	弥生～中世
8	古市遺跡	中世	29	芳原城跡	中世	50	梅ノ木谷遺跡	縄文～中世
9	西ノ芝遺跡	弥生	30	山根遺跡	縄文～中世	51	小島遺跡	弥生～古墳
10	天皇遺跡	中世	31	和田遺跡	縄文～中世	52	松本遺跡	古墳～古代
11	後田遺跡	弥生～中世	32	秋山城跡	弥生～中世	53	北川内遺跡	弥生～中世
12	王子遺跡	弥生～中世	33	小野遺跡	中世	54	竹ヶ鼻遺跡	弥生～古墳
13	大小路遺跡	弥生～中世	34	大寺廃寺跡	弥生～古代	55	安後遺跡	古代
14	西谷遺跡	中世	35	太用遺跡	弥生～中世	56	南浦遺跡	古代～中世
15	妙喜寺跡	近世	36	馬場末遺跡	弥生～中世	57	雀ヶ森城跡	中世
16	東江曲遺跡	弥生	37	西分増井遺跡群	縄文～中世	58	中組遺跡	弥生～中世
17	久万遺跡	弥生～中世	38	八王子遺跡	中世	59	北組遺跡	弥生～中世
18	ヒヨ谷遺跡	弥生	39	森山南城跡	中世	60	光清城跡	中世
19	木塚城跡	弥生・中世	40	大上遺跡	古代	61	小原坂遺跡	古代～中世
20	柏尾山城跡	中世	41	フケ遺跡	弥生	62	東諸木城跡	中世
21	観正寺跡	中世	42	西畑遺跡	弥生～古墳	63	西戸原遺跡	弥生～中世

古墳時代初頭以降の集落は確認されていないものの、馬場末遺跡や王子遺跡⁽⁷⁾、南浦遺跡⁽⁸⁾では水辺の祭祀に関連するとみられる土師器甕や高杯が出土している。

古代の遺跡も新川川中流域で多くみられ、馬場末遺跡や西分増井遺跡群で8世紀から10世紀を中心とする時期の遺構が確認されている。馬場末遺跡では幅7mを測る大規模な溝跡が確認されており、出土遺物に畿内産土師器や緑釉陶器・灰釉陶器などの畿内からの搬入品や徳島平野産の遺物が多く、古代における当地域の中心的な遺跡であったものとみられる。さらに隣接する大寺廃寺跡では高知市北部に位置する秦泉寺廃寺の白鳳様式のものと同系譜である古代の軒丸瓦が採集されており⁽⁹⁾、馬場末遺跡との関連が指摘されている。古代には春野町は吾川郡に属し、吾川郡南部の仲村郷と桑原郷・次田郷に当たる。新川川中・下流域は仲村郷に編入されたと考えられており、仲村郷には平安時代の建立とされる種間寺などの寺院も所在していることから、新川川中流域が仲村郷の中心であったとみられる。

中世前期の集落は明らかではないが、王子遺跡では溝跡から瓦器や東播系須恵器、馬場末遺跡では遺物包含層より瓦器碗が出土している。また、木塚城跡⁽¹⁰⁾では13世紀後半頃から15世紀前半の遺物が出土している。木塚城跡は主に14世紀に機能した山城で、複数の曲輪や腰曲輪を有し、堀切・堅堀などを備えた本格的な山城で、常滑焼や古瀬戸などの出土が目立つ。春野町は中世の山城が多くみられ、発掘調査が行われた芳原城跡⁽¹¹⁾は15世紀後半から16世紀中葉、吉良城跡⁽¹²⁾は16世紀に機能したと推定されている。芳原城跡は吾南平野のほぼ中央に位置する独立丘陵に立地し『長宗我部地検帳』には城内に「北蔵ノタン」、「政所」、「詰ノタン」などのホノギが残っている。5次にわたる調査が実施され、大規模な掘立柱建物跡や虎口遺構等が確認された。調査では約6万点という多量

3. 森山城跡の概要

の遺物が出土し、堀状遺構からは明応2(1493)年の紀年銘をもつ護符など多量の木製品も出土している。吉良城跡は北部山地に位置し、4次にわたる調査が実施され、標高約115mの北嶺と南嶺を主郭とし、その他にも複数の郭と堀切・堅堀などからなる春野町では大規模な城跡である。調査では北嶺の詰に掘立柱建物跡も確認され、吉良城跡西側の谷の「土居ノ谷」のホノギが残る部分が吉良氏屋敷跡である可能性も示唆されている。

中世の春野町には、吉良氏、木塚氏、森山氏、小島氏などの国人が存在したと言われ、中でも吉良氏は有力国人として成長し、最盛期には戦国土佐の七守護の一人となり勢力を誇ったが、15世紀末から16世紀初め頃には本山氏が朝倉城を拠点として南下し、吾川郡南部に迫るようになる。そして天文9(1540)年には本山氏によって吉良氏は滅ぼされたと考えられている。その後、吾川郡南部は本山氏と西から勢力を伸ばしてきた一條氏との抗争の場となり、本山氏は一條氏を吾川郡南部から駆逐し、支配を確立した。本山氏は「吉良」を名乗り、蓮池城や浦戸城まで勢力を広げた。その後、岡豊城を居城とする長宗我部元親が東から攻め寄せ、両者の争いが吾川郡南部で展開される。そして、永禄6(1563)年、長宗我部氏に攻められた本山氏は本拠地を朝倉城から本山に引き上げた。長宗我部元親は弟の親貞を吉良城に入れ、「吉良」を名乗らせた。また、森山は弟の香宗我部親泰に与えた。その他の木塚氏、森山氏、小島氏などの国人はこの様な争いの中で姿を消していったものとみられる。

近世になり山内氏の土佐国支配が始まると、吾川郡南部は農村へと姿を変えていく。特に慶安期に野中兼山に建設された井筋によって多くの土地が水田となり、米の増産に伴い豪農が台頭した。さらに弘岡井筋を通じて仁淀川上流へ、新川川を通じて城下町へ連絡し、商品経済も発達した。

近世の発掘調査の事例は少なく、西ノ芝遺跡で幕末の溝跡やハンダ土坑等が確認されている。

3. 森山城跡の概要

森山城跡は高知市春野町森山に所在する中世の城郭である。標高23.6mの独立した小丘陵に立地する小規模な平山城で、山裾部は東西・南北ともに約70mを測るほぼ円形の城である。山頂の詰は幅約17mを測り、城山神社が鎮座する。詰の下には3段の曲輪状地形が残り、北側の裾部には土塁及び堀状の地形が残る。また、城山裾部の水田は堀として伝承されており、北側と西側は水田として旧態をとどめている。

『皆山集』及び『吾川郡神社明細帳』¹³⁾によると、詰の城山神社は、元是三穂神社と言われ、出雲国鳥根郡美穂郷森山村に鎮座する八重事代主命を祀っていた三穂神社に由来し、この事によりこの地が森山と言われるようになった。その後、中世領主が城を築き、鎮守のため山城国石清水八幡宮を勧請して三穂神社と合祭し、この神社を詰八幡あるいは城八幡と称した。また、中世領主はこの丘陵に馬屋城を築き、詰ノ城と呼んだとされている。

森山城跡の南東約600mには森山南城跡が位置し、標高108mの山頂に立地する。急峻な崖岸に囲まれ、径20mの円形の詰や郭、堀切等をもつ山城である。眺望が良く、北の眼下には森山城跡、その北には吉良城跡や八幡宮西ノ城跡、東は秋山城跡や木塚城跡、南は太平洋を望むことができる。

森山城跡の南西には森山八幡宮がある。森山八幡宮には高知市指定文化財である室町時代の作とされる三体の神像が祀られている。これらの御像は日野資朝とその子孫の藤原貞光・照清と伝えられている。日野資朝は後醍醐天皇を助けて鎌倉幕府を倒す計画を立てるが、捉えられた後暗殺され

る。その後、孫の勝朝が森山にきて八幡宮を建て、先祖の霊を祀ったとされる。

また、調査地周辺のホノギは森山城跡がある丘陵周辺のB～D区が「二ノ堀」、その南が「谷田屋敷」、
「二ノ堀」の東に位置するA区が「高場」、
「高場」の南は「土居」である。「二ノ堀」や「谷田屋敷」、
「土居」などのホノギがみられることから、森山城跡の周辺に屋敷が存在した可能性が高いとみられる。

文献で森山城と記されているものはないが、元禄末期に土佐藩の儒教学者緒方宗哲によって編述された『土佐州郡志』¹⁴には、森山村の項に古塁として、「池野主馬者所築或は曰幡多一條殿之屯営」とありこれが森山城跡のこととみられる。また、古城跡として「在村南曰波羅谷峰」とあり森山南城跡に当たるものとみられるが、森山城跡と森山南城跡の関係は不明である。また、明治15(1882)年の『高知県吾川郡森山村誌』¹⁵には、詰ノ隊城墟(一ニノ堀森ト云)として、「東西四拾間、南北壱町許。邱陵ニシテ、石壁存セス」と記されている。さらに、馬屋城墟(一ニ轡堀ト称ス)として、「本村中央ニ占位セル岑山ニシテ、詰ノ隊城墟ト相距ルコト僅々四町許。其南北壱町、其東西相若ケリ。」と記されており、位置からみて詰ノ隊城墟が森山城跡、馬屋城墟が森山南城跡と考えられる。

森山城跡の築城時期や城主は不明であるが、戦国期には土豪森山氏の城であり、吉良氏に属していたものとみられる。深尾四郎左衛門が17世紀に著した軍記物である『土佐古城伝承記』¹⁶には、「吉良氏世々これを領す」とされている。『土佐国編年紀事略』及び『春野町史』¹⁷によると、天文9(1540)年には吉良氏が本山氏によって滅ぼされ、弘岡は本山氏の支配となるが、芳原と西畑・仁ノ・森山は西から進出してきた一條氏が従えた。しかしながら、弘治3(1557)年、森山城は本山氏に攻められ落城し、森山氏は滅亡した。軍記物である『土佐古城伝承記』や『土佐物語』¹⁸には、この時の戦いについて劇的に記されており、激しい戦いであり城兵200騎に対し本山勢は600騎で押し寄せたが、森山勢は一人も逃げることなく、本山勢300騎を討ったものの、一人残らず討死したと書かれている。また、古い苗歌に、「森山ヲセメシ其日ノヒルホドニ筆ヲソロエテ書ケトツキセスヨメトツキセスヤカテ其日ノホリノ埋艸」とあるのはこの戦いのことを歌ったとされる。その後、永禄3(1560)年には、森山城は長宗我部元親に攻められ落城し、吾川郡南部は長宗我部氏の支配下となり、森山分は元親の弟である香宗我部親泰の所領となった。

4. 二ノ堀遺跡の概要

二ノ堀遺跡は森山城跡の東から南にかけて広がる遺跡で、弥生土器や須恵器・土師器等が採集されており、これまで遺物散布地として知られていた。以前は県道甲殿弘岡上線の南約100mに位置していたが、県道甲殿弘岡上線建設に伴う試掘調査で中世の遺物包含層と遺構が確認されたほか、近世の遺物が出土し、遺跡の範囲が北側に拡大され森山城跡と隣接する遺跡となった。二ノ堀遺跡で発掘調査が行われるのは今回が初めてとなる。二ノ堀遺跡のホノギは「二ノ堀」、
「谷田屋敷」、
「高場」等である。また、二ノ堀遺跡の南には「土居」、
「恩徳寺」等のホノギがみえ、遺跡が南に広がる可能性が高い。

5. 『長宗我部地検帳』にみる森山

天正17(1589)年の仲村郷森山地検帳には森山城跡のホノギである「二ノ堀」には「詰ノタイ」がみられ、「富家出雲守給 森山分 久アレ畠下々」とあり、当時は城としての機能は失われていたことがわかる。「東二ノ堀三方ノホリ懸テ」という記載もあり、二ノ堀に堀があったものと思われる。さ



図7 森山地区ホノギ図(S=1/8,000)

らに城の周囲にも多くの屋敷が存在しており、「二ノ堀」に接して「徳弘土居外ニホリ有」という記載もみられ、堀を有する土居も存在している。「『長宗我部地検帳』の歴史地理的研究¹⁹⁾では、「徳弘土居」周辺には約40の屋敷があり、森山城の「詰ノタイ」を挟んで東と西に分布し、森山分の中核的な集落であるとされている。また森山城跡のある「二ノ堀」の北西に位置する「木ノ瀬」というホノギには、「木ノ瀬土居」がある。「木ノ瀬土居」は4反1分の広大な地積を有する平等寺新右衛門の給地で「上やしき」となっており、土居の周辺には8箇所屋敷がある。「二ノ堀」の南西に位置する「木ノ瀬前」には「同しノ東ホリタヲシ 同 富家出雲守給 森山分」とある。また、「堀タオシ」は堀の土塁を崩して水田化したものを言い、土居の堀がこの時期には埋められている。

森山地検帳には「富家出雲守給」と「森山分」が多くみられる。富家出雲守は香宗我部親泰の家臣であり、一部は長宗我部氏の給地となっている。しかしながら森山氏の旧所領は森山分として喜津賀や西分、仁ノ村西畑にも残存しているほか、森山分でありながら百姓地として作人の記載があるなど様々な形態となり広い範囲で見られる。さらに弘岡村地検帳には「弘岡大堺之事」として「森山の馬屋の城の本丸東のはな」という記載もみられる。

註

- (1) 春野町教育委員会 1976『山根・石屋敷遺跡 (付)馬場末遺跡』
春野町教育委員会 1981『山根遺跡の発掘』
- (2) 財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2003『西分増井遺跡群I-新川川広域河川改修に伴う西分増井遺

- 跡発掘調査報告書-』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第80集
 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004『西分増井遺跡群II-新川川広域河川改修に伴う西分増井遺跡発掘調査報告書-』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第83集
- (3) 高知県春野町教育委員会 2003『仁ノ遺跡発掘調査報告書』春野町埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
- (4) 高知県吾川郡春野町教育委員会 1988『木塚城跡』
 高知県春野町教育委員会 2004『木塚城跡II-温浴施設建設に伴う発掘調査報告書-』春野町埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
- (5) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2003『東江曲遺跡-新川川河川災害復旧助成事業に伴う東江曲遺跡発掘調査報告書-』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79集
- (6) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004『馬場末遺跡-新川川広域河川改修に伴う西分増井遺跡群II区発掘調査報告書-』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第84集
- (7) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992『王子・西ノ芝遺跡の調査-国道56号春野バイパス拡張工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第8集
- (8) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993『南浦遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書-特別養護老人ホーム・デイサービスセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第12集
- (9) 高知市 2019『遺跡が語る高知市の歩み』高知市史編さん委員会考古部会編
- (10) (4)に同じ
- (11) 春野町教育委員会 1993『高知県春野町芳原城跡II-第2~4次発掘調査報告書-』春野町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- (12) 高知県吾川郡春野町教育委員会 1985『吉良城跡I』
 高知県吾川郡春野町教育委員会 1986『吉良城跡II』
 高知県吾川郡春野町教育委員会 1987『吉良城跡III』
 高知県吾川郡春野町教育委員会 1988『吉良城跡IV』
- (13) 高知県立図書館 1978『神社志』『皆山集 第一巻』
 高知県立図書館 2011『吾川郡神社明細帳』六冊の内二
- (14) 土佐史談会 1984『土佐州郡志 復刻版 下』
- (15) 春野町立郷土資料館 2007『高知県吾川郡森山村誌』『春野町史料 第一集 地誌』
- (16) 高知県立図書館 1975『土佐古城伝承記』『皆山集 第二巻』
- (17) 中山巖水 2016『土佐国編年紀事略』『土佐國群書類従拾遺 傳記部 卷四』高知県立図書館編
 春野町 1976『春野町史』
- (18) 高知県立図書館 2014『土佐物語抜萃』『土佐國群書類従拾遺 傳記部 卷三』高知県立図書館編
- (19) 横川末吉 1973『「長宗我部地検帳」の歴史地理的研究-「吾川郡弘岡村地検帳」等の場合-』『土佐史談』136号 土佐史談会

参考文献

- 春野町 1976『春野町史』
- 春野町教育委員会 1985『高知県春野町 中世の城跡』
- 春野町立郷土資料館 2007『春野町史料 第一集 地誌』
- 高知市 2019『遺跡が語る高知市の歩み』高知市史編さん委員会考古部会編
- 高知県立図書館 1962『長宗我部地検帳 吾川郡上』
- 高知県立図書館 1963『長宗我部地検帳 吾川郡下』
- 高知県立図書館 1975『土佐古城伝承記』『皆山集 第二巻』
- 土佐史談会 1984『土佐州郡志 復刻版 下』
- 宅間一之 2008『春野 歴史の百景』芳原まちづくり協議会
- 中山巖水 2016『土佐国編年紀事略』『土佐國群書類従拾遺 傳記部 卷四』高知県立図書館編
- 橋詰延寿 1960『高知史跡春野村』高知史跡春野村刊行会

5. 『長宗我部地検帳』にみる森山

- 宮地森城 1935『土佐国古城略史 附御城築記』青楓会
宗用山人 1936「地理的に見たる本山氏の盛衰(上)」『土佐史談』56号 土佐史談会
宗用山人 1936「地理的に見たる本山氏の盛衰(下)」『土佐史談』57号 土佐史談会
横川末吉 1973「『長宗我部地検帳』の歴史地理的研究－「吾川郡弘岡村地検帳」等の場合－」『土佐史談』136号
土佐史談会
角川書店 1986『角川日本地名大辞典 39高知県』

第三章 二ノ堀遺跡の調査成果

1. A区

(1) 調査概要

今回の調査地には近世に野中兼山によって建設された用水路が南北に流れ、用水路より東をA区、用水路より西をB区として調査を行った。調査では古代末から中世及び近世の遺物包含層と遺構が検出された。中世の遺構と遺物は15世紀を中心に16世紀までのものがみられ、森山城跡と同時期に隣接して集落が存在したと考えられる。検出された遺構には、屋敷を囲んでいたとみられる二重の溝跡などがある。屋敷を囲んでいたとみられる二重の溝跡は用水路の東側と西側で確認され、森山城跡東側の広い範囲で屋敷が存在したものとみられる。A区で確認した溝跡は、検出長約26.2m、幅約2.4m、深さ約1.2mを測り、L字状に伸びる大規模なものである。さらに中世後期から近世初期の遺構や遺物も確認されており、森山城が廃絶した後も屋敷等が存在したものとみられる。近世中期から後期にかけての遺構は検出されなかったが、ハンダ土坑などの幕末の遺構も多く確認されており、幕末頃に再び集落がみられる。

A区は今回の調査で最も東に位置する調査区で、東よりA-1区、A-2区、A-3区と呼称し調査を行った。A-3区の西側に用水路が流れており、地形はA-3区が最も高く、東のA-1区に向かって緩やかに傾斜する。調査では中世の遺物包含層と近世の遺物包含層が確認され、A-1区では中世と近世の2面の調査を行った。地形の高いA-2区とA-3区では遺物包含層が後世の削平を受けている箇所がみられた。A-2区は近世の遺物包含層が薄く、遺構検出は1面のみとした。A-3区は調査区北側の標高が高く、中世の遺物包含層が削平されている箇所もあったため1面の検出とし、調査区南部は2面の検出を行った。

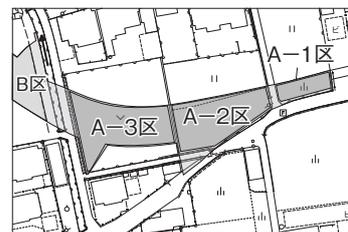


図8 A区位置図

(2) 基本層序

① A-1区(図9)

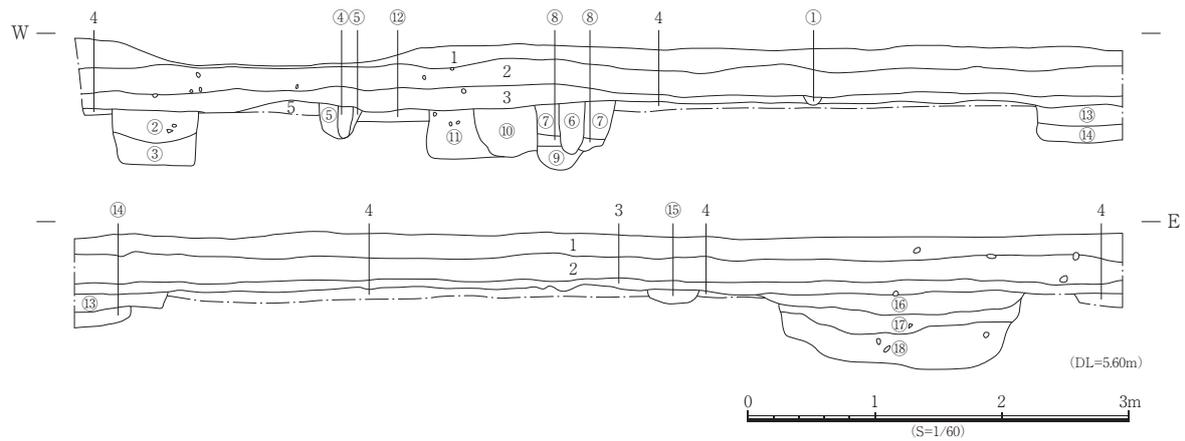
調査前は水田であり、第1層は耕作土である。厚さは15～20cmを測り、ほぼ水平に堆積する。第2層は近世の遺物包含層でほぼ水平に堆積し、厚さは約20cmを測る。第2層の下面で上面の遺構検出を行った。第3層は中世の遺物包含層とみられ、ほぼ水平に堆積し、厚さは東部が約10cm、西部は約15cmを測る。第3層下で下面の遺構検出を行った。第4層及び第5層は自然堆積層である。

② A-2区(図10・11)

調査前は水田であり、第1層は水田に伴う畦で、客土である。第2層は耕作土で、A-1区の第1層に対応する。厚さは15～25cmを測り、ほぼ水平に堆積する。第3層は近世の遺物包含層でA-1区の第2層に対応する。ほぼ水平に堆積し、厚さは5cmを測る。第4層は中世の遺物包含層で、A-1区の第3層に対応する。南に大きく傾斜し、厚さは東部が約15cm、西部は約10cmを測る。第4層の下面で遺構検出を行った。第5層以下は自然堆積層である。

調査区南西部は地形が落ち込んでおり、中世の遺物包含層と近世の遺物包含層の間に近世の整地層とみられる堆積層がみられた。西壁第1層は耕作土で厚さ約20cmを測り、ほぼ水平に堆積する。

1. A区



層位

- 第1層 灰黄色(25Y6/2)シルト質粗粒砂層で、0.5cm大の礫を多く含む(耕作土)
- 第2層 暗灰黄色(25Y5/2)粗粒砂質シルト層で、0.5cm大・5cm大の礫とマンガンを含む(近世遺物包含層)
- 第3層 黄灰色(25Y6/1)細粒砂質シルト層で、上部に1cm大のマンガンが多く堆積する(中世遺物包含層)
- 第4層 ぶい黄色(25Y6/4)細粒砂質シルト層で、0.3cm大のマンガンを多く含む(自然堆積層)
- 第5層 黄褐色(25Y5/3)細粒砂質シルト層で、0.2~0.3cm大のマンガンを含む(自然堆積層)

遺構埋土

- ① 暗灰黄色(25Y5/2)細粒砂質シルトで、1cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ② 黄灰色(25Y6/1)中粒砂質シルトで、2~3cm大の礫と0.2~0.3cm大のマンガンを含む(SB-4P-4埋土1)
- ③ 黄灰色(25Y5/1)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(SB-4P-4埋土2)
- ④ 暗灰黄色(25Y5/2)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを含む
- ⑤ 黄褐色(25Y5/3)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを多く含む
- ⑥ 黄灰色(25Y6/1)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(P-27柱版)

- ⑦ 暗灰黄色(25Y5/2)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(P-27埋土1)
- ⑧ 黄灰色(25Y5/1)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含む(P-27埋土2)
- ⑨ ぶい黄色(25Y6/3)細粒砂質シルトで、マンガンを少し含む
- ⑩ 黄灰色(25Y5/1)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(P-28)
- ⑪ 黄灰色(25Y5/1)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含む(SB-5P-1)
- ⑫ オリーブ褐色(25Y4/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含み、0.2~0.3cm大のマンガンを多く含む
- ⑬ ぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトで、0.2~0.3cm大のマンガンと炭化物を含む(SK-9埋土1)
- ⑭ オリーブ褐色(25Y4/3)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを少し含み、炭化物を含む(SK-9埋土2)
- ⑮ 暗灰黄色(25Y4/2)中粒砂質シルトで、2cm大の礫とマンガンを含む
- ⑯ 暗灰黄色(25Y5/2)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガン、炭化物を含む(SK-6埋土1)
- ⑰ 黄灰色(25Y5/1)細粒砂質シルトで、マンガンを含む(SK-6埋土2)
- ⑱ 暗灰黄色(25Y5/2)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと3cm大の礫、炭化物を含む(SK-6埋土3)

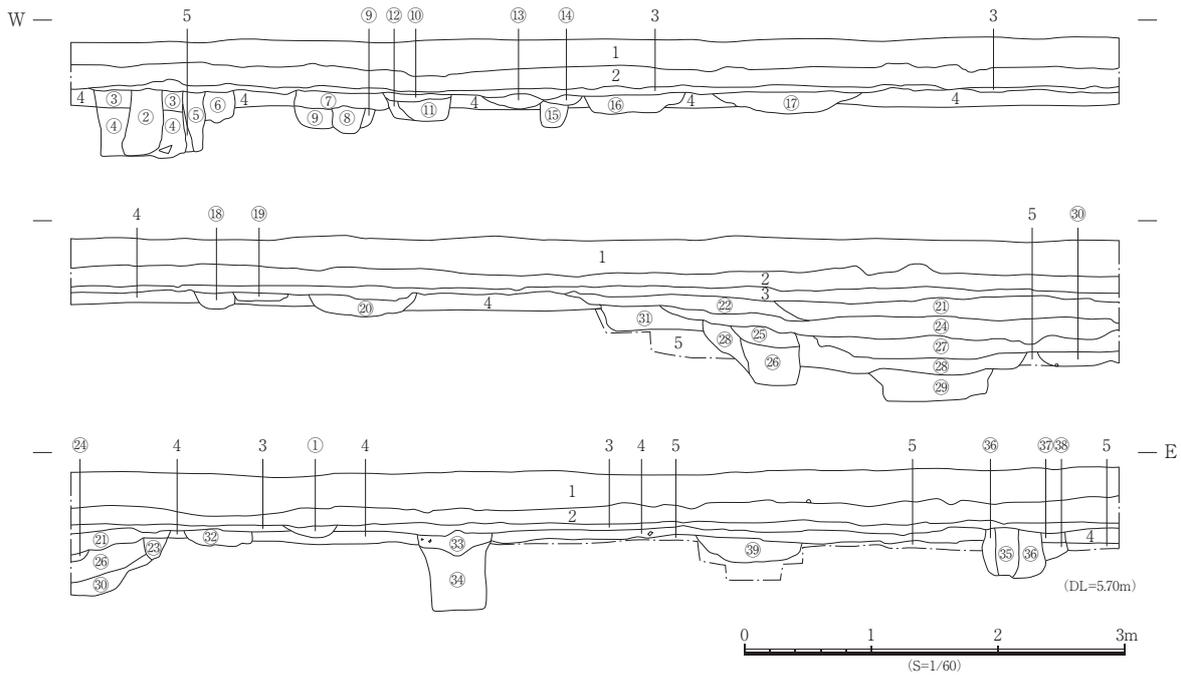
図9 A-1区北壁セクション図

北壁第2層に対応する。西壁第2層は近世の遺物包含層で、厚さ約5cmを測り、ほぼ水平に堆積する。北壁第3層に対応する。西壁第3層は調査区南西部でのみ確認された層で、厚さ3~5cmを測り、ほぼ水平に堆積する。西壁第4層も調査区南西部でのみ確認された層で、厚さ6~10cmを測り、僅かに南へ傾斜する。西壁第5層は中世の遺物包含層で、厚さ約6~14cmを測り、南に大きく傾斜する。北壁第4層に対応する。西壁第6層以下は自然堆積層で、調査区南西部でのみ確認された。

③ A-3区(図12・13)

調査前は耕作地であり、調査区全面に第1層の耕作土がみられた。厚さは10~26cmを測り、ほぼ水平に堆積する。北壁第2層は近世の遺物包含層とみられ、調査区東部でみられた。A-3区ではこの様な近世の遺物を含む整地層がほぼ全面でみられ、箇所により複数層が確認された。近世から近代にかけて整地が度々行われたものとみられる。北壁第3・4層も近世の遺物を含む整地層で、調査区西部でみられた。第3層は厚さ5~10cm、第4層は約8cmを測り、ほぼ水平に堆積する。北壁第5層は中世の遺物包含層で、調査区中央部の地形が低い箇所を確認された。厚さは10~16cmを測る。北壁第6層は自然堆積層で、調査区北部で確認された。第6層の上面で遺構検出を行った。

調査区南部は地形が下がっており、北壁とは異なる堆積が認められた。西壁第1層は耕作土で、



層位

- 第1層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫を少し含む(客土)
- 第2層 黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫を少し含む(耕作土)
- 第3層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルト層で、マンガンを非常に多く含む(近世遺物包含層)
- 第4層 にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂質シルト層で、0.5cm大のマンガンを多く含む(中世遺物包含層)
- 第5層 黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂質シルト層で、マンガンを含む(自然堆積層)

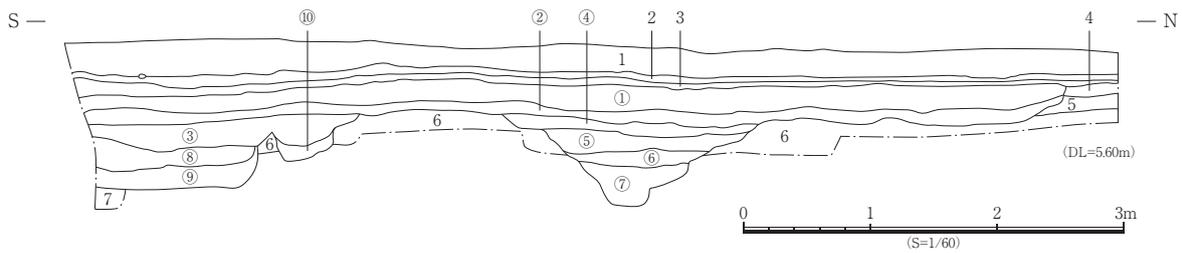
遺構埋土

- ① 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ② 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む(SB-7P-1柱痕)
- ③ 灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを含む(SB-7P-1埋土1)
- ④ 黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(SB-7P-1埋土2)
- ⑤ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ⑥ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを含む
- ⑦ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを多く含む
- ⑧ 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む
- ⑨ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含む
- ⑩ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、マンガンを多く含む
- ⑪ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ⑫ オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂質シルトで、0.1cm大のマンガンを含む
- ⑬ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ⑭ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ⑮ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ⑯ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ⑰ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ⑱ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む

- ⑲ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ⑳ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む
- ㉑ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、マンガンを多く含む
- ㉒ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、マンガンを多く含む
- ㉓ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2cm大のマンガンを多く含む
- ㉔ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含む(SX-2埋土1)
- ㉕ にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトで、炭化物を含む
- ㉖ 黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む
- ㉗ オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルトで、マンガンを含む(SX-2埋土2)
- ㉘ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含む、炭化物を少し含む(SX-2埋土3)
- ㉙ にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含む、炭化物を少し含む(SX-2埋土4)
- ㉚ オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含む(P-30)
- ㉛ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含む、粗粒砂を少し含む(SK-15)
- ㉜ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2cm大のマンガンを多く含む(P-6)
- ㉝ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2cm大のマンガンを含む(SB-6P-4埋土1)
- ㉞ 褐色(10YR4/6)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含む(SB-6P-4埋土2)
- ㉟ オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(SB-6P-1柱痕)
- ㊱ 灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む、炭化物を含む(SB-6P-1埋土1)
- ㊲ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(SB-6P-1埋土2)
- ㊳ 黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂質シルト(SB-6P-1埋土3)
- ㊴ 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、0.1~0.2cm大のマンガンを含む

図10 A-2区北壁セクション図

1. A区



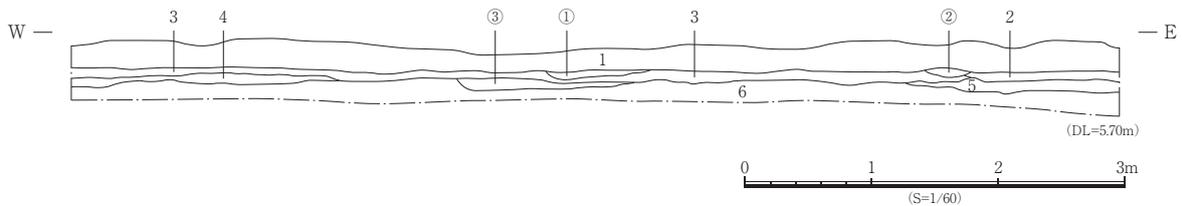
層位

- 第1層 黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫を少し含む(耕作土:図10第2層に対応)
- 第2層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルト層で、マンガンを非常に多く含む(近世遺物包含層:図10第3層に対応)
- 第3層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルト層(近世整地層か)
- 第4層 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒砂層で、マンガンを多く含む(近世整地層か)
- 第5層 にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂質シルト層で、0.5cm大のマンガンを多く含む(中世遺物包含層:図10第4層に対応)
- 第6層 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で、マンガンを含む(自然堆積層)
- 第7層 褐色(10YR4/6)シルト質中粒砂層で、マンガンが堆積する(自然堆積層)

遺構埋土

- ① 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルトで、マンガンを含む(SX-5埋土1)
- ② 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトで、マンガンを少し含む(SX-5埋土2)
- ③ にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト(SX-5埋土3)
- ④ 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、マンガンを含む(SD-1埋土1)
- ⑤ 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルトで、マンガンを少し含む(SD-1埋土2)
- ⑥ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、マンガンを少し含む(SD-1埋土3)
- ⑦ オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルトで、マンガンを少し含む(SD-1埋土4)
- ⑧ 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトで、マンガンを含む(SD-2埋土1)
- ⑨ 黄灰色(2.5Y6/1)シルトで、マンガンを含む(SD-2埋土2)
- ⑩ 灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(SD-4)

図11 A-2区西壁セクション図



層位

- 第1層 にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルト層で、1cm大の礫を少し含む(耕作土)
- 第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルト層(近世遺物包含層か)
- 第3層 黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の礫と炭化物を含む(近世整地層)
- 第4層 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト層で、0.5cm大の礫を僅かに含む(近世整地層)
- 第5層 にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の礫とマンガンを含み、極粗粒砂を少し含む(中世遺物包含層)

- 第6層 褐色(10YR4/4)粘土質シルト層で、マンガンを含み、上部に酸化鉄が堆積する(自然堆積層)

遺構埋土

- ① オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫とハンダ、炭化物を含む
- ② オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を含む
- ③ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、上部にマンガンが堆積する

図12 A-3区北壁セクション図

北壁第1層と対応する。西壁第2層は近代の遺物包含層で、調査区北部を除きみられた。厚さ5~15cmを測り、ほぼ水平に堆積する。西壁第3層は調査区南西部でのみ確認された層で、近世の整地層とみられる。厚さ4~10cmを測り、南に傾斜する。西壁第4層及び第5層は調査区中央部でのみ確認された層で、第4層は厚さ5~10cm、第5層は10~15cmを測り、いずれも南に傾斜する。近世の整地層とみられる。西壁第6層は調査区南端で確認した堆積層でグライ化する。出土遺物は皆無であった。西壁第7層は調査区中央部で確認された自然堆積層で、第7層上面で遺構検出を行った。

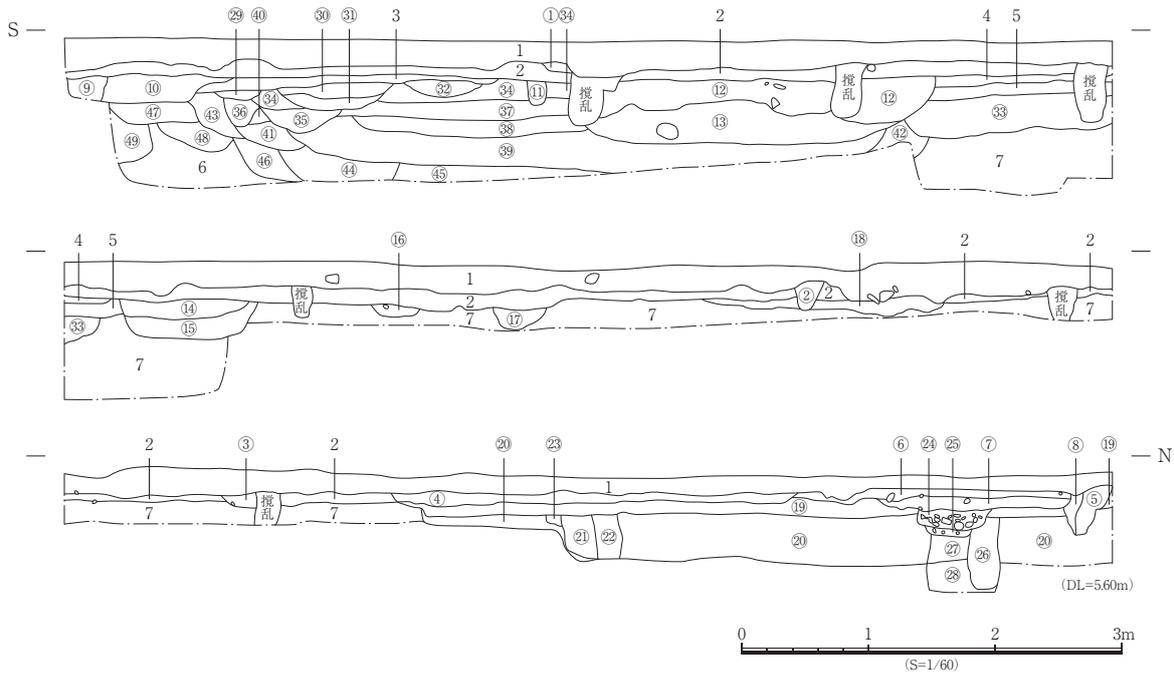
(3) 堆積層出土遺物

① A-1区

第1層(図14-1・2)

近世陶磁器の他、土師質土器、須恵器、瓦質土器、瓦等が出土した。図示したのは、青磁碗(1)と近世陶器皿(2)である。

1は青磁碗で外面には鎬蓮弁文がみられる。内面から高台外面まで明緑色で透明感のある青磁釉



層位

- 第1層 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫を含む(耕作土)
- 第2層 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を含む(近代遺物包含層)
- 第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルト層で、マンガンを含む(近世整地層か)
- 第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルト層で、上部にマンガンが堆積する(近世整地層か)
- 第5層 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト層で、マンガンが多く含む(近世整地層か)
- 第6層 灰色(10Y5/1)粘土質シルト層で、マンガンを含み、グライ化する
- 第7層 黄褐色(10YR5/6)中粒砂質シルト層で、上部にマンガンが堆積する(自然堆積層)

遺構埋土

- ① オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルト
- ② 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト
- ③ にぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒砂質シルトで、1cm大の礫と炭化物を含む
- ④ 黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂質シルトで、5cm大の礫とマンガンを含む
- ⑤ 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を含む
- ⑥ オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫と瓦を含む
- ⑦ 暗褐色(10YR3/4)粗粒砂質シルトで、3cm大の礫を含む
- ⑧ 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、淡黄色シルトブロックを含む
- ⑨ オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を含む
- ⑩ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大のマンガンが多く含む
- ⑪ オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルト
- ⑫ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、5cm大の礫を含み、上部にマンガンが堆積する(SK-67埋土1)
- ⑬ 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂で、5~10cm大の礫を多く含む(SK-67埋土2)
- ⑭ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、マンガンを含み(SK-65埋土1)
- ⑮ オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(SK-65埋土2)
- ⑯ オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、3cm大の礫を含む
- ⑰ 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む
- ⑱ 灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を含む

- ⑲ 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、淡黄色シルトブロックを含む(SK-4埋土1)
- ⑳ にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂質シルトで、上部にマンガンを多く含む(SK-4埋土2)
- ㉑ 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト
- ㉒ 灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を含む
- ㉓ 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む
- ㉔ 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトで、5cm大の円礫を多く含む(P-63埋土1)
- ㉕ 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂で、5cm大の円礫を含む(P-63埋土2)
- ㉖ にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルトで、ハンダを含む
- ㉗ 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含む
- ㉘ 灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルトで、マンガンを含む
- ㉙ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含む
- ㉚ オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、マンガンを含む
- ㉛ 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトで、下部にマンガンが堆積する
- ㉜ オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトで、上部にマンガンが堆積する
- ㉝ 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、マンガンを含み、炭化物を少し含む(SK-66)
- ㉞ 黄褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトで、上部にマンガンが堆積する(SX-5埋土1)
- ㉟ 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトで、マンガンを含む(SX-5埋土2)
- ㊱ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、上部にマンガンが堆積する(SX-5埋土3)
- ㊲ 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトで、0.5cm大のマンガンを多く含む(SX-5埋土4)
- ㊳ オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトで、0.5cm大のマンガンを含む(SX-5埋土5)
- ㊴ 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトで、0.5cm大のマンガンを多く含む(SX-5埋土6)
- ㊵ オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(SX-5埋土7)
- ㊶ 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト(SX-5埋土8)
- ㊷ 黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂質シルトで、マンガンを多く含む(SX-5埋土9)
- ㊸ 黄褐色(2.5Y5/3)シルトで、マンガンを多く含む(SX-5埋土10)
- ㊹ 灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質シルトで、マンガンを含む(SX-5埋土11)
- ㊺ 黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト(SX-5埋土12)
- ㊻ 黄灰色(2.5Y4/1)シルト(SX-5埋土13)
- ㊼ 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、マンガンを多く含む(SX-5埋土14)
- ㊽ 黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質シルト(SX-5埋土15)
- ㊾ 黄灰色(2.5Y5/1)シルトで、マンガンと炭化物を含む

図13 A-3区西壁セクション図

1. A区

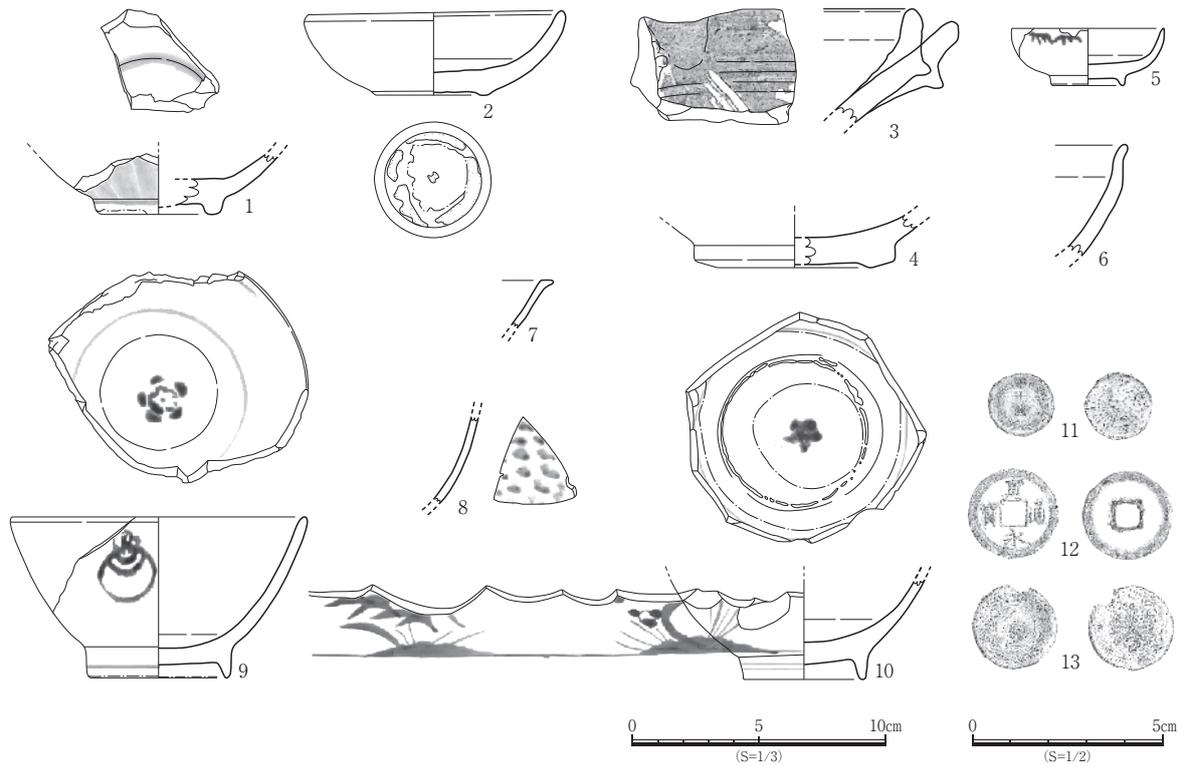


図14 A区堆積層出土遺物実測図

を施す。2は唐津系灰釉陶器丸皿で、高台を除き灰オリーブ色の灰釉を施す。高台内には輪状に砂が付着する。

第2層(図14-3・4)

近世陶磁器の他、土師質土器、土師器、備前焼等が出土した。図示したのは、備前焼播鉢(3)と白磁碗(4)である。

3は備前焼播鉢で、一部が残存する。口縁部は直立し、下方は外へ摘む。内面には僅かに播目が残る。4は白磁碗の底部で、低く幅の広い高台を有する。内面は白磁釉を施し、外面は無釉である。

② A-2区

第1層(図14-5)

近世陶磁器の出土がみられ、近世磁器猪口(5)を図示した。

5は肥前産とみられる近世磁器猪口で、全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。外面には笹文の染付がみられる。

第4層(図14-6)

第4層は中世の遺物包含層で、土師質土器と土師器、須恵器、瓦器、東播系須恵器、瓦質土器、青磁等の出土がみられ、陶器碗(6)を図示した。

6は肥前産とみられる陶器天目形碗で、全面に鉄釉を施す。

③ A-3区

第1層(図14-7~11)

近世陶磁器の他、土師質土器と白磁、青磁、青花、銭貨等が出土した。図示したのは、白磁碗(7)

と青花碗(8), 近世陶器碗(9), 近世磁器碗(10), 金属製品銭貨(11)である。

7は白磁碗で, 口縁端部を横へ細く摘む。全面に白磁釉を施す。8は青花碗で, 体部の一部が残存する。外面には三葉状の斑点文の染付がみられる。全面に透明釉を施す。9は瀬戸・美濃産の陶胎染付広東碗である。見込に五弁花, 内面に圏線の染付, 外面には呉須と鉄錆による宝文と圏線がみられる。全面に白化粧土のち透明釉を施し, 畳付を釉ハギする。10は近世磁器碗で, 見込に五弁花, 内面に圏線, 外面には土坡と草, 笹, 樹文, 高台に二重圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施し, 畳付を釉ハギ, 見込には蛇ノ目釉ハギを行う。蛇ノ目釉ハギの箇所には刷毛状の痕跡が残り, 輪状に砂が付着する。11は十銭銀貨で, 表面には菊花紋章と菊枝, 桐枝, 「十銭」の文字, 裏面には旭日と桜, 「明治四十年」「SEN」の文字, 側面には刻目がみられる。明治40(1907)年製造の旭日十銭銀貨とみられる。

第2層(図14-12・13)

第2層は近代の遺物包含層で, 近代陶磁器の他, 土師質土器, 土師器, 須恵器, 瓦器, 東播系須恵器, 瓦質土器, 古瀬戸, 備前焼, 白磁, 青磁, 近世陶磁器等, 中世から近世にかけての遺物も多く出土した。図示したのは金属製品銭貨(12・13)である。

12は銅製品銭貨である。寛永通寶で, 新寛永である。13は一銭銅貨で, 表面には菊と唐草, 「一銭」の文字, 裏面には桐と桜, 「大日本」「大正十年」の文字がみられる。桐一銭青銅貨で, 大正10(1921)年製造である。

(4) 検出遺構と出土遺物

① 中世

中世の遺構はA-1区とA-2区で多く検出された。A-3区は中世の遺物包含層が後世に削平を受けたとみられ一部でのみ認められており, 遺構も北西部でのみ確認された。またA-2区とA-3区の南部は, 中世の段階では地形が低く, 近世に地形の高い北部を削平し整地されたものとみられ, 検出された遺構は少なくなっている。

i A-1区

a 掘立柱建物跡

SB-1(遺構: 図15)

調査区東端で検出した東西棟掘立柱建物跡(N-89°-E)で, 西側柱を確認し, 東は調査区外へ続く。梁間2間(3.60m)を確認し, 柱間寸法は1.80mを測る。柱穴は隅丸方形を呈し, 長辺59~81cm, 短辺39~55cm, 深さ20~40cm, 柱痕径18cmを測る。埋土は掘方がオリーブ褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと0.2~0.3cm大のマンガンを含み, 柱痕はオリーブ褐色細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片7点と備前焼播鉢1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SB-2(遺構: 図16)

調査区南東部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-8°-W)で, 北側柱を確認し, 南は調査区外へ続く。梁間2間(3.00m)とみられ, 柱間寸法は1.50mを測る。柱穴は隅丸方形を呈し, 検出長74~

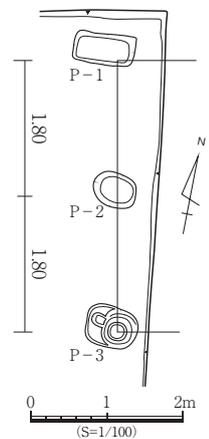


図15 SB-1

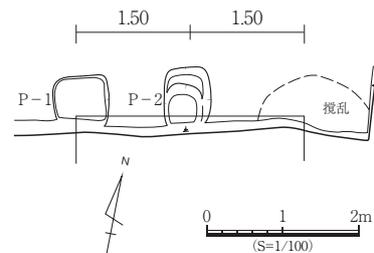


図16 SB-2

1. A区

76cm, 検出幅61~68cm, 深さ19~23cm, 柱痕径23cmを測る。埋土は掘方がオリブ褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと0.2~0.3cm大のマンガンを含み, 柱痕は黄褐色細粒砂質シルトであった。出土遺物にはP-2より土師質土器13点(椀1, 細片12)がみられたが, 図示できるものはなかった。

SB-3(遺構:図17, 遺物:図20-14・15)

調査区南部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-12°-W)で, 北側柱を確認し, 南は調査区外へ続く。梁間1間(3.00m)とみられ, 柱穴は隅丸方形を呈し, 長辺71~97cm, 検出幅18~32cm, 深さ17~39cm, 柱痕径13cmを測る。埋土

はP-1が2層, P-2が4層に分かれる。出土遺物には土師質土器7点(杯2, 細片5)と粘土塊がみられ, P-1より出土した土師質土器皿(14・15)を図示した。14・15は土師質土器皿で, いずれも著しく摩耗するため調整は不明である。

SB-4(遺構:図9・18, 遺物:図20-16・17)

調査区北西部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-12°-W)で, 北は調査区外へ続く。梁間1間(3.00m), 桁行1間(2.10m)を確認した。柱穴は隅丸方形を呈し, 長辺51~99cm, 短辺31~68cm, 深さ43~77cm, 柱痕径18~28cmを測り, 埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器4点(杯1, 細片3)と瓦質土器6点(鍋1, 釜1, 細片4), 備前焼播鉢1点がみられ, P-3より出土した瓦質土器鍋(16)と備前焼播鉢(17)を図示した。16は瓦質土器鍋で, 口縁部が直立する。著しく摩耗するため調整は不明瞭で, 内外面に僅かに指頭圧痕が残る。内面には炭素の吸着は認められない。17は備前焼播鉢の底部で, 内面には縦方向と斜方向の播目が僅かに残る。

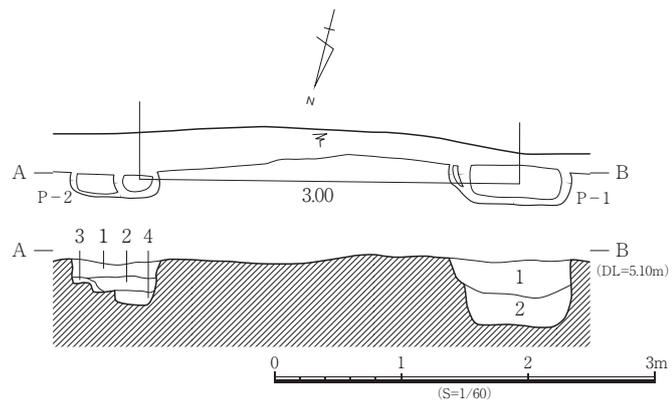
SB-5(遺構:図9・19, 遺物:図20-18)

調査区北西部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-13°-W)で, 梁間1間(3.00m), 桁行2間(4.00m)を確認し, 北西隅柱は確認できなかった。柱穴は隅丸方形を呈し, 検出長46~86cm, 検出幅23~84cm, 深さ28~73cm, 柱痕径12cmを測り, 埋土は2~4層に分かれる。出土遺物には土師質土器22点(皿1, 細片21)と土師器片7点, 瓦質土器片1点, 備前焼播鉢1点, 唐津系灰釉陶器皿1点がみられ, P-3より出土した備前焼播鉢(18)を図示した。18は備前焼播鉢で, 一部が残存する。器壁が薄く, 残存部には播目は認められない。

b ピット

P-1

調査区南端で検出したピットで, 一部は調査区外へ続く。楕円形を呈し, 長径45cm, 検出幅30cm, 深さ34cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 2cm大の礫とマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器小皿1点がみられたが, 図示できなかった。



- | | |
|--|---|
| <p>P-2埋土</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで, 上部にマンガンの堆積 2. 灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルトで, マンガンを含む 3. 暗灰黄褐色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで, マンガンを含む 4. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを少し含む | <p>P-1埋土</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, 0.2~0.3cm大のマンガンを含む 2. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含み, 炭化物を含む |
|--|---|

図17 SB-3

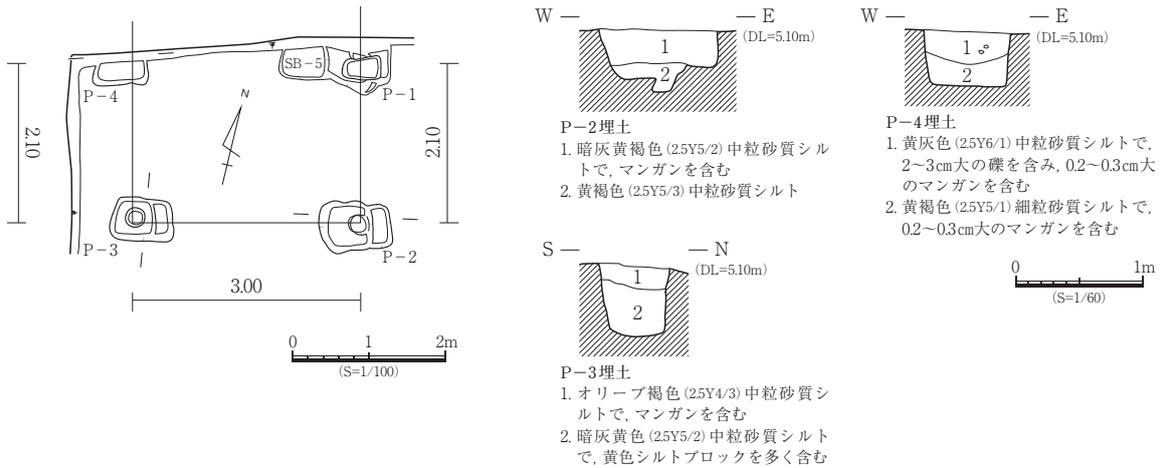


図18 SB-4

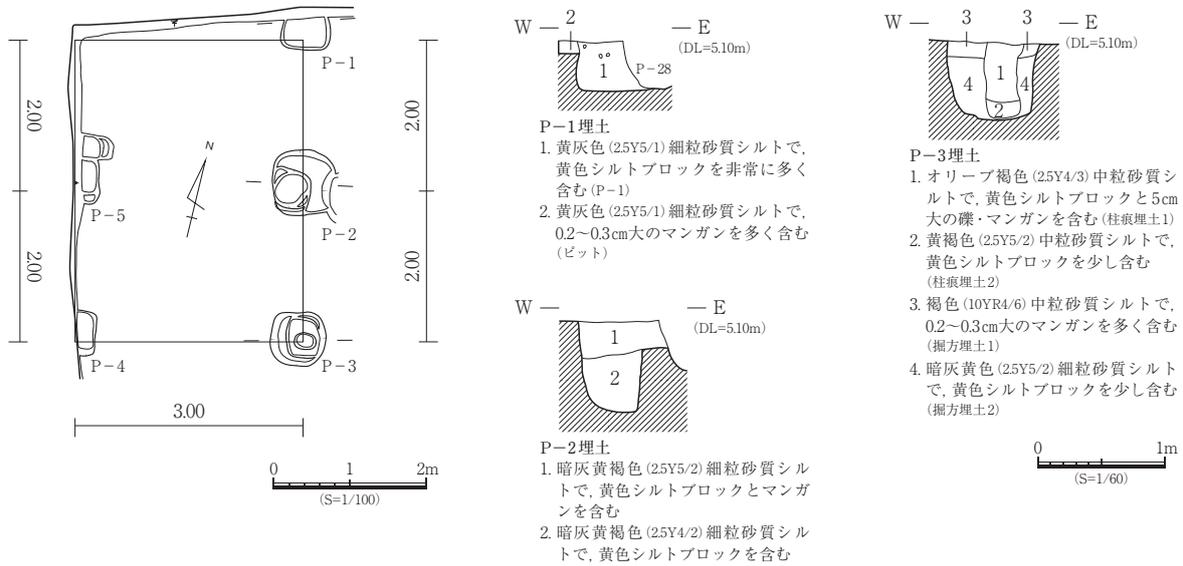


図19 SB-5

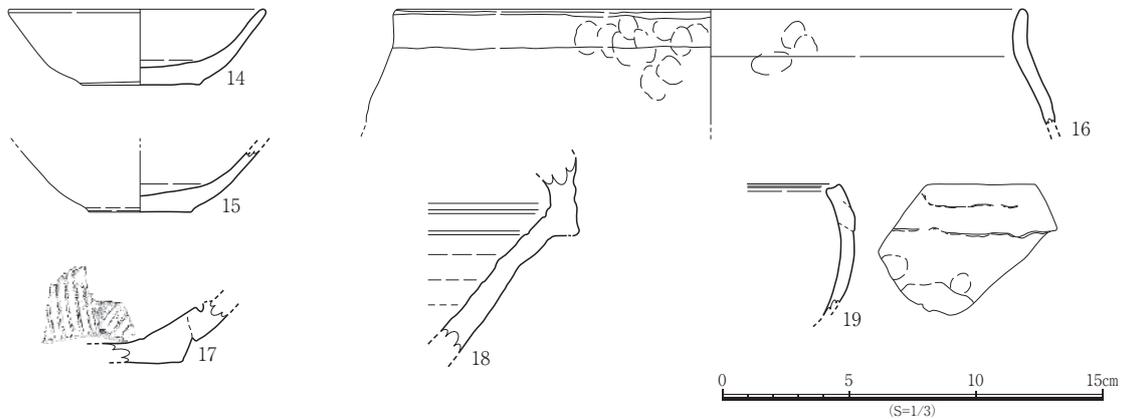


図20 SB-3~5, P-4出土遺物実測図

1. A区

P-2

調査区西部で検出したピットで、南は調査区外へ続く。隅丸方形を呈し、検出長91cm、検出幅29cm、深さ20cmを測る。埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2~0.3cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-3

調査区西部で検出したピットである。隅丸方形を呈し、長辺82cm、短辺44cm、深さ11cmを測る。埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2~0.3cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と瓦質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-4(遺物:図20-19)

調査区西端で検出したピットで、一部は調査区外へ続く。SB-4・5に切られる。隅丸方形を呈するものとみられ、検出長45cm、検出幅24cm、深さ24cmを測る。埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2~0.3cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には瓦質土器2点(釜1, 細片1), 鉄滓1点がみられ、瓦質土器釜(19)を図示した。19は瓦質土器釜で、扁平な鏝を貼付する。口縁部は横ナデで、体部はナデ調整とみられるが、摩耗するため調整は不明瞭である。

ii A-2区

a 掘立柱建物跡

SB-6(遺構:図10・21)

調査区北東部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-16°-W)で、梁間1間(4.20m)、桁行2間(4.50m)を確認し、北は調査区外へ続く。桁行の柱間寸法は2.10mと2.40mを測る。P-8に切られる。柱穴は隅丸方形または楕円形を呈し、全長55~67cm、検出幅20~52cm、深さ17~54cm、柱痕径11~14cmを測り、埋土は2~3層に分かれる。出土遺物には土師質土器片9点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7(遺構:図10・22, 遺物:図22-20)

調査区北西部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-13°-W)である。梁間1間(3.00m)、桁行2間(3.80

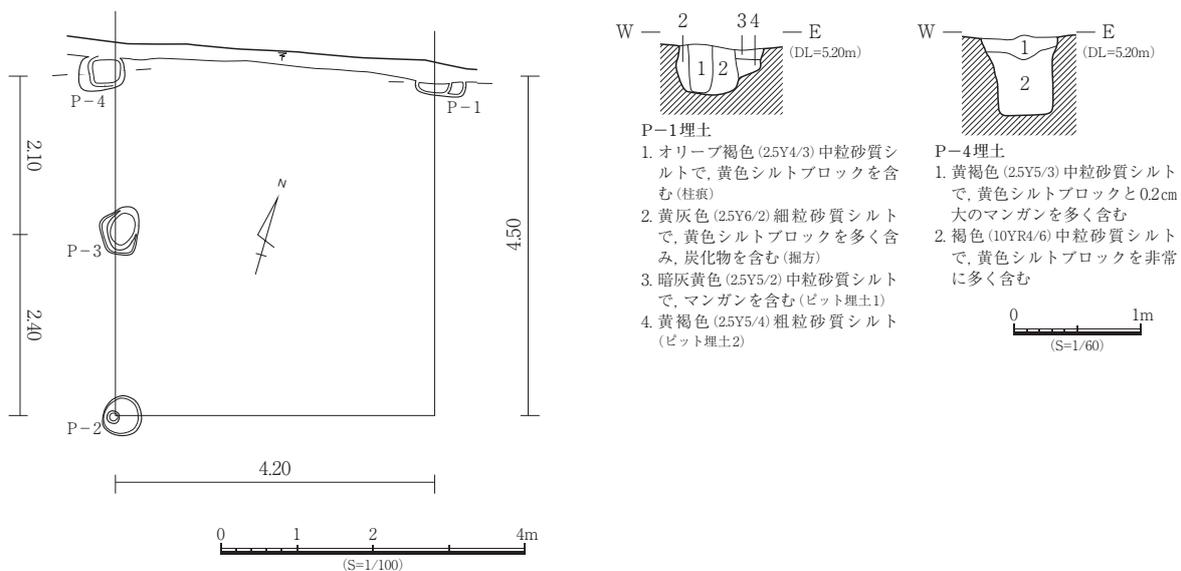


図21 SB-6

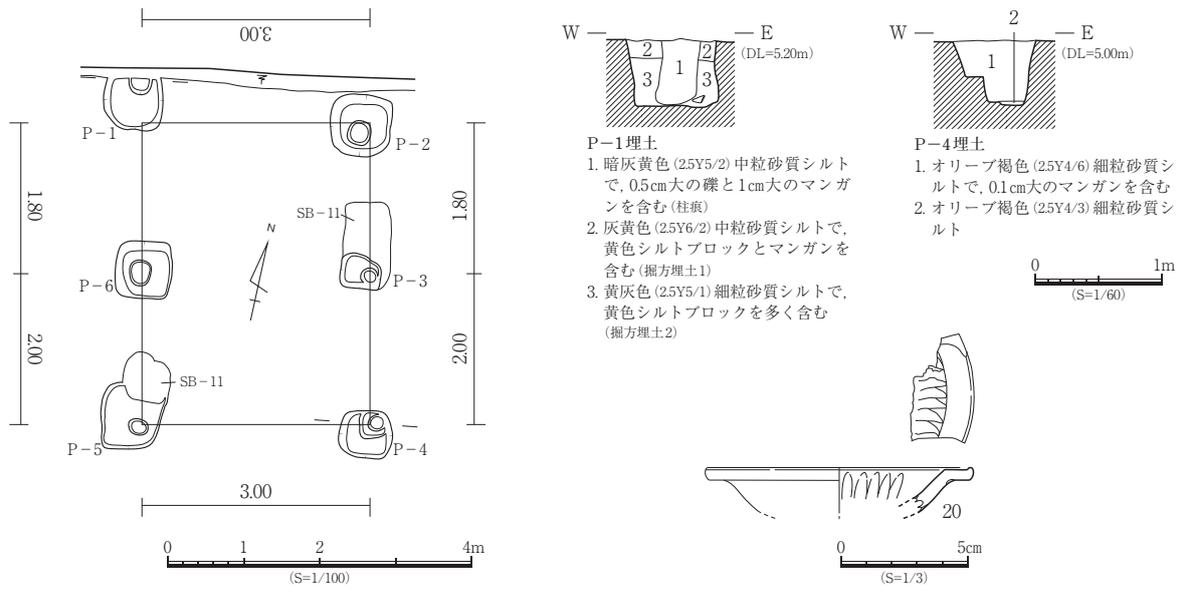


図22 SB-7

m)で、桁行の柱間寸法は1.80mと2.00mを測る。SK-1を切る。柱穴は隅丸方形を呈し、検出長48~90cm, 検出幅38~83cm, 深さ42~81cm, 柱痕径15~26cmを測り、埋土は2~3層に分かれる。出土遺物には土師質土器22点(杯1, 細片21), 瓦器片1点, 瀬戸・美濃陶器皿1点, 陶器片1点, 青磁碗1点, 鉄滓1点がみられ、P-1の柱痕より出土した瀬戸・美濃陶器皿(20)を図示した。20は瀬戸・美濃陶器折縁皿で、内面には丸彫による菊弁文がみられる。全面に灰釉を施す。

SB-8(遺構：図23)

調査区北西部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-8°-W)で、梁間1間(3.30m), 桁行2間(4.00m)である。桁行の柱間寸法は2.00mを測り、P-22を切る。柱穴は隅丸方形を呈し、検出長78~95cm, 検出幅44~87cm, 深さ12~39cm, 柱痕径12~48cmを測り、埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器6点(杯2, 細片4), 須恵器片1点, 陶器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

b 土坑跡

SK-1

調査区北西部で検出した土坑で、SB-7に切られる。不整楕円形を呈し、検出長1.64m, 短径1.51m, 深さ29cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、0.1~0.2cm大のマ

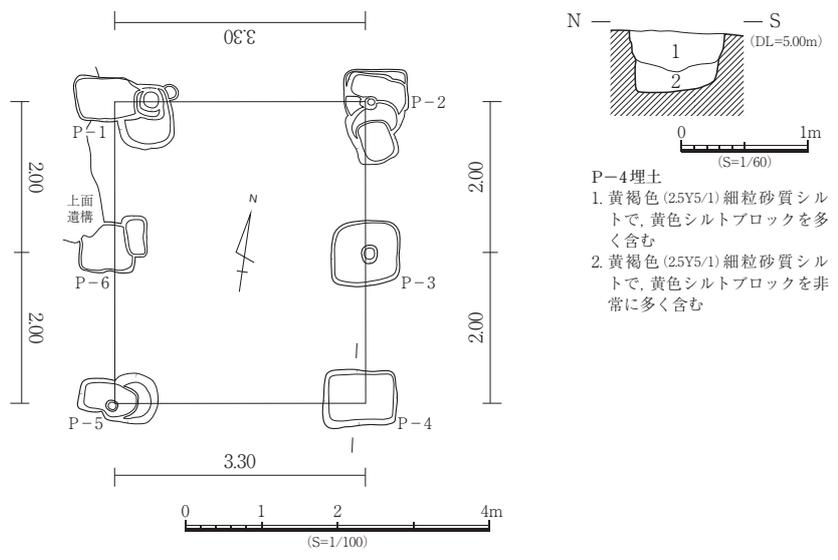


図23 SB-8

1. A区

ンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点，土師器片1点，須恵器片1点がみられたが，図示できるものはなかった。

c 溝跡

SD-1(遺構：図11・24・25，遺物：図26-21~30)

調査区南部で検出した東西方向の溝跡で，P-9・24を切る。東西方向に湾曲して伸び，東端はL字状に屈曲し南へ伸びる。検出長26.23m，検出幅1.80~2.43m，深さ0.52~1.24mを測り，西と南は調査区外へ続く。基底面は西(4.097m)から北東部(3.776m)，南(3.579m)へ傾斜する。断面は南部がU字形，西部がV字形を呈し，埋土は中央部では6層に分かれる。上層の出土遺物には土師質土器52点(杯4，細片48)，土師器4点(釜1，細片3)，須恵器3点(蓋1，甕2)，瓦器片1点，東播系須恵器片1点，瓦質土器2点(播鉢1，細片1)，備前焼7点(播鉢4，壺1，壺か1，甕か1)，白磁皿1点，青磁2点(碗1，細片1)，鉄製品2点がみられた。下層の出土遺物には土師質土器片4点，土師器釜1点，備前焼播鉢1点がみられた。上層より出土した21~29と下層から出土した30を図示した。

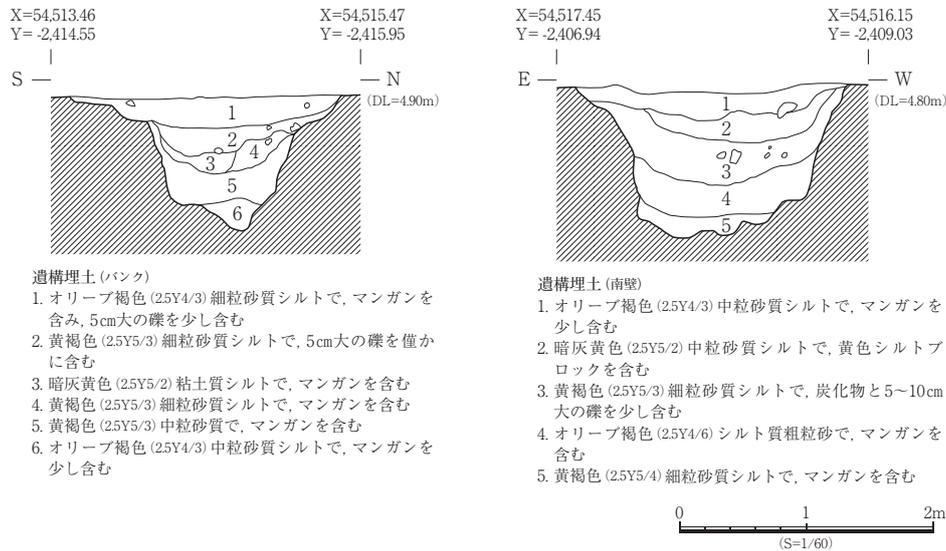


図24 SD-1

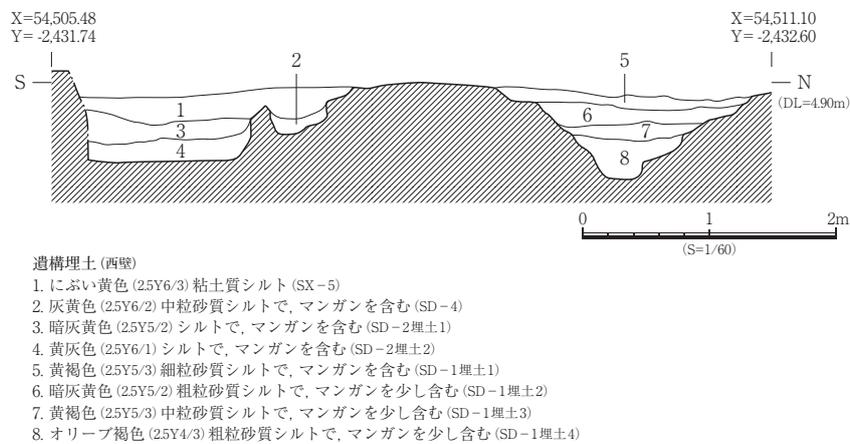


図25 SD-1・2・4, SX-5

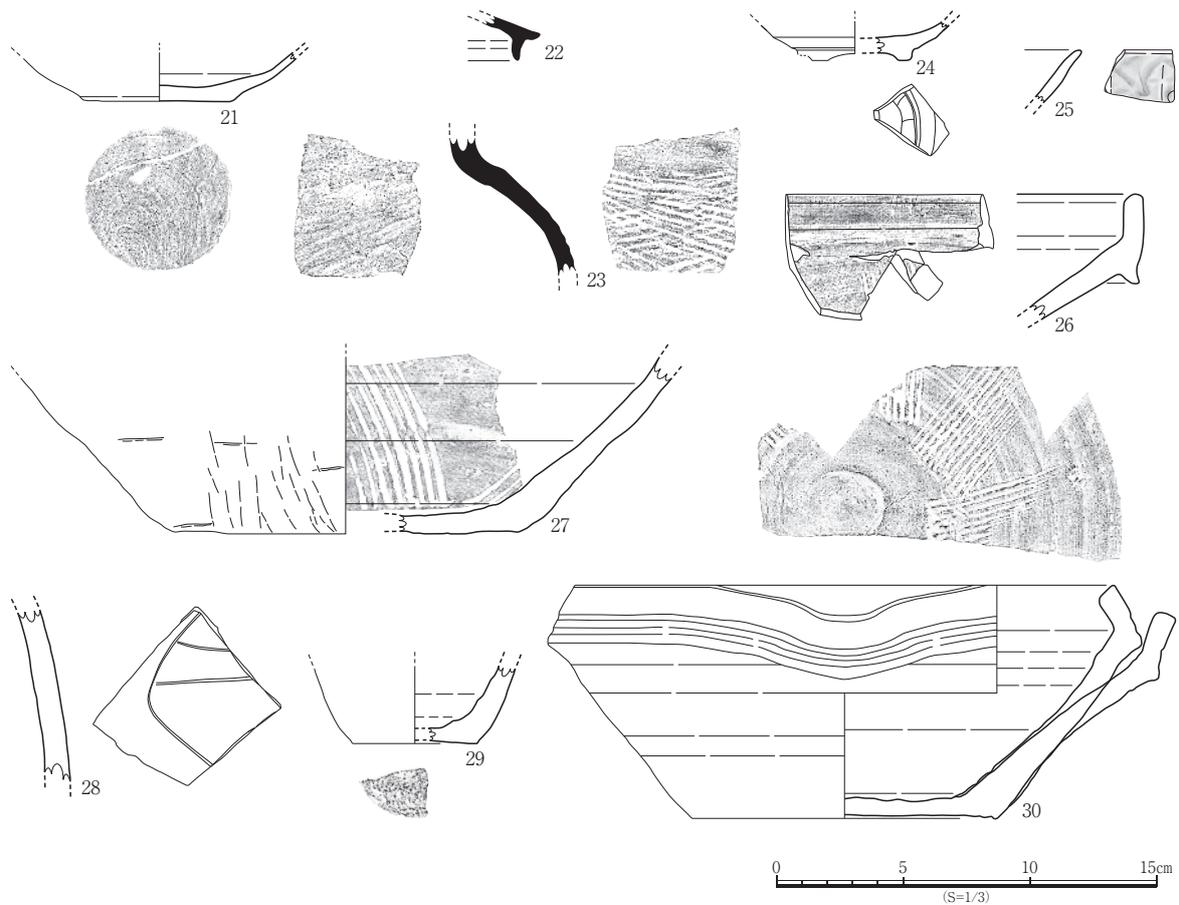


図26 SD-1出土遺物実測図

21は土師質土器杯で、器壁が非常に薄い。底部の切り離しは回転糸切りで、体部は著しく摩耗するため調整は不明である。22は須恵器蓋で、かえりが付く。回転ナデ調整とみられるが、外面は摩耗するため調整は不明である。23は須恵器甕で、肩部が残存する。内面は青海波文の当て具痕のちナデ調整、頸部は横方向のナデ調整、外面は平行タタキ調整である。24は白磁皿で、切高台を有する。全面に薄く白磁釉を施し、見込には重ね焼痕が残る。25は青磁碗で、器壁が薄く、口縁部は外上方へまっすぐ伸びる。口縁部外面には片彫による小さな蓮弁文がみられ、蓮弁は凸となる。口縁部の一部を除き、やや黄色味を帯びた青磁釉を施す。26・27は備前焼播鉢である。26は口縁部の一部が残存し、内面に僅かに播目が残る。口縁部は薄く直立し、下方は細く摘む。調整は回転ナデである。27は底部が残存し、回転ナデ調整の後、外面の一部にナデ調整を加える。内面には8条単位の播目が3箇所に残る。播目は摩耗する。28は備前焼甕とみられ、体部の一部が残存する。内外面ともナデ調整を施し、外面には線刻による文様の一部が残る。29は備前焼壺とみられ、底部の切り離しは回転糸切りで、体部は回転ナデ調整である。30は下層より出土した備前焼播鉢で、灰色を呈する。口縁部は体部より屈曲して、内上方へまっすぐ伸びる。内面には11条単位の播目がみられる。

SD-2(遺構：図11・25, 遺物：図28-31・32)

SD-1の南で検出した東西方向の溝跡で、SD-4を切り、両端と南肩は調査区外へ続く。検出

1. A区

長11.55m, 検出幅1.09~1.19m, 深さ26~36cmを測る。基底面は東(4.293m)から西(4.274m)へ傾斜し, 断面は台形を呈する。埋土は上層が暗灰黄色シルト, 下層が黄灰色シルトでいずれもマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点, 土師器釜2点, 須恵器甕か1点, 東播系須恵器片口鉢1点, 陶器片1点, 白磁片1点がみられ, 土師器釜(31)と須恵器甕か(32)を図示した。31は畿内産の土師器釜で, 口縁部は内湾し, 外面には凹線状の段を有する。内面は横方向の板ナデ調整, 外面は横方向のナデ調整で, 体部外面は煤が付着するため調整は不明である。32は須恵器甕とみられ, 底部が残存する。内面は横方向のナデ調整, 体部外面は回転ナデ調整, 底部外面は無調整で, 板状圧痕が残る。

SD-3(遺構:図27)

SD-1の北で検出した東西方向の溝跡で, 全長10.13m, 全幅0.63~1.28m, 深さ15cmを測る。基底面は西(4.734m)から東(4.671m)へ傾斜し, 断面は台形を呈する。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが, 図示できなかった。

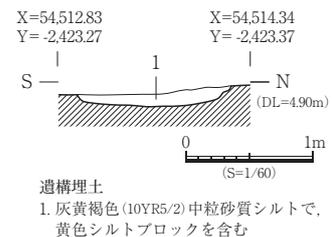


図27 SD-3

SD-4(遺構:図11・25)

SD-2の北で検出した東西方向の溝跡で, SD-2に切られ, 東端は屈曲し南へ伸び, 西端は調査区外へ続く。検出長3.06m, 検出幅0.18~0.46m, 深さ17cmを測る。基底面は北東部(4.543m)から南(4.522m)と西(4.446m)へ傾斜し, 断面はV字形を呈する。埋土は灰黄色中粒砂質シルトで, マンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

d ピット

P-5(遺物:図28-33)

調査区北東部で検出した隅丸方形を呈するピットで, 長辺84cm, 短辺64cm, 深さ53cm, 柱痕径21cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと0.2cm大のマンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器34点(杯2, 細片32), 瓦器片1点, 瓦質土器片2点, 青磁碗1点がみられ, 青磁碗(33)を図示した。33は青磁碗で, 口縁部が肥厚し, 外面には陰刻による雷文帯とみられる文様の一部が残る。全面に黄色味を帯びた青磁釉を施す。

P-6(遺構:図10)

調査区北東部で検出した楕円形を呈するとみられるピットで, 北は調査区外へ続く。検出長52cm, 検出幅14cm, 深さ10cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと0.2cm大のマンガンを多く含んでいた。出土遺物にはタタキが入る須恵器片1点がみられたが, 図示できなかった。

P-7

P-6の南で検出した楕円形を呈するピットで, 長径38cm, 短径33cm, 深さ17cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと0.2cm大のマンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と瓦器碗1点, 鉄釘1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-8

調査区東部で検出した隅丸方形を呈するピットで, SB-6を切る。長辺44cm, 短辺36cm, 深さ36cm, 柱痕径13cmを測る。埋土は掘方が黄褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含み, 柱痕が黄褐色細粒砂質シルトで, いずれもマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみ

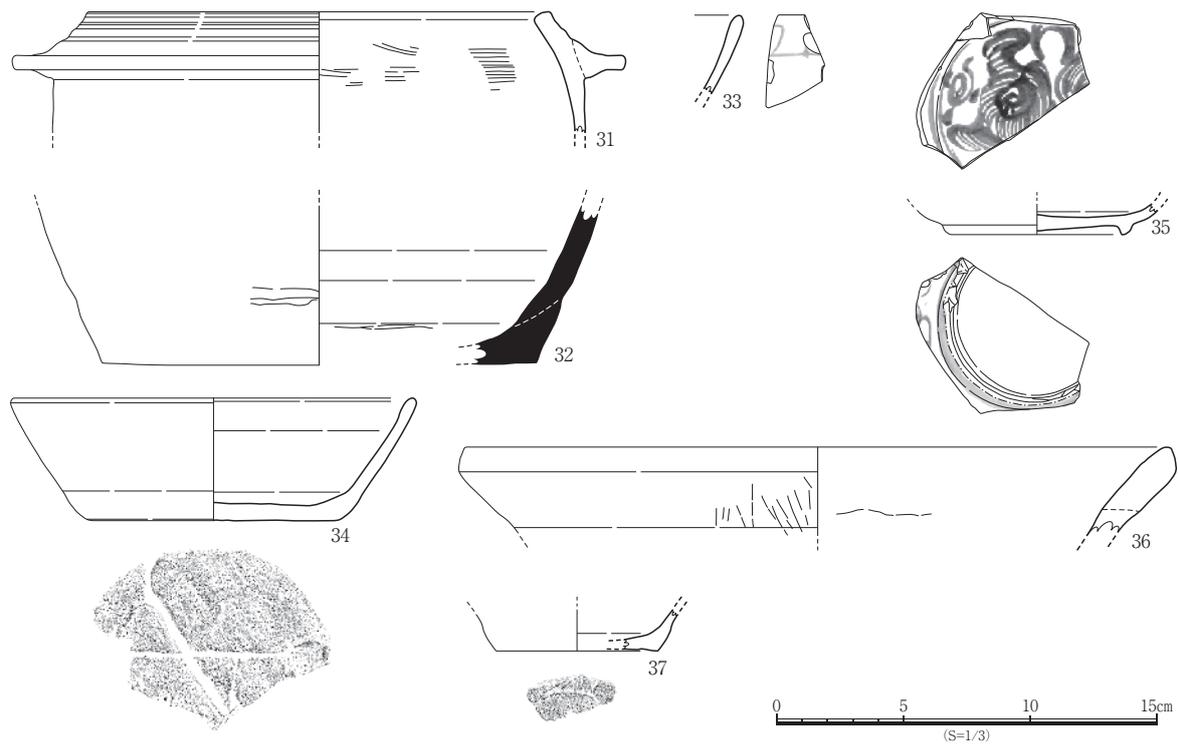


図28 SD-2, P-5・11・17・21・24出土遺物実測図

られたが、図示できるものはなかった。

P-9

P-8の南で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、SD-1に切られる。検出長29cm、短径34cm、深さ11cm、柱痕径10cmを測る。埋土は掘方が黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、柱痕がオリーブ褐色細粒砂質シルトで、いずれもマンガンを含んでいた。出土遺物は掘方より粘土塊1点がみられた。

P-10

調査区北部で検出した楕円形を呈するピットで、P-11に切られる。検出長44cm、短径45cm、深さ13cmを測り、埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、0.1~0.2cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片10点と瓦器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-11(遺物: 図28-34)

P-10の西で検出した楕円形を呈するピットで、P-10を切る。長径80cm、短径68cm、深さ70cmを測る。埋土は上層が灰黄褐色細粒砂質シルトで、0.1~0.2cm大のマンガンを含み、下層がオリーブ褐色細粒砂質シルトで、0.1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器20点(杯3、細片17)と東播系須恵器碗1点がみられ、土師質土器杯(34)を図示した。34は土師質土器杯で、器壁が厚く、口縁部は外上方へまっすぐ伸びる。底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。体部は回転ナデ調整とみられるが、摩耗するため調整は不明である。

P-12

調査区北部で検出した楕円形を呈するピットで、P-13を切る。長径42cm、短径37cm、深さ28cmを測り、埋土は黄灰色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には

1. A区

鉄滓1点がみられた。

P-13

P-12の南で検出した楕円形を呈するピットで、P-12に切られる。長径50cm、短径49cm、深さ7cmを測り、埋土は黄灰色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-14

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺78cm、短辺65cm、深さ57cm、柱痕径10cmを測る。埋土は掘方が黄灰色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、柱痕が黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2cm大のマンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器3点(椀1、細片2)と土師器釜1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-15

P-14の南で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、他のピットに切られる。長径54cm、検出幅40cm、深さ46cm、柱痕径11cmを測り、埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、0.1～0.2cm大のマンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と土師器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-16

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈するピットで、検出長75cm、短辺47cm、深さ44cm、柱痕径22cmを測る。埋土は掘方が黄灰色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、柱痕が灰黄褐色細粒砂質シルトで、0.1～0.2cm大のマンガンを含んでいた。掘方の出土遺物には土師質土器片1点と青磁片1点、柱痕の出土遺物には瓦質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-17(遺物:図28-35)

P-16の南で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、底でP-18を検出した。検出長47cm、短径49cm、深さ19cmを測り、埋土は黄灰色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には図示した青花皿(35)がみられた。35は青花皿で、見込には玉取獅子と圏線、外面には唐草文と圏線の染付がみられる。畳付を除き透明釉を施し、高台内には放射状の鈷痕が残り、畳付には砂が付着する。

P-18

P-17の西で検出した楕円形を呈するピットで、P-17に切られる。長径51cm、短径42cm、深さ42cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-19

調査区北西部で検出した隅丸方形を呈するピットで、P-20を切る。一辺48cm、深さ23cm、柱痕径15cmを測る。埋土は掘方が黄灰色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、柱痕が暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点とタタキが入る須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-20

P-19の西で検出した隅丸方形を呈するピットで、P-19に切られる。長辺73cm、短辺52cm、深さ28cm、柱痕径15cmを測る。埋土は掘方が黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2

cm大のマンガンを多く含み、柱痕が暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含んでいた。掘方の出土遺物には土師質土器片7点、柱痕の出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-21(遺物: 図28-36)

P-20の南で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、他の遺構に切られる。長径72cm, 検出幅32cm, 深さ19cmを測り、埋土はオリーブ褐色細粒砂質シルトで、0.1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には図示した土師器甕(36)がみられた。36は土師器甕で、口縁部が残存し、端部は肥厚する。調整は横ナデで、外面には縦方向の粗いハケ調整を加える。

P-22

P-21の南西で検出した隅丸方形を呈するピットで、SB-8に切られる。検出長65cm, 検出幅52cm, 深さ5cmを測り、埋土はオリーブ褐色細粒砂質シルトで、0.1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片14点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-23

調査区北西部で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺85cm, 短辺73cm, 深さ66cm, 柱痕径18cmを測る。埋土は黄灰色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。掘方の出土遺物には土師質土器5点(杯1, 細片4)と須恵器片1点、柱痕の出土遺物には土師質土器片1点と土師器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-24(遺物: 図28-37)

調査区南部で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、SD-1に切られる。検出長47cm, 検出幅22cm, 深さ3cmを測り、埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、0.1~0.2cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器杯(37)がみられた。37は土師質土器杯で、一部が残存する。器壁が薄く、調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

iii A-3区

a 土坑跡

SK-2

調査区北西部で検出した方形を呈する土坑で、西は他の遺構に切れ、北は調査区外へ続く。検出長1.84m, 検出幅1.08m, 深さ4cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には青磁稜花皿1点がみられたが、図示できなかった。

SK-3(遺物: 図29-38)

SK-2の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で、南は攪乱6に切られる。検出長1.31m, 検出幅1.00m, 深さ16cmを測り、埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、灰色シルトブロックを多く含み、1~3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器74点(杯1, 椀2, 細片71)と瓦質土器片1点がみられ、土師質土器椀(38)を図示した。38は土師質土器椀である。輪高台を貼付し、高台は断面が方形を呈する。著しく摩耗するため調整は不明である。

SK-4(遺構: 図13, 遺物: 図29-39)

調査区北西隅で検出した溝状を呈する土坑で、西は調査区外へ続く。検出長5.53m, 検出幅0.38m, 深さ52cmを測り、埋土は2層に分かれる。出土遺物には図示した土師質土器椀(39)がみられた。

39は土師質土器椀である。細い輪高台を貼付し、高台は断面が方形を呈する。著しく摩耗するた

1. A区

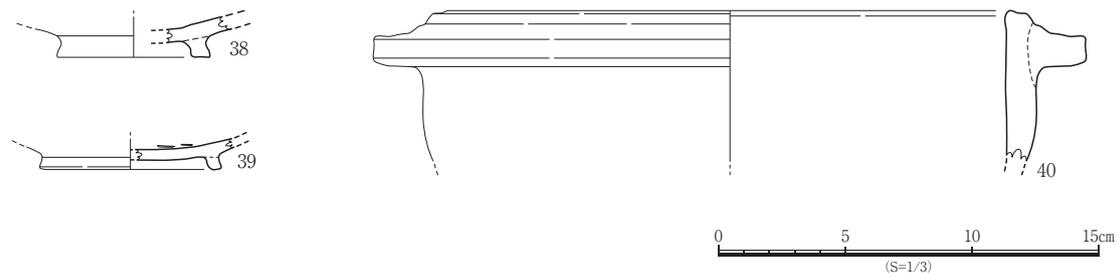


図29 SK-3・4, P-25出土遺物実測図

め調整は不明で、見込にはコテ当ての痕跡が残る。

b ピット

P-25(遺物:図29-40)

調査区北西部で検出した隅丸方形を呈するピットで、南は近世の遺構に切れ、北は調査区外へ続く。長辺83cm, 検出幅40cm, 深さ25cm, 柱痕径28cmを測る。埋土は掘方と柱痕ともにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、灰色シルトブロックを多く含み、1~3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と図示した土師器釜(40)がみられた。40は摂津型の土師器釜で、口縁部には断面が方形を呈する鍔を水平に貼付する。全面に横方向のナデ調整を施す。

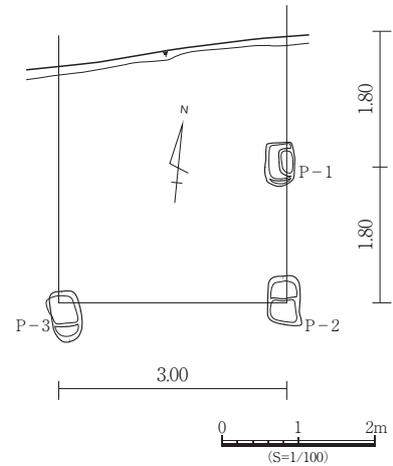


図30 SB-9

② 近世

i A-1区

a 掘立柱建物跡

SB-9(遺構:図30)

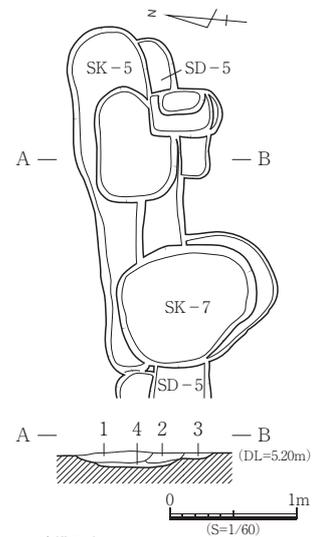
調査区北東部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-6°-W)で、北は調査区外へ続く。梁間1間(3.00m), 桁行1間(1.80m)を確認した。柱穴は隅丸方形を呈し、長辺65~89cm, 短辺35~42cm, 深さ41~50cm, 柱痕径13cmを測る。埋土は掘方が暗灰黄色中粒砂質シルトで、2cm大の礫とマンガンを含み、柱痕が灰黄褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点と青磁碗1点, 近世陶器皿1点, 近世磁器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

b 土坑跡

SK-5(遺構:図31)

調査区北東部で検出した溝状を呈する土坑で、SK-7とSD-5を切る。検出長2.79m, 検出幅0.64m, 深さ7cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と近世陶器片1点, 近世磁器2点(蓋1, 細片1)がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-6(遺構:図9・32)



- 遺構埋土
1. 灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルトで、1cm大のマンガンを含む(SK-5)
 2. 暗灰黄色(25YR5/2)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(SD-5)
 3. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、マンガンを含む(ピット)
 4. 灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルトで、マンガンを少し含む(ピット)

図31 SK-5, SD-5

SK-5の北で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で、北は調査区外へ続く。検出長2.07m, 検出幅0.61m, 深さ64cmを測り、埋土は3層に分かれる。出土遺物には土師質土器片20点と土師器焙烙1点, 青磁片1点, 近世陶器7点(鉢2, 播鉢1, 細片4), 近世磁器片1点, 鉄釘1点, 粘土塊5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7

SK-6の南で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-5とSD-5に切られる。長径1.27m, 検出幅0.98m, 深さ13cmを測る。埋土は灰黄色中粒砂質シルトで、2cm大の礫とマンガンを含んでいた。出土遺物には土師器片2点と近世陶器2点(皿1, 細片1), 鉄釘1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-8(遺構: 図33, 遺物: 図38-41・42)

調査区中央部で検出した不整楕円形を呈する土坑で、長径2.31m, 短径1.64m, 深さ89cmを測り、埋土は5層に分かれる。出土遺物には埋土1より土師質土器6点(杯2, 細片4), 青花碗1点, 近世陶器皿2点, 近世磁器碗1点, 銅製品1点, 粘土塊10点, 埋土2より土師質土器片8点, 瓦質土器片1点, 近世陶器皿1点, 近世磁器片1点, 埋土5より土師質土器片2点がみられ、埋土1より出土した青花碗(41)と埋土2より出土した近世陶器皿(42)を図示した。41は青花碗で、高台は高く、やや内傾し、見込には指頭圧痕の様な凹みが残る。見込に「福」字と二重圏線、外面に圏線の染付がみられる。畳付を除き、透明釉を施す。42は唐津系灰釉陶器皿で、高台は太く低い。内面から外面の高台付近まで灰オリーブ色の灰釉を施し、見込には胎土目痕が3箇所に残る。

SK-9(遺構: 図9)

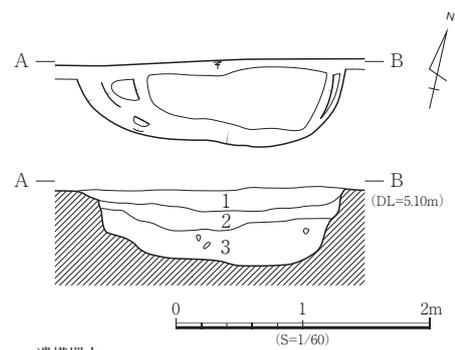
調査区北部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SD-5とSX-1に切られ、北は調査区外へ続く。検出長1.63m, 短辺1.48m, 深さ29cmを測り、埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器片6点, 土師器2点(甕1, 細片1), 瓦質土器片2点, 近世磁器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-10(遺構: 図34)

SK-9の南西で検出した不整形を呈する土坑で、SD-5に切られる。長辺2.43m, 短辺1.87m, 深さ14cmを測り、埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点, 土師器片1点, 瓦質土器片1点, 細蓮弁文の青磁碗1点, 近世陶器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

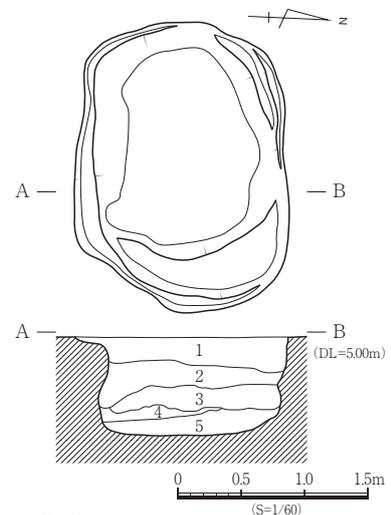
SK-11(遺構: 図35)

SK-10の西で検出した楕円形を呈する土坑で、SD-5を切る。長径1.34m, 短径1.22m, 深さ



遺構埋土
 1. 暗灰黄褐色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガン・炭化物を含む
 2. 黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルトで、マンガンを含む
 3. 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと3cm大の礫、炭化物を含む

図32 SK-6



遺構埋土
 1. 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む
 2. オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトで、にぶい黄色シルトブロックを含む
 3. 黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトで、暗灰黄色シルトブロックを多く含む
 4. 黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルト
 5. 黄褐色(2.5YR5/3)細粒砂質シルトで、黄灰色シルトブロックを多く含む

図33 SK-8

1. A区

13cmを測る。基底面には側面に沿って幅13~31cm, 深さ3~7cmを測る浅い溝が確認された。埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトで, 1cm大の礫とマンガンを含んでいた。出土遺物には口禿の白磁杯1点がみられたが, 図示できなかった。

SK-12(遺構: 図36)

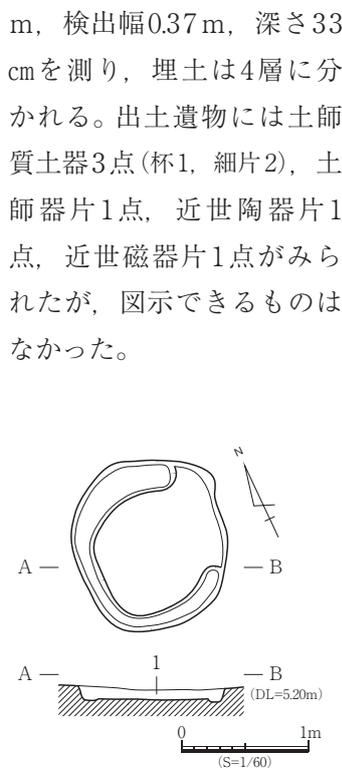
SK-11の西で検出した不整形を呈する土坑で, SK-13とSD-5, P-29に切られる。長辺2.13m, 検出幅1.84m, 深さ12cmを測り, 埋土はオリブ褐色中粒砂質シルトで, 粗粒砂と0.5cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点, 土師器片1点, 陶器片1点, 近世陶器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-13(遺構: 図36)

SK-12の上で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-12とSD-5を切り, P-29に切られる。長辺1.56m, 短辺1.42m, 深さ18cmを測り, 埋土は2層に分かれる。上層の出土遺物には土師質土器片10点, 青磁皿1点, 近世陶器片1点, 近世磁器片1点, 下層の出土遺物には土師質土器片2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

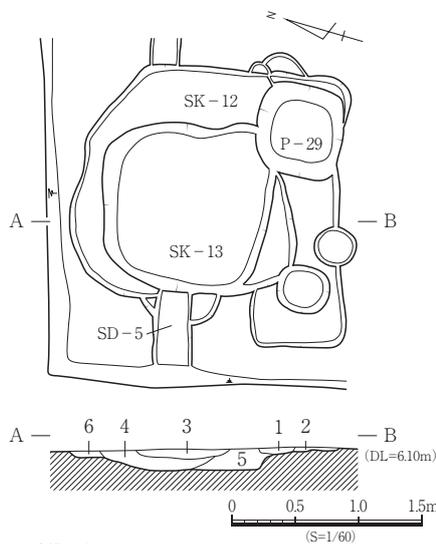
SK-14(遺構: 図37)

調査区南西隅で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で, 南と西は調査区外へ続く。検出長1.10m, 検出幅0.37m, 深さ33cmを測り, 埋土は4層に分かれる。出土遺物には土師質土器3点(杯1, 細片2), 土師器片1点, 近世陶器片1点, 近世磁器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。



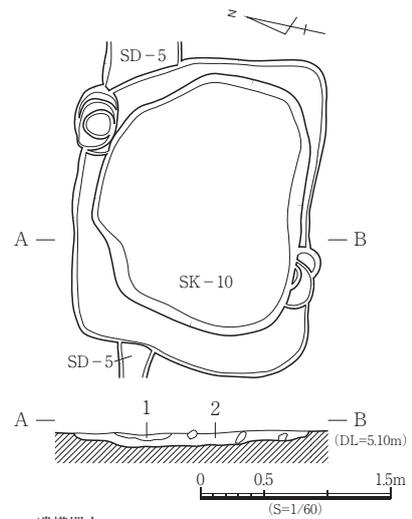
遺構埋土
1. 暗灰黄色(25Y5/2)細粒砂質シルトで, 1cm大の礫と1cm大のマンガンを含む

図35 SK-11



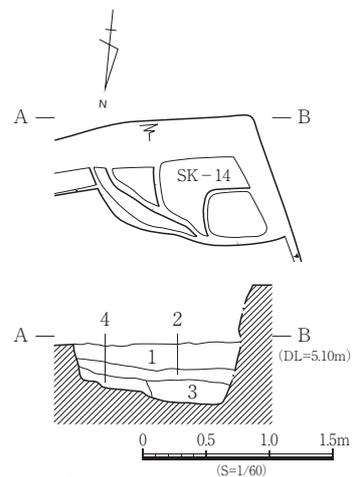
遺構埋土
1. 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルトで, 1cm大のマンガンを含む(ピット)
2. 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルトで, 0.5cm大のマンガンを含む(ピット)
3. 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルトで, 1cm大のマンガンを含む(土坑跡)
4. 灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルトで, 0.5cm大のマンガンを含む(SK-13埋土1)
5. 灰黄褐色(10YR6/2)粗粒砂質シルトで, 0.5cm大のマンガンを含む(SK-13埋土2)
6. オリブ褐色(25Y4/3)中粒砂質シルトで, 粗粒砂と0.5cm大のマンガンを含む(SK-12)

図36 SK-12・13



遺構埋土
1. 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルトで, マンガンを含む(SD-5)
2. 黄褐色(25YR5/3)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを含む(SK-10)

図34 SK-10, SD-5



遺構埋土
1. 黄褐色(25Y5/3)中粒砂質シルトで, 0.2~0.3cm大のマンガンを含み, 上部にマンガンが堆積する
2. 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックとマンガンを含む
3. 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと炭化物を含む
4. 灰黄色(25Y6/2)細粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックとマンガンを含む

図37 SK-14

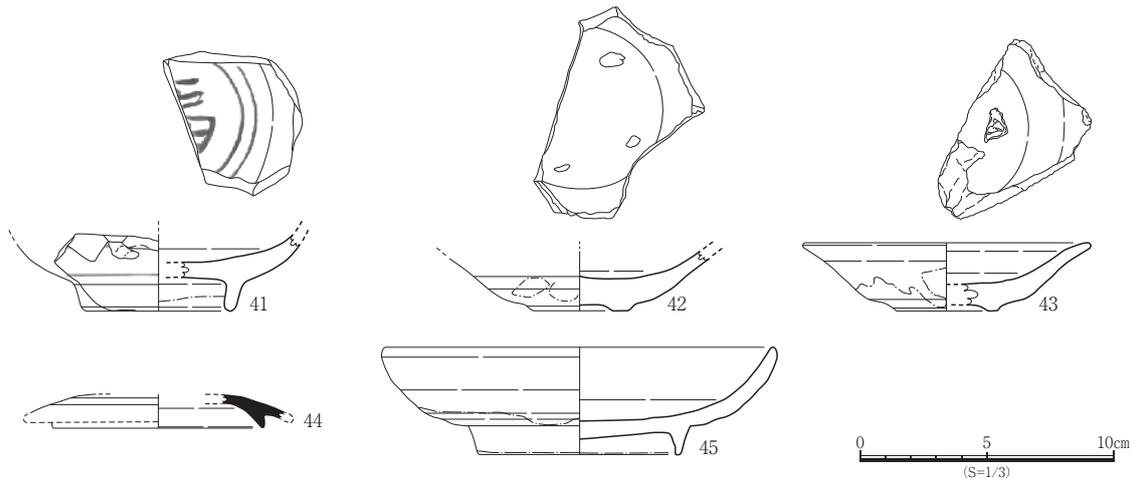
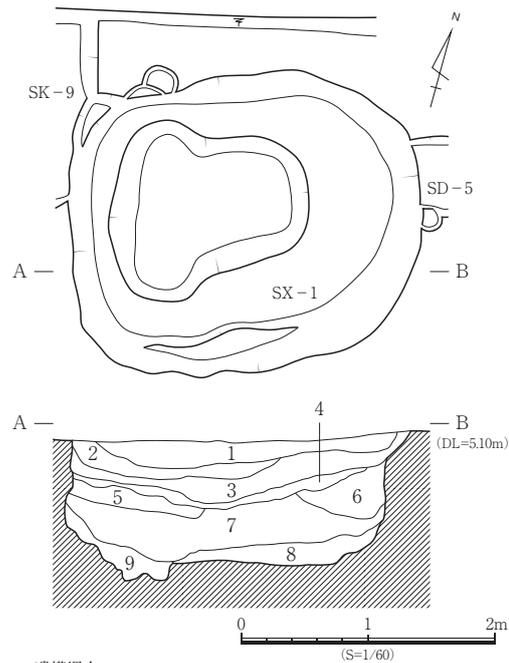


図38 SK-8, SD-5, SX-1, P-26出土遺物実測図

c 溝跡

SD-5(遺構:図31・34, 遺物:図38-43)

調査区北部で検出した東西方向の溝跡で, SK-7・9・10・12とSX-1を切り, SK-5・11・13に切られる。西は調査区外へ続き, 検出長16.54m, 検出幅0.70m, 深さ12cmを測り, 基底面は東(4.992m)から西(4.963m)へ傾斜する。断面は皿状を呈し, 埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点, 陶器碗1点, 近世陶器4点(碗1, 皿1, 細片2), 近世磁器片2点がみられ, 近世陶器皿(43)を図示した。43は唐津系灰釉陶器皿で, 口縁部は外反し, 高台は低く太い。内面から体部外面まで灰オリーブ色の灰釉を施し, 見込には胎土目痕が1箇所に残る。



d 大型土坑跡

SX-1(遺構:図39, 遺物:図38-44)

調査区中央部で検出した楕円形を呈する大型土坑で, SK-9を切り, SD-5に切られる。長径2.77m, 短径2.36m, 深さ1.17mを測り, 断面は方形を呈し, 埋土は9層に分かれる。上層の出土遺物には土師質土器片19点, 土師器釜1点, 須恵器蓋1点, 陶器片4点, 白磁壺1点, 近世陶器6点(皿5, 細片1), 近世磁器10点(碗2, 皿1, 瓶1, 細片6), 瓦片1点, 鉄製品1点, 鉄滓1点, 粘土塊1点がみられ, 備前焼や唐津系灰釉陶器中皿なども出土している。下層の出土遺物は埋土7より近世磁器片1点, 埋土9より土師器片1点と唐津系灰釉陶器砂目皿1点が出土している。図示したのは, 埋土1より出土した須恵器蓋(44)である。44は須恵

- 遺構埋土
1. オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトで, 0.5cm大のマンガンを非常に多く含む
 2. にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂質シルトで, 粗粒砂を少し含む
 3. 黄灰色(2.5Y6/2)細粒砂質シルトで, マンガンを含む
 4. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで, マンガンを含む
 5. オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトで, 1cm大の礫と炭化物を少し含む
 6. 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含み, 炭化物を少し含む
 7. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックとマンガンを少し含む
 8. 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂で, マンガンを含む
 9. 黄灰色(2.5Y5/1)粘土質シルトで, マンガンを含む

図39 SX-1

1. A区

器蓋で、口縁部の一部が残る。回転ナデ調整で、天井部外面は回転ケズリ調整を加える。

e ピット

P-26(遺物:図38-45)

調査区北東部で検出した楕円形を呈するピットで、長径77cm、短径49cm、深さ22cm、柱痕径20cmを測り、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトで、1cm大の礫とマンガンを含んでいた。出土遺物には図示した近世陶器皿(45)と近世磁器片1点がみられた。45は近世陶器皿で、内面から体部外面に灰釉を施し、見込には重ね焼痕が残る。高台は削り出しで、無釉である。

P-27(遺構:図9)

調査区北西部で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、P-28に切られ、北は調査区外へ続く。検出長50cm、検出幅34cm、深さ4cmを測り、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片3点、土師器2点(釜1、細片1)、古瀬戸皿1点、近世磁器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-28(遺構:図9)

P-27の西で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、P-27を切り、北は調査区外へ続く。長径1.03m、検出幅0.52m、深さ33cm、柱痕径21cmを測り、埋土は黄灰色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点、瓦器椀1点、瓦質土器片1点、近世磁器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-29

調査区西部で検出した隅丸方形を呈するピットで、SK-12・13を切り、底でピットを検出した。長辺73cm、短辺69cm、深さ47cmを測り、埋土はオリブ褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2~0.3cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器皿1点と唐津系灰釉陶器皿5点がみられたが、図示できるものはなかった。

ii A-2区

a 掘立柱建物跡

SB-10(遺構:図40・45)

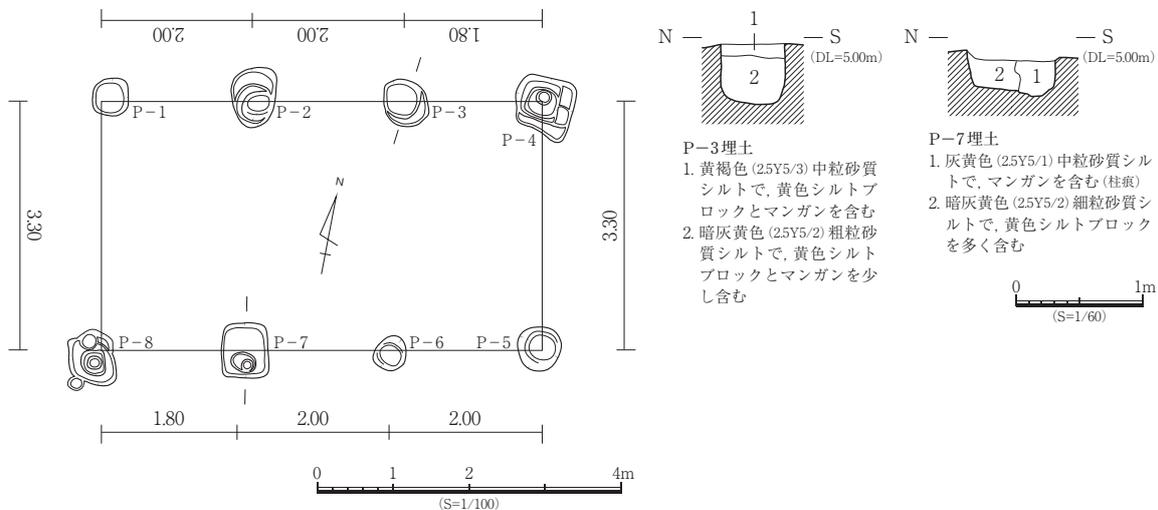


図40 SB-10

調査区中央部で検出した東西棟掘立柱建物跡 (N-79°-E) で、P-34・37に切られる。梁間1間 (3.30m)、桁行3間 (5.80m) を検出し、桁行の柱間寸法は1.80mと2.00mを測る。柱穴は隅丸方形または楕円形を呈し、検出長47~78cm、最大幅40~71cm、深さ18~53cm、柱痕径10~20cmを測る。埋土は掘方が暗灰黄色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、柱痕が灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器13点 (杯1, 碗1, 細片11) と土師器片1点, 備前焼壺1点, 近世陶器4点 (皿1, 細片3), 近世磁器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。SB-11 (遺構: 図41)

調査区北西部で検出した南北棟掘立柱建物跡 (N-13°-W) で、北は調査区外へ続く。梁間1間 (3.00m)、桁行1間 (2.10m) を検出した。柱穴は隅丸方形を呈し、検出長0.63~1.17m、最大幅0.53~0.72m、深さ12~56cm、柱痕径12~15cmを測る。掘方の埋土は3層に分かれ、柱痕の埋土は黄灰色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器15点 (杯2, 細片13) と瓦質土器片2点, 近世磁器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

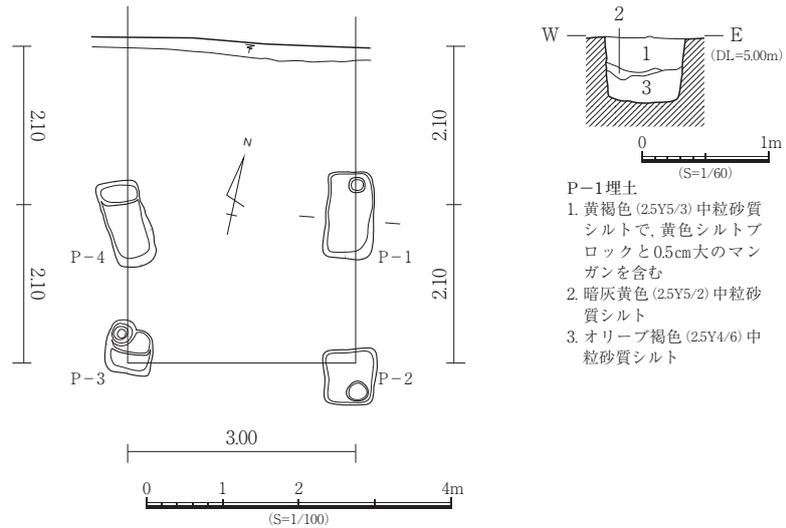


図41 SB-11

b 土坑跡

SK-15 (遺構: 図10・43, 遺物: 図42-46~50)

調査区北部で検出された隅丸方形を呈する土坑で、SK-16を切り、SX-2に切られ、北は調査区外へ続く。検出長1.50m、検出幅1.80m、深さ25cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含み、粗粒砂を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片11点, 土師器片1点, 瓦質土器片2点, 青磁碗3点, 近世陶器4点 (碗1, 皿1, 細片2), 土製品土錘1点, 石製品砥石1点, 鉄釘4点がみられ、青磁碗 (46・47) と近世陶器碗 (48), 土製品土錘 (49), 石製品砥

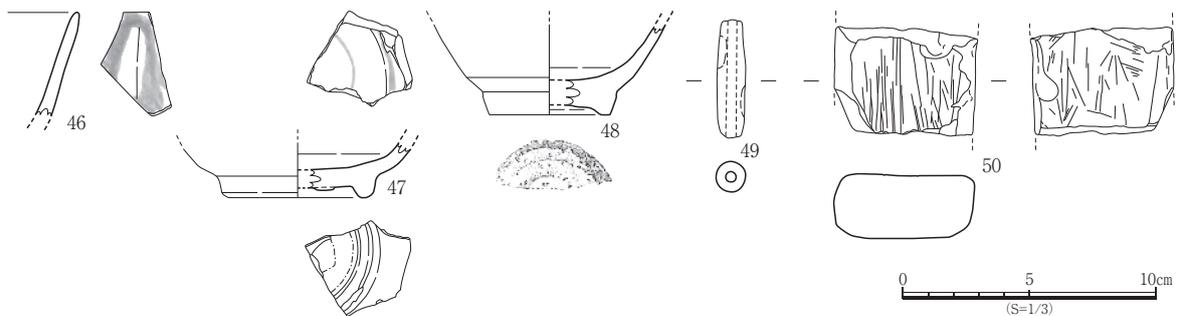


図42 SK-15出土遺物実測図

1. A区

石(50)を図示した。46は青磁碗で、口縁部は外上方にまっすぐ伸び、端部は薄くなる。外面には片彫の蓮弁文がみられ、全面に青磁釉を施す。47は青磁碗の底部で、器壁が薄く、低い高台が付く。内面には陰刻による文様がみられ、外面は無文である。全面に青磁釉を施し、高台内は輪状に釉ハギする。48は近世陶器碗で、底部が残存し、高台内の扱りは浅い。全面に灰釉を施し、高台内は薄く施釉し、粗砂が付着する。畳付は溶着したものを剥離した痕跡が残る。肥前産とみられる。49は土製品土錘で、円柱形を呈する。全面にナデ調整を施したとみられるが、著しく摩耗するため調整は不明瞭である。50は石製品砥石で、一部が残存する。残存部で4面に使用痕がみられ、1面には縦方向の深い使用痕が残る。

SK-16(遺構:図43, 遺物:図47-51)

SK-15の南東で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-15とSX-2に切られる。検出長2.05m、短径1.97m、深さ36cmを測り、底面には幅14~28cm、深さ4~9cmを測る溝が巡り、溝跡中心径は1.25mであった。埋土は4層に分かれる。上層の出土遺物には土師質土器17点(杯2, 小皿1, 細片14), 瓦質土器片1点, 備前焼播鉢1点, 陶器片2点, 近世陶器皿1点, 最下層の出土遺物には土師質土器片4点と近世磁器皿1点がみられ、上層より出土した備前焼播鉢(51)を図示した。51は備前焼播鉢で、口縁部は肥厚し上下に拡張する。全面に回転ナデ調整を施し、内面には播目は残存していない。口縁部外面には自然釉が掛かる。

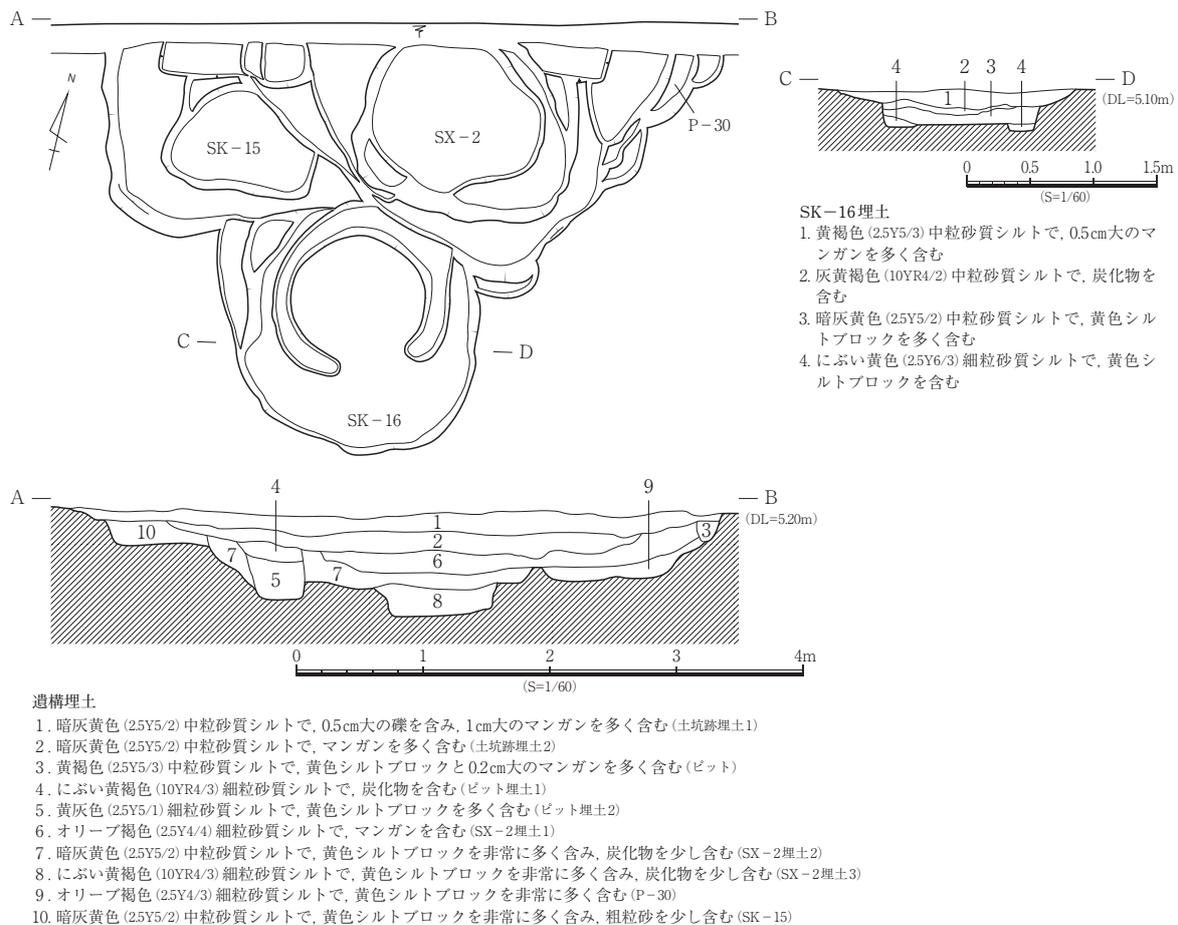


図43 SK-15・16, SX-2, P-30

SK-17(遺構:図44)

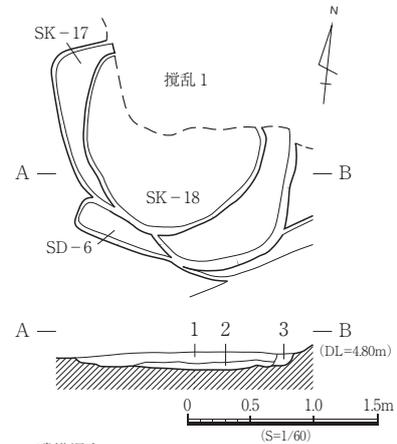
調査区南東部で検出した不整形を呈する土坑で、底でSK-18を検出し、SD-6と攪乱1に切られる。検出長1.69m、検出幅1.61m、深さ9cmを測り、埋土は暗灰黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点、土師器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-18(遺構:図44)

SK-17の底で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-17とSD-6、攪乱1に切られる。検出長1.47m、短径1.44m、深さ12cmを測り、埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、マンガンを少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点、須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-19(遺物:図47-52)

SK-18の南西で検出した楕円形を呈する土坑で、南は調査区外へ続く。検出長1.78m、検出幅1.06m、深さ7cmを測り、埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、0.1~0.2cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器小皿(52)がみられた。52は土師質土器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りで、体部は回転ナデ調整である。器面は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。



遺構埋土
 1. 暗灰黄褐色(25Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと炭化物を少し含む(SK-17)
 2. 黄褐色(25Y5/4)細粒砂質シルトで、マンガンを少し含む(SK-18)
 3. 黄褐色(25Y5/3)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(ピット)

図44 SK-17・18

SK-20(遺構:図45)

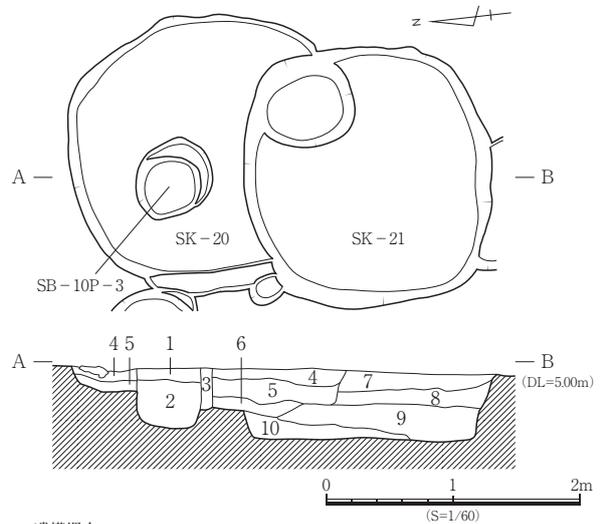
調査区中央部で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-21を切る。長径2.16m、短径2.10m、深さ27cmを測り、埋土は3層に分かれる。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかつた。

SK-21(遺構:図45)

SK-20の南で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-20に切られる。長径2.07m、短径2.01m、深さ55cmを測り、埋土は4層に分かれる。出土遺物には土師器片1点、古瀬戸碗1点、陶器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-22

SK-21の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、P-34・35に切られる。長辺1.42m、短辺0.92m、深さ12cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質



遺構埋土
 1. 黄褐色(25Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを含む(SB-10P-3埋土1)
 2. 暗灰黄色(25Y5/2)粗粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを少し含む(SB-10P-3埋土2)
 3. 暗灰褐色(10YR5/2)粗粒砂質シルトで、マンガンを含む(ピット)
 4. オリーブ褐色(25Y4/3)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(SK-20埋土1)
 5. 黄褐色(25Y5/3)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(SK-20埋土2)
 6. 黄褐色(25Y5/4)細粒砂質シルトで、1cm大のマンガンを含む(SK-20埋土3)
 7. 黄褐色(25Y5/3)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(SK-21埋土1)
 8. にぶい黄色(25Y6/3)細粒砂質シルトで、マンガンを少し含む(SK-21埋土2)
 9. にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質中粒砂で、1cm大のマンガンを含む(SK-21埋土3)
 10. 黄褐色(25Y5/3)シルト質中粒砂で、マンガンを含む(SK-21埋土4)

図45 SB-10, SK-20・21

1. A区

土器片3点と瓦器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-23(遺構:図46)

調査区北西部で検出した楕円形を呈する土坑で、P-40を切り、P-41と攪乱2に切られる。検出長2.38m、検出幅1.34m、深さ40cmを測り、埋土は3層に分かれる。上層の出土遺物には土師質土器片8点、土師器片1点、近世磁器3点(猪口1, 瓶1, 細片1)、中層の出土遺物には土師質土器片3点、須恵器片1点、近世陶器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

c 溝跡

SD-6

調査区南東隅で検出した東西方向の溝跡で、SK-17・18を切り、調査区外へ続く。

検出長4.83m、検出幅0.28m、深さ8cmを測り、基底面は西(4.682m)から東(4.668m)へ僅かに傾斜する。断面はU字形を呈し、埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、0.1~0.2cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と絵唐津皿1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-7(遺物:図47-53)

調査区西部で検出した東西方向の溝跡で、P-36を切り、P-38・39に切られる。検出長5.03m、検出幅0.61m、深さ7cmを測り、基底面は東(4.871m)から西(4.852m)へ傾斜する。断面はU字形を呈し、埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、0.1~0.2cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点と図示した土師器釜(53)がみられた。53は土師器釜で、外面に断面が三角形を呈する鏝を貼付する。調整は横ナデまたは横方向のナデで、鏝の下面には煤が付着する。

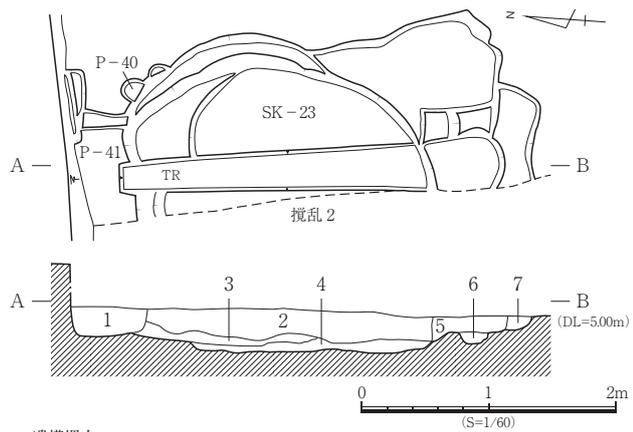
d 大型土坑跡

SX-2(遺構:図10・43, 遺物:図47-54)

調査区北部で検出した楕円形を呈するとみられる大型土坑で、SK-15・16とP-30を切り、北は調査区外へ続く。検出長2.66m、検出幅2.09m、深さ81cmを測り、埋土は3層に分かれる。上層の出土遺物には土師質土器片2点、青磁稜花皿1点、近世陶器片6点、近世磁器片4点、中層の出土遺物には土師質土器片13点、青磁碗1点、近世陶器4点(皿1, 細片3)、近世磁器片4点、銅製品1点、下層の出土遺物には土師質土器33点(杯1, 細片32)、土師器片2点、青磁片1点、近世陶器2点(碗1, 皿1)、近世磁器片2点がみられ、中層より出土した近世陶器皿(54)を図示した。54は唐津系灰釉陶器皿で、外面は底部付近まで灰オリーブ色の灰釉を施す。見込には胎土目痕が1箇所に残る。

SX-3

調査区東部で検出した不整楕円形を呈するとみられる大型土坑で、底でSX-4を検出し、東は攪乱1に切られる。検出長3.00m、検出幅1.00m、深さ19cmを測り、埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、0.1~0.2cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点、土師器片1点、陶器片



遺構埋土

1. 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、0.2cm大のマンガンを含む(P-41)
2. 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、0.2cm大のマンガンと炭化物を含む(SK-23埋土1)
3. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(SK-23埋土2)
4. におい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(SK-23埋土3)
5. 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2cm大のマンガンを多く含み、炭化物を含む(土坑跡)
6. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルト(ピット)
7. 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(ピット)

図46 SK-23, P-41

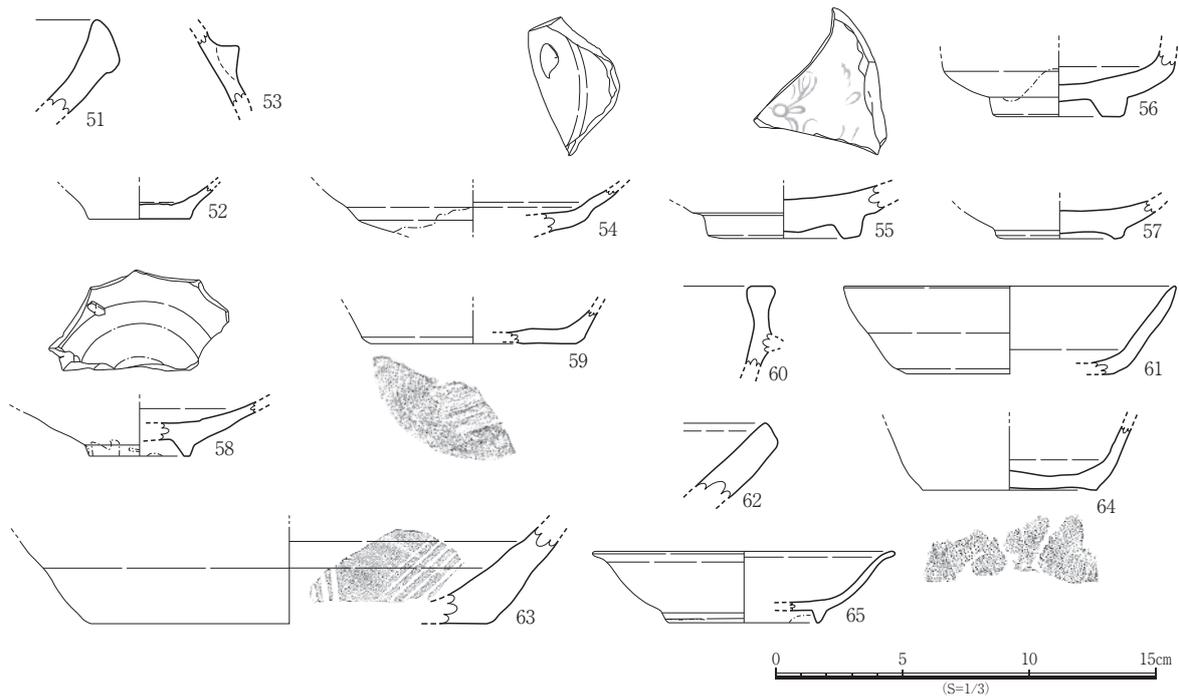


図47 SK-16・19, SD-7, SX-2・5, P-31・34・36~39出土遺物実測図

1点, 近世陶器3点(碗1, 皿1, 細片1)がみられたが, 図示できるものはなかった。

SX-4

SX-3の底で検出した楕円形を呈するとみられる大型土坑で, 東は攪乱1に切られる。検出長2.55m, 検出幅0.72m, 深さ35cmを測り, 埋土は黄灰色細粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片9点, 瓦器片1点, 近世磁器3点(碗1, 皿1, 細片1), 瓦片1点, 鉄釘1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SX-5(遺構: 図11・13・25, 遺物: 図47-55~58)

調査区南部で確認した落ち込み状の遺構で, A-2区からA-3区にかけて広がる。SK-37~40・45~48・63・66~72, SD-14などに切られる。検出長56.77m, 検出幅7.90m, A-2区では深さ32cm, A-3区では深さ72cmを測り, 基底面は調査区北側の遺構面より大きく下がる。A-2区では2層に分かれ, 上層が暗灰黄色粗粒砂質シルト, 下層が暗灰黄色中粒砂質シルトで, いずれもマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器14点(杯3, 小皿1, 細片10), 瓦器片1点, 備前焼片1点, 白磁碗1点, 青磁碗1点, 近世陶器9点(碗4, 皿3, 鉢1, 細片1), 近世磁器10点(碗1, 皿1, 猪口1, 瓶1, 細片6)がみられ, A-3区より出土した白磁碗(55), 近世陶器碗(56), 近世陶器皿(57), 近世磁器皿(58)を図示した。55は白磁碗で, 器壁が厚く, 断面が台形を呈する太い高台が付く。内面には陰刻による花文がみられ, 白磁釉を施す。釉には貫入が著しく入る。外面は回転ケズリ調整または削り出しで, 無釉である。56は唐津系灰釉陶器碗で, 断面が台形を呈する太い高台が付く。内面は無釉で, 体部外面の一部には灰釉が流れる。57は唐津系灰釉陶器皿で, 高台は低い。内面には濃緑色の灰釉を施し, 外面は回転ケズリ調整で無釉である。58は近世磁器皿で, 断面が台形を呈する高台が付く。内面から高台外面まで白磁釉を施し, 見込は蛇ノ目釉ハギをする。畳付と釉ハギした箇所には, 砂が付着する。

1. A区

e ピット

P-30(遺構:図10・43)

調査区北部で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、SX-2に切られ、北は調査区外へ続く。検出長0.75m、検出幅1.28m、深さ44cmを測り、埋土はオリーブ褐色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、陶器片1点、唐津系灰釉陶器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-31(遺物:図47-59)

P-30の南で検出した楕円形を呈するピットで、長径33cm、短径27cm、深さ7cmを測り、埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、0.1~0.2cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器杯(59)がみられた。59は土師質土器杯で、底径が大きく器壁が薄い。底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。体部は回転ナデ調整で、見込にナデ調整を加える。

P-32

調査区北西部で検出した円形を呈するピットで、径44cm、深さ32cm、柱痕径12cmを測る。埋土は掘方が暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを多く含み、柱痕が黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.2cm大のマンガンを含んでいた。掘方の出土遺物には土師質土器片1点、柱痕の出土遺物には土師質土器片1点と唐津系灰釉陶器砂目皿1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-33

P-32の南で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺79cm、短辺68cm、深さ28cm、柱痕径24cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片12点、近世陶器片1点、近世磁器皿1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-34(遺物:図47-60)

P-33の南で検出した楕円形を呈するピットで、SB-10とSK-22を切る。長径23cm、短径18cm、深さ10cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には図示した土師器釜(60)がみられた。60は土師器釜で、口縁端部は肥厚し、平坦な面を有する。罫は欠損し、口縁部の調整は横ナデ、体部は横方向のナデである。

P-35

P-34の南で検出した隅丸方形を呈するピットで、SK-22を切る。長辺80cm、短辺61cm、深さ14cm、柱痕径18cmを測る。埋土は掘方が暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含み、柱痕が黄灰色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器4点(杯1、細片3)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-36(遺物:図47-61・62)

P-35の南西で検出した隅丸方形を呈するピットで、SD-7の底で検出した。長辺1.84m、短辺0.46m、深さ19cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器5点(杯1、細片4)、土師器2点(甕1、細片1)、磁器片1点がみられ、土師質土器杯(61)と土師器甕(62)を図示した。61は土師質土器杯で、底径が大きく、器高が低いものである。底部の切り離しは回転糸切りで、体部は回転ナデ調整である。62は土師器甕で、

口縁端部を四角く収める。調整は横ナデまたは横方向のナデである。

P-37(遺物: 図47-63)

P-36の南で検出した楕円形を呈するピットで、SB-10を切る。長径56cm, 短径46cm, 深さ32cm, 柱痕径17cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点, 瓦質土器片2点, 備前焼播鉢1点, 陶器片1点がみられ, 備前焼播鉢(63)を図示した。63は備前焼播鉢である。回転ナデ調整で、底部外面は無調整である。内面には播目が残り、播目は摩耗する。

P-38(遺物: 図47-64)

P-37の北西で検出した楕円形を呈するピットで、SD-7を切る。長径43cm, 短径35cm, 深さ9cmを測る。埋土はオリブ褐色細粒砂質シルトで、0.1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器7点(杯1, 細片6)がみられ, 土師質土器杯(64)を図示した。64は土師質土器杯で、器壁が薄く、体部は上方へ立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りで、体部は回転ナデ調整である。

P-39(遺物: 図47-65)

P-38の北西で検出した隅丸方形を呈するピットで、SD-7を切る。長辺1.33m, 短辺0.32m, 深さ16cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と図示した白磁皿(65)がみられた。65は端反形の白磁皿で、断面が三角形の高台を有する。畳付を除き透明感のない白磁釉を施す。

P-40

調査区北西部で検出した楕円形を呈するピットで、SK-23に切られる。検出長16cm, 短径19cm, 深さ7cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には唐津系灰釉陶器皿1点がみられたが、図示できなかった。

P-41(遺構: 図46)

P-40の西で検出した隅丸方形を呈するとみられるピットで、SK-23を切る。検出長91cm, 検出幅55cm, 深さ23cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、0.2cm大のマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点, 土師器片1点, 唐津系灰釉陶器皿1点がみられたが、図示できるものはなかった。

f その他の遺構

A-2区では近代の大型土坑が検出されたため一部のみ調査を行い、出土した近世の遺物について図示した。

攪乱1(遺物: 図48-66)

調査区東端で検出した近代の大型土坑で、上部のみ調査を行った。SK-17・18, SX-3・4を切る。出土遺物には近世磁器鉢1点, 瓦3点(軒平瓦1, 平瓦1, 道具瓦1), 鉄釘4点がみられ, 近世磁器鉢(66)を図示した。66は近世磁器鉢で、蛇ノ目凹形高台を有する。口縁部は挟りを入れて輪花状をなし、端部は下方へ摘む。内面は崩れた四方襷文と丸に四方襷文と笹文, 外面は梅花文と渦巻き状の文様, 圏線, 高台は「×」文と圏線の染付がみられる。呉須は薄い青色に発色する。全面に透明釉を施し、高台内は中心部を除き釉ハギする。

攪乱2(遺物: 図48-67~70)

調査区北西隅で検出した近代の大型土坑で、上部のみ調査を行った。SK-23を切る。出土遺物

1. A区

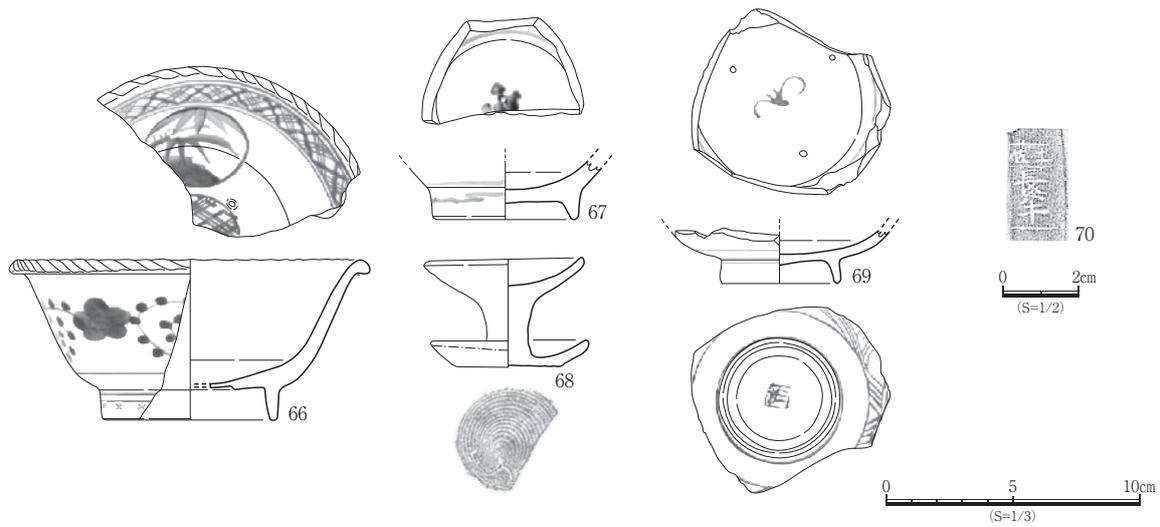


図48 攪乱1・2出土遺物実測図

には近世陶器2点(碗1, 台付灯明受皿1), 近世磁器碗1点, 瓦58点(軒平瓦2, 丸瓦2, 平瓦44, 棧瓦9, 道具瓦1), 鉄製品3点(釘2, 細片1)がみられ, 近世陶器碗(67)と近世陶器台付灯明受皿(68), 近世磁器碗(69), 平瓦(70)を図示した。67は近世陶器広東碗で, 瀬戸・美濃産の陶胎染付である。見込は五弁花文と圏線, 外面には圏線の染付がみられる。全面に白化粧土のち透明釉を施し, 畳付を釉ハギする。68は近世陶器台付灯明受皿で, 底部は回転糸切り調整で, 内面から底部付近まで鉄釉を施す。69は能茶山窯の近世磁器碗で, 見込は圏線と花文とみられる染付, 外面に圏線と染付の一部が残る。高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。全面に透明釉を施し, 畳付は釉ハギし, 見込にはピン痕が3箇所に残る。70は平瓦で, 凹面は横方向のナデ調整, 凸面は縦または横方向のナデ調整である。側面には, 方形枠内に「土佐長半」の刻印がみられる。

iii A-3区

a 塀・柵列跡

SA-1(遺構:図49)

調査区北部で検出した東西方向(N-81°-E)の塀または柵列跡で, 全長11.0m, 柱間寸法は1.20mまたは1.50m, 1.80m, 2.00mであった。柱穴は楕円形を呈し, 検出長17~45cm, 全幅15~39cm, 深さ7~18cm, 柱痕径は17cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトまたは暗灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器4点(杯1, 細片3), 近世陶器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SA-2(遺構:図50)

調査区南西部で検出した東西方向(N-79°-E)の塀または柵列跡で, 全長3.80m, 柱間寸法は1.20

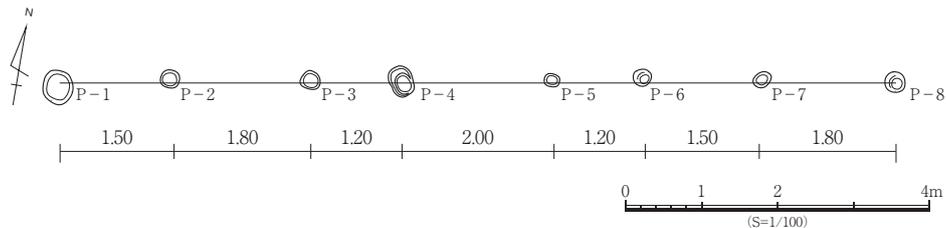


図49 SA-1

mまたは1.40mであった。柱穴は楕円形を呈し、全長17～32cm、全幅13～30cm、深さ4～11cm、柱痕径は14cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトまたは暗灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

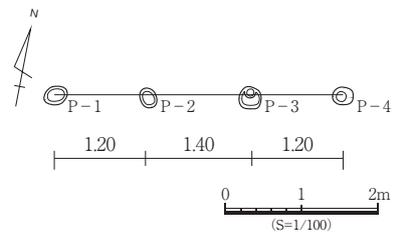


図50 SA-2

b 土坑跡

SK-24

調査区北東部で検出した隅丸方形を呈するとみられる土坑で、SD-8を切り、北と東は調査区外へ続く。検出長1.28m、短辺0.61m、深さ35cmを測り、埋土は褐色中粒砂質シルトで、0.5～1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には近世陶器片1点がみられたが、図示できなかつた。

SK-25

調査区南東部で検出した隅丸方形を呈するとみられる土坑で、SD-8に切られ、東は調査区外へ続く。検出長1.84m、検出幅0.25m、深さ21cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には銅製品煙管1点がみられたが、図示できなかつた。

SK-26(遺構：図51)

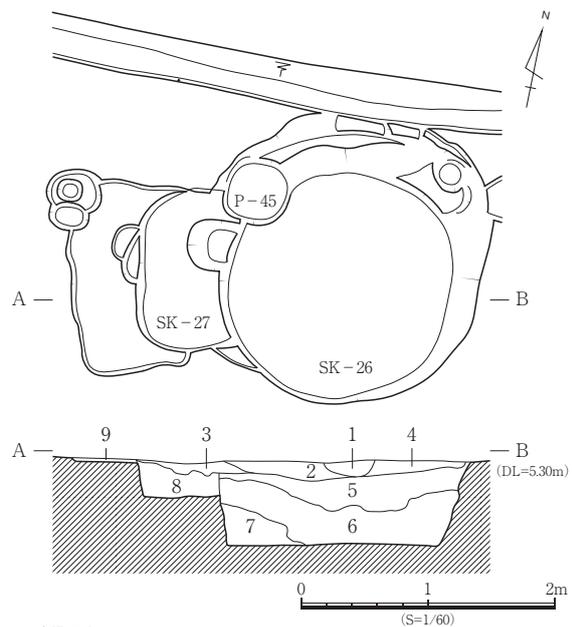
調査区北東部で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-27とP-45を切り、北は調査区外へ続く。検出長2.32m、検出幅2.24m、深さ78cmを測り、埋土は4層に分かれる。出土遺物には埋土1より土師質土器5点(小皿1、細片4)、近世磁器6点(碗1、皿2、細片3)、棧瓦2点、埋土2より近世陶器2点(色絵碗1、細片1)がみられたが、図示できるものはなかつた。

SK-27(遺構：図51)

SK-26の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-26に切られる。検出長1.26m、検出幅0.66m、深さ35cmを測り、埋土はオリブ褐色細粒砂質シルトで、ハンダを非常に多く含んでいた。出土遺物には瓦質土器片1点がみられたが、図示できなかつた。

SK-28(遺物：図52-71・72)

SK-27の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SX-6に切られる。長辺1.88m、検出幅0.84m、深さ15cmを測り、埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には備前焼播鉢1点、近世陶器皿1点、近世磁器皿1点、棧瓦1点、鉄釘1点がみられ、備前焼播鉢(71)と近世磁器皿(72)を図示した。



遺構埋土

1. 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(ピット)
2. オリブ褐色(25Y4/6)中粒砂質シルトで、暗褐色シルトブロックと0.5cm大の黄色礫を含む(土坑跡埋土1)
3. オリブ褐色(25Y4/6)中粒砂質シルトで、マンガンを少し含む(土坑跡埋土2)
4. 黄褐色(25Y5/3)粗粒砂質シルトで、ハンダを多く含む(SK-26埋土1)
5. オリブ褐色(25Y4/4)細粒砂質シルトで、暗褐色シルトブロックとハンダともに少し含む(SK-26埋土2)
6. にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルトで、ハンダを非常に多く含む(SK-26埋土3)
7. 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで、ハンダを多く含む(SK-26埋土4)
8. オリブ褐色(25Y4/6)細粒砂質シルトで、ハンダを非常に多く含む(SK-27)
9. 黄褐色(25Y5/3)細粒砂質シルトで、マンガンを多く含む(土坑跡)

図51 SK-26・27

1. A区

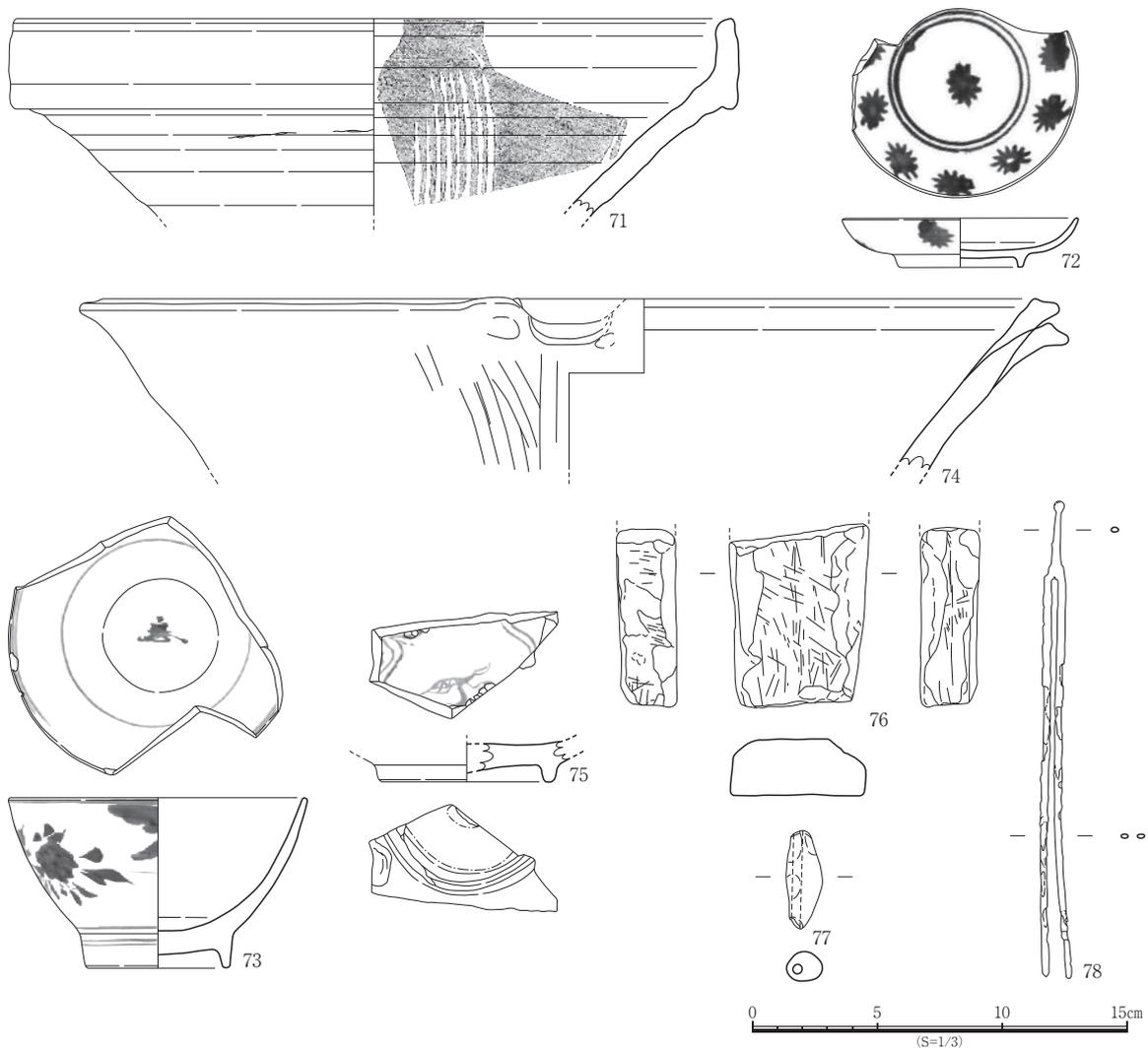


図52 SK-28・30~32・49・56出土遺物実測図

71は備前焼播鉢で、口縁部は直立し、下端は下方へ摘む。調整は回転ナデで、内面には8条単位の播目がみられる。口縁部外面には重ね焼痕が残る。72は近世磁器小皿で、器壁が薄い。見込には二重圏線、内外面に花文とみられる染付がみられる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。釉には貫入が入る。

SK-29(遺構: 図53)

調査区南東部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SX-6に切られる。長辺2.05m、短辺1.41m、深さ15cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫とハンダを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点、土師器火鉢2点、近世陶器2点(播鉢1、匣鉢1)、近世磁器碗2点、鉄釘1点がみられたが、図示できるものはなかった。

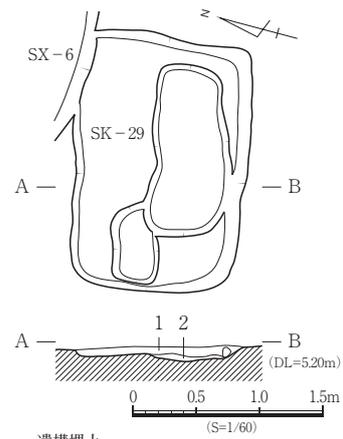
SK-30(遺物: 図52-73)

SK-29の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SX-5の底で検出した。P-44に切られる。長辺3.40m、短辺1.40m、深さ20cmを測り、埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と図示した近世磁器碗(73)がみられた。73は近世磁器広

東碗で、見込に「寿」字、内面に二重圏線、外面に花文と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施し、豊付は釉ハギする。

SK-31 (遺物: 図52-74・75)

調査区北部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、P-46を切る。検出長2.34m、検出幅1.27m、深さ1.01mを測り、埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトで、少量の黄色シルトブロックと5cm大の礫、0.5cm大の黄色礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器139点(杯13、細片126)、土師器釜1点、瓦器片2点、瓦質土器片3点、常滑焼片口鉢1点、陶器片1点、青磁4点(碗1、皿1、細片2)、近世陶器片5点、近世磁器片2点、土製品土錘1点、鉄滓1点がみられ、常滑焼片口鉢(74)と青磁碗(75)を図示した。74は常滑焼片口鉢で、口縁端部は外へ摘み出す。調整は回転ナデで、口縁部は横ナデ、内面は横方向のナデ、外面は縦方向のナデを加える。75は青磁碗で、径が大きく低い高台を有する。見込には陰刻の草花文がみられる。全面にオリブ灰色の青磁釉を施し、高台内は輪状に釉ハギする。



遺構埋土
1. 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫とハンダを含む(SK-29)
2. 黄褐色(25Y5/3)中粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を少し含む(ピット)

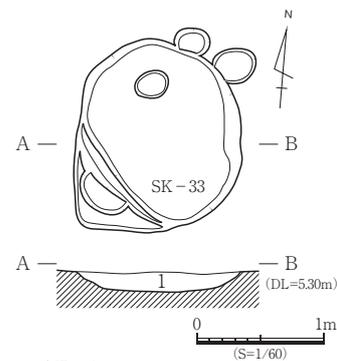
図53 SK-29

SK-32 (遺物: 図52-76)

SK-31の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、北は調査区外へ続く。検出長1.11m、短辺0.86m、深さ15cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師器片1点、須恵器片1点、平瓦1点、土製品人形1点、石製品砥石1点がみられ、石製品砥石(76)を図示した。76は石製品砥石で、残存部で3面に使用痕が残る。石材は砂岩である。

SK-33 (遺構: 図54)

SK-31の南東で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.48m、短径1.31m、深さ18cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(杯1、細片1)、瓦片1点がみられたが、図示できるものはなかった。



遺構埋土
1. 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含む

図54 SK-33

SK-34 (遺構: 図55)

SK-33の南西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-35に切られる。長辺1.30m、検出幅0.86m、深さ38cmを測り、埋土は2層に分かれ、いずれもハンダを含んでいた。出土遺物には陶器碗1点がみられたが、図示できなかった。

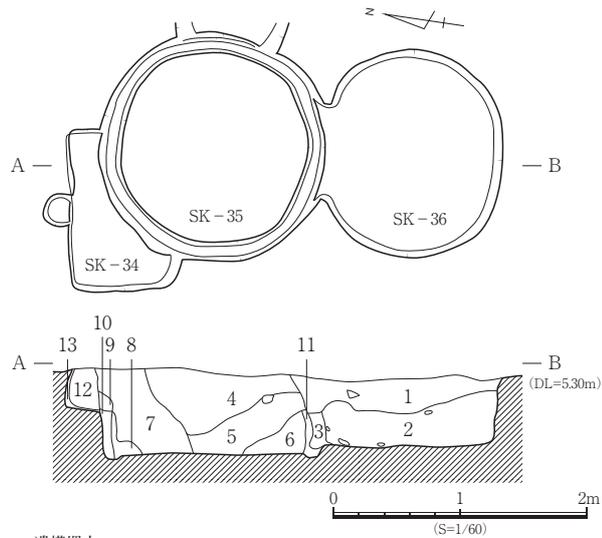
SK-35 (遺構: 図55)

SK-34の南で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-34を切り、SK-36に切られる。長径1.83m、検出幅1.80m、深さ74cmを測り、埋土は8層に分かれる。基底面には側壁に沿って、幅13~16cm、深さ2~7cmの溝が巡り、溝跡中心径は1.15~1.25mを測る。出土遺物には土師質土器15点(杯3、細片12)、陶器片1点、近世磁器2点(碗1、細片1)、平瓦2点、鉄釘1点がみられたが、図示できるものはなかった。

1. A区

SK-36(遺構:図55)

SK-35の南で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-35を切る。長径1.63m、検出幅1.48m、深さ64cmを測り、埋土は3層に分かれる。出土遺物には土師質土器15点(杯3、細片12)がみられたが、図示できるものはなかった。



遺構埋土

1. オリーブ褐色(25Y4/3)中粒砂質シルトで、2~5cm大の礫を多く含む(SK-36埋土1)
2. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、3~10cm大の礫を含む(SK-36埋土2)
3. 黄褐色(25Y5/3)中粒砂質シルトで、粗粒砂とハンダを含む(SK-36埋土3)
4. 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで、3cm大の礫を多く含む、5~10cm大の礫を少し含む(SK-35埋土1)
5. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、3cm大の礫を少し含む(SK-35埋土2)
6. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂で、1~3cm大の礫を含む(SK-35埋土3)
7. 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で、3~5cm大の礫を含む(SK-35埋土4)
8. にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂質シルトで、縮まる(SK-35埋土5)
9. 黄褐色(25Y5/4)中粒砂質シルトで、ハンダを含む(SK-35埋土6)
10. 暗灰黄色(25Y5/2)細粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含む(SK-35埋土7)
11. 黄灰色(25Y5/1)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を多く含む(SK-35埋土8)
12. にぶい黄色(25Y6/3)中粒砂質シルトで、ハンダを少し含む(SK-34埋土1)
13. 橙色(7.5YR6/6)シルト質粗粒砂で、ハンダを含む(SK-34埋土2)

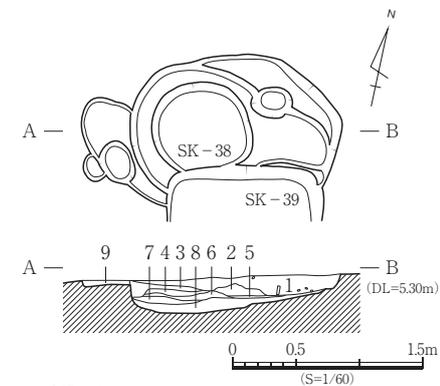
図55 SK-34~36

SK-37

調査区南部で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で、SK-38・39とSX-7に切られる。検出長1.75m、検出幅0.62m、深さ7cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には備前焼小皿1点がみられたが、図示できなかった。

SK-38(遺構:図56)

SK-37の西で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-37とSX-7を切り、SK-39に切られる。長径1.68m、検出幅0.91m、深さ27cmを測り、基底面は西部がピット状に深くなる。埋土は8層に分かれ、埋土6・7は被熱し非常に固く締まっていた。側壁も被熱しており、簡易な焼成窯の可能性はある。出土遺物には土師質土器片1点と平瓦4点がみられたが、図示できるものはなかった。



遺構埋土

1. オリーブ褐色(25Y4/4)細粒砂質シルトで、焼土と炭化物を含む(SK-38埋土1)
2. 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで、焼土を多く含む、炭化物を含む(SK-38埋土2)
3. 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで、焼土を非常に多く含む(SK-38埋土3)
4. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂で、非常に固く縮まる(SK-38埋土4)
5. 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで、焼土を含み、炭化物を多く含む(SK-38埋土5)
6. 褐色(7.5YR4/6)中粒砂で、焼土を含み、非常に固く縮まる(SK-38埋土6)
7. 赤褐色(5YR4/6)粗粒砂で、焼土を含み、非常に固く縮まる(SK-38埋土7)
8. 赤褐色(5YR4/6)細粒砂質シルトで、上部に焼土を含む(SK-38埋土8)
9. 赤褐色(5YR4/6)細粒砂質シルト(ピット)

図56 SK-38

SK-39

SK-38の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-37・38とSD-14を切る。長辺1.71m、短辺1.21m、深さ48cmを測り、埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色礫を多く含み、0.5~1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点、陶器片1点、近世磁器3点(紅皿1、細片2)、平瓦1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-40(遺構:図57)

SK-39の東で検出した隅丸方形を呈する土坑で、南は調査区外へ続く。検出長1.65m、検出幅0.40m、深さ55cmを測り、埋土は3層に分かれ、側面と底面には厚さ5cmのハンダがみられた。出土遺物は皆無であった。

SK-41(遺構:図58)

調査区北部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、P-52

を切り、P-51に切られる。長辺1.61m、短辺1.12m、深さ51cmを測り、埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器片3点、近世磁器皿1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-42

調査区中央部で検出した不整楕円形を呈する土坑で、SX-8に切られる。検出長1.81m、検出幅1.11m、深さ10cmを測り、埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-43

SK-42の北西で検出した溝状を呈する土坑で、SX-9に切られる。検出長4.27m、検出幅0.48m、深さ9cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(杯1、細片1)がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-44

SK-43の南東で検出した楕円形を呈する土坑である。長径2.03m、短径1.57m、深さ11cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-45

調査区南部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SX-5を切る。長辺1.53m、短辺0.75m、深さ16cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと少量の0.5cm大の礫、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、土師器片1点、近世陶器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-46

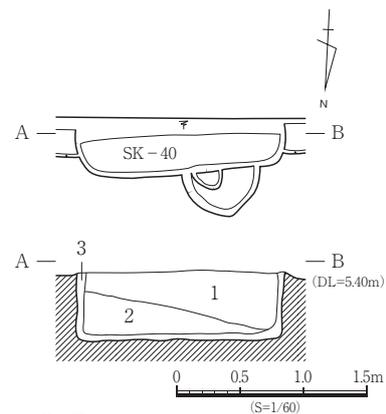
SK-45の南で検出した隅丸方形を呈するとみられる土坑で、南は調査区外へ続く。検出長1.16m、検出幅0.61m、深さ45cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-47

SK-45の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SX-5を切る。長辺1.12m、短辺1.11m、深さ6cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器12点(杯1、細片11)がみられたが、図示できるものはなかった。

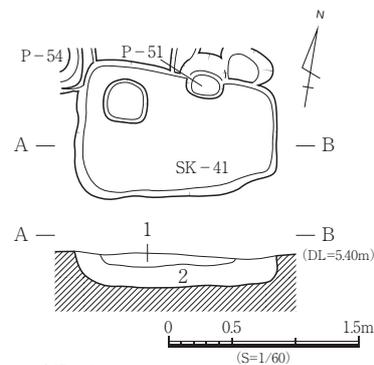
SK-48

SK-47の西で検出した不整楕円形を呈するとみられる土坑で、SX-5を切る。検出長1.03m、検出幅0.69m、深さ9cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。



遺構埋土
 1. 褐色(2.5Y4/6)極粗粒砂質礫で、1~20cm大の角礫を非常に多く含む
 2. 暗褐色(10YR3/3)極粗粒砂質礫で、1~8cm大の角礫を非常に多く含む
 3. 明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂質シルト(ハンダ)

図57 SK-40



遺構埋土
 1. 灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂質シルトで、酸化鉄を多く含む
 2. 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、マンガンを含み、炭化物を少し含む

図58 SK-41

1. A区

SK-49(遺物:図52-77)

調査区西部で検出した溝状を呈する土坑で、SD-17に切られる。全長2.24m、検出幅0.34m、深さ30cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と、図示した土製品土錘(77)がみられた。77は土製品土錘で、紡錘形を呈する。著しく摩耗するため調整は不明である。

SK-50

SK-49の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SD-17とP-57を切り、P-56に切られる。長辺1.33m、短辺0.90m、深さ24cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片9点、東播系須恵器片口鉢1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-51

SK-50の南で検出した溝状を呈する土坑で、攪乱6に切られる。検出長2.71m、全幅0.60m、深さ11cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-52(遺構:図59)

調査区北西部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-54~56を切り、SK-53に切られる。長辺1.20m、短辺0.74m、深さ12cmを測り、埋土はオリブ褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、近世陶器4点(皿1, 細片3), 平瓦1点, 鉄製品1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-53(遺構:図59)

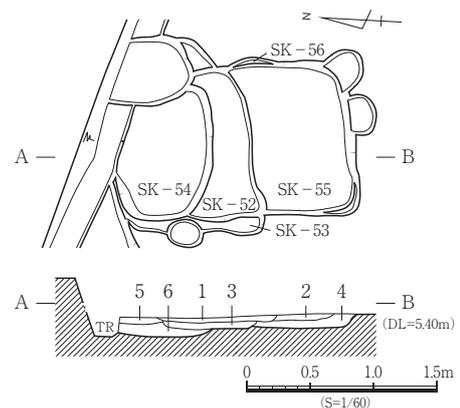
SK-52の西で検出した不整形を呈する土坑で、SK-52・54~56を切り、北は調査区外へ続く。全長1.59m、検出幅1.10m、深さ5cmを測り、埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器12点(杯1, 皿1, 細片10), 瓦器片1点, 鉄釘8点, 鉄滓5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-54(遺構:図59)

SK-53の東で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-52・53に切られる。長径1.07m、検出幅0.76m、深さ15cmを測り、埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器片1点、近世磁器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-55(遺構:図59)

SK-54の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-52・53・56に切られる。長辺1.21m、検出幅0.90m、深さ8cmを測り、埋土はオリブ褐色細粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、近世陶器片2点、近世磁器片1点、平瓦1点、



- 遺構埋土
1. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで、炭化物を多く含む(SK-53)
 2. 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、マンガンを多く含む(SK-56)
 3. オリブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、炭化物を多く含む(SK-52)
 4. オリブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と炭化物を少し含む(SK-55)
 5. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を含む(SK-54埋土1)
 6. 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと1cm大の黄色礫・ハンダを含む(SK-54埋土2)

図59 SK-52~56

銅製品1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-56(遺構：図59，遺物：図52-78)

SK-54の東で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-55を切り、SK-52・53に切られる。長辺1.19m，検出幅1.05m，深さ5cmを測り、埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点，近世陶器片1点，鉄製品1点，金属製品簪1点がみられ、金属製品簪(78)を図示した。78は銅製の簪で、完存する。身部は薄く断面が方形を呈し、上端は耳搔きとなっており、平たく、反り返る。錆化する。

SK-57

SK-53の北西で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で、検出長1.51m，検出幅0.35m，深さ40cmを測り、埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点，近世磁器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-58(遺物：図60-79・80)

SK-57の南で検出した不整楕円形を呈する土坑で、SK-59に切られる。長径2.21m，検出幅1.35m，深さ39cmを測り、埋土は上層が黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、8cm大の礫を含んでいた。下層は褐色粗粒砂質シルトで、8cm大の礫と0.5cm大の橙色礫を含んでいた。出土遺物には上層より土師質土器片6点，瓦器片1点，近世磁器片2点，瓦19点(軒丸瓦1，平瓦15，棧瓦3)，鉄釘2点，下層より瓦11点(平瓦6，棧瓦5)がみられ、平瓦(79・80)を図示した。79・80は平瓦で、79は下層，80は上層より出土した。79は凹面が縦方向のナデ調整，凸面が縦または横方向のナデ調整でキラ粉が付着する。側面には、方形枠内に「アキ□」の刻印がみられる。80は凹面が横方向のナデ調整，凸面が縦または横方向のナデ調整である。側面には、方形枠内に「仁ノ源」の刻印がみられる。

SK-59

SK-58の西で検出した不整形を呈する土坑で、SK-58とP-62を切る。長辺1.46m，短辺0.95m，深さ28cmを測り、埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、灰色シルトブロックを多く含み、1~3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(小皿1，細片1)，瓦器片1点，近世陶器2点(碗1，細片1)，近世磁器2点(瓶1，細片1)，瓦15点(平瓦12，棧瓦3)がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-60

SK-59の南で検出した不整楕円形を呈する土坑で、底でP-64を検出した。検出長1.98m，短径1.53m，深さ8cmを測り、埋土は褐色中粒砂質シルトで、3cm大の礫とハンダ，炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器13点(杯1，細片12)，近世陶器碗1点，平瓦片4点，石製品

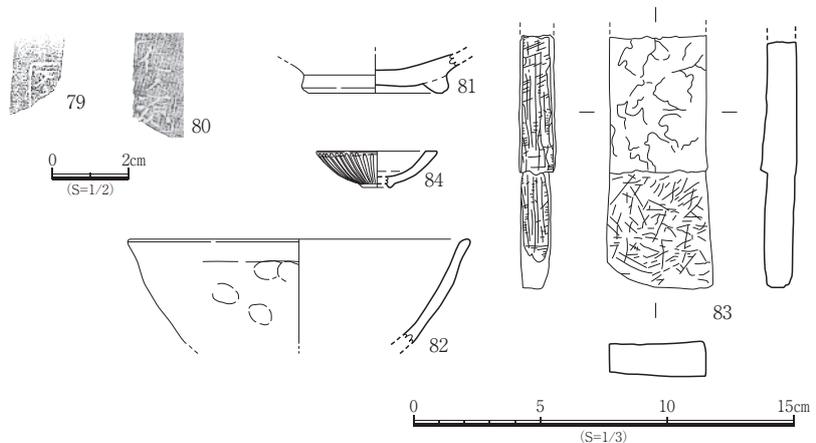


図60 SK-58・62・63出土遺物実測図

1. A区

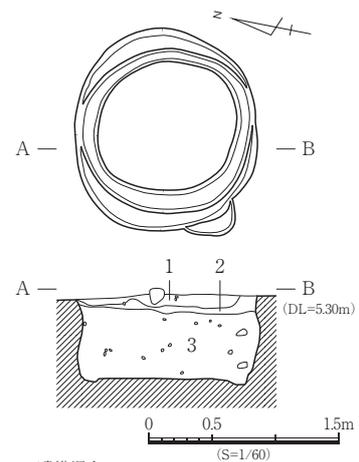
砥石1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-61

調査区西部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、長辺1.48m、短辺0.79m、深さ5cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-62(遺構：図61、遺物：図60-81~83)

SK-61の南で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.63m、短径1.46m、深さ70cmを測る。基底面には幅10~20cm、深さ7~10cmを測る溝が巡り、溝跡中心径は1.15~1.25mを測る。埋土は3層に分かれる。出土遺物には上層より土師質土器48点(杯2、椀2、小皿1、細片43)、土師器片2点、瓦器椀1点、東播系須恵器片1点、近世陶器片3点、近世磁器小杯1点、最下層より土師質土器片9点、瓦器片1点、東播系須恵器片1点、石製品砥石1点がみられ、上層より出土した土師質土器椀(81)と瓦器椀(82)、最下層より出土した石製品砥石(83)を図示した。81は土師質土器椀で、断面が半円形を呈する輪高台を貼付する。見込を指圧により外へ押し出している。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。82は瓦器椀で、内面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整、外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。ミガキは認められない。83は石製品砥石で、隣接するSK-63より出土した砥石と接合した。割れた状態で使用していたとみられ、それぞれ厚さが異なる。上部がSK-62より出土、下部がSK-63より出土した。残存部で4面に使用痕がみられ、片面はSK-63出土部分のみ使用痕がみられた。石材は粘板岩とみられる。



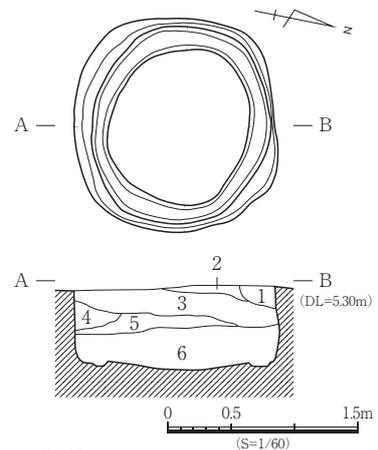
遺構埋土

1. オリーブ褐色(25Y4/6)中粒砂質シルトで、15cm大の礫を含む
2. 黄褐色(25Y5/4)中粒砂質シルトで、マンガンを含む
3. オリーブ褐色(25Y4/6)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、5cm大の礫を含む

図61 SK-62

SK-63(遺構：図62、遺物：図60-84)

SK-62の南で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.70m、短径1.56m、深さ70cmを測る。基底面には幅13~20cm、深さ4~9cmを測る溝が巡り、溝跡中心径は1.35~1.40mを測る。埋土は6層に分かれる。出土遺物には上層より土師質土器20点(杯2、細片18)、土師器片1点、備前焼播鉢1点、近世陶器片5点、近世磁器2点(紅皿1、細片1)、平瓦1点、埋土5より土師質土器片1点、棧瓦1点、埋土6より土師質土器10点(杯1、細片9)、近世陶器片1点がみられ、上層より出土した近世磁器紅皿(84)を図示した。84は肥前産の近世磁器紅皿である。型押成形で、底部には小さな高台が付く。外面は型による貝殻状の文様がみられる。内面から口縁部外面に白磁釉を施し、体部外面は無釉である。



遺構埋土

1. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を少し含む
2. オリーブ褐色(25Y4/6)中粒砂質シルト
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトで、5cm大の礫と炭化物を含む
4. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を含む
5. オリーブ褐色(25Y4/4)中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫と炭化物を少し含む
6. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、2cm大の礫を少し含む

図62 SK-63

SK-64

SK-62の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SX-11に

切られる。検出長1.87m, 短辺1.38m, 深さ7cmを測り, 埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 0.5cm大の礫を少し含み, マンガンを多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-65(遺構: 図13)

SK-64の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-66を切り, 西は調査区外へ続く。長辺1.30m, 検出幅0.80m, 深さ27cmを測り, 埋土は2層に分かれる。出土遺物には近世磁器片1点と粘土塊1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-66(遺構: 図13)

SK-65の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-65・67に切られ, 西は調査区外へ続く。検出長1.72m, 検出幅1.10m, 深さ23cmを測り, 埋土は黄褐色細粒砂質シルトで, マンガンと少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点, 瓦質土器片1点, 近世磁器4点(碗1, 細片3)がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-67(遺構: 図13, 遺物: 図63-85~89)

SK-66の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-66を切る。検出長2.80m, 検出幅1.51m, 深さ45cmを測り, 埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器19点(小皿2, 細片17), 備前焼播鉢3点, 常滑焼片2点, 陶器片1点, 青磁2点(碗1, 細片1), 近世陶器20点(碗4, 皿6, 播鉢3, 瓶1, 甕1, 火入1, 細片4), 近世磁器22点(皿3, 小杯1, 猪口2, 瓶1, 細片15)がみられ, 備前焼播鉢(85)と青磁碗(86), 近世陶器皿(87), 近世陶器甕(88), 近世陶器火入(89)を図示した。

85は備前焼播鉢で, 口縁部はやや外傾し上端は細く摘み上げ, 下端は外へ摘み出す。回転ナデ調整で, 内面には播目がみられる。86は青磁碗で, 高台は径が小さく直立する。見込にはスタンプによる印字文, 外面にはヘラ描の細蓮弁文がみられる。全面に青磁釉を施し, 高台内は輪状に釉ハギする。見込には目痕が残る。87は近世陶器皿で, 断面が方形を呈する太い高台が付く。内面から外面高台付近まで銅緑釉を施す。88は近世陶器甕で, 口縁部は大きく肥厚し, 端部は水平な面を持ち, 凹線状の浅い溝が巡る。回転ナデ調整で, 内面から口縁端部は錆釉, 外面には灰釉を施す。丹波産とみられる。89は近世陶器火入で, 口縁部は直立し, 端部を丸く収める。外面には山水風景文とみ

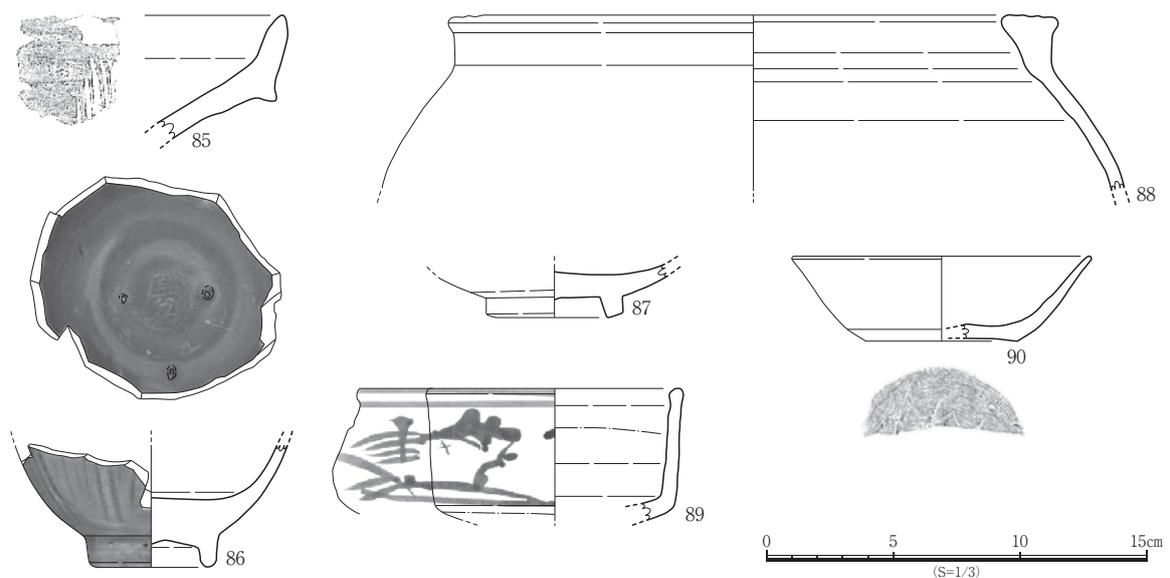


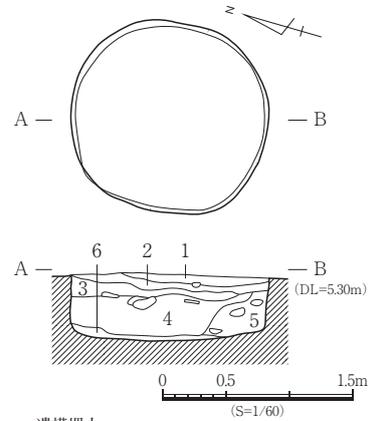
図63 SK-67・72出土遺物実測図

1. A区

られる文様と圏線の染付がみられる。陶胎染付で、口縁部内面から外面には白化粧土を施した後、透明釉を掛ける。体部内面は回転ナデ調整で、無釉である。

SK-68

調査区南部で検出した溝状を呈する土坑で、SX-5を切り、東は調査区外へ続く。検出長3.44m、検出幅0.82m、深さ5cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、近世陶器片1点、近世磁器2点(小杯1、細片1)がみられたが、図示できるものはなかった。



SK-69(遺構:図64)

SK-68の南西で検出した円形を呈する土坑で、径1.56m、深さ50cmを測る。埋土は6層に分かれ、ハンダを含み、埋土5には多く含まれていた。出土遺物には須恵器片1点、近世陶器6点(鉢1、細片5)、近世磁器瓶1点、瓦17点(平瓦15、棧瓦2)がみられたが、図示できるものはなかった。

- 遺構埋土
1. にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルトで0.5cm大の黄色礫とハンダを含む
 2. 黄灰色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫と5cm大の礫、ハンダを含む
 3. 灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルトで、3cm大の礫を含み、ハンダを少し含む
 4. 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、瓦とハンダを含む
 5. 灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルトで、ハンダを多く含み、炭化物を含む
 6. 橙色(7.5YR6/6)シルト質粗粒砂で、ハンダを含む

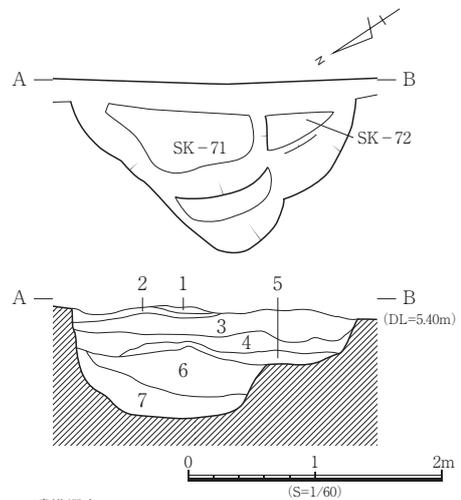
図64 SK-69

SK-70

SK-69の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-71に切られる。検出長2.33m、短辺1.17m、深さ12cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点、須恵器片1点、近世陶器皿1点、近世磁器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-71(遺構:図65)

SK-70の南で検出した隅丸方形を呈するとみられる土坑で、SK-70を切り、SK-72に切られる。検出長1.06m、検出幅0.70m、深さ30cmを測り、埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器片7点、土師器片3点、東播系須恵器片口鉢1点、近世磁器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。



SK-72(遺構:図65 遺物:図63-90)

調査区南西隅で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、SK-71を切る。検出長2.22m、検出幅0.72m、深さ41cmを測る。埋土は5層に分かれる。出土遺物には土師質土器18点(杯4、細片14)、青磁片1点、近世陶器片1点、粘土塊2点がみられ、土師質土器杯(90)を図示した。90は土師質土器杯で、口縁部は外上方へ大きく開く。底部の切り離しは回転糸切りで、体部は回転ナデ調整で、外面の下部は回転ケズリ調整を加える。

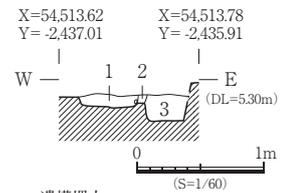
- 遺構埋土
1. オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルトで、極粗粒砂を含む(SK-72埋土1)
 2. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルトで、極粗粒砂と1cm大の黄色礫を含む(SK-72埋土2)
 3. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、1~3cm大の黄色礫を多く含む(SK-72埋土3)
 4. 黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトで、極粗粒砂・炭化物・漆喰・3cm大の黄色礫を含む(SK-72埋土4)
 5. にぶい黄褐色(10YR6/4)粘土質シルトで、0.5cm大の黄色礫と炭化物を含む(SK-72埋土5)
 6. 暗褐色(10YR3/3)中粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫・黄色シルトブロック・炭化物を含む(SK-71埋土1)
 7. 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂質シルトで、1cm大の礫・黄色シルトブロック・漆喰を含む(SK-71埋土2)

図65 SK-71・72

c 溝跡

SD-8(遺構: 図66)

調査区東部で検出した南北方向の溝跡で、SK-25とSD-9を切り、SK-24とSD-10・11に切られ、北は調査区外へ続く。検出長11.30m、検出幅0.55m、深さ17cmを測り、基底面は北(5.033m)から南(5.019m)へ僅かに傾斜する。断面はU字形を呈し、埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、灰褐色シルトブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点と唐津系灰釉陶器皿1点がみられたが、図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. オリーブ褐色(25Y4/6)極粗粒砂で、1~10cm大の角礫を多く含む(SD-10)
 2. 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、灰褐色シルトブロックとマンガンを含む(SD-8)
 3. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、マンガンを多く含む(SD-9)

図66 SD-8~10

SD-9(遺構: 図66)

SD-8の東で検出した南北方向の溝跡で、SD-8に切られる。検出長11.04m、検出幅0.31m、深さ21cmを測り、基底面は南(5.135m)から北(4.954m)へ傾斜する。断面は台形を呈し、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点、近世陶器片1点、近世磁器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-10(遺構: 図66)

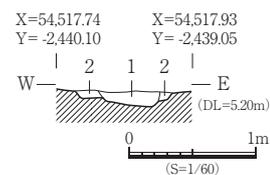
SD-9の西で検出した南北方向の溝跡で、SD-8を切り、SD-11に切られる。検出長5.77m、検出幅0.48m、深さ17cmを測り、基底面は南(5.094m)から北(5.028m)へ傾斜する。断面は台形を呈し、埋土はオリーブ褐色極粗粒砂で、1~10cm大の角礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点、近世磁器皿1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-11

SD-10の南で検出した南北方向の溝跡で、SD-8・10を切り、南は調査区外へ続く。検出長3.11m、検出幅0.36m、深さ8cmを測り、基底面は南(5.078m)から北(5.045m)へ傾斜する。断面は台形を呈し、埋土は褐色中粒砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD-12(遺構: 図67)

SD-10の西で検出した南北方向の溝跡で、SD-13を切り、攪乱3に切られ、北と南は調査区外へ続く。検出長9.13m、検出幅0.56m、深さ14cmを測り、基底面は北(5.116m)から南(5.065m)へ傾斜する。断面は台形を呈し、埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点、近世陶器4点(皿2、細片2)、棧瓦1点がみられたが、図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、マンガンを多く含む(SD-12)
 2. 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、炭化物を少し含む(SD-13)

図67 SD-12・13

SD-13(遺構: 図67)

SD-12の西で検出した南北方向の溝跡で、SD-12に切られ、北は調査区外へ続く。検出長2.81m、検出幅0.90m、深さ7cmを測り、基底面は北(5.172m)から南(5.133m)へ傾斜する。断面は台形を呈し、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトで、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、平瓦1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-14

調査区南東部で検出した東西方向の溝跡で、SX-5を切り、SK-39に切られる。検出長4.61m、

1. A区

検出幅0.83m, 深さ7cmを測り, 基底面は東(5.051m)から西(4.998m)へ傾斜する。断面は台形を呈し, 埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 0.5cm大の礫を少し含み, マンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD-15

調査区北部で検出した東西方向の溝跡で, SD-16に切られる。検出長2.96m, 検出幅0.44m, 深さ7cmを測り, 基底面は東(5.208m)から西(5.175m)へ傾斜する。断面は台形を呈し, 埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 0.5cm大の礫を少し含み, マンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD-16

SD-15の西で検出した東西方向の溝跡で, SD-15を切り, 攪乱6に切られる。検出長3.97m, 検出幅0.47m, 深さ18cmを測り, 基底面は東(5.149m)から西(5.059m)へ傾斜する。断面は台形を呈し, 埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 0.5cm大の礫を少し含み, マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点, 備前焼播鉢1点, 陶器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD-17

SD-16の南で検出した東西方向の溝跡で, SK-49とP-52を切り, SK-50と攪乱6に切られる。検出長9.83m, 検出幅0.72m, 深さ17cmを測り, 基底面は東(5.118m)から西(5.080m)へ傾斜する。断面は台形を呈し, 埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 0.5cm大の礫を少し含み, マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点, 近世陶器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

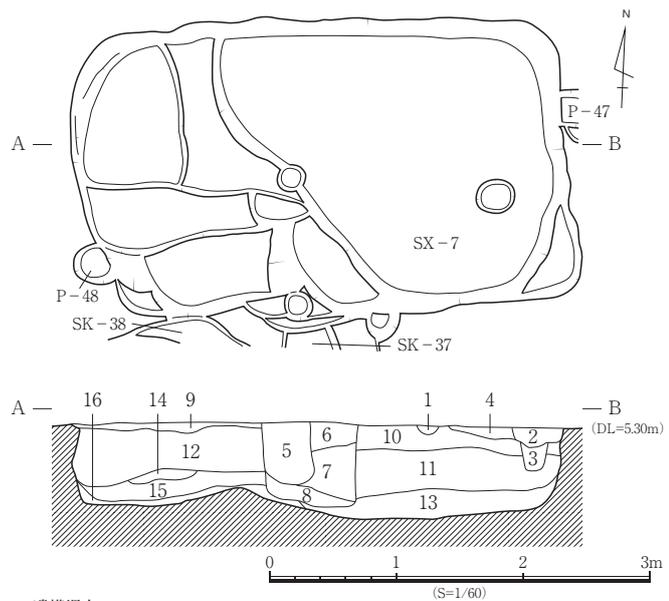
d 大型土坑跡

SX-6

調査区東部で検出した隅丸方形を呈する大型土坑で, SK-28・29を切る。長辺2.61m, 短辺1.67m, 深さ24cmを測り, 埋土は褐色シルト質粗粒砂で, 灰色シルトブロックと5~15cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には瓦14点(平瓦13, 棧瓦1)がみられたが, 図示できるものはなかった。

SX-7(遺構:図68, 遺物:図72-91~93)

SX-6の南西で検出した隅丸方形を呈する大型土坑で, SK-37を切り, SK-38とP-47・48に切られる。長辺3.91m, 短辺2.34m, 深さ79cmを測り, 埋土は8層に分かれる。出土遺物には埋土1より土師質土器片14点, 備前焼7点(甕1, 小皿1, 細片5), 常滑焼2点(甕1,



遺構埋土

1. にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルトで, ハンダを含む(ビット)
2. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで, 炭化物とハンダを含む(ビット)
3. にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと0.5cm大の黄色礫を含む(ビット)
4. にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルトで, ハンダを含む(ビット)
5. にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルトで, 1cm大の黄色礫と炭化物を含む(ビット)
6. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, 2cm大の黄色礫を僅かに含む(ビット)
7. オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルトで, 黄色礫を少し含む(ビット)
8. にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルト(ビット)
9. 灰黄褐色(10YR6/2)粗粒砂質シルトで, ハンダと0.5cm大の黄色礫を含む(SX-7埋土1)
10. にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルトで, 灰褐色シルトブロックを含む(SX-7埋土2)
11. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, 灰褐色シルトブロックを含む(SX-7埋土3)
12. にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルト(SX-7埋土4)
13. 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと炭化物を含み, 3cm大の礫を僅かに含む(SX-7埋土5)
14. 褐灰色(10YR6/1)シルト質粗粒砂で, 1cm大の礫を多く含む(SX-7埋土6)
15. 黄褐色(10YR5/6)中粒砂質シルトで, 3cm大の礫を僅かに含む(SX-7埋土7)
16. 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで, マンガンを含む(SX-7埋土8)

図68 SX-7

細片1), 青磁3点(碗2, 皿1), 近世陶器3点(碗2, 細片1), 近世磁器碗1点, 平瓦1点, 埋土2より備前焼甕1点, 埋土3より常滑焼甕1点, 埋土5より近世陶器碗1点, 近世磁器碗1点, 埋土7より近世磁器2点(碗1, 細片1), 平瓦1点が見られ, 埋土1より出土した備前焼甕(91)と青磁碗(92), 埋土2より出土した備前焼甕(93)を図示した。91は備前焼甕で, 口縁部は折り返して断面が方形となる。調整は回転ナデである。92は青磁碗で, 器壁が厚く口縁部は外反する。内面には陰刻による草花文, 外面には片彫による蓮弁文がみられる。全面に暗オリーブ色の青磁釉を厚く施す。93は備前焼甕である。口縁部の接合箇所を剥離する。調整は回転ナデである。

SX-8(遺構: 図69, 遺物: 図72-94)

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する大型土坑で, SK-42を切る。長辺3.07m, 検出幅2.06m, 深さ21cmを測り, 埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 1cm大の黄色礫を少し含み, マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器13点(杯2, 細片11), 瓦2点(丸瓦1, 平瓦1)が見られ, 土師質土器杯(94)を図示した。94は土師質土器杯で, 二重高台を有する。著しく摩耗するため調整は不明である。

SX-9(遺構: 図70)

SX-8の西で検出した隅丸方形を呈する大型土坑で, SK-43とSX-10を切り, P-55に切られる。長辺3.30m, 短辺2.28m, 深さ25cmを測り, 埋土は黄褐色細粒砂質シルトで, 上部にマンガンの堆積がみられた。出土遺物には土師質土器片7点, 近世陶器片3点, 近世磁器6点(瓶1, 細片5)が見られたが, 図示できるものはなかった。

SX-10

SX-9の東で検出した隅丸方形を呈する大型土坑で, SX-9に切られる。長辺2.12m, 検出幅1.39m, 深さ21cmを測り, 埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 0.5cm大の礫を少し含み, マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点が見られたが, 図示できなかった。

SX-11(遺構: 図71, 遺物: 図72-95・96)

調査区西部で検出した隅丸方形を呈する大型土坑で, SK-64を切り, 攪乱6に切られる。長辺3.85m, 検出幅2.53m, 深さ56cmを測り, 埋土は3層に分かれる。出土遺物には埋土1より土師質土器24点(杯1, 小皿3, 細片20), 須恵器片1点, 東播系須

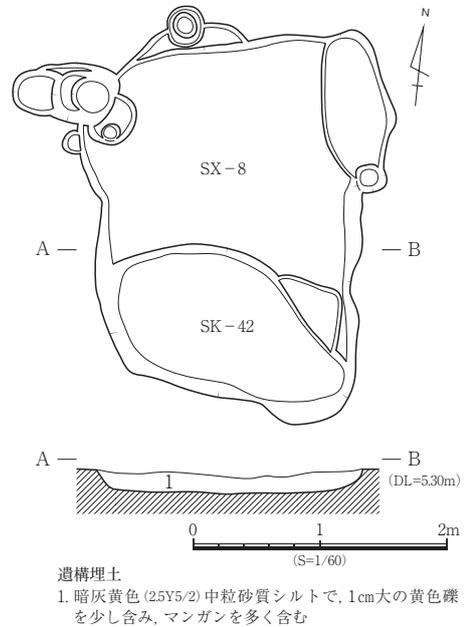


図69 SX-8

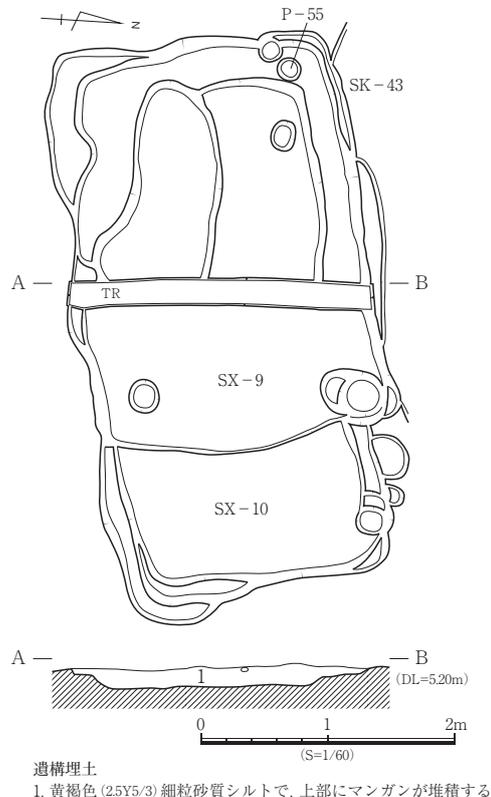


図70 SX-9

1. A区

恵器2点(片口鉢1, 細片1), 瓦質土器鍋1点, 陶器片1点, 青磁碗2点, 近世陶器38点(碗11, 皿2, 鉢1, 播鉢2, 甕2, 細片20), 近世磁器22点(碗2, 蓋1, 小杯1, 瓶4, 火入1, 細片13), 鉄釘1点, 鉄滓1点, 埋土3より土師質土器片1点, 陶器片2点, 近世陶器4点(碗2, 細片2), 近世磁器3点(碗1, 蓋物1, 細片1)がみられ, 埋土1より出土した東播系須恵器片口鉢(95)と近世陶器皿(96)を図示した。95は東播系須恵器片口鉢で, 口縁部は肥厚し, 下端は段を有する。調整は回転ナデで, 内面は摩耗するため調整は不明である。96は近世陶器中皿で, 高台は高く断面が三角形を呈する。内面には白化粧土による刷毛目文がみられ, 内面から体部外面には灰釉とみられる釉を施し, 見込は蛇ノ目釉ハギする。釉は透明感がなく白く濁り, 釉ハギした箇所には細かい砂が付着する。外面体部下半から高台内にかけては, 削り出しで無釉である。

e ピット

P-42

調査区南東部で検出した楕円形を呈するピットで, P-43に切られる。長径68cm, 短径58cm, 深さ27cm, 柱痕径11cmを測る。埋土は掘方が暗灰黄色中粒砂質シルトで, 0.5cm大の礫を少し含み, マンガンを含んでいた。柱痕の埋土は, にぶい黄褐色細粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと0.5cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物には掘方より近世磁器片1点, 柱痕より軒丸瓦1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-43

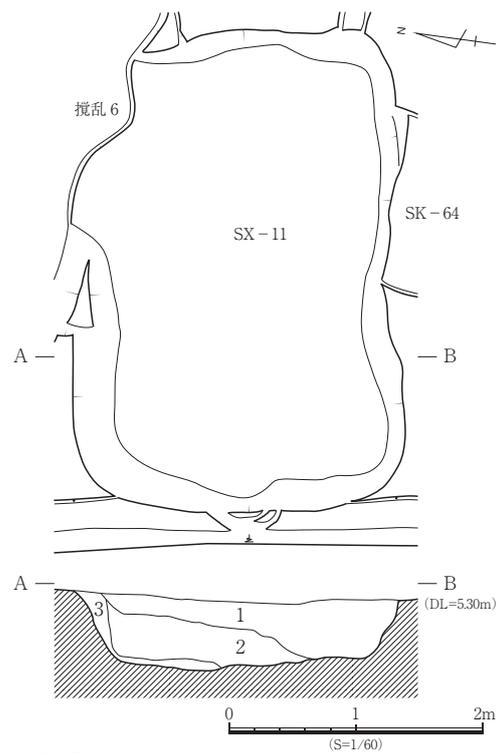
P-42の南で検出した楕円形を呈するピットで, P-42を切る。長径1.18m, 短径0.77m, 深さ9cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで, ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には近世陶器2点(播鉢1, 細片1)がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-44

P-43の南で検出した楕円形を呈するピットで, SK-30を切る。長径38cm, 短径36cm, 深さ18cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 0.5cm大の礫を少し含み, マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点, 土師器片1点, 近世陶器2点(碗1, 細片1)がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-45

調査区北東部で検出した円形を呈するピットで, SK-26に切られる。径54cm, 深さ60cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 0.5cm大の礫を少し含み, マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点, 土師器焙烙1点がみられたが, 図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. 黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトで, 黄灰色シルトブロックを多く含み, 炭化物を含む
 2. オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質粗粒砂で, 1~10cm大の礫を多く含む
 3. にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂質シルトで, マンガンを多く含む

図71 SX-11

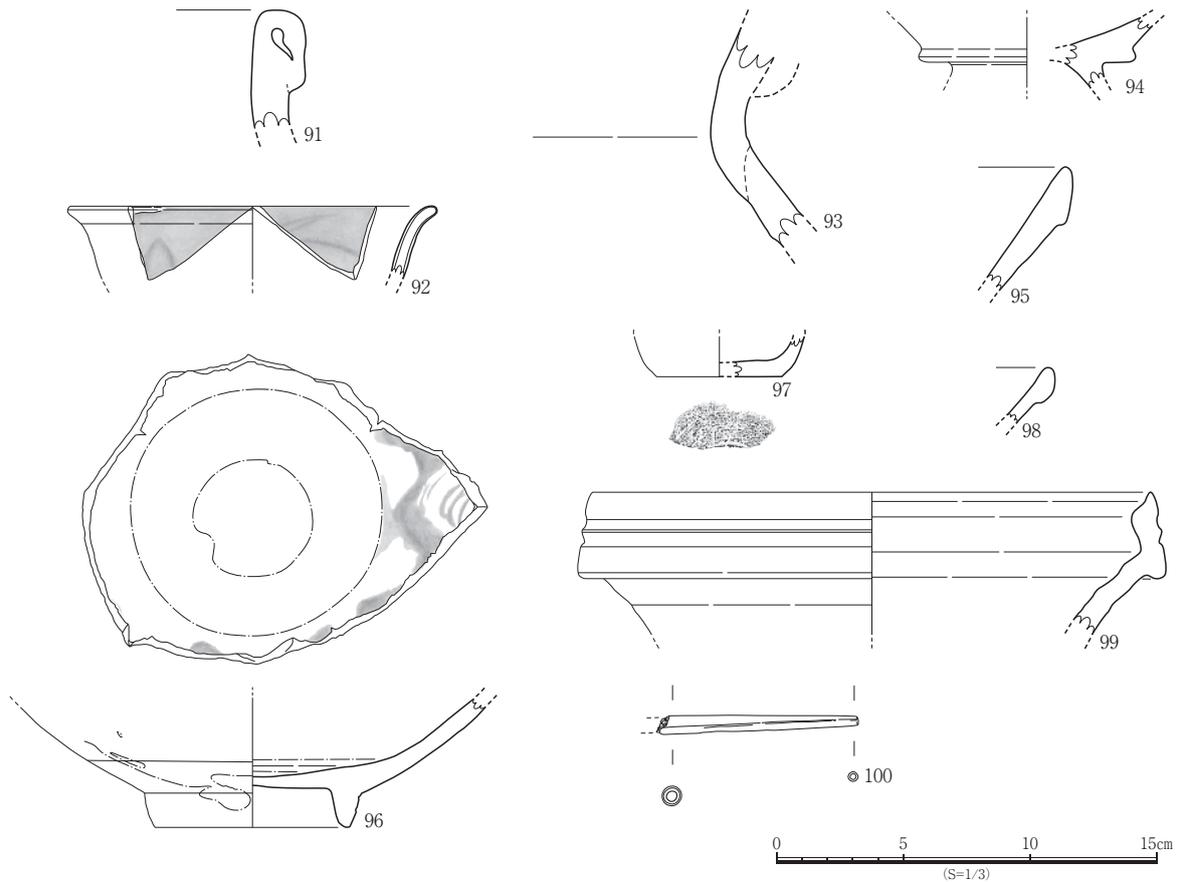


図72 SX-7・8・11, P-46・48・58・65出土遺物実測図

P-46(遺物: 図72-97)

P-45の北西で検出した楕円形を呈するピットで、SK-31に切られ、北は調査区外へ続く。検出長98cm, 検出幅56cm, 深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器3点(小皿1, 細片2), 近世陶器片1点がみられ、土師質土器小皿(97)を図示した。97は土師質土器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りで、体部は回転ナデ調整である。

P-47

調査区南部で検出した楕円形を呈するピットで、SX-7を切る。長径81cm, 短径31cm, 深さ24cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、黄色礫を多く含み、0.5~1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には近世陶器碗1点がみられたが、図示できなかった。

P-48(遺物: 図72-98)

P-47の南西で検出した楕円形を呈するピットで、SX-7を切る。長径38cm, 短径23cm, 深さ28cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した白磁碗(98)がみられた。98は白磁碗で、口縁部は玉縁となる。全面に白磁釉を施す。

P-49

P-48の北西で検出した楕円形を呈するピットで、長径33cm, 短径28cm, 深さ6cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器小皿1点がみられたが、図示できなかった。

1. A区

P-50

P-49の北東で検出した円形を呈するピットで、径25cm、深さ11cmを測る。埋土は掘方がにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.5cm大の黄色礫を含み、柱痕が灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と唐津系灰釉陶器皿1点、粘土塊1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-51

P-50の北西で検出した円形を呈するピットで、SK-41を切る。径45cm、深さ30cmを測り、埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、灰色シルトブロックを多く含み、1~3cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(杯1、細片1)と瓦器椀1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-52

P-51の南で検出した楕円形を呈するピットで、SK-41とSD-17に切られる。検出長1.16m、検出幅0.38m、深さ30cmを測り、埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と近世磁器小杯1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-53

P-52の南東で検出した楕円形を呈するピットで、他の遺構に切られる。長径28cm、短径24cm、深さ10cmを測る。埋土は掘方が暗灰黄色中粒砂質シルトで、少量の0.5cm大の礫とマンガンを含み、柱痕がにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.5cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と近世磁器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-54

P-53の北西で検出した隅丸方形を呈するピットで、検出長56cm、短辺45cm、深さ43cmを測る。埋土は掘方が灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含み、柱痕が褐色細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点と土師器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-55

P-54の南西で検出した楕円形を呈するピットで、SX-9を切る。長径21cm、短径19cm、深さ15cmを測る。埋土は掘方が灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には近世陶器碗1点がみられたが、図示できなかつた。

P-56

P-55の北西で検出した楕円形を呈するピットで、SK-50とP-57を切る。長径56cm、短径47cm、深さ60cm、柱痕径12cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、掘方にはハンダと炭化物、柱痕には黄色シルトブロックとマンガン、ハンダ・炭化物を含んでいた。出土遺物には掘方より土師質土器片8点、近世陶器片1点、鉄釘1点、柱痕より土師質土器片3点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-57

P-56の西で検出した楕円形を呈するピットで、SK-50とP-56に切られる。検出長47cm、短径47cm、深さ40cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点、瓦器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-58(遺物:図72-99)

調査区中央部で検出した楕円形を呈するピットで、長径49cm、短径42cm、深さ9cmを測る。埋土

は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には図示した備前焼播鉢(99)がみられた。99は備前焼播鉢で、口縁部は内傾し、上端と下端を摘む。調整は回転ナデで、播目は残存していない。

P-59

P-58の北西で検出した不整形を呈するピットで、長辺80cm、短辺76cm、深さ28cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(小皿1、細片1)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-60

調査区北西部で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、検出長36cm、短径26cm、深さ35cm、柱痕径10cmを測る。埋土は掘方と柱痕とも灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と唐津系灰釉陶器皿1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-61

P-60の北西で検出した円形を呈するピットで、径36cm、深さ49cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器椀1点がみられたが、図示できなかつた。

P-62

P-61の北西で検出した不整形を呈するピットで、SK-59に切られる。検出長98cm、短径74cm、深さ19cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-63(遺構: 図13・73)

調査区北西隅で検出した楕円形を呈するピットで、西は調査区外へ続く。検出長57cm、検出幅44cm、深さ19cmを測る。埋土は2層に分かれ、円礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と瓦器椀1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-64

P-63の南で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、SK-60に切られる。検出長54cm、短径32cm、深さ9cmを測る。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、灰色シルトブロックを多く含み、1~3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と近世磁器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-65(遺物: 図72-100)

P-64の南で検出した不整形を呈するとみられるピットで、攪乱6に切られる。検出長1.09m、検出幅0.40m、深さ33cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、20cm大の礫とハンダ、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点、土師器片5点、平瓦5点、鉄釘2点、図示した金属製品煙管(100)がみられた。100は銅製の煙管吸口である。側面には接合痕、内には木質が残る。錆化し、端部は錆が詰まる。

f その他の遺構

A-3区では近代の土坑が検出されたため一部のみ調査を行い、出土した近世の遺物について図

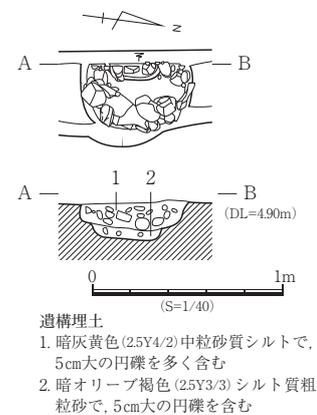


図73 P-63

1. A区

示した。

攪乱3

調査区東部で検出した隅丸方形を呈する近代の土坑で、上部のみ調査を行った。SD-12を切り、長辺2.30m、短辺1.68mを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、0.5～1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には近代陶磁器の他、土師質土器片1点、瓦3点(平瓦2、棧瓦1)がみられたが、図示できるものはなかった。

攪乱4(遺物：図74-101～120)

攪乱3の西で検出した楕円形を呈する大型土坑で、攪乱5を切る。長径2.86m、短径2.74m、深さ70cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、ハンダと炭化物を含んでいた。出土遺物には近代陶磁器の他、土師質土器7点(杯2、皿1、細片4)、土師器4点(鉢1、焜炉1、細片2)、須恵器片3点、瓦質土器16点(火鉢10、焜炉1、細片5)、備前焼片2点、近世陶器3点(鉢1、灯明受皿1、細片1)、近世磁器2点(皿1、猪口1)、石製品砥石1点、鉄釘4点がみられ、土師質土器皿(101)と近世磁器猪口(102)、石製品砥石(103)を図示した。また、1,766点の多量の瓦(軒平瓦35、軒棧瓦5、丸瓦19、平瓦1,209、棧瓦475、道具瓦23)が出土し、104～120を図示した。

101は土師質土器皿で、非常に器壁が薄い。調整は回転ナデ、底部の切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。102は近世磁器猪口で、桶形を呈し、蛇ノ目凹形高台を有する。見込は岩波文、内面は帯線と圏線、外面は海浜風景文と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施し、底部外面を輪状に釉ハギする。肥前産とみられる。103は石製品砥石で、方形を呈するものとみられ、一部が残存する。残存部で5面に使用痕がみられる。

104～106は軒平瓦である。104は角瓦とみられ、凹凸面に横方向のナデ調整を施し、キラ粉が付着する。瓦当の中心飾は左巻の三巴文で、瓦当左側には方形枠内に「あき岩」の刻印がみられる。105は凹面が横方向、凸面が縦または横方向のナデ調整で、凹凸面にキラ粉が付着する。瓦当には唐草文の一部が残存し、瓦当左側には方形枠内に「や(ヤ)ス孫」の刻印がみられる。攪乱4からは同じ刻印のある軒平瓦1点、軒棧瓦1点、平瓦1点が出土している。106は凹面に横方向のナデ調整、凸面に縦方向または横方向のナデ調整を施し、凹凸面にキラ粉が付着する。瓦当の中心飾は丁字文である。107～109は軒棧瓦である。107は凹面が縦または横方向、凸面が横方向のナデ調整である。瓦当の中心飾は三花文で、凹凸面と瓦当にキラ粉が付着する。108は凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施し、キラ粉が付着する。瓦当の中心飾は左巻の巴文で、瓦当右側に「王子定」の刻印がみられる。攪乱4からは同じ刻印のある軒棧瓦1点、平瓦4点、棧瓦1点が出土している。109は凹凸面が縦または横方向のナデ調整で、キラ粉が付着する。瓦当には唐草文の一部が残存し、瓦当右側には方形枠内に「王子定」の刻印がみられる。110～116は平瓦で、破片が多く、棧瓦の一部である可能性もある。110は凹面が横方向のナデ調整、凸面が縦または横方向のナデ調整である。側面には「片常」の刻印がみられ、攪乱4からは同じ刻印のある平瓦が他に5点出土している。111は凹面が横方向のナデ調整、凸面が縦または横方向のナデ調整である。側面には「布直」の刻印がみられる。112は凹面がナデ調整、凸面が縦または横方向のナデ調整で、凹凸面にキラ粉が付着する。側面には方形枠内に「王椎」の刻印がみられる。113は凹凸面に横方向のナデ調整を施し、キラ粉が付着する。側面には方形枠内に「□子吉」の刻印がみられる。114は凹面が横方向、凸面が縦または横方向のナデ調整を施し、凹凸面にキラ粉が付着する。側面には方形枠内に「宝□」の刻印がみられ

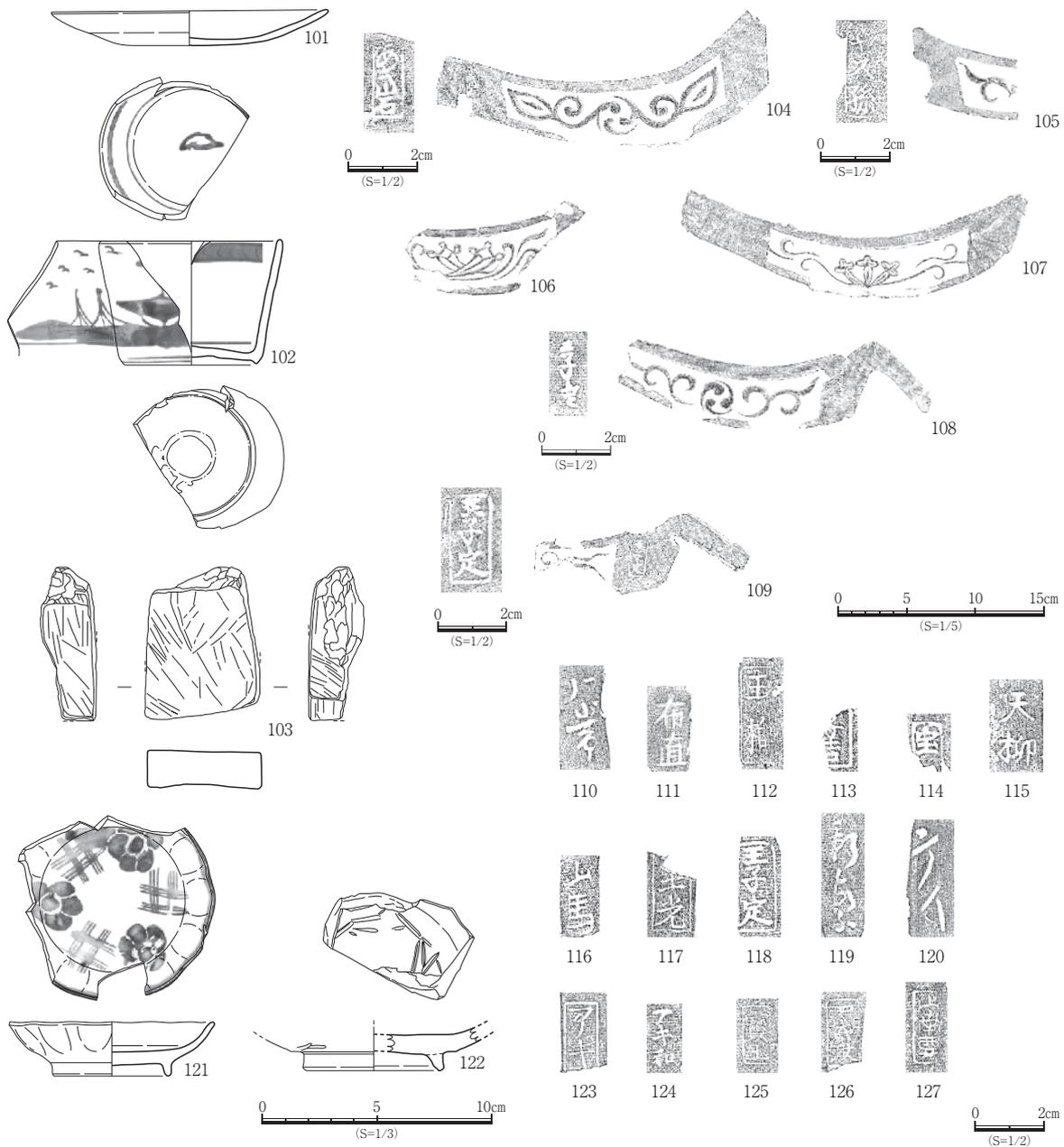


図74 攪乱4～6出土遺物実測図

る。115・116は凹面が横方向，凸面が縦または横方向のナデ調整である。側面には115が「天柳」，116が「山馬」の刻印がみられる。117～120は椽瓦である。117は凹凸面に横方向のナデ調整を施す。側面には方形枠内に「□キ光」とみられる刻印が残る。118は凹面が横方向，凸面が縦または横方向のナデ調整で，凹凸面にキラ粉が付着する。側面には方形枠内に「王子定」の刻印がみられる。攪乱4からは同じ刻印のある軒平瓦2点，軒椽瓦2点，平瓦7点，椽瓦2点が出土している。119は凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施し，キラ粉が付着する。側面には「新安(南か)子」とみられる刻印が残る。120も凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施し，キラ粉が付着する。側面には「ニノイ」とみられる刻印が残る。攪乱4からはこれらの瓦の他に，「□仲」の刻印の軒平瓦，「ハアキ卯平」「仁ノ□」などの刻印が残る平瓦や椽瓦が出土している。

2. B区

攪乱5(遺物:図74-121)

攪乱4の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、攪乱4に切られる。長辺1.41m、検出長0.66m、深さ24cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色礫を多く含み、0.5～1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には近代陶磁器の他、土師質土器片1点と須恵器片1点、図示した近世磁器皿(121)がみられた。121は近世磁器小皿である。型打成形で輪花形を呈し、見込は花文と格子文の染付がみられる。口鑄で、全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。釉は白濁し透明感がない。能茶山窯の製品である。

攪乱6(遺物:図74-122～127)

調査区西部で検出した不整楕円形を呈する大型土坑で、上部のみ調査を行った。SK-3・51, SD-16・17, SX-11, P-65を切る。検出長5.92m、検出幅5.21m、深さ62cm以上を測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと多量の20cm大の礫、少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には近代陶磁器等の他、土師質土器152点(杯13, 椀2, 細片137), 土師器21点(釜1, 細片20), 瓦器片1点, 東播系須恵器片口鉢2点, 瓦質土器片1点, 青磁2点(碗1, 細片1), 近世陶器15点(皿3, 土瓶1, 細片11), 近世磁器21点(碗1, 小杯1, 紅皿1, 細片18), 瓦485点(軒丸瓦1, 軒平瓦3, 軒棧瓦2, 丸瓦2, 平瓦386, 棧瓦78, 道具瓦9, 細片4), 土製品土錘1点, 石製品砥石1点, 金属製品90点(銭貨2, 小刀1, 鉄釘70, その他17)などがみられ、土師質土器椀(122)と瓦5点(123～127)を図示した。122は土師質土器椀で、断面が台形を呈する輪高台を貼付する。内面はヘラナデ調整で、ヘラの圧痕が同心円状に残る。外面は回転ナデ調整で、高台内は横方向のナデ調整である。123～125は平瓦である。123は凹面が縦または横方向のナデ調整、凸面がナデ調整でキラ粉が付着する。側面には方形枠内に「アキ□」の刻印がみられる。124は凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施し、キラ粉が付着する。側面には「アキ和」の刻印がみられる。125は凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施し、凹面にキラ粉が付着する。側面には方形枠内に「寶玉」の刻印がみられる。126・127は棧瓦で、凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施し、キラ粉が付着する。側面には方形枠内に126が「アキ政」、127には「山南要」の刻印がみられる。「山南要」の刻印は他に平瓦が攪乱6より1点出土している。攪乱6からはこれらの瓦の他に、左巻の三巴文の軒丸瓦が1点、「□与」の刻印の平瓦が1点、「□金」の刻印の平瓦が1点出土している。

2. B区(二ノ堀遺跡・森山城跡)

(1) 調査概要

B区は近世に野中兼山によって建設された南北に流れる用水路より西の調査区で、B区の東部をB-1区、西部をB-2区として調査を行った。概ねB-1区は二ノ堀遺跡、B-2区は森山城跡である。調査地は用水路が流れる東側の地形が高く、西に向かって地形が大きく落ち込む。調査区中央部付近の土地区画の境には、現代の水路が流れており水路の東と西の地表は30cm程度の比高差がみられ、著しく攪乱を受けていた。

B区では東部と西部で様相が大きく異なっていた。B区東部であるB-1区の調査では中世前期と中世後期、近世の3層の遺物包含層と遺構が確認された。遺構検出は中世前期と中

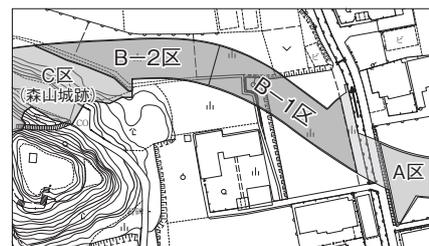


図75 B区位置図

世後期の遺物包含層の下面で行った。A区と同様に中世後期の二重の溝跡が確認され、森山城が機能していた時期に屋敷が隣接して存在したことが明らかとなった。また、森山城が機能を終えた後も屋敷があったことも明らかとなった。出土遺物は、古代末～中世前期、中世後期～近世初期、幕末の三時期のものがみられた。調査区中央部では中世から現代まで地形が大きく下がり、B区中央部から西部のB-2区では遺構が非常に少なく、生活の痕跡はほとんどみられず、自然流路と森山城跡の堀跡などが確認された。

(2) 基本層序

① B-1区(図76・77)

調査前は水田であり、第1層は耕作土である。第1-1～3層に分かれ、厚さは13～25cmを測り、西は厚く堆積する。第2層は近代とみられる堆積層で、調査区中央部の地形が大きく傾斜する箇所のみでみられ、第2-1～2層に分かれる。厚さは約40cmを測り、西に向かって厚く堆積する。また、調査区東部でも近代の堆積層がみられ、近代の攪乱も多く確認された。第3層は近世の堆積層とみられ、第3-1～4層に分かれ、第3-4層は遺物包含層である。第3層は調査区のはほぼ全面で確認され、調査区東部では厚さ10～15cmで水平に堆積し、調査区中央部では西に向かって大きく傾斜し、厚さ20～30cmを測る。第4層は中世後期の遺物包含層で、調査区東部から中央部で確認された。第4-1～3層に分かれ、調査区東部ではほぼ水平に堆積し、調査区中央部では西に向かって大きく傾斜する。厚さは10～20cmを測る。第5層は中世前期の遺物包含層で、調査区東部でのみ確認された。ほぼ水平に堆積し、厚さは10～20cmを測る。遺構検出は第4層の下面と第5層の下面で2回行った。第6層及び第7層は自然堆積層である。

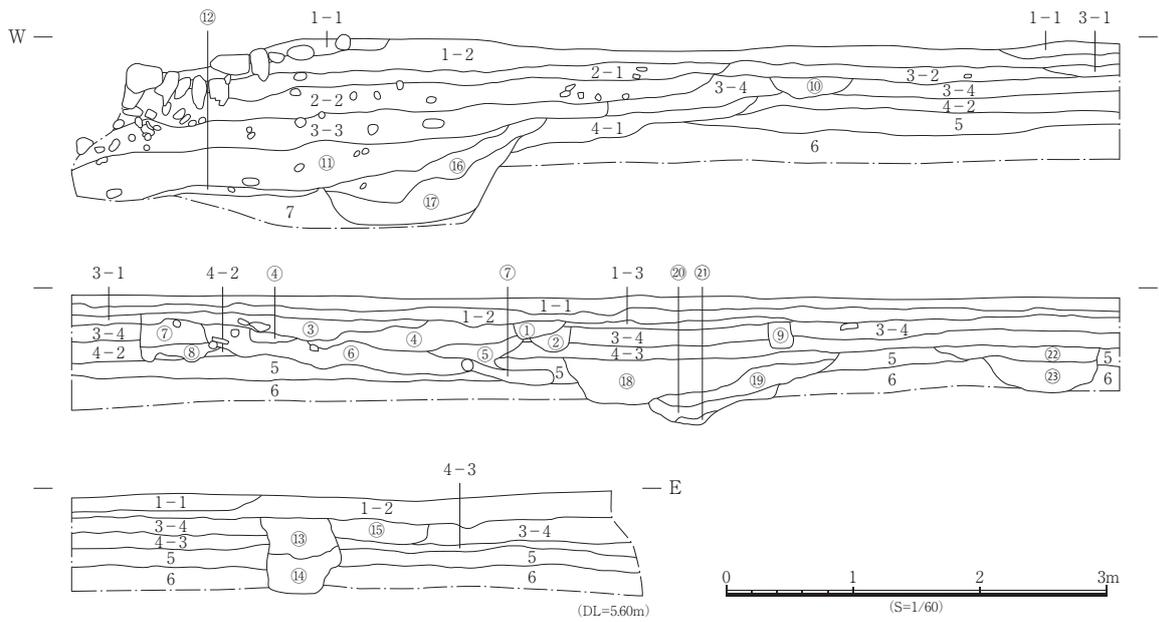
図77は調査区中央部から西部の南壁土層堆積図である。調査区中央部は現在の土地区画の境目にあたり、調査前は幅約30cmのコンクリート製の水路があり、水路の東西で地表は約30cmの比高差がみられた。また、水路の西側は近代の攪乱が著しく、近世及び中世の遺物包含層は削平を受け消失していた。調査区西部では遺物包含層は確認できず、耕作土または自然流路の氾濫に伴うとみられる堆積層が確認された。

第1・2層は耕作土で、ほぼ水平に堆積し、第1層は厚さ10～18cm、第2層は10～20cmを測る。第3～6層は水路の西側でのみ確認された層で、いずれも近代の攪乱に切られる。第3層は耕作土とみられ、水平に堆積し、厚さ12～20cmを測る。第4～6層は耕作土または自然流路の氾濫に伴う堆積層とみられ、西に傾斜する。厚さは第4層が約18cm、第5層が10～22cm、第6層が7～20cmを測る。第7～9層は水路の東側でのみ確認された層で、現代の水路に切られる。第7層は近世の遺物包含層で、北壁の第3-3層に対応し、厚さ12～24cmを測る。第8層は中世後期の遺物包含層で、北壁の第4-3層に対応し、厚さ15cmを測る。第9層は中世前期の遺物包含層で、北壁の第5層に対応し、厚さ約18cmを測る。第10層は自然堆積層で西に向かって傾斜する。

② B-2区(図78・79)

B-2区も調査前は水田であり、第1層は耕作土である。調査地は2区画の水田となっており、地表面は東と西の水田には約30cmの比高差がみられた。また、B-1区東端とB-2区西端の地表面の比高差は約90cmを測り、東から西へ大きく傾斜する。第2層は床土で、厚さ6～15cmを測る。第3・4層は調査区東部でのみ確認された層で、近現代の旧耕作土とみられる。水平に堆積し、厚さは第3層が12～20cm、第4層は18～30cmを測る。第5・6層は現在の東の水田の区画にのみ堆積する。近

2. B区



層位

- 第1-1層 灰色(5Y5/1)中粒砂質シルト層(耕作土)
- 第1-2層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫を含む(耕作土)
- 第1-3層 黄灰色(2.5Y6/1)粗粒砂質シルト層で、マンガンを多く含む(床土)
- 第2-1層 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫とハンダを含む(近代か)
- 第2-2層 灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂質シルト層で、5cm大の礫を多く含む(近代か)
- 第3-1層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の礫と炭化物を含む(近世か)
- 第3-2層 灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒砂質シルト層で、3cm大の礫とハンダを含む(近世か)
- 第3-3層 にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂質シルト層で、5~10cm大の礫を多く含む(近世か)
- 第3-4層 灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂質シルト層で、マンガンを多く含む(近世遺物包含層)
- 第4-1層 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト層で、粗粒砂とマンガンを含む(中世か)
- 第4-2層 にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルト層(中世遺物包含層1)
- 第4-3層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、マンガンと炭化物を含む(中世遺物包含層2:中世後期)
- 第5層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルト層で、マンガンを含み、炭化物を少し含む(中世遺物包含層3:中世前期)
- 第6層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルト層で、粗粒砂を含む(自然堆積層)
- 第7層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂層(自然堆積層)

遺構埋土

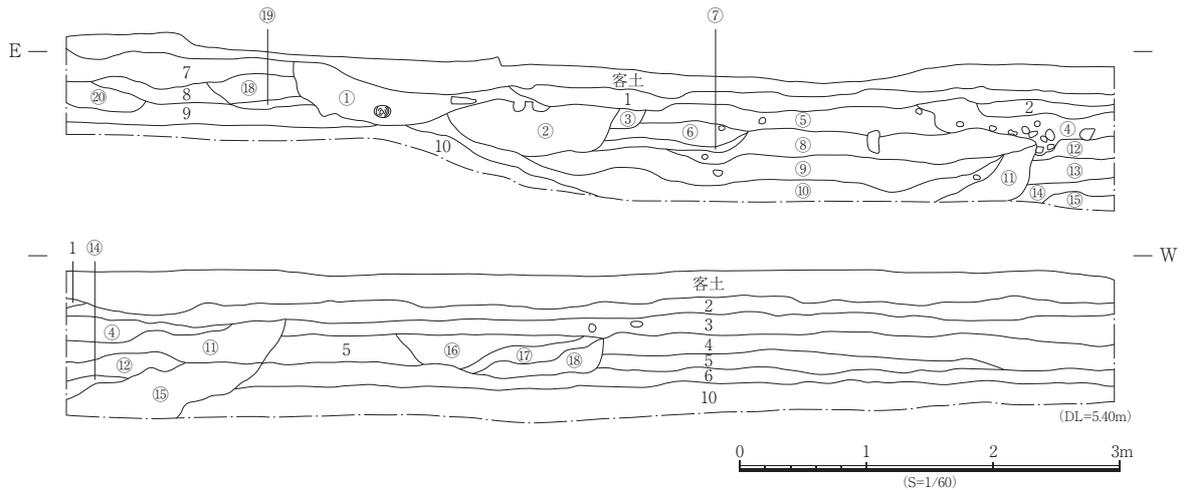
- ① 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を含む

- ② 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、炭化物を含む
- ③ オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルトで、1~3cm大の礫を多く含み、10cm大の礫を含む(近代)
- ④ にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂質シルト(近代)
- ⑤ 黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(近代)
- ⑥ 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒砂で、灰色粗粒砂質シルトブロックと10cm大の礫を含む(近代:明治)
- ⑦ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、5cm大の礫を含む(近世~近代か)
- ⑧ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト(近世~近代か)
- ⑨ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、粗粒砂を含む
- ⑩ 灰色(5Y6/1)中粒砂質シルトで、1cm大の礫を含む(近世)
- ⑪ 灰色(5Y6/1)粘土質シルトで、5~10cm大の円礫を含む(SK-121埋土1)
- ⑫ 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質粗粒砂で、5cm大の角礫を含む(SK-121埋土2)
- ⑬ 灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(SA-5P-5埋土1)
- ⑭ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(SA-5P-5埋土2)
- ⑮ 黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質シルトで、マンガンを含む
- ⑯ 灰色(5Y5/1)シルト質中粒砂で、3cm大の礫を含む(SD-26埋土1)
- ⑰ 灰色(5Y5/1)粗粒砂質シルトで、マンガンを含む(SD-26埋土2)
- ⑱ 灰色(5Y6/1)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を含む(SD-25埋土1)
- ⑲ 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルトで、炭化物を含む(SD-25埋土2)
- ⑳ オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトで、炭化物を含む(SD-25埋土3)
- ㉑ オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルトで、やや粘性強い(SD-25埋土4)
- ㉒ オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含む(SD-21埋土1)
- ㉓ 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(SD-21埋土2)

図76 B-1区北壁セクション図

現代の旧耕作土とみられ、僅かに西へ傾斜し、厚さは第5層が7~18cm、第6層が11~18cmを測る。第7層は床土で、厚さは4~18cmを測る。第8層は調査区東部の一部でのみ確認された層で、整地層とみられ、厚さ10~15cmを測る。第8層の上面で近世の遺構が検出され、下面で自然流路であるSR-1を検出した。第9~14層は自然堆積層で、砂層またはシルト質砂層である。

図79は南壁の土層堆積図である。第1層は北壁の第1層に対応し、耕作土である。厚さは8~16cmを測る。第2・3層は森山城跡の堀2の埋土上でのみ確認された層で、地形が落ち込んでいた箇所



- | | |
|---|---|
| <p>層位</p> <p>第1層 暗灰黄色(25Y4/2)粗粒砂質シルト層(耕作土)</p> <p>第2層 暗灰黄色(25Y4/2)粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫を含む(耕作土)</p> <p>第3層 オリーブ褐色(25Y4/3)粗粒砂質シルト層で、0.5cm大の礫を含み、上部にマンガンが堆積する</p> <p>第4層 オリーブ褐色(25Y4/4)粗粒砂質シルト層</p> <p>第5層 オリーブ褐色(25Y4/3)粗粒砂質シルト層で、粘性はやや強い</p> <p>第6層 オリーブ褐色(25Y4/4)シルト質粗粒砂層で、粘性はやや弱い</p> <p>第7層 黄褐色(25Y5/3)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を含む(近世遺物包含層)</p> <p>第8層 灰黄色(25Y6/2)中粒砂質シルト層で、マンガンを含む(中世遺物包含層1:中世後期)</p> <p>第9層 にぶい黄色(25Y6/3)中粒砂質シルト層で、マンガンを含む(中世遺物包含層2:中世前期)</p> <p>第10層 灰色(5Y6/1)シルト質粗粒砂層(自然堆積層)</p> <p>遺構埋土</p> <p>① 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルトで、20cm大の礫と瓦、ハンダを含む(現代水路)</p> <p>② オリーブ褐色(25Y4/3)中粒砂質シルトで、3cm大の礫を含む(近代)</p> | <p>③ 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を含む(近代)</p> <p>④ 黄灰色(2.5Y5/1)粗粒砂質シルトで、5~10cm大の礫を多く含む(近代)</p> <p>⑤ 黄灰色(2.5Y6/1)粗粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を含む(近代)</p> <p>⑥ 灰黄色(2.5Y6/2)粗粒砂質シルトで、マンガンを含む(近代)</p> <p>⑦ 黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質シルト(近代)</p> <p>⑧ 灰色(5Y5/1)中粒砂質シルトで、20cm大の礫を含む(近代)</p> <p>⑨ 灰色(10Y5/1)シルトで、5cm大の礫を少し含む(近代)</p> <p>⑩ 灰色(7.5Y4/1)粘土質シルトで、木片を含む(近代)</p> <p>⑪ 灰色(5Y5/1)粘土質シルトで、マンガンを含む(近代)</p> <p>⑫ オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(近代)</p> <p>⑬ 灰オリーブ色(5Y4/2)中粒砂質シルトで、粘性はやや強い(近代)</p> <p>⑭ 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒砂で、下部にマンガンの堆積(近代)</p> <p>⑮ 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトで、マンガンを含む(近代)</p> <p>⑯ オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂</p> <p>⑰ オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂</p> <p>⑱ オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極粗粒砂</p> <p>⑲ 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトで、3cm大の礫を含む</p> <p>⑳ 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト</p> |
|---|---|

図77 B-1区南壁セクション図

を近現代に整地したものとみられる。厚さは第2層が20cm、第3層が14~22cmを測る。第4層は旧耕作土で、厚さ4~10cmを測る。第5層は床土で、厚さは2~5cmを測る。第6層は中世の堆積層とみられ、B-2区南東部でのみ確認された。厚さは6~12cmを測る。第7~12層は自然堆積層で、砂層またはシルト質砂層であり、自然流路の氾濫による堆積とみられる。B-2区の地形は森山城跡のある丘陵裾部に近い南東部が最も高く、北と西へ地形が下がっていた。

(3) 堆積層出土遺物

① B-1区

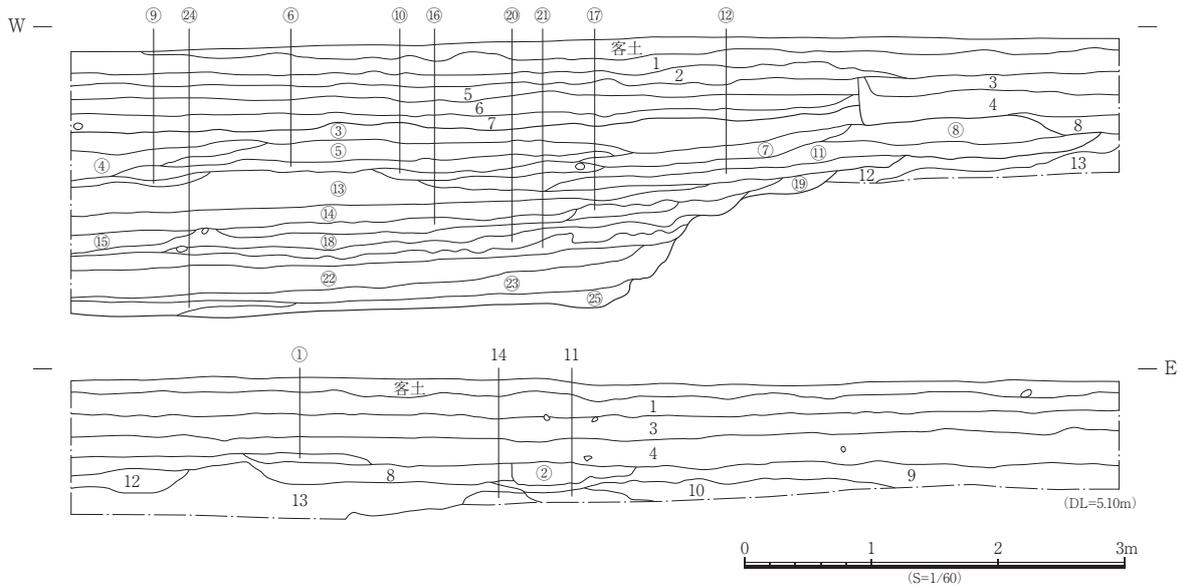
B-1区の堆積層出土遺物は北壁の土層名で報告する。第1層は耕作土、第3層が近世遺物包含層、第4層が中世後期遺物包含層、第5層は中世前期遺物包含層である。

第1層(図80-128~139)

第1層の出土遺物は近世陶磁器が大半を占め、近代磁器や中世の遺物が僅かに含まれる。

128・129は土師質土器杯で、底部が残存する。128は体部が比較的上方に立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りで、調整は回転ナデである。129は体部の器壁が薄く、外へ大きく開く。底部の切り離しは回転糸切りで、調整は回転ナデである。130は須恵器杯で、平底を呈する。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、調整は回転ナデである。131は青磁碗で、底部には低く太い高台が付く。

2. B区



層位

- 第1層 暗灰黄色(25Y4/2)粗粒砂質シルト層で、0.5cm大の橙色礫と1~3cm大の礫を含む(耕作土)
- 第2層 灰色(5Y6/1)粗粒砂質礫層で、3~5cm大の角礫を非常に多く含む(床土)
- 第3層 オリーブ褐色(25Y4/3)粗粒砂質シルト層で、下部に酸化鉄を多く含む(旧耕作土か)
- 第4層 黄褐色(25Y5/3)粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫を含む(旧耕作土か)
- 第5層 暗灰黄色(25Y5/2)粗粒砂質シルト層で、マンガンと炭化物を少し含む(旧耕作土か)
- 第6層 灰色(10Y6/1)礫質極粗粒砂層で、1~3cm大の礫を含み、鉄分の沈着ありを含む(旧耕作土か)
- 第7層 橙色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、マンガンを多く含む(床土)
- 第8層 灰黄色(25Y6/2)シルト質中粒砂層で、0.5cm大の黄色礫を少し含み、上部にマンガンが堆積する(整地層か)
- 第9層 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質中粒砂層(自然堆積層)
- 第10層 暗褐色(10YR3/4)極粗粒砂層で、オリーブ褐色シルト質粗粒砂ブロックを含む(自然堆積層)
- 第11層 暗灰黄色(25Y5/2)極粗粒砂層で、1cm大の礫を含む(自然堆積層)
- 第12層 黄褐色(25Y5/3)シルト質粗粒砂層で、粘性は弱く、下部に酸化鉄が堆積する(自然堆積層)
- 第13層 オリーブ褐色(25Y4/6)シルト質粗粒砂層で、粗粒砂ブロックを多く含む(自然堆積層)
- 第14層 暗褐色(10YR3/4)極粗粒砂層で、オリーブ褐色シルト質粗粒砂ブロックを含む(自然堆積層)

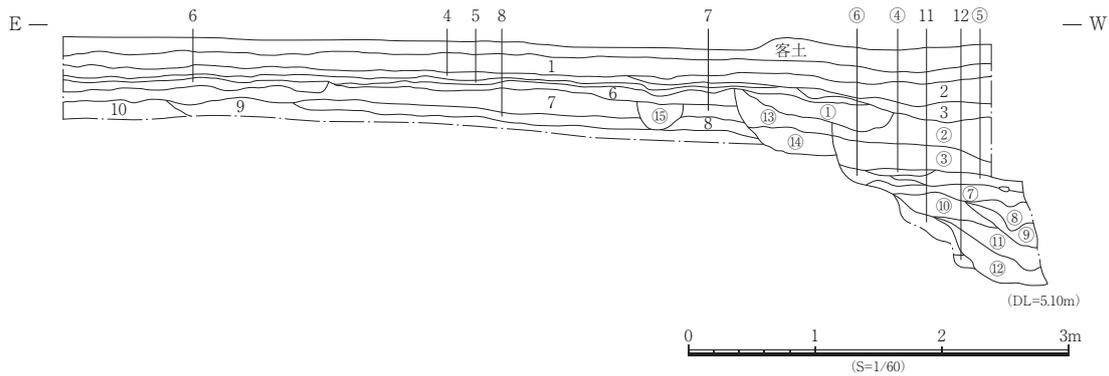
遺構埋土

- ① 黄褐色(25Y5/3)中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を少し含み、マンガンを含む(近世)

- ② 暗灰黄色(25Y5/2)粗粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを含む(近世)
- ③ にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトで、マンガンを含む(SR-1埋土1)
- ④ 灰黄色(25Y6/2)粗粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を含む(SR-1埋土2)
- ⑤ オリーブ褐色(25Y4/4)粗粒砂質シルトで、土器片を含む(SR-1埋土3)
- ⑥ 灰色(5Y5/1)シルト質粗粒砂で、極粗粒砂を含む(SR-1埋土4)
- ⑦ 暗灰黄色(25Y4/2)粗粒砂質シルトで、土器と炭化物を少し含む(SR-1埋土5)
- ⑧ オリーブ褐色(25Y5/1)中粒砂質シルトで、1cm大の礫を少し含む(SR-1埋土6)
- ⑨ 黄灰色(25Y6/1)粘土質シルトで、マンガンを含む(SR-1埋土7)
- ⑩ 黄灰色(25Y6/1)シルトで、中粒砂ブロックを少し含む(SR-1埋土8)
- ⑪ オリーブ褐色(25Y4/3)シルト質粗粒砂で、1cm大の礫と炭化物を少し含む(SR-1埋土9)
- ⑫ 灰色(5Y5/1)シルト質粗粒砂で、1cm大の礫を含む(SR-1埋土10)
- ⑬ 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂と中粒砂質シルトの互層(SR-1埋土11)
- ⑭ 灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルトで、木片を多く含む(SR-1埋土12)
- ⑮ 灰色(10Y4/1)粘土質シルト(SR-1埋土13)
- ⑯ 黄灰色(25Y4/1)シルトで、中粒砂とマンガンを少し含む(SR-1埋土14)
- ⑰ 暗灰黄色(25Y4/2)シルト質中粒砂で、マンガンを含む(SR-1埋土15)
- ⑱ 灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルトで、5cm大の礫を少し含む(SR-1埋土16)
- ⑲ 黄褐色(25Y5/3)中粒砂質シルトで、マンガンを多く含む(SR-1埋土17)
- ⑳ 灰色(7.5Y4/1)シルト質中粒砂(SR-1埋土18)
- ㉑ 灰色(10Y5/1)粘土質シルトで、粗粒砂ブロックを含む(SR-1埋土19)
- ㉒ オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粗粒砂(SR-1埋土20)
- ㉓ 暗オリーブ灰色(25GY4/1)中粒砂で、シルトと中粒砂の互層(SR-1埋土21)
- ㉔ 灰色(10Y4/1)シルト質粗粒砂で、シルトブロックを含み、1~2cm大の円礫を多く含む(SR-1埋土22)
- ㉕ 暗オリーブ灰色(25GY3/1)粗粒砂(SR-1埋土23)

図78 B-2区北壁セクション図

見込には印花文、外面には片彫の蓮弁文がみられる。内面から高台外面まで黄色味を帯びた青磁釉を施し、豊付の一部にも釉が掛かる。132は近世陶器搦鉢で、備前焼である。頸部が大きく張り、口縁部外面には2条の沈線が巡る。全面に回転ナデ調整を施し、内面には11条単位の搦目が密にみられる。133・134は近世磁器蓋である。133は肥前産または肥前系で、天井部には蕾文、摘み内と外面には桜文の染付がみられる。全面に透明釉を施し、摘み端部は釉ハギする。134は能茶山窯の端反碗蓋で、天井部には環状の松竹梅文、口縁部内面には雷文と圏線、外面には丸文と花文、圏線の染付、摘み内には方形枠に「茶」銘がみられる。135は近世磁器瓶で、頸部は細く締まり、口縁



層位	遺構埋土
第1層 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルト層で、1~3cm大の黄色礫を含む(耕作土)	① オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルト(近世土坑)
第2層 灰色(5Y4/1)シルト質中粒砂層で、1cm大の礫を多く含む、木片を含む	② 灰色(5Y5/1)粗粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫と炭化物を含む(堀2埋土1)
第3層 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルト層で、3cm大の礫を含む	③ 灰色(7.5Y4/1)シルト質粗粒砂で、1cm大の礫と炭化物を少し含む(堀2埋土2)
第4層 黄灰色(2.5Y6/1)粗粒砂質シルト層で、上部にマンガンが堆積する(旧耕作土)	④ 灰オリーブ色(5Y4/2)粗粒砂で、シルトと粗粒砂の互層(堀2埋土3)
第5層 暗褐色(10YR3/4)粗粒砂層で、マンガンの堆積(床土)	⑤ 灰色(5Y5/1)シルトで、中粒砂と炭化物を少し含む(堀2埋土4)
第6層 灰色(5Y6/1)シルト質粗粒砂層(中世堆積層か)	⑥ 灰色(5Y5/1)シルト質粗粒砂で、シルトと粗粒砂の互層(堀2埋土5)
第7層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂層で、シルトと粗粒砂の互層(自然堆積層)	⑦ 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで、木製品を多く含む(堀2埋土6)
第8層 暗灰黄色(2.5Y4/2)極粗粒砂層(自然堆積層)	⑧ 灰色(5Y5/1)シルトで、1cm大の礫と木片を含み、中粒砂を少し含む(堀2埋土7)
第9層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂層(自然堆積層)	⑨ オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質粗粒砂で、5cm大の礫と木片を含む(堀2埋土8)
第10層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂層で、粗粒砂質シルトと粗粒砂の互層(自然堆積層)	⑩ 黄灰色(2.5Y6/1)シルト質粗粒砂で、炭化物を少し含む(堀2埋土9)
第11層 灰色(10Y5/1)粗粒砂質シルト層(自然堆積層)	⑪ 灰色(7.5Y5/1)シルト(堀2埋土10)
第12層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極粗粒砂層(自然堆積層)	⑫ 灰色(10Y4/1)粗粒砂で、1cm大の礫とシルトを含む(堀2埋土11)
	⑬ 灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂質シルトで、粘性強い(堀2埋土12)
	⑭ 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極粗粒砂で、1cm大の橙色礫を多く含む(堀2埋土13)
	⑮ 灰白色(5Y7/1)細粒砂質シルト

図79 B-2区南壁セクション図

部は開いて内湾する。外面には染付の一部が残り、頸部内面から外面には透明釉を施す。肩部内面は回転ナデ調整で、無釉である。136は平瓦で、調整は凹面がナデ、凸面は横方向のヘラナデ及び縦方向のナデである。側面には「アキ」の刻印がみられる。137は石製品五輪塔で、火輪である。器高が低く、笠部の先端は僅かに反り上がり、丸く収める。上面中央には径8.5cm、深さ2.8cmを測る円形の柄穴がみられ、柄穴の中には加工痕が顕著に残る。全面に加工痕がみられ、下面中央はやや摩耗する。石材は砂岩である。138・139は銅製品銭貨で、寛永通寶である。いずれも新寛永である。139は薄く、銭厚0.08cmを測る。

第3層(図80-140~143)

第3層の出土遺物は近世陶磁器と瓦が大半を占め、土師質土器や瓦器、備前焼など中世の遺物が僅かに含まれる。

140は土師質土器小皿で、器高が低く0.9cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りで、調整は回転ナデである。141は白磁碗で、口縁部は玉縁を呈する。全面に白磁釉を施し、口縁部内面は釉が厚く垂れる。142は近世陶器小皿で、備前焼である。器壁が非常に薄く、底部から湾曲して口縁部に至る。全面に回転ナデ調整を施し、口縁部外面には鑄釉を施す。143は軒平瓦で、調整は凹面がナデでキラ粉が付着し、凸面は横方向のナデである。瓦当の中心飾は花文で、瓦当左側には「ハアキ卯平」の刻印がみられる。

第4層(図81-144~155)

144は土師質土器杯で、底径が小さく4.3cmを測り、体部はやや内湾して立ち上がる。底部の切り

2. B区

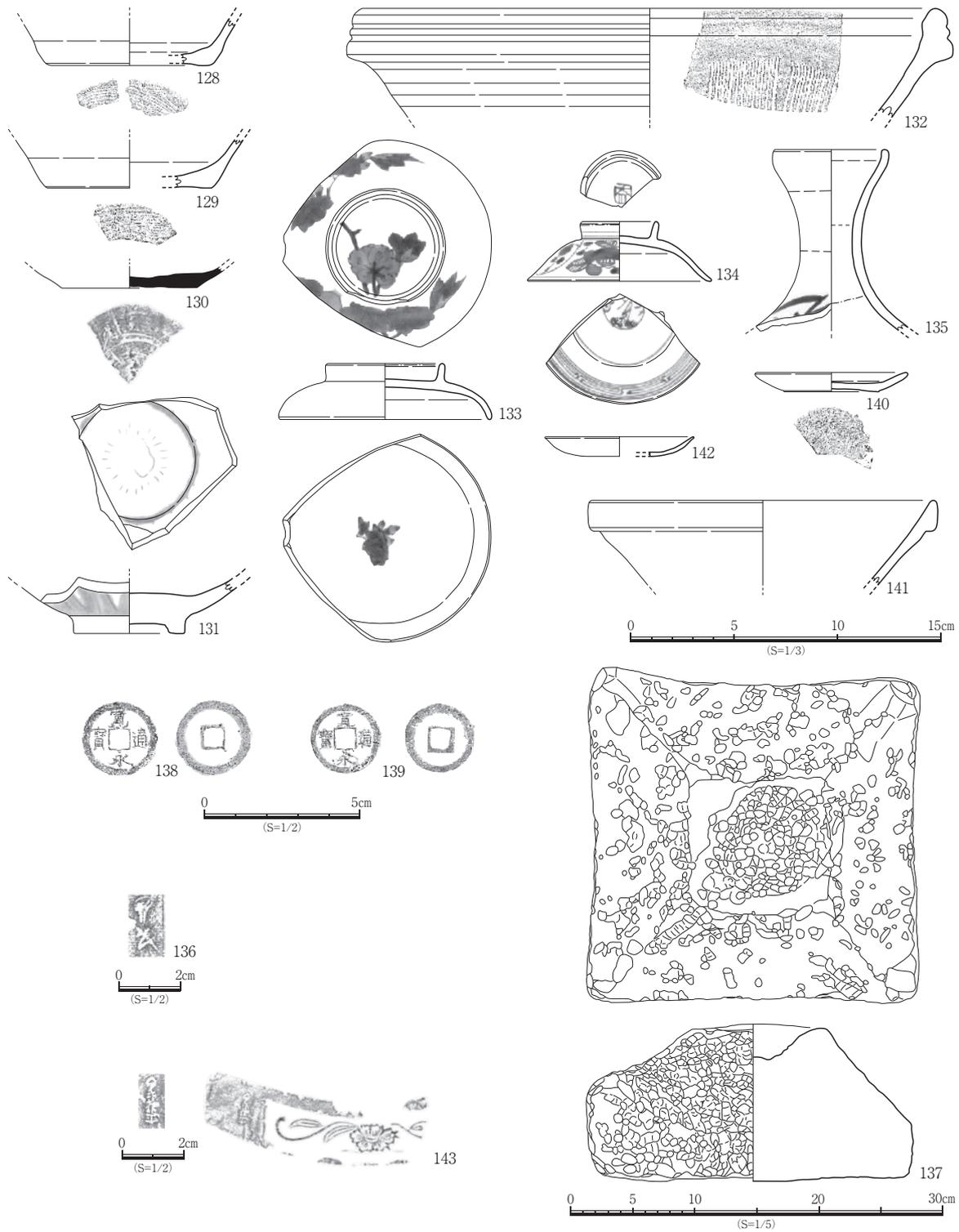


図80 B-1区第1・3層出土遺物実測図

離しは回転糸切りで、内面は回転ナデ調整でロクロ目が顕著に残る。外面は回転ナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため調整は不明瞭である。145～147は土師質土器平高台椀である。145は高台が低く、底部の切り離しは回転糸切りで、調整は回転ナデである。146・147は高台側面が内傾する。146は内面にロクロ目が残り回転ナデ調整を施したとみられるが、その他は著しく摩耗

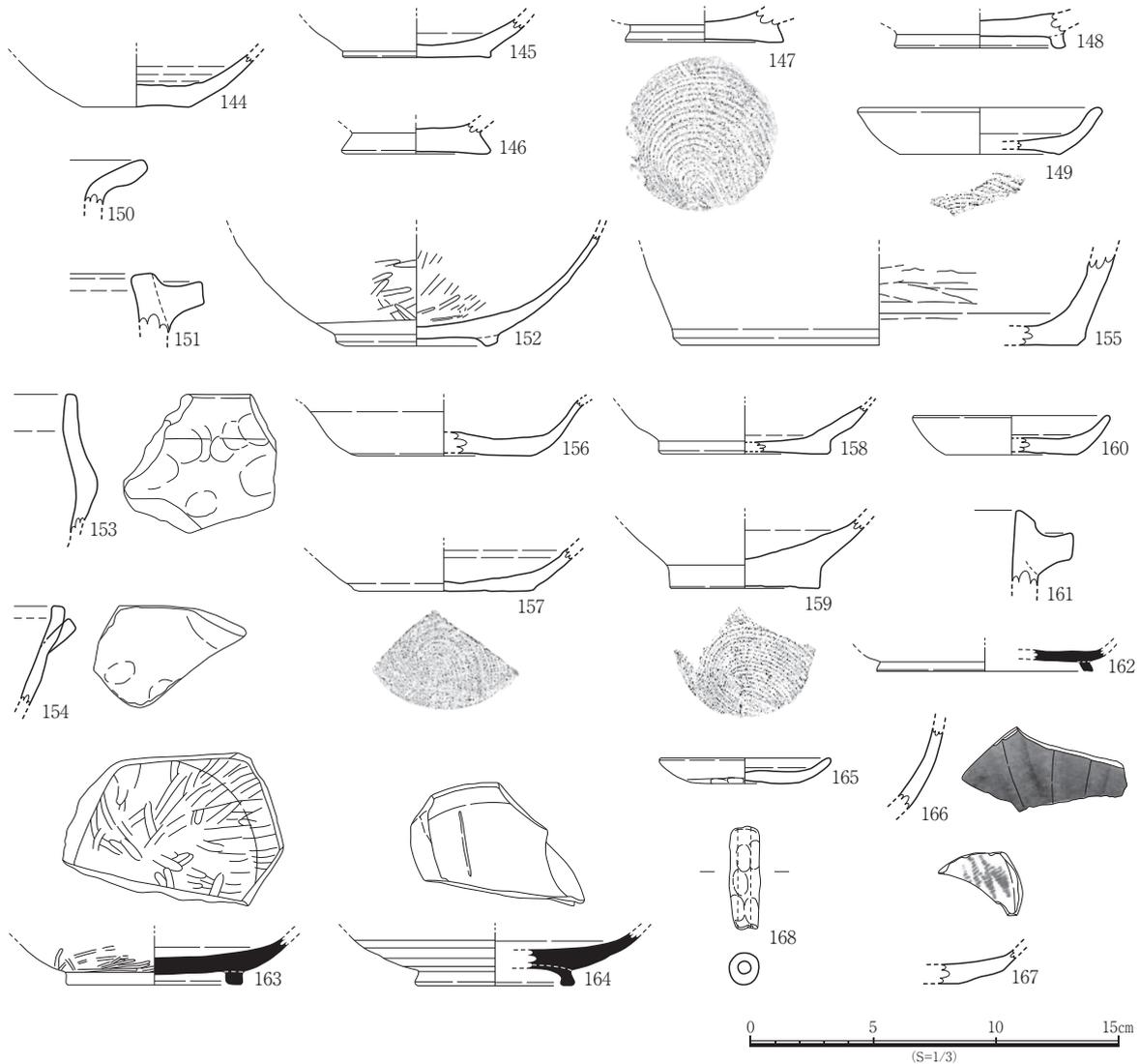


図81 B-1区第4・5層出土遺物実測図

するため調整は不明である。147は底部の切り離しは回転糸切りで、火襷が入り、見込にはナデ調整を施す。148は土師質土器輪高台椀で、底部には断面が方形を呈する高台を貼付する。著しく摩耗するため調整は不明である。149は土師質土器小皿で、口径9.7cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りで、調整は回転ナデである。150は土師器甕で、器壁が薄く、口縁部は大きく開く。内面は摩耗するため調整は不明で、外面には横ナデ調整を施す。151は土師器釜で、断面方形を呈する鍔を水平に貼付する。全面に横方向のナデ調整を施す。152は黒色土器椀である。底部には断面が台形を呈する輪高台を貼付する。体部は器壁が薄く、底部より稜を持たず湾曲して立ち上がる。内面はミガキ調整で、黒化処理を施す。外面は体部上部がナデ調整の後ミガキ調整、体部下部が回転ケズリ調整、高台が横方向のナデ調整、高台内は回転糸切り調整の後ナデ調整を加える。在地産である。153は瓦質土器鍋で、口縁部は直立し上方に伸びる。調整は口縁部が横ナデ、胴部が横方向のナデで、外面には指頭圧痕が顕著に残る。154は瓦質土器播鉢で、器壁が薄く、体部はまっすぐ立ち上がり、口縁端部は面をなす。口縁部には片口の一部が残存する。著しく摩耗するため調整は不明で、

2. B区

播目は残存していない。155は陶器甕の底部とみられ、体部は比較的上方にまっすぐ伸びる。内面は強いナデ調整、胴部外面は回転ナデ調整、底部外面にはヘラナデ調整を施す。

第4層からは図示した遺物の他、須恵器甕や瓦器椀、東播系須恵器片口鉢、瓦質土器鍋、青磁碗などが出土している。

第5層(図81-156~168)

156・157は土師質土器杯である。156は底部の器壁が厚く、体部はやや内湾する。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、一部にナデ調整を施す。調整は回転ナデである。157は器壁が薄く、内面にロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りで、調整は回転ナデである。158・159は土師質土器平高台椀である。158は器壁が薄く、見込が凹む。底部の切り離しは回転糸切りで、調整は回転ナデである。159は高台が非常に厚く、体部は大きく開く。底部の切り離しは回転糸切りで、調整は回転ナデである。160は土師質土器小皿で、口径7.9cmを測る。調整は著しく摩耗するため不明である。161は土師器釜で、断面は方形を呈する鏝を水平に貼付する。全面に横方向のナデ調整を施す。鏝の下面には工具の圧痕が多数残る。162は須恵器杯で、器壁が薄く、底部には断面が方形を呈する高台を貼付する。内面は回転ナデ調整で、高台は横方向のナデ調整、高台内にはナデ調整を施す。163・164は須恵器輪高台椀である。163は灰白色を呈し、底部には断面が方形を呈する幅の太い高台を貼付する。内面は幅の太い放射状のミガキ調整、外面は緻密な分割ミガキ調整、高台内には横方向のナデ調整を施す。164も灰白色を呈し、底部には断面が台形を呈する幅の細い高台を貼付する。内面はナデ調整を施し、工具の圧痕が残る。体部外面は回転ケズリ調整で、高台は横方向のナデ調整、高台内にはナデ調整を施す。165は瓦器小皿で、口径6.8cmを測る。見込はナデ調整、口縁部は横ナデ調整、底部外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。全面に炭素が吸着する。166は青磁碗で、体部が残存する。外面には鎬蓮弁文がみられ、全面に青磁釉を施す。167は同安窯系の青磁皿である。平底で、体部は屈曲して立ち上がる。見込には櫛描によるジグザグ文がみられる。内面から体部外面には青磁釉を施し、底部外面はケズリ調整で、無釉である。168は土製品土錘で、円柱形を呈する。全面にナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。全面に黒斑がみられる。

第5層からは図示した遺物の他、土師器甕や須恵器甕、瓦器椀などが出土している。

② B-2区

B-2区の堆積層出土遺物は南壁の土層名で報告する。第1層は耕作土、第6層が近世遺物包含層である。

第1層(図82-169~174)

第1層の出土遺物は近世陶磁器が大半を占めるが、図示した遺物の他、瓦器椀や東播系須恵器片口鉢などが出土している。

169は土師質土器椀で、平高台を呈する。器壁が薄く、体部は内湾して立ち上がる。器面は著しく摩耗するため、調整は不明である。170は須恵器椀で、平高台を呈する。見込は凹み、体部は外上方へ大きく開く。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。171は備前焼播鉢で、口縁部は直立し、顎は外へ摘み出す。調整は回転ナデで、播目は残存していない。172は白磁碗で、底部には幅が広く低い高台が付く。内面には白濁した白磁釉を施し、外面は削り出しで、無釉である。173は同安窯系の青磁皿で、平底を呈する。体部は底部より屈曲して立ち上がる。内面から体部外面には黄色味を帯びた青磁釉を施し、見込には櫛とヘラ描による文様がみられる。底部外面は回転

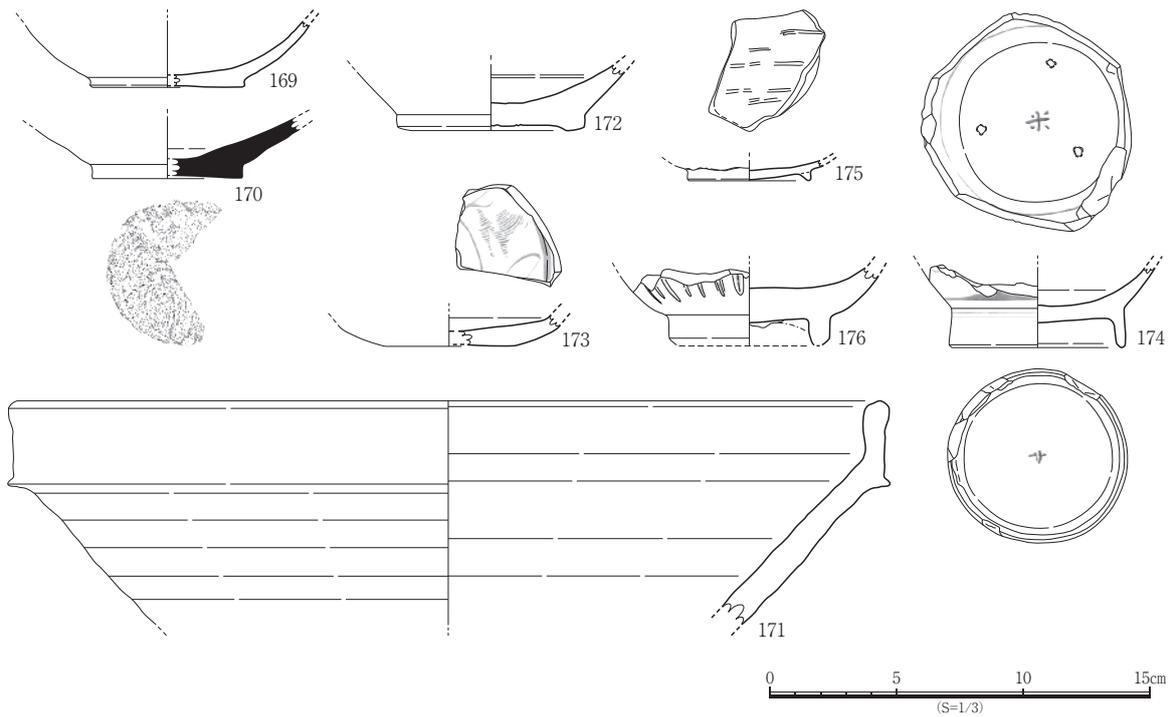


図82 B-2区堆積層出土遺物実測図

ケズリ調整で、釉ハギし、無釉である。174は能茶山窯の近世磁器碗で、広東形である。見込には「米」字と圏線、体部外面には土坡と圏線の染付、高台内には「サ」銘がみられる。

第6層(図82-175・176)

175は畿内産の瓦器碗で、底部には断面が三角形を呈する小さな高台を貼付する。見込はナデ調整とみられるが摩耗するため不明で、平行暗文がみられる。外面はナデ調整である。内外面に炭素が吸着する。176は龍泉窯系の青磁碗で、底部には細く直立する高台が付き、体部外面には細蓮弁文がみられる。内面から高台内側まで青磁釉を施し、高台内は削り出しで、無釉である。

第6層からは図示した遺物の他、土師質土器碗、土師器甕、須恵器碗や東播系須恵器碗、備前焼播鉢・甕、白磁碗・皿などが出土している。

(4) 検出遺構と出土遺物

① 中世下面

第5層の下面で検出された遺構は、古代末から中世前期の遺構である。遺構は主にB-1区で確認され、調査区北側ではB-1区からB-2区にかけて東西方向の自然流路が検出されている。この時期の遺構は森山城跡の下面の時期とそれ以前の時期のものである。B-1区は二ノ堀遺跡であるため遺構番号はA区からの通し番号としている。

i 堀・柵列跡

SA-3(遺構:図83)

B-1区南部で検出した南北方向(N-5°-W)の堀または柵列跡で、全長4.50m、柱間寸法は1.00~1.30mを測る。SB-12とP-113に切られる。柱穴は楕円形を呈し、検出長51~76cm、全幅41~63cm、深さ20~47cm、柱痕

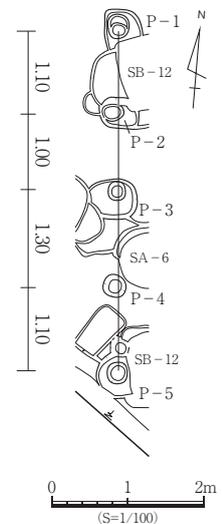


図83 SA-3

2. B区

径13～21cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器49点(杯4, 細片45), 土師器2点(甕1, 細片1), 鉄製品1点, 鉄滓1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

ii 土坑跡

SK-73

B-1区北東部で検出した土坑で, SD-20に切られる。楕円形を呈し, 長径1.10m, 検出幅0.58m, 深さ5cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器4点(杯1, 細片3), 須恵器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-74

SK-73の北西部で検出した溝状を呈する土坑で, P-72に切られる。検出長2.54m, 検出幅0.48m, 深さ17cmを測る。埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトで, 炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器8点(杯1, 細片7), 土師器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-75

B-1区東部で検出した楕円形を呈する土坑で, SD-18・19とP-67に切られる。楕円形を呈し, 検出長1.08m, 検出幅1.10m, 深さ8cmを測る。埋土は褐色シルト質中粒砂で粘性は弱く, マンガンを多く含み, 少量の炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-76

SK-75の南で検出した楕円形を呈する土坑で, P-68を切る。検出長1.43m, 検出幅0.94m, 深さ5cmを測る。埋土は褐色シルト質中粒砂で粘性は弱く, マンガンを多く含み, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-77

SK-76の南で検出した不整楕円形を呈する土坑で, P-69・70を切る。検出長1.35m, 検出幅0.92m, 深さ5cmを測る。埋土は褐色シルト質中粒砂で粘性は弱く, マンガンを多く含み, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物は皆無であった。

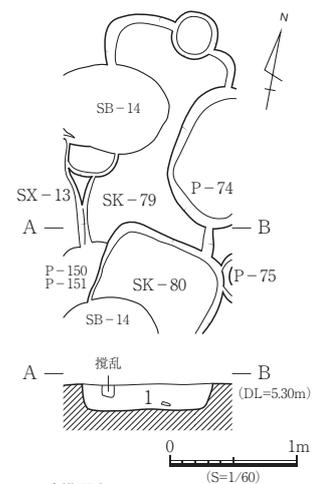
SK-78

調査区南東部で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で, 東と南は調査区外へ続く。検出長1.43m, 検出幅0.56m, 深さ18cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-79(遺構: 図84, 遺物: 図86-177)

SD-20の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-80を切り, SB-13・14とP-74に切られる。検出長2.23m, 検出幅1.06m, 深さ21cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで, マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器30点(杯6, 碗1, 細片23), 土師器6点(甕2, 細片4), 鉄滓2点がみられ, 土師質土器碗(177)を図示した。177は土師質土器碗で, 平高台を呈する。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが, 摩耗するため不明瞭である。

SK-80(遺物: 図86-178)



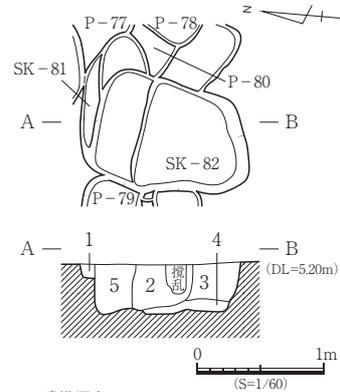
遺構埋土
1. 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで,
マンガンを含む

図84 SK-79

SK-79の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SB-14とSK-79、P-75に切られる。検出長99cm、検出幅92cm、深さ20cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器9点(椀1, 細片8), 土師器片1点がみられ、土師質土器椀(178)を図示した。178は土師質土器椀で、平高台を呈する。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

SK-81(遺構: 図85, 遺物: 図86-179・180)

SK-80の南で検出した楕円形を呈する土坑で、P-79を切り、SX-13に切られる。検出長92cm、検出幅35cm、深さ6cmを測る。埋土はにぶい黄色中粒砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器14点(椀1, 小皿1, 細片12), 土師器片6点, 鉄滓1点がみられ、土師質土器椀(179)と土師質土器小皿(180)を図示した。179は土師質土器椀で、輪高台を呈する。断面が台形を呈する高台を貼付する。外面は横方向のナデ調整, 内面は著しく摩耗するため調整は不明である。180は土師質土器小皿で、口径は8.9cmを測る。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。



遺構埋土

1. にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂質シルトで、炭化物を含む(SK-81)
2. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(SK-82柱痕)
3. オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルト(SK-82掘方埋土1)
4. 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、淡黄色シルトブロックを含む(SK-82掘方埋土2)
5. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、淡黄色シルトブロックを含む(SK-82掘方埋土3)

図85 SK-81・82

SK-82(遺構: 図85, 遺物: 図86-181)

SK-81の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SX-13とP-80に切られる。長辺1.04m、短辺0.80m、深さ44cm、柱痕径38cmを測る。埋土は4層に分かれる。出土遺物には土師質土器34点(杯4, 細片30), 土師器10点(釜2, 細片8), 須恵器4点(椀1, 細片3), 瓦器片2点がみられ、土師器釜(181)を図示した。181は土師器釜である。口縁部は直立し、断面が方形を呈する鐙を水平に貼付する。調整は内面が斜方向のヘラナデ, 口縁部は横ナデ, 胴部外面がナデで、鐙の下には指頭圧痕が残る。

SK-83

B-1区北部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SD-23を切る。長辺1.28m、短辺0.55m、深さ17cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含んでいた。出土遺物には

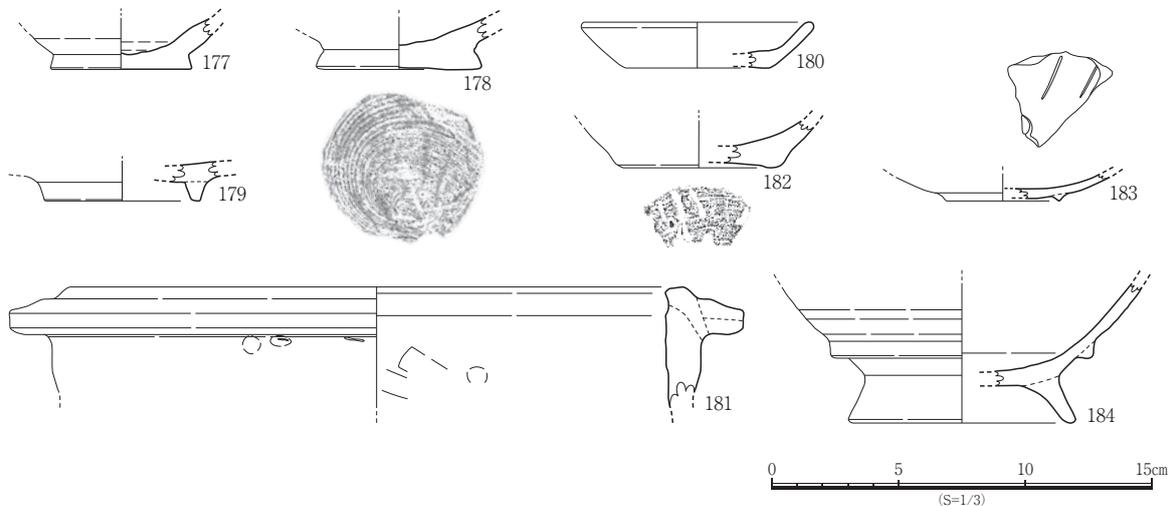


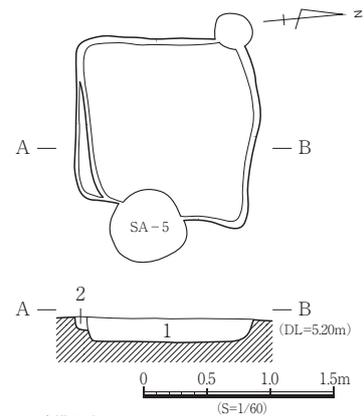
図86 SK-79~82・84・86出土遺物実測図

2. B区

土師質土器3点(杯1, 細片2)がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-84(遺構:図87, 遺物:図86-182・183)

SK-83の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で, 長辺1.47m, 短辺1.44m, 深さ18cmを測る。埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器34点(杯2, 小皿2, 細片30), 土師器4点(甕2, 細片2), 須恵器4点(椀1, 壺1, 細片2), 瓦器6点(椀4, 細片2), 鉄滓1点が見られ, 土師質土器杯(182)と瓦器椀(183)を図示した。182は土師質土器杯で, 体部は外上方へまっすぐ伸びる。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。183は瓦器椀で, 底部には断面が三角形を呈する小さな高台を貼付する。調整はナデで, 見込には平行暗文がみられる。器壁が薄く, 炭素は吸着しない。



遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含み, 粗粒砂を含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで, 粗粒砂を含む

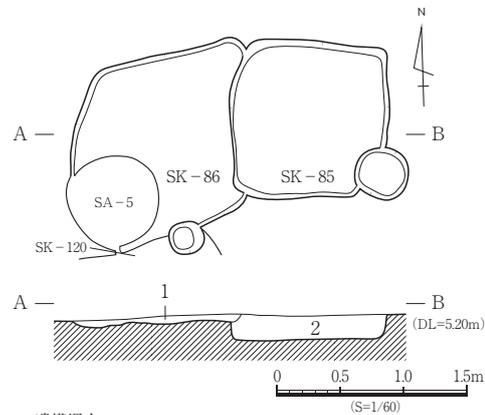
図87 SK-84

SK-85(遺構:図88)

SK-84の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-86に切られる。一辺1.27m, 深さ21cmを測る。埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含み, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器20点(杯2, 細片18), 瓦器椀1点, 青磁碗1点が見られたが, 図示できるものはなかった。

SK-86(遺構:図88, 遺物:図86-184)

SK-85の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-85を切る。検出長1.42m, 検出幅1.36m, 深さ9cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器3点(杯1, 細片2), 瓦器椀1点, 青磁片1点が見られ, 土師質土器杯(184)を図示した。184は二重高台の土師質土器杯で, 高台は高く「ハ」の字状に開き, 体部下には断面が三角形を呈する突帯を貼付する。調整は体部が回転ナデ, 高台は横方向のナデ, 高台内はナデとみられるが, 摩耗するため調整は不明瞭である。



遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと炭化物を少し含む(SK-86)
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含み, 炭化物を少し含む(SK-85)

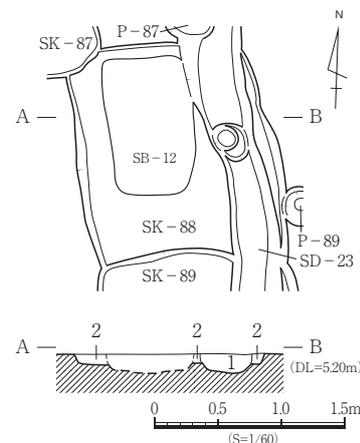
図88 SK-85・86

SK-87

SK-84の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-88を切る。長辺1.04m, 短辺0.91m, 深さ9cmを測り, 埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-88(遺構:図89, 遺物:図94-185)

SK-87の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SB-12とSK-87・89, SD-23, P-89に切られる。検出長1.81m, 短



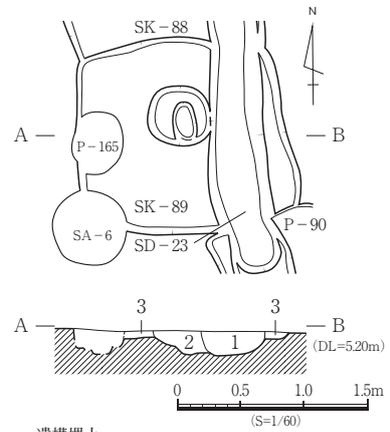
遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを少し含む, 炭化物を含む(SK-23)
2. オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルト(SK-88)

図89 SK-88, SD-23

辺1.62m、深さ10cmを測る。埋土はオリブ褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器23点(杯3, 椀1, 細片19), 須恵器片2点がみられ, 土師質土器椀(185)を図示した。185は土師質土器椀で, 平高台を呈する。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。

SK-89(遺構:図90, 遺物:図94-186~190)

SK-88の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-88を切り, SD-23に切られる。長辺1.62m, 短辺1.59m, 深さ11cmを測る。埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトで, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器703点(杯13, 椀2, 小皿1, 細片687), 土師器片4点, 須恵器3点(椀1, 細片2), 土製品土錘1点がみられ, 土師質土器杯(186~188)と土師質土器小皿(189), 須恵器椀(190)を図示した。186は土師質土器杯で, 体部が大きく外へ開く。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは静止糸切りである。187も土師質土器杯で, 口縁部が残存する。調整は回転ナデで, ロクロ目が顕著に残る。188も土師質土器杯で, 体部は外上方へまっすぐ伸びる。ロクロ水挽成形で, 調整は回転ナデとみられるが, 摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。189は土師質土器小皿で, 口縁部は底部より湾曲して立ち上がる。口径は8.8cmを測る。調整は内面が回転ナデの後ナデとみられるが, 摩耗するため不明瞭で, 口縁部は横ナデである。底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。190は須恵器椀で, 輪高台を呈する。底部には断面が方形を呈する低い高台を貼付する。体部の調整は回転ナデで, 外面にはミガキを施す。高台内の調整は回転ヘラ切りの後ナデとみられるが, 摩耗するため不明瞭である。



遺構埋土
 1. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを少し含み, 炭化物を含む(SD-23)
 2. 灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルトで, 炭化物を多く含む(ピット)
 3. にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルトで, 炭化物を少し含む(SK-89)

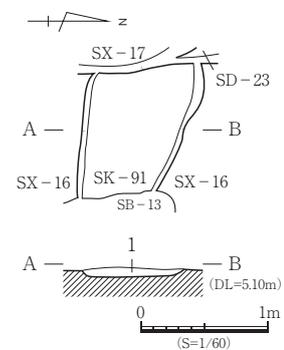
図90 SK-89, SD-23

SK-90(遺物:図94-191・192)

SK-89の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で, P-105を切り, SB-12に切られる。長辺1.98m, 短辺1.04m, 深さ15cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器107点(杯8, 椀4, 皿1, 小皿1, 細片93), 土師器23点(甕1, 細片22), 須恵器16点(椀5, 細片11), 鉄釘1点がみられ, 土師質土器小皿(191)と須恵器椀(192)を図示した。191は土師質土器小皿で, 口縁部は外上方へまっすぐ伸びる。口径は10.2cmを測る。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。192は須恵器椀で, 器壁が薄く, 口縁部は内湾する。調整は回転ナデで, 口縁部内面には火襻が残る。

SK-91(遺構:図91, 遺物:図94-193)

SK-90の南東で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で, SX-16を切り, SK-92に切られる。検出長1.06m, 短径0.94m, 深さ9cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと粗粒砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器31点(杯4, 椀2, 細片25), 須恵器2点(椀1, 細片1)がみられ, 土師質土器椀(193)を図示した。193は土師質土器椀で, 輪高台を呈する。底部には断面が方形を呈する低い高台を貼付する。調整



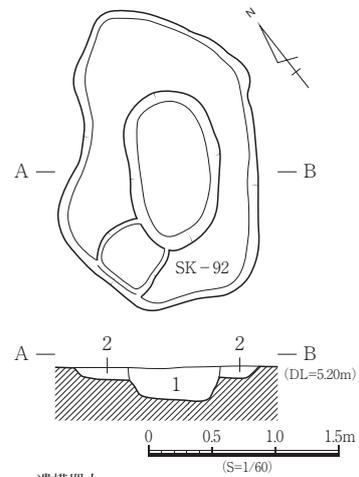
遺構埋土
 1. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと粗粒砂を含む

図91 SK-91

は回転ナデで、内面と外面上部には丁寧なナデ調整を施す。底部外面は横方向のナデ調整を施す。

SK-92(遺構:図92, 遺物:図94-194~196)

SK-91の西で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-91とSD-23, SX-16~18を切る。長径2.30m, 短径1.59m, 深さ11cmを測る。埋土はにぶい黄色中粒砂質シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器80点(杯8, 椀1, 小皿11, 細片60), 土師器2点(甕1, 釜1), 須恵器片1点, 弥生土器片1点がみられ、土師質土器杯(194)と土師質土器小皿(195), 土師器釜(196)を図示した。194は土師質土器杯である。器壁が厚く、口縁部はやや内湾する。調整は回転ナデである。195は土師質土器小皿で、口縁部は体部より湾曲して立ち上がる。口径は9.2cmを測る。調整は器面が著しく摩耗するため不明である。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、摩耗するため不明瞭である。196は土師器釜で、口縁部は僅かに内湾し、断面が方形を呈する鏝を貼付する。調整は内面が横方向のナデ、口縁部が横ナデ、胴部外面が縦方向のハケである。



遺構埋土
1. にぶい黄橙色(10YR6/4)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(ビット)
2. にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(SK-92)

図92 SK-92

SK-93

SK-92の南で検出した楕円形を呈する土坑で、SX-16を切る。長径1.07m, 検出幅0.51m, 深さ3cmを測り、埋土は灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器片1点がみられたが、図示できなかった。

SK-94

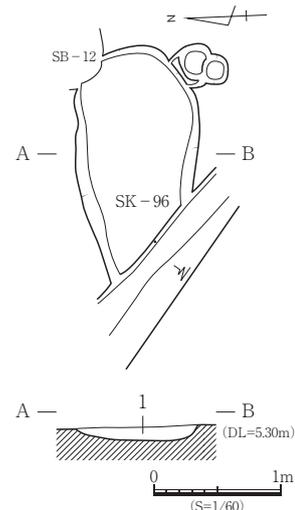
SK-90の西で検出した方形を呈する土坑で、SB-12に切られる。長辺1.98m, 検出幅0.67m, 深さ4cmを測り、埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器片1点がみられたが、図示できなかった。

SK-95

SK-94の北西で検出した楕円形を呈する土坑で、検出長1.00m, 短径1.20m, 深さ13cmを測り、埋土は灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかった。

SK-96(遺構:図93, 遺物:図94-197)

SK-95の南で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-97とSX-18を切り、SB-12に切られ、西は調査区外へ続く。検出長1.85m, 短径0.96m, 深さ10cmを測り、埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトで、3cm大の黄色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器59点(杯4, 細片55), 土師器片1点, 須恵器椀1点がみられ、須恵器椀(197)を図示した。197は須恵器椀で、輪高台を呈する。調整は内面がナデで、高台内は回転糸切りの後、断面が方形を呈する高台を横方向のナデ調整で「ハ」の字状に貼付する。



遺構埋土
1. オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトで、3cm大の黄色礫と炭化物を含む

図93 SK-96

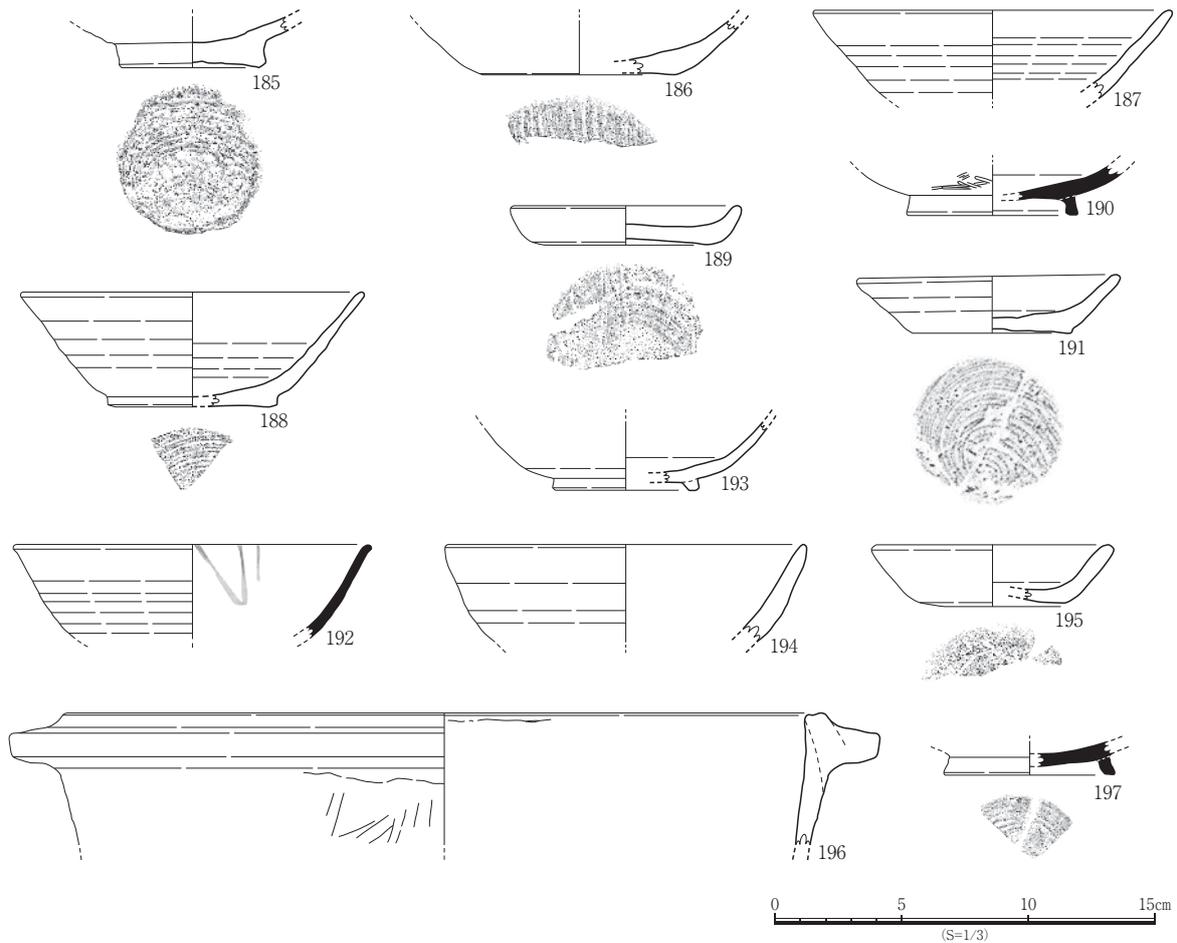


図94 SK-88～92・96出土遺物実測図

SK-97

SK-96の西で検出した方形を呈する土坑で、SB-12とSK-96に切られる。長辺90cm、短辺74cm、深さ24cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルト質粗粒砂で、粘性は弱かった。出土遺物は皆無であった。

SK-98

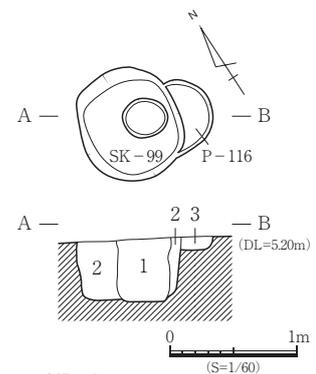
調査区中央部で検出した楕円形を呈する土坑で、SB-12に切られる。検出長1.13m、検出幅1.02m、深さ19cmを測り、埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-99(遺構：図95)

SK-98の南西で検出した楕円形を呈する土坑で、P-116を切る。長径1.00m、短径0.70m、深さ75cm、柱痕径26cmを測り、埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器75点(杯4、細片71)、土師器片1点、瓦器片1点、鉄滓1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-100

SK-99の北西で検出した不整形方形を呈する土坑で、SD-24に切



- 遺構埋土
1. にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを少し含む(SK-99柱痕)
 2. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(SK-99掘方)
 3. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト(P-116)

図95 SK-99, P-116

2. B区

られる。長辺1.56m，短辺1.50m，深さ12cmを測り，埋土はにぶい黄褐色シルト質粗粒砂で，粘性は弱かった。出土遺物は皆無であった。

SK-101

調査区西部で検出した土坑で，SD-25・38に切られる。検出長1.24m，検出幅0.76m，深さ6cmを測り，埋土は褐色中粒砂質シルトで，マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器5点(杯1，細片4)がみられたが，図示できるものはなかった。

iii 溝跡

SD-18

調査区東部で検出した南北方向の溝跡で，SK-75を切り，SD-19とP-67に切られる。検出長2.94m，検出幅0.40m，深さ6cmを測り，基底面は南(4.980m)から北(4.951m)へ傾斜する。断面は皿状を呈し，埋土は褐色シルト質中粒砂で粘性は弱く，マンガンを多く含み，炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師器甕1点がみられたが，図示できなかつた。

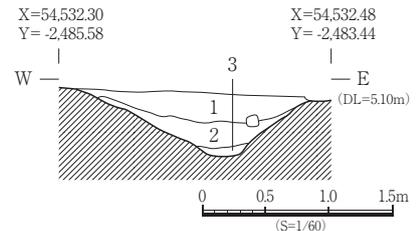
SD-19

SD-18の西で検出した南北方向の溝跡で，SK-75とSD-18を切る。検出長4.06m，検出幅0.41m，深さ4cmを測り，基底面は南(4.966m)から北(4.939m)へ傾斜する。断面は皿状を呈し，埋土は灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器甕1点がみられたが，図示できなかつた。

SD-20(遺構：図96，遺物：図97～99-198～223)

調査区東部で検出した南北方向の溝跡で，両端は調査区外へ続き，SK-73とSX-14を切る。検出長19.09m，検出幅2.13m，深さ64cmを測り，基底面は南(4.509m)から北(4.321m)へ傾斜する。断面はV字形を呈し，埋土は3層に分かれる。出土遺物には土師質土器860点(杯89，椀5，小皿5，細片761)，土師器33点(甕4，釜5，細片24)，須恵器8点(椀1，甕1，細片6)，瓦器2点(椀1，細片1)，東播系須恵器12点(片口鉢10，甕1，細片1)，瓦質土器33点(鍋7，釜3，播鉢1，火鉢か2，細片20)，古瀬戸壺1点，備前焼播鉢1点，常滑焼6点(甕2，甕か3，細片1)，白磁碗2点，青磁碗4点，土製品土錘4点，石製品鍋1点，鉄製品6点(釘4，不明2)，鉄滓7点がみられた。図示したのは上層より出土した198～221の24点と，中層より出土した常滑焼甕(222)，下層より出土した土師質土器杯(223)である。

198・199は土師質土器杯である。198は体部が外上方へ立ち上がる。調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。199は体部が上方へ立ち上がった後，外上方へまっすぐ伸びる。調整は回転ナデで，底部の切り離しは摩耗するため不明である。200は土師器甕とみられ，胴部の一部が残存する。器壁が厚く，調整は内面が粗いナデで指頭圧痕が残り，外面は矢羽根状のタタキ目が残る。搬入品とみられる。201は紀伊型の土師器釜で，頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁端部は内傾して短く伸びる。調整は内面がヘラナデ及び丁寧なナデ，口縁部が横ナデ，胴部外面はナデとみられるが，おこげが付着し調整は不明である。202は土師器釜で，口縁は直立し，断面が方形を呈する鏝を水平に貼付する。調整は内面がナデ，口縁部が横ナデ，鏝下面から胴部外面が粗雑な横方向のナデである。口縁部内面には煤が付着する。203は須恵器椀で，平高台を呈する。底部の器



遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト
2. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで，粗粒砂を含む
3. オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂で，にぶい黄色シルトブロックを含む

図96 SD-20

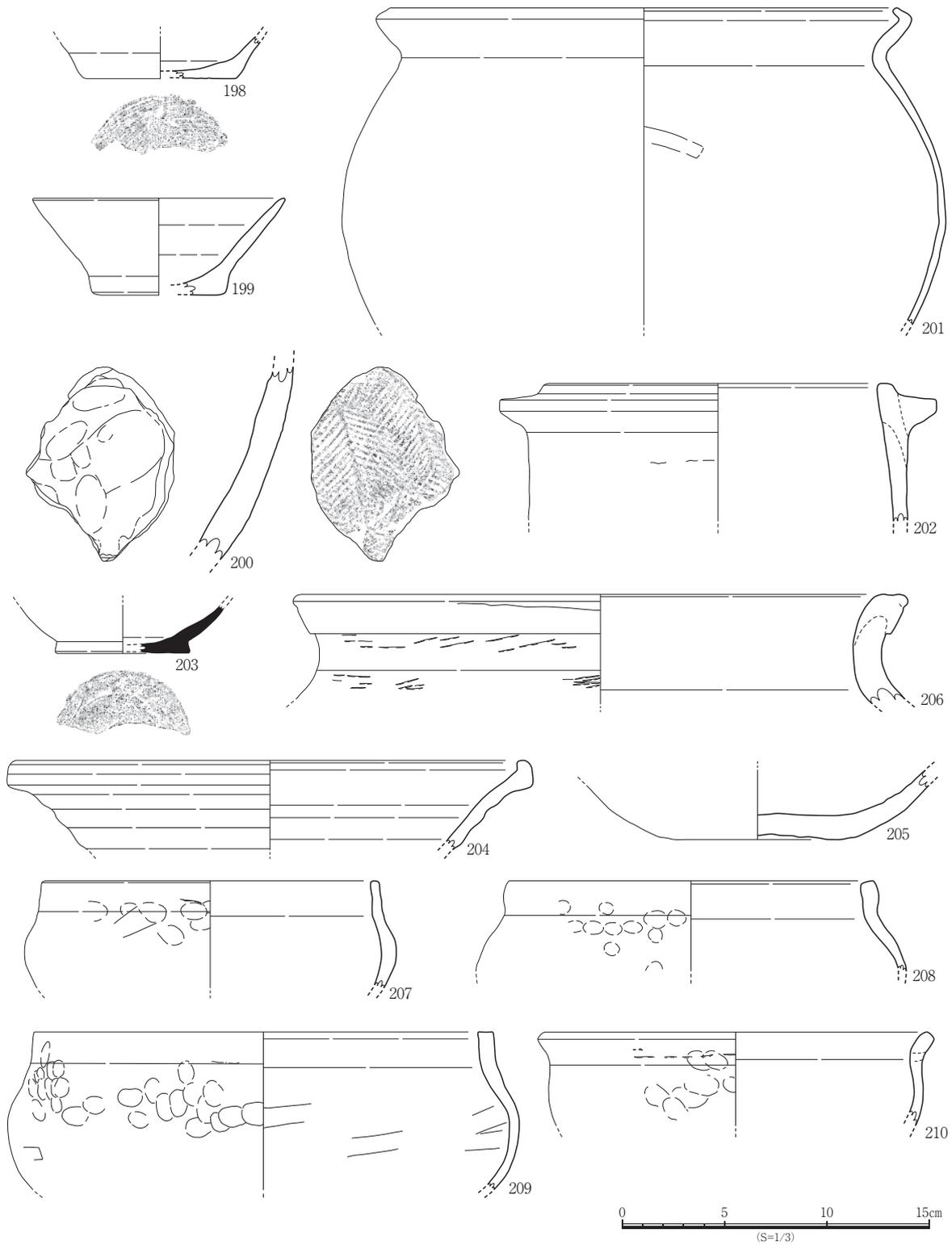


図97 SD-20出土遺物実測図1

壁が薄く、体部は内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。204・205は東播系須恵器片口鉢である。204は体部が外上方へまっすぐ伸び、口縁端部は上下に拡張する。調整は回転ナデである。205は体部が底部より緩やかに湾曲して立ち上がる。調整は体

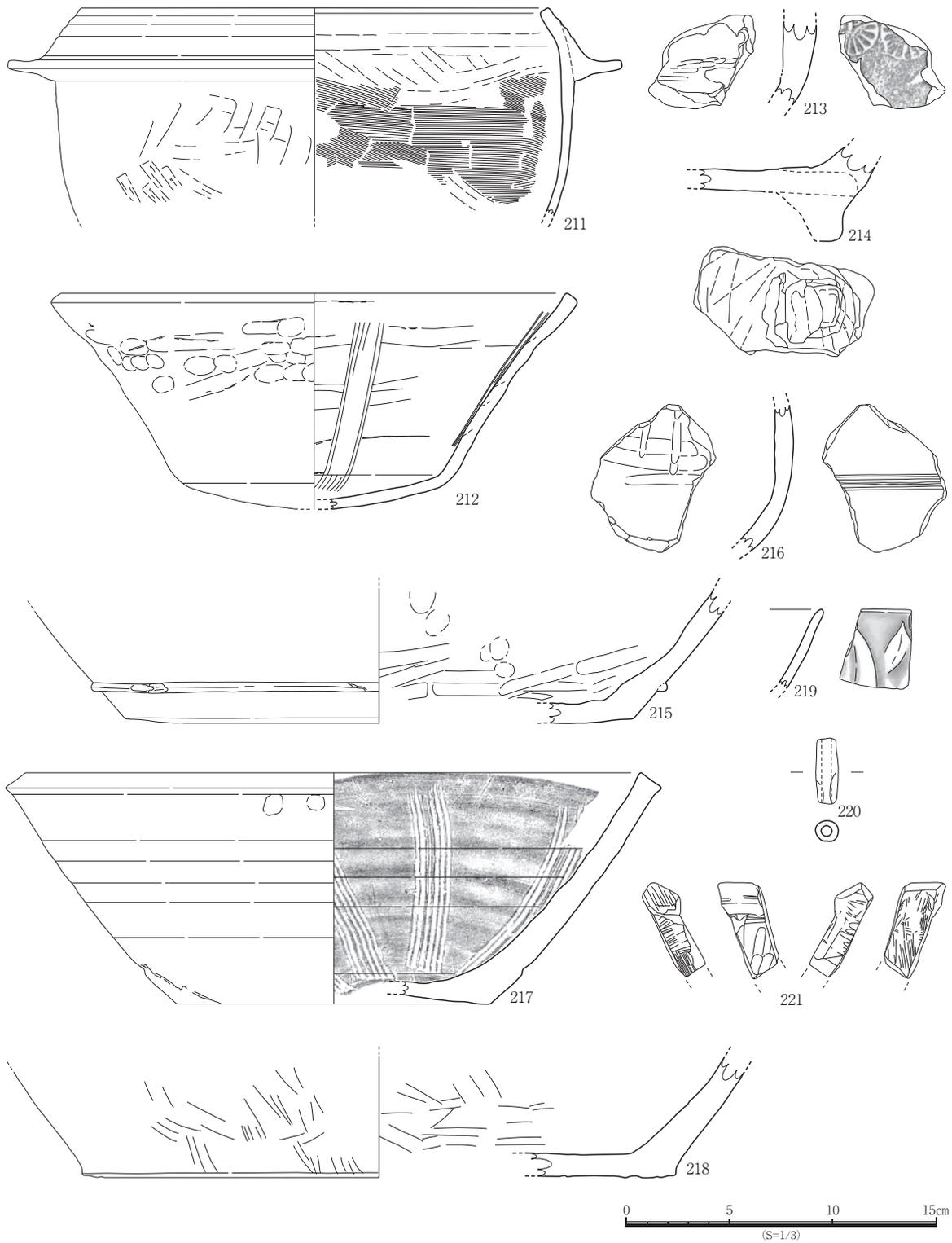


図98 SD-20出土遺物実測図2

部外面が回転ナデで、その他は摩耗するため調整は不明である。206は東播系須恵器甕である。頸部は大きく外反し、口縁部は肥厚する。焼成不良で、頸部外面は平行のタタキ目が残るが、その他は摩耗するため調整は不明である。207～210は瓦質土器鍋である。207～209は口縁部が直立す

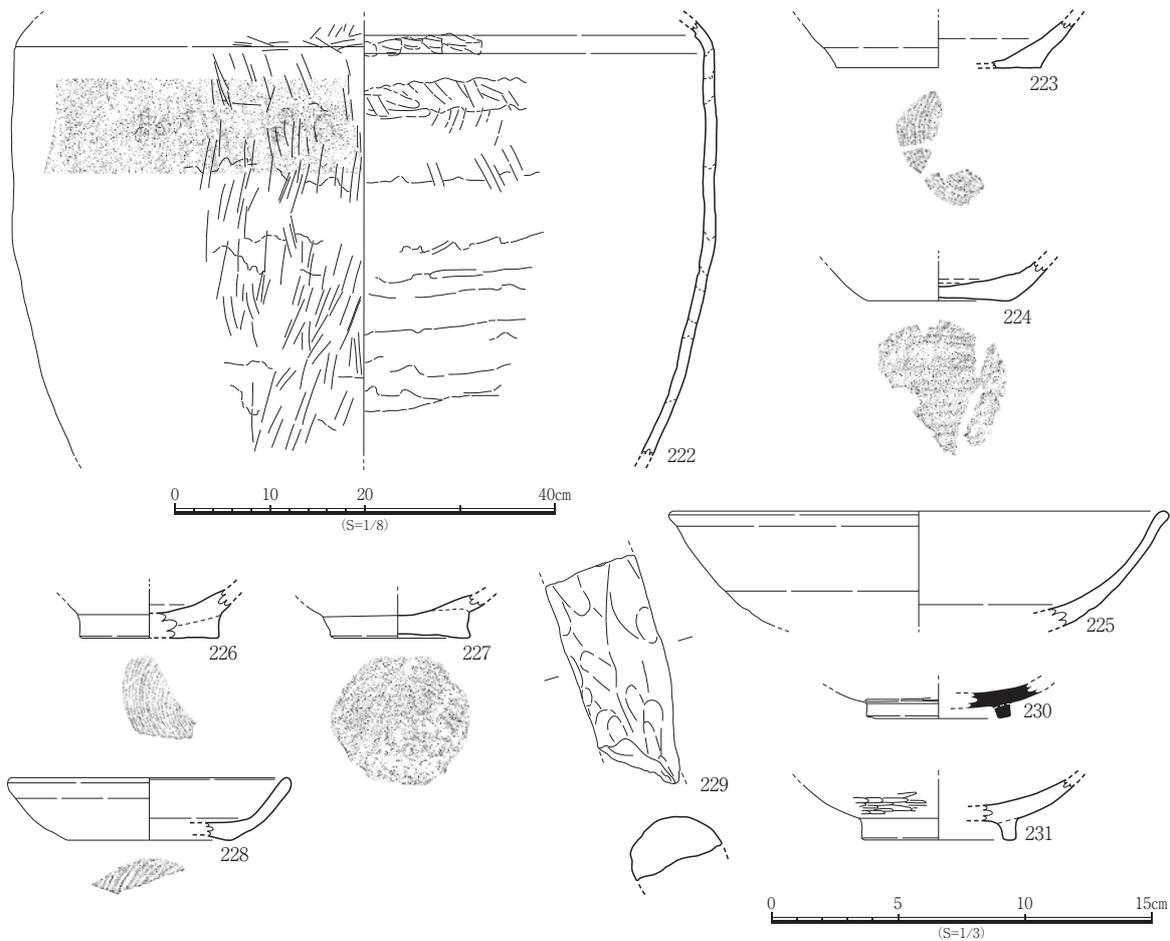


図99 SD-20・23出土遺物実測図

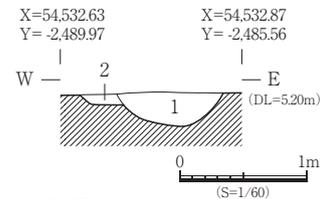
る。調整は内面が横方向のナデ、口縁部が横ナデ、頸部外面から胴部外面がナデで、指頭圧痕が残る。208の胴部内面には炭素が吸着していない。209の胴部外面の下半には煤が付着する。210は口縁部が外反する。調整は内面が摩耗するため不明で、口縁部は横ナデ、胴部外面はナデ調整で、指頭圧痕が残る。211は瓦質土器釜である。口縁部は内湾し、薄く幅の広い鏝を水平に貼付する。調整は胴部内面が横方向のハケ、口縁部が横ナデ、胴部外面は上部が幅が広い横方向のヘラケズリ、下部が縦方向のヘラケズリである。外面の鏝下面から胴部にかけて煤が付着する。212は瓦質土器播鉢である。丸底で、体部はやや外反し、口縁端部を四角く収める。調整は内面が横方向のナデ、口縁部が横ナデ、体部外面はナデで、指頭圧痕が横方向に並ぶ。底部外面はナデ調整で、一部に煤が付着する。内面には櫛描による播目が放射状に6条みられ、底部まで伸びる。213は瓦質土器火鉢で、奈良火鉢の浅鉢とみられる。調整はナデで、外面には菊花の印花文がみられる。214は瓦質土器風炉または火鉢とみられる。胴部は方形とみられ、底部には脚を貼付する。脚の上部は断面が円形、接地面は方形を呈する。調整は内面と脚部がナデで、底部は板作りで外面に砂が付着する。215は瓦質土器甕とみられ、体部は外上方へやや内湾して立ち上がる。胴部外面には断面が半円形を呈する小さな突帯を貼付する。調整は内面が粗いナデで指頭圧痕が残り、底部外面はナデで砂が付着する。体部外面は摩耗するため調整は不明である。216は古瀬戸壺または瓶子で、胴部の一部が残存する。内面は縦または横方向の粗いナデで無釉、外面には櫛描文がみられ灰釉を施す。217は備前

2. B区

焼播鉢で、体部は緩やかに内湾し、口縁端部は四角く収め、外へ僅かに摘む。調整は内面から体部外面が回転ナデ、底部外面は無調整である。内面には6条単位の播目がみられる。218は常滑焼甕で、底部が残存する。調整は内面がナデ、外面が縦方向のナデ、底部外面は無調整である。219は青磁碗で、外面には鎬蓮弁文がみられる。蓮弁文は幅が狭く、先端が尖る。全面に青味を帯びた透明感の強い青磁釉を施す。220は土製品土鍾で、円柱形を呈する。小型で、全面にナデ調整を施す。221は石製品石鍋で、口縁部の一部が残存する。口縁部には断面が台形を呈する鐳が付く。破片を砥石として再利用しており、断面を含め4面に使用痕が残る。滑石製である。222は中層より出土した常滑焼甕である。胴部は上方へ立ち上がり、肩部は胴部より屈曲して内傾する。粘土帯積上げ成形で、調整は内面がナデで、肩部には指頭圧痕が顕著に残る。外面の調整は胴部が縦方向の板ナデまたはヘラナデで、上部には押印文がみられ、肩部は横方向のナデである。223は下層より出土した土師質土器杯である。体部は底部より屈曲して外上方へ立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

SD-21(遺構: 図76・100)

SD-20の西で検出した南北方向の溝跡で、両端は調査区外へ続き、SD-22とP-76・79を切り、SX-13・15に切られる。検出長12.21m、検出幅0.81m、深さ31cmを測り、基底面は南(4.866m)から北(4.803m)へ傾斜する。断面はU字形を呈し、埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器70点(杯6、碗2、細片62)、土師器甕4点、須恵器碗1点、瓦器4点(碗3、細片1)、鉄滓1点がみられたが、図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(SD-21)
 2. オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(SD-22)

図100 SD-21・22

SD-22(遺構: 図100)

SD-21の西で検出した南北方向の溝跡で、SD-21に切られる。検出長3.27m、検出幅0.40m、深さ10cmを測り、基底面は北(5.036m)から南(4.955m)へ傾斜する。断面は台形を呈し、埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD-23(遺構: 図89・90, 遺物: 図99-224~231)

SD-22の西で検出した南北方向の溝跡で、SK-88・89とP-92を切り、SK-83・92とP-87・90に切られる。検出長7.41m、検出幅0.57m、深さ25cmを測り、基底面は南(4.988m)から北(4.976m)へ傾斜する。断面はU字形を呈し、埋土は褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを少し含み、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器194点(杯18、碗10、細片166)、土師器18点(甕4、釜2、細片12)、須恵器20点(碗3、細片17)、黒色土器碗1点、土製品土鍾1点、鉄釘1点がみられ、土師質土器杯(224)と土師質土器碗(225~227)、土師質土器小皿(228)、土師器釜(229)、須恵器碗(230)、黒色土器碗(231)を図示した。

224は土師質土器杯で、体部は底部より緩やかに内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは静止糸切りである。225~227は土師質土器碗である。225は口縁部が内湾し、外面の体部下部は回転ケズリ調整を施したとみられるが、摩耗するため調整は不明である。226・227は平高台を呈する。いずれも摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。228は土師質土器小皿で、口縁部は内湾する。口径は10.9cmを測る。調整は回転ナデで、底部の切

り離しは回転糸切りである。229は土師器釜で、脚部の一部が残存する。調整はナデで、指頭圧痕が残る。230は須恵器椀で、輪高台を呈する。底部には断面が方形を呈する低い高台を貼付する。調整は内面がナデ、体部外面が横方向のミガキ、高台と高台内はナデである。231は両黒の黒色土器椀である。回転台成形で、輪高台を呈し、直立する細い高台を貼付する。調整は内面がナデ、体部外面は回転ナデの後横方向のミガキ、高台と高台内は横方向のナデである。在地産である。

SD-24

調査区西部で検出した南北方向の溝跡で、SK-100とP-123を切る。全長3.13m、全幅0.70m、深さ12cmを測り、基底面は北(4.970m)から南(4.918m)へ傾斜する。断面は皿状を呈し、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器9点(杯1、細片8)、瓦器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-25(遺構:図76・101・156, 遺物:図103-232~237)

調査区北部で検出した東西方向の溝跡で、東は調査区外へ続き、西は攪乱に切られる。SK-101とP-128を切り、近世の溝跡であるSD-37に切られる。検出長17.62m、検出幅1.57m、深さ62cmを測り、基底面は東(4.496m)から西(4.462m)へ傾斜する。断面はV字形を呈し、埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器692点(杯79、椀3、小皿5、細片605)、土師器片4点、須恵器6点(椀3、甕2、細片1)、瓦器42点(椀21、小皿2、細片19)、東播系須恵器3点(片口鉢2、細片1)、瓦質土器5点(鍋1、細片4)、白磁4点(碗3、細片1)、青磁碗2点、土製品土錘1点、鉄釘1点がみられ、上層から

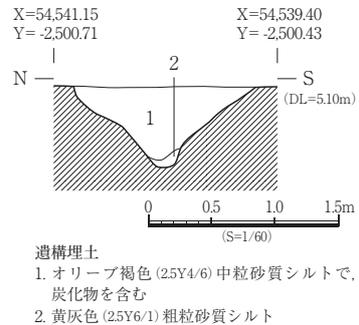


図101 SD-25

ら出土した土師質土器杯(232・233)と須恵器甕(234)、東播系須恵器片口鉢(235)、下層から出土した土師質土器杯(236)と土師質土器小皿(237)を図示した。232・233は土師質土器杯で、調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。233は体部下部の器壁が厚く、内面は回転ナデ調整とみられるが、摩耗するため調整は不明瞭である。234は須恵器甕で、頸部は大きく外反し、口縁端部は肥厚して四角く収める。調整は頸部外面が格子状のタタキで、その後回転ナデを施し、頸部内面にはナデを加える。口縁部内面には自然釉が掛かる。235は東播系須恵器片口鉢で、口縁部は肥厚し上下に拡張する。調整は回転ナデで、口縁部外面には重ね焼痕が残る。236は土師質土器杯で、底径が大きく、体部は比較的上方へ立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。237は土師質土器小皿で、口縁部は器壁が薄く、まっすぐ伸びる。口径は8.4cmを測る。著しく摩耗するため調整は不明である。

SD-26(遺構:図76・102, 遺物:図103-238~240)

SD-25の北で検出した東西方向の溝跡で、東は調査区外へ続き、P-135を切り、上面の溝跡であるSD-31と近世の溝跡であるSD-36に切られる。検出長12.62m、検出幅0.72m、深さ82cmを測り、基底面は東(4.253m)から西(4.215m)へ傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は3層に分かれる。出土遺物には土師質土器59点(杯6、細片53)、瓦器5点(椀3、細片2)、瓦質土器鍋か1点、備前焼甕1点、鉄釘1点がみられ、土師質土器杯(238)と瓦質土器鍋か(239)、備前焼甕(240)を図示した。238は土師質土器杯で、

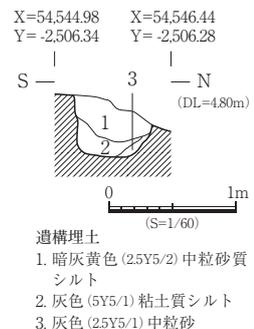


図102 SD-26

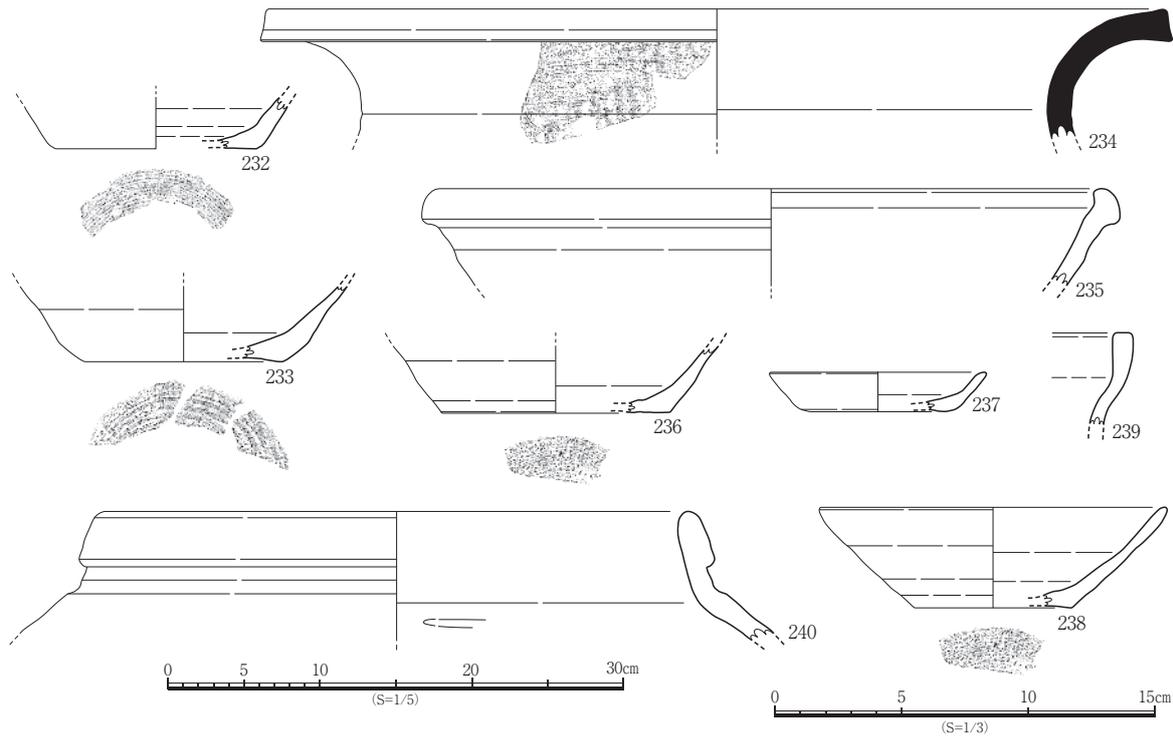


図103 SD-25・26出土遺物実測図

底径が小さく、体部は外上方へ大きく開く。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。239は瓦質土器鍋とみられ、口縁部は受け口状を呈し、直立する。調整は頸部内面がナデ、口縁部が横ナデ、頸部外面が横方向の強いナデである。240は備前焼甕である。頸部は内傾し、口縁部は頸部より屈曲してやや上方に立ち上がり、断面が楕円形を呈する大きな玉縁をなす。調整は頸部が横方向のナデで、内面は粗く施し、外面の玉縁下部は強い横ナデで凹む。口縁部は横ナデ調整である。

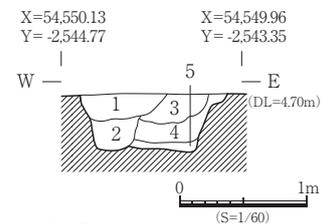
SD-27(遺構：図104)

B-2区南部で検出した南北方向の溝跡で、南は調査区外へ続き、近世のピットであるP-189・190に切られる。検出長3.54m、検出幅0.89m、深さ49cmを測り、基底面は南(4.208m)から北(4.112m)へ傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器58点(杯4、碗1、細片53)、土師器6点(甕4、細片2)、瓦器碗6点、青磁碗1点、鉄釘1点がみられたが、図示できるものはなかった。

iii 大型土坑跡

SX-12(遺構：図105, 遺物：図106-241~244)

調査区東部で検出した隅丸方形を呈する大型土坑で、P-76を切り、SB-12に切られる。長辺2.72m、短辺1.52m、深さ28cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器81点(杯4、小皿3、細片74)、土師器12点(甕2、細片10)、須恵器4点(碗2、甕1、細片1)がみられ、土師質土



遺構埋土

1. 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂(P-189)
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂で、極粗粒砂を含む(P-190)
3. 黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂で、0.5cm大の黄色礫を含む(溝跡)
4. 黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質シルトで、灰色シルトブロックを含む(SD-27埋土1)
5. 黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂で、淡黄色シルトブロックを含む(SD-27埋土2)

図104 SD-27,P-189・190

器杯(241)と土師質土器小皿(242), 土師器甕(243), 須恵器椀(244)を図示した。241は土師質土器杯で, 底部が残存する。調整は回転ナデの後, 見込にナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。242は土師質土器小皿で, 口縁部は内湾する。口径は9.4cmを測る。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。243は土師器甕で, 口縁部の一部が残存する。口縁部は外反し, 端部を細く摘み上げる。調整は横ナデの後, 内面に横方向のハケを施す。244は須恵器椀である。焼成不良で褐色に近い色調を呈する。摩耗するため調整は不明である。

SX-13

SX-12の南で検出した隅丸方形を呈するとみられる大型土坑で, SK-81・82とSD-21, P-79を切り, SB-13とP-76・81に切られる。検出長2.52m, 全幅1.70m, 深さ11cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器7点(小皿1, 細片6), 土師器片3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SX-14

SX-13の南東で検出した楕円形を呈する大型土坑で, SD-20とP-78に切られる。長径2.68m, 検出幅1.18m, 深さ11cmを測る落ち込み状の遺構で, 肩は不明瞭である。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器10点(杯1, 細片9), 土師器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SX-15(遺物: 図106-245~248)

SX-14の西で検出した不整楕円形を呈する大型土坑で, 南は調査区外へ続く。SD-21を切り, P-81~85・95に切られる。検出長9.62m, 検出幅1.84m, 深さ7cmを測る落ち込み状の遺構で, 肩は不明瞭である。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には

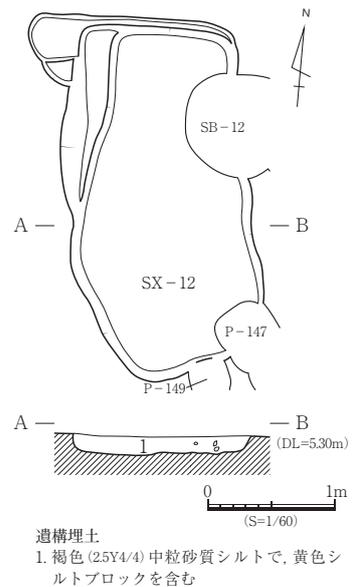


図105 SX-12

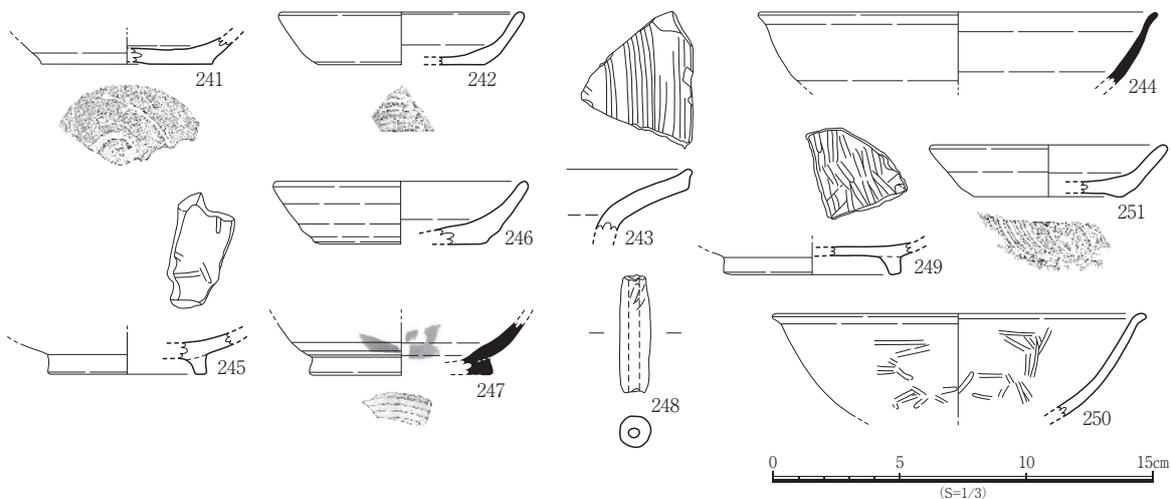


図106 SX-12・15・16・18出土遺物実測図

2. B区

土師質土器36点(杯3, 碗1, 小皿1, 細片31), 土師器10点(甕1, 細片9), 須恵器碗1点, 瓦器片1点, 土製品土錘2点, 鉄滓1点がみられ, 土師質土器碗(245)と土師質土器小皿(246), 須恵器碗(247), 土製品土錘(248)を図示した。245は土師質土器碗で, 輪高台を呈する。底部には断面が方形を呈する高台を貼付する。調整は内面がナデの後ミガキ, 外面は回転ナデの後, 高台を貼付する。246は土師質土器小皿である。器高が高く, 口縁部は内湾する。調整は回転ナデで, 底部外面には僅かに板状圧痕とみられる痕跡が残るが, 摩耗するため底部の切り離しは不明である。247は須恵器碗で, 平高台を呈する。体部はやや内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。内外面には火襻がみられる。248は土製品土錘で, 紡錘形を呈する。全面にナデ調整を施したとみられるが, 摩耗するため調整は不明である。

SX-16(遺物: 図106-249)

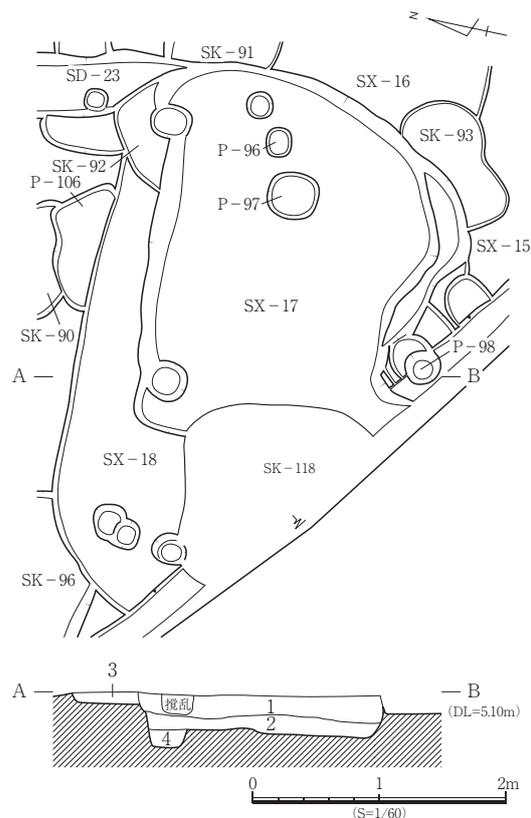
SX-15の北で検出した大型土坑で, SD-21とP-93・94を切り, SK-91~93とSX-17に切られる。検出長2.78m, 検出幅1.69m, 深さ5cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点, 土師器片1点, 図示した黑色土器碗(249)がみられた。249は黑色土器碗で, 輪高台を呈する。底部には低く直立する高台を貼付する。調整は内面が密なミガキ, 高台が横方向のナデ, 高台内がナデである。内面には黒化処理を施す。在地産である。

SX-17(遺構: 図107)

SX-16の西で検出した隅丸方形を呈する大型土坑で, SX-16・18を切り, SK-92とP-96・97・106に切られる。検出長3.00m, 検出幅2.50m, 深さ33cmを測る。埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器14点(杯1, 細片13), 土師器6点(甕1, 釜1, 細片4), 瓦器片2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SX-18(遺構: 図107, 遺物: 図106-250・251)

SX-17の北で検出した隅丸方形を呈する大型土坑で, 南は調査区外へ続く。SK-92・96とSX-17, P-98・106に切られる。検出長3.57m, 検出幅1.04m, 深さ7cmを測る。埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器41点(杯6, 小皿1, 細片34), 土師器片2点, 須恵器3点(碗1, 細片2), 金属製品1点がみられ, 土師質土器碗(250)と土師質土器小皿(251)を図示した。250は土師質土器碗で, 体部は内湾し, 口縁部は短く外傾する。調整は回転ナデの後, 内外面にミガキを施す。251は土師質土器小皿で, 口縁は外上方にまっすぐ伸びる。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。



- 遺構埋土
1. にぶい黄色(25Y6/3)中粒砂質シルト(SX-17埋土1)
 2. 黄褐色(25Y5/3)粗粒砂質シルトで, にぶい黄褐色中粒砂質シルトブロックと炭化物を含む(SX-17埋土2)
 3. にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルト(SX-18)
 4. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含む(ピット)

図107 SX-17・18

iv ピット

P-66

調査区北東部で検出した楕円形を呈するピットで、長径50cm、短径44cm、深さ5cmを測る。埋土は褐色シルト質中粒砂で粘性は弱く、マンガンを多く含み、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかった。

P-67(遺物: 図109-252)

調査区東部で検出した楕円形を呈するピットで、SK-75とSD-18を切る。長径52cm、短径46cm、深さ79cm、柱痕径23cmを測る。埋土は褐色シルト質中粒砂で粘性は弱く、マンガンを多く含み、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器21点(杯2, 細片19)、須恵器甕1点、瓦器片1点がみられ、須恵器甕(252)を図示した。252は須恵器甕で、平底を呈する。調整は内面から体部外面が回転ナデで、内面の一部にはナデを加える。底部外面は無調整である。

P-68

P-67の南で検出した楕円形を呈するピットで、SK-76に切られる。長径60cm、短径50cm、深さ9cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質粗粒砂で、粘性は弱かった。出土遺物には土師質土器片1点、黒色土器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-69

P-68の南で検出した楕円形を呈するピットで、SK-77に切られる。検出長66cm、短径58cm、深さ49cm、柱痕径16cmを測る。埋土は褐色シルト質中粒砂で粘性は弱く、マンガンを多く含み、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-70(遺物: 図109-253・254)

P-69の南で検出した溝状を呈するピットで、SK-77に切られる。検出長1.48m、検出幅0.38m、深さ10cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質粗粒砂で、粘性は弱かった。出土遺物には土師質土器片2点と土師器12点(釜2, 細片10)、須恵器碗1点がみられ、土師器釜(253)と須恵器碗(254)を図示した。253は土師器釜で、口縁部はやや内傾して端部を内へ細く摘み、断面が方形を呈する鏝を水平に貼付する。調整は胴部内面が横方向のナデ、口縁部が横ナデ、胴部外面が縦方向のハケである。内面の一部には煤が付着する。254は須恵器碗で、平高台を呈する。底部の器壁が薄く、口縁部は外傾する。調整は回転ナデとみられるが、摩耗するため不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。

P-71(遺物: 図109-255)

P-70の南で検出した楕円形を呈するピットで、検出長32cm、短径26cm、深さ8cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には図示した青磁碗(255)がみられた。255は青磁碗で、鎬蓮弁文がみられる。全面に青磁釉を施す。

P-72

調査区北部で検出した円形を呈するピットで、SK-74を切る。径50cm、深さ25cmを測り、埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、焼土と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器3点(小皿1, 細片2)、土師器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-73

P-72の南東で検出した楕円形を呈するピットで、SB-14に切られる。長径70cm、短径54cm、深さ36cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片

2. B区

2点と土師器片3点、須恵器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-74

P-72の南東で検出した楕円形を呈するピットで、SK-79を切り、SB-13に切られる。長径1.15m、短径0.60m、深さ23cmを測る。埋土は灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器14点(杯1、細片13)と土師器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-75

P-74の南で検出した円形を呈するピットで、SK-80を切る。径24cm、深さ28cm、柱痕径14cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-76(遺構:図108, 遺物:図109-256~259)

P-74の西で検出した溝状を呈するピットで、SX-13を切り、SD-21とSX-12に切られる。検出長2.05m、検出幅0.62m、深さ15cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器17点(杯3、碗2、皿1、細片11)と土師器2点(釜か1、細片1)がみられ、土師質土器杯(256)と土師質土器碗(257・258)、土師器釜か(259)を図示した。256は土師質土器杯で、体部は外上方へ大きく開く。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。底部外面には板状圧痕が残る。257・258は土師質土器碗である。257は平高台を呈する。底部の器壁が厚く、体部は内湾する。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。258は輪高台を呈し、底部には「ハ」の字状に開く低い高台を貼付する。摩耗するため調整は不明で、見込には工具の圧痕が残る。259は土師器釜とみられ、一部が残存する。内面は摩耗するため調整は不明で、外面は斜方向のハケ調整で、突帯もしくは鏝が剥離した痕跡が残る。搬入品とみられる。

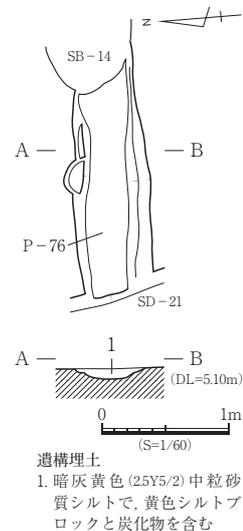


図108 P-76

P-77

P-76の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで、P-78・80を切る。検出長96cm、検出幅62cm、深さ8cmを測り、埋土は灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点と須恵器片1点、黒色土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-78

P-77の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで、SX-14を切り、P-77・80に切られる。長辺1.26m、短辺0.45m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点と瓦器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-79

P-78の西で検出した隅丸方形を呈するピットで、SK-81とSD-21、SX-13、P-81に切られる。検出長94cm、短辺47cm、深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-80

P-79の東で検出した隅丸方形を呈するピットで、SK-82とP-78を切り、P-77に切られる。

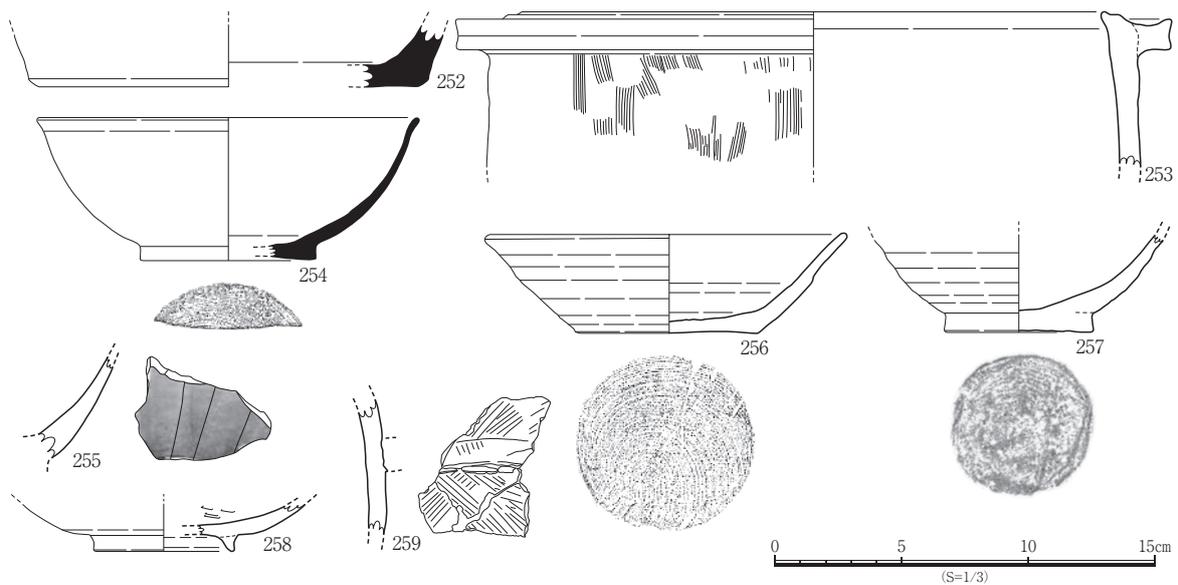


図109 P-67・70・71・76出土遺物実測図

検出長53cm, 検出幅38cm, 深さ12cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点と須恵器碗1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-81

P-79の南で検出した溝状のピットで, SX-13・15, P-79を切り, P-84に切られる。検出長3.48m, 検出幅0.50m, 深さ8cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで, 炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器8点(碗1, 細片7)と土師器片2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-82

P-81の南東で検出した楕円形を呈するピットで, SX-15を切り, SB-15に切られる。長径74cm, 短径60cm, 深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで, 焼土と炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器3点(杯1, 細片2)と土製品土錘1点, 鉄滓2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-83(遺物: 図110-260)

P-81の南で検出した円形を呈するピットで, SX-15とP-84を切る。径20cm, 深さ17cmを測り, 埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(小皿1, 細片1)がみられ, 土師質土器小皿(260)を図示した。260は土師質土器小皿で, 器高が高く, 口縁部は外上方へまっすぐ伸びる。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 一部にナデを加える。

P-84

P-83の西で検出した隅丸方形を呈するピットで, SX-15とP-81を切り, P-83に切られる。長辺70cm, 短辺63cm, 深さ11cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片9点と土師器甕2点, 土製品土錘2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-85

P-84の南で検出した隅丸方形を呈するピットで, SX-15を切り, SB-15に切られる。長辺

2. B区

88cm, 検出幅73cm, 深さ16cm, 柱痕径31cmを測る。掘方の埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで, 炭化物を多く含み, 柱痕の埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器4点(椀1, 細片3)がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-86

調査区北部で検出した楕円形を呈するピットで, 長径35cm, 短径32cm, 深さ7cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで, 炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器皿1点がみられたが, 図示できなかつた。

P-87

P-86の西で検出した楕円形を呈するピットで, SD-23を切る。長径40cm, 短径34cm, 深さ23cm, 柱痕径20cmを測る。掘方の埋土は黄褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含み, 柱痕の埋土は灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが, 図示できなかつた。

P-88

P-87の南東で検出した楕円形を呈するピットで, 長径42cm, 短径38cm, 深さ19cm, 柱痕径12cmを測る。掘方の埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含み, 柱痕の埋土は黄褐色細粒砂質シルトで, マンガンを少し含んでいた。出土遺物には土師質土器3点(杯1, 細片2)がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-89

P-88の北西で検出した楕円形を呈するピットで, SK-88を切る。長径32cm, 短径29cm, 深さ30cm, 柱痕径9cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, 掘方にはマンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが, 図示できなかつた。

P-90(遺構:図110-261・262)

P-89の南で検出した隅丸方形を呈するピットで, SD-23を切る。検出長93cm, 短辺86cm, 深さ14cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器73点(杯6, 椀4, 細片63)と土師器8点(甕1, 細片7), 須恵器3点(椀2, 細片1), 鉄滓1点がみられ, 土師質土器椀(261・262)を図示した。261・262は土師質土器椀で, 平高台を呈する。261は見込が凹む。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが不明瞭である。262は底部の器壁が厚い。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。

P-91

P-90の南東で検出した楕円形を呈するピットで, SB-12に切られる。長径65cm, 検出幅52cm, 深さ6cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで, 炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが, 図示できなかつた。

P-92(遺物:図110-263)

P-91の西で検出した円形を呈するピットで, SD-23に切られる。径30cm, 深さ10cmを測り, 埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで, 炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(椀1, 細片1)と土師器片3点がみられ, 土師質土器杯(263)を図示した。263は二重高台の土師質土器杯で, 体部下には断面が半円形を呈する突帯を貼付する。調整は回転ナデとみられるが, 摩耗するため調整は不明である。

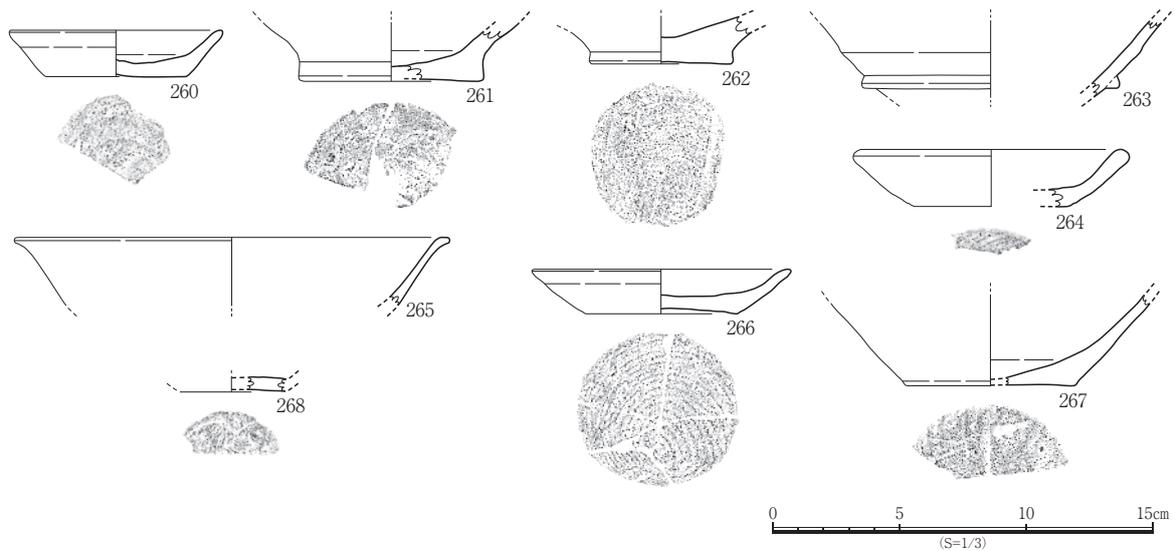


図110 P-83・90・92・106・108・111・112出土遺物実測図

P-93

P-92の南東で検出した楕円形を呈するピットで、SX-16に切られる。検出長24cm、短径26cm、深さ8cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器6点(杯1、細片5)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-94

P-93の北西で検出した楕円形を呈するピットで、SX-16に切られる。長径39cm、短径37cm、深さ6cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器8点(杯2、細片6)、土師器片1点、瓦器片1点、土製品土錘1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-95

P-93の南西で検出した隅丸方形を呈するピットで、SX-15を切り、SB-13に切られる。検出長78cm、短辺50cm、深さ7cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-96

P-95の北西で検出した楕円形を呈するピットで、SX-17を切る。長径24cm、短径21cm、深さ21cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器6点(杯1、碗1、細片4)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-97

P-96の西で検出した楕円形を呈するピットで、SX-17を切る。長径41cm、短径38cm、深さ23cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器8点(杯2、細片6)と土師器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-98

P-97の南西で検出した円形を呈するピットで、SX-18を切る。径28cm、深さ37cmを測り、埋土は灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器6点(杯1、細片5)と土師器片1点、須

2. B区

恵器片3点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-99

調査区北部で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺61cm、短辺46cm、深さ30cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器40点(杯3、小皿1、細片36)と土師器片1点、須恵器片1点、瓦器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-100

P-99の西で検出した楕円形を呈するピットで、長径28cm、短径25cm、深さ7cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-101

P-100の南で検出した楕円形を呈するピットで、長径36cm、短径29cm、深さ17cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-102

P-101の南西で検出した円形を呈するピットで、P-103を切る。径21cm、深さ19cm、柱痕径14cmを測り、埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器18点(杯1、細片17)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-103

P-102の南で検出した楕円形を呈するピットで、P-102に切られる。長径49cm、短径44cm、深さ20cm、柱痕径18cmを測る。掘方の埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含み、柱痕の埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器18点(杯1、細片17)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-104

P-103の西で検出した楕円形を呈するピットで、長径46cm、短径36cm、深さ32cm、柱痕径22cmを測る。埋土は灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器39点(杯4、細片35)と土師器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-105

P-104の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで、SK-90に切られる。長辺67cm、短辺57cm、深さ18cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-106(遺物:図110-264)

P-105の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで、SX-17・18を切る。長辺92cm、短辺75cm、深さ6cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(小皿1、細片1)と土師器甕1点がみられ、土師質土器小皿(264)を図示した。264は土師質土器小皿で、器高が高く、口縁部は肥厚する。口径は10.3cmを測る。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

P-107

P-100の西で検出した楕円形を呈するピットで、長径36cm、短径30cm、深さ18cm、柱痕径10cmを測る。掘方の埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含み、柱痕の埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片12点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-108(遺物: 図110-265)

P-107の北西で検出した楕円形を呈するピットで、長径26cm、短径24cm、深さ11cm、柱痕径10cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した白磁碗(265)がみられた。265は白磁碗で、口縁端部は短く外へ摘む。全面に白磁釉を施す。

P-109

P-108の南で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺36cm、短辺31cm、深さ44cm、柱痕径8cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器7点(杯1, 細片6)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-110

P-109の南東で検出した楕円形を呈するピットで、P-111を切り、SA-6に切られる。長径1.06m、短径0.48m、深さ18cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器8点(杯2, 細片6)と瓦質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-111(遺物: 図110-266)

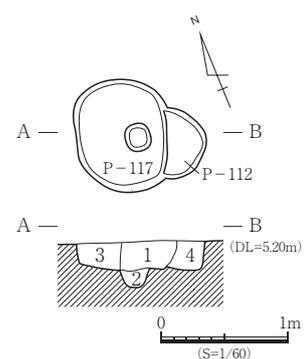
P-110の西で検出した隅丸方形を呈するピットで、P-110・112に切られる。検出長89cm、短辺54cm、深さ13cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(小皿1, 細片1)がみられ、土師質土器小皿(266)を図示した。266は土師質土器小皿で、口縁部は器壁が薄く、外上方へまっすぐ伸びる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

P-112(遺構: 図111, 遺物: 図110-267・268)

P-111の西で検出した楕円形を呈するピットで、P-111を切り、P-117に切られる。検出長44cm、短径53cm、深さ23cmを測る。埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含み、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器24点(杯4, 小皿1, 細片19)と須恵器片1点、瓦器片1点、東播系須恵器片1点、白磁片1点がみられ、土師質土器杯(267)と土師質土器小皿(268)を図示した。267は土師質土器杯で、体部は比較的上方へ立ち上がる。調整は回転ナデで、見込にナデを加える。底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残るとみられるが、摩耗するため不明瞭である。268は土師質土器小皿で、底部が残存する。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

P-113

P-112の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで、SA-3を切り、SB-12に切られる。検出長65cm、検出幅20cm、深さ9cmを測る。



- 遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(P-117柱痕埋土1)
 2. 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで、炭化物を少し含む(P-117柱痕埋土2)
 3. にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルトで、炭化物を少し含む(P-117掘方)
 4. オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含み、炭化物を少し含む(P-112)

図111 P-112・117

2. B区

埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器10点(杯1, 細片9)と須恵器2点(椀1, 細片1)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-114

P-113の南東で検出した隅丸方形を呈するとみられるピットで、SB-12に切られる。検出長64cm, 短辺80cm, 深さ44cm, 柱痕径28cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、掘方はマンガンと炭化物を含み、柱痕は炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点と土師器片1点, 須恵器椀1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-115

P-114の西で検出した隅丸方形を呈するピットで、南は調査区外へ続く。検出長68cm, 短辺41cm, 深さ12cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、焼土を含んでいた。出土遺物には土師質土器3点(杯1, 細片2)と瓦器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-116(遺構: 図95)

P-115の北西で検出した楕円形を呈するピットで、SK-99に切られる。検出長39cm, 短径56cm, 深さ9cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-117(遺構: 図111)

P-116の北東で検出した楕円形を呈するピットで、P-112を切る。長径92cm, 短径72cm, 深さ38cm, 柱痕径14cmを測る。埋土は3層に分かれる。出土遺物には土師質土器36点(杯2, 小皿1, 細片33)と土師器片1点, 瓦器片4点, 東播系須恵器椀1点, 瓦質土器2点(釜1, 細片1)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-118

P-117の北西で検出した楕円形を呈するピットで、長径34cm, 短径32cm, 深さ17cm, 柱痕径17cmを測る。埋土は灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかった。

P-119

P-118の南で検出した楕円形を呈するピットで、長径64cm, 短径50cm, 深さ30cm, 柱痕径18cmを測る。掘方の埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含み、柱痕の埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片17点と瓦質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-120(遺物: 図112-269)

P-119の北西で検出した楕円形を呈するピットで、長径26cm, 短径24cm, 深さ32cm, 柱痕径10cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器4点(椀1, 細片3)がみられ、土師質土器椀(269)を図示した。269は土師質土器椀で、平高台を呈する。高台は低い。調整は内面がナデ、体部外面が回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。

P-121

P-119の南東で検出した楕円形を呈するピットで、長径63cm, 短径41cm, 深さ27cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器14点(杯1,

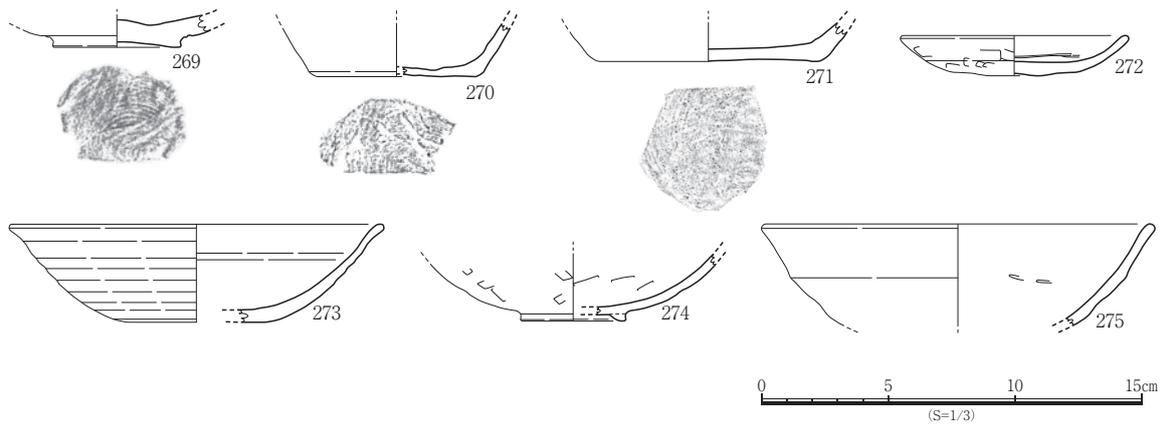


図112 P-120・124・125・129・133～135出土遺物実測図

細片13)と瓦器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-122

P-121の南西で検出した不整楕円形を呈するピットで、検出長57cm、短径44cm、深さ18cm、柱痕径14cmを測る。掘方の埋土は灰黄色中粒砂質シルトで、黄灰色中粒砂質シルトブロックを含み、柱痕の埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-123

P-121の北西で検出した楕円形を呈するピットで、SD-24に切られる。長径30cm、検出幅16cm、深さ9cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点と瓦質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-124(遺物:図112-270)

P-123の南西で検出した円形を呈するピットで、径21cm、深さ13cmを測る。埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片3点(杯1、細片2)がみられ、土師質土器杯(270)を図示した。270は土師質土器杯である。底径が小さく、器壁が薄い。調整は回転ナデで、見込にナデを加える。底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。

P-125(遺物:図112-271)

P-124の南で検出した楕円形を呈するピットで、P-126を切る。長径16cm、短径14cm、深さ37cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器4点(杯1、細片3)がみられ、土師質土器杯(271)を図示した。271は土師質土器杯で、底径が大きい。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りで、一部にケズリを加える。

P-126

P-125の西で検出した楕円形を呈するピットで、P-125に切られる。長径21cm、短径18cm、深さ21cmを測り、埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と瓦器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-127

P-126の北西で検出した楕円形を呈するピットで、長径23cm、短径18cm、深さ7cmを測り、埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦質土器鍋1点がみら

2. B区

れたが、図示できなかつた。

P-128

SD-25の南で検出した楕円形を呈するピットで、SD-25に切られる。検出長30cm、検出幅17cm、深さ14cmを測り、埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点と瓦器片1点がみられたが、図示できるものはなかつた。

P-129(遺物: 図112-272)

調査区北西部で検出した楕円形を呈するピットで、長径75cm、短径34cm、深さ29cm、柱痕径23cmを測る。掘方の埋土は灰黄色中粒砂質シルト、柱痕の埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片9点と黒色土器碗2点、図示した瓦器小皿(272)がみられた。272は瓦器小皿である。丸底で、口縁部は底部より緩やかに湾曲して立ち上がる。調整は内面がナデの後横方向のミガキ、口縁部が横ナデ、底部外面はナデで指頭圧痕が残る。

P-130

P-129の南西で検出した楕円形を呈するピットで、長径33cm、検出幅28cm、深さ9cm、柱痕径9cmを測る。掘方の埋土は灰黄色中粒砂質シルト、柱痕の埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と瓦器2点(碗1、小皿1)がみられたが、図示できるものはなかつた。

P-131

P-130の北西で検出した楕円形を呈するピットで、長径34cm、短径30cm、深さ19cm、柱痕径8cmを測る。掘方の埋土はにぶい黄褐色シルト質粗粒砂で、粘性は弱く、柱痕の埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点と瓦器3点(碗1、細片2)がみられたが、図示できるものはなかつた。

P-132

P-131の北西で検出した楕円形を呈するピットで、長径34cm、短径32cm、深さ17cm、柱痕径10cmを測る。掘方の埋土はにぶい黄褐色シルト質粗粒砂で、粘性は弱く、柱痕の埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点と瓦器碗1点がみられたが、図示できるものはなかつた。

P-133(遺物: 図112-273)

P-132の西で検出した円形を呈するピットで、径30cm、深さ23cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器5点(杯1、細片4)がみられ、土師質土器杯(273)を図示した。273は土師質土器杯である。器壁が薄く、体部は底部より湾曲して立ち上がる。調整は回転ナデで、体部下部は回転ケズリである。口縁部を除き黒斑がみられる。

P-134(遺物: 図112-274)

P-133の南西で検出した円形を呈するピットで、径26cm、深さ35cm、柱痕径11cmを測る。掘方の埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含み、柱痕の埋土は褐色中粒砂質シルトでマンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器6点(杯1、細片5)と瓦器碗1点がみられ、瓦器碗(274)を図示した。274は瓦器碗で、底部には断面が三角形を呈する扁平な高台を貼付する。調整は内面がヘラナデで工具の圧痕が残り、体部外面はナデで指頭圧痕が残る。内外面に薄く炭素が吸着する。在地産とみられる。

P-135(遺物:図112-275)

P-134の北西で検出した楕円形を呈するピットで、SD-26に切られる。長径27cm, 検出幅18cm, 深さ16cm, 柱痕径8cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と図示した瓦器椀(275)がみられた。275は瓦器椀である。調整は内面がナデの後ミガキを施すが摩耗するため不明瞭で、口縁部は横ナデ、体部外面はナデで指頭圧痕が残る。内外面に薄く炭素が吸着する。

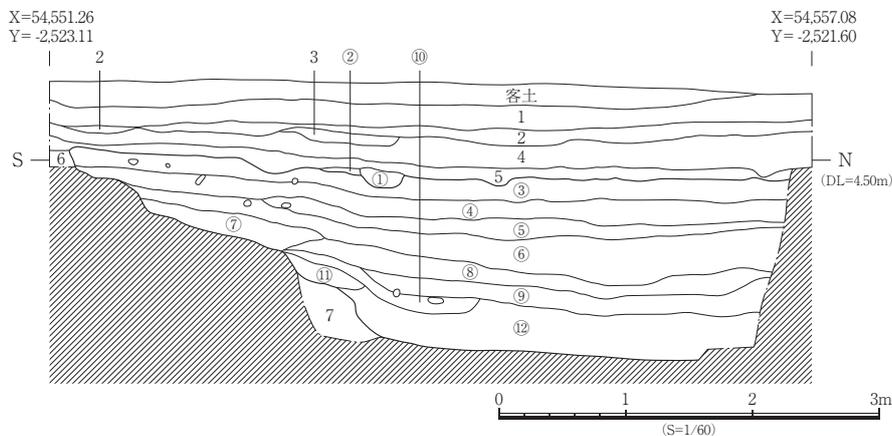
P-136

P-135の南東で検出した楕円形を呈するピットで、長径24cm, 短径20cm, 深さ20cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と須恵器片2点, 黒色土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

v 自然流路跡

SR-1(遺構:図78・113・114, 遺物:図115~117-276~324)

調査区北部で検出した東西方向の自然流路で、B-1区からB-2区にかけて伸び、両端は調査区外へ続き、B-2区の一部では北肩を確認した。西部は森山城跡の裾部に当たり、東部は二ノ堀遺跡となる。規模が大きく時間的制約と廃土置き場の関係により、東部は上層のみの調査とした。検出長75.2m, 検出幅9.74m, 深さ1.70mを測り、断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平らであった。基底面は西(3.018m)から東(2.900m)へ僅かに傾斜する。西部では森山城跡の堀2と繋がる。埋土は複数層からなり、調査区中央部では北壁(図78)の埋土1~10を上層, 埋土11~18を中層, 埋土19~21を下層, 埋土22~23を最下層とした。埋土は概ね上層から中層上部が砂質シルト, 中層下部



層位

- 第1層 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を含む(耕作土)
- 第2層 暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂層で、マンガンの堆積
- 第3層 暗灰黄色(25Y5/2)シルト質中粒砂層で、1cm大の黄色礫とハンダを含む
- 第4層 暗灰黄色(25Y5/2)中粒砂質シルト層で、1cm大の礫と炭化物を含む
- 第5層 褐色(25Y4/4)シルト質粗粒砂層で、粘性はやや弱い
- 第6層 オリーブ褐色(25Y4/6)シルト質粗粒砂層(自然堆積層)
- 第7層 オリーブ褐色(25Y4/4)極粗粒砂層(自然堆積層)

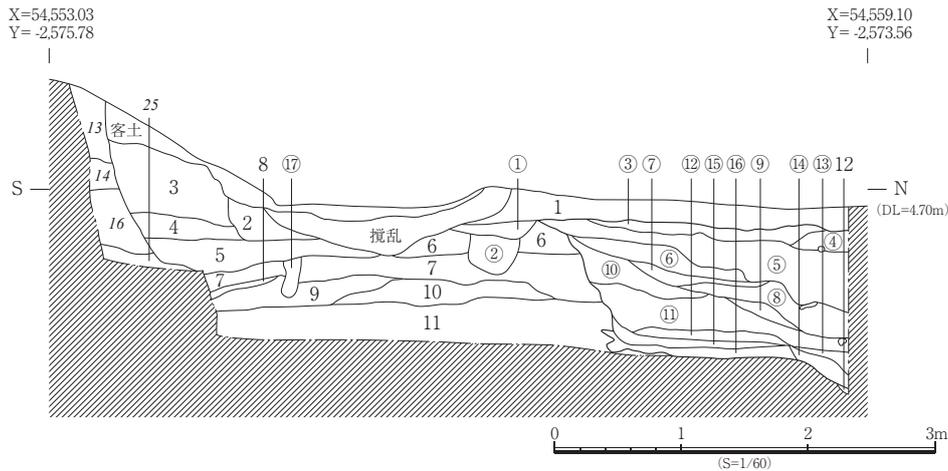
遺構埋土

- ① 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で、粘性は弱い(ピット)

- ② にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粗粒砂で、マンガンの堆積(ピット)
- ③ 暗灰黄色(25Y5/2)シルト質中粒砂で、0.5cm大の黄色礫と3cm大の礫を含む(SR-1埋土1)
- ④ にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂で、3cm大の礫を含む(SR-1埋土2)
- ⑤ にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで、粘性はやや強い(SR-1埋土3)
- ⑥ 暗灰黄色(25Y5/2)粘土質シルト(SR-1埋土4)
- ⑦ 暗灰黄色(25Y5/2)シルト質粗粒砂で、3cm大の礫を少し含む(SR-1埋土5)
- ⑧ 黄灰色(25Y4/1)粘土質シルトで、一部土壌化する(SR-1埋土6)
- ⑨ 黄灰色(25Y5/1)中粒砂質シルト(SR-1埋土7)
- ⑩ 暗灰黄色(25Y5/2)シルト質中粒砂(SR-1埋土8)
- ⑪ 黄褐色(25Y5/3)シルトで、中粒砂を含む(SR-1埋土9)
- ⑫ 黄灰色(25Y5/1)シルトで、粗粒砂を含む(SR-1埋土10)

図113 SR-1東セクション図

2. B区



層位

- 第1層 灰色(5Y5/1)中粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を含む(耕作土)
- 第2層 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルト層で、粘性はやや強い
- 第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト層で、1~5cm大の礫を含む(近現代か)
- 第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルト層で、粘性はやや強い(近現代か)
- 第5層 黄灰色(2.5Y5/1)粗粒砂質シルト層で、黄色シルトブロックと5cm大の礫を含む(近現代か)
- 第6層 灰黄色(2.5Y6/2)シルト質粗粒砂層で、マンガンと土器片、炭化物を含む
- 第7層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂層(自然堆積層)
- 第8層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂層(自然堆積層)
- 第9層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂層で、粗粒砂質シルトとの互層(自然堆積層)
- 第10層 暗灰黄色(2.5Y4/2)極粗粒砂層(自然堆積層)
- 第11層 黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂層で、粗粒砂質シルトとの互層(自然堆積層)
- 第12層 灰色(10Y5/1)極粗粒砂層で、0.5~3cmの礫を非常に多く含む(自然堆積層)

註:斜体の層位は、C-5区東バンクセクション図(図199)に同じ

遺構埋土

- ① 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、オリーブ褐色粗粒砂質シルトブロックを含む
- ② 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトで、中粒砂を少し含む
- ③ 灰色(10Y4/1)中粒砂質シルトで、3cm大の礫を含み、グライ化する(SR-1埋土1)
- ④ 灰色(7.5Y6/1)中粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫とマンガンを含む(SR-1埋土2)
- ⑤ オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルトで、5cm大の礫を多く含む(SR-1埋土3)
- ⑥ 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルトで、木片を含む(SR-1埋土4)
- ⑦ 灰色(7.5Y5/1)シルト質粗粒砂(SR-1埋土5)
- ⑧ 黄灰色(2.5Y5/1)シルトで、10cm大の礫と木片を含み、土壌化する(SR-1埋土6)
- ⑨ 灰色(7.5Y4/1)シルト質粗粒砂(SR-1埋土7)
- ⑩ 黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質シルトで、マンガンを含む(SR-1埋土8)
- ⑪ 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂で、中粒砂との互層(SR-1埋土9)
- ⑫ 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂(SR-1埋土10)
- ⑬ 灰色(10Y5/1)粘土質シルト(SR-1埋土11)
- ⑭ 灰色(10Y4/1)シルト質中粒砂で、シルトと中粒砂の互層(SR-1埋土12)
- ⑮ 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂で、シルトを少し含み、やや粘性あり(SR-1埋土13)
- ⑯ 灰色(10Y6/1)礫質極粗粒砂で、1~3cm大の礫を含み、鉄分の沈着あり(SR-1埋土14)
- ⑰ 黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂質シルト

図114 SR-1西セクション図

から下層上部にかけて粘土質シルト、以下は砂がみられた。出土遺物は概ね中世のものであるが、上層及び中層の出土遺物には近世の遺物片が僅かに含まれており、近世の埋土とみられる。下層及び最下層は中世の遺物のみ出土しており、中世より機能していた自然流路とみられる。下層及び最下層の出土遺物には、土師質土器147点(杯16, 碗3, 小皿1, 細片127)と土師器片1点、須恵器3点(杯1, 甕1, 細片1), 瓦器6点(碗5, 細片1), 瓦質土器4点(釜3, 細片1), 瀬戸・美濃陶器皿1点, 備前焼5点(播鉢1, 壺1, 甕3), 常滑焼6点(甕1, 細片5), 陶器4点(皿1, 細片3), 白磁4点(碗3, 細片1), 青磁2点(碗1, 皿1), 土製品2点(土錘1, フイゴ羽口1)がみられ、276~324を図示した。

276~289は東部の最上層より出土した。276は土師質土器杯で、体部は外上方へまっすぐ伸びる。調整は回転ナデとみられるが摩耗するため不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。277・278は土師質土器碗で、輪高台を呈する。底部の器壁が厚く、277は断面が台形を呈する扁平な高台、278は断面が三角形を呈する低く太い高台を貼付する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。279は土師器釜で、断面が三角形を呈する小さな鏝を貼付する。調整は内面がナデ、口縁部が横ナデ、胴部外面は斜方向の平行タタキで煤が付着する。280は土師器鍋で、口縁部は直立し、端部は肥厚する。調整は横方向のナデで、口縁端部は横ナデである。外面には煤が付着する。281は

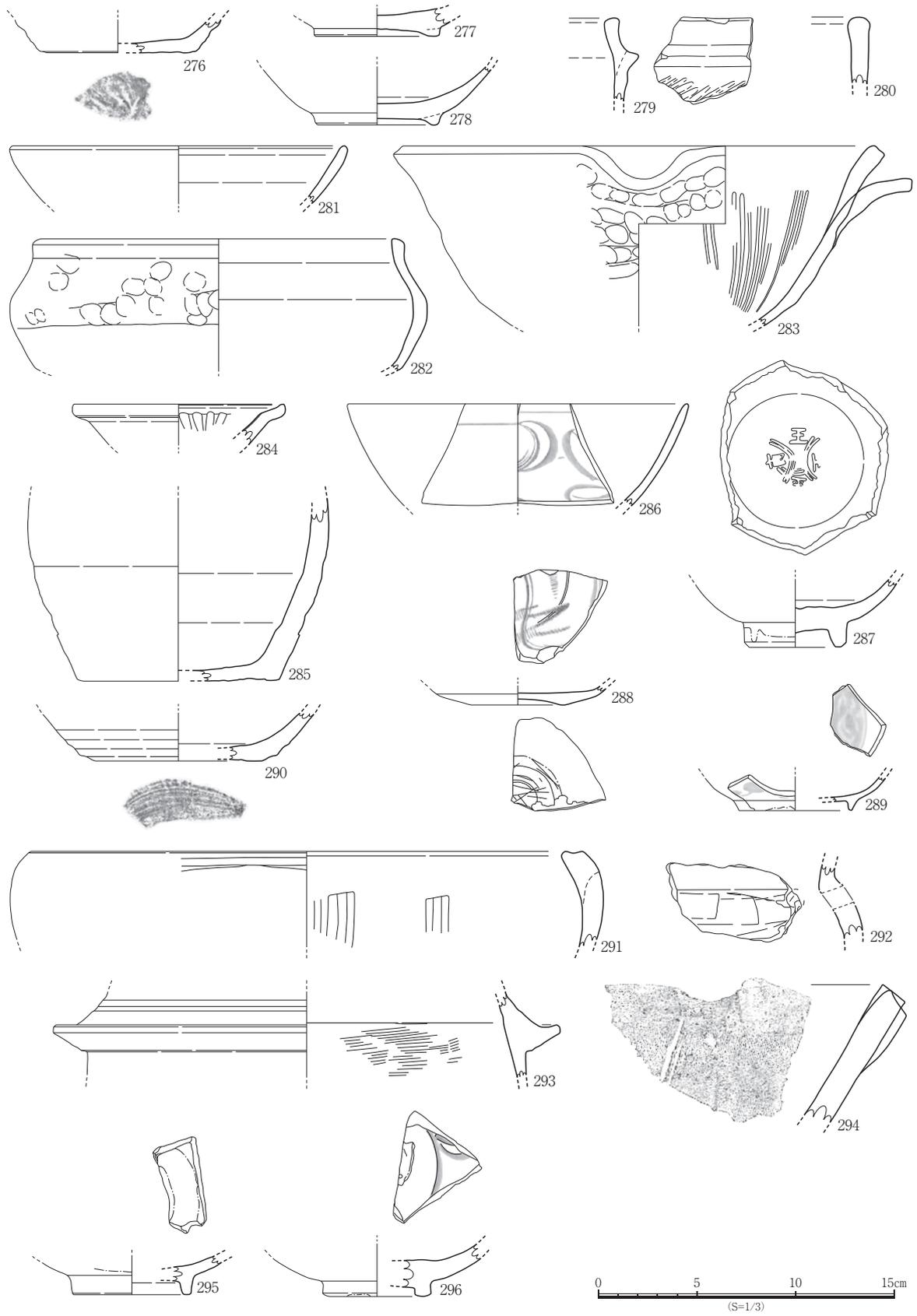


図115 SR-1東部最上層・上層出土遺物実測図

東播系須恵器碗で、口縁部は僅かに肥厚し、端部を丸く収める。調整は回転ナデで、口縁部外面には重ね焼痕がみられる。282は瓦質土器鍋で、口縁部は直立する。内面の調整は摩耗するため不明で、口縁部外面から頸部に掛けてはナデで指頭圧痕が残る。胴部外面は煤と付着物により調整は不明である。283は瓦質土器播鉢で、片口部が残存する。体部は内湾し、口縁部は外上方へまっすぐ伸び、端部を四角く収める。調整は摩耗するため不明で、内面には櫛描による播目を放射状に施し、外面には指頭圧痕が横方向に5段残る。284は瀬戸・美濃陶器折縁皿で、口縁部は外上方へ短く伸びた後、端部を上方へ摘む。内面には丸彫による菊弁状の文様がみられる。全面に灰釉を施すが、器面が荒れるため透明感はみられない。285は備前焼壺である。胴部は平底より内湾して上方へ立ち上がる。調整は見込から体部外面は横方向の粗いナデで、内面は器面が荒れるため不明瞭である。底部外面はナデ調整である。286・287は青磁碗である。286は体部が緩やかに内湾し、端部は細く仕上げる。内面には劃花文がみられ、全面にオリーブ色の青磁釉を施す。287は径が小さく高い高台を呈する。見込にはスタンプ文がみられる。内面から高台外面まで青磁釉を施すが、焼成不良で釉は褐色を呈し、透明感はみられない。288は同安窯系の青磁皿で、体部は底部より緩やかに屈曲して立ち上がる。内面にはヘラと櫛状工具によるジグザグ文がみられる。全面に黄色味を帯びた青磁釉を施し、底部外面は釉を掻き取り、工具痕が残る。289は青花皿で、底部には断面が台形を呈する低い高台が付き、体部は大きく内湾して立ち上がる。見込の文様は不明で、外面には唐草文の染付がみられる。畳付を除き白濁した透明釉を施す。

290～296は東部上層より出土した。290は土師質土器杯で、底径が大きく、体部は内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。291は土師器鍋である。口縁部は内湾し、端部は凹む。調整は内面がナデの後、縦方向の板ナデ、口縁部が横ナデ、外面はナデである。292・293は瓦質土器釜である。292は頸部が屈曲し、口縁部は上方に立ち上がる。胴部内面は横方向のヘラナデ、頸部は横方向のナデで、外面は強い横方向のナデで凹む。胴部外面は摩耗するため調整は不明で、肩部には円孔の一部が残存する。293は断面が三角形を呈する鏝が付く。調整は内面が横方向のハケ、鏝は横ナデ、胴部外面は横方向のケズリとみられるが、残存部が少なく不明瞭である。鏝の下面には煤が付着する。畿内系である。294は備前焼播鉢で、片口の一部が残存する。体部は外上方へまっすぐ伸び、口縁端部を四角く収める。調整は回転ナデで、片口はナデ、内面には2条単位の播目が1箇所に残る。295は白磁碗で、高台は断面が方形を呈し、直立する。内面から外面の高台付近まで白磁釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。高台は削り出しで、無釉である。296は青磁碗である。底部の器壁が厚く、断面が方形で低い高台が付く。内面には劃花文がみられ、内面から畳付まで青磁釉を施す。

297～304は西部の上層より出土した。297は土師質土器杯で、底部の器壁が厚く、体部は僅かに内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。底部外面にはタール状の黒い付着物がみられる。298・299は土師質土器碗で、平高台を呈する。298は見込が凹む。調整は回転ナデとみられるが、内面は摩耗するため不明瞭で、底部の切り離しは回転糸切りである。299は器壁が薄く、体部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデの後、放射状の板ナデ、外面は回転ケズリで、底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。300は瀬戸・美濃陶器内禿皿で、底部は断面が三角形を呈する小さな高台が付く。内面から高台内面には灰釉を施し、見込は釉ハギする。底部外面は回転ケズリで、無釉で、重ね焼痕が残る。301は常滑焼甕で、体部は緩やかに内

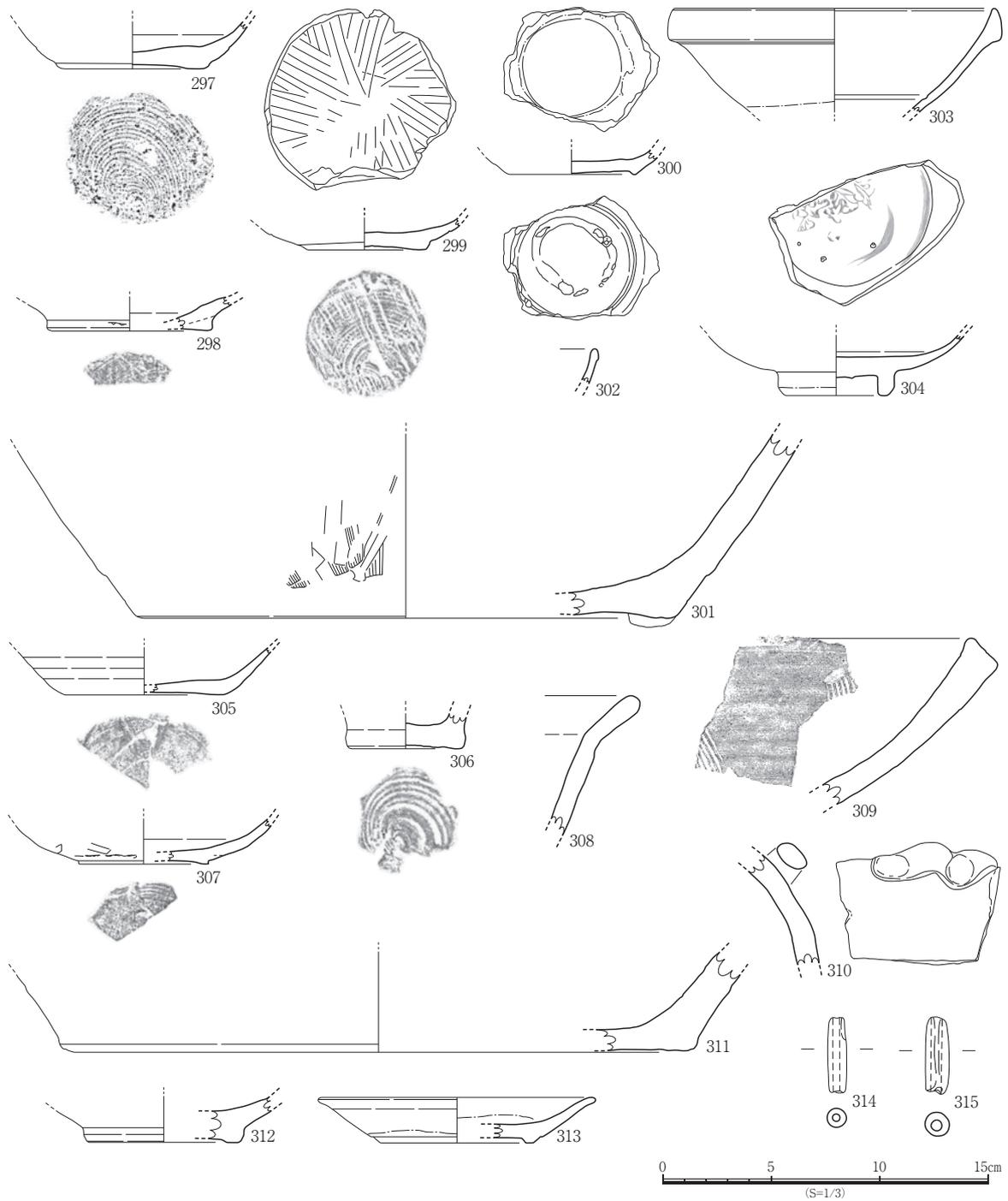


図116 SR-1西部上層・中層出土遺物実測図

湾して立ち上がる。調整は内面が横方向の粗雑なナデ、外面は横方向のナデの後、上部には縦方向のヘラナデを施す。底部外面は横方向のナデ調整で、一部に鉄分が付着する。302・303は白磁碗である。302は器壁が薄く、口縁部は小さな玉縁を呈する。全面に白磁釉を施す。303も器壁が薄く、口縁部は大きな玉縁を呈し、見込と玉縁の下には浅い段を有する。内面から体部外面には白磁釉を施し、外面体部下は回転ナデ調整で、無釉である。304は龍泉窯系の青磁碗で、底部には断面が方形で直立する高台を呈し、体部は外へ大きく開いて立ち上がる。見込には印花文がみられ、内面

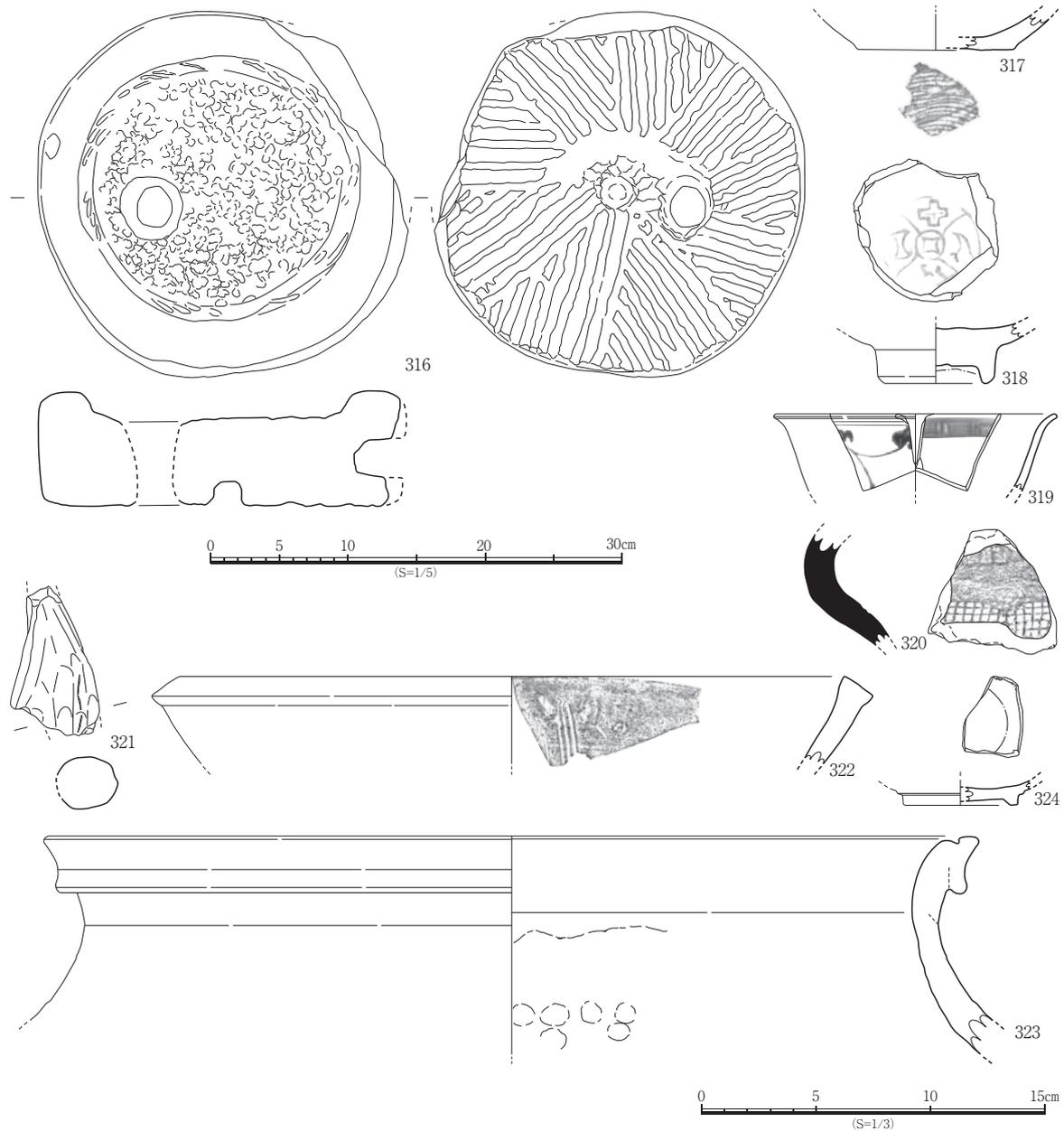


図117 SR-1西部中層・下層出土遺物実測図

から高台外面までオリーブ色の青磁釉を施す。畳付と高台内は無釉である。

305～316は西部の中層より出土した遺物である。305・306は土師質土器杯である。305は器壁が薄く、大きな底部より体部は外上方へまっすぐ伸びる。調整は回転ナデで、内面は摩耗するため調整は不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。306は柱状高台を呈する。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。307は土師質土器碗で、平高台を呈する。器壁が薄く、体部は内湾して立ち上がる。調整はナデで、外面の一部にはヘラナデを施す。底部の切り離しは回転糸切りである。308は土師器鍋で、口縁部は胴部より屈曲して外上方へまっすぐ伸び、端部を丸く収める。調整は横方向のナデで、口縁部は横ナデである。頸部外面には煤が付着する。309は備前焼播鉢で、口縁部は肥厚し、端部は上方へ僅かに摘む。調整は回転ナデで、内面には播目が

みられる。310は備前焼壺で、肩部が残存し、外面には帯状の耳を貼付する。調整は内面が横方向のナデで指頭圧痕が残り、外面は回転ナデとみられるが、器面が荒れるため不明である。311は常滑焼甕で、体部は底部より屈曲して立ち上がる。調整は内面が横方向のナデ、外面が縦または横方向のナデ、底部外面はナデである。312は白磁碗で、低く幅の広い高台が付く。内面には白磁釉を施し、外面は回転ケズリで無釉である。313は白磁皿で、端反形である。底部には断面が台形を呈する低い高台が付く。調整は回転ナデで、口縁部には光沢のある白磁釉を施し、見込は無釉である。底部外面は削り出しで、無釉である。314・315は土製品土錘で、いずれも小型で円柱形を呈する。全面にナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため不明瞭である。316は石製品石臼で、上臼である。粗雑な作りで、上面は大きく傾き、高さは7.8～8.9cmを測る。上面の周縁部は研磨して平滑になり、周縁部内側の傾斜部は斜方向に溝状の敲打痕が残る。中央より外側には径4.5cmを測る円孔が貫通する。側面の1箇所には方形の孔が水平方向に穿たれ、縦2.6cm、横3.3cm、深さ3.3cmを測る。下面は8分割の播目がみられ、部分的に摩耗する。中央には径2.3cm、深さ1.7cmの円孔がみられる。石材は砂岩である。

317～319は西部の下層より出土した遺物である。317は土師質土器杯で、体部は内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。318は青磁碗で、底部の器壁が厚く、細く直立する高台が付く。見込にはスタンプによる文様がみられ、内面から高台内側まで黄色味を帯びた青磁釉を施す。319は青花碗で、端反形である。口縁部内面には雷文帯、外面には唐草文と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施す。

320～324は西部の最下層より出土した遺物である。320は須恵器甕で、頸部が残存する。頸部は大きく外反し、調整は頸部外面が横方向のナデ、肩部外面には格子目タタキがみられる。内面は摩耗するため調整は不明である。321は畿内系の瓦質土器釜で、脚部が残存する。内面は摩耗するため調整は不明で、脚部には縦方向のナデを施す。322は備前焼播鉢で、口縁部は肥厚して四角く収め、端部は上下に摘む。調整は回転ナデで、内面には僅かに播目が残る。323は常滑焼甕で、頸部は大きく外反し、口縁部は上下に拡張する。口縁縁部幅は2.5cmを測る。調整は回転ナデで、内面の一部には指頭圧痕が残り、外面には自然釉が掛かるため調整は不明である。324は白磁皿である。小型で器壁が薄く、断面が台形を呈する高台が付く。内面には白磁釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギを行う。外面は削り出しで、無釉である。

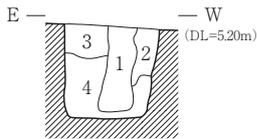
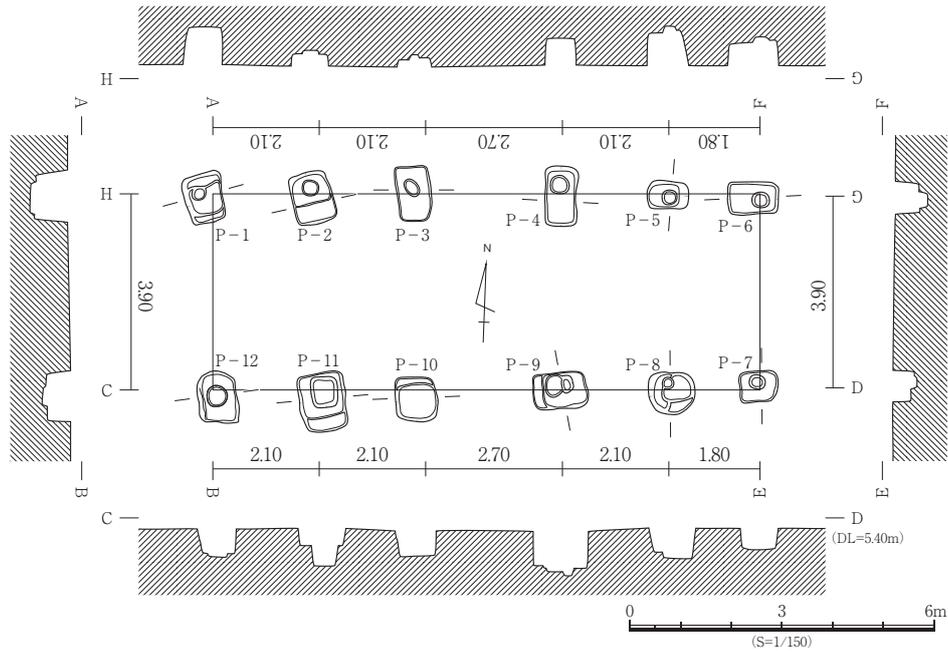
② 中世上面

第4層の下面で検出された遺構で、中世後期から近世初期の遺構である。遺構は主にB-1区で確認され、調査区北側には中世下面と同じ自然流路であるSR-1が流れる。この時期の遺構は森山城跡の上面遺構の時期と廃城後の時期にあたり、建物跡は廃城後の時期のものである。

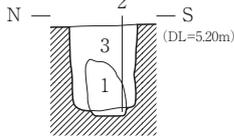
i 掘立柱建物跡

SB-12(遺構：図118、遺物：図119-325～332)

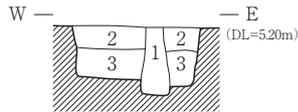
調査区北東部で検出した東西棟掘立柱建物跡(N-88°-E)で、SB-14とSK-102・103、P-142を切り、SA-4に切られる。梁間1間(3.90m)、桁行5間(10.80m)で、桁の柱間寸法は1.80mと2.10m、2.70mであった。柱穴は隅丸方形を呈し、長辺0.75～1.18m、短辺0.53～0.90m、深さ15～93cm、柱痕径16～28cmを測る。出土遺物には土師質土器246点(杯21、碗3、小皿1、細片221)と土師器11点(甕1、釜1、細片9)、須恵器3点(碗1、細片2)、瓦器5点(碗2、細片3)、東播系須恵器片口



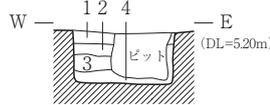
- P-1埋土**
- 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと炭化物を少し含む(柱痕)
 - にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(掘方埋土1)
 - 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを少し含む(掘方埋土2)
 - オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルト(掘方埋土3)



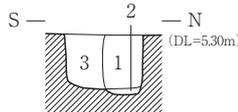
- P-5埋土**
- 褐色(10YR4/6)中粒砂質シルト(柱痕埋土1)
 - 灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルト(柱痕埋土2)
 - 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと炭化物を含む(掘方)



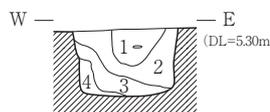
- P-6埋土**
- 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト(柱痕)
 - 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルト(掘方埋土1)
 - オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと炭化物を含む(掘方埋土2)



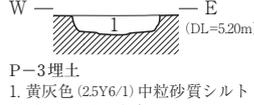
- P-2埋土**
- 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む
 - にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルト
 - 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト
 - にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂質シルト



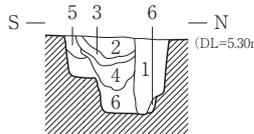
- P-7埋土**
- オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、炭化物を含む(柱痕埋土1)
 - 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト(柱痕埋土2)
 - にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(掘方)



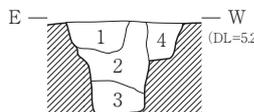
- P-10埋土**
- 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む
 - 灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと粗粒砂を少し含む
 - オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む、炭化物を含む
 - オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルトで、土壌化していない



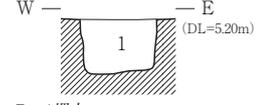
- P-3埋土**
- 黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂質シルトで、マンガンを含む



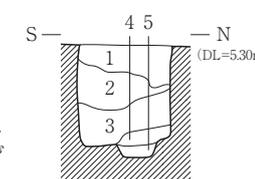
- P-8埋土**
- 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと炭化物を含む(柱痕)
 - 灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(掘方埋土1)
 - オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂質シルト(掘方埋土2)
 - 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(掘方埋土3)
 - 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、炭化物を含む(掘方埋土4)
 - 黄褐色(10YR5/6)中粒砂質シルトで、2cm大の礫と粗粒砂を含む(掘方埋土5)



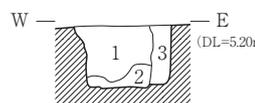
- P-11埋土**
- 黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む
 - 褐色(10YR4/6)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む
 - 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと炭化物を含む
 - 褐色(10YR4/6)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む



- P-4埋土**
- 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む



- P-9埋土**
- 黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂質シルトで、マンガンを含む
 - 灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む
 - 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと粗粒砂を含む
 - 黄灰色(2.5Y6/1)粗粒砂質シルト
 - 黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂質シルト



- P-12埋土**
- 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(柱痕埋土1)
 - 黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂質シルトで、粗粒砂を含む(柱痕埋土2)
 - 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(掘方)

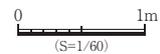


図118 SB-12

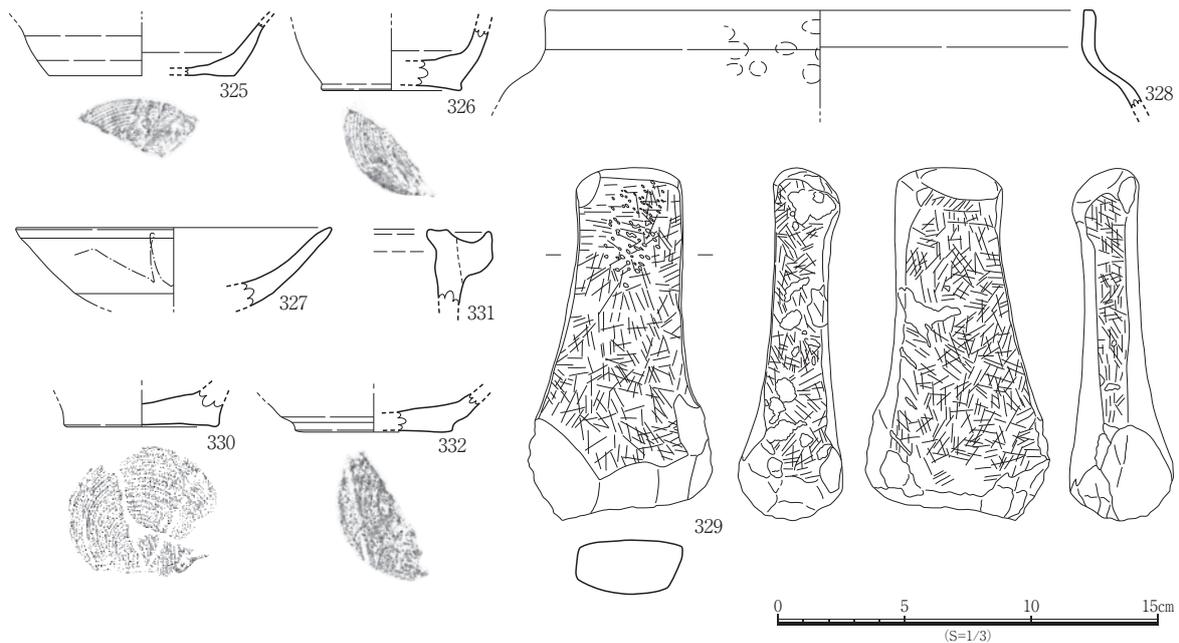


図119 SB-12出土遺物実測図

鉢3点，瓦質土器3点(鍋2，細片1)，常滑焼片1点，陶器片2点，白磁2点(皿1，細片1)，近世陶器2点(皿1，細片1)，近世磁器片3点，土製品土錘2点，石製品砥石1点，鉄製品1点，鉄滓1点がみられ，325～332を図示した。

325はP-1より出土した土師質土器杯で，器壁は薄く，体部は比較的上方へ立ち上がる。ロクロ水挽成形で，調整は回転ナデ，底部の切り離しは回転糸切りである。326はP-2の掘方より出土した土師質土器杯で，底径が5.6cmと小さく，器壁は厚い。調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。327はP-9より出土した近世陶器皿で，口縁部は外上方へまっすぐ伸び，端部を細く収める。調整は回転ナデで，外面下部は回転ケズリを加える。内面から口縁部外面には灰釉を施す。唐津系灰釉陶器である。328と329はP-9の埋土5より出土した。328は瓦質土器鍋で，肩部が張り，口縁部は直立する。胴部内面はナデ調整とみられるが，摩耗するため調整は不明瞭で，外面には指頭圧痕が残る。329は石製品砥石で，台形を呈し，4面の使用がみられた。使用により凹み，平滑となり，1面には工具の圧痕とみられる凹みが多数残る。石材は砂岩である。330はP-10より出土した土師質土器碗で，平高台を呈する。調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。331はP-10の埋土2より出土した土師器釜で，口縁部は直立し，鏝は端部を上方へ摘み上げる。調整は横方向のナデで，口縁部内面は強い横方向のナデにより凹む。332はP-12より出土した土師質土器杯で，体部は底部より湾曲して立ち上がる。調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。

SB-13(遺構：図120，遺物：図120-333～335)

調査区東部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-8°-W)で，SB-16とSK-104，P-154・158を切る。梁間1間(4.50m)，桁行3間(6.60m)で，桁の柱間寸法は2.10mと2.40mであった。柱穴は隅丸方形を呈し，長辺0.85～1.17m，短辺0.80～1.06m，深さ58～92cm，柱痕径10～19cmを測る。出土遺物には土師質土器387点(杯34，碗2，小皿2，細片349)と土師器15点(甕2，釜3，細片10)，須

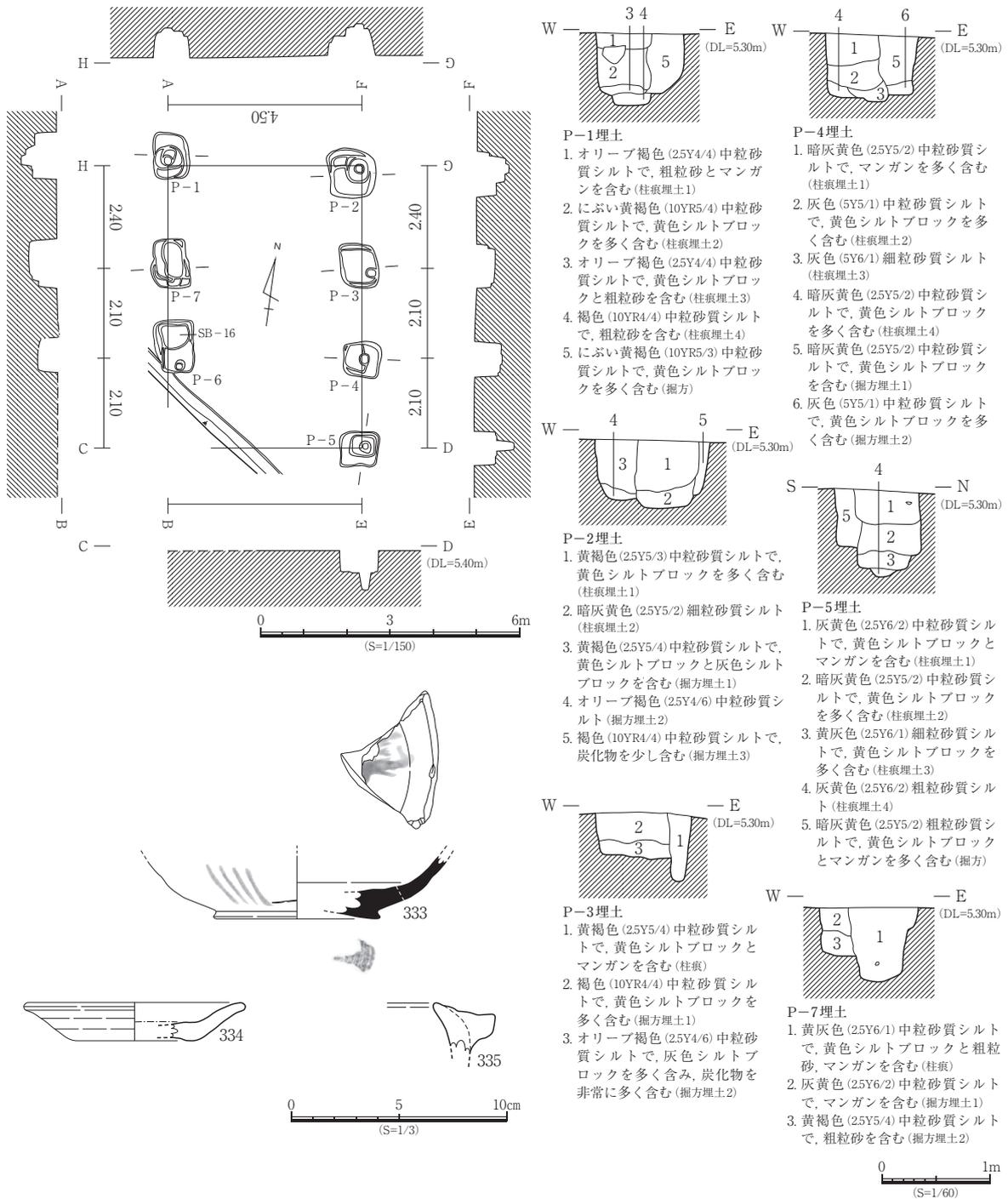


図120 SB-13

恵器10点(碗2, 細片8), 瓦器3点(碗1, 細片2), 東播系須恵器3点(片口鉢1, 細片2), 瓦質土器8点(鍋2, 細片6), 瀬戸・美濃陶器皿1点, 青磁3点(碗2, 細片1), 近世陶器5点(碗1, 皿1, 細片3), 近世磁器3点(小杯1, 細片2), 石製品砥石1点, 鉄釘3点がみられ, 須恵器碗(333)と瀬戸・美濃陶器皿(334), 土師器釜(335)を図示した。

333はP-3の埋土2より出土した須恵器碗で, 平高台を呈する。高台は低く, 体部は底部より湾曲して立ち上がる。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。体部内外面と見込,

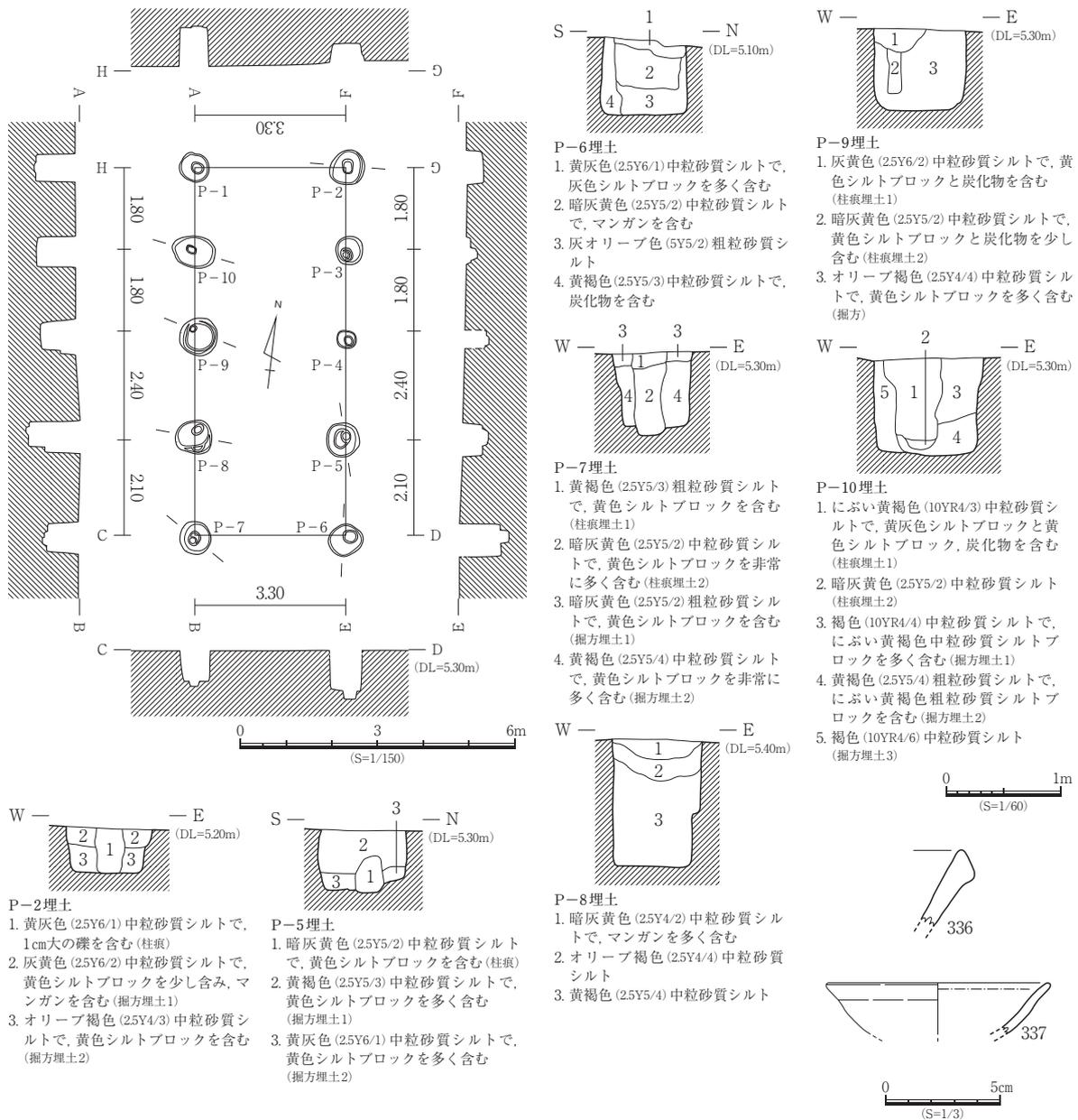


図121 SB-14

底部には火礫がみられる。334はP-3の埋土3より出土した瀬戸・美濃陶器皿である。碁笥底で、口縁部は外反する。全面に灰釉を施し、内禿皿で、見込を釉ハギする。335はP-7より出土した土師器釜で、口縁部は内湾し、鐔を水平に貼付する。調整は横方向のナデである。

SB-14(遺構：図121, 遺物：図121-336・337)

調査区東部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-7°-W)で、SK-106とSD-28・29, P-148・150・151を切り、SB-12に切られる。梁間1間(3.30m)、桁行4間(8.10m)で、桁の柱間寸法は1.80mと2.10m, 2.40mであった。柱穴は楕円形を呈し、長径66~95cm, 短径62~78cm, 深さ0.41~1.18m, 柱痕径11~22cmを測る。出土遺物には土師質土器117点(杯13, 椀1, 細片103)と土師器片5点, 黒色土器片1点, 瓦器片2点, 東播系須恵器片口鉢1点, 瓦質土器2点(鍋1, 細片1), 常滑焼片1点, 白磁皿1点, 近世陶器碗1点, 近世磁器片1点, 鉄滓9点がみられ、東播系須恵器片口鉢(336)と白

2. B区

磁皿(337)を図示した。336はP-2の柱痕より出土した東播系須恵器片口鉢で、体部は外上方にまっすぐ伸び、口縁端部は肥厚して下方へ拡張する。調整は回転ナデとみられるが、内面は摩耗するため調整は不明である。337はP-7の掘方より出土した白磁皿で、口縁部は僅かに外傾する。口禿で、全面に白磁釉を施した後、口縁部は釉ハギする。

SB-15(遺構: 図122, 遺物: 図122-338)

調査区南東部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-8-W)で、北妻柱を確認し、南は調査区外へ続く。梁間2間(3.80m)で、柱間寸法は1.80mと2.00mであった。柱穴は隅丸方形を呈し、長辺73

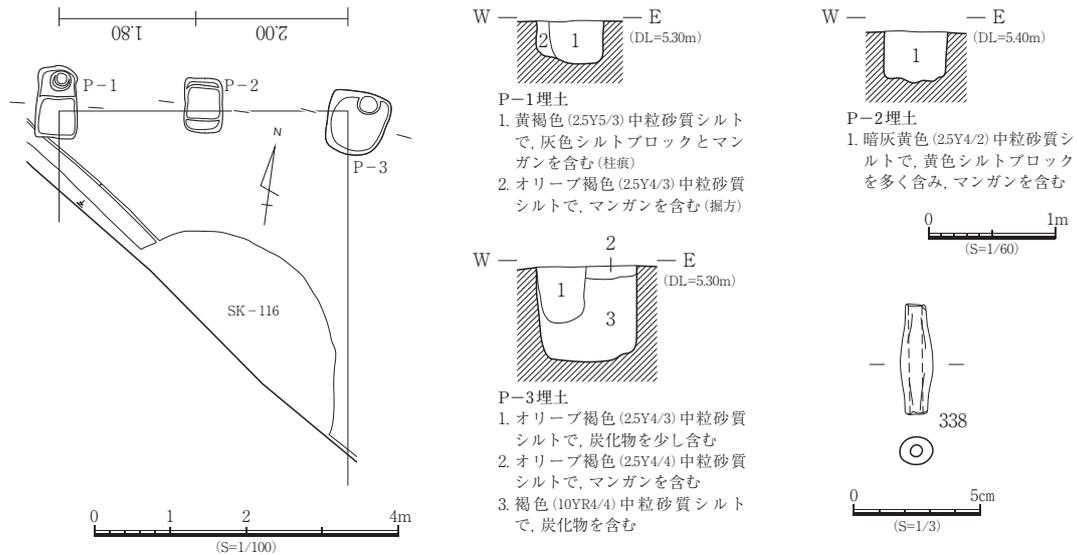


図122 SB-15

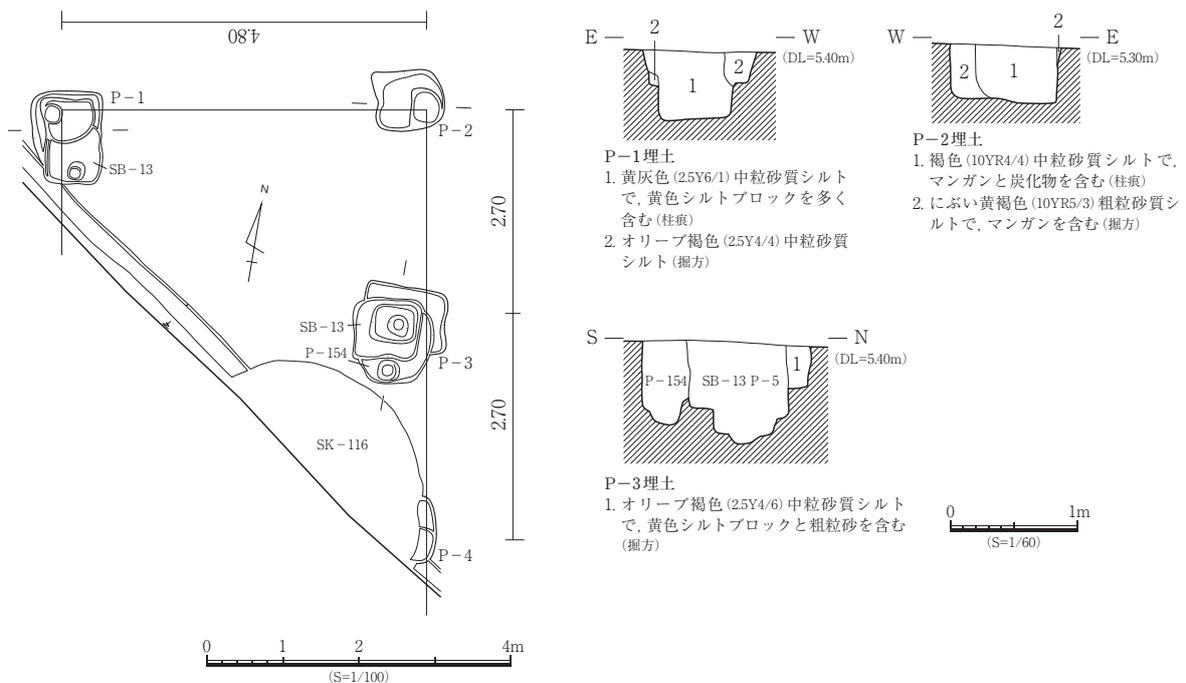


図123 SB-16

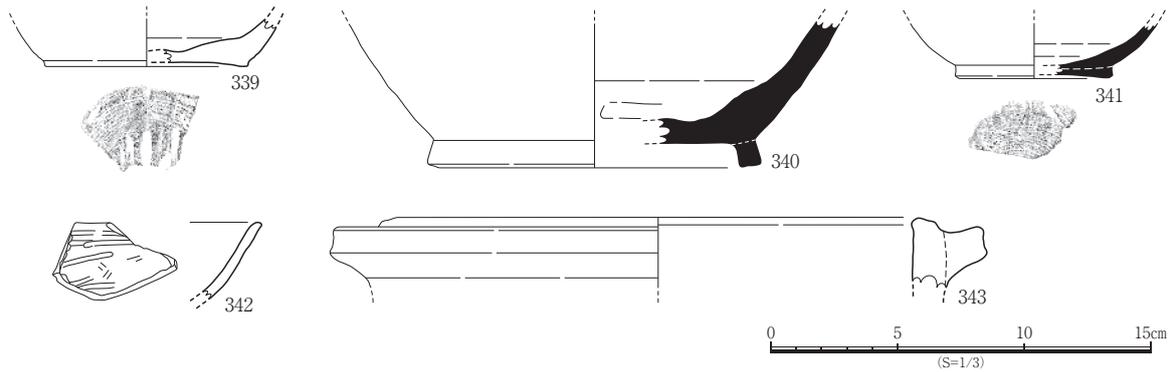


図124 SB-16, SA-6出土遺物実測図

～97cm, 短辺48～78cm, 深さ45～89cm, 柱痕径13～24cmを測る。出土遺物には土師質土器141点(杯9, 碗1, 小皿1, 細片130)と土師器3点(甕1, 細片2), 須恵器3点(碗2, 細片1), 黒色土器碗1点, 瓦器片1点, 土製品土錘1点, 鉄滓1点がみられ, P-3より出土した土製品土錘(338)を図示した。338は土製品土錘で, 紡錘形を呈する。調整はナデである。

SB-16(遺構: 図123, 遺物: 図124-339～342)

調査区南東部で検出した南北棟掘立柱建物跡(N-10°-W)で, SB-13とP-154に切られ, 南は調査区外へ続く。梁間1間(4.80m), 桁行2間(5.40m)を確認し, 桁の柱間寸法は2.70mを測る。柱穴は隅丸方形を呈し, 長辺0.87～1.24m, 短辺0.81～0.90m, 深さ39～80cm, 柱痕径10～19cmを測る。出土遺物には土師質土器209点(杯16, 小皿1, 細片192)と須恵器5点(碗2, 壺1, 細片2), 瓦器碗1点, 瓦質土器2点(鍋1, 細片1)がみられ, 土師質土器杯(339)と須恵器壺(340), 須恵器碗(341), 瓦器碗(342)を図示した。339はP-2より出土した土師質土器杯で, 体部はやや内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。底部外面には板状圧痕が残る。340はP-2の柱痕より出土した須恵器壺である。体部は外上方へまっすぐ伸び, 底部には断面が方形を呈する輪高台を貼付する。内面の調整は回転ナデで, 一部に強いナデを加える。外面の調整は回転ナデとみられるが器面が荒れるため調整は不明で, 自然釉が流れる。341はP-3より出土した須恵器碗で, 平高台を呈する。器壁が薄く, 高台は低い。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。342はP-3より出土した瓦器碗で, 器壁が薄く, 体部は内湾する。調整は内面がナデの後, 横方向のミガキ, 口縁部には横ナデを1段施し, 外面はナデで指頭圧痕が残る。

ii 堀・柵列跡

SA-4(遺構: 図125)

調査区北部で検出した東西方向(N-88°-E)の堀または柵列跡で, SB-12を切る。全長7.20m, 柱間寸法1.80mであった。柱穴は楕円形を呈し, 長径37～55cm, 短径33～52cm, 深さ22～52cm, 柱痕径は15～20cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトまたは灰黄褐色細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器33

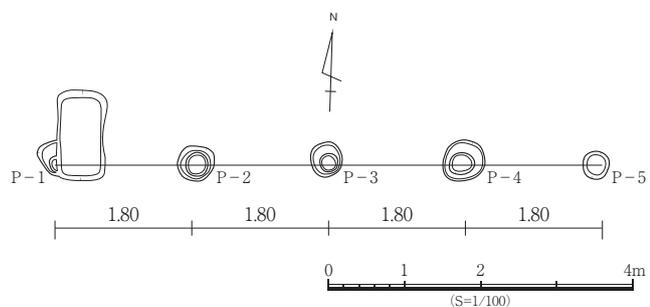


図125 SA-4

2. B区

点(杯2, 小皿1, 細片30)と土師器片1点, 須恵器片1点, 瓦器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SA-5(遺構: 図76・126)

調査区北部で検出した東西方向(N-86°-E)の塀または柵列跡で, P-140を切る。全長7.80m, 柱間寸法1.80mと2.10mであった。柱穴は楕円形を呈し, 長径58~95cm, 短径44~70cm, 深さ14~35cm, 柱痕径は12~30cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片26点, 須恵器2点(杯1, 碗1), 瓦質土器片2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SA-6(遺構: 図127, 遺物: 図124-343)

調査区北部で検出した東西方向(N-88°-E)の塀または柵列跡で, P-146を切る。全長9.90m, 柱間寸法1.80mと2.10m, 2.40mであった。柱穴は楕円形を呈し, 長径47~76cm, 短径45~63cm,

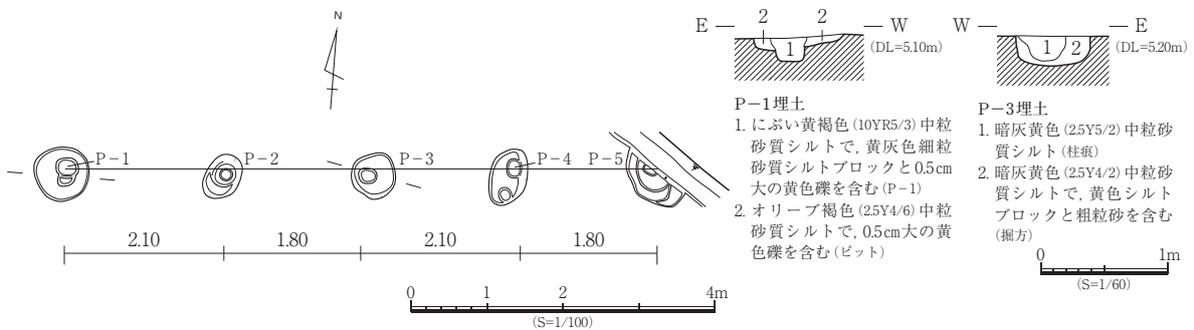


図126 SA-5

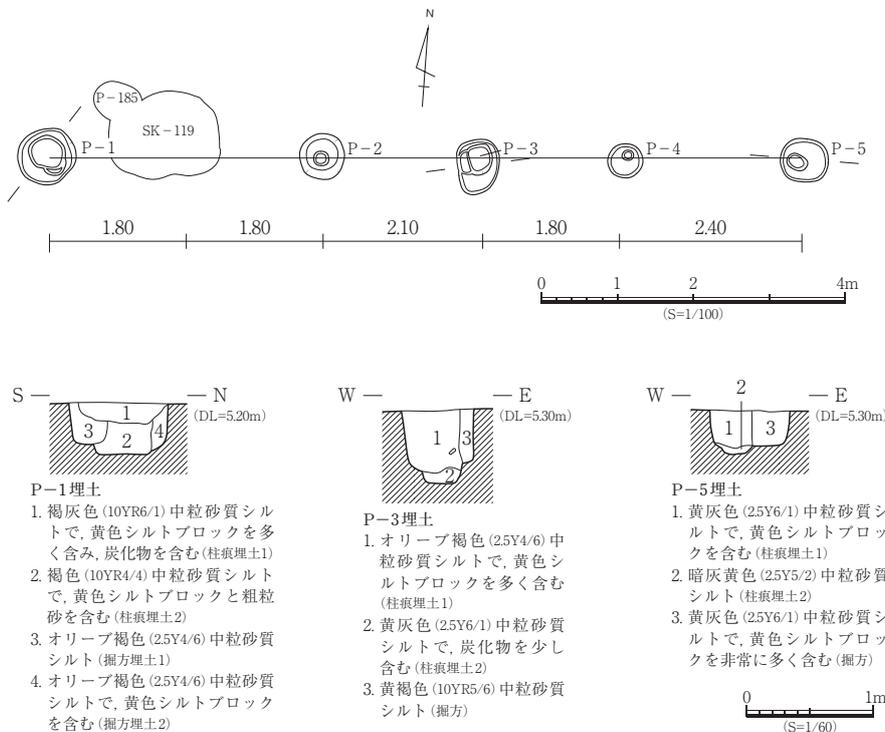


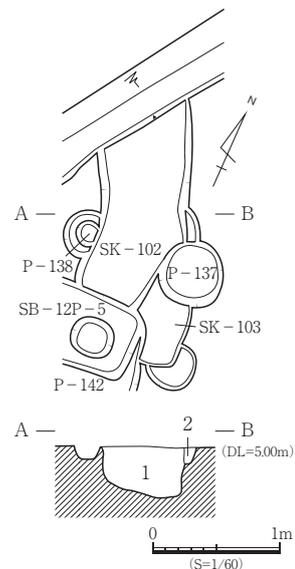
図127 SA-6

深さ36～60cm，柱痕径は10～21cmを測る。出土遺物には土師質土器93点(杯6，細片87)，土師器4点(釜1，細片3)，須恵器片1点，瓦器片2点，白磁杯1点，鉄製品1点，鉄滓1点がみられ，P-2より出土した土師器釜(343)を図示した。343は土師器釜で，口縁部は直立し，鏝はやや上方に貼付する。調整は横方向のナデで，鏝の下には指頭圧痕が残る。

iii 土坑跡

SK-102(遺構：図128，遺物：図131-344・345)

調査区北東部で検出した溝状を呈する土坑で，北は調査区外へ続く。SK-103を切り，SB-12とP-137・138に切られる。検出長1.66m，検出幅0.74m，深さ41cmを測り，埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器70点(杯7，細片63)，瓦器碗1点，瓦質土器2点(釜1，細片1)がみられ，土師質土器杯(344)と瓦質土器釜(345)を図示した。344は土師質土器杯で，体部は底部より屈曲して立ち上がる。調整は回転ナデとみられるが摩耗するため不明瞭で，底部の切り離しは回転糸切りである。345は瓦質土器釜で，口縁部は内湾し，端部を四角く収め，断面が三角形を呈する小さな鏝を貼付する。調整は内面が横方向のナデ，外面はナデとみられるが，摩耗するため不明である。



遺構埋土
1. にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルトで，炭化物を含む(SK-102)
2. にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルトで，炭化物を少し含む(SK-103)

SK-103(遺構：図128)

SK-102の東で検出した隅丸方形を呈する土坑で，P-142を切り，SB-12とSK-102，P-137に切られる。検出長1.30m，検出幅0.43m，深さ15cmを測り，埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトで，炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器56点(杯4，小皿2，細片50)，瓦器片1点がみられたが，図示できるものはなかった。

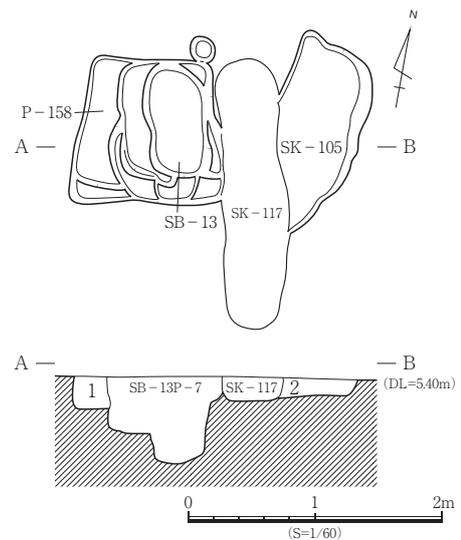
図128 SK-102・103

SK-104

調査区南東部で検出した隅丸方形を呈する土坑で，SB-13とP-155に切られる。長辺1.60m，短辺1.10m，深さ10cmを測り，埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで，マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片11点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK-105(遺構：図129，遺物：図131-346)

SK-104の南東で検出した隅丸方形を呈する土坑で，近世の遺構であるSK-117に切られる。検出長1.56m，短辺0.71m，深さ16cmを測り，埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器33点(杯3，細片30)，土師器5点(釜1，細片4)，須恵器壺1点がみられ，須恵器壺(346)を図示した。346は須恵器壺で，器壁が厚く，底部には断面が方形を呈する低く小さな高台を貼付する。調整は回転ナデで，内面の一部にはナデを加え，高台内



遺構埋土
1. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで，上部にマンガンを含む(P-158)
2. オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルト(SK-105)

図129 SK-105，P-158

はナデである。

SK-106(遺物: 図131-347)

SK-105の東で検出した不整楕円形を呈する土坑で, SB-14に切られる。長径1.31m, 短径1.00m, 深さ17cmを測り, 埋土は黄褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片11点と図示した瓦器椀(347)がみられた。347は瓦器椀で, 口縁部の一部が残存する。調整は内面がナデの後ミガキ, 口縁部外面は横ナデを1段, 体部外面はナデで指頭圧痕が残る。全面に炭素が吸着する。

SK-107(遺構: 図130)

調査区中央部で検出した楕円形を呈する土坑で, SK-108・109を切り, P-171に切られる。検出長1.48m, 検出幅1.03m, 深さ11cmを測り, 埋土は黄褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-108(遺構: 図130)

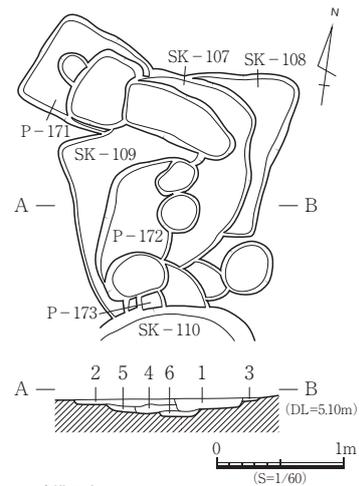
SK-107の東で検出した隅丸方形を呈する土坑で, P-172・173を切り, SK-107・109に切られる。長辺1.45m, 短辺0.63m, 深さ9cmを測り, 埋土は灰黄色粗粒砂質シルトで, マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片9点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-109(遺構: 図130)

SK-107の西で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-108とP-171~173を切り, SK-107に切られる。検出長1.67m, 短辺0.95m, 深さ7cmを測り, 埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器16点(杯1, 小皿1, 細片14)がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-110

SK-109の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で, P-173・174を切る。検出長1.18m, 検出



遺構埋土

1. 黄褐色(25Y5/3)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含む(SK-107)
2. 暗灰黄色(25Y5/2)粗粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含む(SK-109)
3. 灰黄色(25Y6/2)粗粒砂質シルトで, マンガンを含む(SK-108)
4. オリーブ褐色(25Y4/6)中粒砂質シルト(P-172埋土1)
5. 黄褐色(10YR5/6)中粒砂質シルト(P-172埋土2)
6. 黄褐色(10YR5/6)中粒砂質シルト(ピット)

図130 SK-107~109, P-172

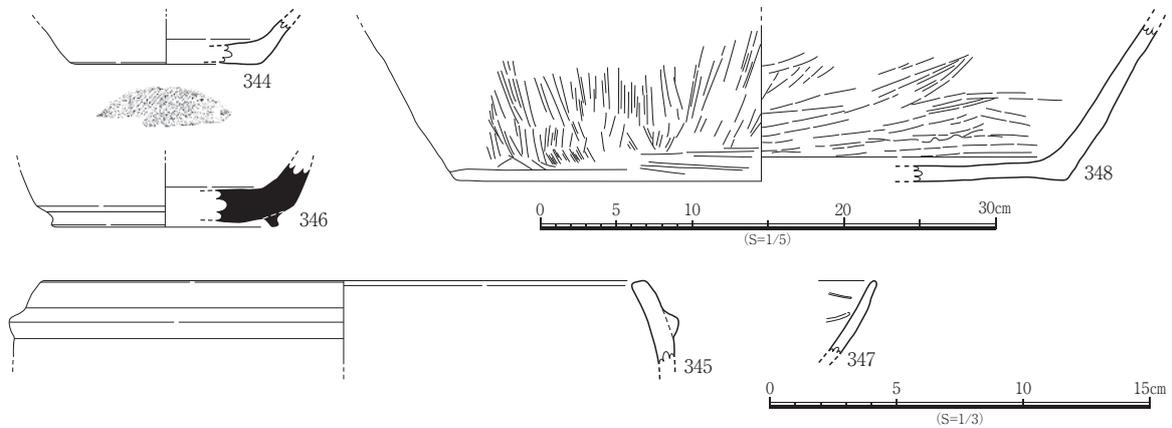


図131 SK-102・105・106, SD-28出土遺物実測図

幅1.03m、深さ26cmを測り、埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、上層には0.5cm大の黄色礫と少量の炭化物を含み、下層は淡黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器28点(椀1, 細片27)、須恵器片1点、瓦器片6点、青磁碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-111

SK-110の南西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-113を切り、SK-112に切られる。長辺1.58m、短辺0.72m、深さ6cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、粗粒砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-112

SK-111の南西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-111・113を切る。長辺1.64m、短辺0.55m、深さ3cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかった。

SK-113

SK-111の南で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-111・112に切られ、南は調査区外へ続く。検出長1.03m、検出幅0.50m、深さ3cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかった。

iv 溝跡

SD-28(遺構:図132, 遺物:図131-348)

調査区北東部で検出した南北方向の溝跡で、北は調査区外へ続き、南は攪乱に切られる。P-144を切り、SB-14に切られる。検出長11.84m、検出幅0.38m、深さ13cmを測り、基底面は北(5.026m)から南(5.008m)へ傾斜する。断面はU字形を呈し、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片28点と土師器片1点、図示した常滑焼甕(348)がみられた。348は常滑焼甕で、体部は外上方へまっすぐ伸びる。調整は見込が横方向のナデ、体部内面は粗いナデ、体部外面は縦方向の板ナデで、下端は横方向のナデ、底部外面はナデである。

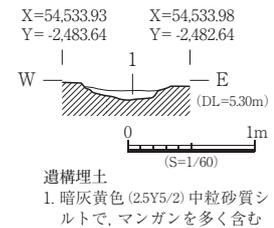


図132 SD-28

SD-29(遺構:図133)

調査区南東部で検出した南北方向の溝跡で、南は調査区外へ続き、北は攪乱に切られる。SD-30を切り、SB-14に切られる。検出長5.00m、検出幅0.60m、深さ23cmを測り、基底面は南(5.066m)から北(4.956m)へ傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色中粒砂質シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器20点(杯2, 細片18)と東播系須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

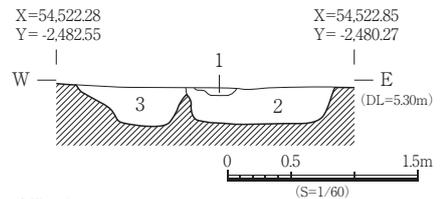


図133 SD-29・35

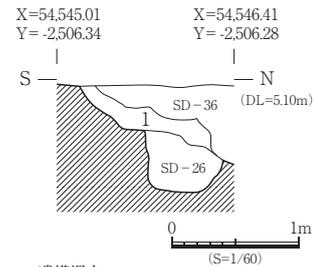
SD-30

SD-29の西で検出した南北方向の溝跡で、南は調査区外へ続き、SD-29に切られる。検出長3.01m、検出幅0.37m、深さ6cmを測り、基底面は北(4.980m)から南(4.940m)へ傾斜する。断面はU字形を呈し、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(杯1, 細片1)がみられたが、図示できるものはなかった。

2. B区

SD-31(遺構:図134, 遺物:図138-349・350)

調査区北部で検出した東西方向の溝跡で, 東は調査区外へ続き, 下面のSD-26を切り, 近世のSD-36に切られる。検出長9.45m, 検出幅0.49m, 深さ36cmを測り, 基底面は西(4.851m)から東(4.708m)へ傾斜する。埋土はオリブ褐色シルト質中粒砂で, 粗粒砂とマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器19点(杯3, 細片16)と青磁碗1点, 近世陶器皿1点がみられ, 青磁碗(349)と近世陶器皿(350)を図示した。349は同安窯系の青磁碗で, 口縁部の一部が残存する。全面に黄色味を帯びた青磁釉を施し, 内面には圈線が1条, 外面には縦方向の櫛描文がみられる。350は近世陶器皿である。高台は削り出しで, 低く不明瞭で, 口縁部は体部より屈曲して外上方にまっすぐ伸びる。全面に透明感のない灰釉を施し, 見込と高台に砂目痕が残る。唐津系灰釉陶器である。



遺構埋土
1. オリブ褐色(25Y4/3)シルト質中粒砂で, 粗粒砂とマンガンを含む

図134 SD-31

v ピット

P-137(遺物:図138-351)

調査区北東部で検出した楕円形を呈するピットで, SK-102・103を切る。長径54cm, 短径52cm, 深さ39cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器38点(杯3, 碗1, 小皿1, 細片33)と瓦器片2点, 瓦質土器片1点がみられ, 土師質土器碗(351)を図示した。351は土師質土器碗で, 輪高台を貼付する。体部は底部より緩やかに湾曲して立ち上がる。調整は回転ナデとみられるが, 摩耗するため不明瞭である。

P-138

P-137の西で検出した楕円形を呈するピットで, SK-102を切る。長径41cm, 短径31cm, 深さ16cm, 柱痕径13cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片10点と瓦質土器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-139

P-138の西で検出した円形を呈するピットで, 径35cm, 深さ12cm, 柱痕径15cmを測り, 埋土は灰黄色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器杯1点と青花片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-140

P-139の北西で検出した楕円形を呈するピットで, SA-5に切られる。長径67cm, 検出幅53cm, 深さ33cm, 柱痕径9cmを測る。掘方の埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, マンガンを多く含み, 柱痕の埋土は灰オリブ褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片14点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-141

P-140の南で検出した楕円形を呈するピットで, 長径58cm, 短径54cm, 深さ16cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが, 図示できなかつた。

P-142(遺構:図135, 遺物:図138-352)

P-141の南東で検出した楕円形を呈するピットで, SB-12とSK-103, P-143に切られる。

検出長94cm, 短径68cm, 深さ67cmを測る。埋土は4層に分かれる。出土遺物には土師質土器54点(杯3, 小皿1, 細片50)と須恵器片1点がみられ, 土師質土器杯(352)を図示した。352は土師質土器杯で, 器壁が薄く, 体部は上方へ立ち上がる。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。

P-143(遺構: 図136)

P-142の南で検出した隅丸方形を呈するピットで, P-142を切る。長辺86cm, 短辺58cm, 深さ40cm, 柱痕径18cmを測る。埋土は3層に分かれる。出土遺物には土師質土器43点(杯4, 細片39)と瓦質土器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-144(遺構: 図137)

調査区東部で検出した隅丸方形を呈するピットで, SD-28に切られる。長辺79cm, 短辺76cm, 深さ15cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片12点と土師器5点(鍋4, 細片1), 黒色土器片2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-145

P-144の北西で検出した楕円形を呈するピットで, 近世の遺構に切られる。検出長34cm, 短径33cm, 深さ16cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点と東播系須恵器甕1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-146

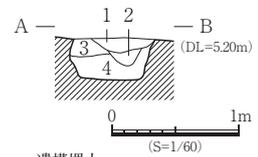
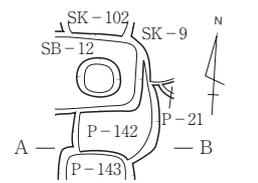
P-145の西で検出した隅丸方形を呈するピットで, SA-6に切られる。長辺66cm, 短辺47cm, 深さ5cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(杯1, 細片1)と瓦器碗1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-147

P-146の西で検出した楕円形を呈するピットで, 長径50cm, 短径45cm, 深さ17cm, 柱痕径17cmを測る。掘方の埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, マンガンを多く含み, 柱痕の埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器5点(杯1, 細片4)がみられたが, 図示できるものはなかった。

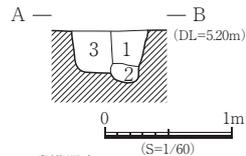
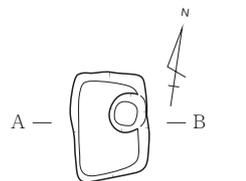
P-148

P-147の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで, SB-14に切られる。検出長46cm, 短辺48cm, 深さ20cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器17点(杯1, 細片16)と土師器4点(釜1, 細片3)がみられたが, 図示できるものはなかった。



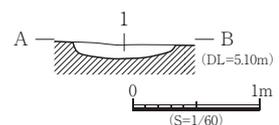
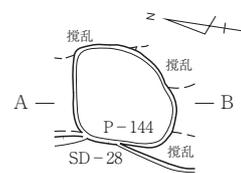
- 遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで, 炭化物を含む
 2. 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルト
 3. にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルトで, マンガンを含む
 4. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, 粗粒砂を含む

図135 P-142



- 遺構埋土
1. オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで, 炭化物を含む(柱痕埋土1)
 2. 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルト(柱痕埋土2)
 3. オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを含む(掘方)

図136 P-143



- 遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと炭化物を含む

図137 P-144

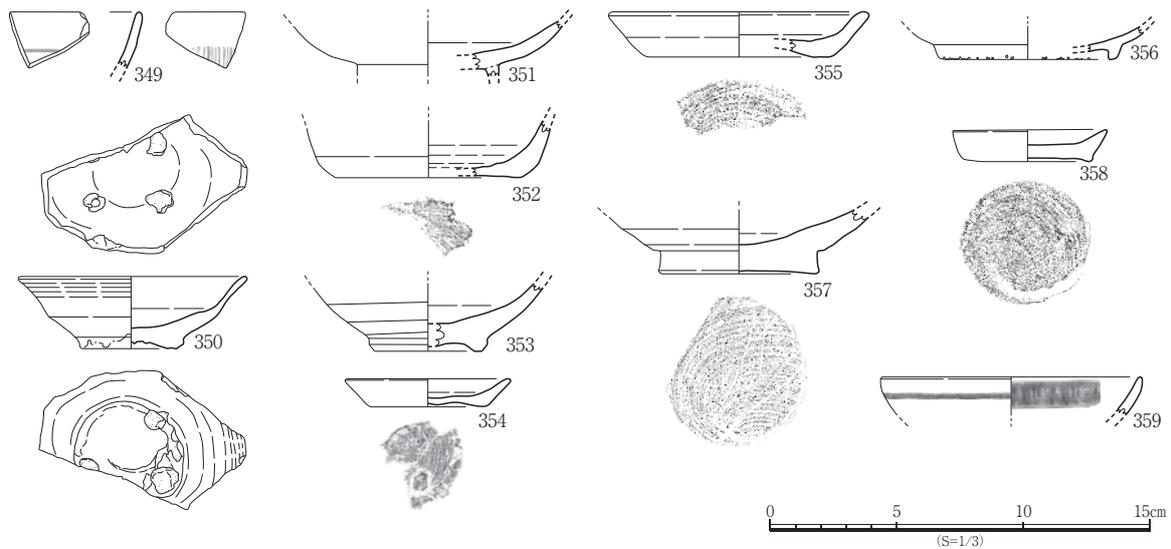


図138 SD-31, P-137・142・152・157・158・165・166・168・170出土遺物実測図

P-149

P-148の南西で検出した溝状を呈するピットで、検出長85cm、全幅32cm、深さ15cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器28点(杯2、細片26)と土師器甕6点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-150

P-149の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで、SB-14とP-151に切られる。検出長68cm、短辺69cm、深さ29cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片8点と土師器甕2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-151

P-150の南西で検出した楕円形を呈するピットで、P-150を切り、SB-14に切られる。検出長54cm、検出幅23cm、深さ17cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と瓦質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-152(遺物: 図138-353)

P-151の南東で検出した楕円形を呈するピットで、長径40cm、短径38cm、深さ44cm、柱痕径14cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と土師器片8点、近世陶器碗1点、鉄釘1点がみられ、近世陶器碗(353)を図示した。353は近世陶器碗で、内面と外面の一部には錆釉を施し、外面は回転ナデで、体部下半には回転ケズリを加える。唐津系陶器である。

P-153

P-152の西で検出した隅丸方形を呈するピットで、一辺37cm、深さ30cm、柱痕径16cmを測る。掘方の埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、柱痕の埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器6点(小皿1、細片5)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-154

P-153の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで、SB-16を切り、SB-13に切られる。検出長1.02m、検出幅0.93m、深さ73cm、柱痕径15cmを測る。埋土は3層に分かれ、柱痕の埋土は上層が暗灰黄色中粒砂質シルト、下層が黄灰色粗粒砂質シルトで、掘方の埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトで、いずれも黄色シルトブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器31点(杯4、細片27)と土師器片2点、瓦器片39点、近世磁器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-155

P-148の西で検出した溝状を呈するピットで、SK-104を切る。検出長1.86m、検出幅0.55m、深さ25cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器29点(杯4、細片25)と土師器甕2点、須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-156

P-155の西で検出した楕円形を呈するピットで、長径38cm、短径23cm、深さ23cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器17点(杯1、細片16)と瓦器片1点、土製品土錘1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-157(遺物:図138-354)

P-156の南東で検出した楕円形を呈するピットで、長径43cm、短径41cm、深さ46cm、柱痕径17cmを測る。掘方の埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含み、柱痕の埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器36点(杯4、小皿1、細片31)と土師器片1点がみられ、土師質土器小皿(354)を図示した。354は土師質土器小皿で、器壁が薄く、口縁部は外上方へまっすぐ伸びる。口径は6.4cmを測る。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

P-158(遺構:図129、遺物:図138-355)

P-157の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで、SB-13に切られる。長辺1.14m、短辺1.12m、深さ64cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、上部にマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器14点(杯1、碗1、小皿1、細片11)がみられ、土師質土器小皿(355)を図示した。355は土師質土器小皿で、口縁部は底部より湾曲し、外上方へまっすぐ立ち上がる。口径は9.8cmを測る。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

P-159

P-158の西で検出した楕円形を呈するピットで、南は調査区外へ続く。検出長49cm、検出幅27cm、深さ14cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器8点(杯1、細片7)と須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-160

調査区北部で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺65cm、短辺57cm、深さ5cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と瓦質土器片1点、青花片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-161

P-160の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺45cm、短辺40cm、深さ26cm、柱痕径16cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師

質土器片1点と白磁片1点、青磁片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-162

P-161の西で検出した楕円形を呈するピットで、長径50cm、短径48cm、深さ12cm、柱痕径16cmを測る。掘方の埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含み、柱痕の埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-163(遺構:図139)

P-162の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺89cm、短辺70cm、深さ27cm、柱痕径22cmを測る。埋土は褐灰色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片9点と瓦器片4点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-164

P-163の南西で検出した楕円形を呈するピットで、長径46cm、短径44cm、深さ29cm、柱痕径10cmを測る。掘方の埋土は灰黄色中粒砂質シルト、柱痕の埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片10点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-165(遺構:図140, 遺物:図138-356)

P-164の南東で検出した楕円形を呈するピットで、長径50cm、短径40cm、深さ15cm、柱痕径12cmを測る。埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器片2点と図示した白磁皿(356)がみられた。356は白磁皿で、器壁が薄く、高台はやや内傾する。畳付を除き光沢のある白磁釉を施し、畳付には砂が付着する。

P-166(遺物:図138-357)

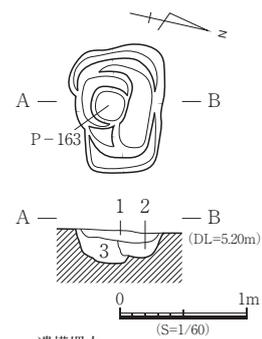
P-165の南西で検出した楕円形を呈するピットで、長径48cm、短径33cm、深さ13cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器17点(碗1, 細片16)がみられ、土師質土器碗(357)を図示した。357は土師質土器碗で、平高台を呈する。体部は底部より外へ大きく開いて立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

P-167

P-166の南西で検出した円形を呈するピットで、径32cm、深さ16cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器15点(杯1, 碗1, 細片13)と土製品土錘1点がみられたが、図示できるものはなかった。

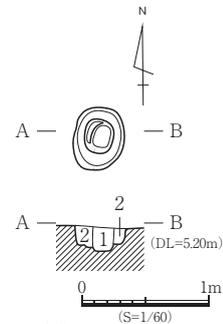
P-168(遺構:図141, 遺物:図138-358)

調査区中央部で検出した楕円形を呈するピットで、長径90cm、短径78



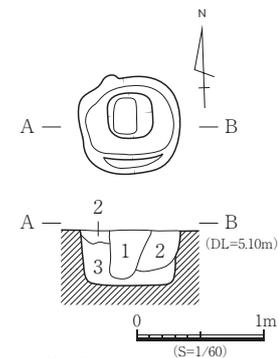
- 遺構埋土
1. 黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、炭化物を含む(ピット埋土1)
 2. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(ピット埋土2)
 3. 褐灰色(10YR6/1)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを含む(P-163)

図139 P-163



- 遺構埋土
1. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト(柱痕)
 2. オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトで、マンガンを含む(掘方)

図140 P-165



- 遺構埋土
1. オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと炭化物を少し含む(柱痕)
 2. 黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含み、炭化物を含む(掘方埋土1)
 3. オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを非常に多く含む(掘方埋土2)

図141 P-168

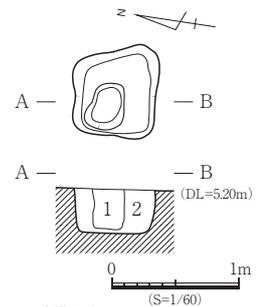
cm, 深さ38cm, 柱痕径19cmを測る。埋土は3層に分かれる。出土遺物には土師質土器5点(杯1, 小皿1, 細片3)と土師器片1点, 須恵器片1点, 備前焼2点(播鉢1, 細片1)がみられ, 土師質土器小皿(358)を図示した。358は土師質土器小皿で, 口縁部は短く外上方へまっすぐ伸びる。口径は6.0cmを測る。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。

P-169

P-168の南で検出した円形を呈するピットで, 径32cm, 深さ14cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器4点(杯1, 細片3)がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-170(遺構: 図142, 遺物: 図138-359)

P-169の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで, 長辺66cm, 短辺63cm, 深さ39cm, 柱痕径18cmを測る。埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器片27点と須恵器甕1点, 瓦質土器片1点, 青磁片1点, 青花皿1点がみられ, 青花皿(359)を図示した。359は青花皿で, 口縁部は内湾する。内面には四方襷文とみられる染付, 外面には圏線の染付がみられ, 全面に透明釉を厚く施す。粗製である。



遺構埋土
1. 黄灰色(25Y6/1)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと炭化物を少し含む(柱痕)
2. オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含む(掘方)

図142 P-170

P-171

P-168の南西で検出した隅丸方形を呈するピットで, SK-107を切り, SK-109に切られる。検出長84cm, 短辺78cm, 深さ8cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで, マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器7点(杯1, 細片6)と鉄製品1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-172(遺構: 図130)

P-171の南東で検出した隅丸方形を呈するピットで, SK-108・109とP-173に切られる。検出長1.06m, 短辺0.56m, 深さ7cmを測る。埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-173

P-172の南で検出した楕円形を呈するピットで, P-172を切り, SK-108~110に切られる。検出長68cm, 短径68cm, 深さ15cm, 柱痕径18cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と須恵器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

P-174

P-173の南西で検出した楕円形を呈するピットで, SK-110に切られる。長径54cm, 検出幅41cm, 深さ23cm, 柱痕径11cmを測る。掘方の埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, マンガンを多く含み, 柱痕の埋土は上層が褐色粗粒砂質シルトで, 0.5cm大の礫と炭化物を含み, 下層が暗灰黄色粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片7点がみられたが, 図示できるものはなかった。

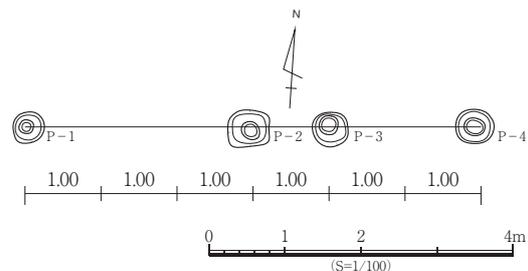


図143 SA-7

③ 近世後期以降

i 堀・柵列跡

SA-7(遺構:図143)

B-2区東部で検出した東西方向(N-86°-E)の堀または柵列跡で、全長6.00m、柱間寸法1.00mを測る。柱穴は楕円形を呈し、長径42~55cm、短径40~48cm、深さ24~48cm、柱痕径は12~21cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、掘方にはマンガンと炭化物を含み、柱痕には0.5cm大の黄色礫とマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器19点(杯1, 細片18)と土師器7点(碗1, 細片6), 瓦器片1点, 近世磁器片3点がみられたが、図示できるものはなかった。

ii 土坑跡

SK-114(遺構:図144)

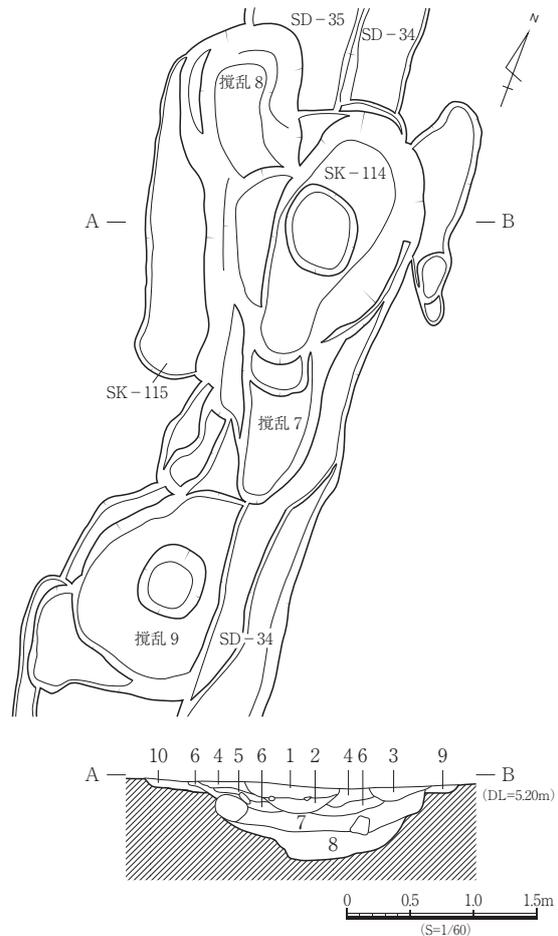
調査区南東部で検出した楕円形を呈する土坑で、近代の遺構である攪乱7に切られる。長径2.40m、短径1.05m、深さ65cmを測る。埋土は灰色シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と近世陶器3点(碗1, 皿1, 火入1), 棧瓦1点, 石製品砥石2点, 木製品曲物1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-115(遺構:図144, 遺物:図146-360)

SK-114の西で検出した溝状を呈する土坑で、近代の遺構である攪乱8に切られる。検出長2.61m、検出幅0.52m、深さ7cmを測る。埋土は灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と近世磁器皿1点, 平瓦1点, 石製品砥石1点がみられ、近世磁器皿(360)を図示した。360は能茶山窯の近世磁器皿で、型打成形である。角皿で、高台を貼付する。見込には楼閣山水文の染付、口縁部には口鏽風に呉須を塗り、高台内には方形枠に「茶」銘がみられる。全面に白濁して透明感のない透明釉を施し、畳付は釉ハギする。

SK-116(遺構:図145)

調査区南部で検出した楕円形を呈する土坑で、南は調査区外へ続く。検出長3.36m、検出幅1.04m、深さ1.20mを測り、埋土は7層に分かれる。出土遺物には土師質土器38点(杯3, 小皿1, 細片34)と瓦器片1点, 近世陶器3点(碗1, 皿1, 細片1), 近世磁器碗2点, 平瓦6点, 鉄製品1点がみられたが、図示できるものはなかった。



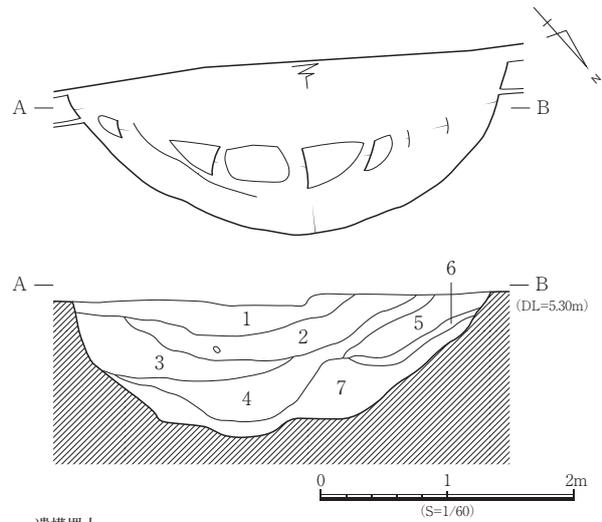
遺構埋土

1. 黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む(攪乱8埋土1)
2. 褐灰色(10YR5/1)中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を含む(攪乱8埋土2)
3. 灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂質シルトで、黄色シルトブロックとマンガンを含む(攪乱)
4. 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、灰黄色シルトブロックを含む(攪乱7埋土1)
5. 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂(攪乱7埋土2)
6. 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質細粒砂(攪乱7埋土3)
7. 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトで、20cm大の礫とマンガンを含む(攪乱7埋土4)
8. 灰色(5Y5/1)シルトで、マンガンを含む(SK-114)
9. 灰色(5Y6/1)シルト質中粒砂で、マンガンを含む(ピット)
10. 灰黄色(2.5Y6/6)中粒砂質シルトで、マンガンを多く含む(SK-115)

図144 SK-114・115, 攪乱7・8

SK-117(遺物:図146-361)

SK-116の北西で検出した溝状を呈する土坑で、全長2.17m、全幅0.57m、深さ15cmを測る。埋土は灰黄色中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと粗粒砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器17点(杯1, 細片16)と須恵器椀1点、近世陶器鉢1点、瓦9点(平瓦5, 棧瓦4)がみられ、須恵器椀(361)を図示した。361は須恵器椀で、輪高台を呈する。体部は底部より緩やかに湾曲して大きく開く。底部には断面が方形で「ハ」の字状に開く高台を貼付する。調整は回転ナデで、見込にはナデを加える。高台内には回転糸切り痕がみられる。



- 遺構埋土
1. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中粒砂質シルトで、マンガンを含み、炭化物を少し含む
 2. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗粒砂質シルトで、マンガンを含む
 3. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルトで、粗粒砂とマンガンを含む
 4. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗粒砂質シルトで、マンガンを含む
 5. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粗粒砂質シルト
 6. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト質粗粒砂で、黄色シルトブロックを含む
 7. 黄褐色 (2.5Y5/4) 中粒砂質シルトで、粗粒砂とマンガンを含む

図145 SK-116

SK-118

(遺構:図147, 遺物:図146-362・363)

SK-117の北西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、南は調査区外へ続く。検出長1.53m、検出幅1.44m、深さ54cmを測り、埋土は8層に分かれる。出土遺物には土師質土器11点(杯2, 小皿2, 細片7), 土師器片2点, 東播系須恵器片口鉢2点, 青磁碗1点, 瓦4点(軒平瓦1, 平瓦2, 棧瓦1)がみられ、土師質土器小皿(362)と東播系須恵器片口鉢(363)を図示した。362は土師質土器小皿で、口縁部は外上方へまっすぐ伸びる。口径8.8cmを測る。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。363は東播系須恵器片口鉢で、口縁端部は肥厚して上方へ細く摘む。調整は回転ナデで、内面の一部にはナデを加える。

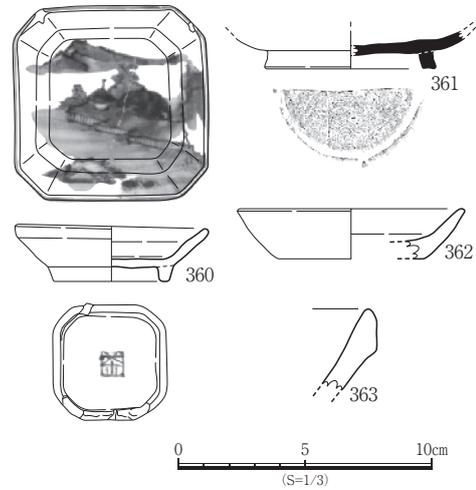


図146 SK-115・117・118
出土遺物実測図

SK-119(遺構:図148)

SK-118の北西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、P-185に切られる。長辺1.46m、短辺1.12m、深さ33cmを測る。埋土は4層に分かれ、最下層にはハンダを含んでいた。出土遺物には土師質土器3点(杯1, 細片2)と近世陶器2点(碗1, 細片1), 瓦28点(軒平瓦1, 丸瓦2, 平瓦22, 棧瓦3)がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-120(遺構:図149)

SK-119の北西で検出した隅丸方形を呈する土坑で、長辺1.64m、短辺0.94m、深さ17cmを測り、埋土は2層に分かれる。出土遺物には棧瓦片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-121(遺構:図76・150, 遺物:図153-364~366)

調査区北部で検出した不整形を呈する土坑で、東は調査区外へ続き、SD-36に切られる。検出

2. B区

長3.80m, 検出幅2.47m, 深さ73cmを測る。埋土は7層に分かれる。出土遺物には土師質土器45点(杯1, 細片44), 土師器片2点, 東播系須恵器片口鉢1点, 瓦質土器片1点, 瀬戸・美濃陶器皿1点, 陶器3点(甕1, 細片2), 近世陶器播鉢1点, 近世磁器片1点, 石製品砥石1点, 鉄滓1点がみられ, 瀬戸・美濃陶器皿(364)と近世陶器播鉢(365), 石製品砥石(366)を図示した。364は瀬戸・美濃陶器皿で, 口縁部は外反し, 端部には挟りが入り稜花風になる。全面に灰釉を施す。365は近世陶器播鉢で, 備前焼である。口縁部は直立し, 顎が出る。調整は回転ナデで, 内面には斜方向の播目がみられる。366は石製品砥石で, 残存部で4面の使用がみられる。使用面は使用により中央部が著しく凹む。石材は細粒砂岩である。

SK-122

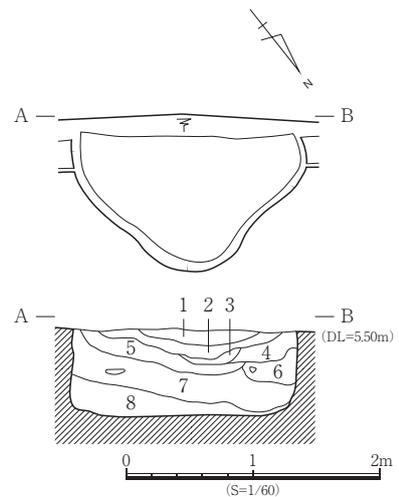
B-1区北西部で検出した楕円形を呈する土坑で, 北は調査区外へ続く。検出長2.34m, 検出幅1.00m, 深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト質粗粒砂で, マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器5点(碗1, 細片4)がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-123(遺構: 図151, 遺物: 図153-367~370)

B-2区中央部で検出した溝状を呈する土坑で, SK-124~126とP-191・192に切られる。全長5.02m, 検出幅1.45m, 深さ16cmを測る。埋土は灰色中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと0.5cm大の黄色礫, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器21点(杯2, 碗1, 小皿1, 細片17), 瓦器3点(碗2, 小皿1), 東播系須恵器片口鉢1点, 白磁碗1点がみられ, 土師質土器小皿(367)と瓦器碗(368), 瓦器小皿(369), 東播系須恵器片口鉢(370)を図示した。367は土師質土器小皿で, 口縁部は底部より緩やかに湾曲して立ち上がる。口径8.5cmを測る。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。368は瓦器碗で, 底部には断面が台形を呈する扁平な高台を貼付する。調整はナデで, 見込には平行暗文がみられ, 外面には指頭圧痕が残る。全面に炭素が吸着する。369は瓦器小皿で, 底部は丸く, 口縁部は短く外上方へまっすぐ伸びる。調整は口縁部が横ナデ, 底部外面はナデで指頭圧痕が残る。内面はナデ調整とみられるが摩耗するため不明瞭で, 煤が付着する。370は東播系須恵器片口鉢で, 器壁が薄く, 体部は外上方へまっすぐ伸び, 口縁端部を上方へ摘み上げる。調整は回転ナデで, 外面の一部にはナデを加える。

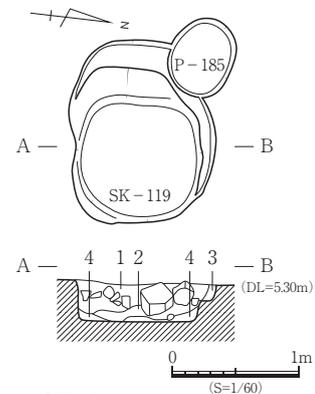
SK-124(遺構: 図151, 遺物: 図153-371)

SK-123の東で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SK-123を切り, P-191に切られる。長



- 遺構埋土
1. 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックとマンガンを含む
 2. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを多く含む
 3. オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで, 粗粒砂を含む
 4. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと炭化物を少し含む
 5. 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを少し含む
 6. オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルトで, 8cm大の角礫を含む
 7. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックと粗粒砂を多く含む, 15cm大の礫を含む
 8. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルトで, 黄色シルトブロックを含む

図147 SK-118



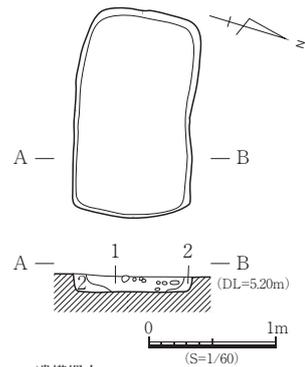
- 遺構埋土
1. 灰色(5Y6/1)中粒砂質シルトで, 淡黄色シルトブロックと10~20cm大の礫を多く含む
 2. オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで, 淡黄色シルトブロックを含む
 3. 灰色(5Y6/1)中粒砂質シルトで, マンガンを含む
 4. 灰色(5Y5/1)シルト質粗粒砂で, ハンダを含む

図148 SK-119

辺2.08m, 短辺1.15m, 深さ17cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで, 0.5cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器25点(杯3, 細片22), 土師器片1点, 瓦器片2点, 青磁碗1点がみられ, 青磁碗(371)を図示した。371は青磁碗で, 口縁端部には小さく抉りを入れ, 輪花形を呈する。全面に光沢のある灰オリーブ色の青磁釉を施す。

SK-125(遺構: 図152, 遺物: 図153-372)

SK-124の南西で検出した楕円形を呈する土坑で, SK-123を切り, SK-126に切られる。長径1.16m, 短径0.70m, 深さ12cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で, 1~3cm大の黄色礫を多く含み, マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器14点(杯1, 細片13), 土師器片4点, 瓦器小皿1点, 青白磁合子1点がみられ, 土師質土器杯(372)を図示した。372は土師質土器杯で, 器壁が薄く, 体部は底部より屈曲して立ち上がる。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。



- 遺構埋土
1. オリーブ褐色(25Y4/3) 極粗粒砂で, 褐色粗粒砂質シルトブロックと5cm大の円礫を含む(擾乱)
 2. 灰黄褐色(10YR5/2) 中粒砂質シルトで, 粗粒砂と炭化物を含む

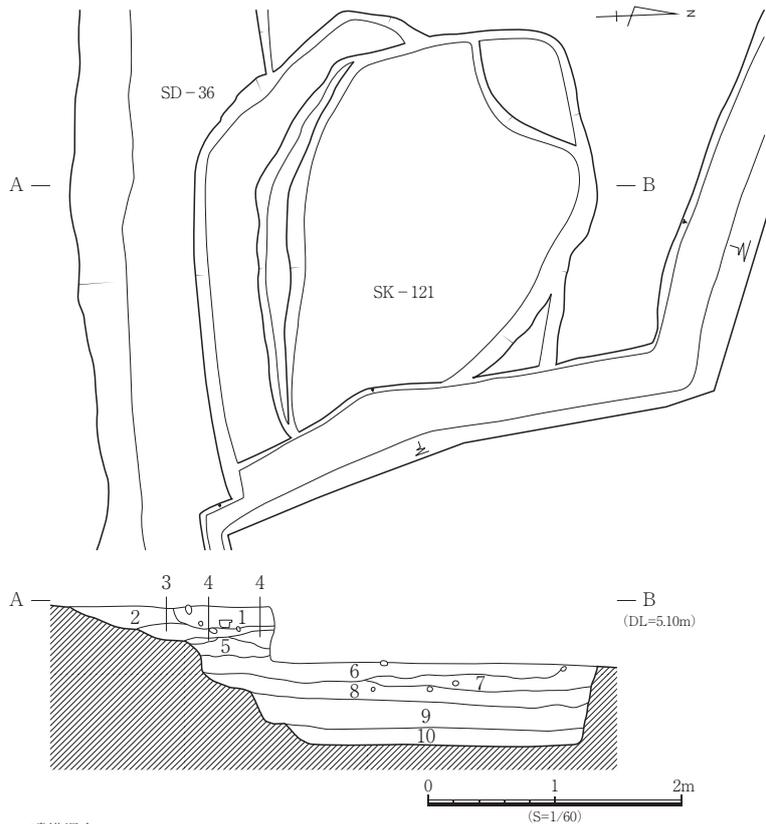
図149 SK-120

SK-126(遺構: 図152)

SK-125の西で検出した楕円形を呈する土坑で, SK-123・125を切り, P-192に切られる。長径1.33m, 短径0.68m, 深さ8cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で, 8cm大の円礫とマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片10点と瓦質土器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-127(遺物: 図153-373)

SK-126の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で, 長辺1.39m, 短辺1.38m, 深さ16cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで, 0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器46点(杯1, 碗1, 細片44), 土師器甕1点, 須恵器碗1点, 瓦器碗5点がみられ, 瓦器碗(373)を図示した。373は瓦器碗で, 底部には断面が三角形を呈する



- 遺構埋土
1. 暗灰黄色(25Y5/2) 中粒砂質シルトで, 5~10cm大の礫を含む(擾乱)
 2. 暗灰黄色(25Y5/2) 中粒砂質シルト(SD-36埋土1)
 3. 灰色(5Y6/1) 中粒砂質シルト(SD-36埋土2)
 4. 暗灰黄色(25Y5/2) シルト質粗粒砂で, 1cm大の礫を多く含み, 極粗粒砂を含む(SK-121埋土1)
 5. 暗灰黄色(25Y5/2) シルト質粗粒砂で, 1cm大の礫を含む(SK-121埋土2)
 6. 暗灰黄色(25Y4/2) シルト質中粒砂で, マンガンを多く含む(SK-121埋土3)
 7. 黄灰色(25Y5/1) 中粒砂質シルトで, マンガンを含む(SK-121埋土4)
 8. 灰色(5Y4/1) 中粒砂質シルトで, 砂粒は少なく, 木片を含み, 土壌化する(SK-121埋土5)
 9. 灰色(7.5Y4/1) 粗粒砂質シルトで, 木片を含む(SK-121埋土6)
 10. 明青灰色(5B7/1) シルト質粗粒砂で, 木片を含む(SK-121埋土7)

図150 SK-121, SD-36

2. B区

小さな高台を貼付する。調整は内面がナデとみられるが摩耗するため不明瞭で、外面はナデで体部には指頭圧痕が残る。体部外面は一部のみ炭素が吸着する。

SK-128(遺物: 図153-374)

SK-127の南西で検出した土坑で、攪乱に切られる。検出長3.50m, 検出幅1.12m, 深さ6cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器9点(杯2, 細片7)と瓦器片1点, 近世陶器碗1点, 近世磁器片1点がみられ, 近世陶器碗(374)を図示した。374は唐津系の近世陶器碗である。天目形で、高台は削り出しで、断面が方形を呈する。内面から高台外面まで鉄釉を施し、畳付と高台内は無釉である。

iii 溝跡

SD-32

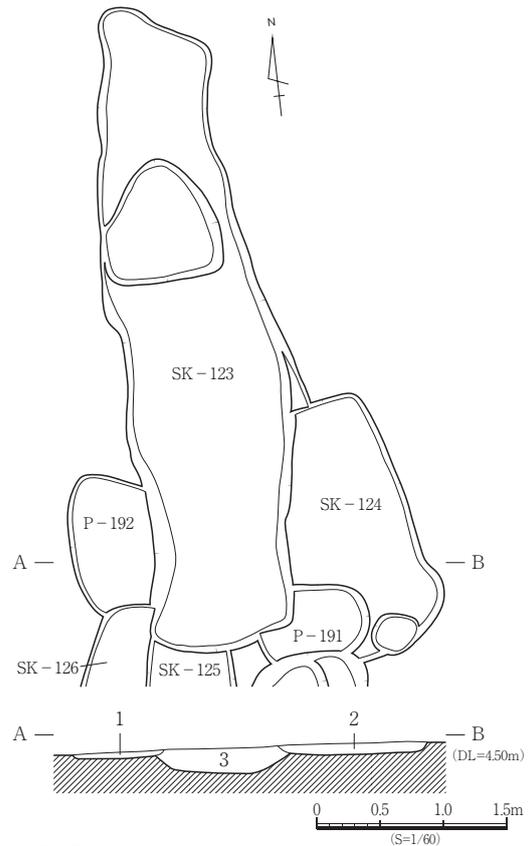
調査区南東部で検出した南北方向の溝跡で、南は調査区外へ続く。P-178を切る。検出長8.62m, 検出幅0.36m, 深さ7cmを測り、基底面は北(6.211m)から南(6.182m)へ傾斜する。断面はU字形を呈し、埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片8点と土師器片1点, 近世陶器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-33(遺物: 図155-375)

SD-32の北西で検出した南北方向の溝跡で、P-179・181を切る。全長4.54m, 検出幅0.50m, 深さ6cmを測り、基底面は南(6.252m)から北(6.177m)へ傾斜する。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器3点(杯1, 細片2)と土師器片1点, 瓦器片1点, 瓦質土器片1点, 近世磁器皿1点がみられ, 土師質土器杯(375)を図示した。375は土師質土器杯で、体部は底部より屈曲して立ち上がり、緩やかに内湾する。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

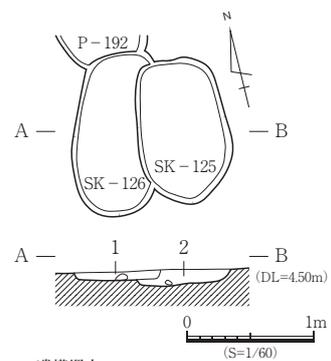
SD-34

SD-33の西で検出した南北方向の溝跡で、南は調査区外へ続く。SD-35を切り、近代の遺構である攪乱7・9に切られる。検出長10.58m, 検出幅0.83m, 深さ25cmを測り、基底面は南(5.046m)から北(5.028m)へ傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙



遺構埋土
 1. 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂で、0.5cm大の黄色礫を含む(P-192)
 2. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を含む(SK-124)
 3. 灰色(5Y6/1)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックと0.5cm大の黄色礫、炭化物を含む(SK-123)

図151 SK-123・124, P-192



遺構埋土
 1. オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂で、8cm大の円礫とマンガンを含む(SK-126)
 2. オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂で、1~3cm大の黄色礫を多く含み、マンガンを含む(SK-125)

図152 SK-125・126

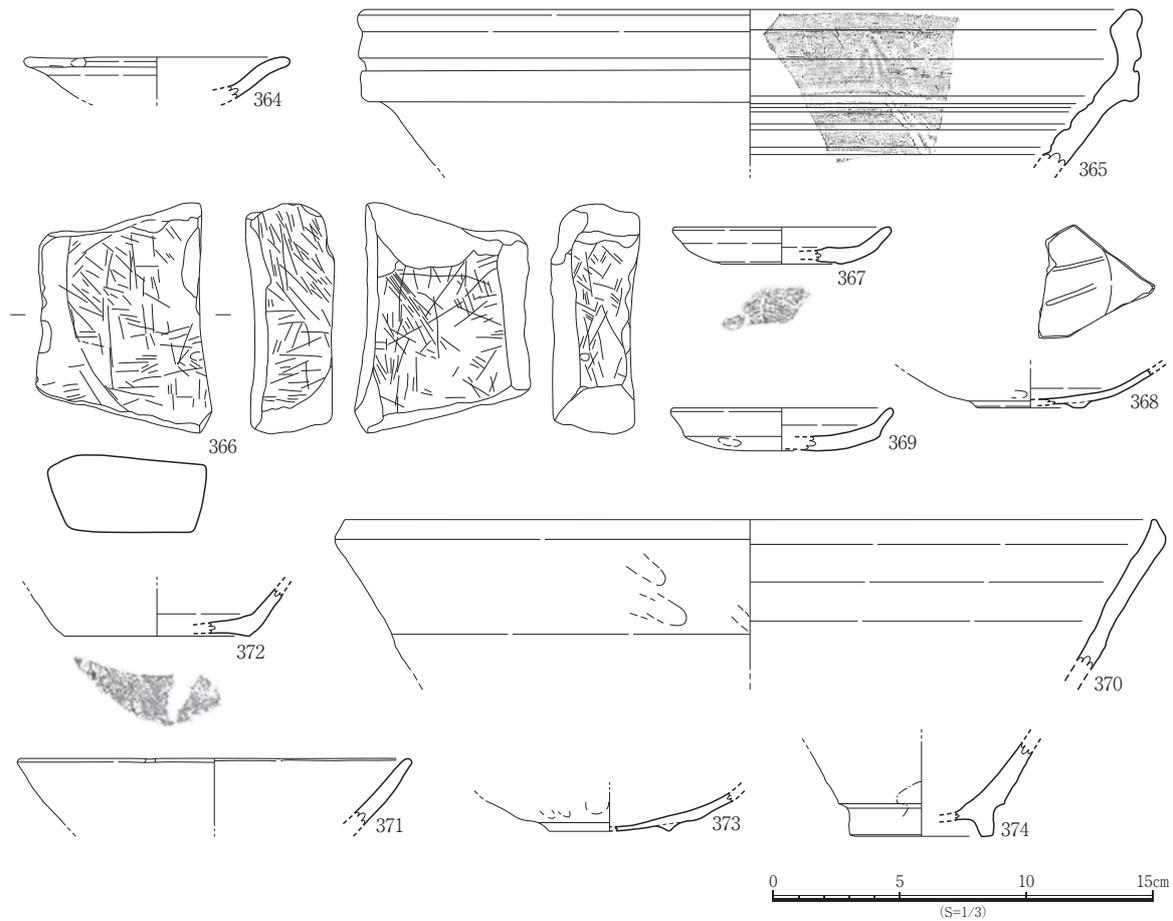
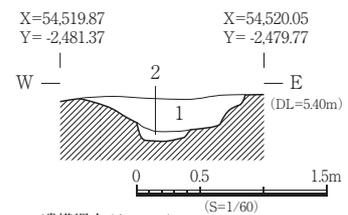


図153 SK - 121・123～125・127・128出土遺物実測図

色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器8点(碗1, 細片7)と土師器4点(焜炉1, 細片3), 近世陶器8点(皿1, 灯明皿1, 瓶1, 火入2, 細片3), 近世磁器5点(碗2, 鉢1, 瓶1, 急須1), 瓦14点(丸瓦1, 平瓦13), 石製品砥石1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD - 35(遺構: 図133・154, 遺物: 図155 - 376~378)

調査区北東部で検出した南北方向の溝跡で, P - 175・176を切り, SD - 34と攪乱7~9に切られる。検出長24.54m, 検出幅0.91m, 深さ33cmを測り, 基底面は南(5.967m)から北(5.003m)へ傾斜する。埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器101点(杯11, 碗2, 細片88)と土師器片3点, 瓦質土器片2点, 近世陶器16点(碗3, 皿3, 鉢1, 瓶2, 甕1, 細片6), 近世磁器2点(瓶1, 人形1), 瓦3点(軒平瓦1, 平瓦2)がみられ, 近世陶器碗(376・377)と近世陶器皿(378)を図示した。376・377は肥前産の近世陶器碗で, 天目形を呈する。376は口縁部が僅かに内傾し, 端部は屈曲して短く外傾する。全面に鉄釉を施す。377は低く明瞭な高台を呈し, 体部は外上方へまっすぐ伸びる。内面から外面体部下部分まで鉄釉を施す。378は近世陶器皿で, 断面が半円形を呈する低い高台を呈し, 口縁部は溝縁となる。見込には陰刻による圏線が2条みられ, 全面に灰釉を施す。見込には3箇所ピン痕, 高台内には



遺構埋土(南バンク)
1. 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトで、マンガンを含む
2. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを多く含む

図154 SD - 35

重ね焼痕が残る。

SD-36 (遺構：図150, 遺物：図155-379)

調査区北部で検出した東西方向の溝跡で、東は調査区外へ続き、SK-121を切り、攪乱13に切られる。検出長10.05m、検出幅1.56m、深さ19cmを測り、基底面は西(4.927m)から東(4.828m)へ傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器47点(杯6、椀2、細片39)と土師器片3点、瓦器椀1点、東播系須恵器片口鉢1点、近世陶器6点(鉢1、瓶1、細片4)、平瓦3点、鉄滓5点がみられ、土師質土器椀(379)を図示した。379は土師質土器椀で、平高台を呈する。体部は緩やかに内湾して立ち上がる。著しく摩耗するため調整は不明である。

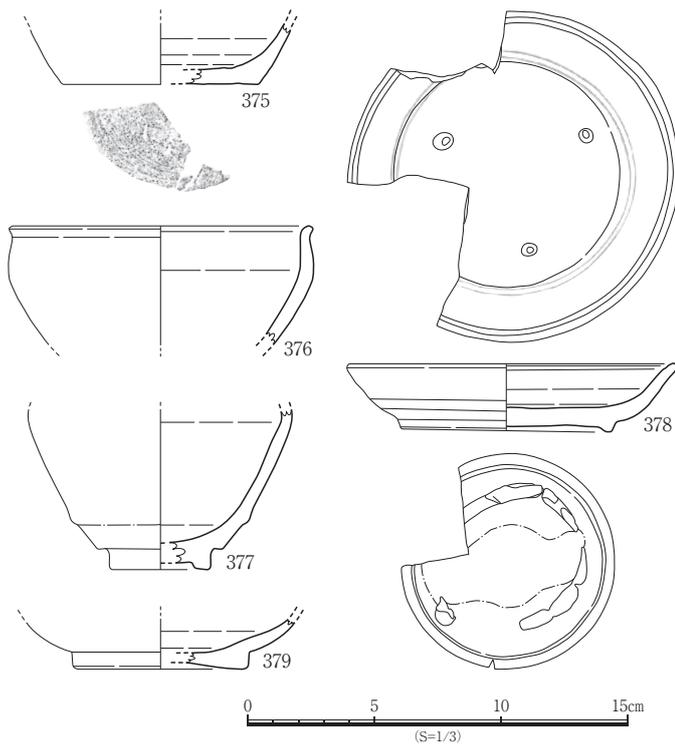


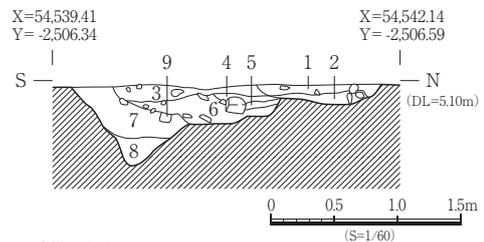
図155 SD-33・35・36出土遺物実測図

SD-37

(遺構：図156, 遺物：図157-380~393)

SD-36の南で検出した東西方向の溝跡で、東は調査区外へ続き、攪乱12・13に切られる。検出長15.46m、検出幅1.14m、深さ32cmを測り、基底面は東(4.908m)から西(4.808m)へ傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は4層に分かれる。出土遺物には土師質土器149点(杯18、小皿2、細片129)と土師器4点(釜1、細片3)、須恵器5点(杯1、椀1、甕2、細片1)、瓦器2点(椀1、細片1)、瓦質土器4点(鍋2、焜炉1、細片1)、備前焼2点(播鉢1、甕1)、常滑焼片2点、陶器2点(碗1、細片1)、白磁皿2点、青磁3点(碗2、稜花皿1)、近世陶器45点(碗16、皿12、鉢6、播鉢2、瓶1、細片8)、近世磁器31点(碗9、皿5、鉢1、片口鉢1、小杯5、瓶2、甕2、細片6)、平瓦5点、石製品五輪塔1点、鉄滓1点がみられ、380~393を図示した。

380は土師質土器小皿で、口縁部は内湾する。口径は7.5cmを測る。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。381は土師器釜で、口縁部は内湾して端部を四角く収め、断面が三角形を呈する小さな鏝を貼付する。内面は横方向のナデ、口縁部は横ナデ、胴部外面は斜方向の平行タタキである。382は東播系須恵器片口鉢で、口縁部の一部が残存する。口縁部は僅かに外反し、端部は肥厚して四角く収める。調整はナデで、口縁部は横ナデである。383は瓦質土器鍋で、口縁



遺構埋土(西バンク)

1. オリーブ褐色(25Y4/3)中粒砂質シルトで、淡黄色シルトブロックと1cm大の礫を含む(攪乱12埋土1)
2. 暗オリーブ褐色(25Y3/3)粗粒砂で、1~5cm大の礫を多く含む(攪乱12埋土2)
3. オリーブ褐色(25Y4/3)中粒砂質シルトで、5cm大の河原石とマンガンを含む(SD-37埋土1)
4. オリーブ褐色(25Y4/4)粗粒砂質シルトで、1cm大の礫を含む(SD-37埋土2)
5. オリーブ褐色(25Y4/4)中粒砂質シルト(SD-37埋土3)
6. 暗灰黄色(25Y4/2)粗粒砂で、極粗粒砂を含み、5~15cm大の礫を多く含む(SD-37埋土4)
7. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、炭化物と1~3cm大の礫を含む(SD-25埋土1)
8. 灰黄色(25Y6/2)中粒砂質シルトで、粗粒砂を含み、粘性はやや強い(SD-25埋土2)
9. 暗灰黄色(25Y4/2)中粒砂質シルト

図156 SD-25・37・攪乱12

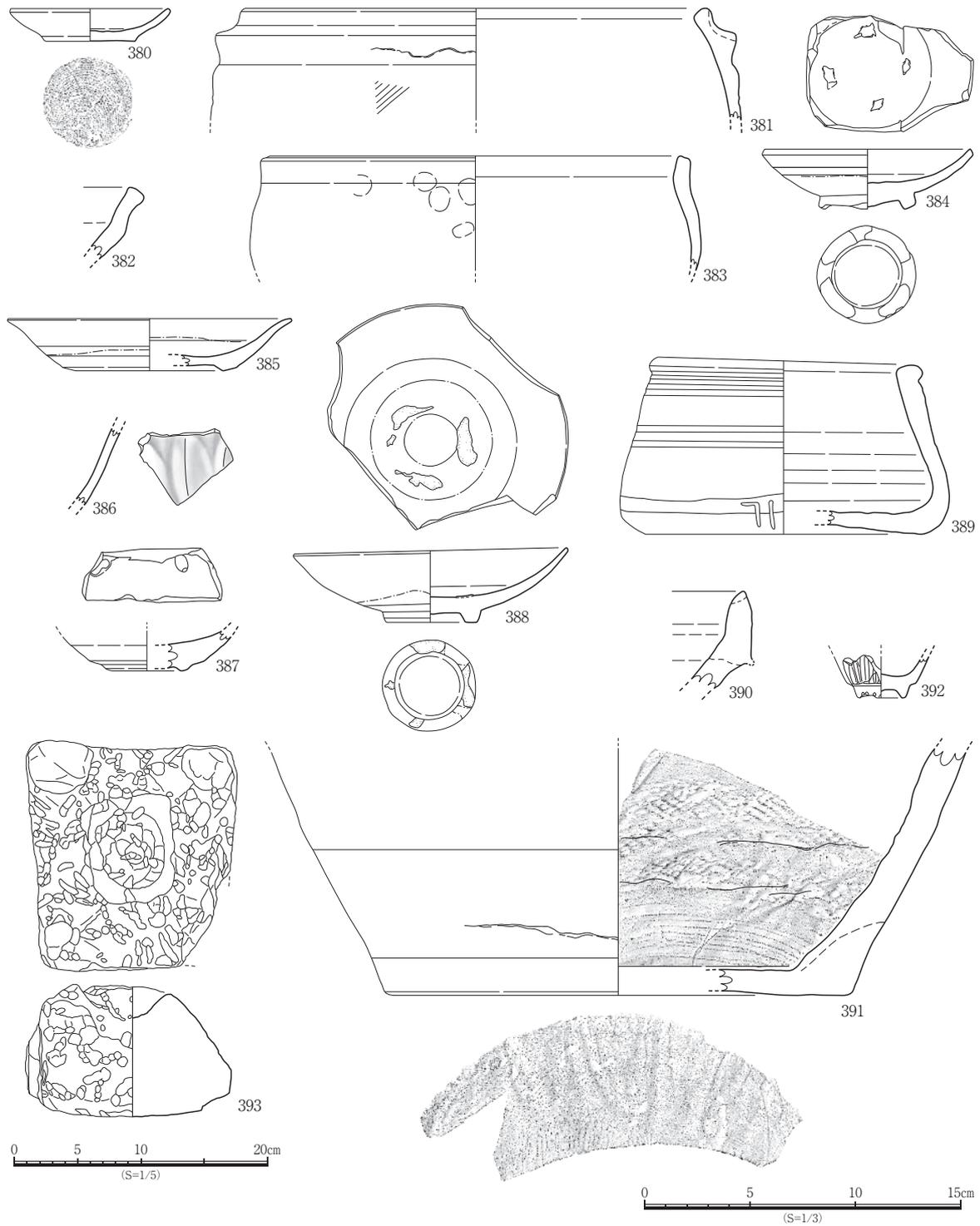


図157 SD - 37出土遺物実測図

部は短く直立する。調整はナデで、口縁部は横ナデ、胴部外面には指頭圧痕が残る。内面には炭素が吸着していない。384・385は白磁皿である。384は高台の4箇所には抉りを入れる。口縁部は内湾し、端部を四角く収める。内面から口縁部外面には白磁釉を施し、体部外面から高台内は回転ケズリで、無釉である。見込には4箇所を目痕が残る。385は端反形で、幅の広い高台を有する。調整は回転ナデで、外面体部下半は回転ケズリを加え、口縁部には白濁する白磁釉を施し、見込と底部

2. B区

は無釉である。釉には貫入が入る。386は青磁碗で、外面には鎬蓮弁文がみられる。全面に青磁釉を施す。387・388は近世陶器皿である。387は唐津系灰釉陶器で、底部の器壁が厚く、低い高台が付く。内面には緑色に発色する灰釉を施し、胎土目痕が残る。体部外面は回転ナデ調整、底部外面は回転ケズリ調整である。388は内野山窯の皿で、底部には断面が台形を呈する輪高台がみられ、口縁部は内湾する。内面には銅緑釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。釉ハギ部分には砂目痕が残る。体部外面には灰釉を施し、体部下半は回転ケズリ調整を施し、無釉である。畳付の4箇所には砂目痕が残る。389は近世陶器鉢で、焼締陶器である。体部は内傾して立ち上がり、口縁端部は外へ摘む。調整は内面から体部外面は回転ナデで、内面の一部にはナデ、外面体部下部にはケズリを加え、刻印がみられる。底部外面はナデ調整である。390は近世陶器搗鉢で、備前焼である。口縁端部と顎は細く摘む。全面に回転ナデ調整を施し、口縁部外面には重ね焼痕が残る。391は近世陶器甕で、体部は外上方へまっすぐ立ち上がる。調整は体部内面が格子状のタタキの後、横方向のナデで、体部外面は横方向のナデで一部に回転ケズリを加える。底部外面は無調整で、中央には蓆状の圧痕が残る。体部内外面には鉄釉を施し、底部外面は無釉である。392は肥前産の近世磁器小杯で、底部には断面が三角形を呈する高台が付き、外面には丸彫による菊弁状の文様がみられる。内面から体部外面には白磁釉を施し、高台は無釉である。393は石製品五輪塔で、火輪である。小型で、長方形を呈し、四隅は反り上がるが、端部はすべて欠損する。端部は上面よりも高くなる。上面は長方形を呈し、縦8.5cm、横6.5cmを測り、中央には楕円形で長径6.1cm、短径5.0cm、深さ2.5cmを測る柄穴がみられる。下面は溝状のケズリの痕跡がみられ、被熱したものとみられ赤褐色を呈する。石材は砂岩である。

SD-38(遺構: 図158)

SD-37の南で検出した東西方向の溝跡で、西は調査区外へ続き、一部は攪乱を受ける。検出長7.17m、検出幅0.78m、深さ16cmを測り、基底面は西(4916m)から東(4809m)へ傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器24点(杯1, 細片23)と近世磁器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

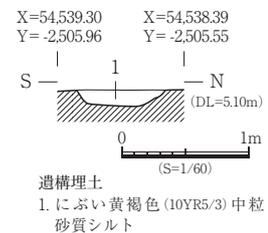


図158 SD-38

iv ピット

P-175

調査区北東部で検出した楕円形を呈するピットで、SD-35に切られる。長径40cm、検出幅25cm、深さ6cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土製品土錘1点がみられたが、図示できなかった。

P-176

P-175の南で検出した隅丸方形を呈するピットで、SD-35に切られる。長辺1.10m、検出幅0.30m、深さ14cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器杯1点がみられたが、図示できなかった。

P-177(遺物: 図161-394)

調査区南東部で検出した楕円形を呈するピットで、長径30cm、短径24cm、深さ21cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器20点(杯1, 細片19)がみられ、土師質土器杯(394)を図示した。394は土師質土器杯で、体部は底部

より屈曲して外上方へ伸びる。調整は回転ナデ、底部の切り離しは回転糸切りとみられるが、摩擦するため不明瞭である。

P-178

P-177の南東で検出した楕円形を呈するピットで、SD-32に切られる。長径35cm、短径32cm、深さ12cm、柱痕径14cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(碗1、細片1)がみられたが、図示できるものはなかった。

P-179

P-178の南西で検出した隅丸方形を呈するピットで、SD-33に切られる。長辺65cm、短辺57cm、深さ12cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかつた。

P-180

P-179の南西で検出した楕円形を呈するピットで、P-181を切る。長径32cm、短径29cm、深さ6cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器小皿1点がみられたが、図示できなかつた。

P-181

P-180の西で検出した楕円形を呈するピットで、SD-33とP-180に切られる。長径63cm、短径55cm、深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には近世陶器鍋1点がみられたが、図示できなかつた。

P-182

P-181の南で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺22cm、短辺21cm、深さ19cm、柱痕径17cmを測る。掘方の埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含み、柱痕の埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と近世磁器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-183(遺構: 図159)

P-182の西で検出した溝状を呈するピットで、全長1.34m、全幅0.38m、深さ11cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器21点(杯4、細片17)と瓦器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-184

P-183の北西で検出した円形を呈するピットで、径33cm、深さ31cm、柱痕径12cmを測る。掘方の埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含み、柱痕の埋土は褐色中粒砂質シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器12点(杯1、細片11)と須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

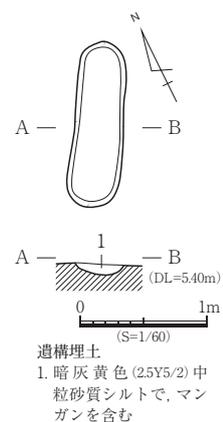


図159 P-183

P-185

P-184の北西で検出した楕円形を呈するピットで、SK-119を切る。長径63cm、短径53cm、深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点と近世陶器碗1点がみられたが、図示できるものはなかった。

2. B区

P-186

P-185の北西で検出した楕円形を呈するピットで、長径52cm、短径47cm、深さ57cm、柱痕径17cmを測る。埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器31点(杯1, 碗1, 細片29)と須恵器片1点, 青磁碗1点, 近世陶器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-187

P-186の西で検出した円形を呈するピットで、径45cm、深さ22cmを測り、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-188

B-1区西部で検出した隅丸方形を呈するピットで、攪乱に切られる。検出長56cm、短辺43cm、深さ4cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の橙色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には近世陶器片1点がみられたが、図示できなかった。

P-189(遺構: 図104・160)

B-2区中央部で検出した隅丸方形を呈するピットで、P-190を切る。長辺87cm、検出幅62cm、深さ7cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト質粗粒砂で、焼土と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器42点(杯3, 細片39), 土師器片1点, 須恵器碗1点, 瓦器片4点, 瓦質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-190(遺構: 図104・160, 遺物: 図161-395)

P-189の底で検出した隅丸方形を呈するピットで、P-189に切られる。長辺97cm、短辺70cm、深さ41cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で、極粗粒砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器10点(杯2, 釜1, 細片7)と瓦器小皿1点がみられ、土師質土器釜(395)を図示した。395は土師質土器釜である。小型で、口径7.4cmを測る。胴部は大きく膨らみ扁平で、断面が三角形を呈する小さな鍔が付く。調整は回転ナデで、外面の胴部下部に回転ケズリを加え、煤が付着する。

P-191(遺物: 図161-396)

P-190の北西で検出した楕円形を呈するピットで、SK-123・124を切る。長径90cm、短径66cm、深さ10cmを測る。埋土は褐色粗粒砂質シルトで、3~5cm大の黄色礫を少し含み、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器12点(杯1, 細片11)と東播系須恵器碗1点, 図示した瀬戸・美濃陶器碗(396)がみられた。396は瀬戸・美濃陶器碗で、天目形である。全面に鉄釉を施す。

P-192(遺構: 図151)

P-191の西で検出した楕円形を呈するピットで、SK-123・126を切る。長径1.12m、短径0.72m、深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト質粗粒砂で、

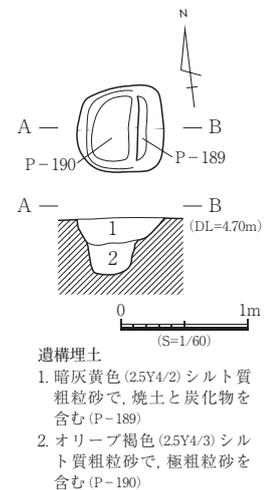


図160 P-189・190

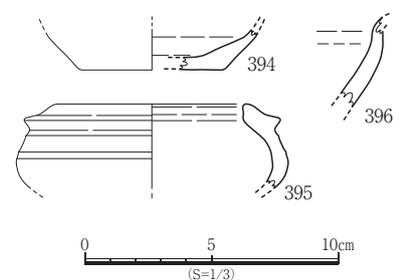


図161 P-177・190・191
出土遺物実測図

0.5cm大の橙色礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と瓦器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

v その他の遺構

B-1区では近代の遺構が検出されたため一部のみ調査を行い、出土した中世及び近世の遺物について図示した。

攪乱7(遺構：図144)

調査区東部で検出した不整楕円形を呈する近代の遺構で、SK-114とSD-34・35を切り、攪乱8・9に切られる。検出長3.26m、検出幅1.55m、深さ48cmを測り、埋土は4層に分かれる。出土遺物には近代陶磁器の他、土師質土器26点(杯4、細片22)と備前焼播鉢1点、近世陶器11点(皿2、甕1、灯明受皿1、猪口1、細片6)、近世磁器8点(碗4、瓶1、細片3)、瓦15点(軒棧瓦1、平瓦11、棧瓦3)、土製品人形1点、石製品砥石2点、ガラス製品1点、鉄滓1点がみられた。

攪乱8(遺構：図144、遺物：図162-397)

攪乱7の北西で検出した溝状を呈する近代の遺構で、SK-115とSD-35、攪乱7・9を切る。全長3.95m、全幅0.68m、深さ34cmを測り、埋土は2層に分かれる。出土遺物には近代陶磁器の他、土師質土器23点(杯7、碗1、小皿1、細片14)と近世陶器15点(碗3、皿3、灯明皿2、土瓶3、猪口1、細片3)、近世磁器3点(碗1、紅皿2)、瓦11点(丸瓦1、平瓦9、棧瓦1)、石製品砥石1点、木製品桶蓋1点、鉄釘1点、ガラス製品1点がみられ、土師質土器碗(397)を図示した。397は土師質土器碗で、平高台を呈する。

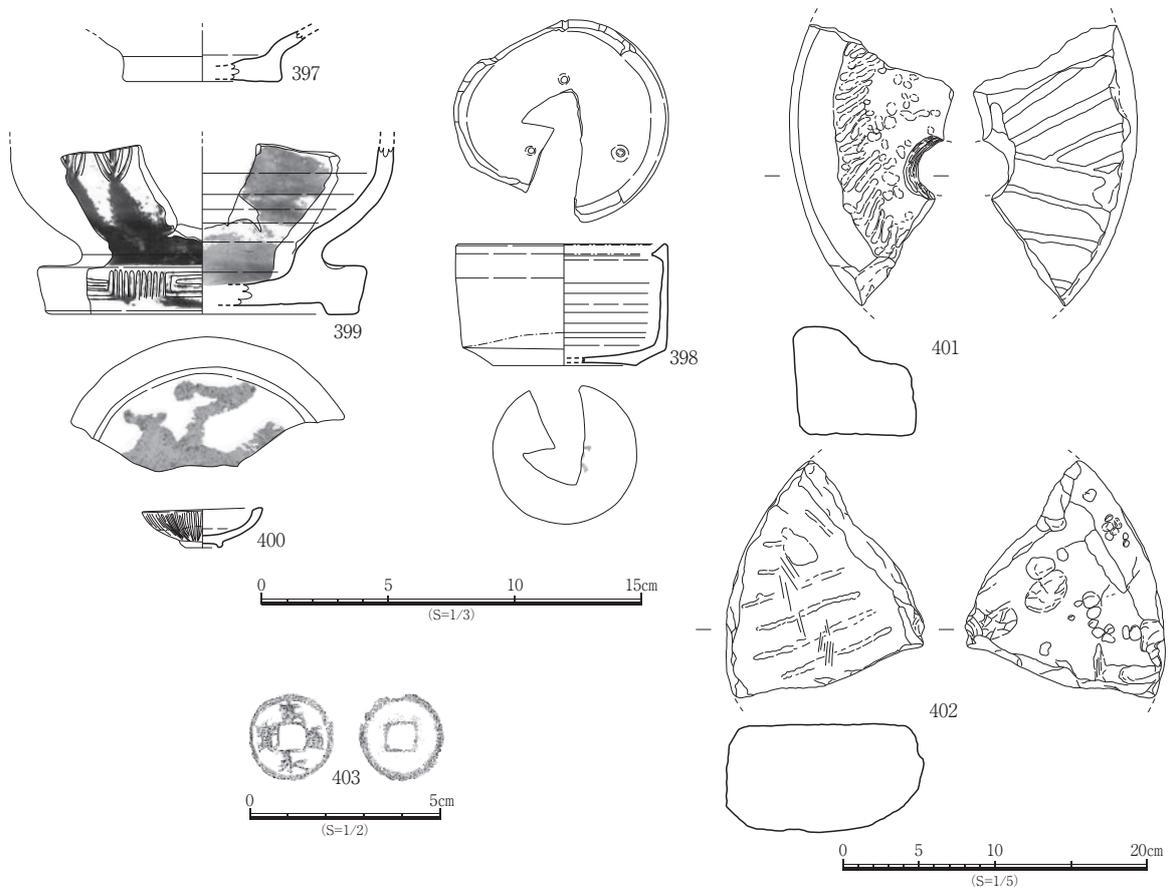
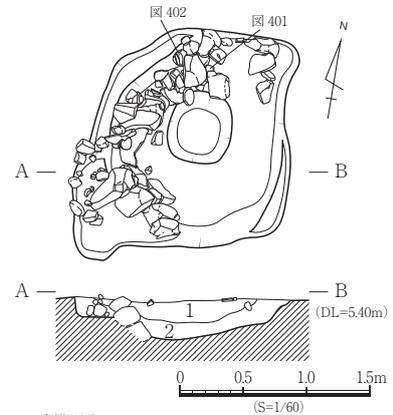


図162 攪乱8・9出土遺物実測図

見込は凹み、体部は外上方へまっすぐ立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整は不明瞭であるが、調整は回転ナデ、底部の切り離しは回転糸切りとみられる。

攪乱9(遺構：図163、遺物：図162-398~403)

攪乱7の南で検出した不整形を呈する近代の遺構で、SD-34・35と攪乱7を切り、攪乱8に切られる。全長1.75m、全幅1.61m、深さ37cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層にはハンダを含み、西壁には10~20cm大の角礫が積まれていた。出土遺物には近代陶磁器の他、土師質土器片11点と土師器焜炉1点、瓦器椀1点、近世陶器11点(碗2、皿2、蓋1、瓶1、鍋1、火鉢1、細片3)、近世磁器7点(碗2、蓋2、紅皿2、細片1)、瓦49点(丸瓦1、平瓦46、細片2)、石製品5点(砥石3、石臼2)、金属製品3点(銭貨1、細片2)、ガラス製品瓶1点、鉄滓1点がみられ、398~403を図示した。398は近世陶器蓋物で、体部は直立し、口縁端部は内へ摘む。内面から体部外面には灰釉を施し、口縁部は釉ハギする。見込には3箇所ピン痕が残る。底部外面は回転ケズリで、無釉であり、墨書の一部が残る。399は瀬戸・美濃産の近世陶器火鉢で、幅が広い高台が付く。内面は回転ナデ調整で、錆釉を刷毛塗りする。外面は胴部に押印文、高台外面に雷文帯がみられ、緑釉を施す。高台内は削り出しで、無釉であり、墨書の一部が残る。400は肥前産の近世磁器紅皿である。型押成形で、外面には型による貝殻状の文様がみられる。内面から口縁部外面には白磁釉を施し、外面の体部から底部は無釉である。401・402は石製品石臼である。401は上臼で、上面周縁部は著しく研磨し、平滑になる。周縁部の内側の傾斜部は斜方向に溝状の加工痕が残る。中央には径約4cmの円孔がみられる。下面には斜方向の播目がみられ、やや摩耗する。石材は砂岩である。402は下臼で、上面には斜方向の播目がみられる。上面と下面は摩耗する。403は銅製品銭貨で、寛永通寶である。新寛永で、背面は無文である。薄く、摩耗する。



遺構埋土
1. 暗灰黄色(25Y5/2)粗粒砂質シルトで、15cm大の礫とハンダ、炭化物を含む
2. 暗灰黄色(25Y4/2)粗粒砂質シルトで、炭化物を少し含む

図163 攪乱9

攪乱10(遺物：図164・165-404~411)

調査区北部で検出した不整形を呈する明治期の遺構で、攪乱11を切る。出土遺物には近代陶磁器の他、土師質土器片3点と白土器皿1点、瓦器椀1点、瓦質土器片1点、近世陶器14点(碗4、皿2、灯明皿1、瓶4、灯明受皿1、土瓶1、細片1)、近世磁器14点(碗1、皿5、大皿2、蓋1、鉢2、瓶2、細片1)、瓦13点(軒平瓦3、平瓦7、棧瓦3)、石製品砥石1点がみられ、404~411を図示した。404・405は近世磁器大皿である。404は肥前系の角皿で、高台は円形、口縁は隅切方形を呈する。口縁端部には抉りを入れ波縁状で、口縁部は歪みがみられる。見込には雷文帯、渦文の窓に海浜風景文、窓に花唐草文、立涌地に松文、口縁部内面には四方襷文地に宝文、四隅に衣笠文の染付がみられる。外面は口縁部に圏線と線描の花唐草文、高台内には圏線と方形枠に「瑞」の銘がみられる。全面に透明釉を施し、暈付は釉ハギする。補修痕が残る。405は肥前産の変形皿で、口縁部の一部は輪花形を呈する。見込には波、岩、松、鳥、山文、口縁部内面には四方襷文地に波文、外面には波、岩、松文の染付がみられる。全面に透明釉を施し、暈付は釉ハギする。補修痕と見込には白玉描がみられる。406・407は近世磁器鉢で、406は肥前系の八角鉢で、ロクロ成形の後、型打により口縁部を八角

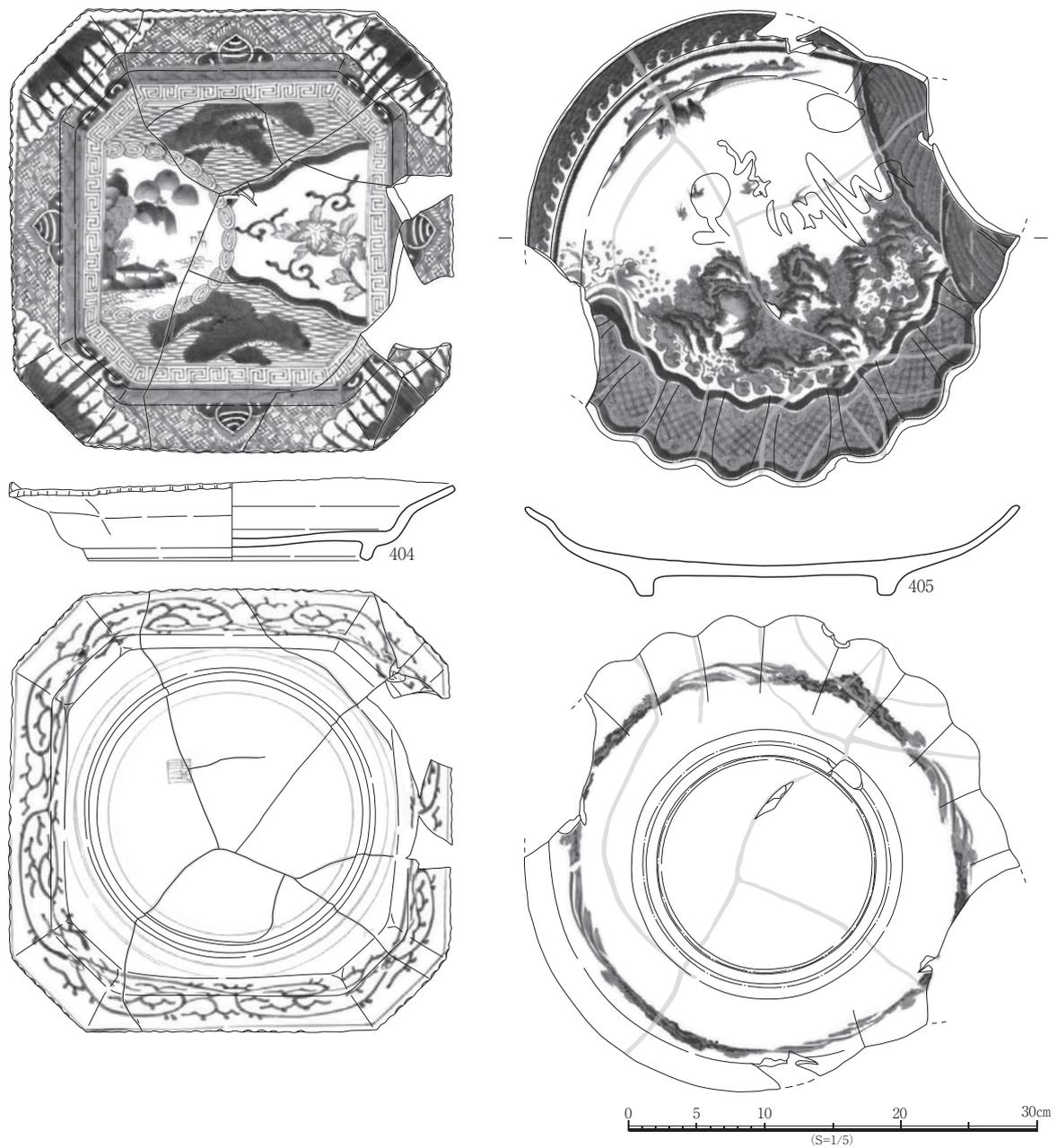


図164 攪乱10出土遺物実測図

形に成形する。見込には宝文，口縁部内外面は濃地に墨弾きの宝文と口縁部外面に山と樹文の染付がみられる。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。407は肥前産の大型の鉢で，ロクロ成形後に口縁部は型打成形したとみられ，稜花形を呈する。見込には人物と雪輪，松文，口縁部内面には唐草と宝珠文，口縁部外面には宝文と圏線の染付，高台内には圏線と二重方形枠に銘がみられ，5箇所ピン痕が残る。408は肥前産の近世磁器瓶で，完存する。瓶子形で，肩部が大きく膨らみ，腰部が細く締まり，口縁部は短く直立する。外面には蛸唐草文と圏線の染付がみられ，口縁部内面から外面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。409～411は瓦である。409は軒平瓦で，凹凸面に横方向のナデ調整を施す。瓦当の中心飾は蕙文で，瓦当左側に「アキ卯平」の刻印がみられる。凹凸面と瓦当にキラ粉が付着する。410は平瓦で，凹凸面に横方向のナデ調整を施し，凹面にはキラ粉

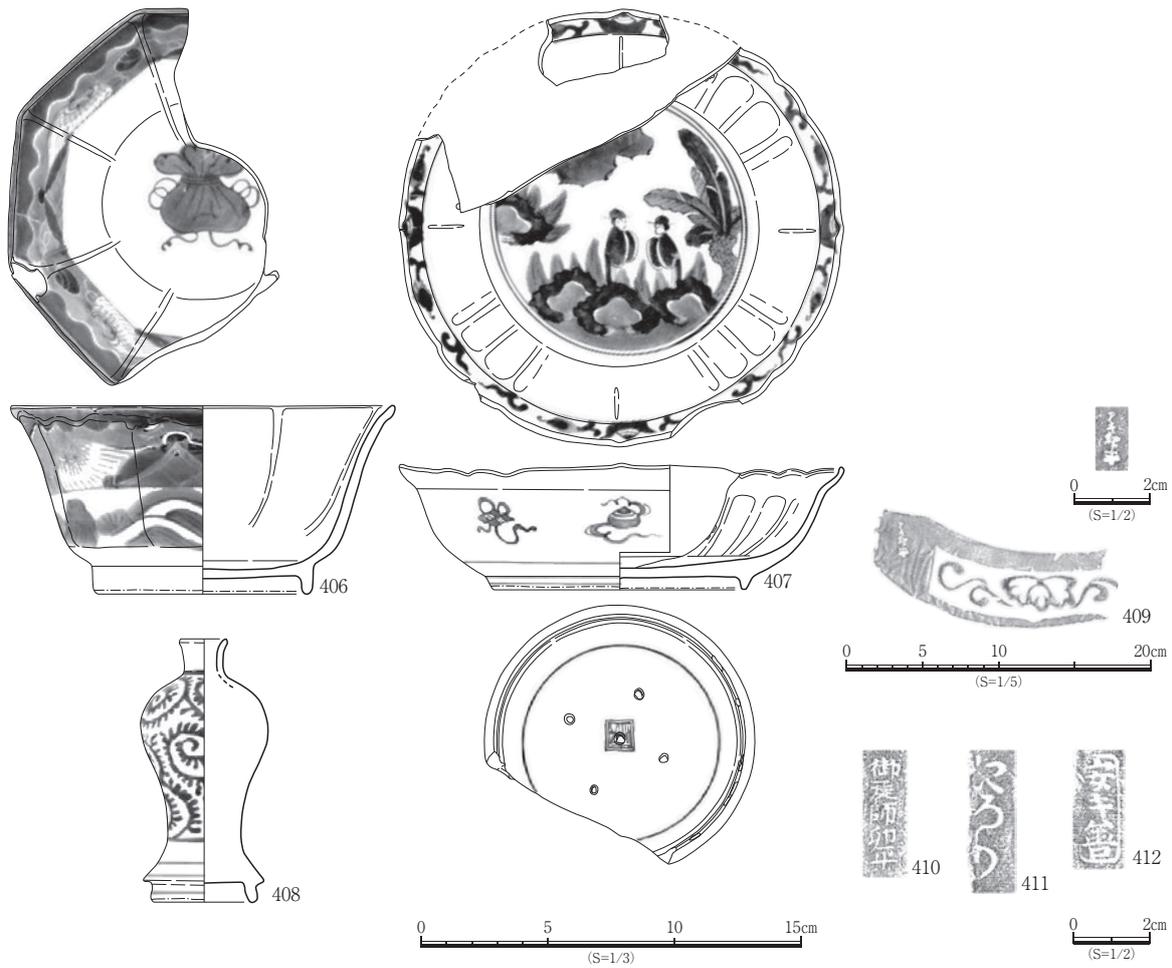


図165 攪乱10・11出土遺物実測図

が付着する。側面には「御瓦師卯平」の刻印がみられる。411は棧瓦で、調整は凹面が縦または横方向のナデ、凸面が横方向のナデである。側面には「にろう」の刻印がみられる。香美市香北町産である。
攪乱11(遺物: 図165 - 412)

攪乱10の南で検出した楕円形を呈する明治期の遺構で、攪乱10に切られる。出土遺物には近代陶磁器の他、土師質土器12点(杯2, 細片10)と瓦質土器片1点、近世陶器碗1点、近世磁器2点(碗1, 細片1), 瓦5点(軒平瓦1, 平瓦1, 細片3)がみられ、平瓦(412)を図示した。412は平瓦で、凹凸面に横方向のナデ調整を施す。側面には方形枠内に「安キ善」の刻印がみられる。

攪乱12(遺構: 図156, 遺物: 図166 - 413~428)

調査区北部で検出した溝状を呈する近代の遺構で、SD - 37を切り、埋土は2層に分かれる。出土遺物には近代陶磁器の他、土師質土器51点(杯4, 小皿2, 細片45)と白土器皿1点、土師器4点(焙烙1, 焜炉1, 細片2), 須恵器甕1点、瓦質土器5点(釜1, 焙烙2, 焜炉1, 細片1), 備前焼8点(播鉢5, 甕3), 瀬戸・美濃陶器碗1点、青磁碗1点、近世陶器65点(碗10, 皿7, 中皿1, 鉢2, 甕2, 瓶4, 仏飯器1, 土瓶3, 鍋2, 細片33), 近世磁器68点(碗19, 皿9, 大皿2, 蓋2, 鉢1, 小杯2, 猪口1, 紅皿1, 瓶2, 人形1, 細片28), 瓦6点(軒平瓦1, 丸瓦2, 平瓦3), 石製品砥石1点がみられ、413~428を図示した。

413・414は瓦質土器焙烙で、いずれも讃岐産で、御厩系である。体部が内湾し、口縁部は屈曲

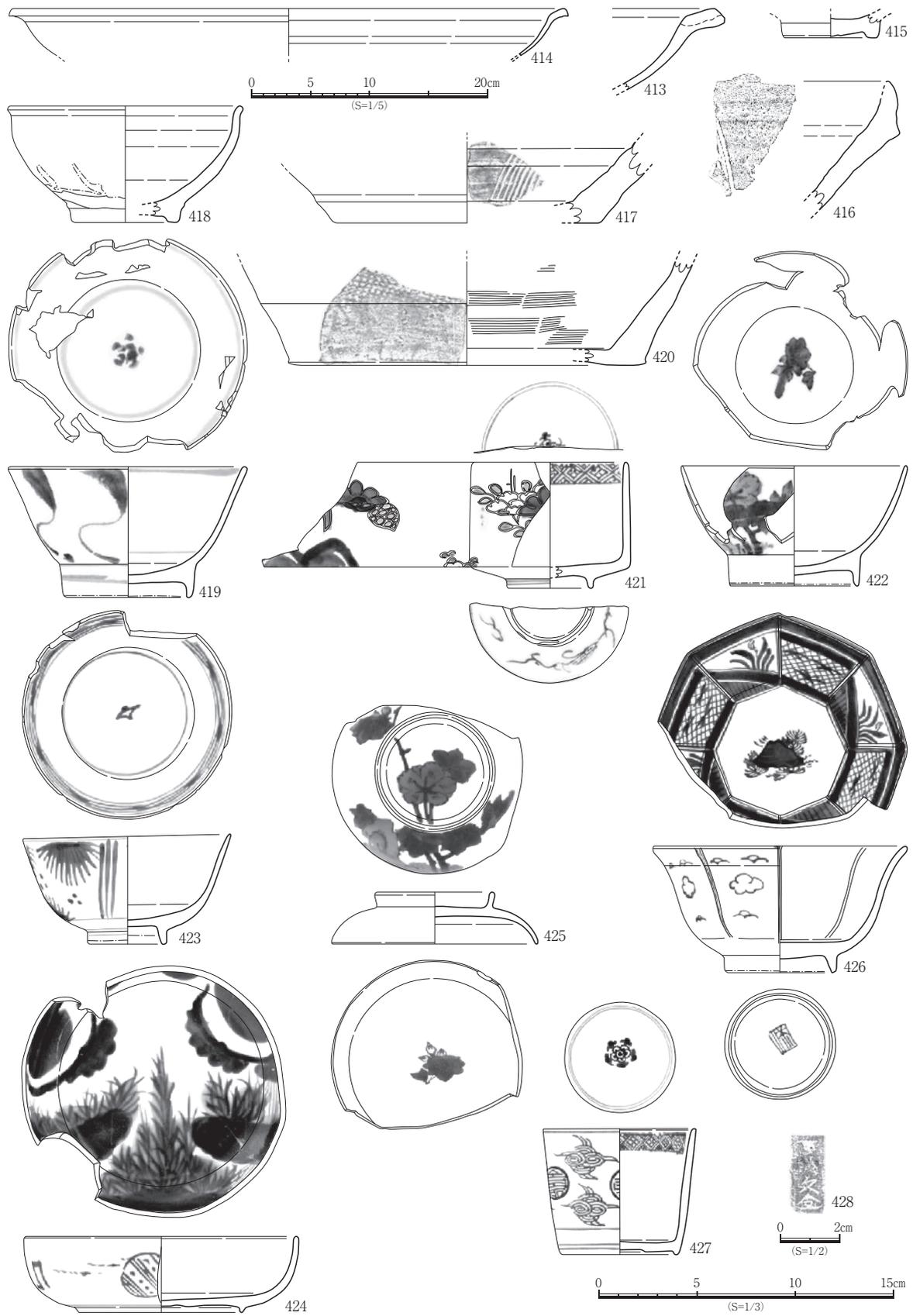


図166 攪乱12出土遺物実測図

して外上方へ短く伸び、端部を四角く収める。内面は回転ナデ調整で、外面は型成形である。415は瀬戸・美濃陶器碗で、断面が方形を呈する低い高台が付く。内面は鉄釉を施し、外面は無釉である。416・417は備前焼播鉢である。416は口縁端部を上方へ細く摘み上げる。調整は回転ナデで、内面には播目が僅かに残る。417は体部が外上方へまっすぐ立ち上がる。調整は回転ナデで、外面体部下端は回転ケズリを加える。内面には播目がみられ、底部外面は無調整である。418・419は近世陶器碗である。418は肥前産とみられ、天目形である。底部には低い高台が付き、体部は内湾し、口縁端部は短く外傾する。内面から体部外面まで鉄釉を施し、底部外面は無釉である。419は瀬戸・美濃産の陶胎染付碗で、広東形である。見込には五弁花文と圏線、外面には螺子文と圏線の染付がみられる。太白手で、全面に白化粧土を施した後、透明釉を掛け、畳付は釉ハギする。420は近世陶器甕で、体部は外上方へまっすぐ伸びる。調整は見込が横方向のナデ、胴部内面が格子状タタキの後横方向のハケ、胴部外面は上部が格子状タタキ、下部が回転ヘラケズリで、底部外面は無調整である。421～423は近世磁器碗である。421は筒形の色絵碗である。見込は五弁花文と圏線、口縁部内面に四方襷文の染付、外面は呉須と金彩・朱・紫色の色絵による花文、体部外面の下面には唐草文と圏線の染付がみられた。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。422は肥前系で、広東形である。見込と外面には桜文の染付がみられ、全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。423は瀬戸・美濃産碗で、端反形である。見込には岩波文、口縁部内面に不明の文様、外面には区割に菊花文とみられる染付を描く。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。424は肥前系の近世磁器皿で、蛇ノ目凹形高台を呈し、口縁部は上方へ立ち上がる。見込と内面には土坡に草、雪輪文、外面には丸文と圏線と源氏香とみられる染付を描く。全面に透明釉を施し、高台内は蛇ノ目釉ハギを行う。425は肥前産の近世磁器蓋で、内外面に桜文の染付がみられる。全面に透明釉を施し、摘み端部は釉ハギする。426は能茶山窯の近世磁器鉢で、八角鉢である。ロクロ成形後、口縁部を八角形に型打する。見込には岩に草花文、内面には区画に草花文、格子目に蝙蝠文、外面には区画に飛雲文の染付、高台内には方形枠に「茶山」銘がみられる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。427は肥前産の近世磁器猪口である。筒形で、蛇ノ目凹形高台を呈する。見込には五弁花文と二重圏線、口縁部内面には四方襷文、外面には圏線と丸文に「寿」字と火焰文とみられる染付を描く。全面に透明釉を施し、高台内は蛇ノ目釉ハギする。428は平瓦で、凹凸面に横方向のナデ調整を施し、側面には方形枠内に「□□(々か)久合」の刻印がみられる。

攪乱13(遺物: 図167-429・430)

攪乱12の北で検出した隅丸方形を呈する近代の遺構で、SD-36・37を切る。出土遺物には近代陶磁器の他、土師質土器22点(杯2, 小皿2, 細片18)と土師器片4点, 青磁碗1点, 近世陶器13点(碗3, 皿2, 灯明皿1, 土瓶1, 鍋1, 細片5), 近世磁器10点(碗4, 皿1, 小杯1, 細片4), 瓦2点(平瓦1, 細片1), 鉄釘1点がみられ、近世磁器皿(429)と平瓦(430)を図示した。429は波佐見産の近世磁器皿で、底部には断面が台形を呈する高台が付き、口縁部は内湾する。見込には五弁花文、内面には網干文か笹文とみられる染付、外面には土坡に草文とみられる染付を描く。全面に透明釉を施し、見込を蛇ノ目釉ハギ、畳付を釉ハギする。外面の釉薬は白濁する。430は平瓦で、凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施し、凹面にはキラ粉が付着する。側面には「山河□(富か)」の刻印がみられる。

攪乱14(遺構: 図247, 遺物: 図167-431～433)

B-1区西部で検出した溝状を呈する近現代の遺構で、現代の水路の下で確認した。出土遺物に

は近代陶磁器の他、土師質土器11点(杯1, 碗1, 細片9), 瓦器4点(碗1, 細片3), 東播系須恵器片口鉢1点, 青磁碗1点, 近世陶器21点(碗4, 皿3, 小杯1, 鉢1, 瓶2, 甕1, 灯明受皿1, 細片8), 近世磁器11点(碗2, 皿1, 紅皿1, 瓶2, 細片5), 瓦2点(丸瓦1, 平瓦1)がみられ, 土師質土器碗(431)と東播系須恵器片口鉢(432), 近世陶器小杯(433)を図示した。431は土師質土器碗で, 輪高台を呈する。底部には断面が三角形を呈する高台を貼付する。著しく摩耗するため調整は不明である。432は東播系須恵器片口鉢で, 片口の一部が残存する。口縁端部は上方へ細く摘み上げる。全面に回転ナデ調整を施す。焼成不良で橙色を呈する。433は近世陶器小杯で, 平底を呈し, 体部は内湾し, 口縁部を細く仕上げる。全面に鉄が溶解した様な付着物がみられ, 調整は不明である。

攪乱15(遺物: 図167-434)

B-2区中央部で検出した楕円形を呈する近現代の遺構で, 現代の水路の下で確認した。東は調査区外へ続き, 検出長3.05m, 検出幅1.96m, 深さ49cmを測る。出土遺物には近代陶磁器の他, 土師質土器片1点, 近世磁器2点(皿1, 細片1), 木製品2点(匙1, 刷毛1)がみられ, 近世磁器皿(434)を図示した。434は近世磁器小皿で, 輪花形を呈する。型打成形で, 口縁部内面は型による菊弁状の凹みが見られ, 端部は口鑄で, 見込には圏線と蘭の染付がみられ, 全面に光沢のある透明釉を施し, 畳付は釉ハギする。

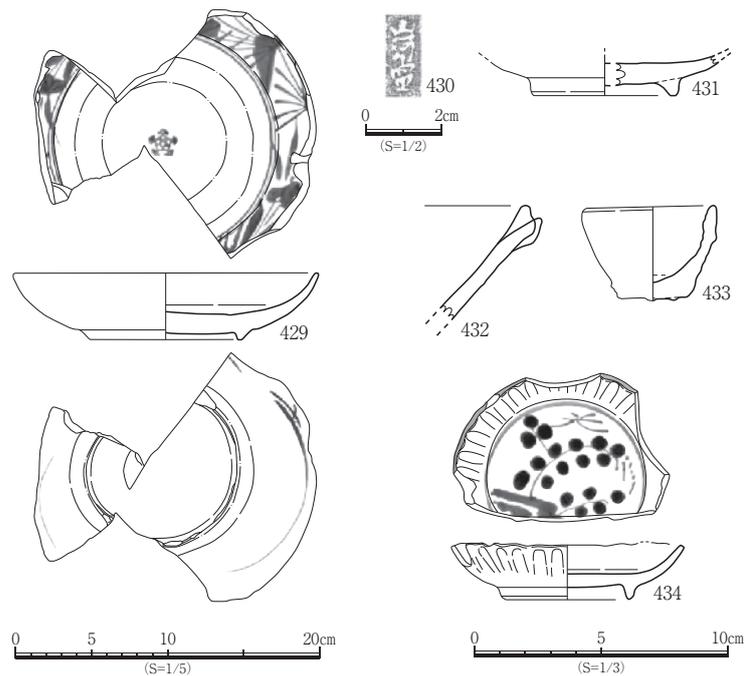


図167 攪乱13~15出土遺物実測図

その他の攪乱出土遺物(遺物: 図168-435~446)

B-1区では近代の遺構が多く, 近代の遺構より出土した中世及び近世の遺物について, まとめて報告する。なお, 440と446はB-2区より出土した遺物である。

435は須恵器甕とみられ, 平底を呈し, 体部は外上方へ立ち上がる。調整は内面がナデ, 体部外面が回転ナデ, 底部外面がナデである。436は瀬戸・美濃陶器碗で, 底部には断面が台形を呈する高台が付く。内面から体部外面には鑄釉を施し, 底部外面は削り出しで, 無釉である。437は備前焼播鉢で, 体部は緩やかに内湾し, 口縁端部は内外へ僅かに摘む。調整は回転ナデで, 内面には播目が残る。438・439は近世陶器皿で, 唐津系灰釉陶器である。438は底部に断面が台形を呈する高台を有する。内面と外面の一部に淡い緑色に発色する灰釉を施し, 底部外面は削り出しで, 無釉である。439は高台脇のケズリが甘く, 低く扁平な高台を有する。内面から口縁部外面には緑色に発色する灰釉を施し, 見込には胎土目痕が残る。体部外面は回転ナデ調整で, 下部には回転ケズリ調整を加える。外面の体部から底部は無釉である。440~442は能茶山窯の近世磁器碗で, 広東形である。高台内には「サ」銘がみられ, 全面に透明釉を施し, 畳付は釉ハギする。440は見込に圏線

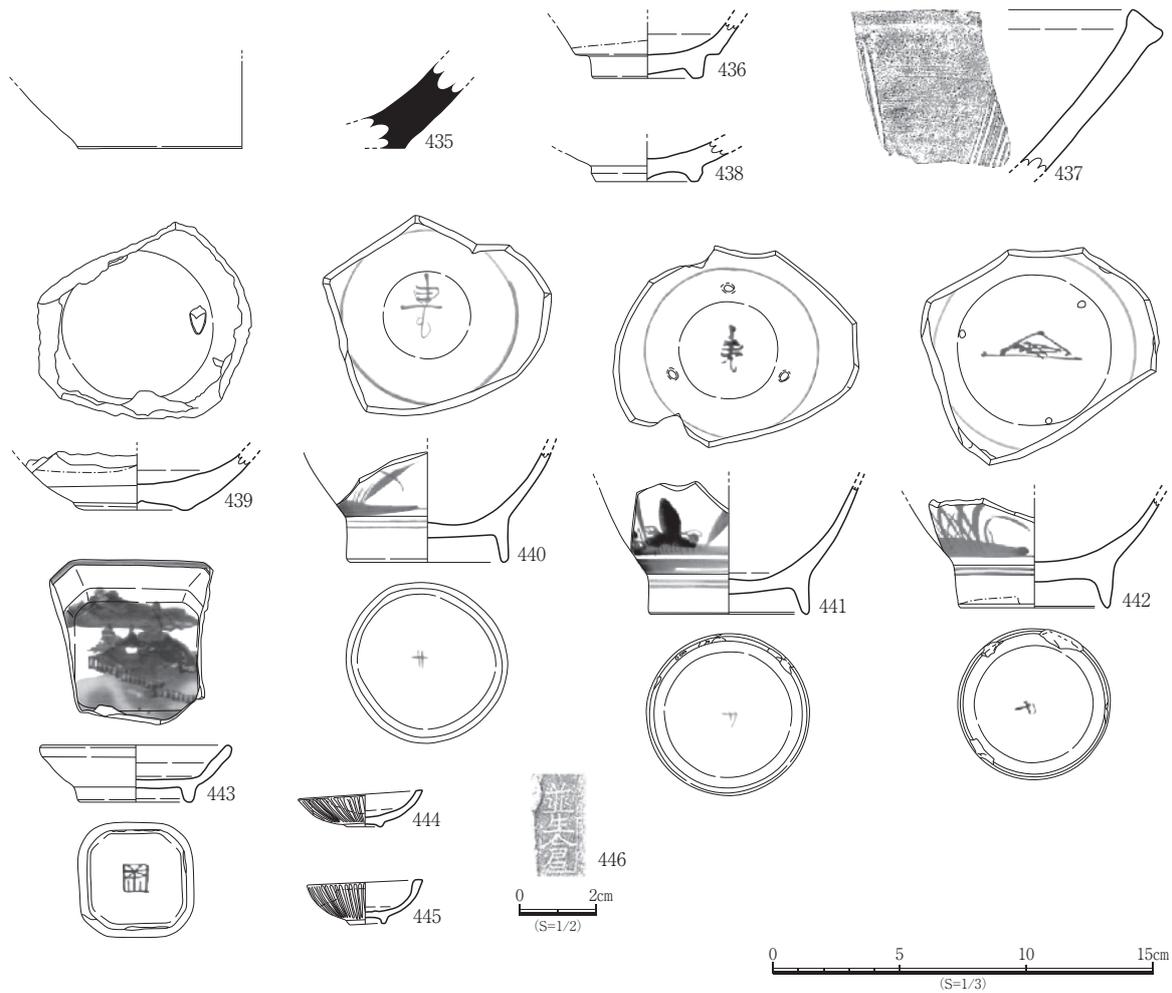


図168 攪乱出土遺物実測図

と「寿」字，外面に圏線と土坡に草文の染付がみられる。441は見込に「寿」字と圏線，外面には草花文と二重圏線の染付がみられる。見込には3箇所ピン痕が残る。442の胎土は陶器質である。見込は岩波文と圏線，外面には草文と圏線の染付がみられる。見込には3箇所ピン痕が残る。443は能茶山窯の近世磁器皿で，型打成形である。角皿で，高台を貼付したものとみられる。見込には楼閣山水文の染付，口縁部には口鑄風に呉須を塗り，高台内には方形枠に「茶」銘がみられる。全面に白濁して透明感のない透明釉を施し，畳付は釉ハギする。444・445は肥前産の近世磁器紅皿で，いずれも完存する。型押成形で，外面には型による貝殻状の文様がみられる。内面から口縁部外面には白磁釉を施し，押部外面は無釉である。446は棧瓦で，凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施す。側面には方形枠内に「菑生倉」の刻印がみられる。香美市香北町産である。

第Ⅳ章 森山城跡の調査成果

1. C区

(1) 調査概要

森山城跡は以前より曲輪などが確認されており、周知の遺跡として知られていた。丘陵部の試掘調査はされておらず、今回が初めての発掘調査となる。調査範囲は北及び西斜面と裾の平地部である。裾の平地部については、令和2・3年度に高知県教育委員会によって実施された試掘調査により、森山城跡に伴う堀跡があると判断されたことを受け、森山城跡の範囲が北と西に拡大され、本発掘調査を行うこととなった。

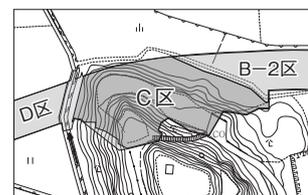


図169 C区位置図

森山城跡のある丘陵部をC区、森山城跡北側の裾部をB区、森山城跡西側の裾部をD区として調査を行った。

C区は調査前には山林となっており、令和元年度に立木を伐採し、伐採後には2段の曲輪と裾部に土塁とその内側に堀跡が確認できた。令和2年度にC区、令和3年度にB区とD区の調査を行った。C区の調査は詰の下の曲輪から裾部までで、調査区最上部の曲輪を1区、その下の斜面を2区、その下の曲輪を3区、その下の斜面を4区、裾部の平場を5区として、最上部の1区より調査を行い、西部から東部へと調査を進めた。

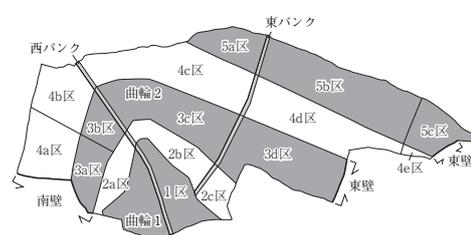


図170 C区調査区・土層図位置図

C区は調査前には山林となっており、令和元年度に立木を伐採し、伐採後には2段の曲輪と裾部に土塁とその内側に堀跡が確認できた。令和2年度にC区、令和3年度にB区とD区の調査を行った。C区の調査は詰の下の曲輪から裾部までで、調査区最上部の曲輪を1区、その下の斜面を2区、その下の曲輪を3区、その下の斜面を4区、裾部の平場を5区として、最上部の1区より調査を行い、西部から東部へと調査を進めた。

調査では、1区の曲輪1では建物跡は確認できなかったものの、曲輪を横切る堀切を確認し、北側には平場を2箇所確認した。曲輪1の下は2区は切岸となっており、西側には曲輪1で確認した堀切が続いていた。

3区の曲輪2は、盛土によって造成された中世上面と、基盤層である岩盤上の中世下面の二時期があり、上面は16世紀前半、中世下面は14世紀後葉から15世紀前半とみられる。曲輪2の上面の面積は、調査地内で256㎡を測り、森山城跡では最も広い曲輪である。北側から西側に回る帯曲輪で、北側は幅約8.0m、西側の南端では幅約1.1mを測る。上面の検出面では、一部で焼土が確認された。また、C-2区の切岸裾部では柵列が検出されたが、曲輪では明確な建物跡は確認できなかった。曲輪2の下面は北西隅が突出し、平坦面を造り出している。この平坦面では小規模な建物跡が確認されている。

4区は曲輪2の下の斜面部で、北側は盛土によって造成されていた。造成された範囲は、検出長約30m、幅約6m、高さ約5mを測り、小規模な城でありながら、大規模な造成が行われたことが明らかとなった。盛土からは概ね14世紀後葉から16世紀前半の遺物が出土している。西側は堆積層の下より基盤層である岩盤が検出され、縦堀2条とそれらに繋がる通路状遺構などが確認された。

5区の裾部の平場では、土塁とその内側に堀跡を確認した。東部の曲輪と思われていた箇所は、近世の整地層及び遺構が検出され、土塁が削平された可能性が高い。近世の整地層の下からは土塁内側の堀が直角に折れ、自然流路へ繋がっていることが確認された。

令和3年度には森山城跡裾部のB区とD区の調査を行った。B区は東側が二ノ堀遺跡、西側が森

1. C区

山城跡であるが調査区が繋がっているため二ノ堀遺跡として報告している。B区及びD区は調査前にはいずれも水田であった。試掘調査の結果より堀跡があると推定されていた。調査ではB区の西側であるB-2区では自然流路と堀跡、D区では湿地が確認され、自然地形を生かして防御していたことが明らかとなった。なお、B-2区で検出された堀跡はC区の堀跡と繋がること確認されたため、C区で報告している。

(2) 基本層序と堆積層出土遺物

① 1区

i 1区西バンク基本層序(図171)

1区は今回の調査で最も標高が高い曲輪1の北端から北斜面にかけての範囲で、西バンクの層位で遺物を取り上げた。曲輪1は約5~10cmの表土層の下で、近現代の堆積層または整地層を確認し、基盤層はシルト質砂層または岩盤であった。曲輪1は標高18.0~18.6mを測り、岩盤上で中世の遺構検出を行った。曲輪1で確認された堀切1は表土下約20~30cmで検出し、岩盤を掘削して造られ

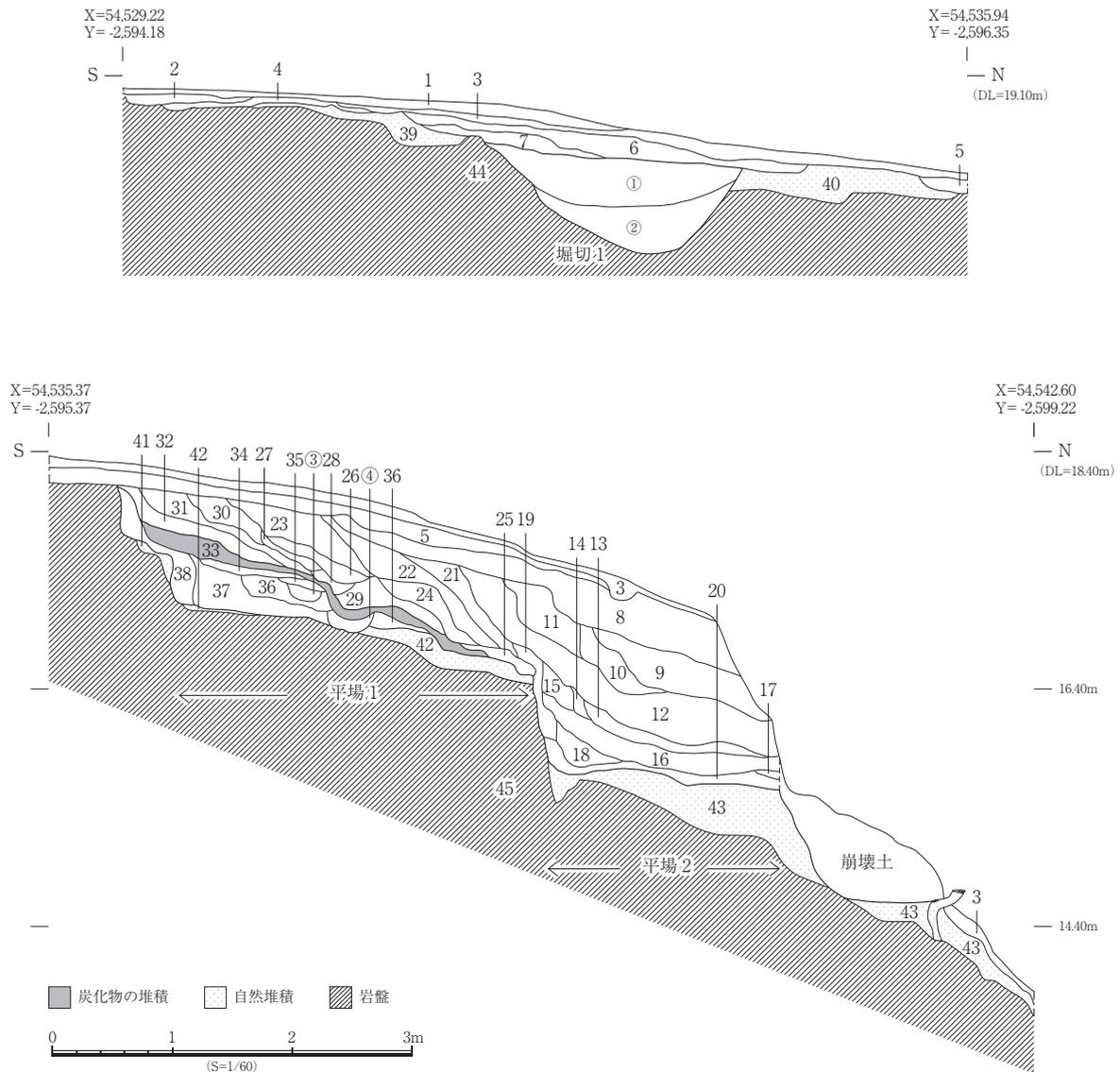


図171 C-1区西バンクセクション図

C-1区西バンクセクション層位

- 第1層 暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を多く含む(現代)
- 第2層 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層で、0.5cm大の黄色礫を多く含む(現代)
- 第3層 黒褐色(10YR2/3)シルト質中粒砂層で、腐植を多く含む(現代)
- 第4層 ぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層で、0.5cm大の黄色礫を多く含む(現代)
- 第5層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を多く含む
- 第6層 暗褐色(10YR3/3)シルト質細粒砂層で、1~3cm大の角礫を少し含む(現代か)
- 第7層 ぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂層で、1~3cm大の角礫を少し含む
- 第8層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、3~10cm大の礫を非常に多く含む
- 第9層 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層
- 第10層 ぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質中粒砂層で、3cm大の礫を多く含む
- 第11層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂層で、10cm大の礫を少し含む
- 第12層 暗褐色(10YR3/4)シルト質中粒砂層で、5~10cm大の礫を多く含む
- 第13層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂層で、5cm大の礫を少し含む
- 第14層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂層で、0.5cm大の黄色礫を少し含む
- 第15層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂層で、1cm大の礫を多く含む、土器と炭化物を含む
- 第16層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂層で、0.5cm大の黄色礫と炭化物を含む
- 第17層 褐色(10YR4/6)シルト質細粒砂層で、1~3cm大の礫を含む
- 第18層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂層で、3~5cm大の黄色礫と炭化物を含む
- 第19層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1~5cm大の礫を多く含む
- 第20層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粗粒砂層で、5cm大の黄色礫と炭化物を含む
- 第21層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂層で、3~5cm大の礫を含む
- 第22層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂層で、3~5cm大の礫を多く含む、炭化物を含む
- 第23層 ぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層で、0.5cm大の黄色礫を多く含む、炭化物を含む
- 第24層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質粗粒砂層で、0.5~1cm大の黄色礫と土器、炭化物を含む
- 第25層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層で、5cm大の黄色礫と土器、炭化物を含む

- 第26層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂層で、0.5cm大の黄色礫と10cm大の礫を含む
- 第27層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を含む
- 第28層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂層で、0.5cm大の黄色礫を含む
- 第29層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂層で、10cm大の礫を非常に多く含む
- 第30層 褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂層で、1~10cm大の角礫を多く含む
- 第31層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、黄色シルト中粒砂ブロックと1cm大の黄色礫を含む
- 第32層 黄褐色(10YR5/6)礫質粗粒砂層
- 第33層 黒褐色(10YR2/3)シルト質粗粒砂層で、3~5cm大の黄色礫と土器を含み、炭化物を非常に多く含む
- 第34層 褐色(10YR4/4)礫質粗粒砂層で、1cm大の黄色礫を多く含む、炭化物を含む
- 第35層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を含み、粘性は弱い
- 第36層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1~5cm大の黄色礫を多く含む
- 第37層 黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒砂層で、1~8cm大の礫を非常に多く含む
- 第38層 暗褐色(10YR3/4)シルト質中粒砂層で、5cm大の礫を多く含む、炭化物を含む
- 第39層 褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂層で、1~5cm大の角礫を含む(自然堆積層)
- 第40層 暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂層で、1~10cm大の角礫を多く含む(自然堆積層)
- 第41層 黄褐色(10YR5/6)礫質粗粒砂層で、5cm大の礫を非常に多く含む(自然堆積層)
- 第42層 黄褐色(10YR5/6)礫質粗粒砂層で、5~10cm大の黄色礫を多く含む(自然堆積層)
- 第43層 黄褐色(10YR5/6)礫質粗粒砂層で、5cm大の礫を非常に多く含む(自然堆積層)
- 第44層 褐色(10YR4/6)礫層(岩盤:自然堆積層)
- 第45層 浅黄橙色(10YR8/4)礫層(岩盤:自然堆積層)

遺構埋土

- ① 暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂で、3~5cm大の礫を多く含む(堀切1埋土1)
- ② 暗褐色(10YR3/3)シルト質極粗粒砂で、5~10cm大の礫を多く含む(堀切1埋土2)
- ③ 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトで、5cm大の礫を含む(P-7)
- ④ 暗褐色(10YR3/4)シルト質細粒砂で、1~5cm大の黄色礫を含み、底に炭化物を多く含む(P-5)

ている。

北斜面では表土層である第3・5層と第8層は緩やかに傾斜し、第9~32層は大きく傾斜する。第8~12層は近代の堆積層で、第13~38層は中世の堆積層である。第33層は炭化物を非常に多く含む堆積層で、第33層上面を中世上面の遺構検出面とした。第39層以下は自然堆積層である。第39~43層は風化礫を多く含む、第44・45層は岩盤である。北斜面では風化礫を多く含む第41~43層と第45層の岩盤を掘削して平場1・2を造り出しており、この面を中世下面の遺構検出面とした。

ii 1区西バンク堆積層出土遺物

1区西バンク第3層(図172-447・448)

447は備前焼播鉢の口縁部で、端部は肥厚し四角く収め、上方へ僅かに摘む。全面に回転ナデ調整を施す。僅かに摩耗した播目が残る。448は近世磁器瓶である。小型で、外面には鉄釉と呉須による梅文がみられ、白味を帯びた透明釉を施す。内面と高台内は無釉である。

1区西バンク第4層(図172-449)

449は瓦質土器釜の脚部で先端を欠損する。著しく摩耗するため調整は不明である。

1区西バンク第11層(図172-450)

450は土師質土器杯で、体部は底部よりまっすぐ外上方へ伸びる。内面は著しく摩耗するため調

1. C区

整は不明で、体部外面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りである。

1区西バンク第16層(図172-451~456)

451・452は土師質土器杯である。451は底径4.5cmを測る小さいものである。器壁が厚く、体部は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りである。452は体部はやや外反して立ち上がる。著しく摩耗するため調整は不明である。453は東播系須恵器片口鉢で、口縁部は肥厚し上方へ屈曲する。全面に回転ナデ調整を施したとみられるが、煤が付着するため調整は不明瞭である。454は古瀬戸折縁深皿で、口縁部は水平に伸び、端部は肥厚し丸く収める。全面に灰釉を施し、内面は被熱する。455は青磁碗で、口縁部の一部が残存する。外面には鎬蓮弁文がみられ、全面にオリブ色の青磁釉を厚く施す。456は板状で長方形を呈するとみられる鉄製品で、一部が残存する。断面は方形を呈する。

1区西バンク第18層(図172-457)

457は備前焼の壺または甕の底部である。調整は、内面がナデで指頭圧痕がみられ、体部には指頭圧痕が横方向に2列残る。胴部外面は縦方向のヘラナデ調整、底部外面は無調整で砂が付着する。

1区西バンク第23層(図172-458~460)

458は土師質土器皿で、底径8.6cmを測る。体部は底部より上方に立ち上がった後、外上方へ伸びる。調整は回転ナデとみられるが、内面は摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。459・460は常滑焼甕である。口縁部は外反して水平に伸びた後、端部を上下に短く拡張してN字状を呈する。459の調整は口縁部が横ナデ、頸部が横方向のナデである。460は口縁縁帯部幅は2.0cmを測る。調整は口縁部が横ナデ、体部がナデで指頭圧痕が残る。

1区西バンク第31層(図172-461)

461は常滑焼甕で、頸部は内傾し、口縁縁帯部幅は4.5cmを測る。内面の調整は、胴部下がヘラケズリ後ナデ、胴部上が横方向のナデで指頭圧痕が残り、肩部はナデ調整で指頭圧痕が顕著に残り、口縁部が横方向のナデである。外面の調整は口縁部が横方向のナデ、肩部が縦方向のヘラケズリで僅かにタタキ目が残り、胴部は横方向のナデまたはナデ調整である。口縁部内面と頸部外面には自然釉が掛かる。

1区西バンク第32層(図172-462・463)

462は青磁碗で、外面には幅の狭い鎬蓮弁文がみられ、全面にオリブ色の青磁釉を厚く施す。被熱し、器面は荒れる。463は青磁稜花皿で、内面は丸彫による菊弁状の文様、外面は片彫と線描による花卉文で、花卉は肉厚で盛り上がる。全面に淡いオリブ色の青磁釉を施す。

1区西バンク第33層(図173-464~483)

464~474は土師質土器杯で、体部は回転ナデ調整、465~474の底部の切り離しは回転糸切りである。464は口縁部の一部が残存し、外上方にまっすぐ伸びる。粘土紐巻き上げ成形とみられる。465は底径が4.2cmと小さく、体部は上方に立ち上がった後、内湾して外上方に立ち上がる。466は体部が外上方にまっすぐ伸びる。467~469は体部が上方に立ち上がった後、外上方にまっすぐ伸びる。470・471は体部が底部付近で緩やかな稜を持って外上方へ伸びる。470の底部外面には切り離し後の板状圧痕が残る。472は器壁が厚く、底径が4.7cmを測る小さいものである。体部は外上方にまっすぐ伸びる。473・474はロクロ水挽成形とみられ、ロクロ目が顕著に残る。体部は外上方にまっすぐ伸びる。475は土師質土器皿で、底径9.1cmを測る。体部は回転ナデ調整、底部の切

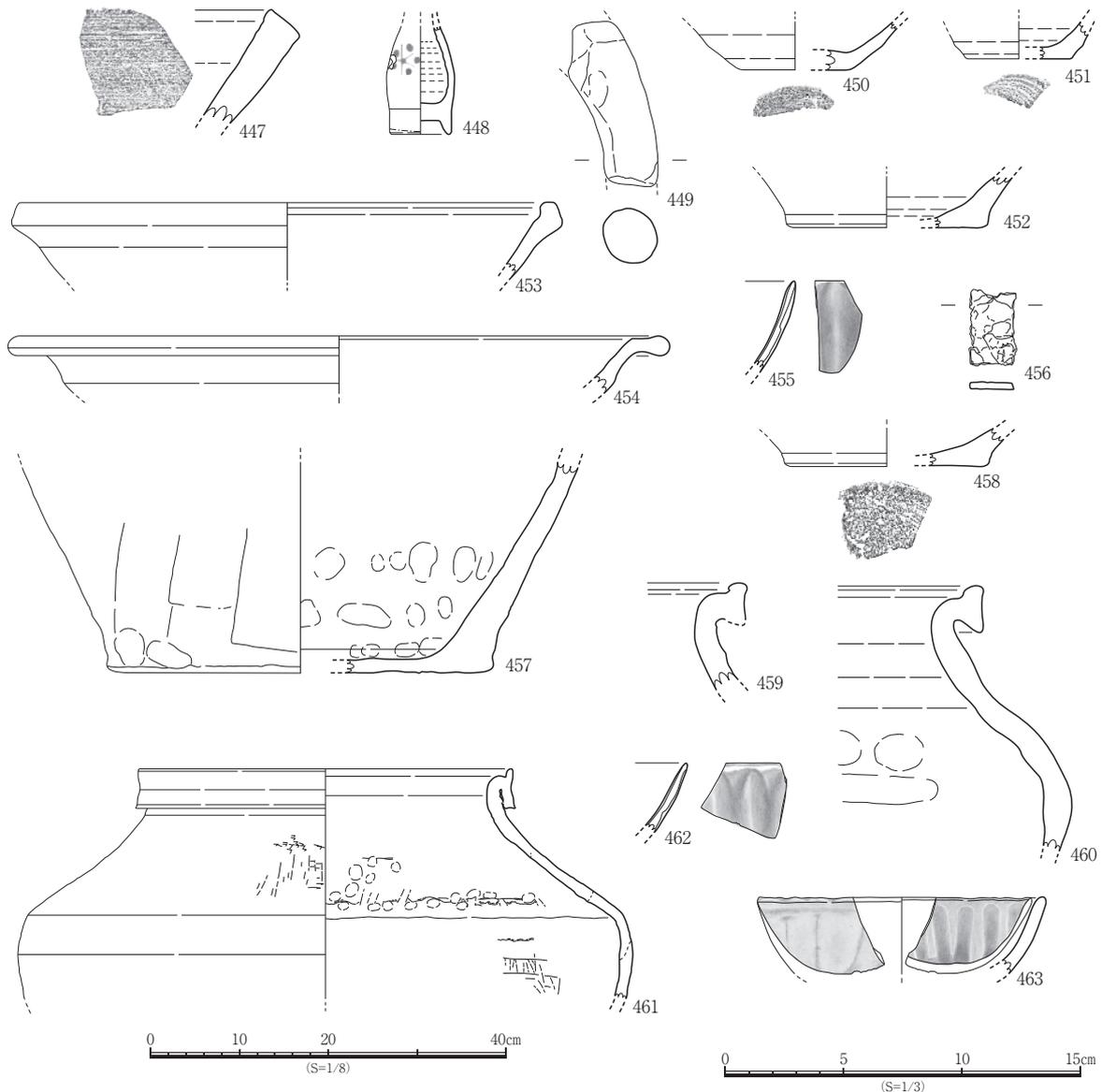


図172 C-1区西バンク第3～32層出土遺物実測図

り離しは回転糸切りである。476は東播系須恵器片口鉢で、体部は外上方へまっすぐ立ち上がり、口縁端部は直立し上下に拡張する。回転ナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため内面は調整不明である。外面には僅かに煤が付着する。477は古瀬戸壺または甕の底部とみられ、体部は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りである。灰釉を施すが、内面の一部は釉が掛からず、外面は部分的に釉が流れる。478は備前焼播鉢で、底部が残存し、体部は外上方にまっすぐ伸びる。体部は回転ナデ調整で、内面には播目が残る。播目は摩耗する。479・480は石製品砥石である。479は薄く方形を呈するものとみられる。上面を著しく使用し凹み、下面は一部使用痕が残る。赤褐色を呈し、石材は不明である。硯である可能性もある。480は一部が残存し、上面と下面、1側面の3面に使用痕が残る。481～483は鉄製品釘で、頂部はL字形、断面は方形を呈する。481は小型で、先端は欠損するが、残存部はやや細くなる。482・483は頂部から身部にかけて湾曲する。

1区西バンク第34層(図174-484～487)

1. C区

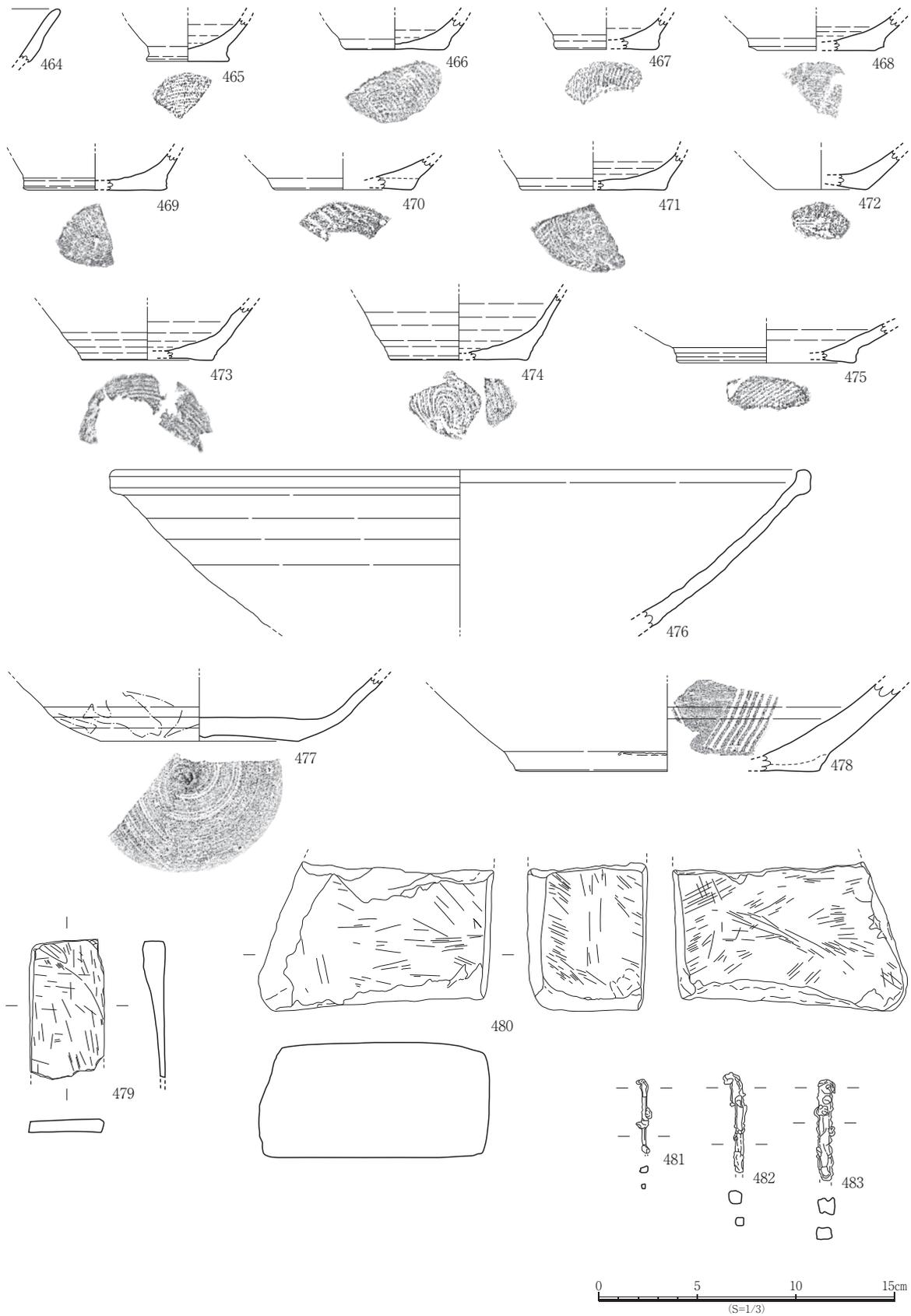


図173 C-1区西バンク第33層出土遺物実測図

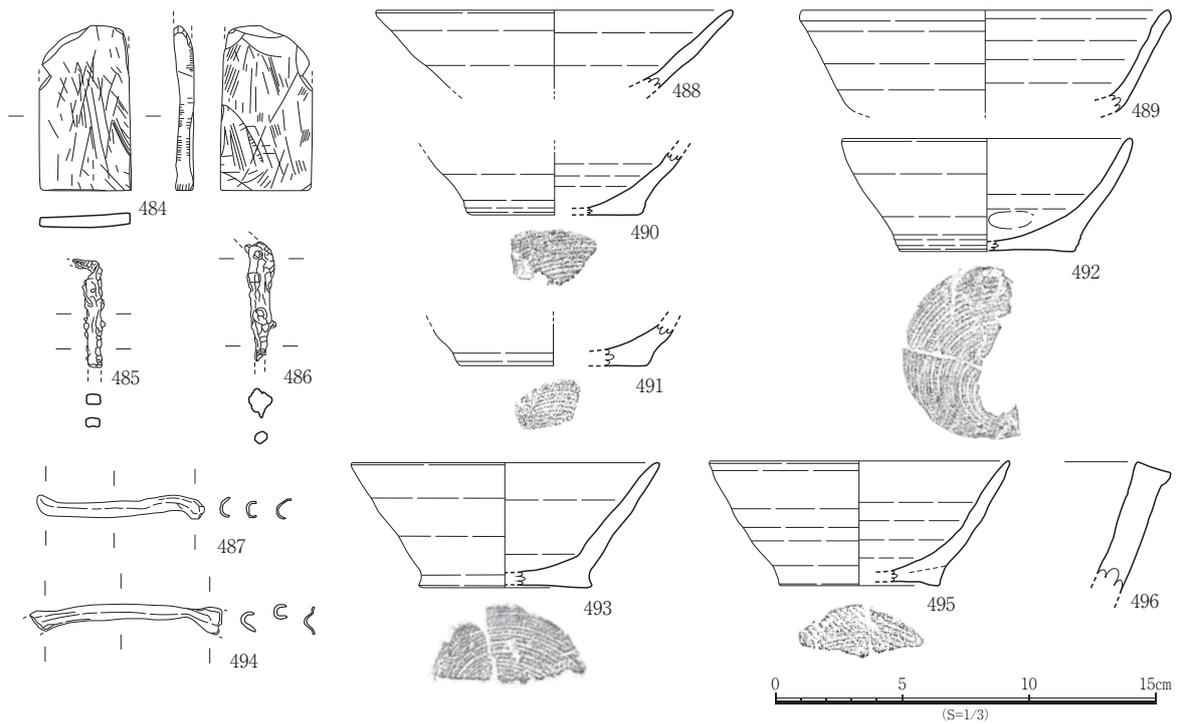


図174 C-1区西バンク第34・36層ほか出土遺物実測図

484は石製品砥石で、薄く、方形を呈する。残存部で5面に使用痕が残る。石材は不明である。485・486は鉄製品釘である。485は頂部がL字形、断面は方形を呈する。486は両端が欠損し、断面は方形を呈する。487は銅製品で、半筒形を呈する。薄く、断面は半円形を呈する。494・693と同様の形状を呈する。

1区西バンク第36層(図174-488~494)

488~493は土師質土器杯で、回転ナデ調整を施し、490~493の底部の切り離しは回転糸切りである。488は体部が外へ大きく開く。489は体部があまり開かず、比較的上方へまっすぐ伸びる。490・491は体部が底部付近で緩やかな稜を持って外上方へ伸びる。492は小振りで、口縁部は比較的上方へ内湾して立ち上がる。内面には指頭圧痕、底部外面には切り離し後の板状圧痕が残る。493は器高が高く、5.0cmを測る。体部は外上方へまっすぐ伸びる。494は銅製品で半筒形を呈する。薄く、断面は半円形を呈する。487・693と同様の形状を呈する。

その他(図174-495・496)

495は土師質土器杯で、平場TRの第33層以下の出土である。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部はまっすぐ伸びる。体部は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りで、その後の板状圧痕が残る。496も平場TRより出土した備前焼播鉢である。口縁端部は四角く収め、外へ細く摘む。調整は回転ナデである。

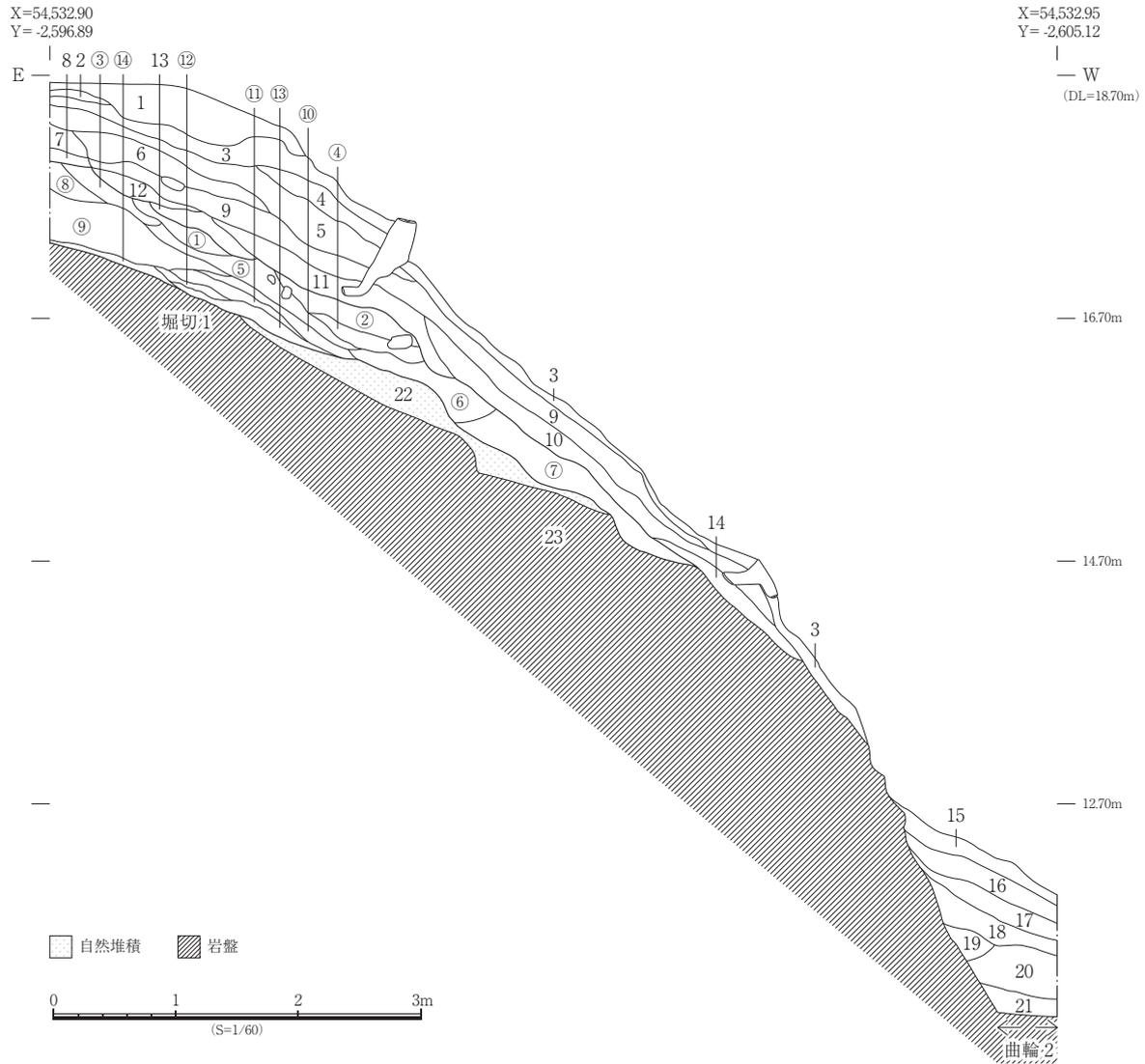
② 2区

2区は曲輪1と曲輪2の間の斜面部で、基盤層は岩盤であり、上面の時期に切岸とするため岩盤を掘削している。西部の2a区は南壁、北部の2b区と2c区は東バンクの層位で遺物を取り上げた。

i 2区南壁基本層序(図175)

南壁では1区に近い上部と3区に近い裾部で堆積が厚くみられた。第1~5層は近現代の堆積層で、

1. C区



層位

- 第1層 暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を多く含む(現代)
- 第2層 黒褐色(10YR2/3)シルト質中粒砂層で、腐植を多く含む(現代)
- 第3層 褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂層で、0.5~1cm大の礫を多く含む
- 第4層 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層で、1cm大の礫を少し含む
- 第5層 暗褐色(10YR3/3)シルト質細粒砂層で、1~3cm大の角礫を少し含む(現代か)
- 第6層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層で、1~3cm大の礫を含む
- 第7層 褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂層で、5~10cm大の礫を多く含む
- 第8層 暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂層で、1~5cm大の礫を多く含む
- 第9層 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層で、5~10cm大の礫を多く含む
- 第10層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、5cm大の礫を含む
- 第11層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層で、5cm大の礫を含む
- 第12層 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層で、1cm大の礫を含む
- 第13層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層で、0.5cm大の黄色礫を含む
- 第14層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、3cm大の礫を多く含む、締めりはない
- 第15層 黒褐色(10YR2/3)シルト質粗粒砂層で、腐植を含む(表土)
- 第16層 暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂層で、5~8cm大の礫を多く含む
- 第17層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を含む
- 第18層 褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂層で、1~3cm大の礫を含む
- 第19層 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で、炭化物を含む

- 第20層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、3~10cm大の礫を非常に多く含む
- 第21層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)極粗粒砂質シルト層で、3cm大の礫を多く含む
- 第22層 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粗粒砂層で、1cm大の礫と極粗粒砂を非常に多く含む(自然堆積層)
- 第23層 褐色(10YR4/4)極粗粒砂質礫層で、岩盤の間にシルト質極粗粒砂が入る(岩盤:自然堆積層)

遺構埋土(堀切1)

- ① オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂質シルト
- ② 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、1cm大の礫を多く含む
- ③ にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂で、1~5cm大の礫を多く含む
- ④ 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで、5cm大の礫を含む
- ⑤ オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂質シルトで、10cm大の礫を少し含む
- ⑥ オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで、5~10cm大の礫を多く含む
- ⑦ オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質粗粒砂で、1~3cm大の礫を多く含む
- ⑧ 暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂で、1~5cm大の礫を非常に多く含む
- ⑨ にぶい黄褐色(10YR4/3)礫質粗粒砂で、10~20cm大の礫を非常に多く含む
- ⑩ 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を含む
- ⑪ 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで、3cm大の礫を少し含む
- ⑫ 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、3cm大の黄色礫を多く含む
- ⑬ 褐色(10YR4/6)粘土質シルトで、中粒砂を含む
- ⑭ オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルトで、下部に炭化物が堆積する

図175 C-2区南壁セクション図

第6～14層は近世の遺物が出土している。第15・16層は裾部の表土で、近世以降の遺物が出土している。裾部では岩盤が急傾斜で、3区の曲輪2を造成する際に岩盤が掘削されたとみられる。第14層の下では堀切1を検出している。堀切1は曲輪2まで伸びず、中腹で浅くなり止まる。

ii 2区南壁堆積層出土遺物

2区南壁第1層(図176-497・498)

497は古瀬戸水注とみられ、外面に印花文がみられる。内面は横方向の強いナデ調整、外面には灰釉を施す。498は備前焼甕で、口縁部は短く上方へ立ち上がる。調整は回転ナデで、外面肩部と口縁部内面には胡麻がみられる。

2区南壁第4層(図176-499・500)

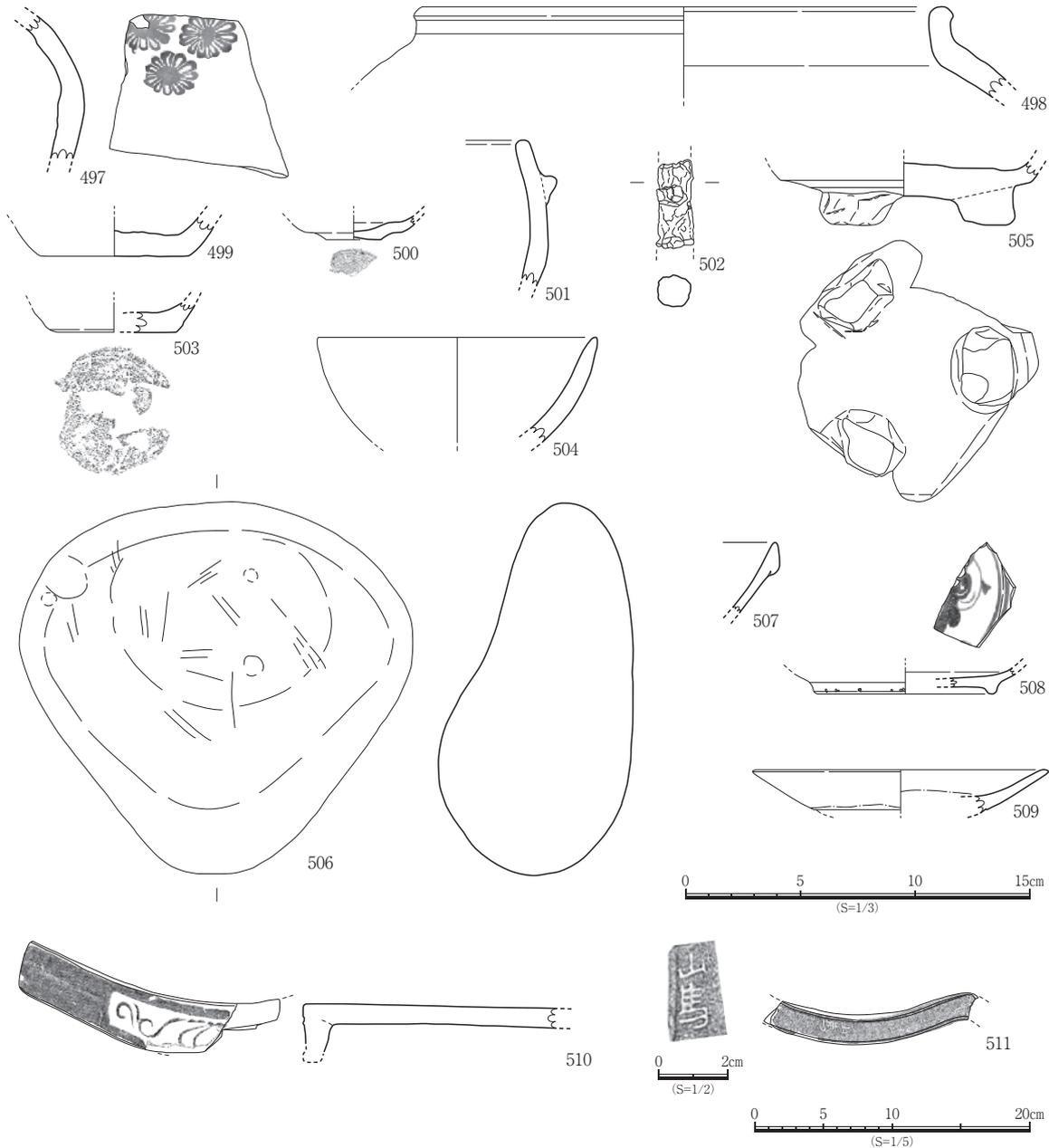


図176 C-2区南壁出土遺物実測図

1. C区

499は土師質土器杯で、器壁が厚く緩やかに体部が立ち上がる。著しく摩耗するため調整は不明である。500は土師質土器小皿である。底径2.4cmと小さく、体部は内湾する。回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。

2区南壁第5層(図176-501・502)

501は瓦質土器釜で、口縁部は内湾し、外面には断面が三角形を呈する鏝を貼付する。調整は口縁部と鏝が横ナデ、その他はナデで外面には指頭圧痕が残る。外面にのみ炭素が吸着する。502は円柱形を呈する鉄製品で、釘とみられ、一部が残存する。断面は隅丸方形を呈し、残存長4.0cm、残存幅は1.6cmを測る。

2区南壁第6層(図176-503・504)

503は土師質土器杯で、器壁が厚いものである。著しく摩耗するため体部の調整は不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。504は瀬戸・美濃陶器碗で、全面に鉄釉を施す。

2区南壁第9層(図176-505・506)

505は近世の土師器火鉢とみられ、底部には方形の脚を3箇所貼付する。調整は内面の胴部と底部の境目が横方向の強いナデ、胴部が回転ナデ、底部外面はナデである。506は石製品磨石または砥石である。三角形を呈する河原石で、中央部に敲打痕と擦痕があり凹む。使用面の周縁部は被熱する。石材は細粒砂岩である。

2区南壁第10層(図176-507)

507は白磁碗で、器壁が薄く、口縁は玉縁を呈する。全面に黄色味を帯びた白磁釉を施す。

2区南壁第13層(図176-508)

508は近世磁器皿で、見込は不明の文様、内面には圏線の染付がみられ、外面は無文である。高台外面にはケズリの痕跡が残る。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。

2区南壁第15層(図176-509・510)

509は端反形の白磁皿で、口縁部内外面にのみ光沢のある白磁釉を施す。見込は回転ナデ調整、外面の体部下半は回転ケズリ調整である。510は軒棧瓦で、中心飾は蔦文とみられる。凹凸面はナデ調整、瓦当裏面は横方向のナデ調整である。

2区南壁第16層(図176-511)

511は棧瓦で、凹面は横方向のナデ、凸面は縦または横方向のナデ調整で、凹凸面にキラ粉が付着する。側面には「山馬」の刻印が残る。

iii 2区東バンク基本層序(図177)

東バンクでも1区に近い上部と3区に近い裾部で堆積が厚くみられたが、斜面部の堆積は比較的薄く、厚い箇所では約70cmの堆積、中腹では表土下で岩盤がみられた。第1～7層は近世以降の堆積層とみられ、第8層は中世の堆積層、第9層は自然堆積層で岩盤である。

iv 2区東バンク堆積層出土遺物

2区東バンク第1層(図178-512～523)

512は土師質土器杯で、体部は底部付近で緩やかな稜を持って外上方へ伸びる。回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。513は東播系須恵器片口鉢で、口縁端部は幅が狭く、上下に少し摘む。調整は回転ナデである。被熱したものとみられる。514は古瀬戸緑釉小皿で、回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りである。内面から体部外面まで緑釉を施し、見込には胎土目痕

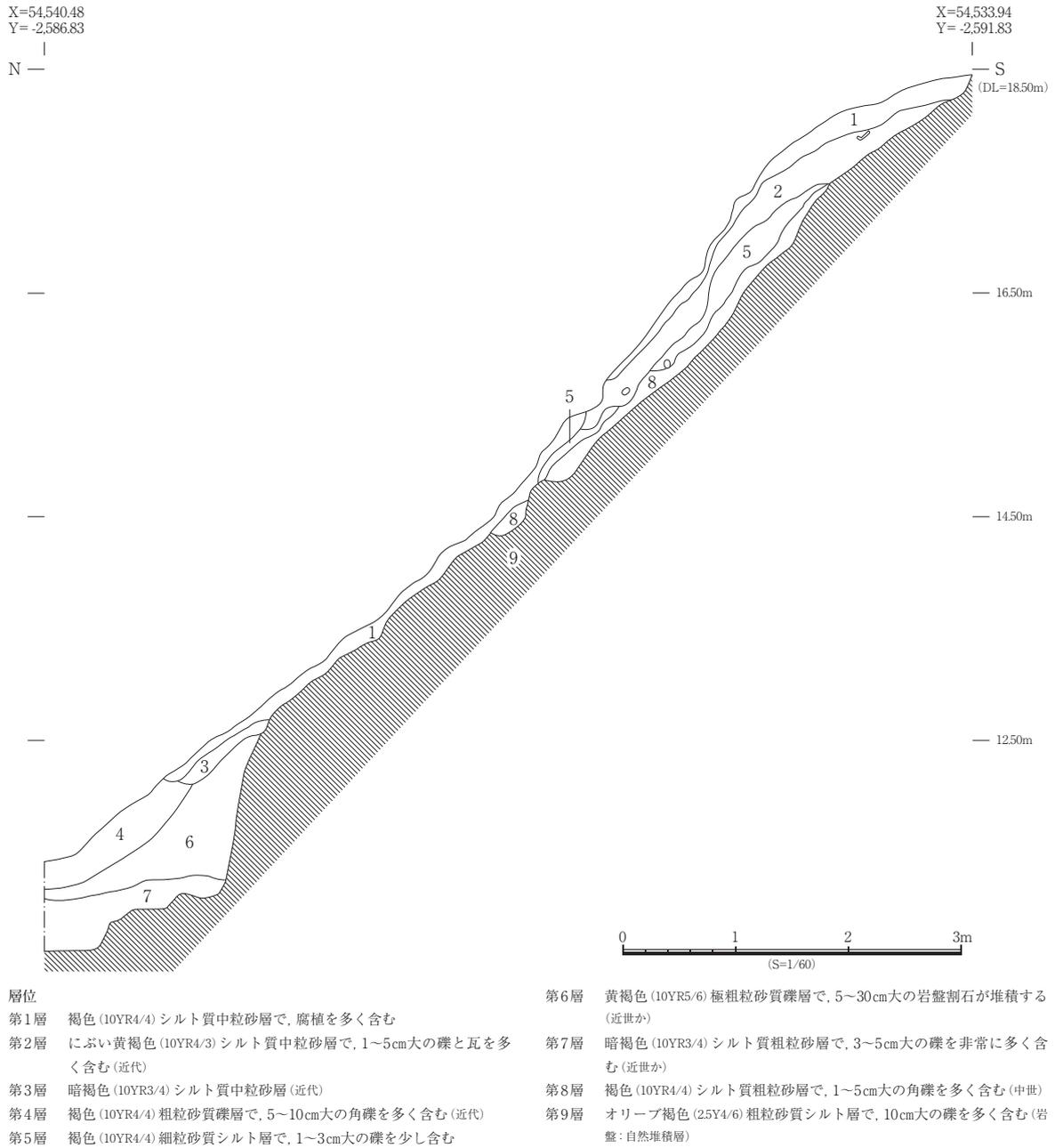


図177 C-2区東バンクセクション図

が残る。515・516は備前焼播鉢である。回転ナデ調整で、底部外面は無調整である。内面には播目が残る、516は10条単位の播目がみられ、播目は摩耗する。517・518は常滑焼甕である。517は肩部から胴部が残存する。内面の調整は、胴部下がが横方向のケズリの後、ナデで指頭圧痕が残る、胴部上部から肩部がナデで指頭圧痕が残る。外面の調整は肩部がナデとみられるが、自然釉が掛かるため調整は不明瞭である。胴部外面はナデ調整で、下部にはヘラナデ調整を加え、上部には押印文がみられる。518は底部の一部が残存し、調整はナデである。519は青磁稜花皿で、口縁部は外反し、口禿である。無文で、口縁端部を除きオリーブ灰色の青磁釉を施す。520は近世陶器碗で、内面から体部外面までは灰釉を施し、外面体部下半は回転ケズリ調整である。521は近世磁器染付

1. C区

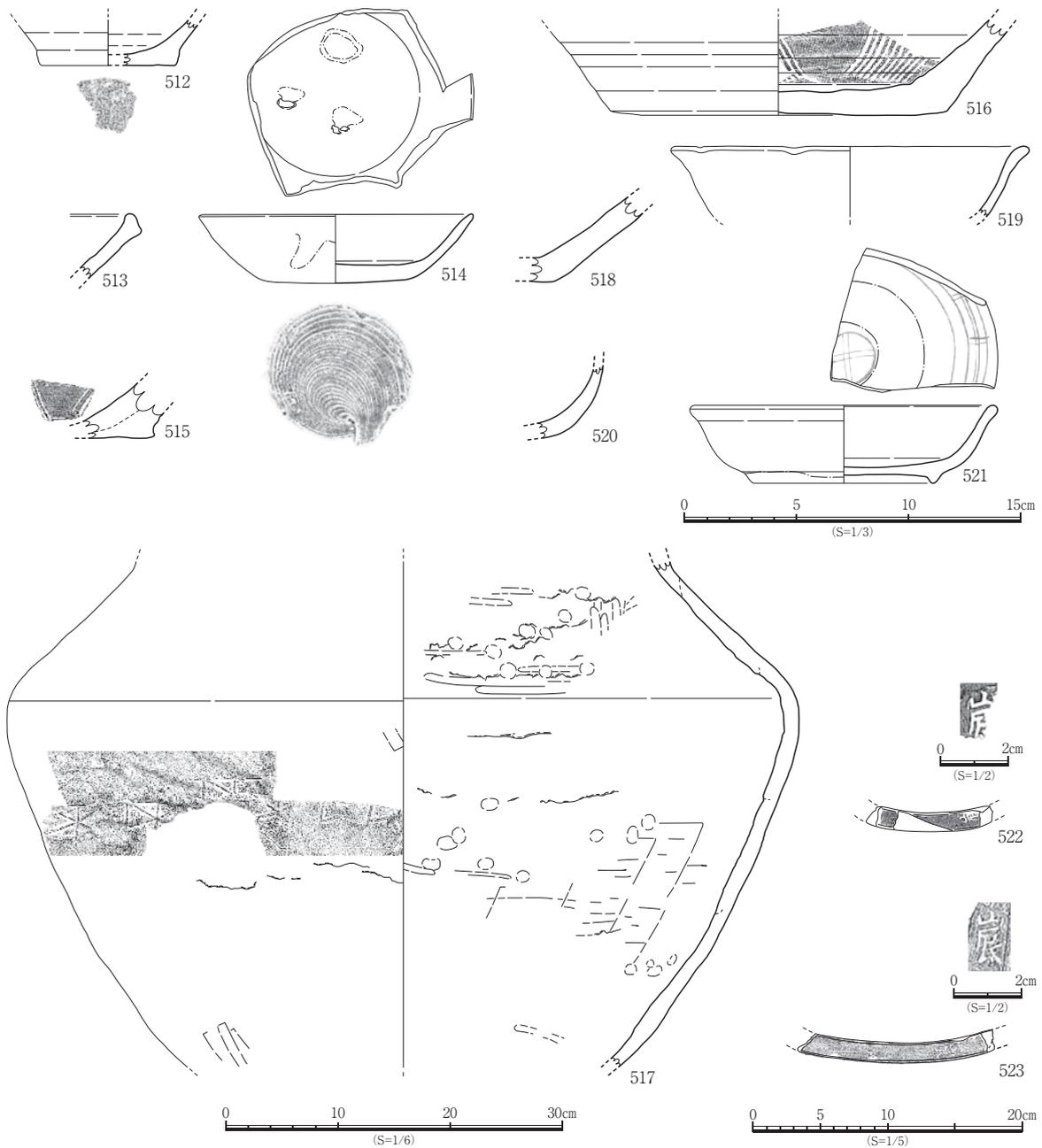


図178 C-2区東バンク第1層出土遺物実測図

皿で、見込は二重十字文、口縁部内面は二重格子文と圏線の染付がみられる。内面から外面高台付近まで透明釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギを行う。高台と高台内は無釉である。522・523は平瓦で、いずれも側面に731と同じ刻印がみられるが、解読できなかった。

2区東バンク第2層(図179-524~532)

524は古瀬戸壺または皿の底部である。内面はナデ調整とみられるが器面が荒れるため調整は不明で、一部に灰釉が掛かり、2箇所胎土目痕が残る。外面は無釉で、体部がヘラケズリ調整、底部がヘラケズリまたはヘラナデ調整で一部に砂が付着する。525は備前焼播鉢で、体部は内湾し、口縁端部は上下に僅かに摘む。全面に回転ナデ調整を施した後、口縁部に横ナデ調整を加え、外面

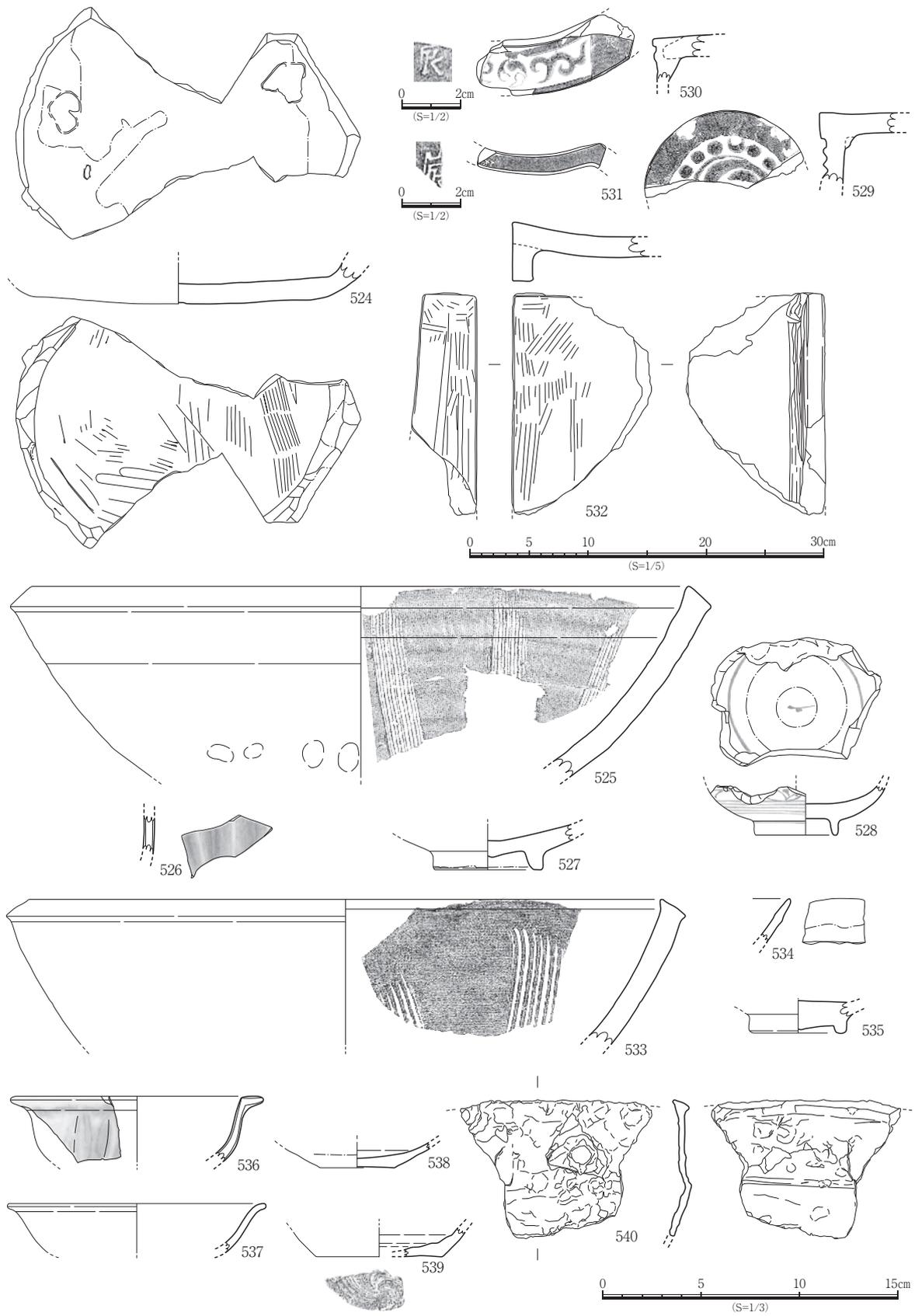


図179 C-2区東バンク第2~8層出土遺物実測図

1. C区

には指頭圧痕が残る。内面には15条単位の播目がみられる。526・527は青磁碗である。526は外面に鎬蓮弁文がみられ、全面にオリブ色の青磁釉を厚く施す。527は無文で、暈付を除き青磁釉を施す。528は近世磁器碗で、見込に岩と波文とみられる染付、内面に圏線、外面には多重圏線と染付の一部がみられる。全面に透明釉を施し、見込を蛇ノ目釉ハギ、暈付を釉ハギする。529は三巴文の軒丸瓦で、珠文が6個残存する。珠文の径は1.1cmを測り、瓦当にはキラ粉が付着する。瓦当裏面は横方向のナデ調整、凹凸面には縦方向のナデ調整を施す。530は軒平瓦で、中心飾は三巴文である。瓦当右側には522・523と同じ刻印がみられるが、解読できなかった。瓦当にはキラ粉が付着する。瓦当裏面と凹凸面には横方向のナデ調整を施す。531は棧瓦で側面に522・523・530と同じ刻印がみられるが、解読できなかった。凹凸面には横方向のナデ調整を施し、キラ粉が付着する。532は平瓦系道具瓦で、凸面に台形を呈する粘土板を垂直方向に貼付する。凹凸面の調整は縦方向のヘラナデまたはナデで、凹面にはキラ粉が付着する。

2区東バンク第3層(図179-533)

533は備前焼播鉢で片口の一部が残り、口縁端部は上下に僅かに摘む。全面に回転ナデ調整を施し、内面には7条単位の播目がみられる。

2区東バンク第4層(図179-534~536)

534は古瀬戸緑釉小皿で、回転ナデ調整の後、内面から口縁部外面に緑釉を施す。535は青磁碗で、底部の器壁が厚く、低い高台が付く。内面から高台外面には青磁釉を施すが、著しく摩耗し、釉には光沢がなく文様の有無は不明である。高台内には放射状の鉋痕が残る。536は青磁杯で、口縁部は水平に伸び、外面には片彫の蓮弁文がみられる。全面に青緑色の青磁釉を厚く施す。釉は被熱したものとみられ、透明感がない。

2区東バンク第6層(図179-537・538)

537は端反形の白磁皿で、全面に光沢のある白磁釉を施す。538は近世陶器皿である。回転ナデ調整で、内面から体部外面まで灰釉を施し、底部外面は回転ケズリ調整である。

2区東バンク第8層(図179-539・540)

539は土師質土器杯で、ロクロ水挽成形とみられる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。540は板状で湾曲する鉄製品で、一部が残存する。端部は肥厚し、断面が三角形を呈する。鉄鍋か。

③ 3区

3区は曲輪2で、調査前より森山城跡北側では平場が確認されていた。3区の層序は西部の3a区と3b区は南壁、北西部の3c区は西バンクと東バンク、北東部の3d区は東壁の堆積を基準とした。一部は3区と4区の区分が困難であるため、堆積層出土遺物の報告は土層図掲載順とし、4区出土遺物も掲載しているが、出土した地区については遺物観察表に記している。

i 3区南壁基本層序(図180)

3区西部は調査前には平場は確認されておらず、約1.4mの厚い堆積が確認される箇所もあった。第1~6層は近現代、第7・8層は近世、岩盤直上の第11層は中世の堆積層である。第8層中で近世の遺構、第13層上面で中世上面の遺構を検出した。第13層は基盤層の岩盤で、岩盤を削平し曲輪を造成している。3a区と3b区の曲輪2の造成は中世上面の時期に行われており、中世下面の遺構は確認されていない。

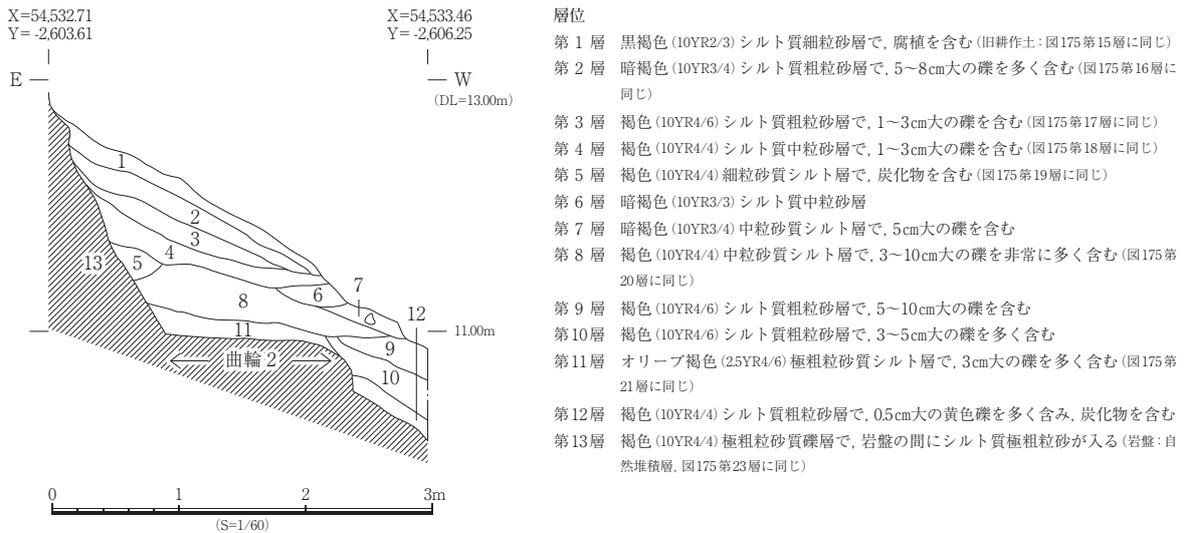


図180 C-3区南壁セクション図

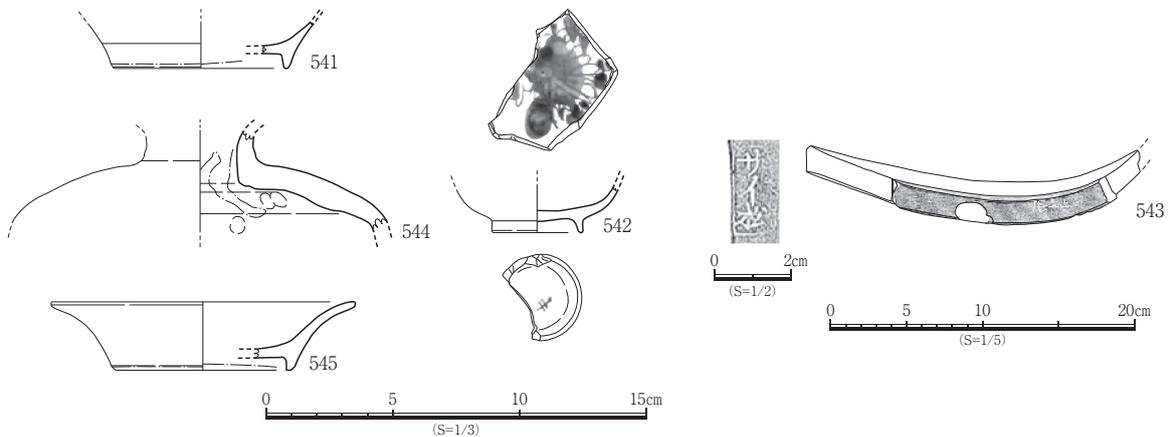


図181 C-3区南壁出土遺物実測図

ii 3区南壁堆積層出土遺物

3区南壁第8層(図181-541~543)

541は白磁皿で、畳付を除き、白濁し透明感のない白磁釉を施す。542は能茶山窯の近世磁器小碗で、見込には花文の染付、高台内には「サ」銘がみられる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。543は棧瓦で、隅に切り込みがみられる。側面には方形枠内に「サイ松」の刻印が残る。凹面は横方向のナデ調整、凸面は縦または横方向のナデ調整を施し、凹凸面にキラ粉が付着する。

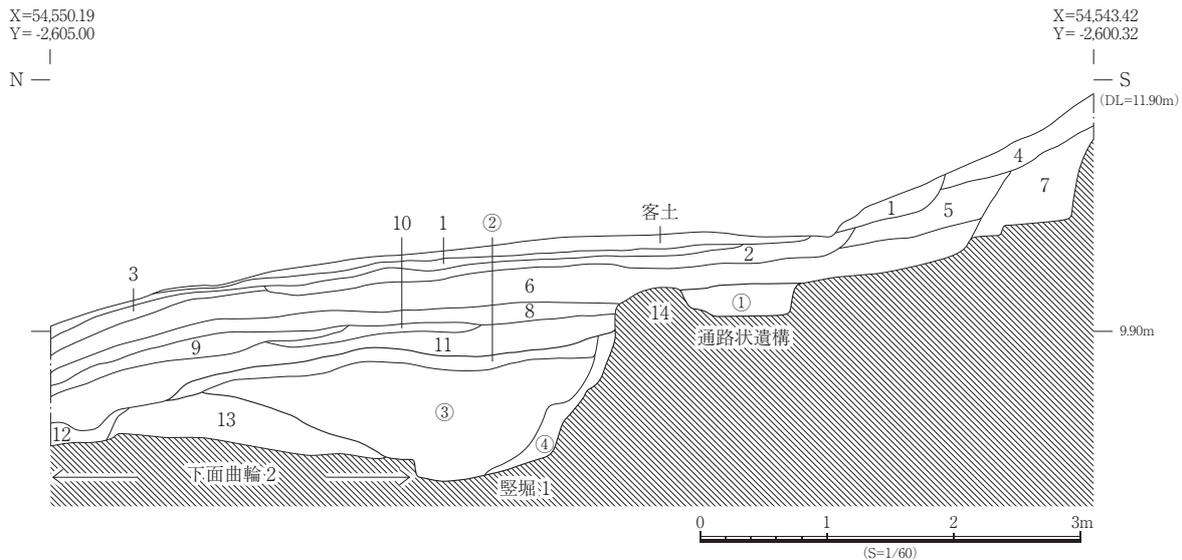
3区南壁第11層(図181-544・545)

544は古瀬戸瓶子で頸部が残存し、内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。外面は灰釉を施し、内面の一部にも釉が流れる。545は端反形の白磁皿で、畳付を除き、白濁し透明感のない白磁釉を施す。南壁第11層からは図示した遺物の他に弥生土器鉢、備前焼播鉢などが出土している。

iii 3区西バンク基本層序(図182)

西バンクでは曲輪の幅が広くなり、南壁の堆積とは大きく異なる。第1~5層は近現代、第6~11層は近世の堆積層で、第4~11層は角礫を多く含んでいる。西バンクでは豎堀1が確認されており、豎堀1の南と北では基盤層である岩盤の標高差は1.25mを測る。豎堀1の南は切岸の裾部にあ

1. C区



層位

- 第1層 黒褐色 (10YR2/2) シルト質中粒砂層で、腐植と1~5cm大の礫を多く含む(表土)
- 第2層 褐色 (10YR4/4) シルト質中粒砂層で、1~3cm大の礫を含む
- 第3層 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粗粒砂層で、腐植と1~3cm大の礫を含む
- 第4層 暗褐色 (10YR3/3) 礫質中粒砂層で、3~10cm大の礫を非常に多く含む
- 第5層 黒褐色 (10YR2/3) シルト質中粒砂層で、3~10cm大の礫を多く含む
- 第6層 におい黄褐色 (10YR5/4) 礫質粗粒砂層で、5~15cm大の礫を非常に多く含む
- 第7層 暗褐色 (10YR3/3) 粗粒砂質礫層で、3~15cm大の礫と岩盤割石の角礫を非常に多く含む
- 第8層 褐色 (10YR4/4) 中粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を含む
- 第9層 におい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粗粒砂層で、1~5cm大の礫を多く含む
- 第10層 暗褐色 (10YR3/3) シルト質中粒砂層で、1~5cm大の礫と炭化物を多く含む

- 第11層 におい黄褐色 (10YR5/4) 粗粒砂質礫層で、5~10cm大の礫を非常に多く含む
- 第12層 におい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む
- 第13層 黒褐色 (10YR3/2) 粗粒砂質シルト層で、3~10cm大の礫と炭化物を多く含む(中世)
- 第14層 灰黄褐色 (10YR6/2) 礫層(岩盤:自然堆積層)

遺構埋土

- ① 褐色 (10YR4/6) シルト質粗粒砂で、1~3cm大の礫を多く含む(通路状遺構)
- ② 暗褐色 (10YR4/4) 粗粒砂質シルトで、1~3cm大の礫を少し含む(堅堀1埋土1)
- ③ 褐色 (10YR4/6) 極粗粒砂質礫で、3~20cm大の礫と岩盤割石の角礫を非常に多く含む(堅堀1埋土2)
- ④ 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂質シルトで、1~3cm大の礫を含み、炭化物を少し含む(堅堀1埋土3)

図182 C-3区西バンクセクション図

たり、近世の堆積層である第6層下面の岩盤上で、中世上面の遺構検出を行った。堅堀1の北側では炭化物を多く含む中世の堆積層である第13層が確認され、第13層上面で中世上面の遺構検出、第13層下面の岩盤上で中世下面の遺構検出を行った。

iv 3区西バンク堆積層出土遺物

3区西バンク第3層(図183-546)

546は青磁碗で、外面に鎬蓮弁文がみられる。全面にオリーブ色の青磁釉を厚く施す。

3区西バンク第6層(図183-547~550)

547~549は土師質土器杯である。547はロクロ水挽成形で、器壁が薄く、ロクロ目が顕著に残る。底径が4.0cmと小さく、体部は大きく外へ開く。内面から体部外面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りである。548は底部の器壁が厚く、体部はまっすぐ外上方へ伸びる。著しく摩耗するため調整は不明である。見込にはロクロ目が顕著に残る。549はロクロ水挽成形である。口径10.2cm、底径4.2cmを測る小型のもので、体部は外上方へまっすぐ伸びる。回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。550は土製品土錘で、円柱形を呈する。完存し、全面にナデ調整を施す。

3区西バンク第11層(図183-551~565)

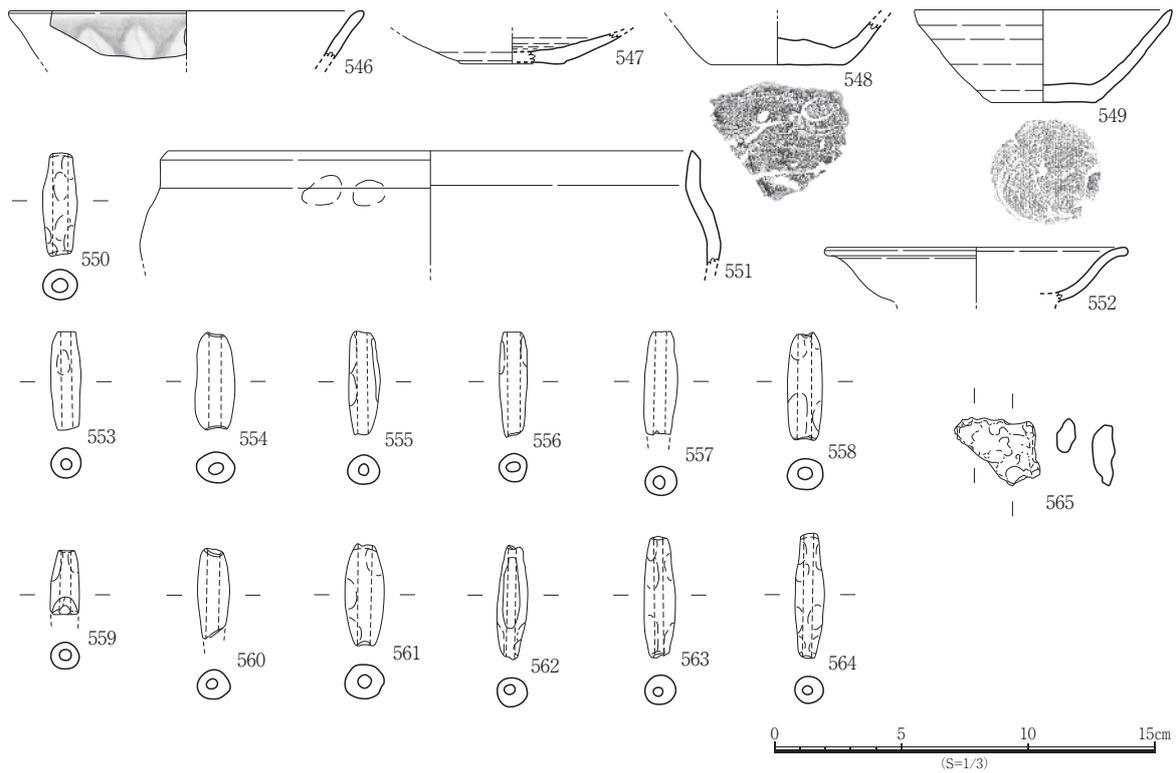


図183 C-3区西バンク第3・6・11層出土遺物実測図

551は瓦質土器鍋で、口縁は直立し、端部は外傾する面を持つ。著しく摩耗するため調整は不明で、外面には炭素が吸着する。552は端反形の白磁皿で、全面に透明感のない白磁釉を施す。553～564は土製品土錘で、全面にナデ調整を施す。553～558は円柱形を呈し、555・557は黒斑がみられ、558は摩耗する。559～564は紡錘形を呈し、559・562～564は黒斑がみられ、560と561は摩耗する。565は板状の鉄製品で、錆化がひどく形状は不明である。中央は膨らみ厚く、端部は薄くなる。
3区西バンク第13層(図184-566～580)

566～568は土師質土器杯である。調整は回転ナデで、566・567の底部の切り離しは回転糸切りである。566は器壁が厚く、体部は底部より屈曲して外上方にまっすぐ伸びる。567は大振りで器壁が薄く、底径は7.3cmを測る。568も大振りで、口径は13.0cmを測る。体部はあまり開かず、比較的上方に立ち上がる。569は瓦質土器鍋で、口縁部は外上方に短く伸びる。口縁部は横ナデ調整で、体部内面の調整は摩耗するため不明である。体部外面はナデ調整で、指頭圧痕が残るが、摩耗するため調整は不明瞭である。外面には煤が付着する。570～580は金属製品である。570～573は鉄製の小札で、長方形を呈し、径0.2cmの円孔が2列みられる。570は一部欠損し、伊予札とみられる。円孔は2列みられ、左列は5個、右列は7個の円孔を確認した。左列と右列間は1.0～1.1cm、縦列上部の円孔間は0.7cm、下部は1.0cmを測る。571は基石頭伊予札で完存する。7個の円孔が2列並び、左列と右列間は1.1～1.2cm、縦列間は0.6～1.0cmを測る。572は一部が残存し、円孔は2列みられ、右列、左列とも2個の円孔が残存する。左列と右列間は1.1cm、縦列間は0.9cmを測る。573も一部が残存し、円孔は2列みられ、右列、左列とも3個の円孔が残存する。左列と右列間は1.1cm、縦列間は0.7～0.8cmを測る。574～579は鉄製品釘で、頂部はL字形を呈し薄く、身部の断面は方形を呈する。574・575は先端が細く尖る。576は頂部の幅が広い。577はやや大型で、身部が太い。578・579

1. C区

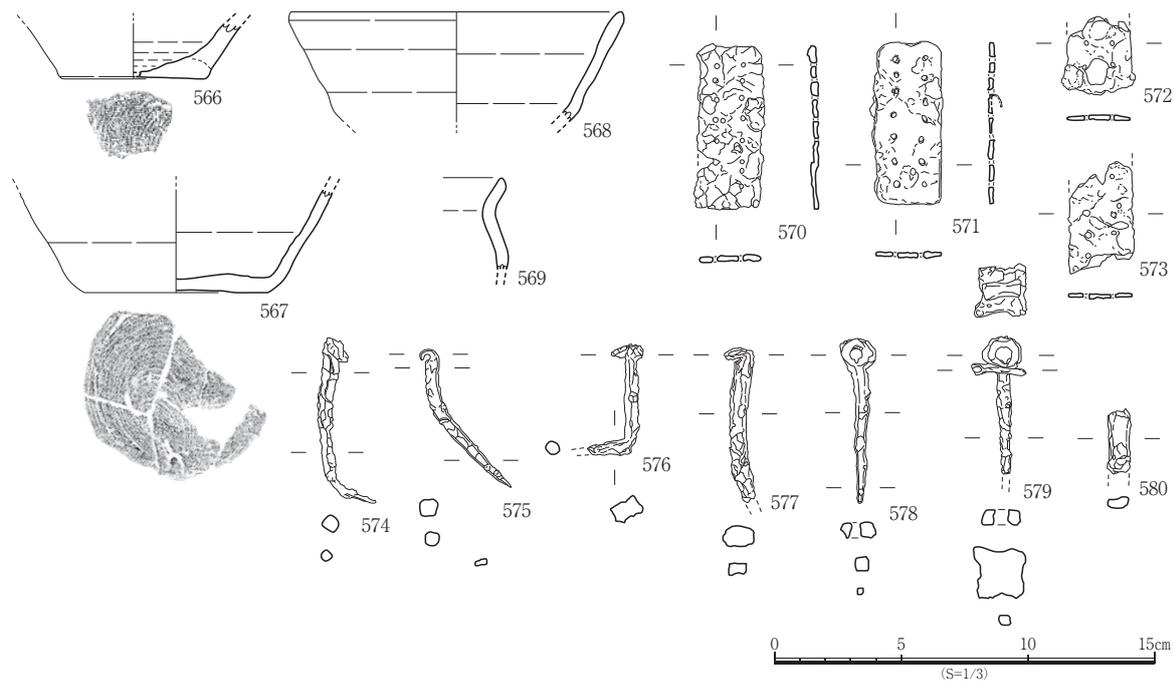


図184 C-3区西バンク第13層出土遺物実測図

は環頭の釘で、578は先端が細く尖る。579は頸部に厚さ0.2cmの板状の鉄が貫通する。580は薄い棒状の鉄製品で、断面は方形を呈する。残存長2.6cm、残存幅1.0cm、残存厚0.4cmを測る。西バンク第13層からは鉄釘97点が出土している。

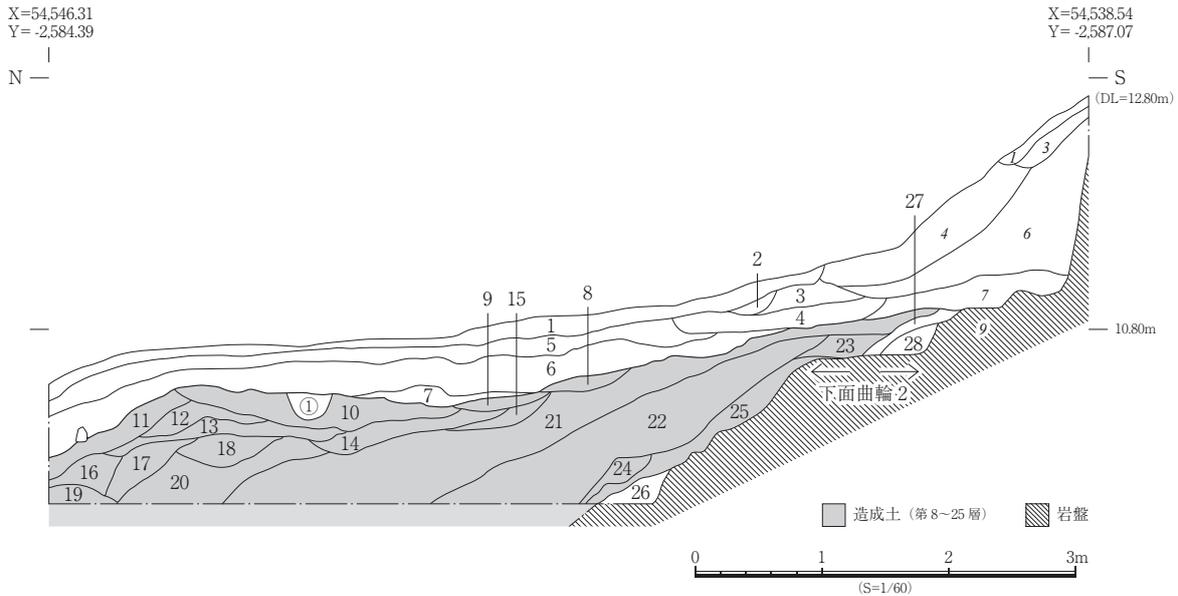
v 3区東バンク基本層序(図185)

丘陵北側の東バンクでは岩盤上に大掛かりな造成を行い、広い曲輪を造り出していることが確認された。第1～5層は近現代、第6層は近世の堆積層で、第6・7層の下面が中世上面の曲輪2となる。第8～25層は中世上面曲輪2の構築に伴う造成土である。曲輪2の遺構面となる第8～10層は砂質シルトであるのに対し、以下の堆積は角礫を多く含む土層で、丘陵上部の岩盤等を掘削し造成したものとみられる。曲輪2の北西部では、第10層の上面で焼土が検出されている。第26～28層は岩盤上に堆積する中世下面に伴う遺物包含層である。

vi 3区東バンク堆積層出土遺物

3区東バンク第6層(図186-581～593)

581・582は土師質土器杯で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。581は器壁が薄く、体部はやや内湾して立ち上がる。摩耗するため調整は不明瞭である。582は底径が7.0cmと大きく、体部は大きく内湾する。583～585は土師質土器小皿で、いずれも小型で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。583は口縁部が外反し、内面にはロクロ目が顕著に残る。584・585は器高が高く、口縁部はまっすぐ外上方に伸びる。586は古瀬戸平碗で、体部は緩やかに内湾し、口縁部は細く摘む。内面から体部外面まで灰釉を施し、外面体部下は回転ケズリ調整で無釉である。587は備前焼播鉢で、口縁端部は四角く、上下に僅かに摘む。全面に回転ナデ調整を施し、内面には播目がみられる。588は青磁碗で、底部の器壁が厚く、断面が台形を呈する低い高台が付く。見込には印花文がみられ、内面から高台外面まで青磁釉を施す。畳付と高台内は無釉である。589～591は土製品土錘で、完存し、全面にナデ調整を施す。589は小型で円



層位	説明
第1層	黒褐色 (7.5YR2/2) 中粒砂質シルト層で、腐植を含み、一部グライ化する
第2層	暗褐色 (10YR3/3) 粗粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を多く含む
第3層	黒褐色 (10YR2/3) 粗粒砂質シルト層で、腐植と1cm大の黄色礫、極粗粒砂を含む
第4層	褐色 (10YR4/4) 粗粒砂質シルト層で、3~8cm大の礫を多く含む
第5層	褐色 (10YR4/6) シルト質粗粒砂層で、0.5~1cm大の礫を多く含む、黄色礫を含む
第6層	褐色 (10YR4/6) 粗粒砂質シルト層で、1~5cm大の礫を多く含む、炭化物を少し含む(近世)
第7層	褐色 (10YR4/6) シルト質粗粒砂層で、粘性は弱い
第8層	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂質シルト層で、0.5・5cm大の礫を含み、焼土と炭化物を少し含む
第9層	褐色 (10YR4/4) 中粒砂質シルト層で、3~5cm大の礫を含み、炭化物を少し含む
第10層	灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂質シルト層で、1~3cm大の黄色礫を含む
第11層	褐色 (10YR4/4) シルト質細粒砂層で、0.5~1cm大の礫と黄色礫を含む
第12層	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫と極粗粒砂を多く含む
第13層	褐色 (10YR4/4) シルト質粗粒砂層
第14層	褐色 (10YR4/4) シルト質極粗粒砂層で、3~5cm大の礫を多くを含む
第15層	褐色 (10YR4/4) シルト質粗粒砂層で、1~5cm大の礫を含む
第16層	オリブ褐色 (2.5Y4/6) 中粒砂質シルト層で、0.5cm大の礫を多く含む、3~5cm大の礫を少し含む
第17層	オリブ褐色 (2.5Y4/6) 細粒砂質シルト層で、5cm大の礫と炭化物を少し含む
第18層	褐色 (10YR4/4) シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を少し含む
第19層	オリブ褐色 (2.5Y4/6) 細粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を含む
第20層	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粗粒砂層で、1~5cm大の礫を非常に多く含む
第21層	褐色 (10YR4/4) シルト質極粗粒砂層で、1~10cm大の礫を非常に多く含む
第22層	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト質極粗粒砂層で、5~10cm大の礫を非常に多く含む、黄色礫を含む
第23層	褐色 (10YR4/4) 粗粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を多く含む
第24層	褐色 (10YR4/6) シルト質粗粒砂層で、3~5cm大の礫を非常に多く含む
第25層	オリブ褐色 (2.5Y4/6) シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む
第26層	暗褐色 (10YR3/3) 粗粒砂質シルト層で、1~5cm大の礫を非常に多く含む(中世下面遺物包含層1)
第27層	オリブ褐色 (2.5Y4/6) 粗粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を含む(中世下面遺物包含層2)
第28層	褐色 (10YR4/4) 中粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫と炭化物を含む(中世下面遺物包含層3)

遺構埋土
 ① にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫と炭化物を少し含む (P-55)

註：斜体の層位は、C-2区東バンクセクション図(図177)に同じ

図185 C-3区東バンクセクション図

柱形を呈する。590・591は紡錘形を呈し、591には黒斑がみられる。592は板状の鉄製品で、湾曲し、先端が細くなる。鎌とみられる。593は銅製品で、中空で先端が尖る。側面には接合痕がみられ、中には木質が残る。

3区東バンク第21層(図186-594)

594は青磁碗で、底部には低い高台が付き、体部は大きく開く。無文で、内面から高台外面まで青磁釉を施し、畳付と高台内は無釉である。

3区東バンク第23層(図186-595)

595は備前焼播鉢で、体部の一部が残存する。全面に回転ナデ調整を施し、内面には11条単位の

1. C区

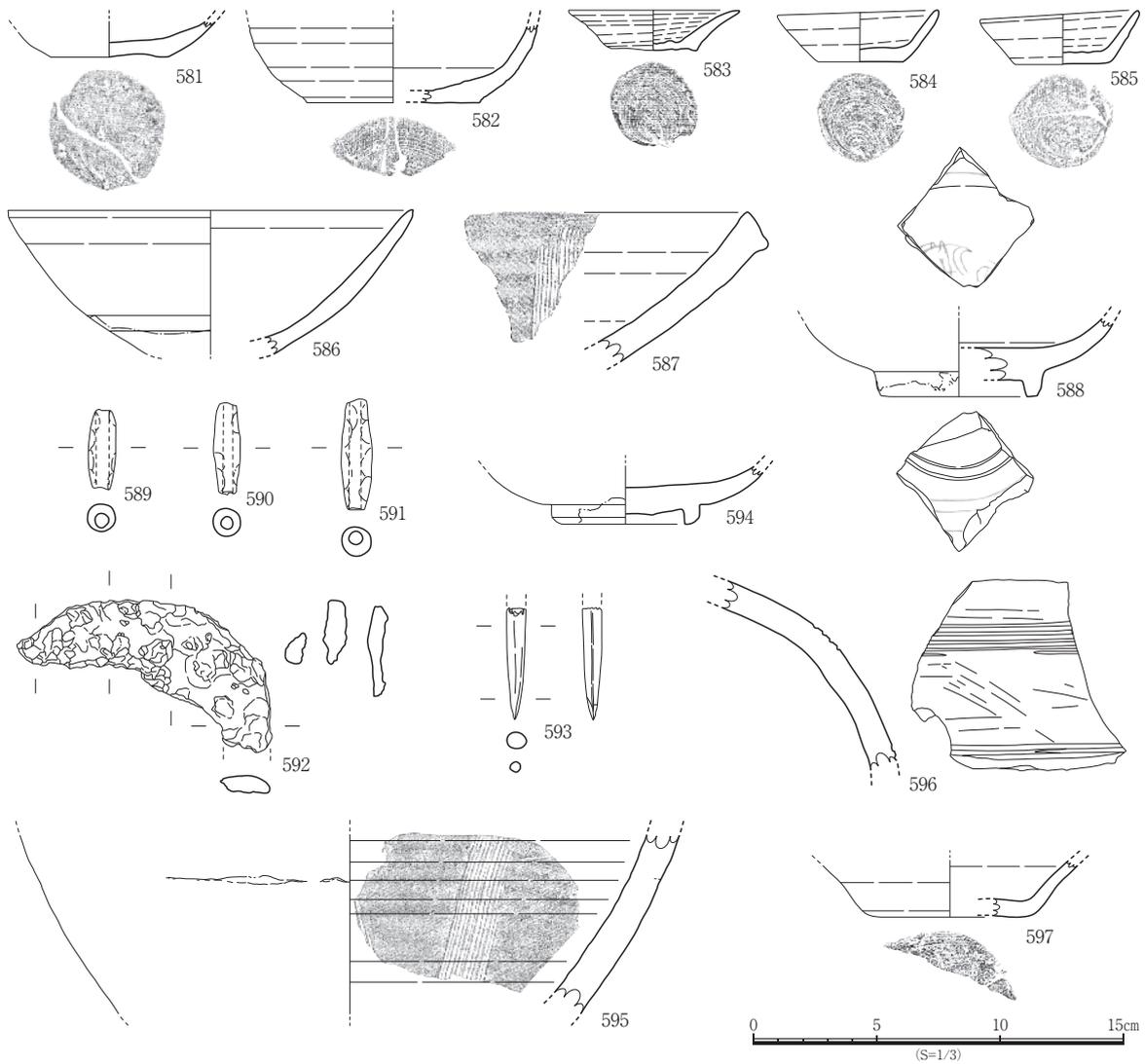


図186 C-3区東バンク出土遺物実測図

播目がみられる。

3区東バンク第25層(図186-596)

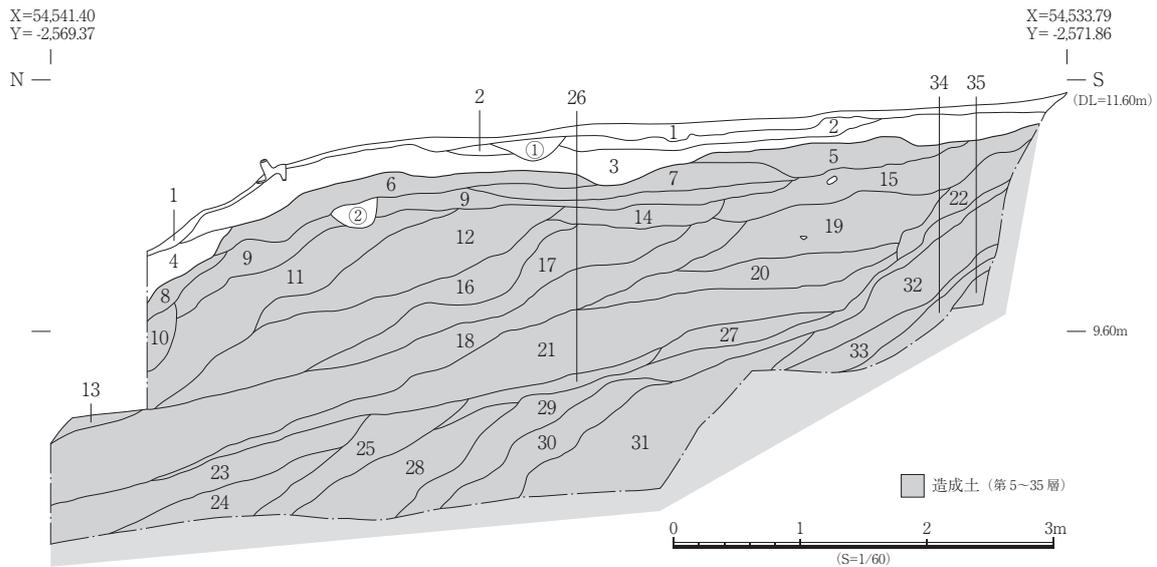
596は備前焼壺で、肩部が残存する。全面にナデ調整を施し、内面には指頭圧痕が残る。外面には櫛描による直線文が2条みられる。

3区東バンク第26層(図186-597)

597は土師質土器杯で、体部は緩やかに外反する。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

vii 3区東壁基本層序(図187)

曲輪2東端での堆積は表土から中世上面までが約20~30cmを測り、非常に薄かった。その下層である中世上面曲輪2の構築に伴う造成土は非常に厚く、また2区の切岸が南へ続いており調査範囲外であるため、岩盤まで掘削することが出来なかった。第1・2層は近現代、第3・4層は近世の堆積層、第5層以下は中世上面曲輪2の構築に伴う造成土である。第1~4層を3区、第5層以下を4区で報告する。



層位

- 第1層 黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂層で、粘性は弱く、腐植の堆積
- 第2層 黒褐色(10YR2/2)中粒砂質シルト層で、1cm大の礫を多く含み、固く締まり、一部グライ化する
- 第3層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1cm大の礫を多く含む(近世)
- 第4層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、3~10cm大の礫を少し含み、締まりはない(近世)
- 第5層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の黄色礫を多く含み、粘性は弱い
- 第6層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、0.5~1cm大の黄色礫を含み、炭化物を少し含む
- 第7層 暗褐色(10YR3/4)シルト質中粒砂層で、0.5~1cm大の黄色礫と粗粒砂を含み、炭化物を少し含む
- 第8層 褐色(10YR4/6)中粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を多く含み、締まりはない
- 第9層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1cm大の黄色礫を非常に多く含む
- 第10層 褐色(10YR4/4)礫質極粗粒砂層で、1~5cm大の黄色礫を非常に多く含み、粘性は僅かにあり
- 第11層 褐色(10YR4/6)シルト質極粗粒砂層で、1~3cm大の礫を非常に多く含み、締まりはない
- 第12層 褐色(10YR4/4)シルト質極粗粒砂層で、1~2cm大の礫を非常に多く含み、11層より砂粒が多い
- 第13層 暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂層で、5cm大の黄色礫を多く含む
- 第14層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、1~5cm大の黄色礫を非常に多く含み、締まりがある
- 第15層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、1~2cm大の礫を非常に多く含み、5cm大の礫と河原石、極粗粒砂を含む
- 第16層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を多く含み、炭化物を含む
- 第17層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、1cm大・3~10cm大の礫を多く含み、粘性は弱い

- 第18層 暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を非常に多く含み、炭化物を含む
- 第19層 褐色(10YR4/6)シルト質中粒砂層で、1cm大の礫を多く含み、5cm大の礫を少し含む
- 第20層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂層で、3~10cm大の黄色礫を多く含む
- 第21層 褐色(10YR4/4)シルト質極粗粒砂層で、1~3cm大の礫を非常に多く含み、15~20cm大の礫を含む
- 第22層 黒褐色(10YR2/3)粗粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫と河原石を含み、10cm大の礫を少し含み、土壌化する
- 第23層 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルト層で、1~5cm大の黄色礫を多く含む
- 第24層 褐色(10YR4/6)極粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫を多く含み、炭化物を含む
- 第25層 黒褐色(10YR2/3)粗粒砂質シルト層で、1~5cm大の礫を多く含み、炭化物を含む
- 第26層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を多く含む
- 第27層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、5~10cm大の礫を多く含む
- 第28層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極粗粒砂層で、5cm大の礫を多く含む
- 第29層 暗褐色(10YR3/3)極粗粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を多く含み、炭化物を含む
- 第30層 暗褐色(10YR3/4)粗粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を多く含む
- 第31層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質礫層で、1~5cm大の礫を含む
- 第32層 黒褐色(10YR2/3)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫と5~10cm大の礫を含み、土壌化する
- 第33層 黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルト層で、1cm大の礫を非常に多く含む
- 第34層 明黄褐色(10YR6/6)礫層で、1~3cm大の黄色礫を含む
- 第35層 褐色(10YR4/6)粗粒砂質シルト層で、3cm大の礫を少し含む

遺構埋土

- ① 暗褐色(10YR3/4)シルト質中粒砂で、腐植と1~3cm大の礫を含む
- ② 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、1cm大の礫を含む

図187 C-3-4区東壁セクション図

viii 3区東壁堆積層出土遺物

3区東壁第1層(図188-598)

598は軒平瓦で、隅瓦とみられる。瓦当には唐草文の一部が残り、木目痕が残る。瓦当右側には方形枠内に「王子定」の刻印がみられる。調整は瓦当裏面が横方向のナデ、凹面が縦または横方向のナデ、凸面が縦方向のナデで、瓦当と凹面にはキラ粉が付着する。

3区東壁第3層(図188-599~606)

1. C区

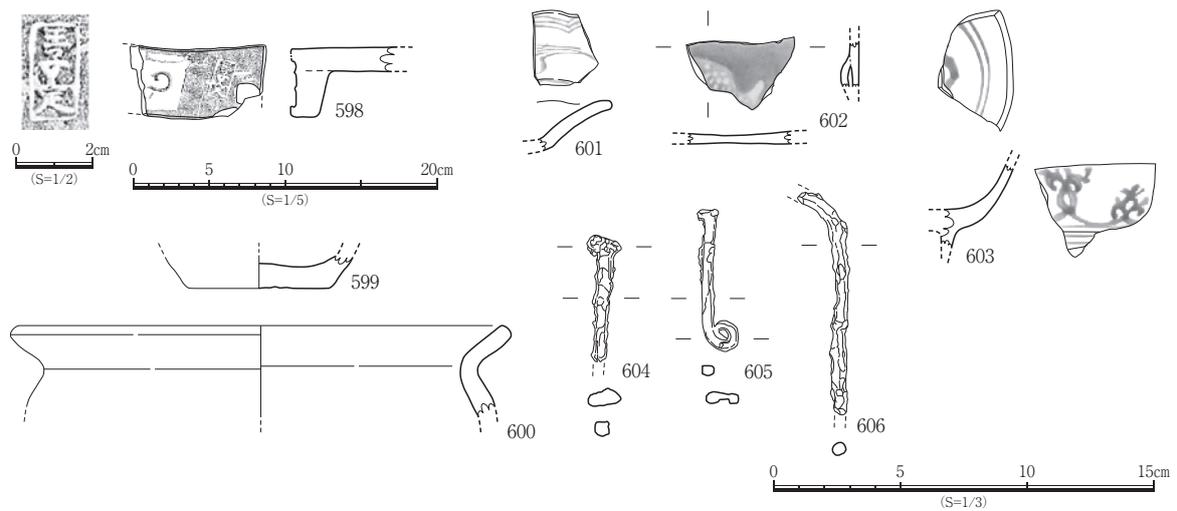


図188 C-3区東壁出土遺物実測図

599は土師質土器杯で、底部が厚く、体部は外上方へ立ち上がる。著しく摩耗するため調整は不明である。600は瓦質土器鍋で、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は丸く収める。調整は口縁部が横ナデ、頸部外面は強い横方向のナデで、その他は摩耗するため調整不明である。601は青磁稜花皿で、口縁部内面には陰刻による文様がみられる。全面に青磁釉を施す。602は青磁杯の底部とみられ、器壁が薄く、外面にはロクロ目が残り、内面には魚文を貼付する。全面に青味を帯びた青磁釉を施す。603は青花碗で、見込には二重圏線と染付の一部が残り、外面にはアラベスク風の染付がみられる。全面に透明釉を施す。604～606は鉄製品釘である。604は頂部がT字形を呈するものとみられ、身部の断面は方形を呈する。605は頂部がL字形で、先端は細く尖り、身部の断面は方形を呈する。606は大型で、頂部と先端を欠損する。

④ 4区

4区は曲輪2の造成土である斜面部と岩盤上の中世下面に伴う堆積層である。西部である4a区と4b区は南壁、北西部である4c区は東バンク、北東部である4d区は東バンクと東壁を基準とした。堆積層出土遺物の報告は基準とした土層図掲載順とし、出土した地区については遺物観察表に記している。

i 4区南壁基本層序(図189)

図189は南壁の3区から4区にかけての土層図である。南壁の堆積の厚さは、上部が約60～70cm、裾部が約1.2mと裾部が厚くみられ、角礫を多く含んでいた。第2～8層は近代から現代にかけての堆積層で、隣接するD区で湿地跡が確認されており、近代から現代にかけて湿地を埋めたものとみられ、土質は砂質シルトであった。4a区では竖堀2が検出されており、第10～13層は竖堀2の埋土上の堆積層、第17層は竖堀2に切られる堆積層である。第10層及び第17層では炭化物が集中している箇所がみられた。

ii 4区南壁堆積層出土遺物

4区南壁第1層(図190-607)

607は近世磁器碗で、見込に人物と圏線の染付、外面に圏線と染付の一部がみられる。内面から高台内の一部まで光沢のある透明釉を施す。高台内の一部は無釉で、畳付には朶の様な植物とみら

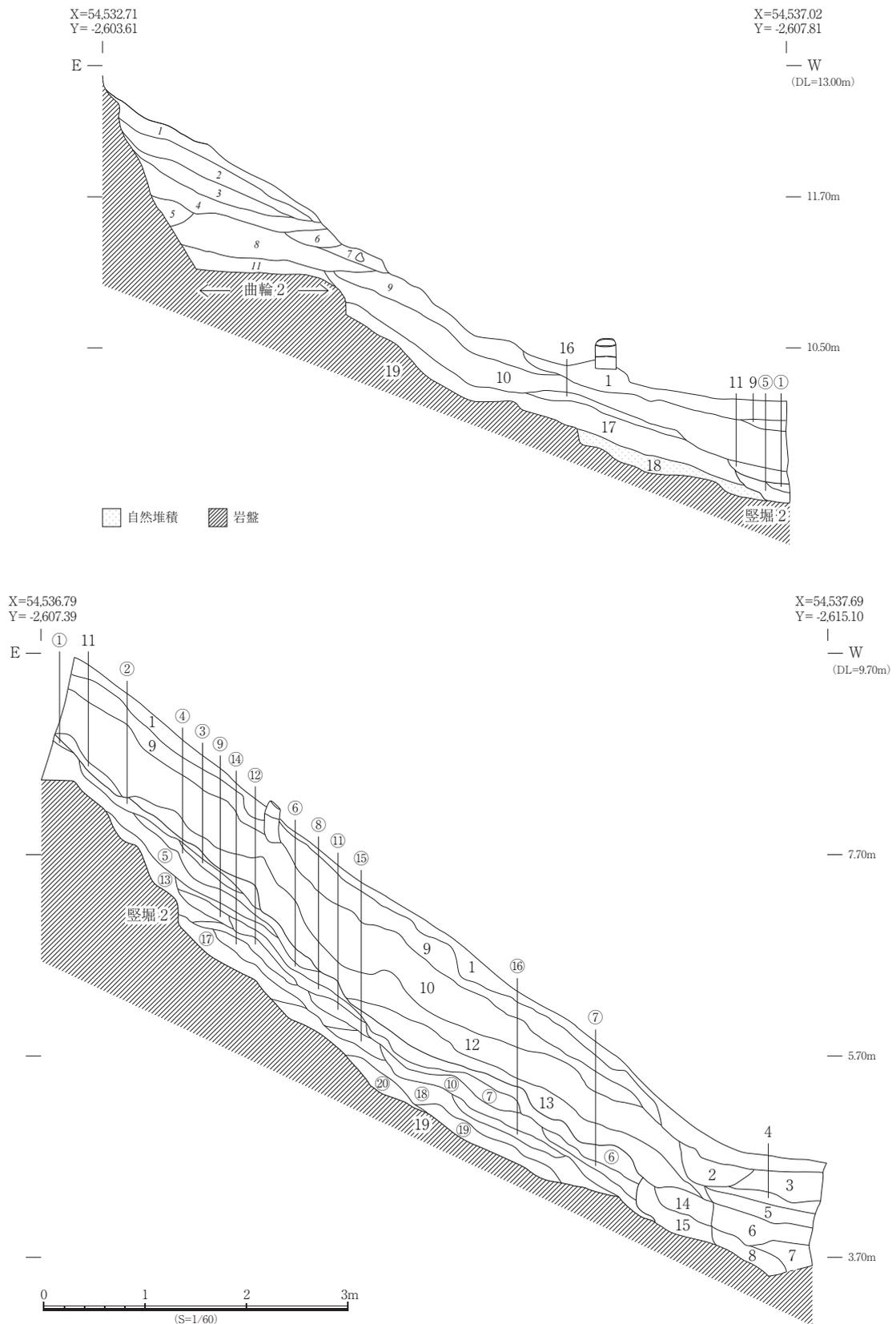


図189 C-3・4区南壁セクション図

1. C区

C-3・4区南壁層位

- 第1層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を含む
第2層 暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルト層で、5cm大の礫を少し含む(近代~現代)
第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト層(近代~現代)
第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂層(近代~現代)
第5層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルト層(近代~現代)
第6層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト層で、酸化鉄を含む(近代~現代)
第7層 黄灰色(2.5Y5/1)粗粒砂質シルト層(近代~現代)
第8層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト層で、中粒砂を少し含む、酸化鉄を含む(近代~現代)
第9層 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で、5cm大の礫を少し含む
第10層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、3~5cm大の礫を多く含む(図180第10層に同じ)
第11層 褐色(10YR4/6)粗粒砂質シルト層で、5cm大の礫を少し含む
第12層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、5~10cm大の礫を非常に多く含む
第13層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)礫質極粗粒砂層で、3~10cm大の角礫を非常に多く含む
第14層 灰黄色(2.5Y7/2)粗粒砂質シルト層で、3~5cm大の礫を含む
第15層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト層で、中粒砂を少し含む、酸化鉄を含む(近代~現代)
第16層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、1cm大の礫を含む
第17層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、0.5cm大の黄色礫を多く含む、炭化物を含む(図180第12層に同じ)
第18層 黄褐色(10YR5/6)礫質極粗粒砂層で、岩盤が風化した礫とみられる5~10cm大の礫を多く含む(自然堆積層)
第19層 黄灰色(2.5Y6/1)極粗粒砂質シルト層で、5~10cm大の礫を非常に多く含む、酸化鉄を含む(岩盤:自然堆積層)

遺構埋土(竪堀2)

- ① 暗褐色(10YR3/4)極粗粒砂質シルトで、3cm大の礫を含む、炭化物を多く含む
② オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質粗粒砂で、1~5cm大の礫を少し含む
③ 褐色(10Y4/6)シルト質極粗粒砂で、0.5cm大の礫を多く含む
④ 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で、0.5~1cm大の礫を多く含む、黄色礫を含む
⑤ 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を多く含む
⑥ 褐色(10YR4/6)粗粒砂質シルトで、5~10cm大の礫を少し含む
⑦ オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含む、10cm大の礫を少し含む
⑧ 黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒砂で、5~10cm大の礫と炭化物を含む
⑨ 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で、3~5cm大の礫を少し含む
⑩ 暗褐色(10YR3/4)粗粒砂質シルトで、3~5cm大の礫を多く含む、炭化物を含む
⑪ オリーブ褐色(2.5Y4/6)礫質極粗粒砂で、3~5cm大の礫を非常に多く含む
⑫ にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫と炭化物を含む
⑬ 褐色(10YR4/4)極粗粒砂質シルトで、3~5cm大の礫を非常に多く含む
⑭ オリーブ褐色(2.5Y4/4)極粗粒砂質シルトで、1~3cm大の礫を非常に多く含む
⑮ オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質粗粒砂で、1~3cm大の礫と黄色礫を含む
⑯ オリーブ褐色(2.5Y4/6)礫質極粗粒砂で、0.5~1cm大の礫を非常に多く含む
⑰ オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルトで、1cm大の礫を多く含む
⑱ オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルトで、3~5cm大の礫を非常に多く含む
⑲ オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで、1~3cm大の礫と黄色礫を含む
⑳ オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極粗粒砂で、1~3cm大の礫を非常に多く含む、炭化物を含む

註:斜体の層位は、C-3区南壁セクション図(図180)に同じ

れるものが付着する。

4区南壁第8層(図190-608~611)

608は土師器釜で、口縁は内湾し、外面には断面方形を呈する小さな鏝が付く。著しく摩耗するため、調整は不明である。609は備前焼播鉢で、口縁端部を上下に僅かに摘む。全面に回転ナデ調整を施し、外面の一部にナデ調整を加え、内面には6条単位の播目がみられる。610・611は近世磁器碗である。610は口縁部が残存し、内面に帯線と圏線、外面には窓に草花文の染付がみられる。全面に透明釉を施す。611は能茶山窯の広東碗で、見込に宝文、内面に圏線、外面に格子文と木葉文とみられる染付、高台に圏線、高台内には方形枠に「茶」銘がみられる。全面に透明感のない透明釉を施し、暈付は釉ハギを行う。

4区南壁第10層(図190・191-612~637)

612は土師質土器杯で、体部は開かず比較的上方に立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。613は土師器釜で、断面が三角形を呈する小さな鏝が付く。内面はナデ調整、外面は横方向のナデ調整を施す。614・615は瓦質土器鍋で、頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は外上方に短く伸びる。口縁部は横ナデ調整、外面はナデ調整で、頸部には指頭圧痕が顕著に残る。614の内面は摩耗するため、調整は不明である。615は胴部内面の一部にヘラナデ調整を加え、底部外面は煤が付着し、調整は不明である。616は瓦質土器釜で、外面には水平方向に伸びる鏝を貼付する。内面は横方向のハケ調整、外面は横方向のナデ調整を施す。617は常滑焼甕で、一部が欠損する。小型で、頸部は直立し、口縁縁帯部幅は2.3cmを測る。内面の調整は横方向のナデで、一部にヘラナデを加え、指頭圧痕と接合痕が残る。外面の調整は口縁部が横ナデ、肩部が横方向のナデ、胴部は縦方向のナデで指頭圧痕が残り、底部外面は無調整である。肩部外面には「×」のヘラ記号がみられる。頸部内面には自然釉が掛かり、外面は須恵器の様な色調を呈する。618は端反形の

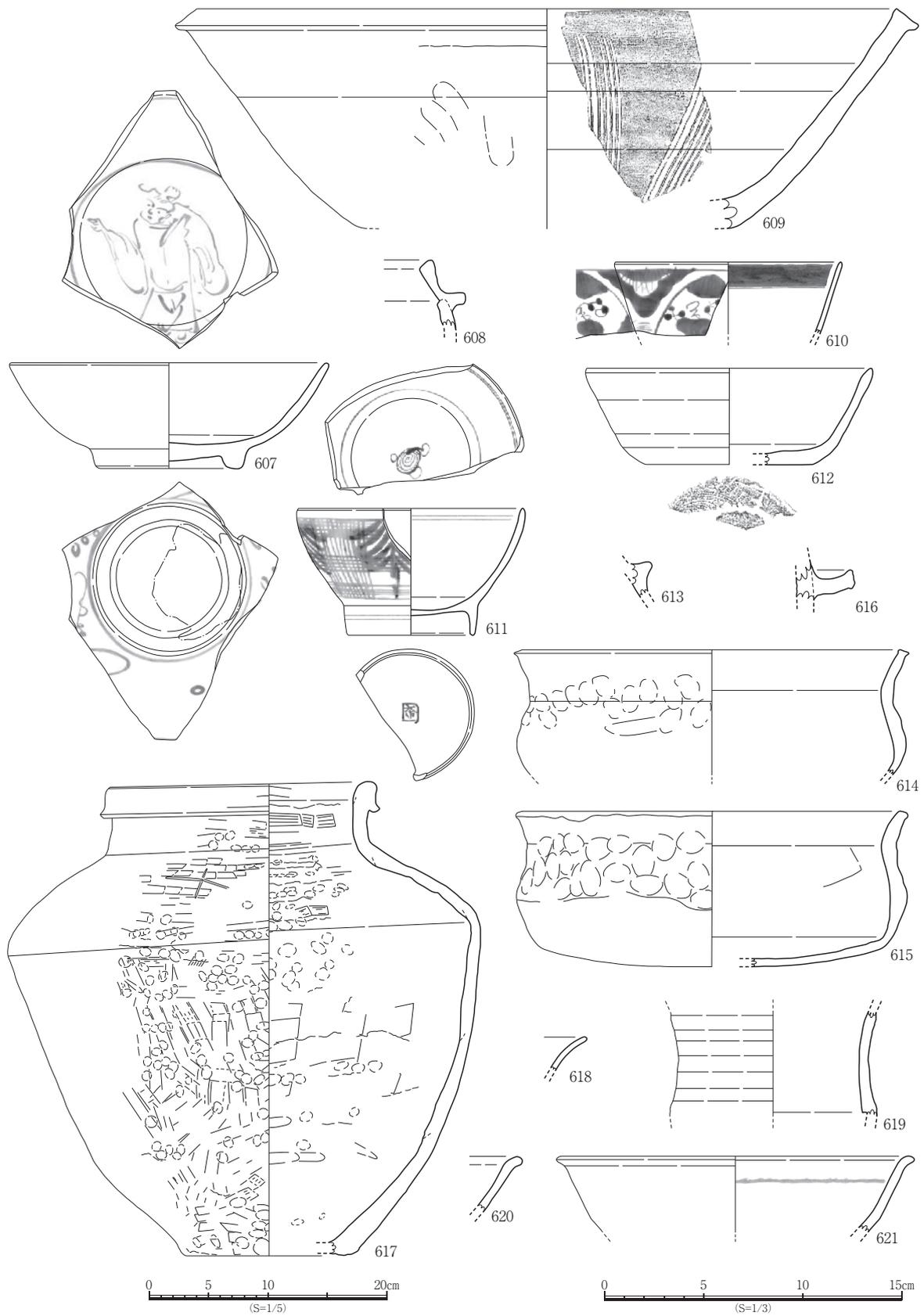


図190 C-4区南壁第1・8・10層出土遺物実測図

1. C区

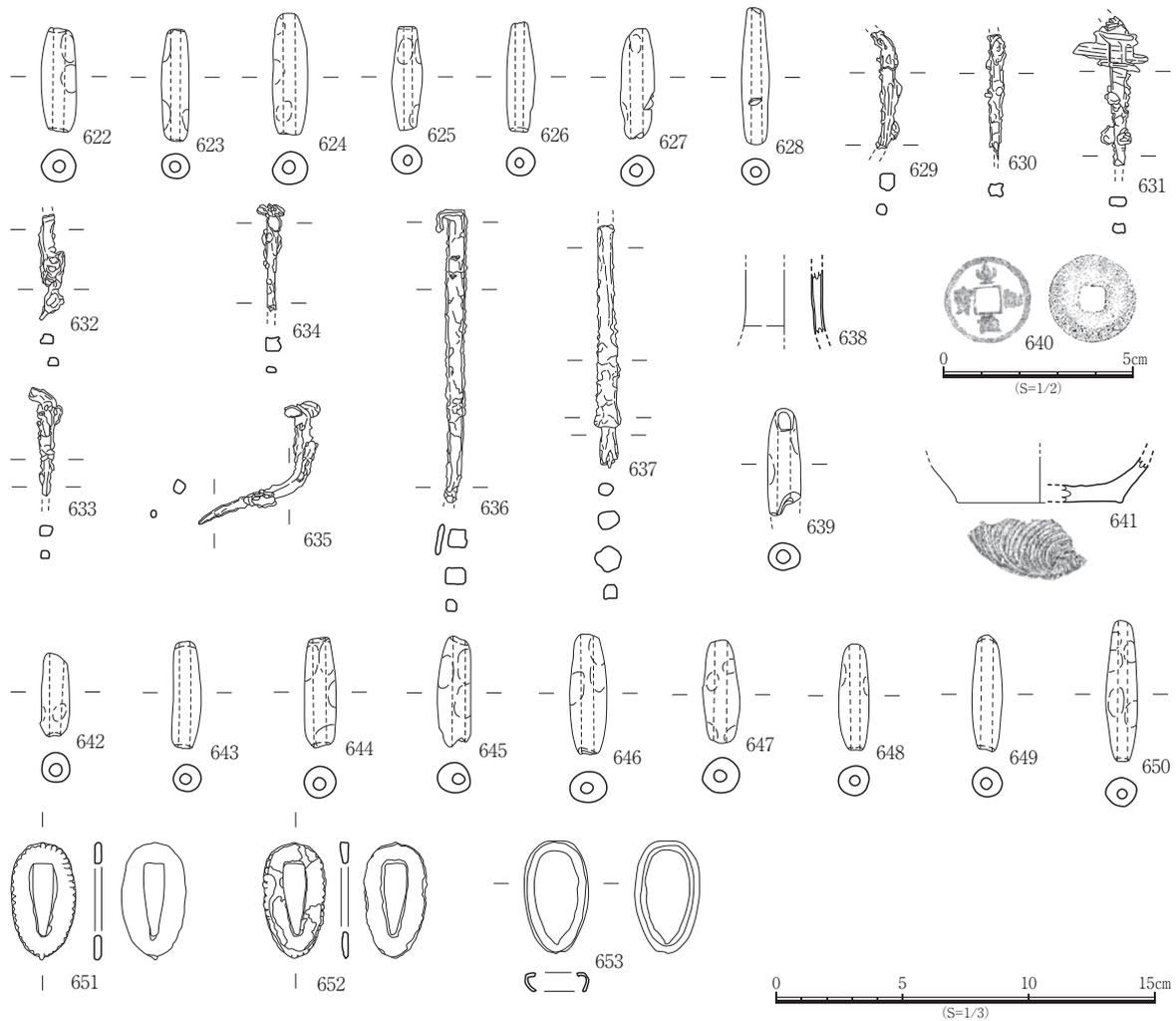


図191 C-4区南壁第10・12・17層出土遺物実測図

白磁皿で、全面に白磁釉を施す。釉には貫入が入る。619は白磁壺の頸部とみられる。外面には口ク口目が残り、全面に白磁釉を施す。620・621は青磁碗で、口縁端部は僅かに外反する。620は無文で、全面に青磁釉を施す。焼成不良で胎土と釉は透明感がない。621は口縁部内面に陰刻による圏線がみられ、全面に暗灰黄色の青磁釉を施す。焼成不良で、胎土はにぶい橙色を呈する。622～628は土製品土錘で、622～624は円柱形、625～628は紡錘形を呈する。全面にナデ調整を施す。624はナデ調整とみられるが、摩耗するため調整は不明である。624と628には黒斑がみられる。629～636は鉄製品釘で、身部の断面は方形を呈する。629～631は両端を欠損する。629は頂部がL字形を呈する。631は木材が付着する。632は頂部を欠損し、先端は細く尖る。633・634は先端を欠損し、頂部はL字形を呈する。635はほぼ完存し、頂部はL字形、先端は細く尖る。身部は屈曲し捻れ、頂部には他の釘の一部が癒着する。636は大型の釘とみられ、残存長13.0cmを測る。頂部はL字形を呈し、幅が広く薄い。先端は欠損する。637は棒状の鉄製品で鍍とみられ、上端を欠損する。上部は三角形を呈し、径が太い箇所は断面が円形を呈する。上端と下端は断面が方形で、上端は厚さ0.1cmを測る。

4区南壁第12層(図191-638～640)

638は青磁で、筒形を呈し、水注の一部とみられる。全面に青緑色の青磁釉を厚く施す。639は土製品土錘で、紡錘形を呈する。ナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため調整は不明である。640は銅製品銭貨で、至和元寶である。篆書で、初鑄造年は1054年である。両面とも著しく摩耗する。

4区南壁第17層(図191-641~653)

641は土師質土器杯で、器壁が薄く、体部は内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。642~650は土製品土錘で、642~646は円柱形、647~650は紡錘形を呈し、全面にナデ調整を施す。642は短く、一端が斜めに切れる。643・646・650には黒斑がみられる。651・652は銅製品切羽で、楕円形の銅板に菊花形の銅板を接着し、中央には二等辺三角形の孔がみられる。653は銅製品鯉口金具で、楕円形を呈し、断面は「コ」の字形である。全長4.5cm、全幅2.6cm、全高0.8cmを測る。

iii 4区東バンク基本層序(図192)

東バンクは曲輪2に伴う造成土が厚く堆積していた。第1~5層が腐植を多く含む表土及び現代から近世の堆積層で、厚さ約20~50cmを測る薄い堆積がみられた。第6~65層は曲輪2に伴う造成土で、斜面上部である南から北へ堆積していた。造成土は角礫を多く含み、丘陵上部の曲輪あるいは切岸を造成した際の廃土を利用し、曲輪を造成したものとみられる。第66層以下は自然堆積層で、土質は概ね細粒砂質シルトであった。

iv 4区東バンク堆積層出土遺物

4区東バンク第1層(図193-654~656)

654・655は常滑焼甕である。654は肩部が残存し、内面はナデ調整で指頭圧痕が残り、外面上部がヘラナデ調整で押印文がみられ、自然釉が掛かり、下部は横方向のナデ調整である。655は頸部がやや内傾し、口縁縁部幅は3.1cmを測る。調整は内面から口縁部外面が横方向のナデ調整、頸部外面がナデ調整、胴部外面には自然釉が掛かり調整は不明である。656は白磁皿で、断面が三角形を呈する小さな高台が付く。高台を除き白磁釉を施す。

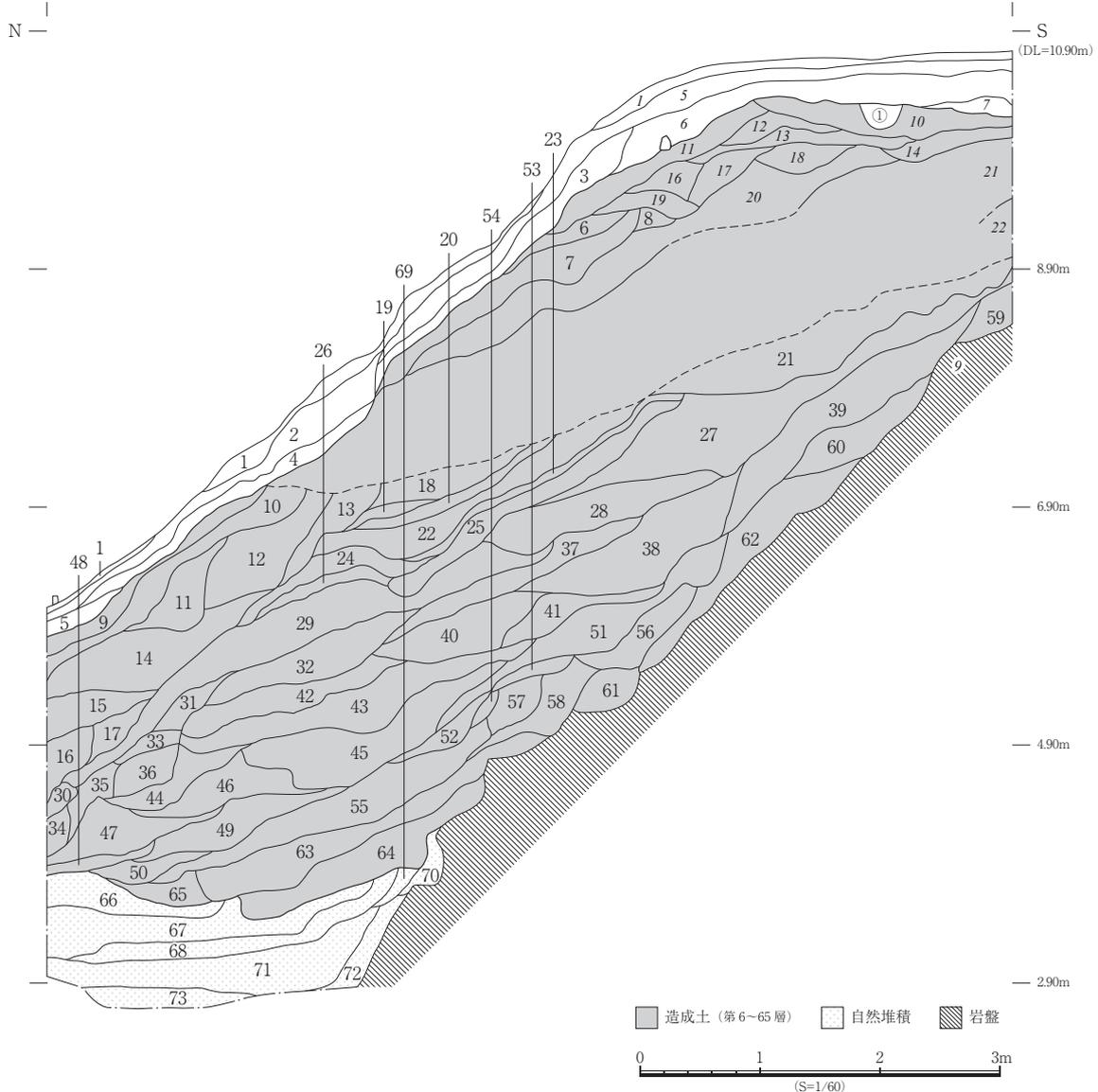
4区東バンク第2層(図193・194-657~671)

657は土師質土器椀で、底部には断面が半円形を呈する輪高台を貼付する。著しく摩耗するため調整は不明である。658は古瀬戸壺とみられ、肩部が残存する。内面は強い横方向のナデ調整、外面は櫛描文がみられ、灰釉が掛かる。659は古瀬戸瓶子とみられ、胴部が残存する。調整は横方向のナデで、外面には灰釉が流れる。660は備前焼播鉢で、口縁端部は肥厚し上方に僅かに摘む。調整は回転ナデで、内面には播目は残存していない。661は備前焼壺で、口縁部は僅かに外傾し玉縁をなす。調整は回転ナデで、頸部内面にナデを加える。肩部外面にはヘラ描の沈線が上から3条、2条、1条と3段巡る。口縁部内面と肩部外面には胡麻がみられる。662~664は常滑焼甕である。662は小型で、口縁端部は上下に拡張してN字状を呈し、口縁縁部幅は1.8cmを測る。内面の調整は横方向のナデで、口縁部内面から外面は自然釉が掛かり、調整は不明である。663は口縁部がN字状を呈する。調整は回転ナデで、口縁部には横ナデを加える。口縁部内面には自然釉が掛かる。664は大型で、肩部が残存する。内面の調整は指頭圧の後、横方向の強いナデ及び斜方向のナデ、外面は斜方向のナデで、肩上部には格子状の押印文がみられ、自然釉が掛かる。665・666は白磁壺である。665は口縁部が屈曲し、端部を下方へ摘む。全面に白磁釉を施す。709と同一個体の可能性がある。666は肩部で、耳を貼付する。内面にはロクロ目が残り、全面に白磁釉を施す。667は青

1. C区

X=54,550.99
Y=-2,582.87

X=54,543.35
Y=-2,585.41



層位

- 第1層 暗黄褐色 (10YR3/4) シルト質粗粒砂層で、腐植と3~5cm大の礫を含む
- 第2層 暗褐色 (10YR3/4) 中粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む
- 第3層 褐色 (10YR4/6) シルト質中粒砂層で、0.5~1cm大の礫と黄色礫を含む
- 第4層 褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を少し含む
- 第5層 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を含む
- 第6層 褐色 (10YR4/4) シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を少し含む
- 第7層 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を含む
- 第8層 褐色 (10YR4/4) シルト質中粒砂層で、1~3cm大の礫を多く含む
- 第9層 褐色 (10YR4/4) 細粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を含む (造成土4)
- 第10層 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 粗粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を多く含む
- 第11層 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂質シルト層で、3~10cm大の礫を多く含む
- 第12層 褐色 (10YR4/6) 粗粒砂質シルト層で、3~5cm大の礫を非常に多く含む、10~15cm大の礫を含む
- 第13層 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト質粗粒砂層で、1~2cm大の礫と極粗粒砂を非常に多く含む
- 第14層 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極粗粒砂質シルト層で、1~5cm大の礫を非常に多く含む

- 第15層 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 極粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫を非常に多く含む
- 第16層 褐色 (10YR4/4) シルト質粗粒砂層で、1~5cm大の礫と極粗粒砂を非常に多く含む、炭化物を少し含む (図199第20層に同じ)
- 第17層 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む
- 第18層 褐色 (10YR4/4) 礫質粗粒砂層で、1~2cm大の礫を非常に多く含む
- 第19層 黄褐色 (2.5Y5/3) 中粒砂質シルト層で、3cm大の礫を少し含む
- 第20層 黒褐色 (10YR3/2) 粗粒砂質シルト層で、1~5cm大の礫を多く含む
- 第21層 黄褐色 (10YR5/6) 極粗粒砂質礫層で、3~5cm大の礫を非常に多く含む
- 第22層 明黄褐色 (10YR6/6) 極粗粒砂質礫層で、1~2cm大の礫を非常に多く含む
- 第23層 暗褐色 (10YR3/3) 礫質極粗粒砂層で、1~5cm大の礫を多く含む
- 第24層 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を少し含む
- 第25層 褐色 (10YR4/6) 極粗粒砂質礫層で、1~10cm大の礫を非常に多く含む
- 第26層 褐色 (10YR4/4) 細粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を多く含む
- 第27層 褐色 (10YR4/4) 極粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫を非常に多く含む、10cm大の礫を含む
- 第28層 暗褐色 (10YR3/4) 極粗粒砂質礫層で、1~10cm大の礫が堆積する

図192 C-4区東バンクセクション図

C-4区東バンク層位

- 第29層 オリーブ褐色(25Y4/6)細粒砂質シルト層で、3cm大の礫を僅かに含む
- 第30層 オリーブ褐色(25Y4/6)中粒砂質シルト層で、炭化物を僅かに含む(図199第21層に同じ)
- 第31層 オリーブ褐色(25Y4/6)極粗粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む、河原石を含む
- 第32層 オリーブ褐色(25Y4/6)細粒砂質シルト層で、3~5cm大の礫と粗粒砂を含む
- 第33層 オリーブ褐色(25Y4/6)細粒砂質シルト層で、0.5cm大の礫を少し含む
- 第34層 褐色(10YR4/6)粘土質シルト層で、中粒砂を含む(図199第22層に同じ)
- 第35層 黄褐色(25Y5/3)粗粒砂質シルト層で、5cm大の礫を多く含む
- 第36層 黄褐色(25Y5/3)細粒砂質シルト層で、1cm大の礫を少し含む
- 第37層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む、10~15cm大の礫を少し含む
- 第38層 褐色(10YR4/6)中粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む、10cm大の礫を少し含む
- 第39層 褐色(10YR4/6)シルト質中粒砂層で、1cm大の礫を多く含む、10~15cm大の礫を含む
- 第40層 オリーブ褐色(25Y4/6)極粗粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む、河原石を含む
- 第41層 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、3cm大の黄色礫と10cm大の礫を含む、粘性は弱い
- 第42層 オリーブ褐色(25Y4/6)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の黄色礫を含む
- 第43層 オリーブ褐色(25Y4/6)細粒砂質シルト層で、1~3cm大の黄色礫を含む
- 第44層 黄褐色(25Y5/3)細粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を少し含む
- 第45層 にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルト層で、1~3cm大の黄色礫を多く含む、炭化物を含む
- 第46層 オリーブ褐色(25Y4/6)細粒砂質シルト層で、5~10cm大の礫を含む
- 第47層 オリーブ褐色(25Y4/6)細粒砂質シルト層で、5cm大の礫を含む
- 第48層 オリーブ褐色(25Y4/4)粗粒砂質シルト層で、5cm大の礫を含む
- 第49層 黄褐色(25Y5/3)粘土質シルト層で、5cm大の礫を含む
- 第50層 オリーブ褐色(25Y4/6)粘土質シルト層
- 第51層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む、粘性は弱い
- 第52層 オリーブ褐色(25Y4/6)粗粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を含む

- 第53層 オリーブ褐色(25Y4/6)中粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を多く含む、炭化物を少し含む
- 第54層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1cm大の礫を多く含む、炭化物を少し含む
- 第55層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を多く含む、5cm大の礫を含む
- 第56層 にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を非常に多く含む
- 第57層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む
- 第58層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1~2cm大の黄色礫を非常に多く含む
- 第59層 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルト層で、3~5cm大の礫を非常に多く含む
- 第60層 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粗粒砂層で、1cm大の礫を多く含む、5cm大の礫を少し含む
- 第61層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、1cm大の礫を多く含む
- 第62層 黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒砂層で、5~15cm大の礫を非常に多く含む
- 第63層 オリーブ褐色(25Y4/6)粘土質シルト層で、1cm大の黄色礫と粗粒砂を含む
- 第64層 オリーブ褐色(25Y4/6)中粒砂質シルト層で、2cm大の黄色礫を含む
- 第65層 オリーブ褐色(25Y4/6)粗粒砂質シルト層で、2cm大の黄色礫を含む
- 第66層 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で、炭化物を少し含む(自然堆積層:図199第23層に同じ)
- 第67層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層(自然堆積層)
- 第68層 オリーブ褐色(25Y4/6)シルト質中粒砂層(自然堆積層)
- 第69層 オリーブ褐色(25Y4/6)細粒砂質シルト層(自然堆積層)
- 第70層 オリーブ褐色(25Y4/6)中粒砂質シルト層(自然堆積層)
- 第71層 褐色(10YR4/4)粘土質シルト層で、細粒砂を含む(自然堆積層)
- 第72層 オリーブ褐色(25Y4/6)細粒砂質シルト層(自然堆積層)
- 第73層 黄褐色(25Y5/3)細粒砂質シルト層(自然堆積層)

註: 斜体の層位と①は、C-3区東バンクセクション図(図185)に同じ

磁碗で、口縁部外面には帯状の圈線が巡る。全面に灰オリーブ色の青磁釉を施す。668・669は青花碗である。668は口縁部が外上方にまっすぐ伸び、内外面に染付がみられる。全面に透明釉を施す。669は連子碗で、器高が低く、断面が三角形を呈する小さな高台が付く。見込には二重圈線内に三葉状の斑点文、内面には圈線が2条、外面には圈線と三葉状の斑点文の染付、高台外面には圈線が3条みられる。畳付を除き透明釉を施し、内外面に虫喰がみられる。670は棧瓦で、側面に「山口」の刻印の一部がみられる。凹凸面にはキラ粉が付着する。671は鉄製品釘で、先端を欠損する。大型で、頂部はL字形を呈し、身部の断面は矩形を呈する。

4区東バンク第3層(図195-672)

672は白磁碗で、口縁端部は外へ短く摘む。口縁部内面には沈線が1条みられ、全面に白磁釉を施す。

4区東バンク第4層(図195-673~678)

673は近世の土師器火鉢で、浅鉢形を呈し、口縁部は肥厚する。胴部は型成形で、内面はナデ調整、外面には型押による波文がみられる。底部はナデ調整で円柱形の脚を3箇所貼付する。口縁部内面には煤が付着する。674は瓦器碗で、底部には扁平な高台を貼付する。内面はナデ調整の後ミガキ調整で、見込には格子状暗文がみられる。外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。畿内産である。675は常滑焼甕で、頸部は大きく内傾し、口縁縁部幅は4.5cmを測る。調整は横方向のナデで、口縁部内面と頸部外面には自然釉が掛かる。676は白磁皿で、端反形である。全面に白磁釉を施す。

1. C区

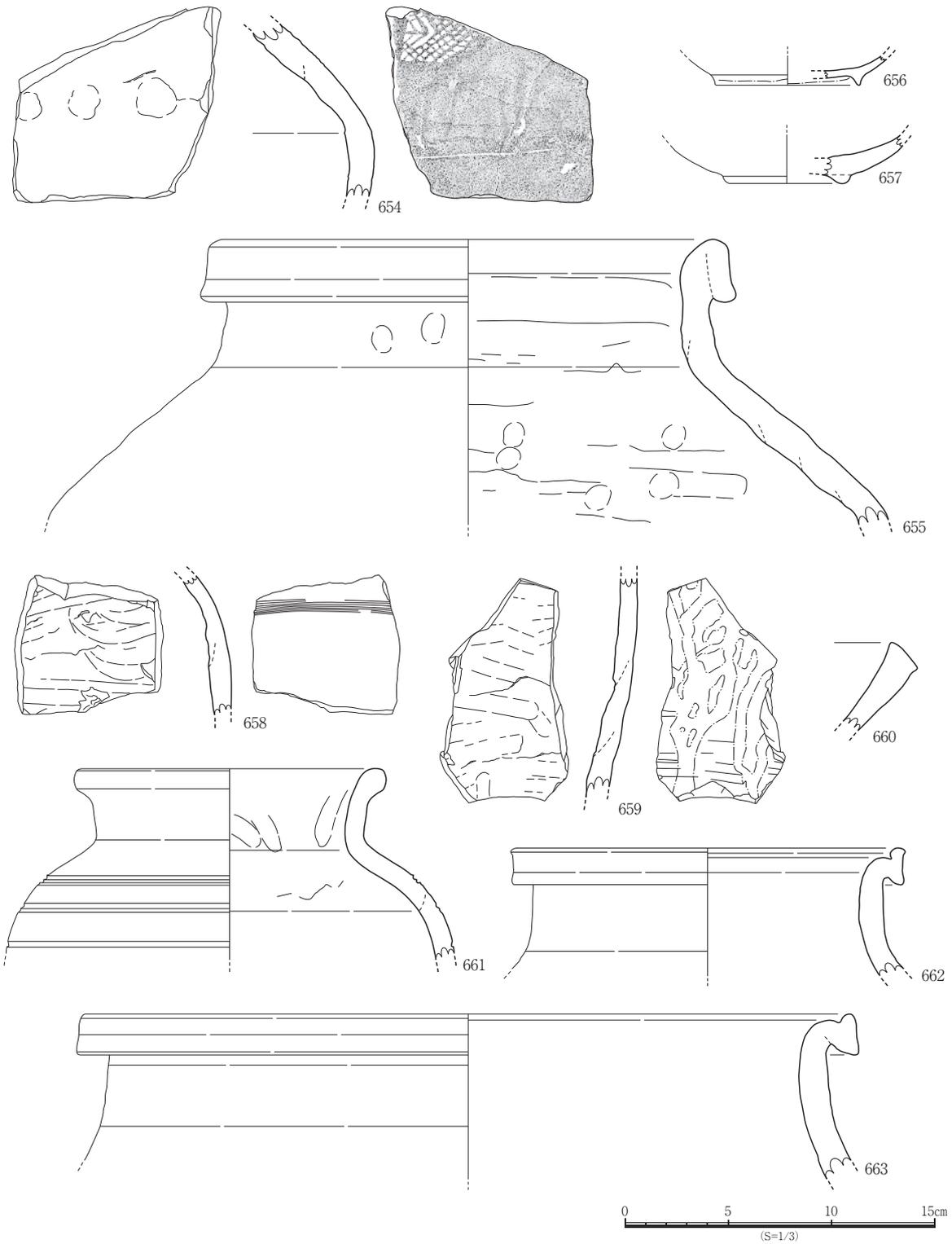


図193 C-4区東バンク第1・2層出土遺物実測図

677は鉄製品鏃とみられ、両端は欠損する。上部は三角形を呈し、断面は円形、茎部は断面が方形を呈する。678は銅製品銭貨で、著しく摩耗するため銭種は不明瞭だが、元豊通寶の可能性がある。元豊通寶の初鑄造年は1078年である。

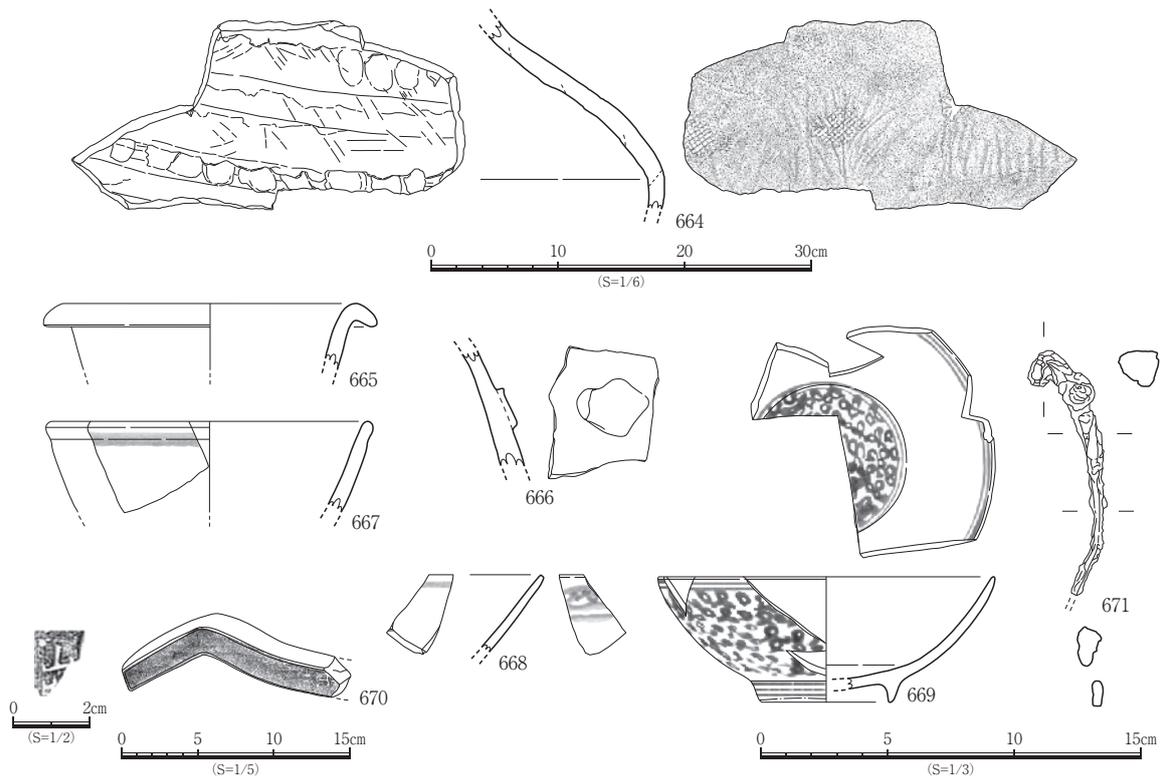


図194 C-4区東バンク第2層出土遺物実測図

4区東バンク第5層(図195-679・680)

679は備前焼壺で、口縁部は直立し、端部を外へ摘む。全面に回転ナデ調整を施す。外面に櫛描の波状文の一部が残る。680は常滑焼甕で、頸部が残存する。頸部は「く」の字状に屈曲し、外反して立ち上がる。内面の調整は横方向のナデで、外面は自然釉が掛かるため調整は不明である。

4区東バンク第64層(図195-681)

第64層は造成土の最下層で、681の弥生土器壺が出土した。底径4.7cmを測り、胴部は底部より大きく開いて立ち上がる。著しく摩耗するため調整は不明である。

造成土からは図示した遺物の他に、第25層より土師質土器杯、第36層より瓦器椀、第39層より土師質土器杯などが出土したが、図示できるものはなかった。

v 4区東壁基本層序(図187)

第1・2層は近現代、第3・4層は近世の堆積層であり、3区東壁基本層序(図187)で記した。第5層以下は中世上面の曲輪構築に伴う造成土で、4区で報告する。第6・8層は曲輪2の遺構面で、土質は砂質シルトでやや粘性がある。第7層以下は角礫を多く含み、第18・29層は炭化物を含んでおり暗褐色を呈する。第22・32層は有機物を多く含んでいたものとみられ、黒褐色を呈する。造成土の堆積が非常に厚く、また礫を多く含むため脆く、調査区壁面が崩壊する危険性が高いため、造成土下面までは確認できなかった。

vi 4区東壁堆積層出土遺物

4区東壁第5～20層(図196-682～693)

682～684は土師質土器杯で、回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。682は底部の器壁が厚く、体部は外上方にまっすぐ立ち上がる。683・684は体部が内湾して立ち上がり、

1. C区

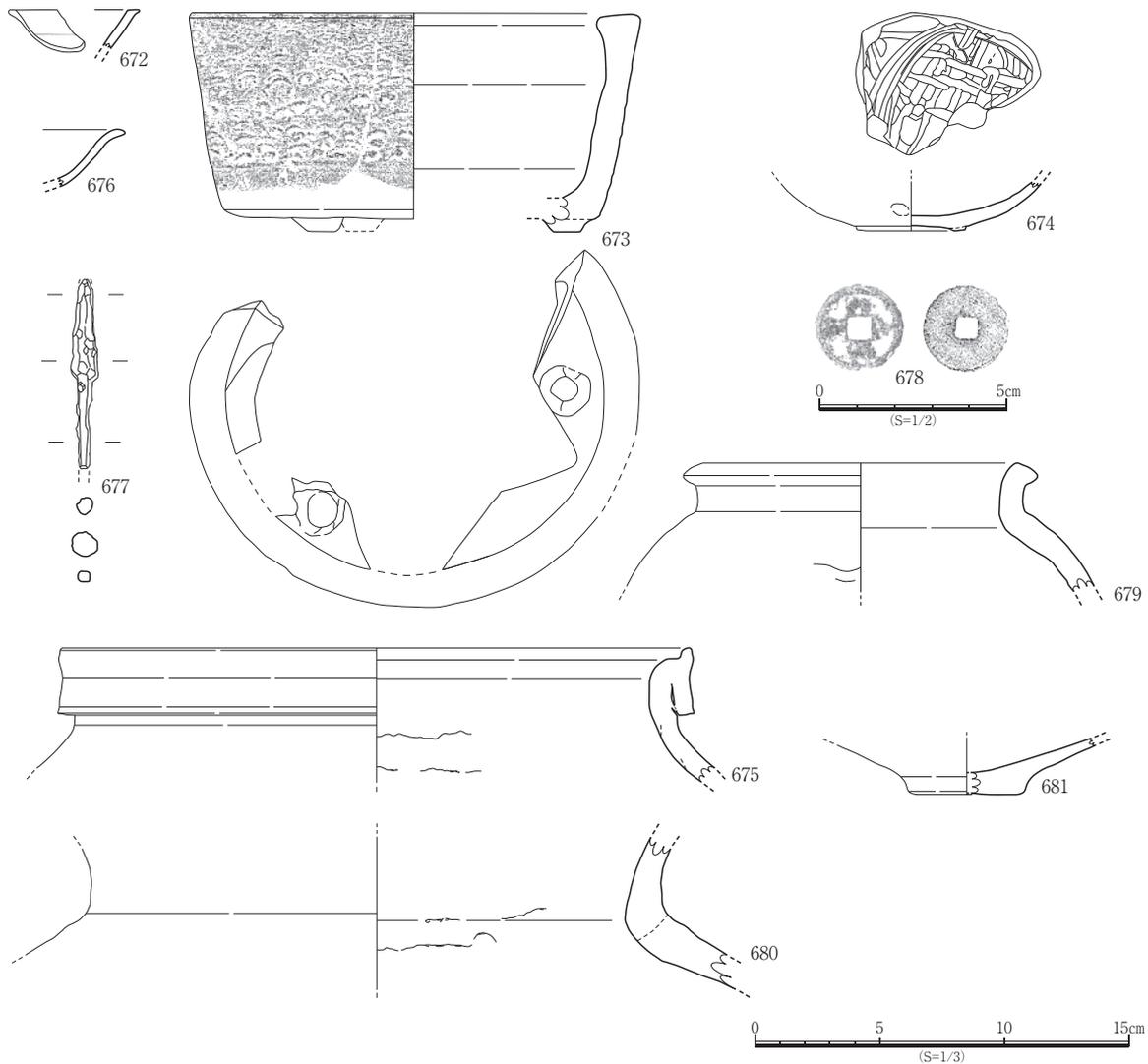


図195 C-4区東バンク第3～5・64層出土遺物実測図

内面にはロクロ目が顕著に残る。685は東播系須恵器片口鉢で、底部が残存する。外面の調整は回転ナデの後ナデとみられるが、摩耗するため調整は不明瞭で、内面は調整不明である。686は備前焼壺で、口縁部は外反し玉縁をなす。内面は回転ナデ調整を施し、外面は自然釉が掛かり器面が荒れるため調整は不明で、肩部には櫛描の波状文がみられる。687は常滑焼甕で、胴部は湾曲しながら外上方へ立ち上がる。内面の調整は横方向のヘラナデ及びナデ調整とみられるが、自然釉が掛かり、粘土塊が付着するため調整は不明瞭である。外面は縦方向のヘラナデ調整で一部に自然釉が流れる。688は白磁壺で、胴部の一部が残存する。全面に白磁釉を施し、内面は薄く掛かりロクロ目が残る。689は青白磁合子である。型成形で、底部には小さな高台が付く。内面はナデ調整で無釉、外面は型押による蓮弁文がみられ、青味を帯びた釉を施す。高台は無釉である。717と同一個体の可能性もある。690は鉄製品小札で、一部を欠損する。大型で、径0.3cmの円孔が2列並び、左列が4個、右列が5個の円孔が残存する。左列と右列間は1.2～1.3cm、縦列間は0.8～1.0cmを測る。691は鉄製品鏃で、身部は扁平で菱形を呈するものとみられ、茎部は断面が方形を呈する。692・693は銅製品である。692は環状で、中央に0.7cmの円孔がみられる。厚さ0.3cmを測り、縁は薄くなる。

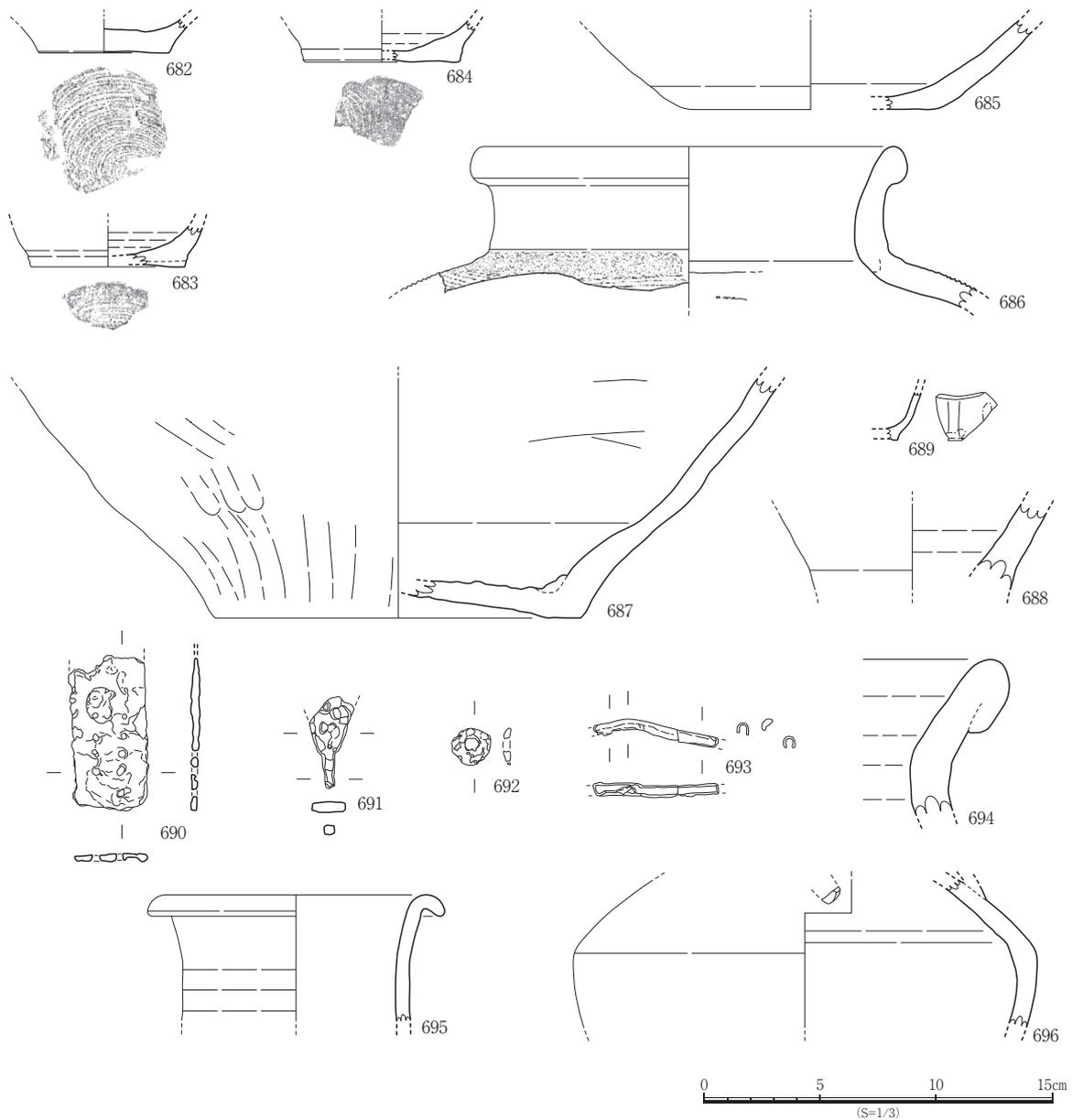


図196 C-4区東壁第5～20層出土遺物実測図

693は半筒形を呈し、薄く、断面は半円形を呈する。487・494と同様の形状である。

4区東壁第16層(図196-694～696)

694は備前焼甕で、口縁部は外傾し、端部は断面が楕円形の玉縁を呈する。頸部内面は横方向のナデ調整、口縁部は回転ナデ調整、頸部外面は自然釉が掛かるため調整は不明である。695・696は白磁壺である。695は頸部が直立し、口縁は頸部より屈曲して下方へ伸びる。全面に白磁釉を施す。696は四耳壺の肩部で、耳の一部が残存する。肩部は屈曲して立ち上がり、肩上部に耳を貼付する。全面に白磁釉を施す。

4区東壁第21層(図197-697)

697は備前焼播鉢で、口縁部は肥厚して四角く収め、端部を上方へ僅かに摘む。全面に回転ナデ調整を施す。内面には播目は残存しない。

1. C区

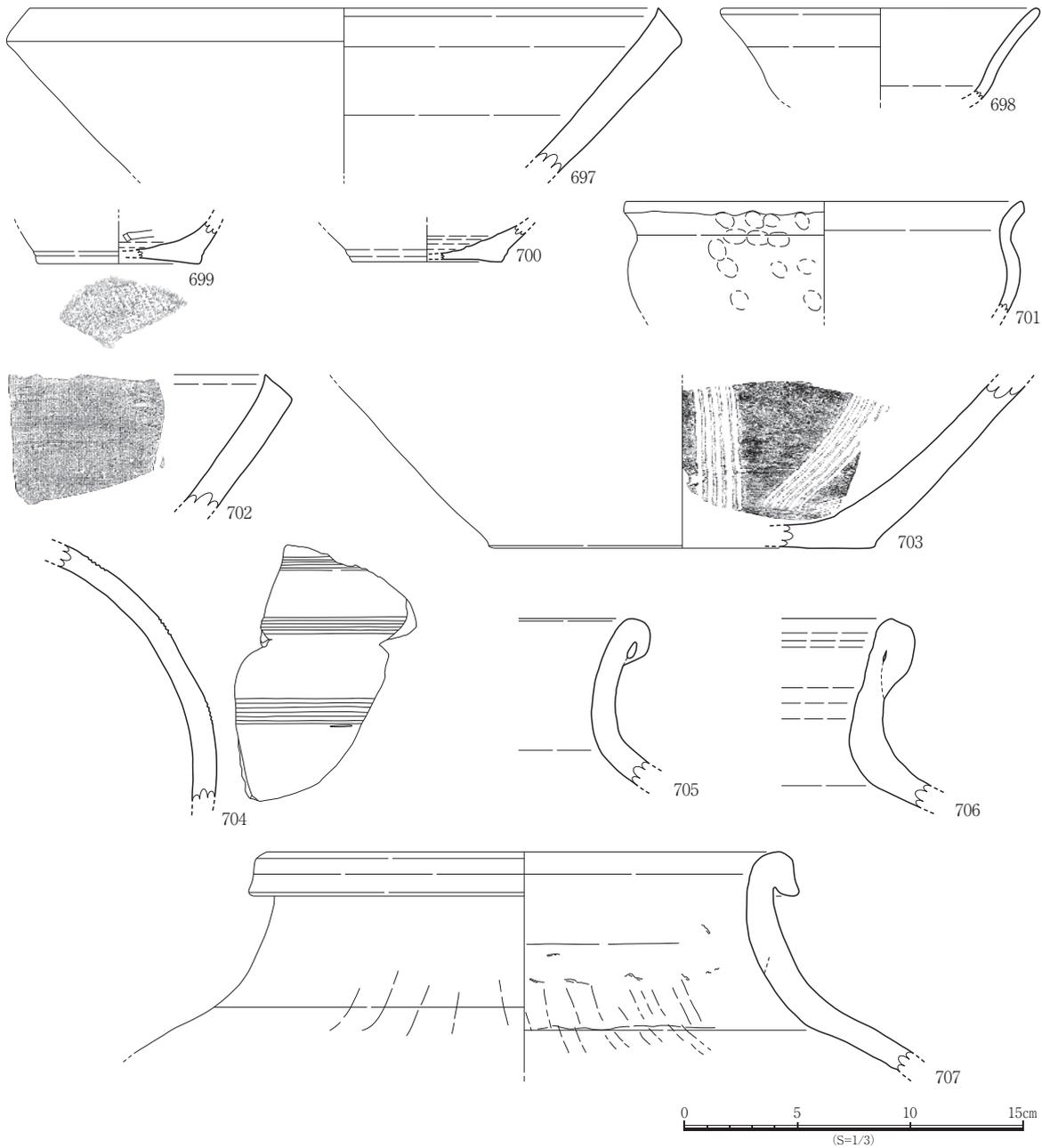


図197 C-4区東壁第21・22層出土遺物実測図

4区東壁第22層(図197・198-698~714)

698~700は土師質土器杯で、内面から体部外面は回転ナデ調整である。698は口縁部から体部が残存する。体部は外反して立ち上がり、口縁部はまっすぐ外上方へ伸びる。699は回転ナデ調整の後、内面の一部にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。700は底部の切り離しが回転糸切りとみられるが、摩耗するため不明で、板状圧痕とみられる凹みが僅かに残る。701は瓦質土器鍋で、口縁部は外傾する。口縁部は横ナデ調整、胴部外面はナデ調整で、指頭圧痕が残り、煤が付着する。内面はナデ調整とみられるが、摩耗するため調整は不明である。702・703は備前焼播鉢である。702は口縁部が残存し、端部は肥厚して四角く収め、上方へ僅かに摘む。全面に回転ナデ調整を施し、内面には播目が僅かに残る。703は底部が残存し、内面と体

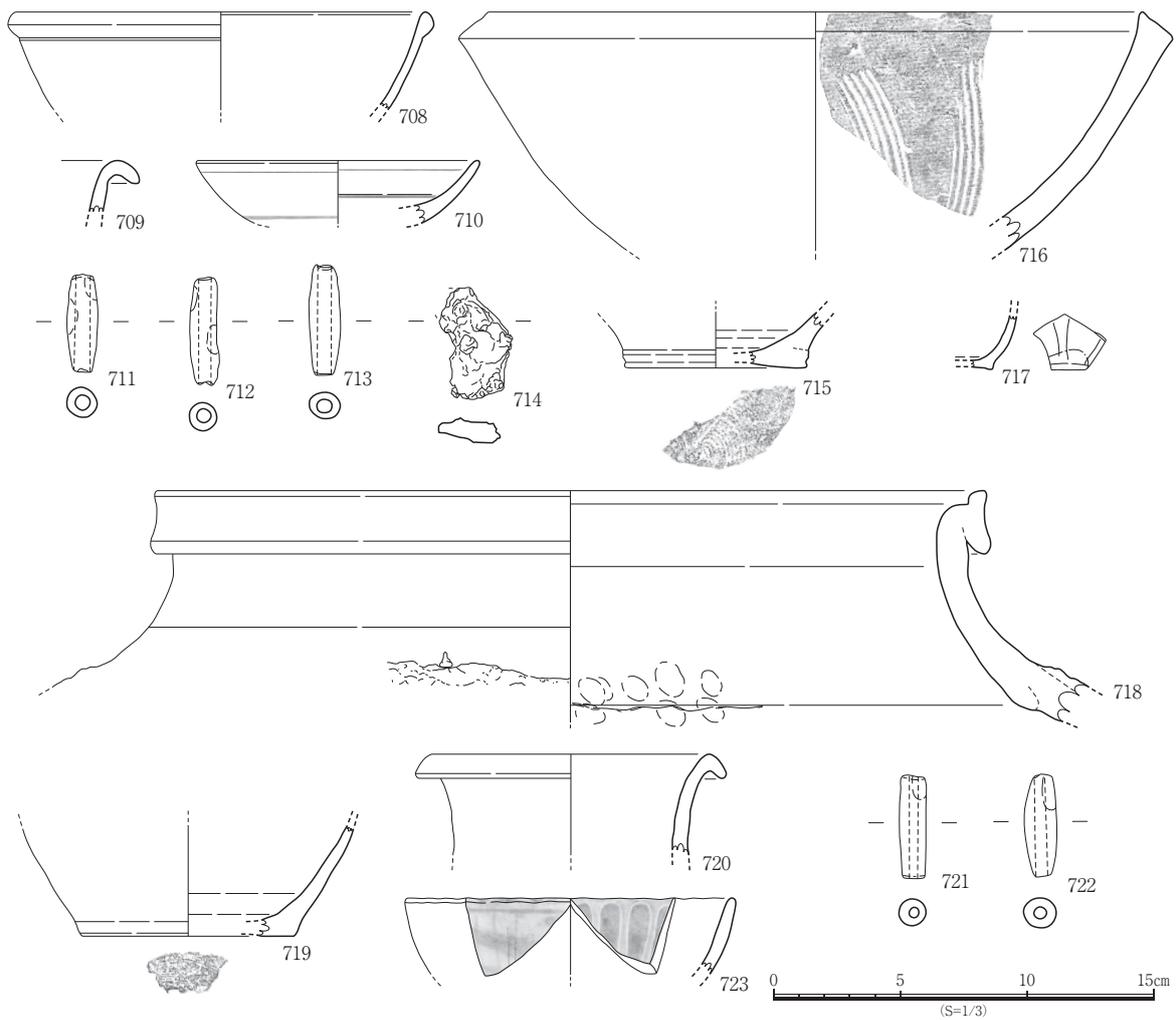


図198 C-4区東壁第22・28・29・32・34層出土遺物実測図

部外面は回転ナデ調整で、内面には5条単位の揃目がみられる。底部外面は無調整である。704は備前焼壺の肩部で、回転ナデ調整を施し、外面には櫛描による直線文が3条みられる。外面の肩上部には自然釉が掛かる。705・706は備前焼甕である。705は口縁部が外傾し、端部は断面が小さな楕円形の玉縁となる。頸部内面は横方向のナデ調整、口縁部内面と外面は回転ナデ調整で、口縁部内面には自然釉が掛かる。706は口縁部が外傾し、端部は上端に面を持つ断面が楕円形の玉縁となる。頸部内面はナデ調整、口縁部内面と外面は回転ナデ調整を施す。707は常滑焼甕で、頸部は内傾し、口縁部は外へ折り返し、口縁縁部幅は2.0cmを測る。頸部内面は縦または横方向のナデ調整、頸部外面は縦方向のナデ調整で、その後、口縁部内面から外面に回転ナデ調整を施す。708は白磁碗で、器壁が薄く、口縁部は玉縁をなす。全面に白磁釉を施す。709は白磁壺で、口縁部は頸部より屈曲し、下方へ伸びる。全面に光沢のない白磁釉を施す。665と同一個体の可能性もある。710は青花皿で、口径11.0cmを測る小型のものである。内外面に圈線の染付がみられ、全面に透明釉を施す。711～713は土製品土錘で、全長3.9～4.4cmを測る小型のものである。円柱形を呈し、全面にナデ調整を施す。714は鉄製品で一部が残存する。板状を呈し、「く」の字状に屈曲する。残存長4.5cm、残存幅2.9cm、残存厚0.5cmを測る。

1. C区

4区東壁第28層(図198-715~717)

715は土師質土器杯で、体部は外上方にまっすぐ立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。716は備前焼播鉢で、体部は内湾し、口縁端部は上方へ摘む。全面に回転ナデ調整を施し、一部にナデ調整を加える。内面には6条単位の播目がみられる。717は青白磁合子である。型成形で、底部には小さな高台が付く。内面は横方向のナデ調整で無釉、外面は型押による蓮弁文がみられ、青味を帯びた釉を施す。高台は無釉である。689と同一個体である可能性もある。

4区東壁第29層(図198-718)

718は常滑焼甕で、頸部は大きく内傾し、口縁部はN字状を呈し、口縁縁部幅は2.5cmを測る。頸部内面はナデ調整で指頭圧痕が残り、口縁部は回転ナデ調整、頸部外面は自然釉が掛かり、粘土が付着するため調整は不明である。

4区東壁第32層(図198-719~722)

719は土師質土器杯である。大振りで、底径8.4cmを測る。体部は内湾して比較的上方へ立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。720は白磁壺である。頸部は外反し、口縁部が屈曲し、端部を下方へ摘む。全面に白磁釉を施す。721・722は土製品土錘である。721は円柱形を呈する。全面にナデ調整を施し、一部に黒斑がみられる。722は紡錘形を呈し、ナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため調整は不明である。

4区東壁第34層(図198-723)

723は青磁稜花皿で、内面には菊弁状の丸彫、外面は線刻と彫り込みによる花卉文がみられ、花卉文は肉厚で盛り上がる。全面に光沢のある淡いオリーブ色の青磁釉を施す。

⑤ 5区

5区は丘陵裾部の平場で、西部は平場がなく、北西部の5a区は東バンク、北部の5b区は東バンクと東壁、北東部の5c区は東壁を基準とした。

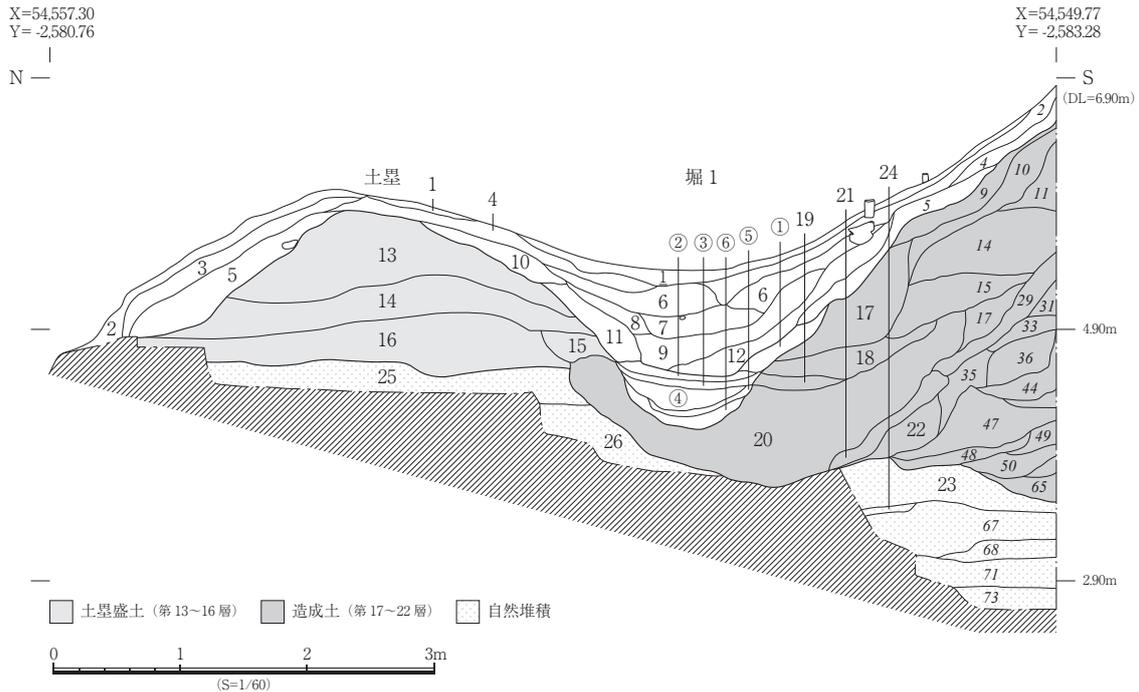
i 5区東バンク基本層序(図199)

図199は丘陵裾部の土層図で、第1~12層が腐植を多く含む表土及び現代から近世の堆積層である。土層上は約20~50cmの堆積で、堀跡は表土から堀跡底まで約1.2mの堆積がみられた。第13~16層は土塁の盛土で、曲輪の造成土とは異なり、土質は砂質シルトまたは粘土質シルトで平地部の土を盛ったものとみられる。第17~22層は曲輪の造成土で、角礫を多く含んでいた。第23層以下は自然堆積層で、土質は砂質シルトまたは粘土質シルトであった。

ii 5区東バンク堆積層出土遺物

5区東バンク第1・2層(図200-724~732)

724は瓦器小皿である。調整は見込がナデ、口縁部が横ナデ、底部外面がナデで指頭圧痕が残る。見込には平行暗文がみられる。725は近世の瓦質土器火鉢で、ほぼ完存する。浅鉢形で、胴部は直立し、口縁部は肥厚する。調整は内面が回転ナデ、胴部外面は型押による波文がみられ、キラ粉が付着する。底部外面はナデ調整を施し、円柱形の低い脚を3箇所貼付する。726は備前焼播鉢で、体部はやや内湾して立ち上がる。内面と体部外面は回転ナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。内面には8条単位の播目がみられ、播目は摩耗する。727は青磁碗で、高台内の挟りが浅く、厚い底部を有する。外面には線描の細蓮弁文がみられ、内面から高台外面まで青磁釉を施す。壘付と高台



層位

- 第1層 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層で、上部に腐植が堆積する
- 第2層 ぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層で、上部に腐植が堆積し、粘性は弱く、締まりはない
- 第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂層で、粘性は弱く、締まりはない
- 第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂層で、粘性は弱い
- 第5層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルト層で、締まりはない
- 第6層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を含む
- 第7層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、3cm大の河原石を含み、粘性は弱い
- 第8層 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層で、5~10cm大の礫を多く含む
- 第9層 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で、5~10cm大の礫を多く含む、炭化物を含む
- 第10層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルト層で、締まりはない
- 第11層 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫と炭化物を少し含む
- 第12層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂質シルト層で、3cm大の礫を僅かに含む
- 第13層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂質シルト層で、1cm大の礫を少し含む
- 第14層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘土質シルト層
- 第15層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫と炭化物を含む
- 第16層 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫と炭化物を含む
- 第17層 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルト層で、3~10cm大の礫を多く含む
- 第18層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫と極粗粒砂を非常に多く含む
- 第19層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルト層で、1~3cm大の黄色礫を多く含む

- 第20層 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、1~5cm大の礫と極粗粒砂を非常に多く含む、炭化物を少し含む(図192第16層と同じ)
- 第21層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルト層で、炭化物を僅かに含む(図192第30層と同じ)
- 第22層 褐色(10YR4/6)粘土質シルト層で、中粒砂を含む(図192第34層と同じ)
- 第23層 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で、炭化物を少し含む(自然堆積層:図192第66層と同じ)
- 第24層 黄灰色(2.5Y6/2)シルト質中粒砂層で、マンガンを含む(自然堆積層)
- 第25層 褐色(10YR4/4)粘土質シルト層(自然堆積層)
- 第26層 褐色(10YR4/6)粘土質シルト層で、中粒砂を含む(自然堆積層)

註: 斜体の層位は、C-4区東バンクセクション図(図192)と同じ

遺構埋土(堀1)

- ① オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を含む
- ② オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで、腐植を多く含む、1~3cm大の礫を少し含む
- ③ オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を僅かに含む、上部はグライ化する
- ④ オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂質シルトで、1~5cm大の礫を多く含む、炭化物を少し含む
- ⑤ 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトで、上部の一部に焼土が僅かにみられる炭化物の堆積
- ⑥ オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルトで、1~3cm大の黄色礫を多く含む

図199 C-5区東バンクセクション図

内は無釉である。728は青磁杯で、口縁部は体部より屈曲し、外へ水平に伸びる。外面には僅かに鎬がある蓮弁文がみられ、蓮弁の先はやや尖る。全面に明緑灰色の青磁釉を厚く施す。729は能茶山窯の近世磁器広東碗である。見込には帆掛船、内面に圏線、外面に圏線と草花文とみられる染付、高台内に「サ」銘がみられる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギを行い、見込にはピン痕が2箇所に残る。730は能茶山窯の近世磁器小皿で、見込に波文とみられる染付、内面に草文と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施し、畳付を釉ハギ、見込を蛇ノ目釉ハギする。731は軒棧瓦で、中

1. C区

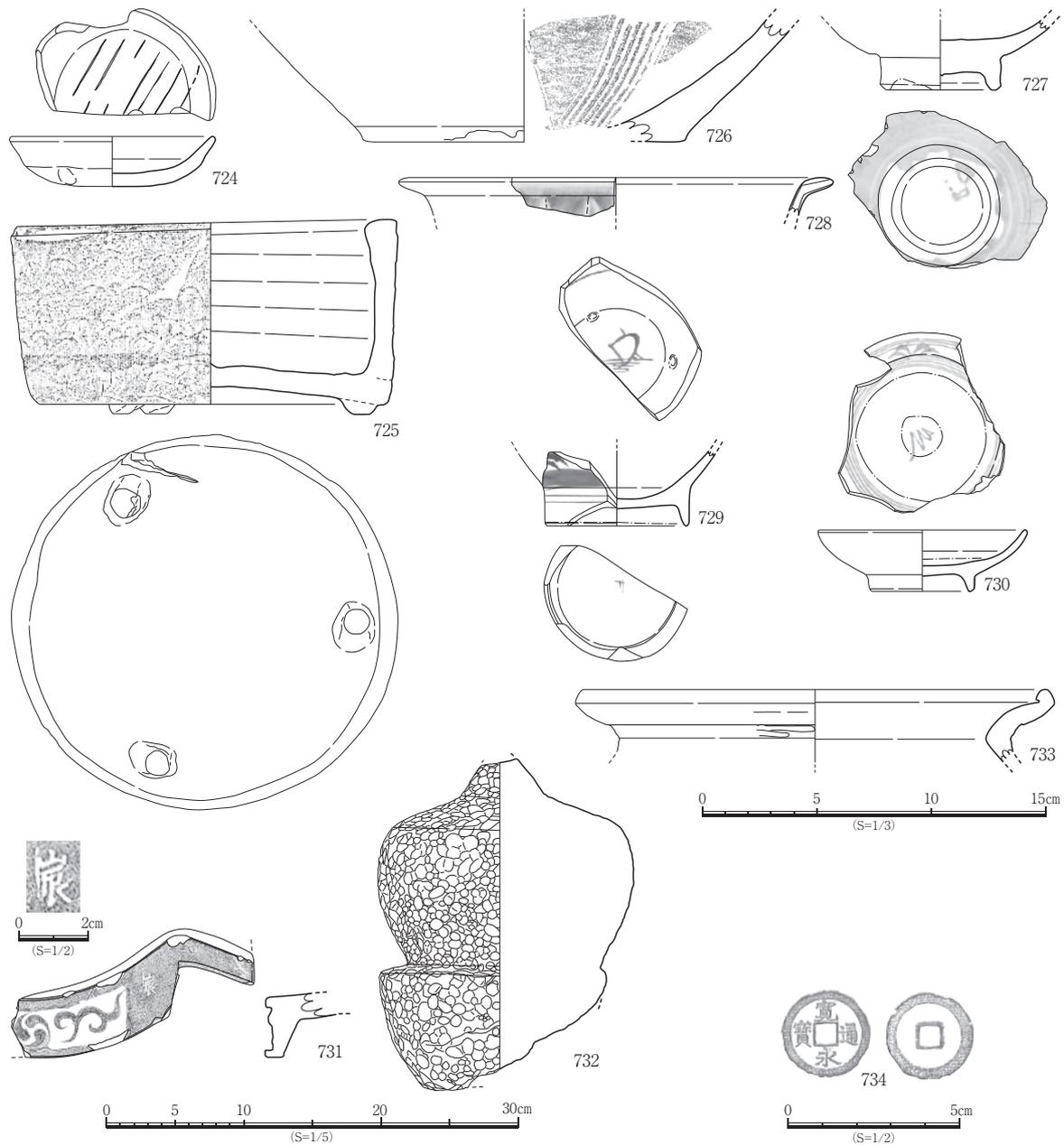


図200 C-5区東バンク第1～4層出土遺物実測図

心飾は右巻の三巴文で、瓦当右側には刻印がみられる。刻印は522・523と同じだが、解読できなかった。732は石製品五輪塔で、空風輪である。空輪の上端と風輪の一部を欠損する。全面に小さな敲打痕がみられる。石材は砂岩である。

5区東バンク第2層(図200-733)

733は紀伊型の土師器釜である。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内へ屈曲する。調整は頸部がナデ、口縁部が横ナデで、頸部外面には工具痕が残る。

5区東バンク第3・4層(図200-734)

734は銅製品銭貨で、寛永通寶である。新寛永である。

5区東バンク第12層(図201-735～738)

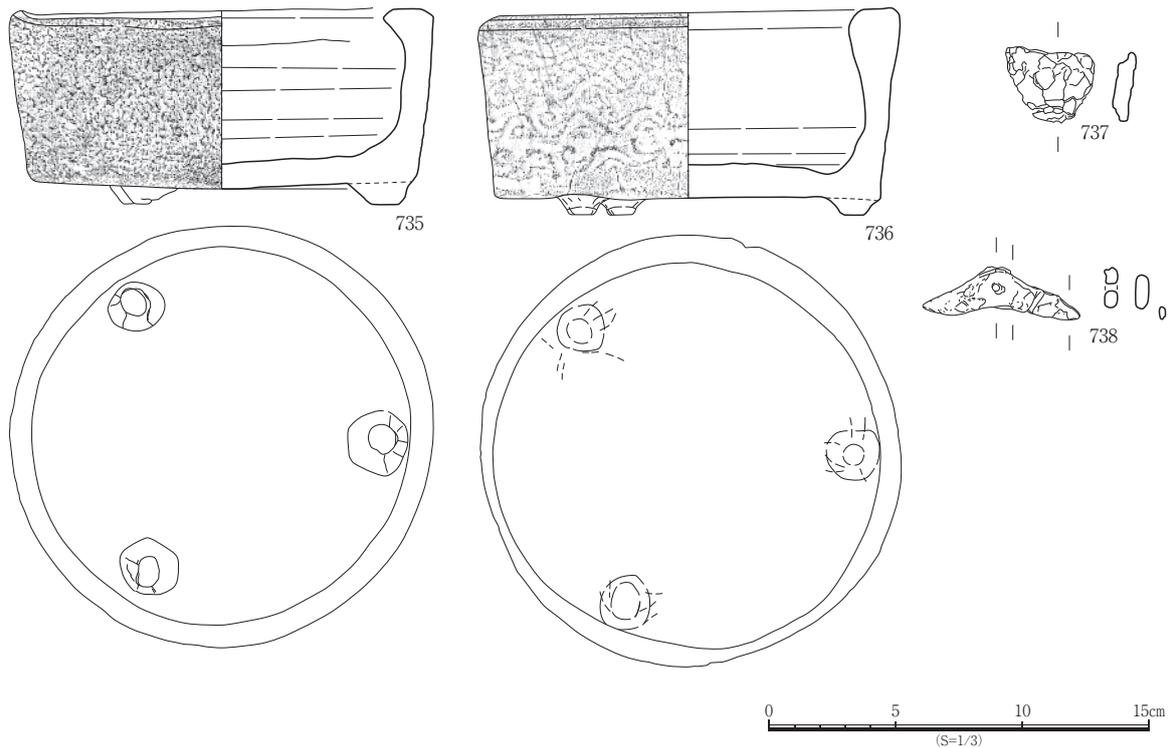


図201 C-5区東バンク第12層出土遺物実測図

735・736は近世の瓦質土器火鉢である。いずれも口縁部を上にして据え置かれた状態で出土した。浅鉢形で、胴部は直立し、口縁部は内へ摘む。調整は内面が回転ナデ、胴部外面は型押による文様がみられ、736にはキラ粉が付着する。底部外面はナデ調整で、円柱形の低い脚を3箇所貼付する。737・738は板状を呈する鉄製品である。737は一部が残存し、残存長3.7cm、残存幅3.1cm、残存厚0.5cmを測る。738は三角形を呈し、中央に径0.3cmの円孔がみられる。断面は方形を呈し、端部は薄く厚さ0.3cmを測る。

5区東バンク第16層

土塁の盛土である第16層からは弥生土器片1点と土師質土器片1点が出土したが、図示できなかった。

iii 5区東壁基本層序(図202)

5c区では近世に土塁が削平されたものとみられ、近世の整地層及び遺構が確認された。第3・4層は近世の堆積層で、第5～9層は近世の整地層とみられる。第9層の下より堀2が検出された。

iv 5区東壁堆積層出土遺物

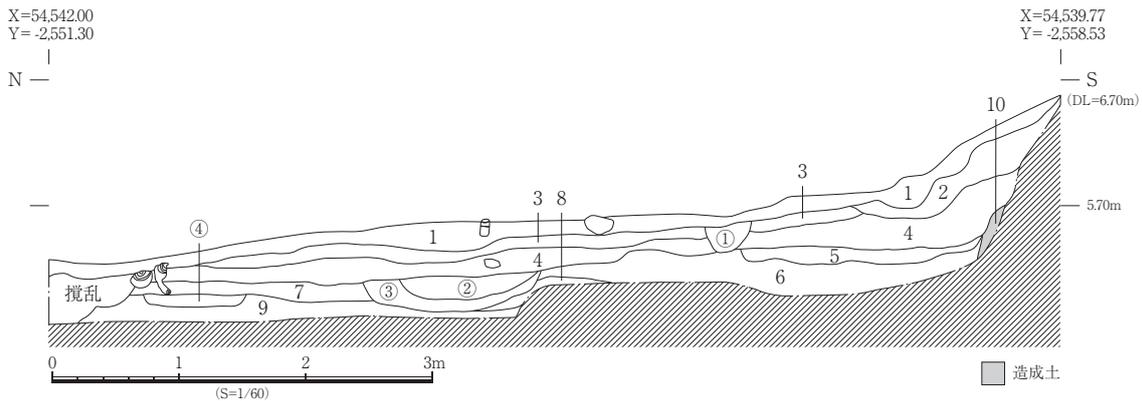
5区東壁第1層(図203-739・740)

739は常滑焼甕で、底部は大きく凹み、胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面が横方向のナデ、胴部外面は縦方向のハケの後、ケズリ及びナデ、底部外面はハケである。740は青磁碗で、内面には片彫の劃花文がみられる。全面にオリブ色の青磁釉を施す。

5区東壁第4層(図203-741～746)

741は青磁碗で、高台内の挟りが浅く、底部の器壁が厚い。内面から高台外面まで透明感のない青磁釉を施し、暈付と高台内は無釉である。742は青花碗で、見込には2条の圈線、外面には三葉状の斑点文の染付がみられる。全面に透明釉を施す。743は近世陶器皿で、唐津系灰釉陶器である。

1. C区



層位

- 第1層 極暗褐色(7.5YR2/3)中粒砂質シルト層で、腐植と1~3cm大の礫を多く含む
- 第2層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫を含む
- 第3層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、1cm大の礫を少し含む(近世)
- 第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫を多く含む、炭化物を含む(近世)
- 第5層 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫と中粒砂を含む(近世整地層)
- 第6層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルト層(近世整地層)
- 第7層 にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルト層で、0.5cm大の黄色礫と炭化物を少し含む(近世整地層)

第8層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルト層(近世整地層)

第9層 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルト層(近世整地層)

第10層 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、1cm大の黄色礫を多く含む(造成土)

遺構埋土

- ① にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで、1~2cm大の礫を含む
- ② オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで、3~8cm大の黄色礫を含む(SK-3)
- ③ オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を含む(SD-3)
- ④ オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を含む

図202 C-5区東壁セクション図

調整は回転ナデで、内面から口縁部外面まで透明感のない灰釉を施す。744は椽瓦で、凹凸面にはキラ粉が付着する。側面には方形枠内に「や(ヤ)ス□(孫か)」の刻印がみられる。745は石製品五輪塔で、空風輪である。完存し、全面に敲打痕がみられる。石材は砂岩である。746は銅製品銭貨で、寛永通寶である。新寛永である。

5区東壁第7層(図203-747)

747は肥前産の近世磁器小丸碗である。内面は無文で、外面は海、土坡、草、鳥文と圏線、高台に圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギし、砂が付着する。

5区東壁第9層(図203-748~754)

748は土師器釜で、口縁部は直立して、端部は平坦な面を持ち、外面には断面が台形を呈する小さな鏝を貼付する。調整は内面がナデ、口縁部が横ナデ、外面が横方向のナデである。749は陶器甕で、口縁部は外反した後、屈曲して短く直立する。内面の調整は器面が荒れるため不明で、口縁部外面は回転ナデ調整、頸部外面には自然釉が掛かる。750は近世陶器皿で、長石釉とみられる白濁した釉を全面に施し、畳付を釉ハギする。釉には貫入が入る。志野焼の丸皿か。751は近世陶器瓶とみられ、体部は内傾して立ち上がる。調整は回転ナデで、外面には錆釉を施す。752は能茶山窯の近世磁器広東碗である。見込には水と舟文とみられる染付、内面に圏線、外面に圏線と染付の一部、高台内には「サ」銘がみられる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。753・754は平瓦である。753は隅に切り込みを入れ、凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施し、キラ粉が付着する。側面に「御□」の刻印がみられた。754は凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施し、凸面にはキラ粉が付着する。凸面に墨書がみられるが、解読できなかった。側面には方形枠内に「前金」の刻印が残る。

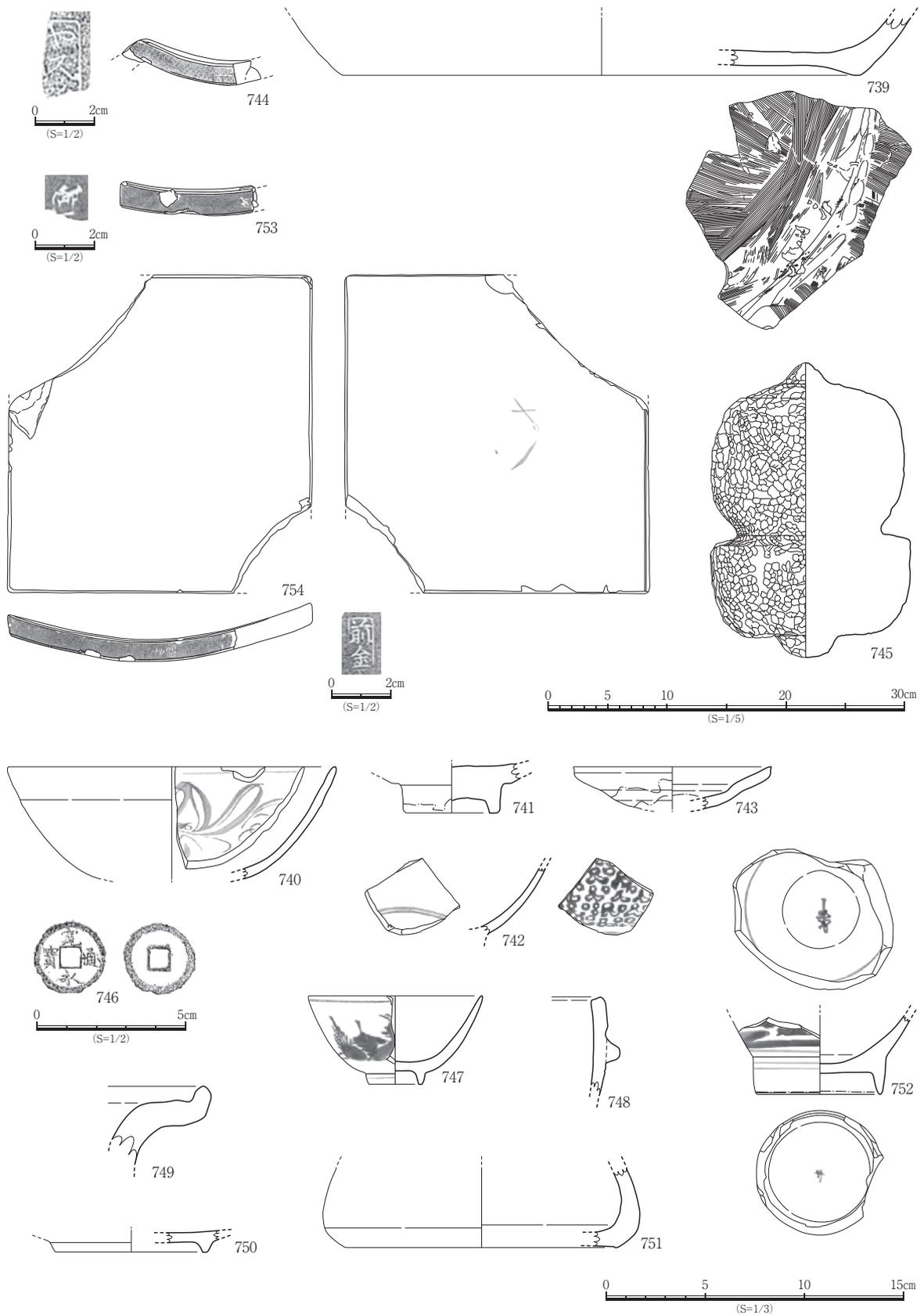


図203 C-5区東壁出土遺物実測図

1. C区

(3) 検出遺構と出土遺物

① 中世下面

i 1区

曲輪1(遺構:図204)

曲輪1は詰の下の曲輪で、詰の西側に南北方向に伸びる帯曲輪である。今回の調査地で最も標高が高い場所に位置し、標高は18.0~18.6mを測る。調査地は曲輪1の北端部のみで、南北6.72m、東西9.43mの範囲である。曲輪1では堀切1とP-1を確認した。

堀切1(遺構:図171・175・204, 遺物:図205-755~775)

曲輪1から2区の西斜面にかけて検出した堀切で、基盤層である岩盤を掘削し造り出している。両端は切岸を造成した際に切られたものとみられ、東は曲輪1の東端で止まり、西は2区の途中で止まる。全長11.81m、曲輪1では全幅1.92m、深さ0.75m、西斜面では全幅2.93m、深さ0.59m



図204 C-1区中世下面遺構平面図(S=1/100)

を測る。断面はU字形を呈し、埋土は上層が暗褐色シルト質粗粒砂で、3～5cm大の礫を多く含み、下層は暗褐色シルト質極粗粒砂で、5～10cm大の礫を多く含んでいた。

出土遺物には弥生土器壺1点、土師質土器40点(杯7, 皿1, 細片32), 土師器2点(釜1, 細片1), 瓦質土器片1点, 古瀬戸2点(瓶子か1, 細片1), 備前焼6点(播鉢3, 壺1, 甕2), 常滑焼2点(壺または甕1, 細片1), 陶器茶入か1点, 白磁8点(碗1, 杯1, 皿3, 壺3), 青磁3点(皿2, 細片1), 青花皿1点, 金属製品8点(小札1, 鞋1, 釘5, 不明1)がみられ、755～775を図示した。764は下層, その他は上層より出土した。

755は弥生土器壺で、口縁部の一部が残存する。口縁部に粘土帯を貼付し、外面には縦方向の長い刻目を施す。南四国型で、胎土には0.3cm大の礫を含む。756・757は土師質土器杯である。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。756は底径5.5cmを測り、体部は比較的上方に立ち上がる。757は底径7.5cmを測り、見込にロクロ目が顕著に残る。ロクロ水挽成形とみられる。758は土師質土器杯で、体部が外へ大きく開く。体部の調整は回転ナデ、底部の切り離しは回転糸切りとみられるが、著しく摩耗するため不明瞭である。759・760は備前焼播鉢で、口縁部は四角く収め、上下に僅かに摘む。回転ナデ調整の後、口縁部に横ナデ調整を施す。759は内面に播目が5条残り、口縁部には重ね焼痕がみられる。760は内面の一部にナデ調整を加え、内面には播目が3条残る。761は備前焼壺で、肩部は大きく張り、口縁部は内傾して短く立ち上がり、端部は丸く収め玉縁状になる。調整は回転ナデで、肩部外面には自然釉が掛かる。762は備前焼甕で、肩部の一部が残存する。内外面に横方向のナデ調整を施し、外面には自然釉が掛かる。763は陶器の茶入とみられ、頸部は上方にまっすぐ立ち上がり、口縁部は外へ折れる。頸部内面は回転ナデ調整で、口縁部内面から外面には鉄釉を施す。口縁部は器面が荒れる。764は白磁碗で、口縁部は外反する。全面に白磁釉を施す。765は口禿の白磁杯である。平底を呈し、口縁部は僅かに外反して外上方へ伸びる。内面から体部外面に光沢のある白磁釉を施し、口縁部内面を釉ハギする。底部外面は回転ケズリ調整を施し、一部に白磁釉が掛かる。766・767は端反形の白磁皿である。器高が低く、口縁部は緩やかに外反し、底部には低い高台が付く。口縁部内外面に光沢のある白磁釉を施す。見込は無釉で、回転ナデ調整を施し、輪状の重ね焼痕が残る。766には輪状に砂が付着する。底部外面は回転ケズリ調整で、無釉である。768は白磁壺で、肩部の一部が残存し、耳を貼付する。全面に白磁釉を施す。769は青磁稜花皿である。腰が折れ、口縁部は緩やかに外反し、端部に抉りを入れる。器壁が厚く、底部には断面が方形を呈する高台が付く。内面から高台外側まで透明感のない青磁釉を施す。底部外面は回転ケズリ調整で、無釉で、無文である。770は青磁皿で、一部が残存する。底部には直立する細い高台が付き、底径9.8cmを測る。見込には圏線、外面には蓮弁文がみられ、畳付を除き濃緑色の釉を厚く施す。771は青花皿で、口縁部の一部が残存する。口縁部はやや内湾し、胎土には透明感がない。内面に圏線、外面に染付の一部がみられ、全面に透明釉を施す。772・773は鉄製品小札で、一部を欠損する。大型で、円孔が3列みられる。772は円孔が、左列に7個、右列は6個残存し、中央の列には下部に3個みられる。左列と右列間は2.0cm、左列と中央列間は0.8cm、中央列と右列間は0.8cm、縦列間は0.6～1.0cmを測る。773は両端の列には円孔が6個残存し、中央の列には下部に3個の円孔がみられる。左列と右列間は1.8cm、左列と中央列間は0.9cm、中央列と右列間は1.1cm、縦列間は0.7～0.9cmを測る。774は板状の鉄製品で、三角形を呈する。一部が残存し、残存長3.1cm、残存幅1.7cm、残存厚0.4cmを測る。断面は方形を呈する。775は銅製品鞋で、完存する。板状で、紡錘形を呈し、両端は僅かに反り上がる。全長4.0cm、全幅1.2cm、全厚0.4cmを測る。2箇所径0.7cmの円孔がみられる。

1. C区

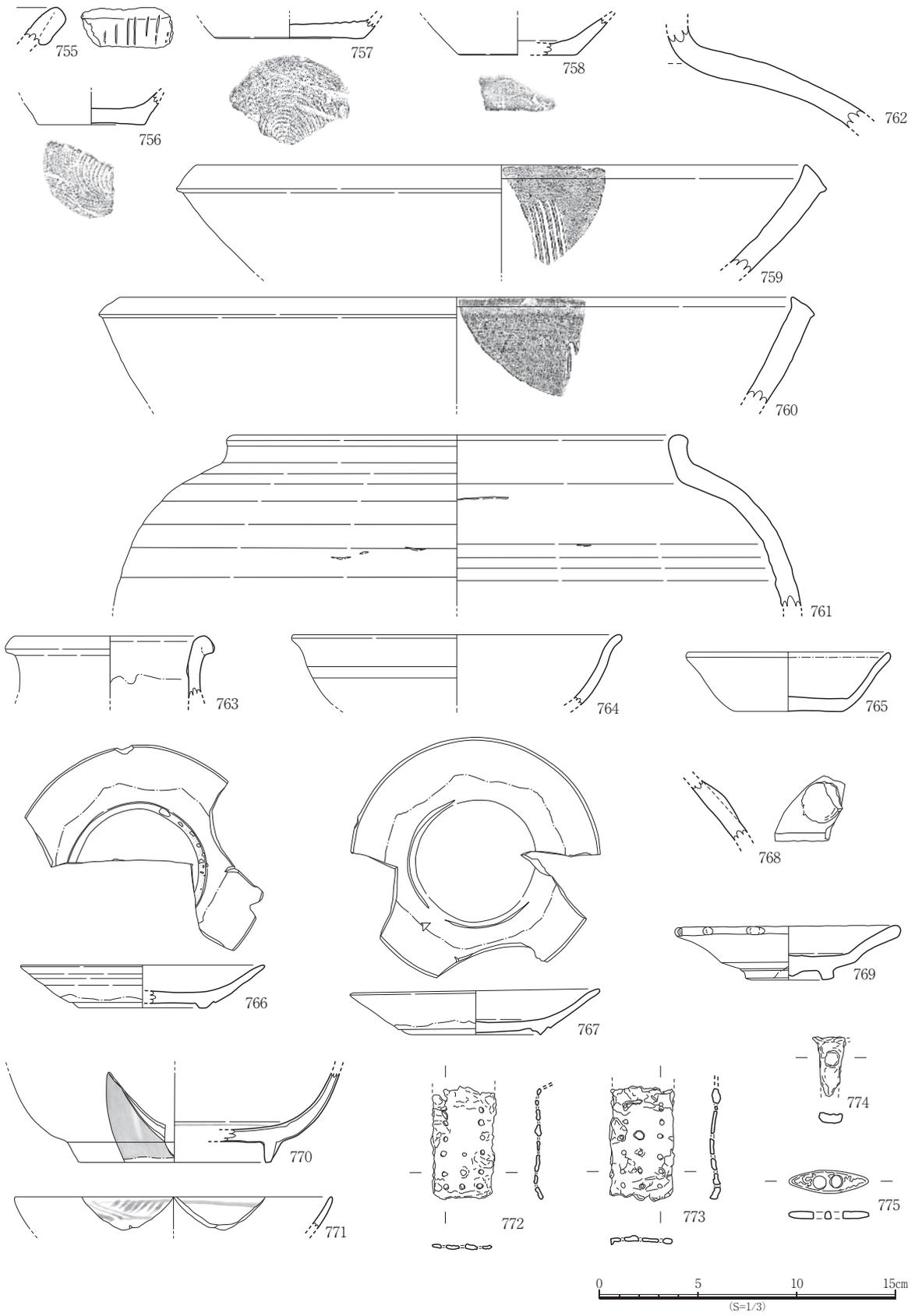


图205 堀切1出土遺物実測図

平場1(遺構: 図171・204)

曲輪1の北西部で確認した岩盤を掘削して造成した三角形を呈する平場である。尾根状に突出し、曲輪1より1段低くなる。全長3.88m、全幅2.46m、標高は16.9～17.0mを測る。平場1ではP-4～P-10を確認した。

平場2(遺構: 図171・204)

平場1の北東で確認した岩盤を掘削して造成した帯状を呈する平場で、平場1よりも1段低くなる。全長6.80m、全幅1.97m、標高は15.4～16.8mを測り、東から西に向かって緩やかに傾斜する。平場2ではP-11～P-18を確認した。

P-1

曲輪1の南東部で検出したピットで、堀切1を切る。楕円形を呈し、長径80cm、短径61cm、深さ35cmを測る。埋土は黒褐色シルト質中粒砂で、0.5cm大の黄褐色礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかった。

P-2

堀切1の底で検出した楕円形を呈するピットで、長径37cm、短径34cm、深さ11cmを測る。埋土は褐色シルト質極粗粒砂で、3cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-3

P-2の南で確認したピットで、堀切1の底で検出した。楕円形を呈し、長径58cm、短径53cm、深さ14cmを測る。埋土は褐色シルト質極粗粒砂で、3cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-4

平場1で確認したピットで、1区西バンク第33層の下で検出した。楕円形を呈し、長径42cm、短径29cm、深さ46cmを測る。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、1cm大の礫と粗粒砂を含み、焼土と炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点と粘土塊がみられたが、図示できなかった。

P-5(遺構: 図171, 遺物: 図206-776)

平場1で確認したピットで、1区西バンク第36層の下で検出した。P-6に切られる。楕円形を呈し、長径55cm、短径43cm、深さ18cmを測る。埋土は暗褐色シルト質細粒砂で、1～5cm大の黄色礫を含み、底付近には炭化物を多く含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器杯(776)がみられた。776は土師質土器杯で、底径8.1cmを測る。器壁が薄く、体部は内湾してやや上方に立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

P-6(遺物: 図206-777・778)

平場1で確認したピットで、1区西バンク第35層の下で検出した。P-5を切り、P-7に切られる。楕円形を呈し、長径50cm、短径40cm、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色シルト質細粒砂で、1～5cm大の黄色礫を含み、底に炭化物を多く含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器杯(777)と瓦質土器鍋(778)がみられた。777は土師質土器杯で、口縁部の一部が残存する。口縁部の1箇所を片口状に外に出す。全面に回転ナデ調整を施す。778は瓦質土器鍋で、頸部は屈曲し、口縁部は外上方に短く伸び、端部を細く仕上げる。調整は胴部内面が横方向のナデ、口縁部が横ナデ、胴部外面がナデで指頭圧痕が残る。

1. C区

P-7(遺構:図171)

平場1で確認したピットで、1区西バンク第35層の下で検出した。P-6を切る。楕円形を呈し、長径28cm、短径17cm、深さ13cmを測る。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで、5cm大の礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-8

平場1で確認したピットで、1区西バンク第35層の下で検出した。円形を呈し、径26cm、深さ13cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色シルト質粗粒砂であった。出土遺物は皆無であった。

P-9

平場1で確認したピットで、1区西バンク第37層の下で検出した。楕円形を呈し、長径66cm、短径54cm、深さ26cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の黄色礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-10

平場1の南東隅で確認したピットで、1区西バンク第37層の下で検出した。楕円形を呈し、長径34cm、短径32cm、深さ39cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-11

平場2で確認したピットで、1区西バンク第20層の下で検出した。P-12を切る。楕円形を呈し、長径50cm、短径40cm、深さ35cmを測る。埋土はオリーブ褐色細粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-12(遺物:図206-779)

平場2で確認したピットで、1区西バンク第20層の下で検出した。P-11に切られる。楕円形を呈し、長径1.04m、短径0.78m、深さ23cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の黄色礫を多く含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器皿(779)がみられた。779は土師質土器皿で、口径15.4cmを測る。器壁が薄く、全面に回転ナデ調整を施す。

P-13

平場2で確認したピットで、1区西バンク第20層の下で検出した。円形を呈し、径26cm、深さ12cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の黄色礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

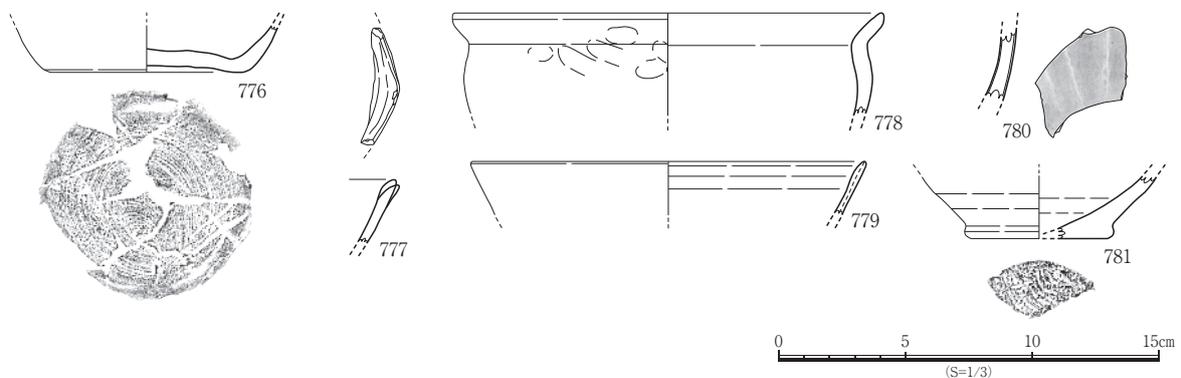


図206 P-5・6・12・15・17出土遺物実測図

P-14

平場2で確認したピットで、1区西バンク第20層の下で検出した。円形を呈し、径30cm、深さ3cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の黄色礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-15(遺構: 図207, 遺物: 図206-780)

平場2の北端で確認したピットで、北は切岸の斜面になる。1区西バンク第20層の下で検出した。不整形を呈し、検出長1.87m、検出幅0.95m、深さ67cmを測る。埋土は褐色シルト質中粒砂で、5cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物には備前焼片1点、常滑焼片1点、青磁碗1点がみられ、青磁碗(780)を図示した。780は青磁碗で、体部の一部が残存し、外面には鎬蓮弁文がみられる。全面に光沢のあるオリーブ色の青磁釉を厚く施す。

P-16

平場2のP-15の北西で確認したピットで、1区西バンク第20層の下で検出した。円形を呈し、径28cm、深さ3cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質中粒砂で、0.5cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-17(遺構: 図208, 遺物: 図206-781)

平場2の南西部で確認したピットで、南は岩盤の壁に当たる。1区西バンク第20層の下で検出した。不整形を呈し、検出長1.85m、検出幅0.94m、深さ42cmを測る。埋土は3層に分かれる。出土遺物には土師質土器7点(杯6、細片1)とスサ入粘土塊、炭化種実がみられ、土師質土器杯(781)を図示した。781は土師質土器杯である。底径5.8cmを測り、体部は外上方へまっすぐ伸びる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

P-18

平場2のP-17の底で確認したピットで、楕円形を呈し、長径53cm、短径50cm、深さ23cmを測る。埋土は褐色シルト質中粒砂で、5cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器杯1点がみられたが、図示できなかった。

ii 3区

曲輪2(遺構: 図209)

中世下面の曲輪2は丘陵北側に位置し、東西方向に帯状に伸び、北西隅はやや広く突出しSB-1が確認されており、東端は調査区外へ続いていた。丘陵西側については、中世上面の時期に曲輪や切岸、豎堀などを構築し著しく改変しており、中世下面の遺構や曲輪が掘削されているものとみられ、中世下面の時期については明らかではない。曲輪2は基盤層である岩盤を削平して造成されており、西部では岩盤上に炭化物の堆積がみられた。曲輪2の規模は検出長21.55m、西端部検出幅3.16m、東端部検出幅0.46mを測り、東に向かって幅が細くなっている。標高は8.7~9.6mを測り、東から西へ傾斜する。

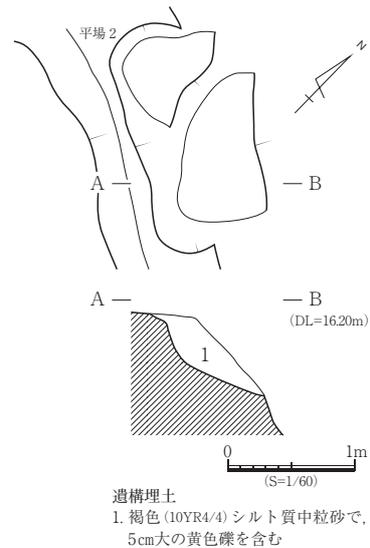


図207 P-15

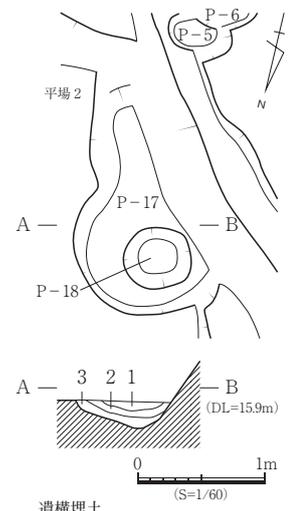


図208 P-17

- 遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で、1~5cm大の黄色礫を多く含む
 2. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粗粒砂で、5cm大の礫と炭化物を含む
 3. 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で、1~5cm大の礫を含む

1. C区



図209 C-3区中世下面遺構平面図(S=1/150)

SB-1 (遺構: 図210・212)

曲輪2の西端で検出した東西棟(N-88°-E)掘立柱建物跡で、P-21を切る。炭化物を多く含む3区西バンク第13層の下で検出した。梁間1間(1.20m)、桁行1間(1.80m)の小型建物跡で、柱穴は基盤層である岩盤を掘削して造られていた。柱穴は隅丸方形または楕円形を呈し、全長31~48cm、全幅23~40cm、深さ16~23cm、柱径16~22cmを測る。掘方の埋土は暗褐色礫質極粗粒砂で、3~5cm大の礫剥片を多く含み、炭化物を含んでいた。柱痕の埋土は黄褐色礫質極粗粒砂で、3~5cm大の礫剥片を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-1 (遺構: 図211, 遺物: 図214-782・783)

SB-1の東で検出した隅丸方形を呈する土坑で、炭化物を多く含む3区西バンク第13層の下で検出した。SK-1の周辺では炭化物が特に厚く堆積し、炭化物と共に小札4点と鉄釘約100点が出土している。基盤層である岩盤を掘削して造られており、長辺1.14m、短辺0.98m、深さ21cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は焼土を含み炭化物が堆積していた。出土遺物には備前焼壺または甕1点、鉄釘3点、粘土塊、炭化オオムギなどがみられ、鉄釘2点(782・783)を図示した。

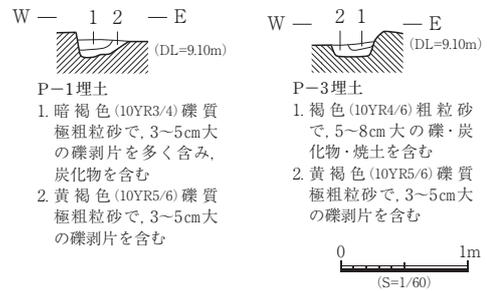
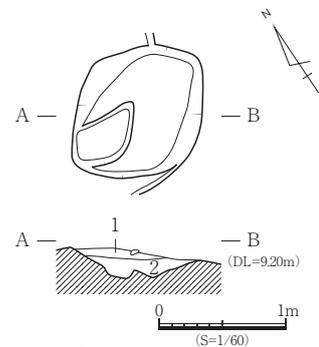


図210 SB-1セクション図



遺構埋土
1. 黒色(10YR17/1)シルト質粗粒砂で、河原石と10~15cm大の割石、焼土を含み、炭化物が堆積する
2. 黄褐色(10YR5/6)礫質粗粒砂で、1~5cm大の礫を多く含む

図211 SK-1

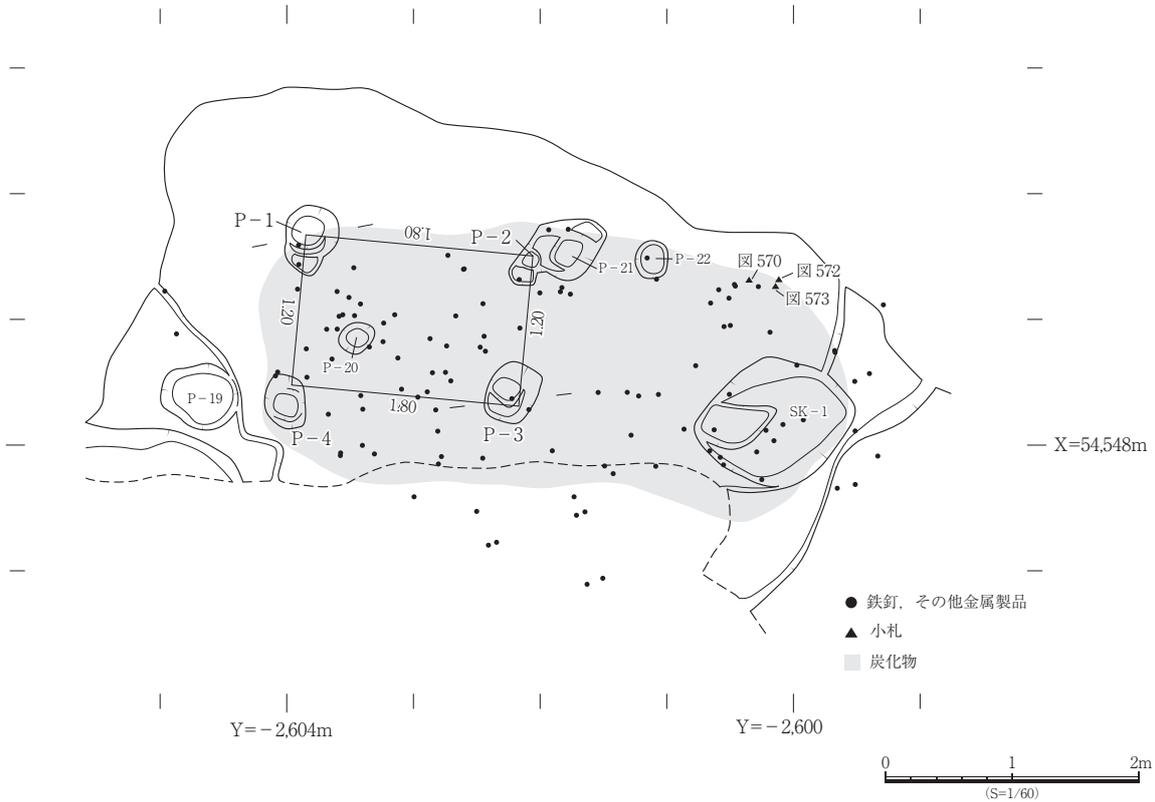


図212 SB-1

782・783は鉄製品釘である。782は小型で、頂部を欠損する。断面は方形を呈し、先端は細く尖る。783は頂部が薄く、L字形を呈し、先端は細く尖る。身部断面は方形を呈し、湾曲する。

SK-2

SK-1の東で検出した不整隅丸方形を呈する土坑で、基盤層である岩盤を掘削して造られている。長辺1.40m、短辺0.69m、深さ28cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の黄色礫と炭化物を含み、5~20cm大の角礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

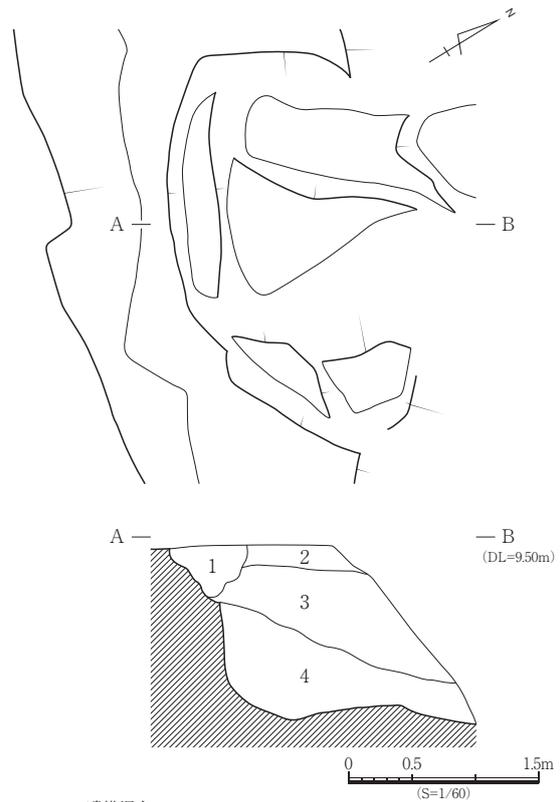
SX-1 (遺構：図213, 遺物：図214-784~790)

SK-2の東で検出した大型土坑で、北は斜面になり肩はなく、基盤層である岩盤を掘削して造られていた。不整形を呈し、検出長3.07m、全幅2.25m、深さ2.22mを測る。埋土は3層に分かれ、いずれも角礫を含んでいた。SX-1は曲輪2を遮るように造られており、SX-1のある箇所は曲輪2の幅が22cmを測る狭い通路状になっていることから、防御のために造られた遺構とみられる。出土遺物には土師質土器6点(杯4, 細片2), 土師器片1点, 古瀬戸2点(皿1, 瓶子1), 常滑焼片2点, 陶器片1点, 青磁碗2点, 鉄釘2点がみられ、埋土1から出土した土師質土器皿(784)と古瀬戸皿(785), 鉄釘(786), 埋土2から出土した古瀬戸瓶子(787), 埋土3から出土した土師質土器杯(788)と青磁碗(789・790)を図示した。

784は土師質土器皿で、底部が残存する。底径8.2cmを測る。内面は回転ナデ調整を施し、外面は著しく摩耗するため調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。785は古瀬戸緑釉小皿で、口縁部の一部が残存する。回転ナデ調整の後、内面から口縁部外面に緑釉を施す。786は鉄

1. C区

製品釘で、一部が残存する。大型で、断面は矩形を呈する。著しく錆化する。787は古瀬戸瓶子で、平底の小さな底部より内傾して立ち上がった後、体部は外反する。体部は回転ナデ調整で、内面の一部には強いナデ調整を加え、見込には粘土塊が付着する。外面には灰釉が掛かり、内面と見込の一部に釉が掛かる。底部外面は無調整とみられ、一部に釉が掛かる。788は土師質土器杯で、底部が残存する。底径6.3cmを測る。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。789・790は青磁碗で、外面には片彫の蓮弁文がみられ、全面に青磁釉を施す。789は器壁が薄く、幅の狭い蓮弁文が密に施される。790は幅が狭く、先端が尖る蓮弁文が疎に施される。釉は明緑灰色を呈し、透明感が強い。



- 遺構埋土
1. オリーブ褐色 (25Y4/6) 粗粒砂質シルトで、2~5cm大の礫を多く含む(ピット)
 2. 暗褐色 (10YR3/4) 粗粒砂質シルトで、1~5cm大の礫を含む (SX-1埋土1)
 3. 褐灰色 (10YR4/1) 礫で、5~10cm大の角礫を含む (SX-1埋土2)
 4. 褐色 (10YR4/4) シルト質粗粒砂で、1~3cm大の礫を非常に多く含む (SX-1埋土3)

図213 SX - 1

P-19

曲輪2の西端で検出したピットで、基盤層である岩盤を掘削して造られていた。楕円形を呈し、長径62cm、短径52cm、深さ9cmを測る。埋土は暗オリーブ灰色極粗粒砂質シルトで、1cm大の礫と炭化物を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-20

SB-1の中で検出したピットで、基盤層である岩盤を掘削して造られていた。楕円形を呈し、長径27cm、短径24cm、深さ15cmを測る。埋土は暗褐色礫質極粗粒砂で、3~5cm大の礫剥片を多く含み、炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-21

SB-1の北東で検出したピットで、SB-1に切られる。基盤層である岩盤を掘削して造られていた。隅丸方形を呈し、長辺55cm、短辺51cm、深さ23cm、柱痕径17cmを測る。掘方の埋土は黄褐色礫質極粗粒砂で、3~5cm大の礫剥片を含んでいた。柱痕の

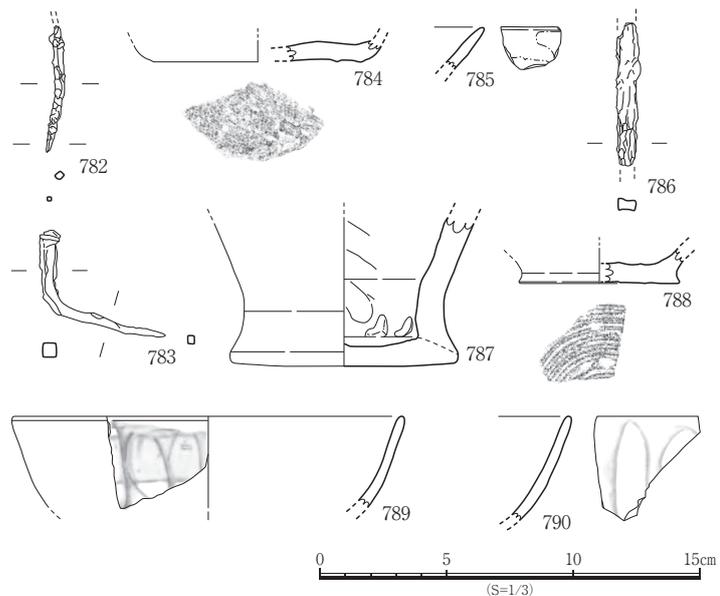


図214 SK - 1, SX - 1 出土遺物実測図

埋土は暗褐色礫質粗粒砂で、3～5cm大の礫剥片を多く含み、オオムギなどの炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-22

SB-1の北東で検出したピットで、基盤層である岩盤を掘削して造られていた。楕円形を呈し、長径31cm、短径25cm、深さ14cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-23

SB-1の南東で検出したピットで、3区西バンク第6層の下で検出し、曲輪2より標高が1.1m高い地点で確認した。基盤層である岩盤を掘削して造られていた。楕円形を呈し、長径28cm、短径25cm、深さ9cmを測る。埋土は暗褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

② 中世上面

i 1区(図216)

曲輪1では中世の遺構面は1面のみで、岩盤上で堀切1を確認した。堀切1の両端は2区の切岸を造成した際に削平されており、中世下面の時期の遺構とみられるが、曲輪1では建物跡等の遺構が確認されていないことなどから、中世上面の時期にも堀切1が機能していたものとみられる。中世上面の1区の遺構は平場1・2でピットが確認されている。炭化物及び焼土を含む1区西バンク第33層の上面を中世上面の遺構面とした。P-24～33は平場1、P-34～37は平場2で検出した。

P-24(遺構: 図215)

曲輪1の西で検出した楕円形を呈するピットで、長径0.97m、短径0.90m、深さ35cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質細粒砂で、1～3cm大と10cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には河原石5個がみられた。

P-25

平場1の北西部で検出した円形を呈するピットで、径28cm、深さ3cmを測る。埋土は暗褐色シルト質中粒砂で、1～5cm大の黄色礫と炭化物を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-26

平場1の南西部で検出した楕円形を呈するピットで、P-27を切る。長径39cm、短径36cm、深さ43cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で、1～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかった。

P-27

P-26の東で検出した楕円形を呈するピットで、P-26に切られる。円形を呈し、径45cm、深さ23cmを測る。埋土は暗褐色シルト質中粒砂で、1～5cm大の黄色礫と炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器杯1点がみられたが、図示できなかった。

P-28

P-27の北東で検出した楕円形を呈するピットで、長径38cm、短径33cm、深さ15cmを測る。埋

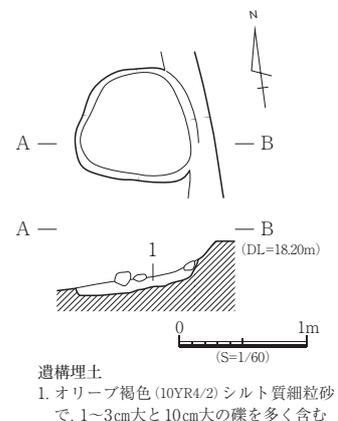


図215 P-24

1. C区

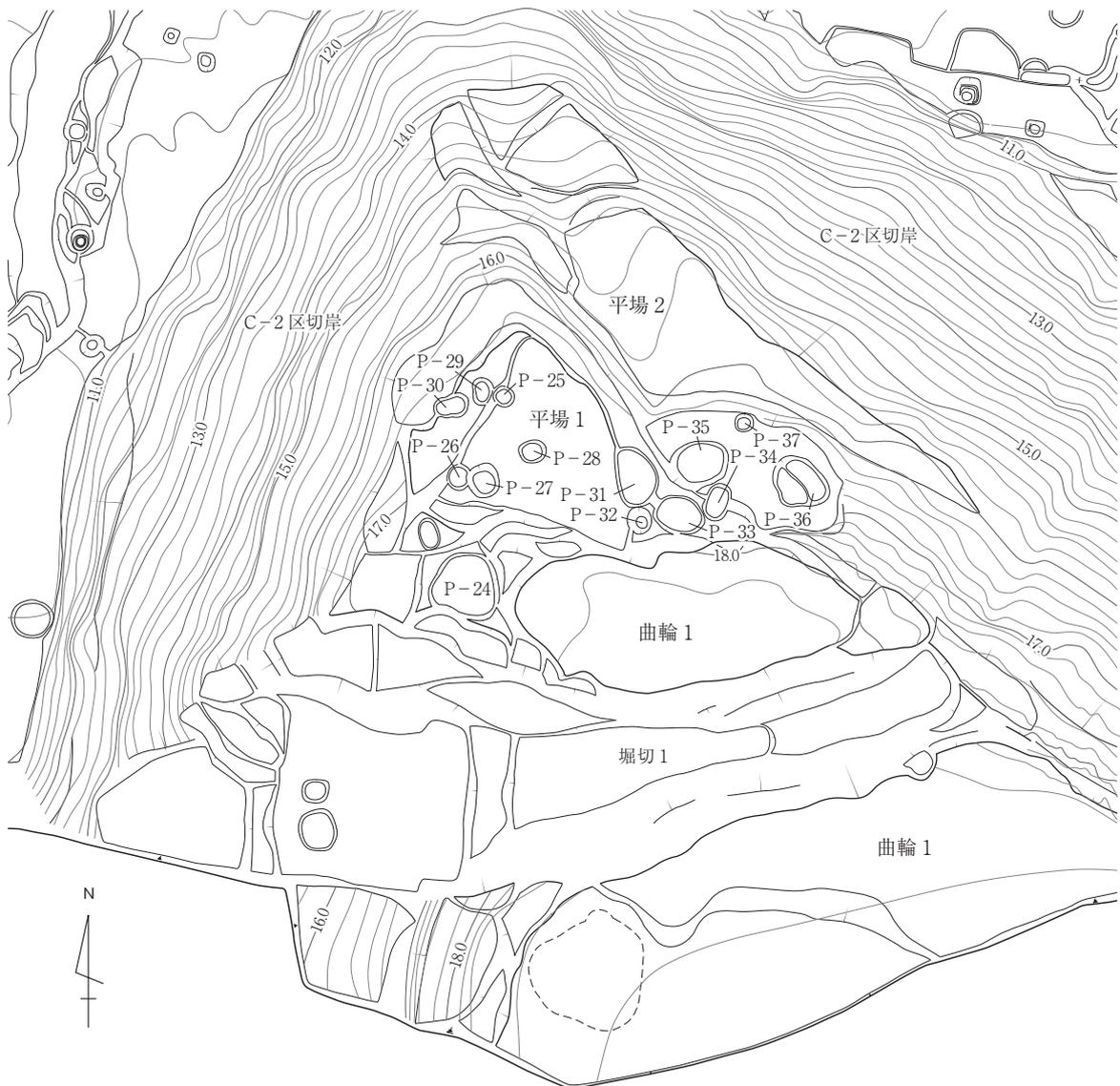


図216 C-1区中世上面遺構平面図(S=1/100)

土は暗褐色シルト質中粒砂で、1~5cm大の黄色礫と炭化物を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-29

平場1の北西部で検出した楕円形を呈するピットで、長径39cm、短径28cm、深さ14cmを測る。埋土は暗褐色シルト質中粒砂で、1~5cm大の黄色礫と炭化物を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-30

P-29の南西で検出した楕円形を呈するピットで、長径50cm、短径30cm、深さ23cmを測る。埋土は暗褐色シルト質中粒砂で、1~5cm大の黄色礫と炭化物を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-31

平場1の南東部で検出した楕円形を呈するピットで、長径87cm、短径58cm、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色シルト質細粒砂で、5cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-32(遺物: 図217-791)

P-31の南で検出した楕円形を呈するピットで、長径37cm、短径33cm、深さ31cmを測る。埋土は暗褐色シルト質細粒砂で、焼土と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(杯1, 細片1)がみられ、土師質土器杯(791)を図示した。791は土師質土器杯で、底部が残存し、底径7.0cmを測る。体部は外上方に立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

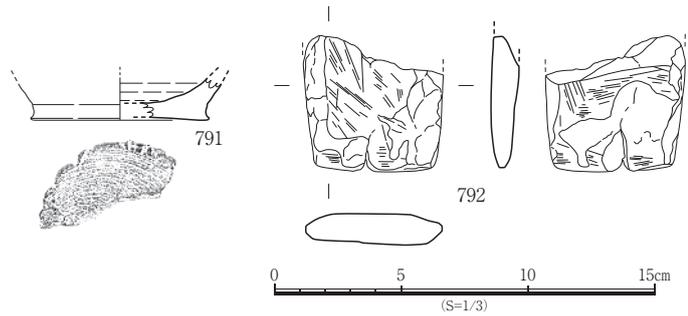


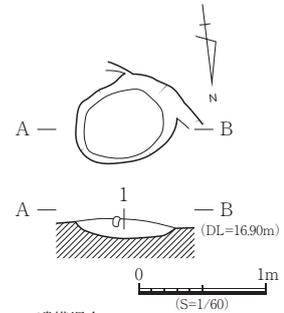
図217 P-32・34出土遺物実測図

P-33

P-32の東で検出した楕円形を呈するピットで、長径70cm、短径56cm、深さ27cmを測る。埋土は黒褐色シルト質中粒砂で、1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-34(遺物: 図217-792)

平場2の南部で検出した楕円形を呈するピットで、長径54cm、短径34cm、深さ16cmを測る。埋土は黒褐色シルト質中粒砂で、1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には図示した石製品石斧(792)がみられた。792は磨製の扁平片刃石斧で、刃部は弧状を呈する。両面に使用痕、両側面に加工痕が残る。石材は頁岩である。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/3)シルト質中粒砂で、1cm大の礫を多く含む

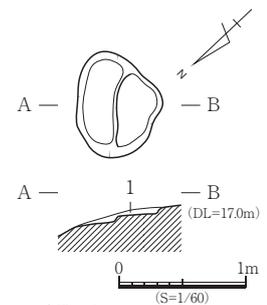
図218 P-35

P-35(遺構: 図218)

P-34の北で検出した楕円形を呈するピットで、長径88cm、短径64cm、深さ17cmを測る。埋土は黒褐色シルト質中粒砂で、1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-36(遺構: 図219)

P-34の東で検出した不整楕円形を呈するピットで、長径84cm、短径68cm、深さ13cmを測る。埋土は黒褐色シルト質中粒砂で、1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/3)シルト質中粒砂で、1cm大の礫を多く含む

図219 P-36

P-37

P-36の北西で検出した円形を呈するピットで、径24cm、深さ14cmを測る。埋土は暗褐色シルト質粗粒砂で、焼土と炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

ii 2区

切岸

曲輪1と平場1・2の三角形を呈する平場の下の斜面部で、北は尾根状に張り出し、西斜面と北斜面がある。基盤層である岩盤を掘削し、急な斜面を造り出している。西斜面には曲輪1から続く堀切1が伸びており、堀切1の下の傾斜とそれより上の傾斜角度が異なっている。曲輪1に近い上部の傾斜が54°、曲輪2に近い下部の傾斜は57°を測る。北斜面は54°を測る。

iii 3区

曲輪2(遺構: 図220・221)

丘陵北側から西側にかけてL字状を呈する帯曲輪で、両端は調査区外へ続き、検出面積は256㎡を測る。曲輪2の北西部には東西方向に伸びる豎堀1があり、豎堀1により北側と西側に分かれ、西側は曲輪の標高が約70cm高くなっている。丘陵北側は中世下面の曲輪2に盛土をしていた。盛土は検出長35.56m、検出幅5.11~6.16m、高さ6.89mの範囲に及び、大規模な造成を行い広い曲輪を造り出していたが、建物跡は確認できなかった。曲輪の上面は砂質シルトでやや粘性があり、西部では炭化物和焼土が検出された。曲輪2の標高は丘陵北側の切岸裾部(11.072m)がやや高く、東(10.987m)から西(9.752m)に傾斜する。丘陵西側は、中世下面の時期には曲輪がなく、中世上面の時期に岩盤を掘削することにより2区の切岸と曲輪を造り出している。丘陵西側は検出長13.19mを測り、全幅は北部が6.97m、南部が0.94mを測り、南部は狭くなっている。丘陵西側の標高は南(10.941m)から北(10.062m)へ傾斜する。



図220 C-3・4区西部中世上面遺構平面図(S=1/150)

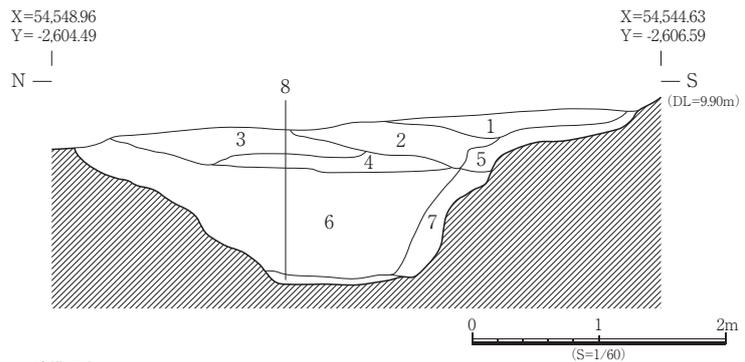


図221 C-3区北部中世上面遺構平面図(S=1/150)

竪堀1(遺構: 図182・222, 遺物: 図223-793~804)

曲輪2の北西部で検出した東西方向の竪堀で、南肩は岩盤を掘削し、北方は盛土により肩を造り出している。東端は大型土坑であるSX-2に繋がる。全長7.71m、

全幅2.50~3.00m、深さ0.83~1.44mを測り、西端が最も浅くなっている。断面は台形を呈し、底面は岩盤である。埋土は8層に分かれ、1~6層は角礫を多く含み、7層は炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器21点(杯2, 細片19)と瓦器小皿1点, 瓦質土器片2点, 備前焼播鉢2点, 常滑焼片1点, 陶器片7点, 青磁4点(皿3, 細片1), 金属製品33点(釘31, 不明2), 炭化オオムギがみられ、埋土3より



遺構埋土

1. オリーブ褐色(25Y4/6)極粗粒砂質シルトで、3~10cm大の角礫を多く含む
2. オリーブ褐色(25Y4/6)極粗粒砂質礫で、5~10cm大の角礫を非常に多く含み、シルトを少し含む
3. オリーブ褐色(25Y4/6)シルト質極粗粒砂で、3~5cm大の角礫を含む
4. 黄褐色(10YR5/6)シルト質極粗粒砂で、1~5cm大の角礫を多く含む
5. 黄褐色(10YR5/6)極粗粒砂質礫で、1~5cm大の角礫を非常に多く含む
6. 明黄褐色(10YR6/6)礫で、3~10cm大の角礫を非常に多く含む
7. 暗オリーブ褐色(25Y3/3)粗粒砂質シルトで、5cm大の角礫と炭化物を少し含む
8. オリーブ褐色(25Y4/6)シルト質極粗粒砂で、1cm大の角礫を含む

図222 竪堀1

1. C区

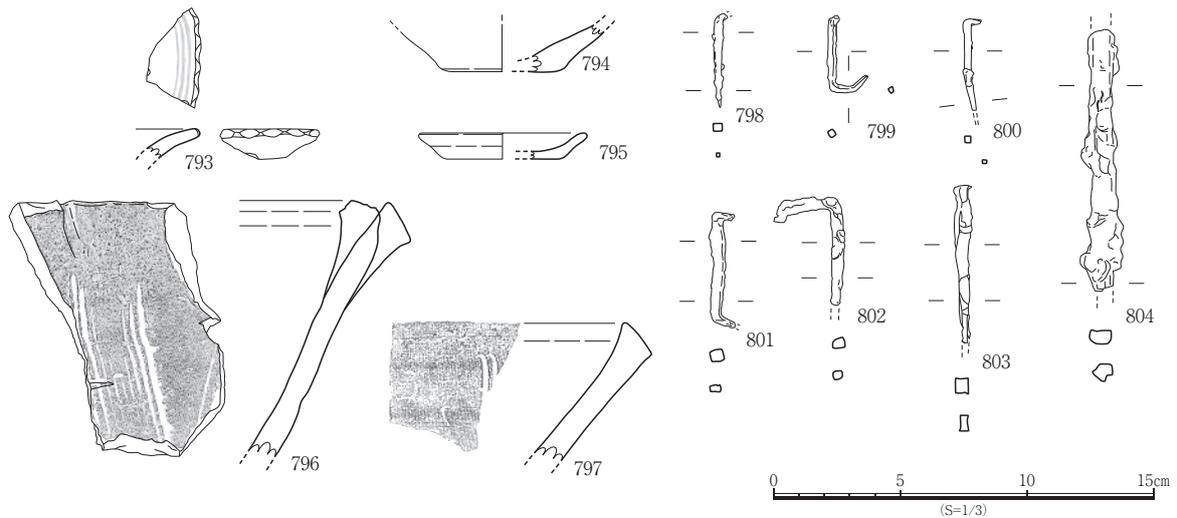


図223 豎堀1出土遺物実測図

出土した青磁皿(793), 埋土6より出土した土師質土器杯(794), 瓦器小皿(795), 備前焼播鉢(796), 埋土7より出土した備前焼播鉢(797), 金属製品釘(798~804)を図示した。

793は青磁稜花皿で, 口縁部の一部が残存する。口縁部は外反し, 端部は稜花形を呈する。内面には圈線が3条みられ, 全面に深いオリーブ色の青磁釉を施す。794は土師質土器杯で, 体部は小さな底部より外上方へ大きく開く。底径は4.8cmを測り, 調整は回転ナデとみられるが, 著しく摩耗するため不明である。795は瓦器小皿で, 口径6.4cmを測る小型のものである。見込はナデ調整, 口縁部は横ナデ調整, 底部外面はナデ調整で, 指頭圧痕が残る。全面に炭素が吸着する。796・797は備前焼播鉢で, 口縁部は四角く収め, 上下に僅かに摘む。調整は回転ナデで, 内面には播目の一部が残る。796は片口の一部が残存する。798~804は鉄製品釘で, 頂部はL字形を呈し薄く, 798~802は身部の断面は方形を呈する。798~801は小型で, 残存長3.7~4.6cmを測り, 798・799の先端は細く尖る。802・803は中型で, 803は残存長6.3cmを測る。804は大型で, 両端は欠損する。803・804の身部の断面は矩形を呈する。

通路状遺構(遺構: 図182・224)

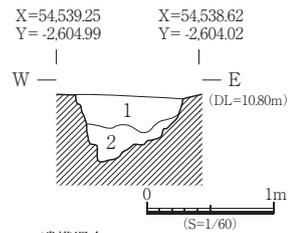
丘陵西側で検出した溝状の遺構で, 北は豎堀1, 南側は湾曲して4区で確認した豎堀2に繋がる。全長8.56m, 全幅0.75~1.68mで, 深さは曲輪2では38cm, 南部の斜面では41~68cmを測る。岩盤を掘削して造られており, 断面は台形を呈し, 埋土は2層に分かれる。出土遺物には, 土師質土器片2点, 鉄釘1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SX-2(遺構: 図225, 遺物: 図226・227-805~831)

豎堀1の東で確認した大型土坑で, P-44に切られる。曲輪の造成土の上からの掘り込みが確認され, 大半は岩盤を掘削して造られていた。隅丸方形を呈し, 長辺2.45m, 短辺2.28m, 深さ3.46mを測る。底面は平らで, 断面は方形を呈する。埋土は10層に分かれ, 埋土1は5~10cm大の角礫の堆積であった。出土遺物には土師質土器47点(杯7, 小皿1, 細片39), 東播系須恵器片口鉢1点, 瓦質土器2点(鍋1, 細片1), 古瀬戸2点(碗1, 細片1), 備前焼播鉢1点, 常滑焼5点(甕1, 細片4), 白磁皿1点, 青磁碗1点, 青花7点(碗1, 皿6), 土製品土錘2点, 石製品3点(砥石1, 五輪塔2), 金属製品32点(釘23, 鉄滓9)がみられ, 805~831を図示した。

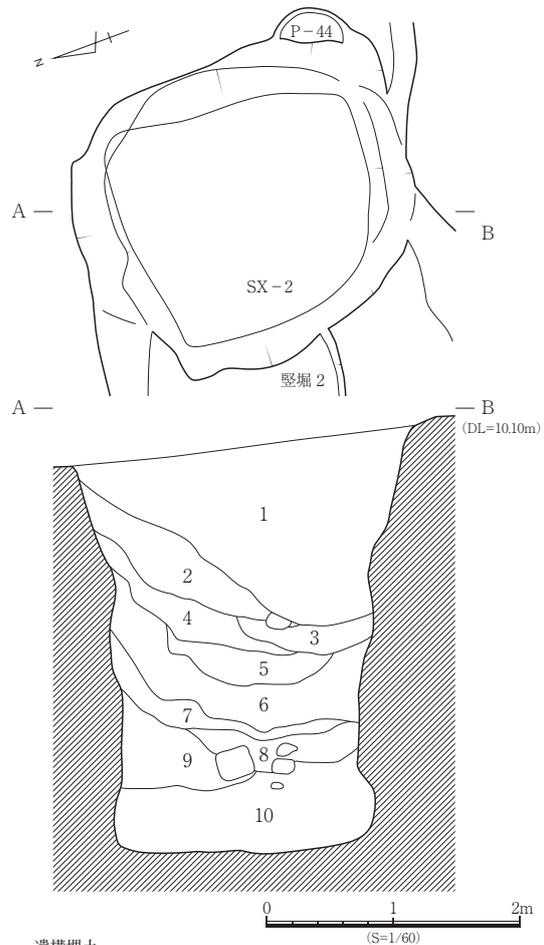
805～815は埋土1から出土した。805は土師質土器小皿とみられ、ほぼ完存する。小型で底部が厚く、口縁部は短い。口径4.1cm、器高1.3cmを測る。著しく摩耗するため調整は不明である。806は東播系須恵器片口鉢で、口縁部は屈曲して上方に短く伸びる。調整は回転ナデとみられるが、全面に煤が付着するため調整は不明である。807は瓦質土器鍋で、口縁部は緩やかに屈曲して、外上方にまっすぐ伸び、端部を四角く収める。内面は横方向のハケ調整、口縁部は横ナデ調整、胴部外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。808は端反形の白磁皿で、全面に白磁釉を施す。809～813は端反形の青花皿である。809・810は内面に圏線、外面には唐草文と圏線の染付、810は見込に文様の一部がみられる。全面に透明釉を施す。811は内面に幅の太い圏線、外面には丁寧な唐草文と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施す。812・813は見込に玉取獅子文、内面に圏線、外面には唐草文と圏線の染付がみられる。高台内には放射状の匏痕が残る。畳付を除き透明釉を施す。814・815は鉄製品釘である。814は小型で、頂部がL字形を呈し、先端は欠損する。断面は方形を呈する。815は大型で、両端を欠損する。残存長8.1cmを測り、身部の断面は方形を呈する。

816～823は埋土2から出土した。816は土師質土器杯で、体部は底部より湾曲して緩やかに立ち上がる。底径6.0cmを測り、調整は回転ナデである。底部の切り離しは摩耗するため不明である。817は土師質土器小皿で、底径4.1cmを測る。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。818は常滑焼甕で、口径42.0cmを測る。頸部は大きく外反し、口縁部は直立し、口縁縁部幅は4.5cmを測る。内面は回転ナデ調整を施し、外面は自然釉が掛かるため調整は不明である。819は青花碗で、体部の一部が残存する。内面には染付の一部が残り、外面には唐草文とみられる文様と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施す。820は土製品土錘で、完存する。紡錘形を呈し、全面にナデ調整を施す。821は鉄製品鏃で、一部が残存する。身部は板状で薄く、菱形を呈するものとみられ、茎部は断面が方形を呈する。822は鉄製品釘で、大型である。頂部は薄く、L字形を呈して



遺構埋土
1. 暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂で、1～5cm大の礫を非常に多く含む
2. 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で、1～3cm大の礫を少し含む

図224 通路状遺構



遺構埋土
1. 褐灰色(10YR4/1)礫で、5～10cm大の角礫の堆積
2. 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で、1～2cm大の黄色礫と5cm大の礫を含む
3. 褐色(10YR4/6)粗粒砂質シルトで、5cm大の礫と炭化物を多く含む
4. オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を少し含み、炭化物を含む
5. 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を少し含む
6. 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで、5cm大の礫を非常に多く含み、炭化物を含む
7. オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を多く含む
8. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、5cm大の礫と炭化物を多く含む
9. にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂質シルトで、20cm大の礫と炭化物を少し含む
10. 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで、3～5cm大の礫を非常に多く含み、河原石と炭化物を含む

図225 SX-2

1. C区

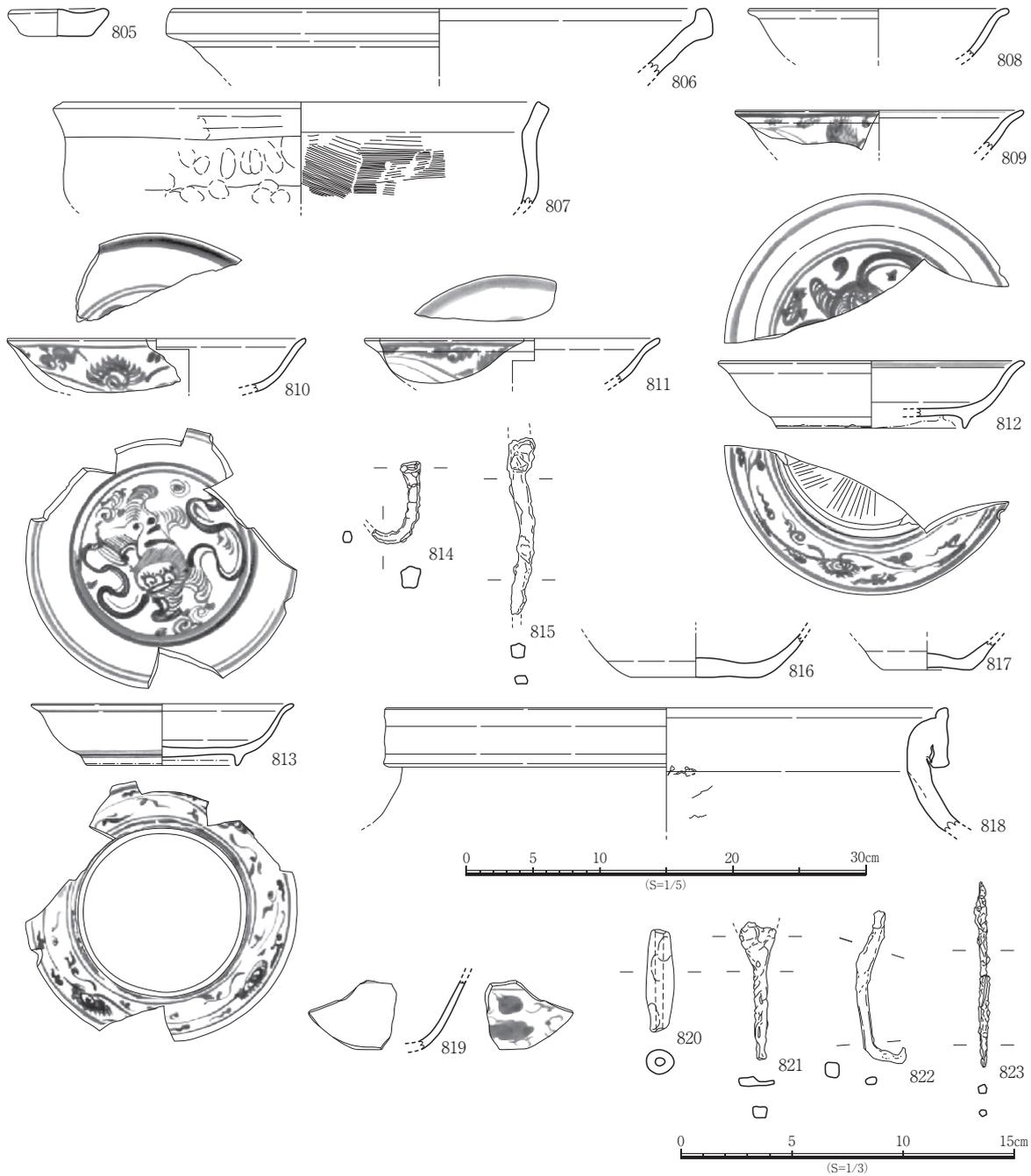


図226 SX - 2出土遺物実測図1

いたとみられるが、まっすぐに伸ばされている。身部断面は方形を呈し、先端は尖る。823も鉄製品釘で、全長9.4cmを測り、先端が細く尖る。身部の断面は方形を呈する。

824は埋土4から出土した石製品砥石で、一部が残存する。角錐形で、破片を再利用しており、割面も使用している。上端と下端は横方向の浅い擦痕、両側面は縦方向の深い擦痕がみられ溝状に凹む。石材は粘板岩とみられる。825～829は埋土6から出土した。825は土師質土器杯で、底径5.3cmを測る小型のものである。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。826は古瀬戸平碗で、口縁部は外上方にまっすぐ伸び、端部は細く仕上げる。全面に灰釉を施す。827は常

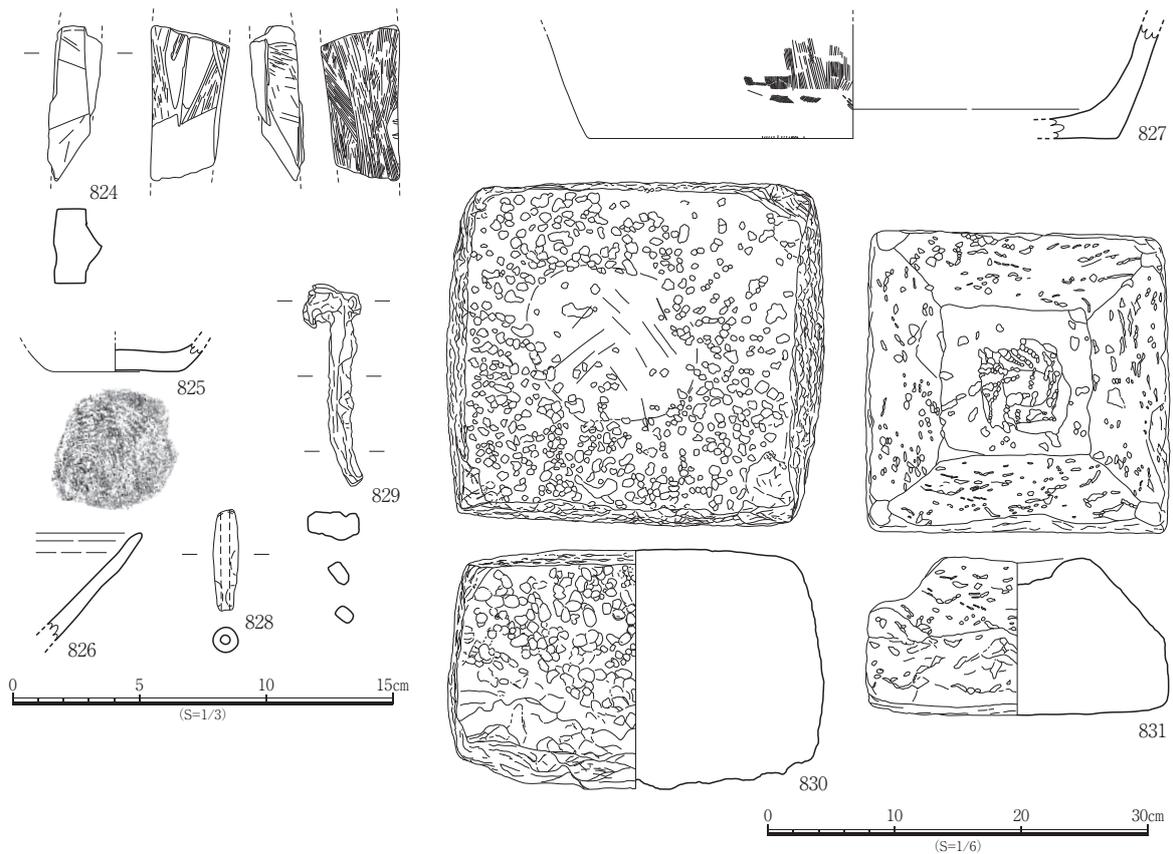


図227 SX - 2出土遺物実測図2

滑焼甕で、底径42.0cmを測る。内面の調整は横方向のナデで、見込は自然釉が掛かるため調整は不明である。胴部外面は縦方向のハケ調整及び横方向のナデ調整、底部外面はナデ調整及び板ナデ調整である。828は土製品土錘で、完存する。紡錘形を呈し、全面にナデ調整を施す。829は鉄製品釘である。大型で、頂部は薄くL字形を呈するが、錆化が著しく形状は不明瞭である。身部の断面は矩形を呈する。830は埋土9から出土した石製品五輪塔で、地輪である。ほぼ完存し、全面に加工痕が残る。下面は粗い加工で凹凸が著しく残り、上面中央部は摩耗により平滑になる。石材は砂岩である。831は埋土10から出土した石製品五輪塔で、火輪である。小型で、笠部の先端は僅かに反り上がり、丸く収める。上面中央には径6.1cm、深さ2.0cmを測る円形の柄穴がみられ、側面には斜方向の加工痕、下面には線状の加工痕が残る。全面に加工痕がみられるが、上面と下面中央は摩耗し平滑になる。石材は砂岩である。

SX - 3(遺構：図228)

曲輪2の北西部で検出した集石遺構である。長径1.10m、短径0.90mの範囲に集石がみられ、掘り込みは認められなかった。石は河原石が大半で、石材は蛇紋岩の他、少量の安山岩や花崗岩、砂岩の角礫がみられた。出土遺物は皆無であった。

SA - 1(遺構：図229)

曲輪2の丘陵西側南端で検出した南北方向の堀または柵列跡で、曲輪

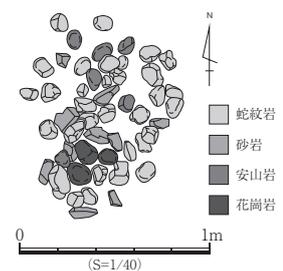


図228 SX - 3

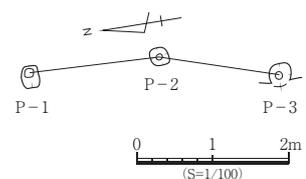


図229 SA - 1

1. C区

外側に位置する。全長3.32m, 柱間寸法は1.60mと1.72mを測る。柱穴は全て岩盤を削り貫いて造られており, 隅丸方形を呈し, 長辺24~30cm, 短辺24~30cm, 深さ13~30cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で, 1cm大の礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SA-2(遺構: 図230)

SA-1の北側で検出した南北方向の塀または柵列跡で, 通路状遺構の幅が広くなっている箇所を確認した。通路状遺構と並行して伸び, 全長1.63m, 柱間寸法は0.73mと0.90mを測る。柱穴は全て岩盤を削り貫いて造られており, 長径28~42cm, 短径24~30cm, 深さ9~25cm, 柱痕径15cmを測る。埋土は掘方が褐色シルト質極粗粒砂で, 1~3cm大の礫を多く含み, 柱痕がオリーブ褐色シルト質粗粒砂で, 0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

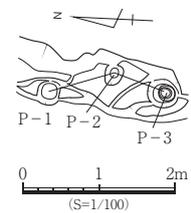


図230 SA-2

SA-3(遺構: 図231)

丘陵北側の切岸裾部で検出した東西方向の塀または柵列跡で, 全長6.80m, 柱間寸法は1.05~2.10mを測る。柱穴は全て岩盤を削り貫いて造られており, 長径26~40cm, 短径22~31cm,

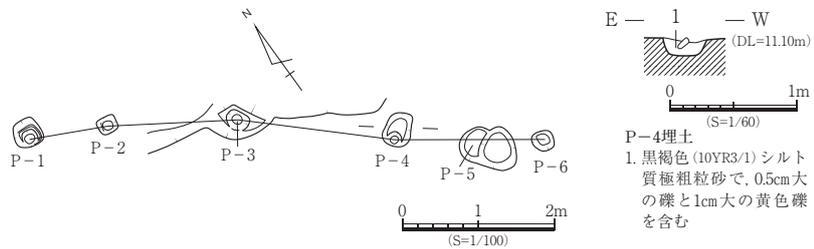


図231 SA-3

深さ9~23cm, 柱痕径16~25cmを測る。掘方の埋土は褐色シルト質粗粒砂で, 1cm大の礫を多く含み, 黄色礫を含んでいた。柱痕の埋土は黒褐色シルト質極粗粒砂で, 0.5cm大の礫と1cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-38

SA-1の東で検出したピットで, 岩盤を削り貫いて造られている。楕円形を呈し, 長径60cm, 短径53cm, 深さ13cmを測る。埋土は暗褐色中粒砂質シルトで, 1~3cm大の黄色礫を含み, 炭化物を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-39

通路状遺構の東で検出したピットで, 岩盤を削り貫いて造られている。楕円形を呈し, 長径34cm, 短径28cm, 深さ37cm, 柱痕径7cmを測る。掘方の埋土は褐色シルト質極粗粒砂で, 1~3cm大の礫を多く含み, 柱痕の埋土は暗褐色シルト質中粒砂で, 0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-40

SA-2の北東で検出したピットで, 岩盤を削り貫いて造られている。隅丸方形を呈し, 長辺26cm, 短辺23cm, 深さ16cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で, 1cm大の礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-41

P-40の北西で検出したピットで, 岩盤を削り貫いて造られている。隅丸方形を呈し, 長辺21cm, 短辺18cm, 深さ25cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で, 1cm大の礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-42

通路状遺構の西で検出したピットで、岩盤を削り貫いて造られている。隅丸方形を呈し、長辺46cm、短辺43cm、深さ19cmを測る。埋土はオリブ褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

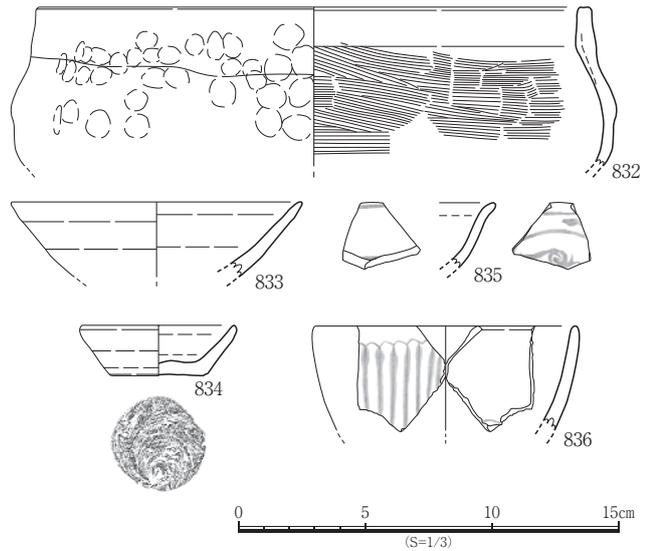


図232 P-45・50・55・61出土遺物実測図

P-43

通路状遺構の底で検出したピットで、岩盤を削り貫いて造られている。楕円形を呈し、検出長54cm、短径54cm、深さ11cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1~3cm大の礫を少し含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-44

SX-2の東で検出したピットで、SX-2を切る。不整楕円形を呈し、長径74cm、短径58cm、深さ46cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、5~10cm大の礫を多く含み、極粗粒砂を含んでいた。出土遺物には瓦質土器鍋片1点がみられ、P-45より出土した832と接合した。

P-45(遺物: 図232-832)

P-44の東で検出したピットで、造成土の上で検出した。円形を呈し、径33cm、深さ14cmを測る。埋土はオリブ褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦質土器鍋1点(832)がみられ、P-44より出土した破片と接合した。832は瓦質土器鍋である。頸部は緩やかに湾曲し、口縁部は上方にまっすぐ伸び、端部は四角く収める。胴部内面は横方向のハケ調整、口縁部は横ナデ調整、胴部外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。粘土帯巻き上げ成形とみられる。

P-46(遺構: 図233)

P-45の北で検出したピットで、造成土の上で検出した。楕円形を呈し、長径48cm、短径37cm、深さ31cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫を多く含み、黄色礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-47

P-46の南で検出したピットで、造成土の上で検出した。隅丸方形を呈し、一辺55cm、深さ11cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫を多く含み、黄色礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-48

P-47の南東で検出したピットで、北は造成土の上で検出し、南は岩盤上の造成土の上で検出し削平される。底でSA-3を検出した。楕円形を呈し、全長1.06m、全幅1.03m、深さ18cmを測る。埋土はオリブ褐色シルト質粗粒砂で、1cmと5~10cm大の礫を含み、炭化物を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-49

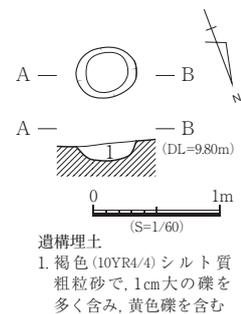


図233 P-46

1. C区

P-48の東で検出したピットで、造成土の上で検出した。楕円形を呈し、長径44cm、短径31cm、深さ19cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫を含み、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかった。

P-50(遺物:図232-833・834)

P-49の南西で検出したピットで、岩盤の上で検出した。円形を呈し、径44cm、深さ11cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器杯(833)と土師質土器小皿(834)がみられた。833は土師質土器杯で、口縁部は外上方へまっすぐ伸びる。全面に回転ナデ調整を施す。834は土師質土器小皿で、口径6.1cmを測る。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。口縁部の一部に僅かに煤が付着する。

P-51(遺構:図234)

P-49の北で検出したピットで、造成土の上で検出した。楕円形を呈し、長径50cm、短径34cm、深さ14cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫と炭化物を多く含み、黄色礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-52

P-51の南東で検出したピットで、造成土の上で検出した。楕円形を呈し、長径42cm、短径32cm、深さ30cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫を多く含み、黄色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-53

P-52の北東で検出したピットで、造成土の上で検出した。円形を呈し、径35cm、深さ35cm、柱痕径15cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫を多く含み、黄色礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-54(遺構:図235)

P-53の南で検出したピットで、造成土の上で検出し、南は岩盤に当たる。楕円形を呈し、長径72cm、短径66cm、深さ54cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、1cm大の礫を多く含み、黄色礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-55(遺構:図185, 遺物:図232-835)

P-54の北東で検出したピットで、造成土の上で検出した。楕円形を呈し、検出長47cm、短径32cm、深さ20cmを測る。埋土は黄褐色中粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を多く含んでいた。出土遺物には図示した青花碗(835)がみられた。835は端反形の青花碗である。内面には圏線、外面には唐草文と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施す。

P-56

P-55の東で検出したピットで、造成土の上で検出した。楕円形を呈し、長径44cm、短径40cm、深さ11cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器杯1点と鉄釘1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-57

P-56の南東で検出したピットで、造成土の上で検出した。隅丸方形を呈し、長辺60cm、短辺50cm、

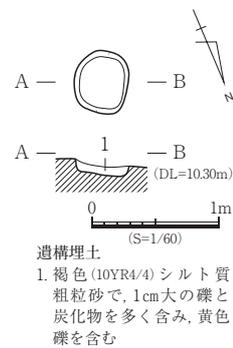


図234 P-51

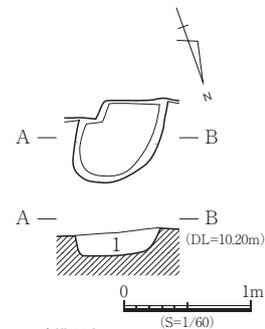


図235 P-54

深さ9cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、0.5cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-58

P-57の東で検出したピットで、造成土の上で検出した。楕円形を呈し、長径49cm、短径41cm、深さ4cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、0.5cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-59(遺構：図236)

P-58の南西で検出したピットで、造成土の上で検出した。楕円形を呈し、長径60cm、短径53cm、深さ11cm、柱径18cmを測る。掘方の埋土は暗褐色シルト質中粒砂で、3~5cm大の礫を含み、柱痕の埋土は黒褐色シルト質中粒砂で、1~3cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-60

P-59の北東で検出したピットで、近世の遺構であるP-67の底で検出した。楕円形を呈し、長径45cm、短径41cm、深さ18cmを測る。埋土は褐色粗粒砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-61(遺構：図237, 遺物：図232-836)

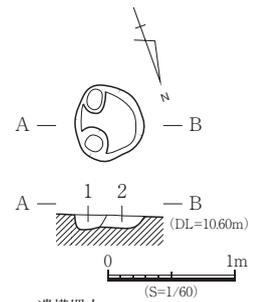
P-60の南で検出したピットで、造成土の上で検出した。楕円形を呈し、長径84cm、短径69cm、深さ19cmを測る。埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器4点(杯3, 細片1)と青磁碗1点、鉄滓1点がみられ、青磁碗(836)を図示した。836は青磁碗で、口縁は上方へ緩やかに内湾して立ち上がる。小振りで、口径10.3cmを測り、外面にはヘラ描の細蓮弁文、内面には文様の一部が残る。全面に透明感のある青磁釉を施す。

iv 4区

竪堀2(遺構：図189・238, 遺物：図239-837~841)

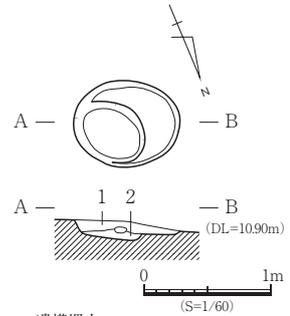
曲輪2西部の下部斜面で検出した東西方向の竪堀で、上部は通路状遺構に繋がり、下部は湿地、南は調査区外へ続く。全長5.75m、検出幅0.75~1.20m、標高差4.52m、傾斜角38°を測る。岩盤を掘削して造られており、断面は台形を呈するものとみられ、埋土は南壁では20層に分かれる。出土遺物には土師質土器5点(杯1, 細片4)と東播系須恵器片口鉢1点、瓦質土器片1点、備前焼2点(擂鉢1, 壺1)、陶器片3点、白磁香炉2点、鉄釘3点、鉄滓1点がみられ、上層より出土した土師質土器杯(837)、東播系須恵器片口鉢(838)、下層より出土した備前焼壺(839)、白磁香炉(840・841)を図示した。

837は土師質土器杯で、体部は底部より稜を持って立ち上がる。底部の切り離しと内面の調整は摩耗するため不明で、外面には回転ナデ調整を施す。838は東播系須恵器片口鉢で、口縁部は玉縁状を呈する。



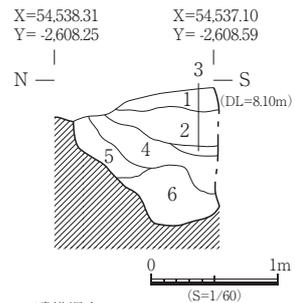
- 遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/3)シルト質中粒砂で、1~3cm大の黄色礫を含む(柱痕)
 2. 暗褐色(10YR3/3)シルト質中粒砂で、3~5cm大の礫を含む(掘方)

図236 P-59



- 遺構埋土
1. 暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂で、0.5~1cm大の黄色礫を多く含む
 2. 黒褐色(10YR3/2)シルト質粗粒砂で、1cm大の黄色礫と5cm大の礫を含む

図237 P-61



- 遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)粘土質シルトで、3~5cm大の礫と粗粒砂を含む
 2. 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトで、3~5cm大の礫と極粗粒砂を含む
 3. 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で、1~3cm大の礫を非常に多く含む
 4. 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで、1~3cm大の礫を含む
 5. オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトで、3~8cm大の礫を非常に多く含む、粗粒砂を含む

図238 竪堀2

1. C区

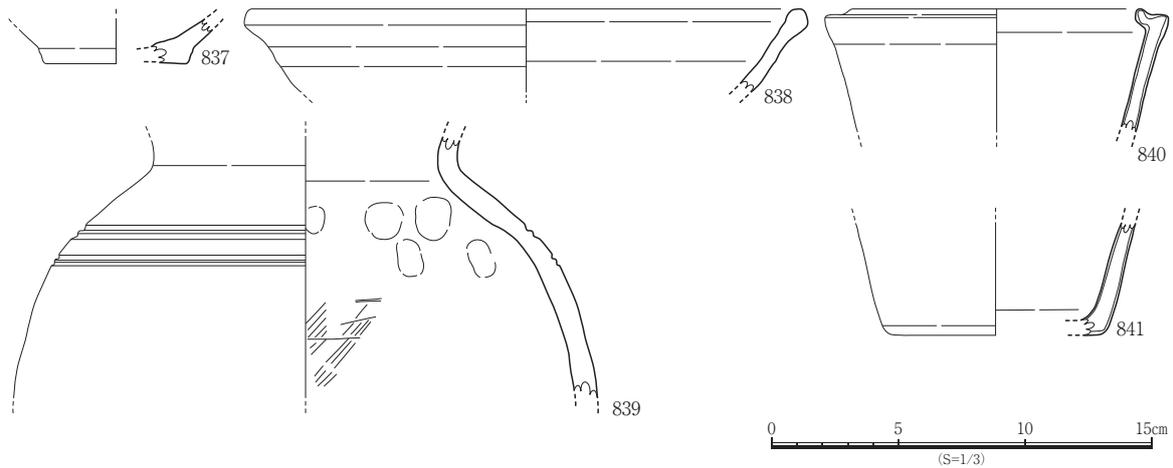


図239 竪堀2出土遺物実測図

回転ナデ調整を施したとみられるが、被熱するため調整は不明である。内外面には煤が付着する。839は備前焼壺で、頸部から胴部が残存する。肩部は大きく張り、頸部は屈曲して上方に立ち上がる。胴部内面は斜方向のハケ調整の後ナデ調整、内面の肩部から頸部は横方向のナデ調整で指頭圧痕が残る。外面は回転ナデ調整で、肩部には2条の沈線が2段巡り、自然釉が掛かる。840・841は白磁香炉とみられ、同一個体の可能性が高い。840は体部が外上方にまっすぐ伸び、口縁部は受け口状を呈する。口径11.3cm、最大径13.6cmを測る。胎土は濃い灰色を呈し、全面に透明感のない白磁釉を厚く施す。841は平底を呈するものとみられ、底径8.0cmを測る。若干の歪みがみられる。胎土は濃い灰色を呈し、全面に透明感のない白磁釉を厚く施す。

v 5区

5区は丘陵裾部の平場で、丘陵北側には調査前より土塁と堀跡が確認できた。丘陵西側では平場は確認できなかった。

土塁(遺構:図199)

丘陵北側の裾部で確認した東西方向の土塁で、西は調査区外へ続き、東は近世に削平されたものとみられる。検出長25.77m、土塁上端幅0.58~1.59m、土塁裾幅3.63mを測る。盛土高は1.20mを測り、西端では44cm、東端では33cmと非常に低く、後世に削平された可能性が高い。土塁の盛土は4層に分かれ、曲輪2の造成土の上に構築されていた。土塁の盛土は丘陵部の土を使用した曲輪の造成土とは異なり、土質は砂質シルトまたは粘土質シルトで平地部の土を用いている。出土遺物には盛土最下層より土師質土器片1点と弥生土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

堀1(遺構:図199・240、遺物:図242~245-842~870)

土塁の内側で確認した東西方向の堀跡で、西は調査区外へ続き、東は堀2に繋がる。調査区東部で緩やかに湾曲し、検出長40.13mを測る。幅は土塁頂部で3.75m、土塁裾部で1.22mを測る。深さは土塁頂部から底まで1.74mを測り、基底

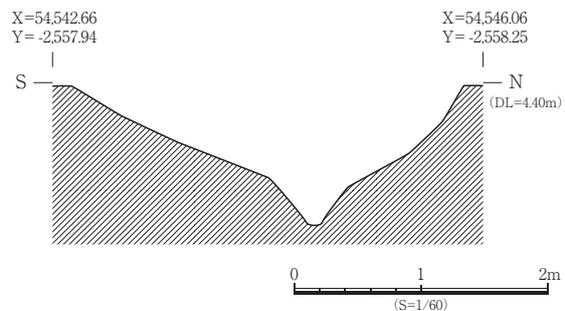


図240 堀1エレベーション図

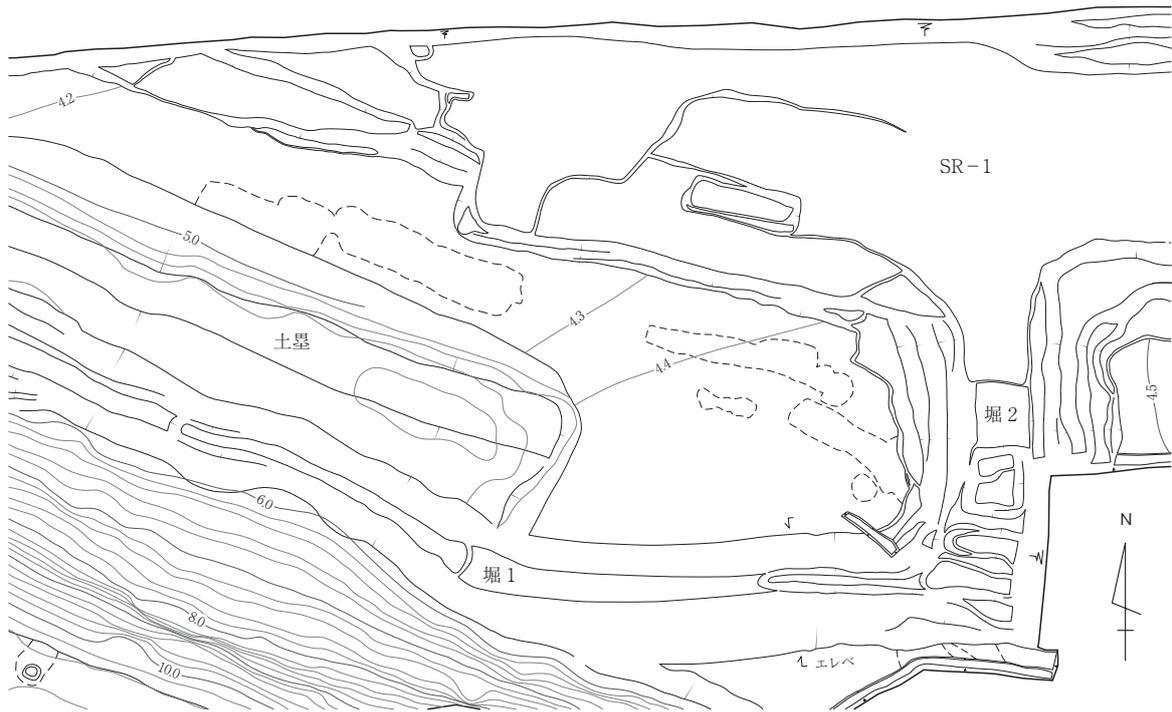


図241 C-5区中世上面遺構平面図(S=1/200)

面は西(4.592m)から東(2.989m)へ傾斜する。断面は西部がU字形、東部は下部が細くV字形を呈し、埋土は6層に分かれ、埋土5には焼土と炭化物がみられる。出土遺物は埋土1～4には近世の遺物が一括廃棄されている箇所もあり、遺物が多くみられ、埋土5・6は出土遺物がみられなかった。出土遺物には土師質土器71点(杯7, 椀2, 小皿1, 細片61), 土師器13点(甕1, 釜1, 竈か1, 火入2, 焙烙1, 細片7), 須恵器4点(甕2, 細片2), 瓦器5点(椀3, 細片2), 瓦質土器6点(鍋1, 釜1, 細片4), 備前焼12点(播鉢2, 壺2, 甕2, 細片6), 常滑焼49点(甕1, 壺または甕46, 細片2), 陶器4点(壺1, 細片3), 白磁3点(碗2, 杯1), 青磁2点(碗1, 皿1), 青花片1点, 磁器5点(碗2, 皿1, 細片2), 近世陶器82点(碗20, 皿3, 卸皿1, 播鉢2, 甕8, 瓶5, 鍋6, 土瓶1, 土瓶蓋1, 火入2, 細片33), 近世磁器63点(碗21, 皿8, 小杯2, 猪口1, 瓶6, 蓋物1, 碗蓋1, 蓋物蓋1, 紅皿1, 細片21), 土製品3点(土錘1, 泥面子1, 人形1), 石製品砥石2点がみられ、842～870を図示した。

842～848は埋土1より出土した。842は備前焼播鉢で、口縁部は四角く収め、上下に摘む。調整は回転ナデである。内面には僅かに播目が残る。843～845は常滑焼甕である。843は肩部が残存する。調整は横方向のナデで、外面の肩部は自然釉が掛かるため調整は不明瞭である。胴部外面には押印文を施す。844は肩部が残存し、内面は横方向のナデ調整で、一部に縦方向のナデ調整を加える。外面は横方向のナデ調整を施し、ヘラ描の記号の一部が残存し、自然釉が掛かる。845は底部が残存し、底径29.6cmを測る。内面は横方向の板ナデ調整及び横方向のナデ調整、外面は縦方向の板ナデ調整の後、横方向のナデ調整を施す。底部外面は板ナデ調整の後、ナデ調整を加える。846は白磁杯である。体部は屈曲して立ち上がり、高台は残存部で3箇所を弧状に挟む。胎土は透明感がなく、内面から高台外面まで白磁釉を施す。畳付と高台内は無釉である。847は同安窯系の青磁皿である。平底で、体部は屈曲する。見込は櫛描によるジグザグ文がみられ、内面から体部外面には青磁釉を施す。底部外面はケズリで、釉は掻き取る。848は土製品泥面子で、完存する。上

1. C区

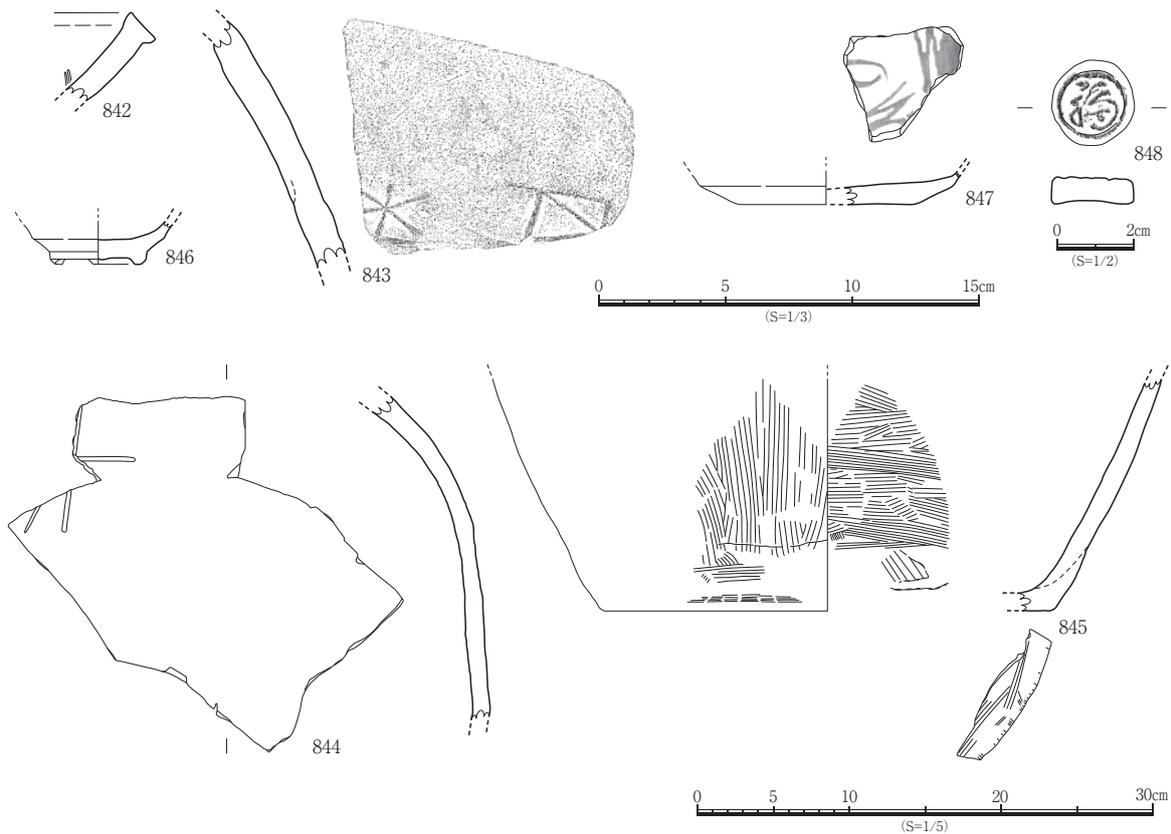


図242 堀1出土遺物実測図1

面と側面は型成形で、上面には型押による「福」字がみられる。下面はナデ調整である。

849～858は埋土2より出土した。849・850は備前焼壺である。849は肩部が残存し、内面は回転ナデ調整、外面は回転ナデ調整とみられるが、自然釉が掛かるため調整は不明である。外面には沈線が2条巡る。850は底部が残存する。平底で、底径11.0cmを測る。体部は比較的上方へまっすぐ立ち上がる。体部は回転ナデ調整で、底部外面は無調整である。851～853は常滑焼甕で、底部が残存する。851は底径30.5cmを測る。内面は横方向の板ナデ調整及び横方向のナデ調整、外面は縦方向の強いナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。852は底径42.7cmを測る。内面はナデ調整で、胴部下部は横方向の強いナデ調整を施す。外面は縦方向のヘラナデ調整で、胴部下部は横方向のナデ調整、底部外面は粗いナデ調整を施す。853は底径52.6cmを測る。見込は横方向のナデ調整、胴部内面は横または縦方向のヘラナデ調整、胴部外面は縦方向のヘラナデ調整で、一部に横方向のナデ調整を加え、底部外面はナデ調整を施す。854は近世陶器壺で、肩部が大きく張り、口縁部は短く直立し、端部は四角く収め肥厚する。調整は回転ナデとみられるが、全面に灰釉とみられる緑色の釉を施し調整は不明である。外面には櫛描文が2条巡る。855は瀬戸・美濃系の近世磁器端反碗である。見込には松葉と圏線、内面は雷文の崩れとみられる文様と圏線、外面には扇文と木賊文とみられる文様と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギし、砂が付着する。856は肥前産の近世磁器紅皿である。外面は型押による貝殻状の文様がみられ、内面から口縁部外面に白磁釉を施す。857・858は平瓦である。凹凸面は縦または横方向のナデ調整で、キラ粉が付着する。側面には刻印がみられ、857は「御瓦師」、858は方形枠内に「や(ヤ)ス□」の刻印が残る。A

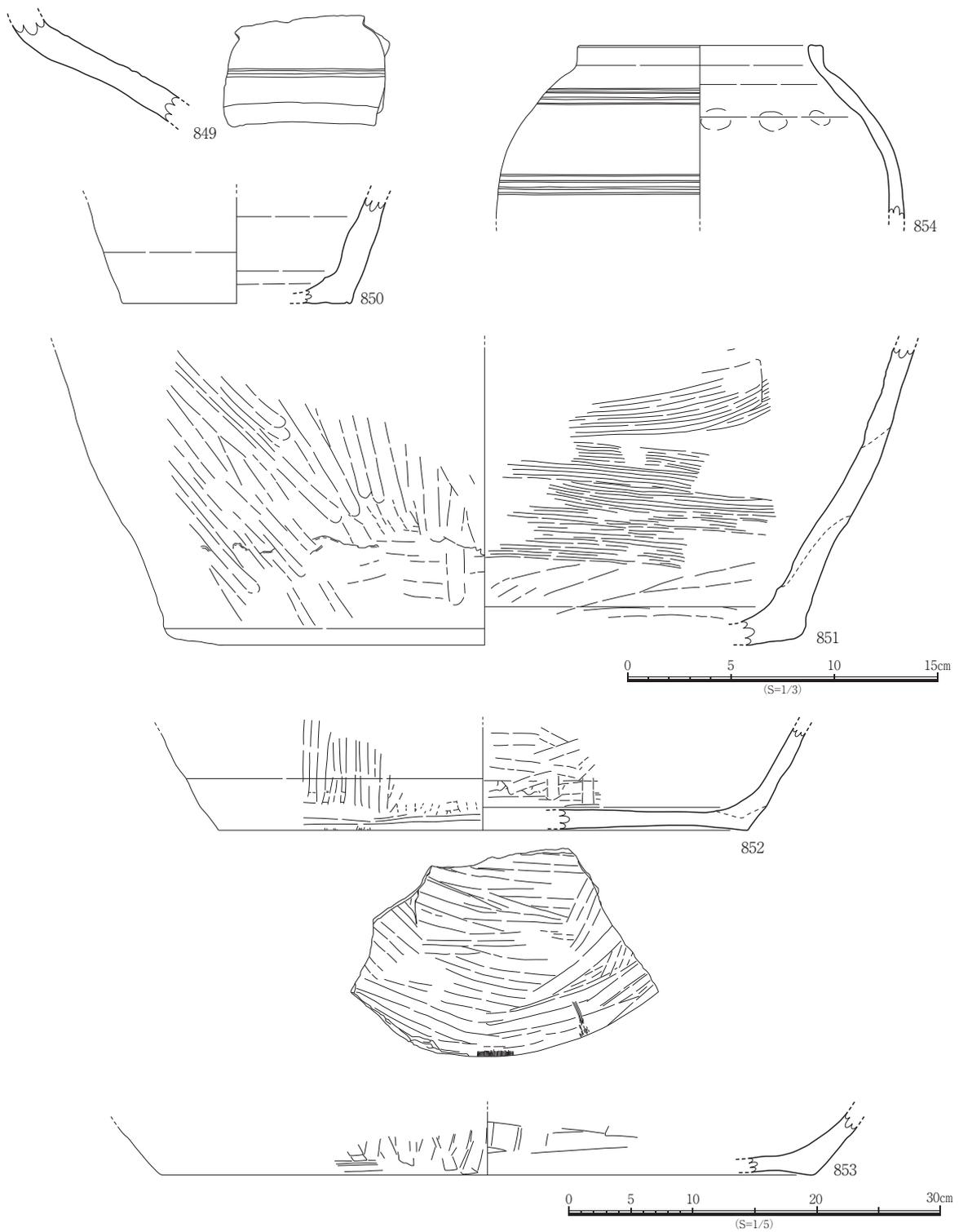


図243 堀1出土遺物実測図2

区で出土した105には「や(ヤ)ス孫」の刻印がみられ、同じ刻印の可能性はある。

859・860は埋土3より出土した。859は備前焼播鉢で、口縁端部は四角く収め上方に摘む。調整は回転ナデで、内面には播目が残る。860は備前焼甕で、頸部は直立し、口縁部は玉縁を呈する。全面に回転ナデ調整を施し、外面には自然釉が掛かる。

1. C区

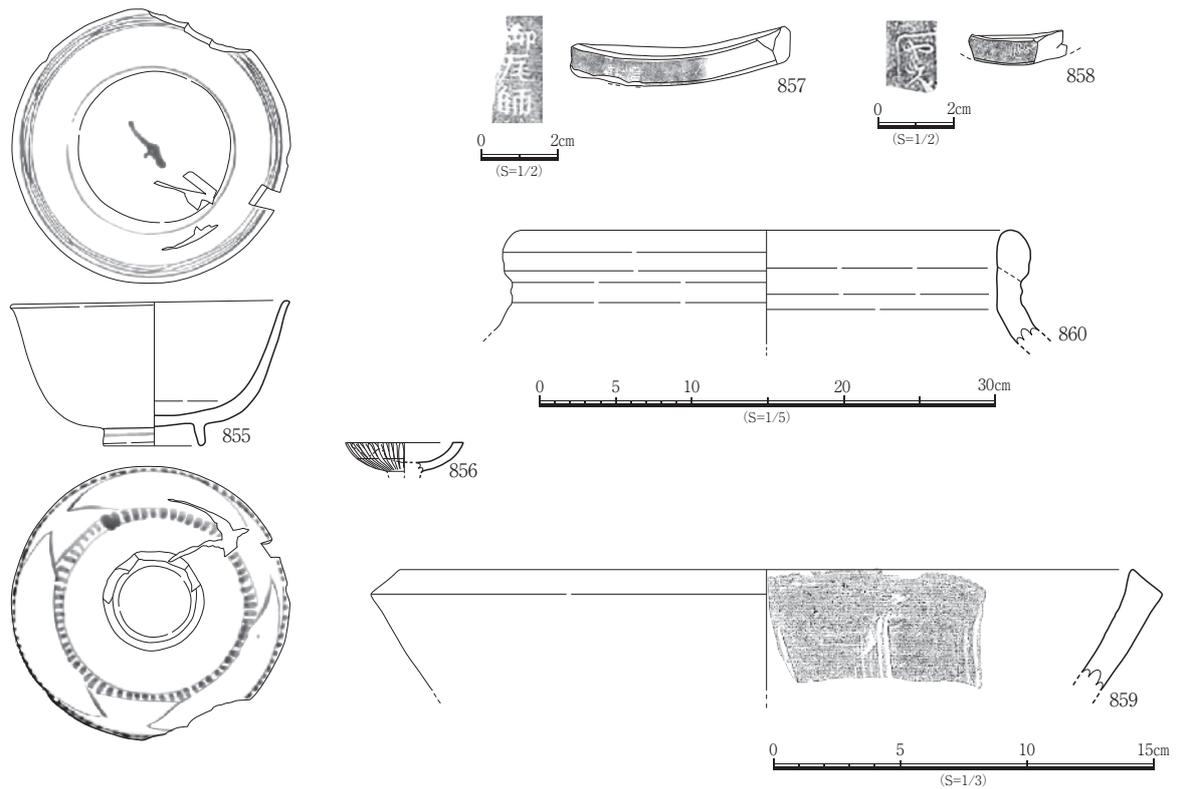


図244 堀1出土遺物実測図3

861～870は埋土4より出土した。861は土師器甕で、口縁部は外上方へやや内湾して伸び、端部は中央が凹む。全面に横ナデ調整を施す。862は土師器釜で、口縁部はやや内湾し、外面には断面が三角形を呈する小さな鏝を貼付する。全面に横ナデ調整を施し、外面には煤が付着する。863は土師器甕とみられ、頸部は「く」の字状に屈曲し、口径34.0cmを測る。内面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整の後、外面に横方向のハケ調整、頸部外面には横方向のナデ調整を施す。864は近世の土師器火鉢で、浅鉢形を呈する。胴部は型成形で、外面には型押による波文がみられ、見込と内面は回転ナデ調整を施す。底部外面はナデ調整で、円柱形を呈する低い脚を3箇所に貼付する。865は御厩系の土師器焙烙で、口径42.9cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり、端部は肥厚して凹む面を持つ。内面から口縁端部は回転ナデ調整を施し、外面は煤が付着するため調整は不明である。讃岐産である。866は須恵器甕で、内面はヘラナデ及びナデ調整、外面は平行タタキが残り、底部外面はナデ調整とみられる。867は備前焼甕で、頸部は直立し、口縁部は玉縁状で、断面が楕円形を呈する。全面に回転ナデ調整を施す。口縁部には自然釉が掛かる。868・869は常滑焼甕で、底部が残存する。868は底径33.0cmを測る。内面の調整は見込から胴部下部まで横方向のナデ、胴部上部が横方向のヘラナデの後、縦方向のナデ調整である。外面は縦方向のナデ調整及び横方向のナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。869は底径42.6cmを測り、器壁が非常に厚い。内面は見込が横方向のナデ調整、胴部が横方向の板ナデ調整を施す。外面は胴部が横方向のナデ調整、底部がナデ調整で、一部に板ナデ調整を施す。870は能茶山窯の近世磁器端反蓋である。天井部には岩、樹、水文、口縁部内面に雷文帯、外面に海浜風景文と漢詩、摘み内には方形枠に「茶」銘と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施し、摘み端部は釉ハギする。

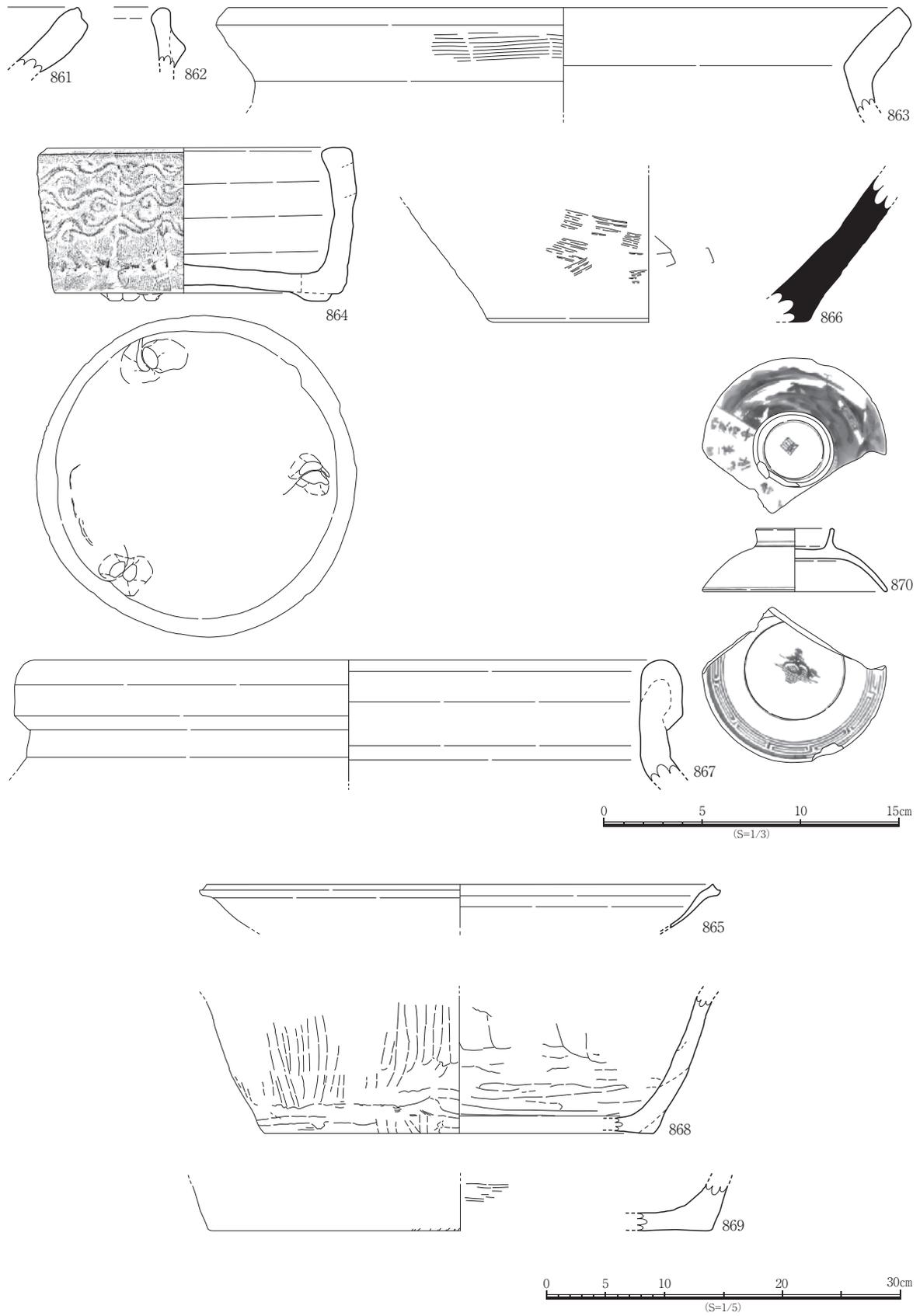
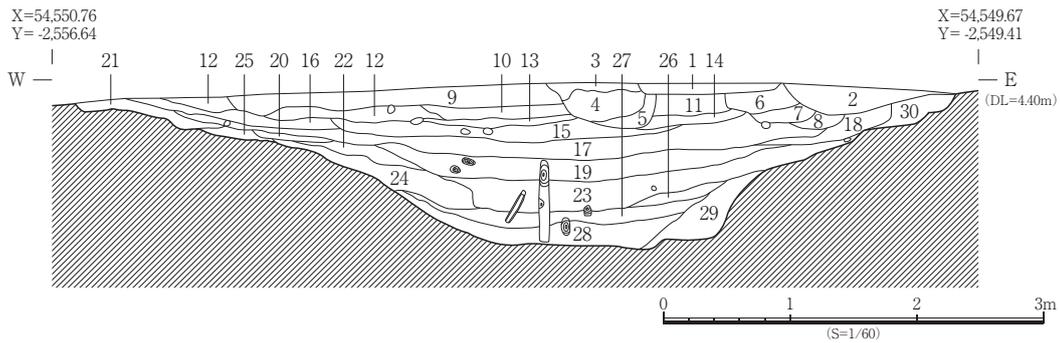


図245 堀1出土遺物実測図4

1. C区



遺構埋土

1. オリーブ褐色 (25Y4/4) 中粒砂質シルト (近世土坑)
2. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂質シルトで、10cm大の礫と黄色礫、マンガンを含む (SK-127)
3. 灰色 (25Y6/1) シルト質粗粒砂で、橙色シルトブロックを含む (近世ピット埋土1)
4. 灰色 (5Y6/1) 粗粒砂質シルトで、橙色シルトブロックと0.5cm大の黄色礫を含む (近世ピット埋土1)
5. 灰黄色 (25Y6/2) 粗粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を少し含む (近世ピット埋土1)
6. 暗灰黄色 (25Y5/2) 中粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を少し含む、マンガンを含む (近世土坑埋土1)
7. 暗灰黄色 (25Y5/2) 粗粒砂質シルトで、0.5cm大の黄色礫を少し含む、やや粘性強い (近世土坑埋土2)
8. 暗灰黄色 (25Y6/2) 粗粒砂質シルトで、マンガンを含む (近世土坑埋土3)
9. 黄灰色 (25Y6/1) 中粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を少し含む、マンガンを含む (堀2埋土1)
10. 暗灰黄色 (25Y5/1) 中粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を少し含む、マンガンを多く含む (堀2埋土2)
11. 褐灰色 (10YR6/1) シルト質粗粒砂で、黄色シルトブロックと炭化物を少し含む、マンガンを多く含む (堀2埋土3)
12. 灰色 (5Y6/1) 粗粒砂質シルトで、灰色シルトブロックと1cm大の黄色礫を含む (堀2埋土4)
13. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 極粗粒砂質シルトで、マンガンを含む (堀2埋土5)
14. 暗灰黄色 (25Y5/2) 粗粒砂質シルトで、マンガンを含む (堀2埋土6)
15. 灰色 (5Y5/1) シルトで、マンガンを含む (堀2埋土7)
16. 灰色 (5Y5/1) 粗粒砂質シルト (堀2埋土8)
17. 黄灰色 (25Y4/1) 中粒砂質シルト (堀2埋土9)
18. 暗灰黄色 (25Y5/2) 粗粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を少し含む (堀2埋土10)
19. 黄灰色 (25Y4/1) 中粒砂質シルトで、木片を多く含む (堀2埋土11)
20. オリーブ灰色 (5Y3/2) 粗粒砂 (堀2埋土12)
21. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト質中粒砂で、マンガンを含む (堀2埋土13)
22. オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト質粗粒砂で、木片を多く含む (堀2埋土14)
23. オリーブ黒色 (5Y3/2) 粗粒砂質シルト (堀2埋土15)
24. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 極粗粒砂で、灰色シルトブロックと1cm大の礫、木片を含む (堀2埋土16)
25. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 極粗粒砂で、1cm大の円礫を少し含む (堀2埋土17)
26. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粗粒砂 (堀2埋土18)
27. 灰色 (10Y5/1) シルトで、木片を少し含む (堀2埋土19)
28. 灰色 (7.5Y4/1) シルトで、木片を少し含む (堀2埋土20)
29. オリーブ褐色 (10Y3/1) シルト質粗粒砂で、シルト質粗粒砂と粗粒砂の互層 (堀2埋土21)
30. オリーブ褐色 (25Y4/3) シルト質粗粒砂で、0.5cm大の黄色礫を含む (堀2埋土22)

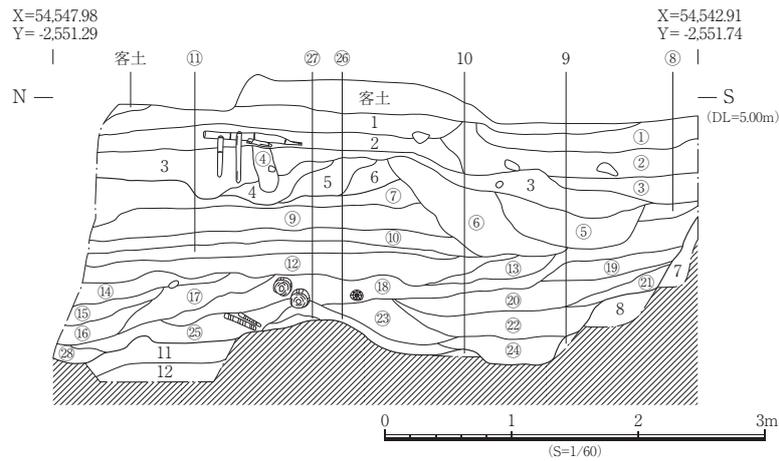
図246 堀2セクション図1

堀2(遺構：図79・241・246～248, 遺物：図249～871～888)

堀1の東で確認した南北方向の堀跡で、南端は直角に折れて堀1に繋がり、北は二ノ堀遺跡より続く自然流路であるSR-1に繋がる。全長8.19m、全幅6.05m、深さ1.02～1.43mを測る。基底面の標高はSR-1と同じで平らであり、南端は堀2の方が低く、堀1は西に向かって高くなる。堀2の断面は台形を呈し、埋土は22層に分かれる。

基底面は粗粒砂または円礫を多く含む、南部は意図的に基底面を高く掘り残し、堀跡に対して垂直方向の帯状の高まりが確認された。この高まりは検出幅2.00m、高さ17cmを測る。この高まりの上に16cmの盛土がみられ、径約12cmの丸太が3本置かれた状態で出土した。丸太の1本は先端を剣先に加工していた。この高まりの北側からは角杭に板2枚を上下に釘で打ち付けたものが出土した。角杭は断面が長辺4cm、短辺2.5cmを呈し、全長95cmを測り、長辺の中央には8～12cm間隔で8箇所断面が方形を呈する鉄釘または釘孔が残存していた。板は調査区外へ続き、検出長1.67m、検出幅0.25m、厚さ1～2cmを測り、表面には削りの痕跡が残っていた。下の板の裏には径1cm、長さ18cmの竹が等間隔に11本縦方向に張り付き、それらの下に横方向に径1.5cm、長さ55cmの竹が3本みられた。これらの木材を使用した遺構は、自然流路から入る水量を調節するためのものとみられる。

出土遺物には土師質土器570点(杯55, 椀11, 皿1, 小皿1, 細片502), 土師器18点(甕7, 甕または釜2,



層位

- 第1層 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルト層で、1~3cm大の黄色礫を含む(耕作土)
- 第2層 灰色(5Y4/1)シルト質中粒砂層で、1cm大の礫を多く含み、木片を含む
- 第3層 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルト層で、3cm大の礫を含む
- 第4層 黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質シルト層で、上部にマンガンが堆積する
- 第5層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂層で、土器を含む
- 第6層 灰オリーブ色(7.5Y4/2)細粒砂質シルト層で、マンガン含む
- 第7層 オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土質シルト層(自然堆積層)
- 第8層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極粗粒砂質層で、1~8cm大の円礫を多く含む(自然堆積層)
- 第9層 オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質粗粒砂層で、1cm大の礫と極粗粒砂を含む(自然堆積層)
- 第10層 暗オリーブ灰色(5GY4/1)極粗粒砂層(自然堆積層)
- 第11層 黒褐色(10YR3/2)シルト質粗粒砂層で、3~5cm大の礫を含む(自然堆積層)
- 第12層 オリーブ褐色(2.5Y3/3)極粗粒砂層(自然堆積層)

遺構埋土

- ① 灰オリーブ色(5Y4/2)極粗粒砂(攪乱)
- ② 灰色(5Y5/1)シルト質極粗粒砂で、10cm大の礫を含む(攪乱)
- ③ オリーブ褐色(2.5Y4/3)極粗粒砂(攪乱)
- ④ 灰色(5Y4/1)粗粒砂質シルト(杭跡)
- ⑤ オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を多く含む(攪乱14埋土1)
- ⑥ 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルトで、5cm大の礫を含む(攪乱14埋土2)
- ⑦ 灰色(5Y5/1)粗粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫と炭化物を含む(堀2埋土1)
- ⑧ 灰色(7.5Y5/1)シルトで、マンガンを含む(堀2埋土2)

- ⑨ 灰色(7.5Y4/1)シルト質粗粒砂で、1cm大の礫と炭化物を少し含む(堀2埋土3)
- ⑩ 灰色(5Y5/1)シルトで、中粒砂と炭化物を少し含む(堀2埋土4)
- ⑪ 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで、木片を多く含む(堀2埋土5)
- ⑫ 灰色(5Y5/1)シルトで、1cm大の礫と木片を含み、中粒砂を少し含む(堀2埋土6)
- ⑬ 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質粗粒砂で、1cm大の礫と極粗粒砂を含む(堀2埋土7)
- ⑭ オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質粗粒砂で、5cm大の礫と木片を含む(堀2埋土8)
- ⑮ 灰色(7.5Y5/1)シルト(堀2埋土9)
- ⑯ 灰色(10Y4/1)粗粒砂で、1cm大の礫とシルトを含む(堀2埋土10)
- ⑰ オリーブ灰色(10Y5/2)シルト質粗粒砂で、1cm大の円礫と木片を多く含み、土器を含む(堀2埋土11)
- ⑱ オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂質シルトで、5cm大の黄色礫と木片を多く含む(堀2埋土12)
- ⑲ 灰色(7.5Y5/1)シルトで、木片を少し含む(堀2埋土13)
- ⑳ 灰色(7.5Y4/1)シルトで、粗粒砂ブロックと5cm大の礫を少し含む(堀2埋土14)
- ㉑ 灰色(10Y5/1)粗粒砂質シルト(堀2埋土15)
- ㉒ 灰色(7.5Y5/1)粗粒砂質シルトで、1~2cm大の礫と木片、炭化物を含む(堀2埋土16)
- ㉓ オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質粗粒砂で、炭化物を含む(堀2埋土17)
- ㉔ 灰色(10Y4/1)シルトで、粗粒砂を少し含む(堀2埋土18)
- ㉕ オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト質粗粒砂で、1cm大の円礫と木片を多く含み、土器を含む(堀2埋土19)
- ㉖ 灰色(7.5Y5/1)中粒砂質シルトで、木片を含む(堀2埋土20)
- ㉗ 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粗粒砂(堀2埋土21)
- ㉘ オリーブ褐色(2.5Y4/3)極粗粒砂(堀2埋土22)

図247 堀2セクション図2

釜1, 細片8), 須恵器8点(椀1, 壺2, 壺または甕2, 細片3), 瓦器32点(椀26, 細片6), 東播系須恵器3点(片口鉢1, 椀2), 瓦質土器7点(釜2, 搦鉢2, 細片3), 古瀬戸瓶子または壺1点, 備前焼7点(壺または甕2, 細片5), 陶器片1点, 白磁11点(碗10, 細片1), 青磁碗4点がみられ, 871~888を図示した。

871・872は埋土1より出土した。871は瓦器椀で、底部には断面が台形を呈する高台を貼付し、体部は内湾する。内面の調整はナデで、僅かにミガキが残るが、摩耗するため不明瞭である。外面の調整は口縁部に横ナデを2段、体部はナデで指頭圧痕が残る。872は青白磁合子蓋で、口縁部は直立し、天井部は平らである。型押成形で、口縁部外面は型による蓮弁文、天井部外面は型による陽出の花文とみられる文様が僅かに残る。口縁部内面を除き、淡い青磁釉を施す。873は埋土4より出土した土師質土器杯で、体部は底部より屈曲して立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。874~878は埋土7より出土した。874・875は土師質土器椀である。874は平高台を呈し、底部の器壁が厚い。器面は摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回

1. C区

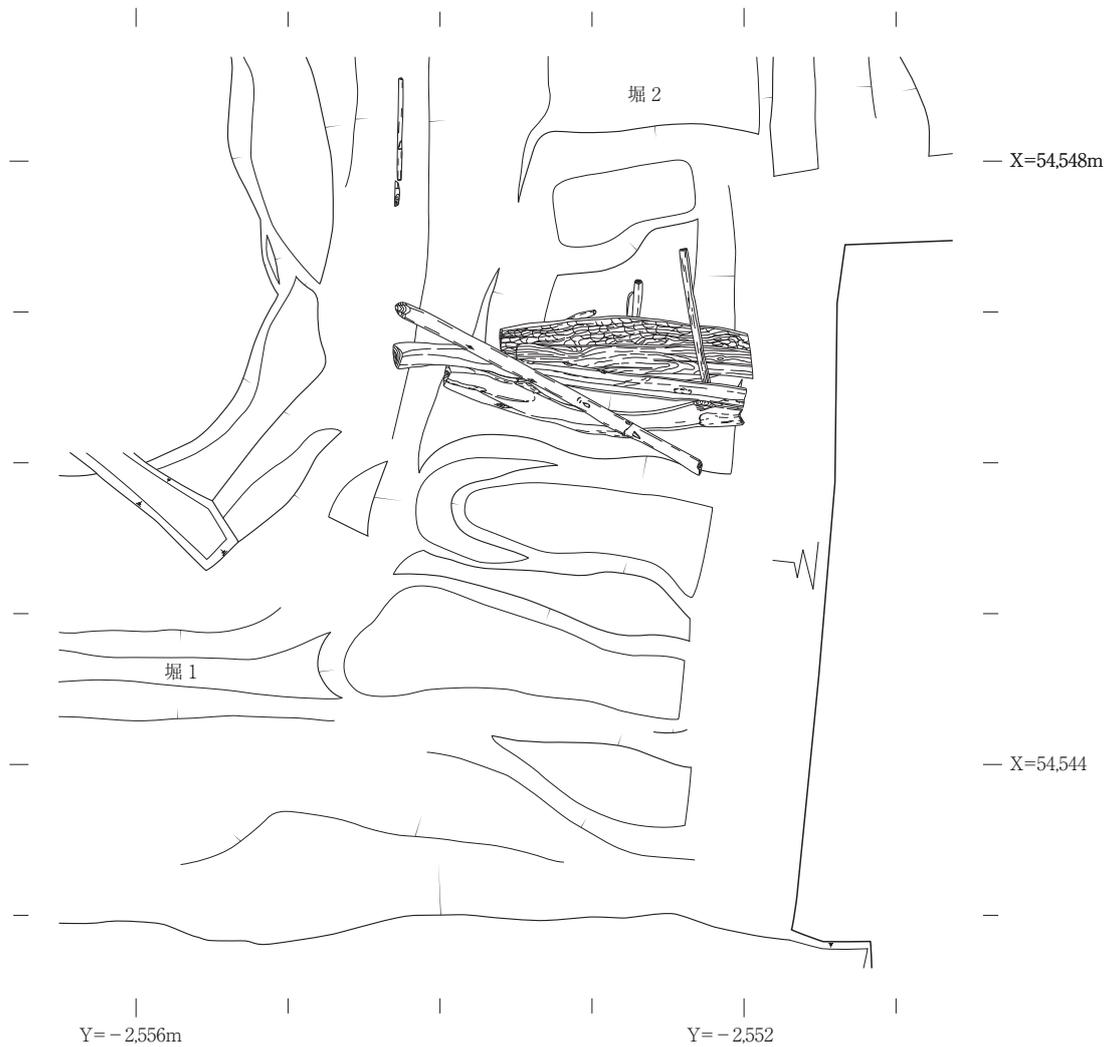


図248 堀2木材出土図(S=1/50)

転糸切りである。875は輪高台を呈し、底部の器壁が厚く、断面が台形を呈する高台を貼付する。調整は内面が丁寧なナデ及びヘラナデ、体部外面は回転ナデ、高台内はナデである。876は須恵器甕である。平底で、体部は外上方へまっすぐ伸びる。調整は内面が横方向のナデ、外面が回転ナデで下部には回転ケズリを加え、上部には斜方向の平行タキを施す。底部外面はナデ調整で、中央には粗い砂が付着する。877は東播系須恵器片口鉢で、器壁が薄く、口縁部は僅かに肥厚して上方へ摘み上げる。調整は回転ナデである。878は白磁碗で、底部には太く低い高台が付く。内面から外面体部上部には白磁釉を施す。外面体部下から底部は削り出しで、無釉である。879・880は埋土9より出土した。879は土師質土器碗で、輪高台を呈し、断面が台形を呈する高台を貼付する。底部の器壁が厚く、杯の底部を見込より押し出し、碗の形状を作り出している。調整は回転ナデとみられるが、内面は摩耗するため調整は不明で、高台内はナデとみられる。880は畿内系の瓦質土器釜で、口縁部は内湾し、幅の広い鏝を斜上方に貼付する。調整は内面が横方向のハケ及びナデ、口縁部が横ナデである。鏝の下面は摩耗するため調整は不明で、煤が付着する。881は埋土11より出土した紀伊型の土師器釜で、頸部は大きく湾曲して外反し、口縁端部は内傾して短く伸びる。調整は口縁部が横ナデ、頸部は横方向のナデである。外面には煤が付着する。882は埋土13より出土

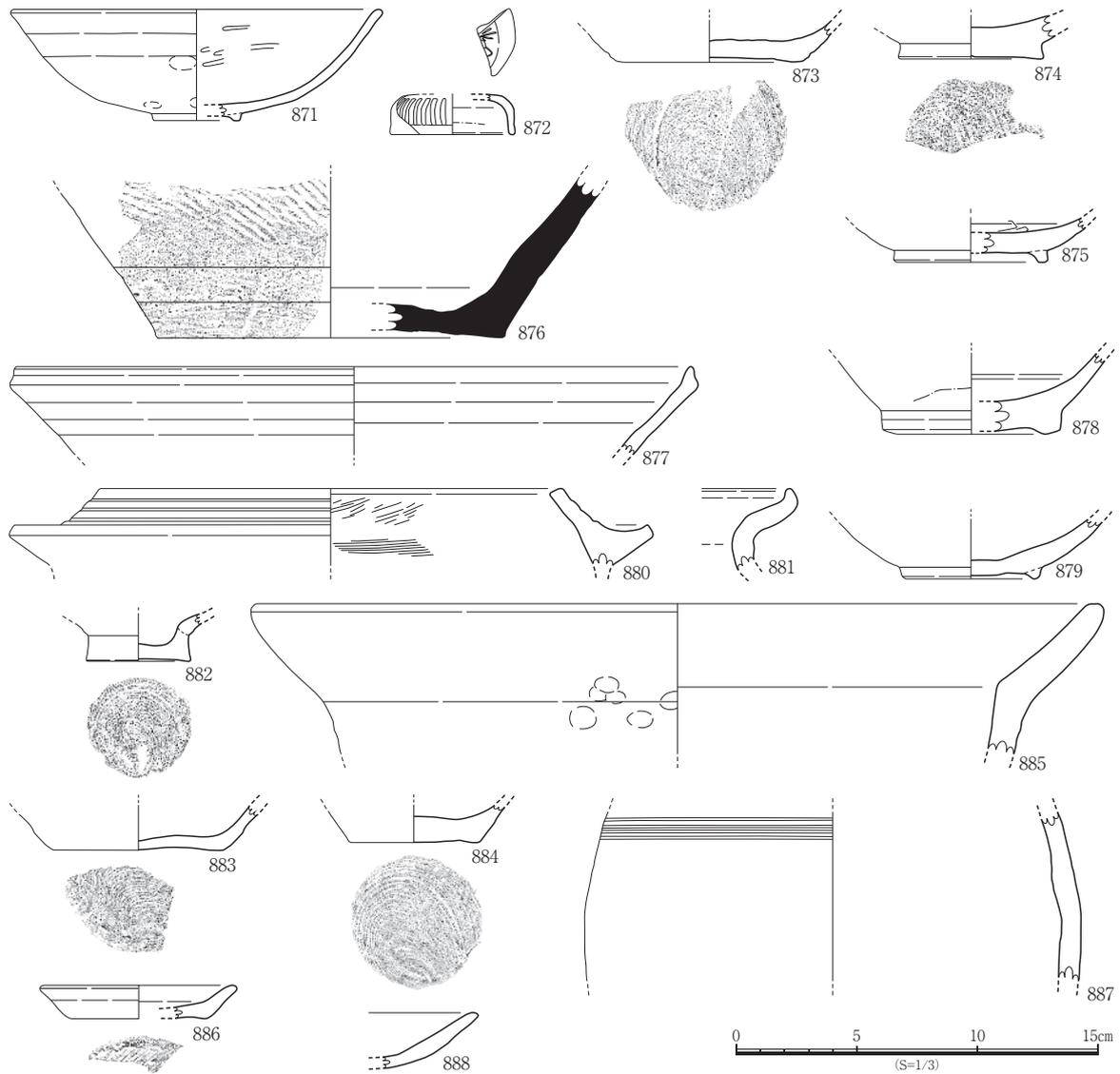


図249 堀2出土遺物実測図

した土師質土器杯で、柱状高台を呈し、見込は大きく落ち込み、体部は外へ大きく広がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。883～885は埋土15より出土した。883は土師質土器杯で、器壁が薄く、体部は外上方へ伸びる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。884・885は木材の南側で出土した。884は土師質土器杯で、底部は器壁が厚く、径が小さい。調整は回転ナデとみられるが摩耗するため不明瞭で、底部の切り離しは回転糸切りである。885は土師器鍋で、口径が大きく、口縁部は僅かに内湾して大きく開く。調整は胴部内面が横方向のナデ、口縁部が横ナデ、胴部外面が横方向のナデで指頭圧痕が残る。886・887は埋土19より出土した。886は土師質土器小皿で、口縁部は僅かに外反する。口径は7.9cmを測る。調整は回転ナデとみられるが摩耗するため不明瞭で、底部の切り離しは回転糸切りである。887は古瀬戸瓶子または壺で、胴部が残存する。調整は内面が横方向の粗いナデで、無釉、外面には灰釉を施し、上部には櫛描文がみられる。888は埋土20より出土した土師質土器皿で、口縁部は緩やかに外反する。調整は回転ナデで、外面体部下はケズリを加える。

③ 近世

i 3区

P-62(遺構:図250, 遺物:図253-889・890)

丘陵西側で検出した楕円形を呈するピットで、長径82cm, 短径60cm, 深さ11cmを測る。埋土は暗褐色シルト質細粒砂で、1cm大の礫と中粒砂を含んでいた。ピット内からは図示した瓦質土器火鉢(889)が椶瓦(890)を蓋にし、据え置かれた状態で出土した。火鉢の中には土は殆ど入っておらず、木根が多くみられた。その他の出土遺物は皆無であった。889は瓦質土器火鉢で、浅鉢形を呈し、口縁部は肥厚する。胴部は型成形で、内面は回転ナデ調整の後、見込の中央部にナデ調整を加える。底部外面はナデ調整で、円柱形を呈する低い脚を3箇所貼付する。胴部外面には接合痕が残る。890は椶瓦で、凹凸面にナデ調整を施す。

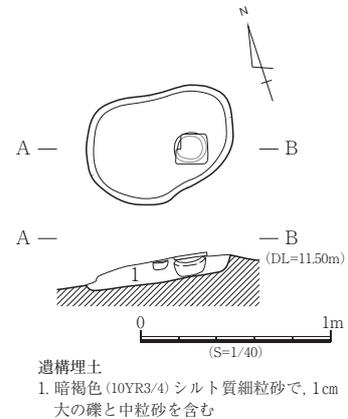


図250 P-62

P-63

P-62の北で検出したピットで、P-64を切る。楕円形を呈し、長径40cm, 短径38cm, 深さ5cmを測る。埋土は黒褐色シルト質中粒砂で、5cm大の礫と黄色礫を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-64(遺構:図251, 遺物:図253-891・892)

P-63の西で検出したピットで、P-63に切られる。楕円形を呈し、長径49cm, 短径39cm, 深さ15cmを測る。埋土は暗褐色シルト質中粒砂で、5cm大の礫を含んでいた。ピット内には図示した瓦質土器火鉢(891)が椶瓦(892)を蓋にし、据え置かれた状態で出土した。火鉢内の埋土は黒褐色シルト質中粒砂で、0.5cm大の礫を含んでいた。その他の出土遺物は皆無であった。891は瓦質土器火鉢で、浅鉢形を呈し、口縁部は肥厚する。胴部は型成形で、内面は回転ナデ調整の後、口縁部に横ナデ調整を加える。底部外面は無調整で、円柱形を呈する低い脚を3箇所貼付する。892は椶瓦で、隅に切り込みがみられる。凹凸面に縦または横方向のナデ調整を施す。側面には方形枠内に「□イ松」とみられる刻印が残る。

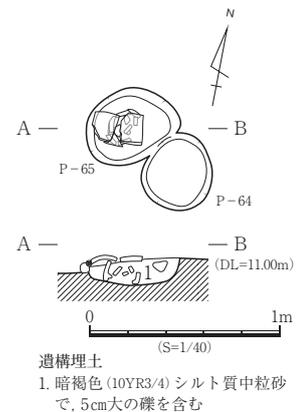


図251 P-64

P-65(遺構:図252, 遺物:図253-893)

P-64の北で検出したピットで、隅丸方形を呈し、一辺48cm, 深さ9cmを測る。埋土は暗褐色シルト質中粒砂で、3~5cm大の礫を含んでいた。ピット内からは図示した瓦質土器火鉢(893)が据え置かれた状態で出土した。火鉢内の埋土は黒褐色シルト質中粒砂であった。その他の出土遺物は皆無であった。893は瓦質土器火鉢で、浅鉢形を呈し、口縁部は肥厚する。胴部は型成形で、外面には型押による雷文が施される。内面は回転ナデ調整の後、見込中央部にナデ調整、見込周縁部に横方向の強いナデ調整、口縁部に横ナデ調整を加える。底部外面は無調整で、円柱形を呈する低い脚を3箇所貼付する。口縁部内面には接合痕が残る。

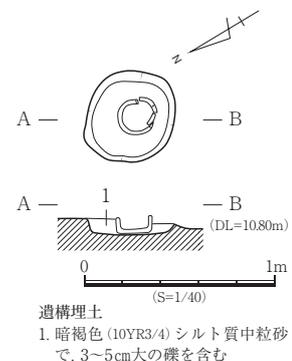


図252 P-65

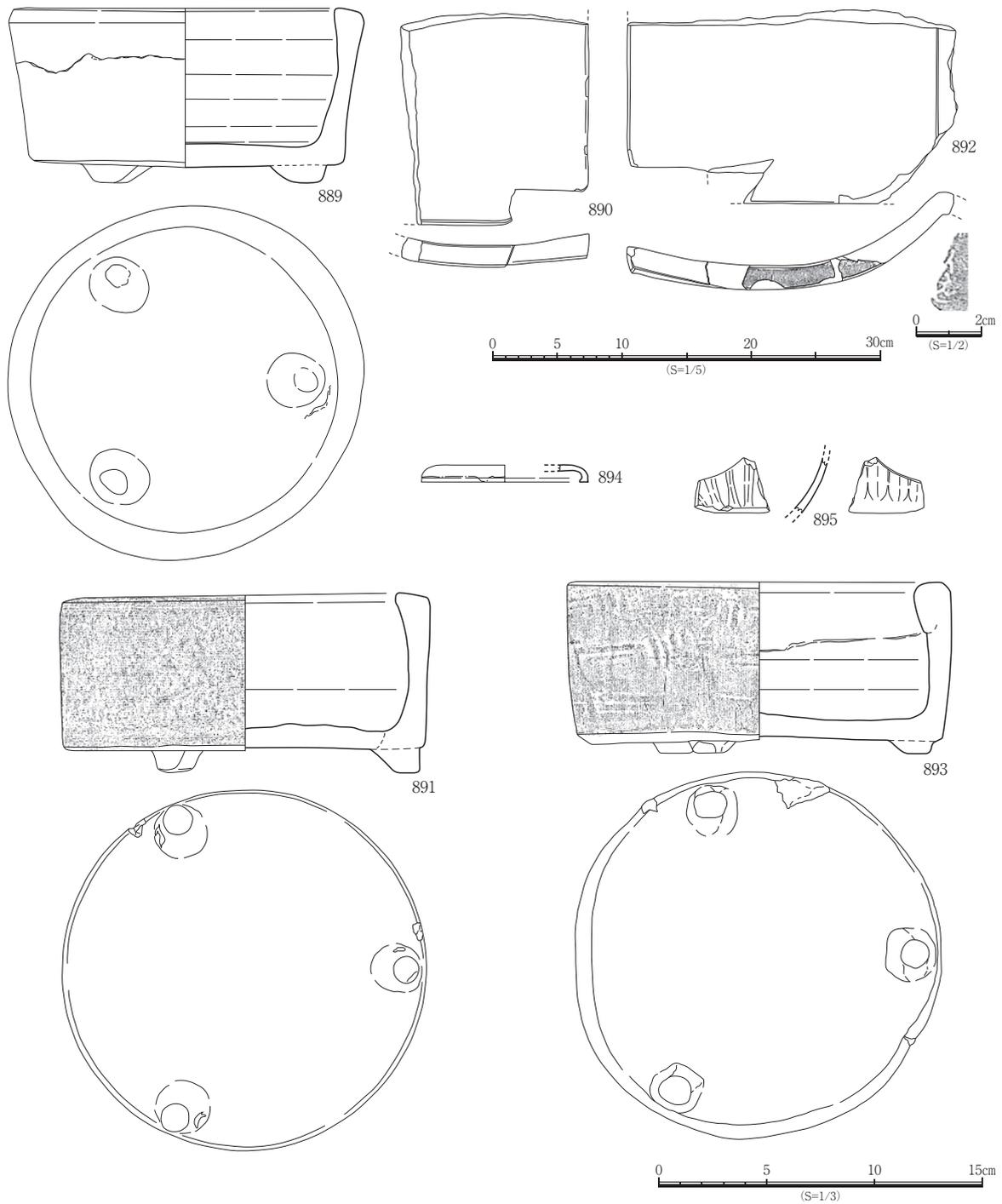


図253 P-62・64～66出土遺物実測図

P-66(遺物: 図253-894・895)

丘陵北側の曲輪2の造成土の上で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺1.35m、短辺0.80m、深さ25cmを測る。埋土は褐色粗粒砂質シルトで、0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には図示した近世陶器合子蓋(894)と近世磁器皿(895)がみられた。894は近世陶器合子蓋で、口縁部は直立し、天井部は平らである。調整は回転ナデで、外面には灰釉を施す。895は近世磁器菊皿で、内外面は型による菊弁状の文様がみられる。全面に透明感のない白磁釉を施す。

1. C区

ii 5区

SK-3(遺構:図202, 遺物:図255-896・897)

調査区東端で検出した土坑で, SD-3の底で検出した。東は調査区外へ続き, 楕円形を呈するものとみられ, 検出長1.21m, 短径1.14m, 深さ45cmを測る。出土遺物には, 土師質土器4点(杯1, 碗1, 細片2)と土師器甕1点がみられ, 土師質土器碗(896)と土師器甕(897)を図示した。896は土師質土器碗で, 断面が方形を呈する輪高台を貼付する。著しく摩耗するため調整は不明である。897は土師器甕で, 口縁部は外上方にまっすぐ伸びる。内面から口縁端部外面は横ナデ調整, 口縁部外面は横方向のハケ調整を施す。

SD-1(遺構:図254, 遺物:図255-898)

調査区西端で検出した東西方向の溝跡で, 西は調査区外へ続く。検出長4.44m, 検出幅0.96m, 深さ35cmを測る。基底面は東(4.589m)から西(4.457m)へ傾斜する。断面は台形を呈し, 埋土は褐色粗粒砂質シルトで, 3~10cm大の礫を多く含み, 黄色礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(碗1, 細片1)がみられ, 土師質土器碗(898)を図示した。898は土師質土器碗である。底部と体部の境目の器壁が厚く, 底部には断面が台形を呈する高台を貼付する。著しく摩耗するため調整は不明である。

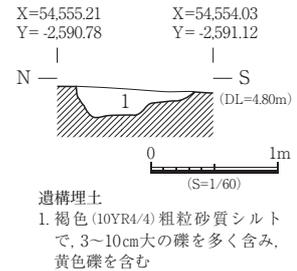


図254 SD-1

SD-2

調査区東端で検出した東西方向の溝跡で, 東は調査区外へ続く。SX-4を切り, SD-3に切られる。検出長12.61m, 検出幅0.68m, 深さ16cmを測る。基底面は西(5.280m)から東(4.956m)へ傾斜する。断面は舟底形を呈し, 埋土は褐色中粒砂質シルトで, 1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器9点(杯1, 碗2, 細片6)と土師器片1点, 近世陶器挿鉢1点, 平瓦2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD-3(遺構:図202, 遺物:図255-899~901)

SD-2の南で検出した東西方向の溝跡で, SK-3とSD-2, SX-4を切り, 東は調査区外へ続く。検出長7.67m, 検出幅1.10m, 深さ26cmを測る。基底面は西(5.173m)から東(4.918m)へ傾斜する。断面は台形を呈し, 埋土はオリブ褐色粗粒砂質シルトで, 1cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器15点(杯3, 小皿1, 細片11), 土師器片1点, 須恵器片1点, 青磁2点(碗1, 皿1), 近世陶器9点(碗2, 皿3, 細片4), 近世磁器6点(碗1, 皿1, 蓋1, 猪口1, 壺1, 細片1), 平瓦7点がみられ,

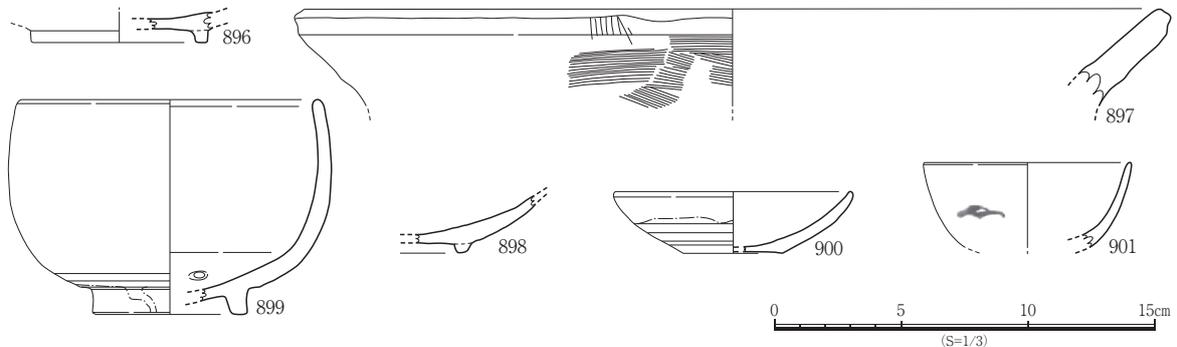


図255 SK-3, SD-1・3出土遺物実測図

近世陶器碗(899)と近世陶器皿(900), 近世磁器碗(901)を図示した。899は近世陶器半球形碗である。底部には断面が方形を呈する高台が付き, 口縁部は内湾する。体部外面の下部は回転ケズリ調整を施す。内面から体部外面まで灰釉を施し, 高台と高台内は無釉である。見込にはピン痕とみられる痕跡が1箇所に残る。900は近世陶器皿である。小型で平底を呈し, 口縁部は内湾する。体部外面には回転ケズリ調整を施し, 内面から口縁部外面には灰釉を施す。口縁部には煤が付着し, 灯明皿として使用されたものとみられる。901は肥前産の近世磁器小丸碗である。外面には鳥文の染付がみられ, 全面に透明釉を施す。

SX-4(遺物: 図256-902~918)

調査区東端で検出した大型土坑で, SD-2・3とP-67に切られる。隅丸方形を呈し, 長辺4.69m, 短辺3.97m, 深さ59cmを測る。埋土はオリブ褐色中粒砂質シルトで, 3~8cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器62点(杯8, 碗1, 細片53), 土師器碗1点, 須恵器5点(甕2, 細片3), 瓦器6点(碗4, 小皿1, 細片1), 古瀬戸碗1点, 備前焼片2点, 常滑焼片7点, 白磁碗1点, 青磁6点(碗4, 皿2), 近世陶器89点(碗24, 皿11, 蓋1, 片口鉢1, 挿鉢5, 瓶2, 火入1, 甕2, 細片42), 近世磁器60点(碗28, 皿7, 小杯6, 瓶1, 壺1, 細片17), 瓦67点(丸瓦4, 平瓦54, 棧瓦8, 道具瓦1), 土製品人形2点, 石製品石斧1点, 金属製品3点(銭貨1, 不明2), 鉄滓12点がみられ, 902~918を図示した。

902は土師質土器碗である。底部と体部の境目の器壁が厚く, 底部には断面が半円形を呈する高台を貼付する。著しく摩耗するため調整は不明である。903は瓦器小皿である。調整は見込がナデのちミガキ, 口縁部が横ナデ, 底部外面はナデを施す。全面に炭素が吸着する。904は白磁碗で, 体部はまっすぐ外上方に伸び, 口縁部は玉縁を呈する。内面から口縁部外面には白磁釉を施し, 体部外面は回転ナデ調整で無釉である。905は青磁碗で, 底径が小さく, 底部の器壁が厚いものである。内面から高台内面まで淡い緑色の青磁釉を施し, 高台内はケズリ調整で無釉である。見込には花文に「福」字のスタンプ文を施す。906は青磁小皿で, 口径7.3cmを測る。口縁は内湾し, 端部は肥厚して丸く収める。内面から高台内側まで灰オリブ色の青磁釉を施す。高台内はケズリ調整で鈷痕が残り, 無釉である。見込には圏線と花文のスタンプの一部が残る。907~909は近世陶器碗である。907は唐津系陶器碗で, 高台は低く太い。内面から体部外面には鉄釉を施し, 底部外面は回転ケズリ調整で, 無釉である。908は全面に灰釉を施し, 畳付を釉ハギする。釉には御本が入る。外面には鉄錆による文様の一部がみられる。見込にはピン痕が5箇所に残る。909は瀬戸・美濃系の陶胎染付広東碗である。外面には圏線と染付の一部がみられる。白化粧土を施した後, 透明釉を施し, 畳付は釉ハギする。910は近世陶器絵唐津皿である。内面から体部外面に灰釉を施し, 底部外面は回転ケズリ調整で, 無釉である。見込には鉄錆による草文がみられ, 胎土目痕が残る。911は近世陶器片口鉢で, 底部には低く幅の太い高台が付き, 口縁部はL字状を呈する。口縁部外面には半筒形を呈する注口を貼付する。内面から胴部外面には鉄釉を施し, 口縁端部は釉ハギする。底部外面は回転ケズリ調整で, 無釉である。見込にはピン痕が残る。912は近世焼締陶器壺で, 肩部が張り, 口縁部は受け口状を呈する。全面に回転ナデ調整を施し, 体部内面の一部にはナデ調整を加える。913は近世陶器甕で, 器壁が薄く, 平底で体部は外上方へまっすぐ伸びる。見込はナデ調整, 胴部内面には同心円状の当て具痕が残り, 胴部外面はヘラナデ調整で, 横方向のヘラ状工具によるナデ調整またはケズリ調整の痕跡が残る。底部外面は無調整とみられ, 自然釉が掛かる。914は能茶山窯の近世磁器広東碗で, 見込には火焰文とみられる染付, 内面に圏線, 外面は土坡に草文と圏

1. C区

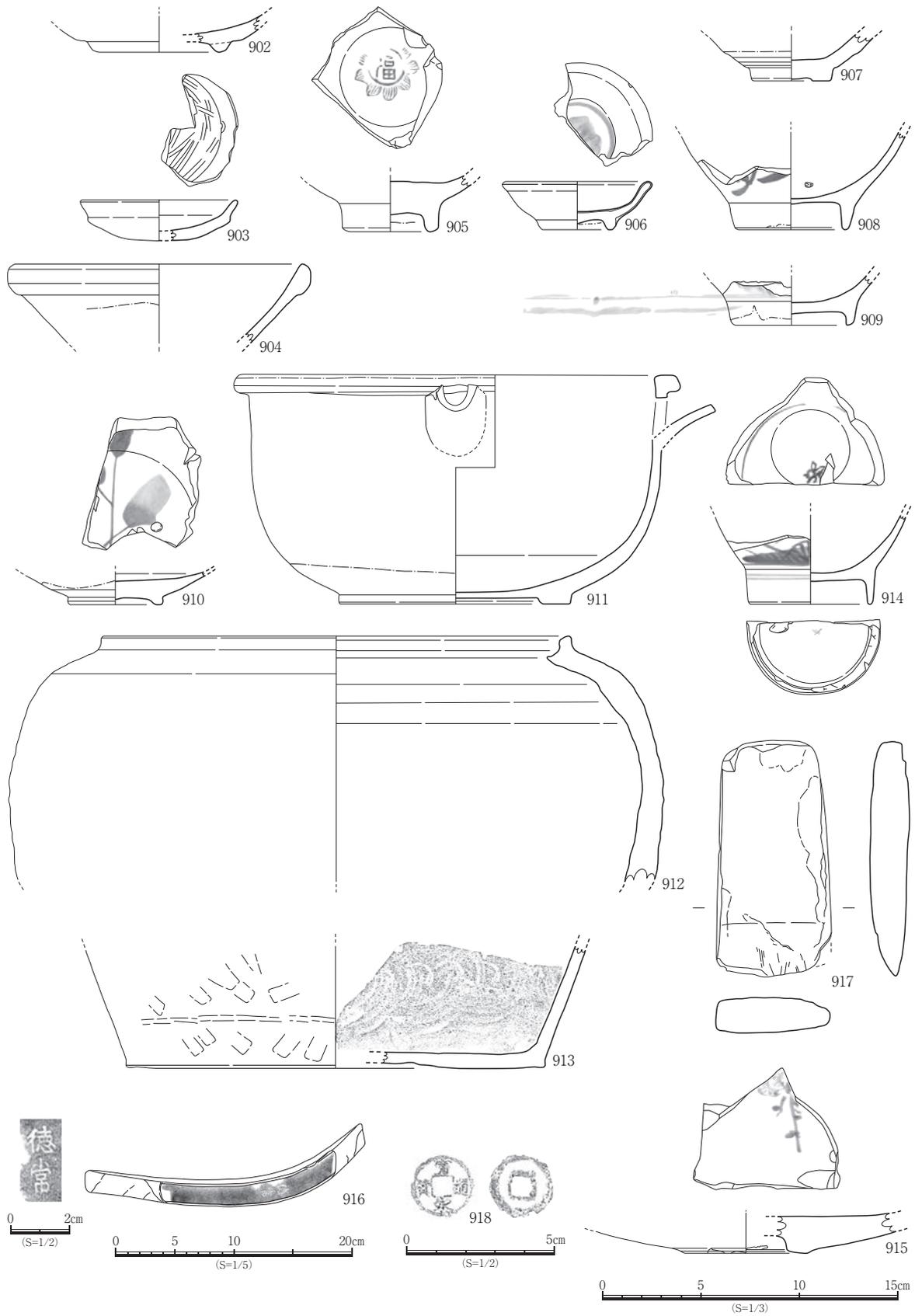


图256 SX-4出土遗物实测图

線、高台内には「サ」銘がみられる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。915は近世磁器中皿で、波佐見産の青磁染付とみられる。底径は6.2cmを測る小さいもので、碁笥底を呈する。全面に青磁釉を施した後、畳付は釉ハギし、砂が付着する。見込には梅樹とみられる染付がみられる。916は棧瓦で、隅に切り込みがみられる。凹凸面は縦方向または横方向のナデ調整を施し、キラ粉が付着する。側面には「徳常」の刻印がみられる。917は石製品扁平片刃石斧で、一部を欠損する。基部は「ハ」の字状に開き、刃部は弧状を呈する。刃部には僅かに使用痕が残る。石材は頁岩とみられる。918は銅製品銭貨で、寛永通寶である。新寛永で、湾曲する。

P-67

SX-4の南で検出したピットで、SX-4を切る。楕円形を呈し、長径1.10m、短径0.46m、深さ17cmを測る。埋土は褐色粗粒砂質シルトで、1cm大の黄色礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(杯1、細片1)と平瓦1点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-68

P-67の南で検出したピットで、P-69を切る。隅丸方形を呈し、長辺90cm、短辺76cm、深さ15cmを測る。埋土は暗褐色中粒砂質シルトで、1~2cm大の黄色礫を非常に多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

P-69

P-68の東で検出したピットで、P-68に切られる。楕円形を呈し、長径84cm、短径50cm、深さ18cmを測る。埋土は褐色シルト質粗粒砂で、3~10cm大の黄色礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点と土師器甕1点がみられたが、図示できるものはなかった。

2. D区

(1) 調査概要

D区は森山城跡西側の裾部に位置し、令和2年度の試掘調査の結果により堀跡があると推定されていた。調査前のD区は水田であり、D区の東と西には用水路が流れる。調査では湿地跡が確認され、幕末に湿地を陸地化するための土木事業が行われていることが確認された。D区の東側に位置するC区の西側裾部では湧水がみられ、確認された湿地跡が森山城跡西側に広がっていたことが明らかとなり、山城が機能していた時期には湿地を防御のために利用していたとみられる。

(2) 基本層序

① 北壁(図257)

D区は東西方向に長い調査区であり、北壁では検出された湿地跡の断面を確認した。湿地跡は森山城跡のある東が深く、西に向かって浅くなっていた。

第1層は近世から現代にかけての堆積層で、第1-1~22層に分かれる。第1-1層は現代の耕作土で、調査区全面でみられた。厚さ約20cmを測り、ほぼ水平に堆積する。第1-2・3層は現代の客土で、第1-2層は調査区西部、第1-3層は調査区中央部と東部で確認された。第1-4層は旧耕作土で、調査区中央部でみられた。第1-5~8層は現代の客土とみられ、コンクリートを含む攪乱の上にレンズ状に堆積する。第1-9層は旧耕作土、第1-10層は床土で、調査区中央部でみられた。第1-11~20層は近世から現代の堆積層で、客土とみられる。地形は東の方が低く、比高差は約25cmを測り、多くの堆積層がみられた。第1-21・22層は近世の遺物包含層で、幕末の遺物を含

2. D区

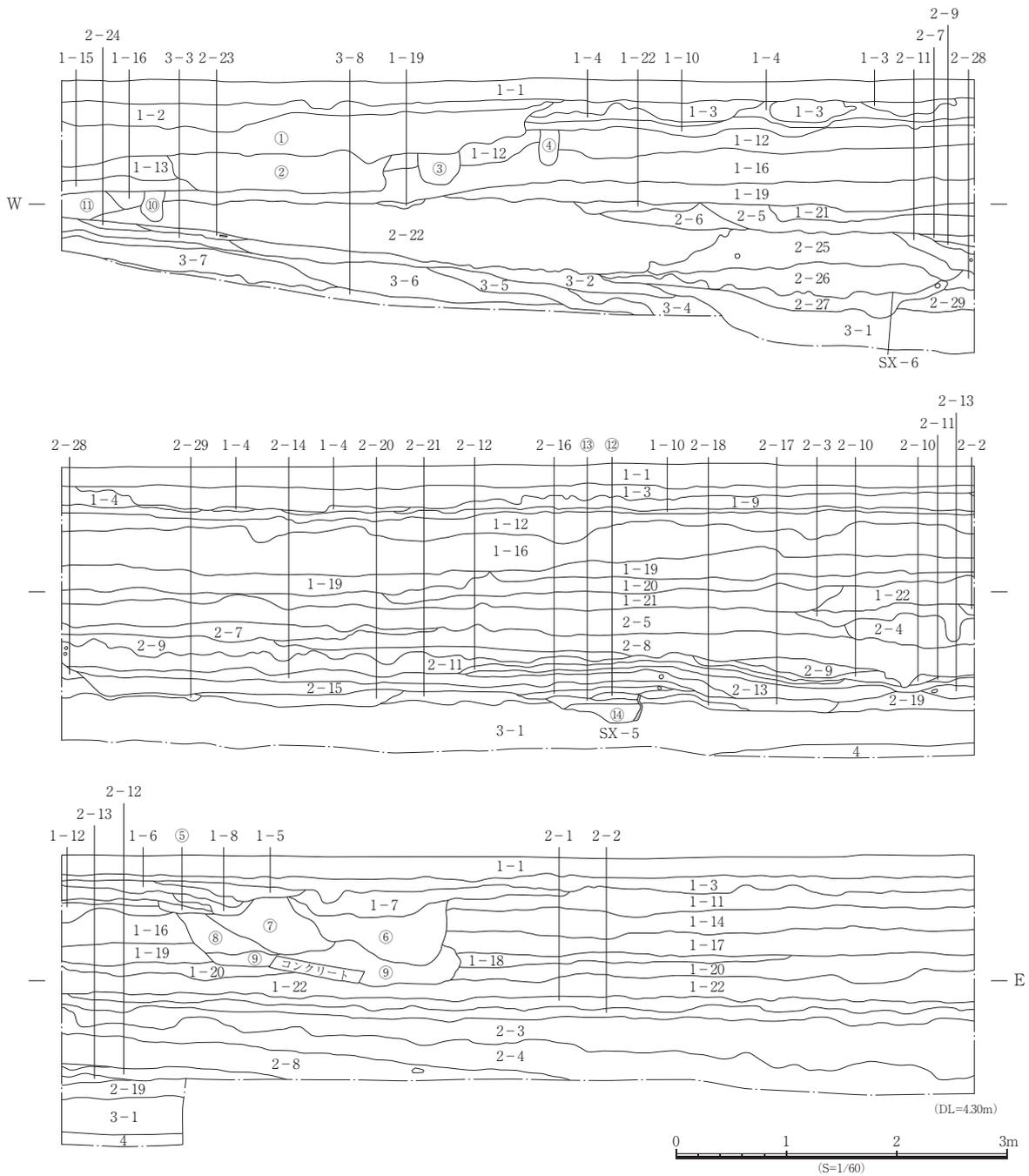


図257 D区北壁セクション図

み、下部にはマンガンの堆積がみられた。地形は東の方が低く、比高差は約25cmを測り、厚さは東部が約20cm、西部が約10cmを測る。

第2層は、近世後期に湿地を陸地化するために行われた土木事業による堆積で、第2-1~29層に分かれる。土壌が脆く壁面崩壊の危険があったため、一部でのみの確認ではあったが、調査範囲では、湿地跡の深さは95cmを測り、東が深く、西に向かって浅くなっていた。D区西端までは湿地跡が広がっていたことが確認され、湿地跡の幅は、丘陵裾部から西に約35mの地点までは広がっていたことが明らかとなった。第2層では湿地を埋めるために、蓆で作った土嚢である吹を南北方

D区北壁層位

第1-1層	黄灰色(25Y6/1)粗粒砂質シルト層で、マンガンを含む(耕作土)
第1-2層	灰色(7.5Y5/1)粗粒砂質シルト層で、1~3cm大の黄色礫を含む(客土)
第1-3層	褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、1cm大の黄色礫を含む(客土)
第1-4層	黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂質シルト層で、マンガンを少し含む(旧耕作土)
第1-5層	暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルト層(客土か)
第1-6層	暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルト層で、黄色礫を含む(客土か)
第1-7層	オリーブ黒色(5Y3/2)中粒砂質シルト層で、黄色礫と木片を少し含む(客土か)
第1-8層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルト層(客土か)
第1-9層	黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質シルト層で、マンガンを含む(旧耕作土)
第1-10層	暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト層で、マンガンを含む(床土)
第1-11層	黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂質シルト層で、3cm大の礫を少し含む(客土か)
第1-12層	暗灰黄色(7.5Y5/2)細粒砂質シルト層で、マンガンと炭化物を含む
第1-13層	暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト質細粒砂層で、炭化物を少し含む
第1-14層	オリーブ褐色(5Y3/2)シルト質中粒砂層で、炭化物を含む
第1-15層	灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂質シルト層で、木片を少し含む
第1-16層	暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト層で、マンガンと炭化物を含む
第1-17層	灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルト層で、1cm大の礫と炭化物を少し含む
第1-18層	灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルト層で、炭化物と木片を少し含む
第1-19層	暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルト層で、マンガンを含む
第1-20層	黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質シルト層で、マンガンを含む
第1-21層	灰オリーブ色(5GY5/1)粗粒砂質シルト層で、1cm大の礫と極粗粒砂を含み、グライ化する(近世遺物包含層1)
第1-22層	灰オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂質シルト層で、マンガンを多く含む、一部は下部にマンガンが堆積する(近世遺物包含層2)
第2-1層	灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルト層
第2-2層	灰色(7.5Y5/1)細粒砂質シルト層
第2-3層	オリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒砂質シルト層で、灰色シルトブロックを含む
第2-4層	灰色(5Y5/1)シルト層で、木片を含む
第2-5層	オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土質シルト層で、灰色シルトブロックと粗粒砂、木片を含む
第2-6層	灰色(5Y4/1)中粒砂質シルト層で、暗オリーブ灰色シルトブロックと中粒砂を含む
第2-7層	青黒色(5BG2/1)極粗粒砂層
第2-8層	灰色(10Y4/1)シルト質中粒砂層で、粗粒砂との互層(河川の堆積)
第2-9層	灰色(7.5Y5/1)細粒砂質シルト層
第2-10層	オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂層で、木片を少し含む
第2-11層	灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層
第2-12層	灰色(5Y3/2)中粒砂質シルト層で、マンガンを含む
第2-13層	灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層で、炭化物と木片を含む
第2-14層	灰色(5Y4/1)シルト質細粒砂層
第2-15層	灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層

第2-16層	灰色(7.5Y4/1)シルト質細粒砂層で、炭化物と木片を含む
第2-17層	灰色(5Y5/1)細粒砂質シルト層で、木片を含む
第2-18層	オリーブ黒色(7.5Y3/2)細粒砂質シルト層
第2-19層	灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルト層
第2-20層	暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粗粒砂層
第2-21層	灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層で、木片を含む
第2-22層	灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質細粒砂層で、ブロックと木片を多く含む
第2-23層	灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質細粒砂層で、木片を含む
第2-24層	オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルト層で、木片を含む
第2-25層	明オリーブ色(2.5GY5/1)シルト質細粒砂層で、灰オリーブ色細粒砂ブロックを含む
第2-26層	灰色(10Y5/1)細粒砂質シルト層で、粘性はやや強い
第2-27層	灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層で、木片を多く含む
第2-28層	灰色(10Y5/1)細粒砂質シルト層で、粘性はやや強い
第2-29層	灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層で、木片を含む
第3-1層	灰色(5Y4/1)シルト層で、細粒砂と木片を少し含む
第3-2層	オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルト層で、木片を少し含む
第3-3層	オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルト層で、木片を含む
第3-4層	オリーブ黒色(2.5Y6/2)細粒砂質シルト層で、木片を多く含む
第3-5層	灰色(5Y4/1)シルト層
第3-6層	灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層で、シルト質細粒砂と木片を含む
第3-7層	灰色(5Y4/1)中粒砂質シルト層で、木片を少し含む
第3-8層	灰色(7.5Y4/1)シルト層で、細粒砂を少し含む
第4層	灰色(7.5Y5/1)シルト層(自然堆積)

遺構埋土

- ① オリーブ褐色(2.5Y4/4)礫質粗粒砂で、5~10cm大の角礫を多く含む(図259西壁①に同じ)
- ② 灰色(7.5Y5/1)粗粒砂質シルトで、1cm大の礫を含む
- ③ 灰色(7.5Y5/1)細粒砂質シルト
- ④ 灰色(7.5Y5/1)細粒砂質シルト
- ⑤ 黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂質シルトで、黄色シルトブロックを含む(近代)
- ⑥ オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルトで、木片を含む(現代、攪乱)
- ⑦ 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで、炭化物を含む(現代、攪乱)
- ⑧ 灰色(7.5Y4/1)シルト質中粒砂で、炭化物を含む(現代、攪乱)
- ⑨ 灰色(10Y4/1)シルト質粗粒砂で、木片を含む(現代、攪乱)
- ⑩ 灰色(10Y5/1)粗粒砂質シルトで、マンガンを含む
- ⑪ 灰色(10Y4/1)中粒砂質シルトで、1cm大の礫を少し含む(SK-4:図259西壁⑥に同じ)
- ⑫ 灰色(5Y5/1)細粒砂質シルトで、木片を少し含む(SX-5埋土1)
- ⑬ オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質中粒砂で、木片を含む(SX-5埋土2)
- ⑭ 灰色(7.5Y4/1)シルトで、細粒砂を少し含む(SX-5埋土3)

向に並べた吠列を3列確認した。⑫~⑭はSX-5の吠内の土で、吠の上には第2-11~16層が盛り上がるように堆積する。細粒砂質シルトとシルト質細粒砂の互層で、各層は厚さ5~10cmを測る。SX-5の西約5mの地点では第2-28・29層が山状に盛られ、盛土高35cmを測る。その西に堆積する第2-27層の上でSX-6の吠を検出した。吠の上には第2-25・26層が山状に盛られ、盛土高55cmを測る。第2-10~24層はSX-5とSX-6の間を埋めるように西から東に傾斜して堆積する。第2-1~9層は調査区東部でみられ、西から東へ大きく傾斜し、東部では厚さ35cmを測る堆積層もみられた。

第3層は湿地跡の底に堆積した層とみられ、第3-1~8層に分かれる。西から東に傾斜し、木片を含む層が多くみられ、周辺に樹木があったことが窺われる。第3-1層の珪藻分析では河川や清浄な水域に生息する珪藻化石が豊富にみられ、河川の影響を受ける湿地環境であることが明らかとなった。花粉分析の結果ではイネ科が多く、周辺に明るく開けた草地や湿地、林縁、水田等があっ

たことが示唆されている。第3層は調査区の西へ続いており、湿地はさらに西へ広がっていたものとみられる。

② トレンチ北壁(図258)

調査区南西部に設定したトレンチで、試掘調査の際に設定したトレンチの西側に設定した。第1-22層は北壁と西壁でも確認した近世の遺物包含層で、幕末の遺物を含んでいた。第1-22層の下で遺構検出を行った。

第2-30~32層はトレンチで確認した層で、近世後期に湿地を陸地化するために行われた土木事業による堆積である。いずれの層も西から東に大きく傾斜する。第2-30層は木片を多く含み、

下部には集石がみられた。近世の遺物が出土している。第2-31層は下部でSX-7の臥列を確認した。

第3-9層は湿地跡の底に堆積した層とみられ、トレンチでのみ確認した。北壁の第3層と同様に木片を含み、また、調査区の西へ続いており、湿地はさらに西へ広がっていたものとみられる。

③ 西壁(図259)

今回の発掘調査で西端となる土層図である。近現代の客土が厚く、現表土下1.0mで幕末の遺構面を確認した。

第1層は近世から現代にかけての堆積層で、北壁と同様の堆積が確認された。調査区北西部では現代の大型の攪乱がみられた。第1-21・22層は近世の遺物包含層で、第1-22層の下で遺構検出を行った。

第2層は近世後期に湿地を陸地化するために行われた土木事業による堆積で、調査区南西部で第2-33・34層を確認した。堆積が薄く、厚さ4~8cmを測り、湿地の埋め立ての西端に近いものとみられる。第1-22層にはマンガンを多く含んでいた。

第3層は湿地跡の底に堆積した層とみられ、第3-10・11層に分かれる。土質は中粒砂質シルトまたは中粒砂で木片を含んでいた。

(3) 堆積層出土遺物

第1-1層(図260-919)

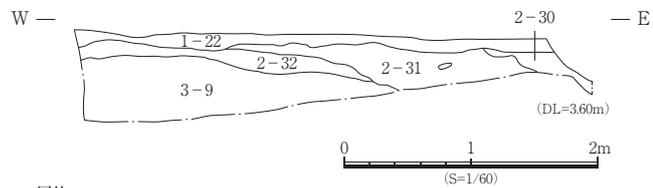
919は能茶山窯の近世磁器碗で、広東形である。見込には「寿」とみられる文字、内面には圏線、外面には土坡と圏線の染付、高台内は「サ」銘がみられる。全面に透明釉を施し、釉には貫入が入る。

第1-20層(図260-920)

920は肥前産とみられる近世磁器鉢で、底部の器壁が厚く、体部は内湾して立ち上がる。全面に青磁釉を施し、高台内を蛇ノ目釉ハギする。

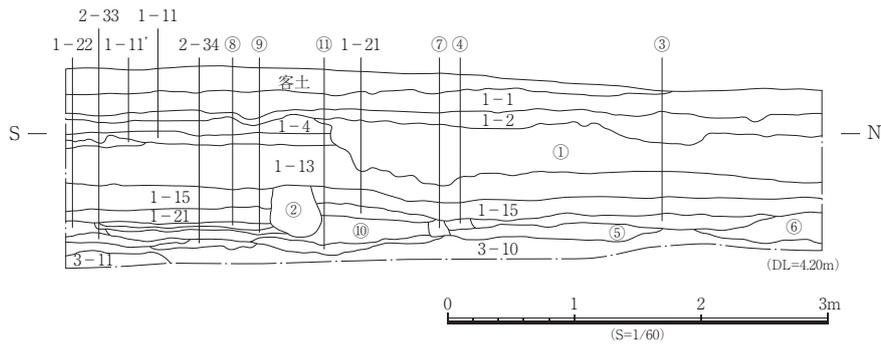
第2-1層(図260-921)

921は畿内産の瓦質土器釜で、薄く幅の広い鏝を水平に貼付する。内面は横方向のナデ、口縁部外面は残存部が少なく不明瞭だが板ナデとみられ、鏝は横方向のナデ、胴部外面は横方向のヘラケ



層位	説明
第1-22層	灰オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂質シルト層で、マンガンを多く含み、一部は下部にマンガンが堆積する(近世遺物包含層2)
第2-30層	灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層で、木片を多く含む
第2-31層	灰色(7.5Y5/1)シルト質粗粒砂層で、灰色中粒砂質シルトブロックと8cm大の円礫を含む
第2-32層	オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルト層で、灰色シルト質粗粒砂と木片を含む
第3-9層	灰色(7.5Y4/1)粗粒砂層で、灰色細粒砂質シルトブロックと木片を含む

図258 トレンチセクション図



層位

- 第1-1層 黄灰色(25Y6/1)粗粒砂質シルト層で、マンガンを含む(耕作土)
- 第1-2層 灰色(7.5Y5/1)粗粒砂質シルト層で、1~3cm大の黄色礫を含む(客土)
- 第1-4層 黄灰色(25Y4/1)中粒砂質シルト層で、マンガンを少し含む(旧耕作土)
- 第1-11層 黒褐色(25Y3/2)粗粒砂質シルト層で、3cm大の礫を少し含む(客土か)
- 第1-11'層 暗灰黄色(25Y5/2)シルト質粗粒砂層で、1~3cm大の礫を多く含む
- 第1-13層 暗オリーブ灰色(6GY4/1)シルト質細粒砂層で、炭化物を少し含む
- 第1-15層 灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂質シルト層で、木片を少し含む
- 第1-21層 黄灰色(25Y5/1)粗粒砂質シルト層で、下部にマンガンが堆積する(近世遺物包含層1)
- 第1-22層 灰オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂質シルト層で、マンガンを多く含み、一部は下部にマンガンが堆積する(近世遺物包含層2)
- 第2-33層 灰色(5Y5/1)粗粒砂質シルト層
- 第2-34層 灰色(7.5Y4/1)シルト質粗粒砂層
- 第3-10層 灰色(10Y4/1)中粒砂層で、シルトブロックと木片を含む
- 第3-11層 灰色(5Y5/1)中粒砂質シルト層で、木片を多く含む

遺構埋土

- ① オリーブ褐色(25Y4/4)礫質粗粒砂で、5~10cm大の角礫を多く含む(図257北壁①に同じ)
- ② 暗灰黄色(25Y4/2)中粒砂質シルト
- ③ 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質粗粒砂で、粗粒砂のブロックを含む(SK-4埋土1)
- ④ 灰オリーブ色(5Y4/2)中粒砂質シルト(SK-4埋土2)
- ⑤ 灰オリーブ色(5Y4/2)中粒砂質シルト(SK-4埋土3)
- ⑥ 灰色(10Y4/1)中粒砂質シルトで、1cm大の礫を少し含む(SK-4埋土4:図257北壁①に同じ)
- ⑦ オリーブ褐色(25Y4/4)細粒砂質シルト(ハンダ:SK-4埋土5)
- ⑧ 褐灰色(10YR5/1)中粒砂質シルトで、ハンダブロックと粗粒砂を含む(SK-5埋土1)
- ⑨ 灰色(5Y5/1)中粒砂(SK-5埋土2)
- ⑩ 灰オリーブ色(5Y4/2)中粒砂質シルトで、ハンダブロックを多く含む(SK-5埋土3)
- ⑪ 灰色(5Y4/1)粗粒砂質シルト(SK-5埋土4)

図259 D区西壁セクション図

ズリである。

第2-3層(図260-922・923)

922は土師器釜で、口縁部は内傾して端部を四角く収め、外面には断面が三角形を呈する小さな鏝が付く。調整は内面から鏝上面は横方向のナデ、鏝下面は煤が付着するため調整は不明である。923は須恵器椀で、平高台を呈する。器壁が薄く、体部は大きく開いて立ち上がる。調整は内面が回転ナデの後ミガキ、体部外面が回転ナデ、底部の切り離しは回転糸切りである。

第2-4層(図260-924)

924は木製品漆器蓋で、天井部外面には低く直立する摘みが付く。内面は赤塗、外面は黒塗で、体部外面には朱色の花文、摘み内には朱色の松葉文がみられる。

第2-5層(図260-925)

925は木製品鏝とみられ、板状で円形を呈する。中央には長径2.5cm、短径が2.2cmを測る楕円形の孔がみられる。外形の角は丸味があり、円孔の角はやや鋭く加工する。側面は横方向に加工する。

第2-6層(図260-926・927)

926は土製品土錘で、完存する。紡錘形を呈し、全面にナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため不明瞭である。927は金属製品銭貨で、銅銭である。洪武通寶で、初鑄造年は1368年である。

第2-30層(図260-928~932)

928は備前焼播鉢で、器壁が薄く、口縁部は直立し、顎が外へ出る。調整は回転ナデで、播目は残存しない。口縁部外面には重ね焼痕が残る。929は青磁碗で、底部の器壁が厚く、断面が方形を呈する低い高台が付く。内面から高台外面には青味を帯びた青磁釉を施し、見込にはスタンプによ

2. D区

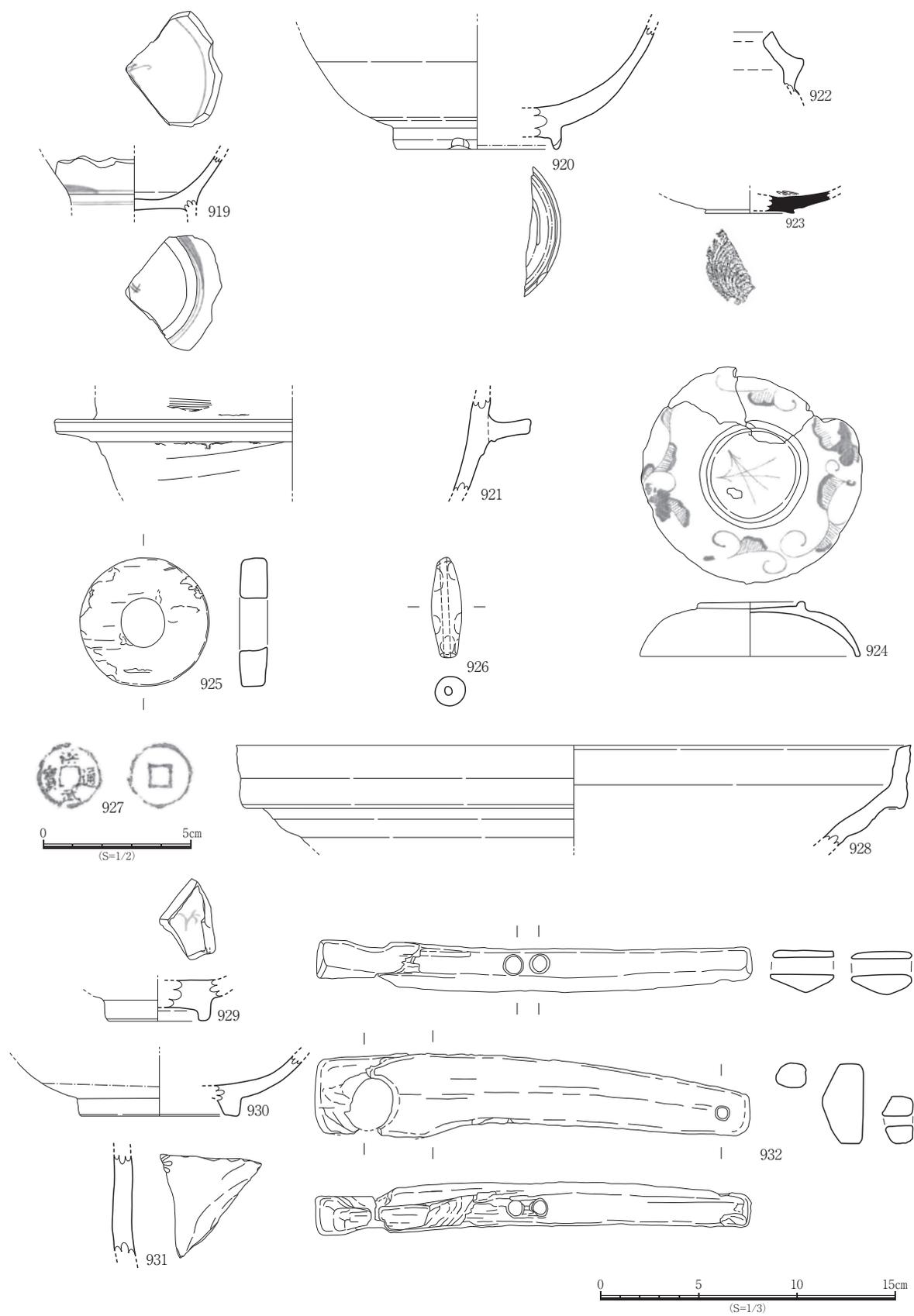


图260 D区堆积层出土遗物实测图

る文様が僅かに残る。高台内と畳付は削り出しで無釉である。930は近世陶器皿で、底部には断面が台形を呈する高台が付く。内面から外面体部上部には灰釉を施し、外面体部下から高台内は回転ケズリで、無釉である。931は瀬戸・美濃産の近世陶器鉢とみられ、胴部の一部が残存する。外面には印花文がみられ、押圧により一部を凹ませている。内外面に緑釉を施す。932は木製品で器形は不明である。板状で不整形を呈し、一端は直線、一端は弧状で、両端で幅が異なる。両端に円孔がみられ、大きい円孔は楕円形を呈し、長径2.6cm、短径2.1cm、小さい円孔は径0.7cmを測る。断面は五角形を呈し、基底面は平らである。側面には貫通する円孔が2個みられ、径0.8cmを測る。滑車の一部か。

(4) 検出遺構と出土遺物

SK-4(遺構:図257・259)

調査区北西部で検出した不整形を呈する遺構で、北と西は調査区外へ続く。検出長5.47m、検出幅4.27m、深さ13cmを測る。埋土は5層に分かれ、ハンダブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片9点、瓦器片1点、陶器片2点、近世陶器片1点、近世磁器猪口1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-5(遺構:259, 遺物:図265-933)

調査区南西部で検出した楕円形を呈する遺構で、西は調査区外へ続く。検出長4.21m、検出幅1.21m、深さ22cmを測る。埋土は4層に分かれ、ハンダブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点、青磁碗1点、近世磁器色絵瓶1点がみられ、青磁碗(933)を図示した。933は青磁碗で、口縁部は比較的上方に伸び、端部を丸く収める。全面に青味を帯びた青磁釉を施し、外面には口縁部直下に連続する弧線の線刻による細蓮弁文がみられる。

SX-5(遺構:図257・261)

湿地を埋め立て陸地化するための土木事業で並べた吠で、D区東部で確認した。吠は蓆で作った袋で、中に土を入れ土嚢として並べた状態で出土した。南北方向(N-6°-E)に並ぶ吠3個を検出し、検出長1.95m、検出幅0.94mを測る。今回の調査で確認した吠で最も東側に位置しており、森山城跡に近く湿地の深い部分にあたる。さらに東側に吠がある可能性もあるが、土質が脆く調査区壁面が崩壊する恐れがあるため調査が出来なかった。

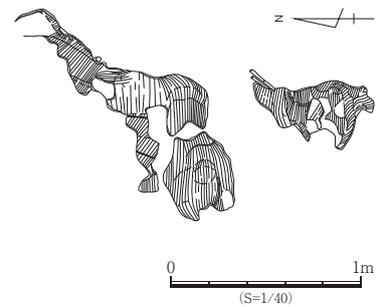


図261 SX-5

SX-6(遺構:図257・263)

SX-5の西5mの位置で確認した吠で、南北方向(N-3°-E)に並ぶ吠6個を検出し、検出長4.49m、検出幅1.08mを測る。吠①は下部のみ残存する。吠②も下部のみが残存し、格子状の編み目がみられた。吠①と吠②の東側には径約1cmの枝が多数みられ、その東側には径1.5cmの竹が打ち込まれていた。吠②の下より吠③が確認された。吠③は全長86cm、全幅61~76cm、厚さ26.8cmを測る。小口には中央で蓆を結んだ痕跡が残り、土を入れた吠の3箇所を横方向に縄で縛っていた。吠内には灰色シルト質中粒砂が入っており、土師質土器片8点が出土した。吠③の下から吠④が確認された。吠④は全長64cm、全幅46cm、厚さ18.2cmを測る。吠④も吠③と同様に小口を結んだ痕跡が残り、吠の3箇所を横方向に縄で縛っていた。吠内には灰色シルト質中粒砂が入っており、土師質土器片2点が出土した。吠⑤は残存長70cm、残存幅52cm、厚さ22cm

2. D区

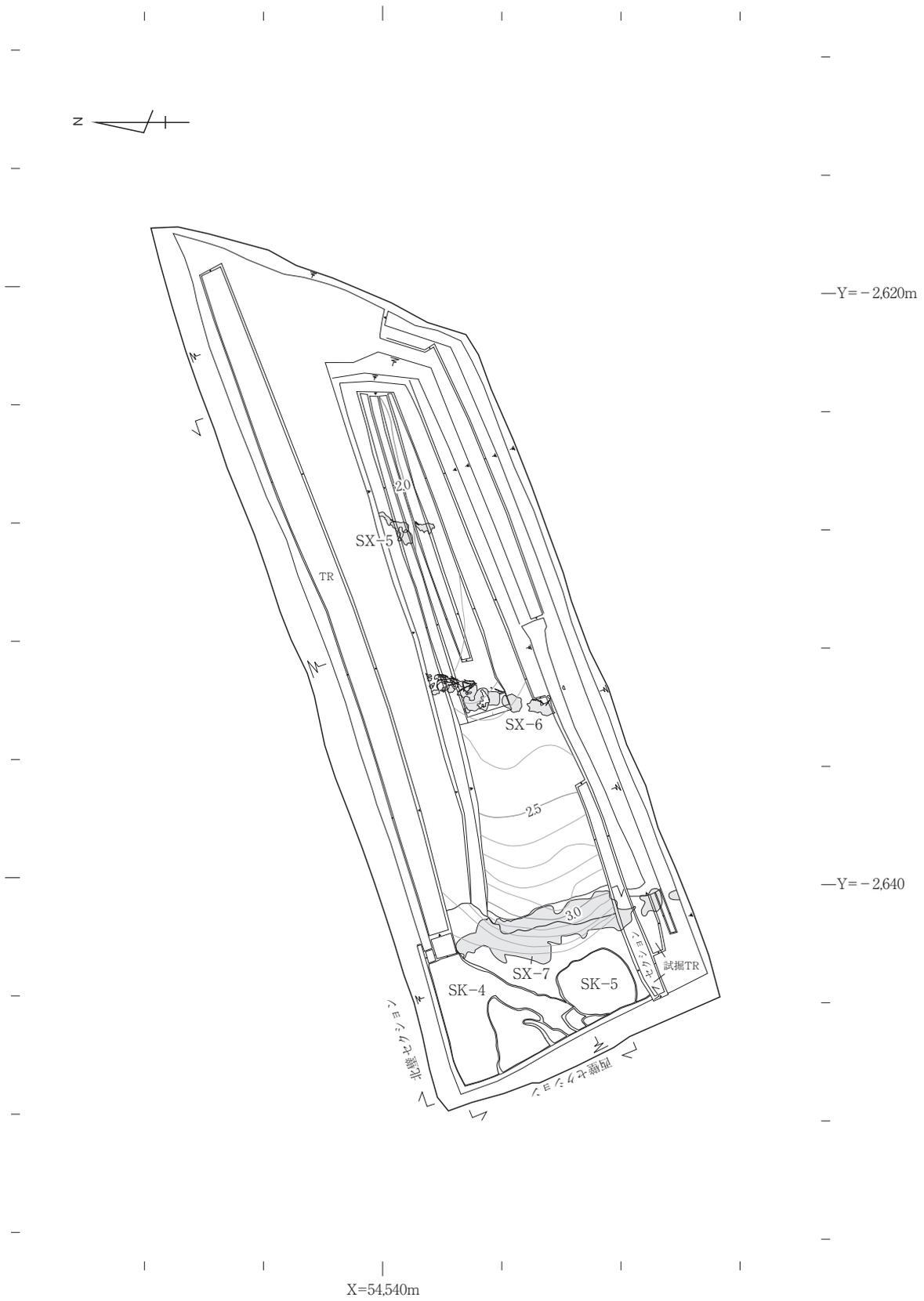


図262 D区遺構平面図(S=1/200)

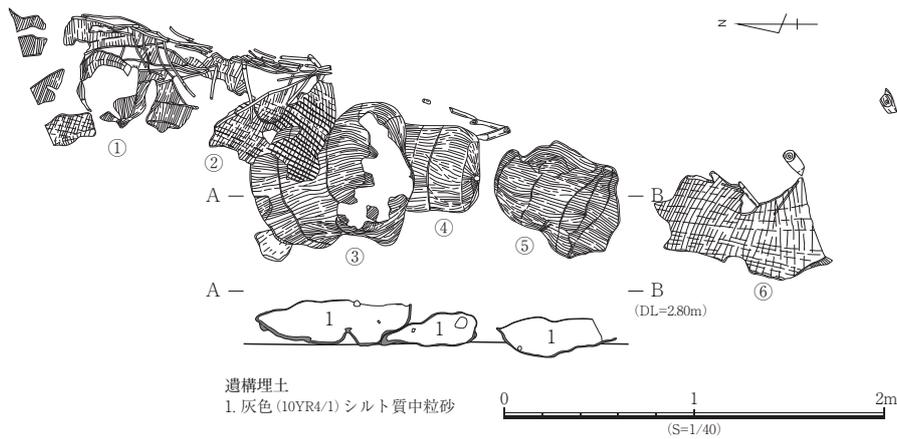


図263 SX - 6

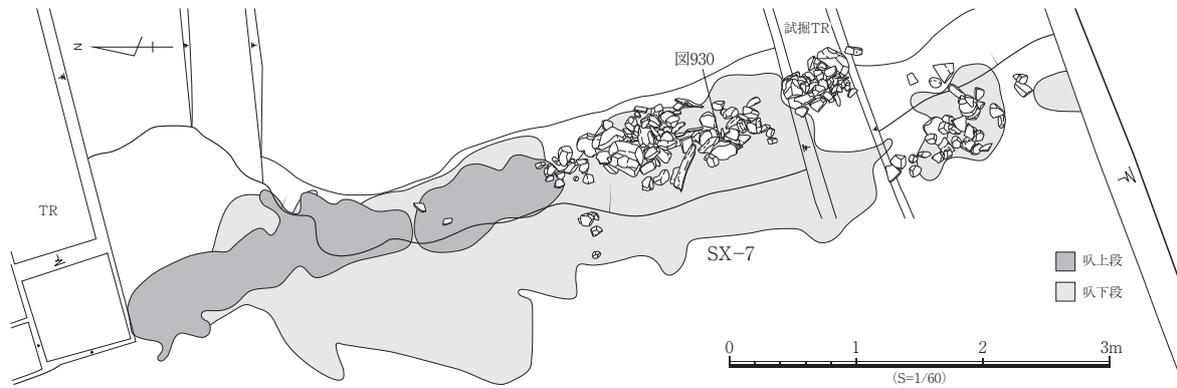


図264 SX - 7, 集石出土図

を測る。呎の3箇所を横方向に縄で縛っていた痕跡がみられた。呎内には灰色シルト質中粒砂が入っており、土師質土器片1点と唐津系灰釉陶器とみられる近世陶器皿1点が出土したが図示できなかった。呎⑥は下部のみ残存し、細かい格子状の編み目と蓆の端とみられる部分が確認された。呎⑥の東側にも僅かに木の枝がみられた。

SX-7(遺構：図264, 遺物：図265-934~936)

SX-6の西8mの位置で確認した呎で、南北方向(N-4°-W)に並ぶ呎を検出した。南と北は調査区外へ続き、検出長7.52m、検出幅1.98m、厚さ13cmを測る。呎が最も広範囲に広がっていたが、残存状況が不良で、個体数は確認できなかった。北部では呎が2段に積まれている部分も確認された。呎の下面は西から東へ傾斜しており、3~15cmの比高差がみられた。南部では呎の5~20cm上の第2-30層中で、呎と同一方向に帯状に広がる集石がみられた。石材は概ね砂岩で、その他に硅質砂岩とチャート、細粒花崗岩など仁淀川流域の円礫が含まれていた。呎を配置した後、時を隔てずして近隣にある石を廃棄したものとみられる。出土遺物は集石の下より常滑焼甕1点、呎の上より土師質土器片1点、土師器片1点、備前焼片1点、常滑焼片1点、木製品漆器片1点、上段の呎と下段の呎の間より土師質土器3点(杯1, 細片2)、古瀬戸碗1点、近世陶器3点(碗1, 細片2)、近世磁器2点(杯1, 細片1)、木製品1点、石製品砥石1点がみられ、上段の呎と下段の呎の間より出土した近世磁器杯(934)と、石製品砥石(935)、木製品(936)を図示した。

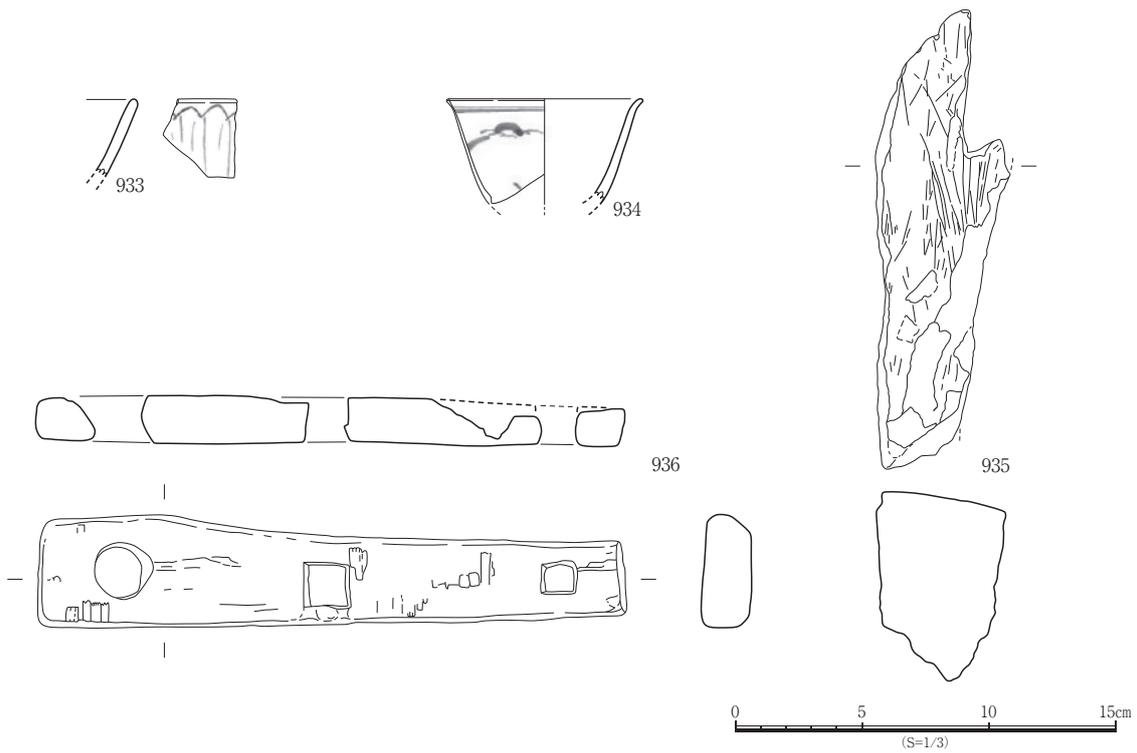


図265 SK - 5, SX - 7出土遺物実測図

934は肥前系の近世磁器杯で、端反形である。外面には圈線と飛雲文とみられる染付がみられ、全面に透明釉を施す。935は石製品砥石で、割石を利用したものとみられる。残存部で1面に使用痕がみられ、使用面は中央部が使用により凹んでいる。石材は塩基性凝灰岩である。936は木製品で、932と似た形状を呈する。板状で、不整台形を呈し、一端は直線で、一端は屈曲し、両端で幅が異なる。1箇所径1.9cmの円孔、2箇所に方形の孔がみられ、一辺1.3cmと1.6cmを測る。断面は不整長方形を呈し、先端はやや薄くなる。滑車の一部か。

第V章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

森山城跡は、高知県高知市春野町に所在し、県道甲殿弘岡上線内に位置する中世の山城である。発掘調査の結果、森山城跡の山城の構造や隣接する堀跡、隣接地の集落や屋敷(館)などの遺構が確認されている。

本分析調査では、発掘調査にて採取された試料を対象に、遺構の性質や性格を把握すると共に、遺跡の環境を明らかにすることを目的として、自然科学分析を実施する。

1. 試料

分析試料および分析項目の詳細を表2に示す。試料は、C-3区(丘陵部)、C-4区(丘陵部)、D区(裾部)の3箇所から採取されている。C-3区(丘陵部)からは、埋葬に使用したとみられる江戸時代の火鉢内の土壌(No.1~4)、山城に伴う遺構・ピットより出土した炭化物(No.5~6-4)が、C-4区(丘陵部)からは、山城に伴う堆積土より出土した炭化物(No.6-5)が、D区(裾部)からは山城裾部の低湿地とみられる土壌より出土した曲物内土壌(No.7)、山城裾部の低湿地とみられる土壌(No.8~12-2)が、それぞれ分析に供されている。なお、試料No.が同じで複数袋が存在するものについては、枝番を付して区別した。

これらの試料を用いて、珪藻分析4点、花粉分析2点、植物珪酸体分析2点、微細物分析・種実分析16点(2+3式相当)、貝同定2点(1式相当)、土壤理化学分析5点を実施する。

表2 分析試料・分析項目一覧

No.	枝番	出土地点	珪藻	花粉	珪酸体	微細・種実	貝	土理
1		P-62	-	-	-	-	-	○
2		P-64	-	-	-	-	-	○
3		P-65	-	-	-	-	-	○
4-1		SK-1	-	-	-	○	-	○
4-2	-		-	-	○	-	-	
5		竪堀1埋土4	-	-	-	○	-	○
6-1		P-15	-	-	-	○	-	-
6-2		P-21	-	-	-	○	-	-
6-3		竪堀1埋土6	-	-	-	○	-	-
6-4		西バンク第13層	-	-	-	○	-	-
6-5	-1	南壁第17層	-	-	-	○	-	-
	-2		-	-	-	○	-	-
	-3		-	-	-	○	-	-
	-4		-	-	-	○	-	-
	-5		-	-	-	○	-	-
7		北壁第2-5層	-	-	-	○	-	-
8		北壁第3-1層	○	○	○	○	-	-
9		北壁第2-26層	○	○	○	○	-	-
10		北壁第2-3層	○	-	-	-	-	-
11		北壁第2-11層	○	-	-	-	-	-
12-1		北壁第2-11層	-	-	-	-	○	-
12-2		北壁第2-25層	-	-	-	-	○	-
合計			4	2	2	15	2	5

(1) 珪藻:珪藻分析, 花粉:花粉分析, 珪酸体:植物珪酸体分析, 微細・種実:微細物分析・種実分析

貝:貝同定, 土理:土壤理化学分析

(2) 試料No.が同じで複数袋が存在するものは、枝番を付して区別した。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリユラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1,000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数する(化石の少ない場合は、この限りではない)。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt(1930-1966), Krammer and Lange - Bertalot(1985-1991), Desikachary(1987), Lange - Bertalot(2000)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示す。

堆積環境の変遷を考察するために、珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する(図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料のうち1%未満の種を、+印は総数100個体未満の場合の産出を示す)。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域であることが多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物(岩石・大型の藻類・水生植物など)に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や鳥倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を乾土1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

(4) 微細物分析・種実分析

① 水洗抽出

各試料の状態を判断しながら、種実遺体を可能な限り壊さずに抽出する方法を実施する。

No.4, No.5は乾燥した炭化物主体のため、試料を常温乾燥させる。No.4-2は肉眼観察で土粒類を取り除く。試料乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(約20回)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料(炭化物主体)と水に沈んだ試料(土粒・岩片主体)を、粒径別に常温乾燥させる。

No.8は土壌試料310cc, No.9は土壌試料200ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。

上記水洗後の試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体の他、主に4mm以上の炭化材などの遺物を抽出する。

3. 結果

② 同定

大型植物遺体の同定は、現生標本や中山ほか(2010)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、主な分類群の写真を添付して同定根拠とする。実体顕微鏡下による区別が困難な複数分類群間は、ハイフォンで結んで表示する。なお、多量確認されたオムギやイネの状態は、わずかでも欠損する個体は完形未満としている。分析残渣は、一覧表の下部に個数や重量、または定性的な量比をプラス「+」で示す。分析後は、大型植物遺体を分類群別に容器に入れて保管する。No.7～10の大型植物遺体は約70%のエタノール溶液で液浸保存する。他の抽出物と残渣も容器に入れて保管する。

(5) 貝同定

試料を肉眼で観察し、形態的特徴から種・部位を特定する。なお、貝類の生態等に関しては、奥谷ほか(2000)、奥谷編著(2004)を参考とする。

(6) 土壤理化学分析

有機炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解－水蒸気蒸留法、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法(土壤環境分析法編集委員会 1997、土壤標準分析・測定法委員会 1986)に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

分析試料の調製は、試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

有機炭素は、粉碎土試料0.100～2.000gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

全窒素は、粉碎土試料1.00～2.00gをケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約3.0gと硫酸10mlを加え加熱分解した。分解後、蒸留水約30mlを加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量(T-N%)を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率)を算出する。

リン酸、カルシウム含量は、粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表3・4、図266に示す。

表3 珪藻分析結果1

種 類	生態性			環境 指標種	D区 北壁			
	塩分	pH	流水		第3-1層	第2-26層	第2-3層	第2-11層
					No.8	No.9	No.10	No.11
Nitzschia levidensis (W.Smith) Grunow	Meh			E1	5	-	-	-
Nitzschia levidensis var. salinarum Grunow	Meh			E1	2	-	-	-
Navicula gregaria Donkin	Ogh-Meh	al-il	ind	U	3	-	-	-
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	7	-	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-Meh	unk	unk		3	-	-	-
Achnanthes japonica H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J,T	1	-	-	-
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	-	-	-
Achnantheidium minutissimum (Kuetz.) Czarn	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	-	-
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	3	-	-	-
Aulacoseira spp.	Ogh-unk	unk	l-ph	U	1	-	-	-
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O	3	-	-	-
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	2	-	-	-
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	21	-	-	-
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	-	-	-
Cymatopleura solea (Breb.) W.Smith	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-	-
Cymbella minuta Hilse ex Rabenhorst	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	3	-	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	24	-	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-
Diatoma vulgaris Bory	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	2	-	-	-
Diatoma spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-
Encyonema silesiacum (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	2	-	-	-
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind	U	2	-	-	-
Epithemia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	7	-	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	3	-	-	-
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	8	-	-	-
Gomphonema olivaceum (Lyngb.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	-	-
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	10	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-
Gyrosigma acuminatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind		8	-	-	-
Gyrosigma spencerii (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	3	-	-	-
Melosira varians C.Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K,U	8	-	-	-
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	2	-	-	-
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	-	-
Navicula cryptotenella Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	3	-	-	-
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	4	-	-	-
Navicula pseudolanceolata Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	-	-	-
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	8	-	-	-
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	5	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	3	-	-	-
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	2	-	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	3	-	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	N,O,U	2	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	-	-	-
Pinnularia karelica Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	2	-	-	-
Pinnularia lundii Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	O	2	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	5	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-
Planothidium lanceolatum (Breb.ex Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	4	-	-	-
Rhopalodia gibba (Ehr.) Mueller	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	1	-	-	-

表4 珪藻分析結果2

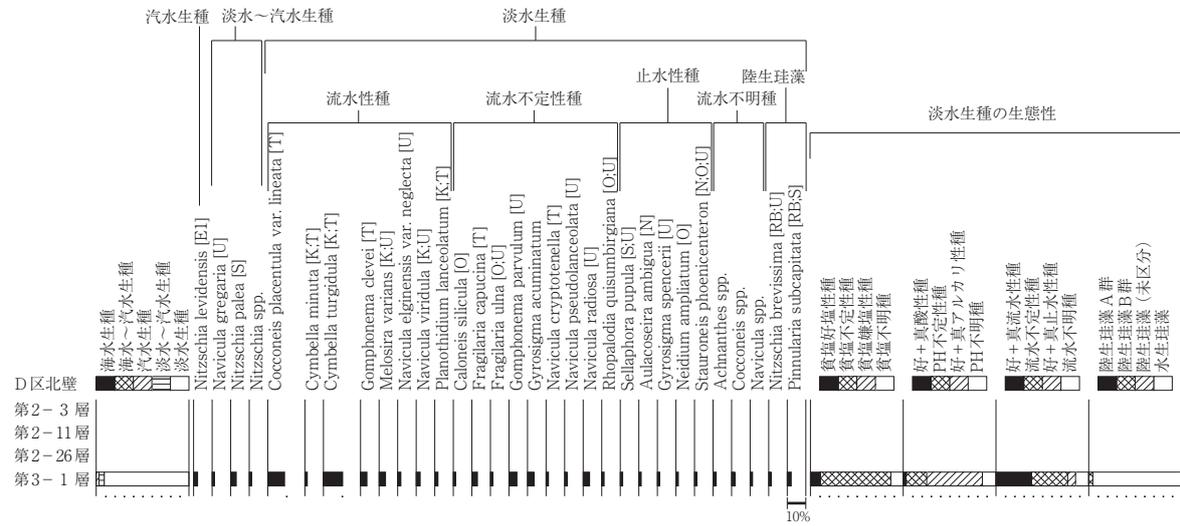
種類	生態性			環境指標種	D区 北壁			
	塩分	pH	流水		第3-1層 No.8	第2-26層 No.9	第2-3層 No.10	第2-11層 No.11
Rhopalodia quisumbirgiana Skvortzow	Ogh-hil	al-il	ind	O,U	3	-	-	-
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S,U	3	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	3	-	-	-
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	2	-	-	-
Surirella ovata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-	-
Surirella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-
海水生種					0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0
汽水生種					7	0	0	0
淡水～汽水生種					13	0	0	0
淡水生種					212	0	0	0
珪藻化石総数					232	0	0	0

凡例

- 塩分:塩分濃度に対する適応性 pH:水素イオン濃度に対する適応性 流水:流水に対する適応性
- Euh : 海水生種 al-bi: 真アルカリ性種 l-bi : 真止水性種
 Euh-Meh: 海水生種-汽水生種 al-il : 好アルカリ性種 l-ph: 好止水性種
 Meh : 汽水生種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種
 Ogh-Meh: 淡水生種-汽水生種 ac-il : 好酸性種 r-ph: 好流水性種
 Ogh-hil : 貧塩好塩性種 ac-bi: 真酸性種 r-bi: 真流水性種
 Ogh-ind : 貧塩不定性種 unk : pH不明種 unk : 流水不明種
 Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種
 Ogh-unk : 貧塩不明種

環境指標種

- A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海水藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種 D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種
 E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水底生種群 (以上は小杉, 1988)
 G: 淡水浮遊性種群 H: 河口浮遊性種群 J: 上流性河川指標種 K: 中～下流性河川指標種
 L: 最下流性河川指標種群 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着生種 P: 高層湿原指標種群 Q: 陸域指標種群
 (以上は安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種 U: 広適応性種 T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe, 1995) R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群, RI未区分 伊藤・堀内, 1991)



海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

環境指標種

- A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海水藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種 D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種 E1: 海水泥質干潟指標種
 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水底生種群 (以上は小杉, 1988) G: 淡水浮遊性種群 H: 河口浮遊性種群 J: 上流性河川指標種 K: 中～下流性河川指標種
 L: 最下流性河川指標種群 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着生種 P: 高層湿原指標種群 Q: 陸域指標種群 (以上は安藤, 1990) S: 好汚濁性種
 T: 好清水性種 U: 広適応性種 (以上は Asai and Watanabe, 1995) R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群 伊藤・堀内, 1991)

図266 主要珪藻化石群集

D区第3-1層からは、珪藻化石は200個体以上産出した。保存状態は、完形の殻もあるが、一部の殻は壊れているため、普通～不良である。産出した分類群は、淡水生種を主にして、汽水生種および淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。本試料の淡水生の群集の特徴について、生態性(珪藻の3つの適応性：水中の塩分・pH・流水に対する適応性)を整理してみた場合、以下のような傾向が認められる。まず、塩分に対する適応性は、貧塩不定性種が優占する。次に、pHに対する適応性は、アルカリ性種が優占する。流水に対する適応性は、流水性種が40%程度産出し、止水性種は10%程度産出する。また、本試料は水生珪藻が優先し、陸生珪藻は低率にしか産出しない。特徴的に産出した種は、淡水生種で流水性種の *Cocconeis placentula* var. *lineata*, *Cymbella turgidula* 等である。

一方、D区第2-3層、第2-11層、第2-26層の3試料は、いずれも無化石であった。

(2) 花粉分析

結果を表5、図267に示す。花粉化石の産状は、試料により大きく異なる。

D区第3-1層からは、花粉化石が豊富に産出するが、保存状態は普通～悪い程度が混在する。花粉化石群集を見ると、草本花粉の占める割合が高く、中でもイネ科の多産が特徴的である。多産するイネ科には、栽培種のイネ属に形態の類似した個体(以下、イネ属型とする)が存在する。その他ではカヤツリグサ科、ナデシコ科などを伴う。またわずかではあるが、オモダカ属、ミズアオイ属、ミズワラビ属、サンショウモなどの水湿地生植物に由来する花粉・孢子や、栽培の可能性のあるソバ属なども確認された。木本花粉は、かろうじて定量解析が行える程度の個体数が認められ、マツ属が最も多く産出し、ツガ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属などを伴う。なお、花粉やシダ類孢子以外では、寄生虫の卵である回虫卵も検出された。

同じくD区第2-26層からは、花粉化石がほとんど検出されず、検出された花粉化石の保存状態は悪い。わずかに木本花粉のマツ属、スギ属、アカガシ亜属、草本花粉のカヤツリグサ科、セリ科が1-2個体確認された程度である。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表6、図268に示す。2試料より植物珪酸

表5 花粉分析結果

種 類	D区 北壁	
	第3-1層 No.8	第2-26層 No.9
木本花粉		
モミ属	2	-
ツガ属	12	-
マツ属複雑管束亜属	29	1
マツ属(不明)	34	-
スギ属	9	1
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	-
クマシデ属-アサダ属	3	-
カバノキ属	2	-
コナラ属コナラ亜属	3	-
コナラ属アカガシ亜属	10	1
シイ属	1	-
ニレ属-ケヤキ属	1	-
エノキ属-ムクノキ属	2	-
草本花粉		
オモダカ属	1	-
イネ属型	105	-
他のイネ科	370	-
カヤツリグサ科	52	2
ミズアオイ属	2	-
ユリ科	1	-
クワ科	8	-
ギンギン属	1	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	2	-
タデ属	2	-
ソバ属	6	-
アカザ科	3	-
ナデシコ科	14	-
キンポウゲ科	1	-
アブラナ科	1	-
バラ科	1	-
キカシグサ属	5	-
セリ科	2	1
オオバコ属	2	-
オミナエシ属	1	-
ヨモギ属	5	-
キク亜科	3	-
タンポポ科	3	-
不明花粉		
不明花粉	9	-
シダ類孢子		
ミズワラビ属	1	-
サンショウモ	5	-
他のシダ類孢子	122	12
合計		
木本花粉	109	3
草本花粉	591	3
不明花粉	9	0
シダ類孢子	128	12
合計(不明を除く)	828	18
その他		
回虫卵	2	-

3. 結果

体が検出され、保存状態は概ね良好である。

D区第3-1層の植物珪酸体含量は11,500個/gであり、第2-26層の5,600個/gよりも多い。

検出される分類群は同様であり、栽培植物であるイネ属、栽培種を含む分類群のコムギ連、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、シバ属などである。第3-1層と第2-26層では、イネ属が他の分類群よりも多い傾向にある。またイネ属の珪化組織片としてイネ属穎珪酸体やイネ属短細胞列も多く検出される。コムギ連は、いずれの試料からも短細胞珪酸体が僅かに産出し、穎珪酸体も検出される。なお、イネ科起源(棒状珪酸体,長細胞起源,毛細胞起源)も検出されるが、分類群の特定には至らない。

(4) 微細物分析・種実分析

結果を表7、図269、保存状態が良好な栽培植物の種実遺体の計測値を表8・9に示す。

15試料を通じて、裸子植物2分類群(針葉樹のマツ属複雑管束亜属、スギ)3個、被子植物29分類群(広葉樹のムクノキ、エノキ属、クスノキ科、ヒサカキ属、アカメガシワ、ミズキ、草本のオモダカ科、イトトリゲモ?、コナギ近似種、イヌビエ属、イネ、オオムギ、コムギ、イネ科、ヒメクグ属?、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、アサ、ギシギシ属、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、ソバ、ナデシコ科、ハスノハカズラ、キジムシロ類、カタバミ属、チドメグサ属、アリノトウグサ、タカサブロウ)2,417個の、計2,420個の大型植物遺体の他、炭化材、木の芽、葉片、植物片、虫片、二枚貝類、岩片・土粒類などが確認された。なお、骨片等は確認されなかった。

大型植物遺体の保存状態は、炭化穀類含めて比較的良好である。栽培植物は、オオムギの炭化穎果が1,572個(No.6-1, No.8, No.9以外)、オオムギ?の炭化穎果が308個、オオムギ-コムギの炭化穎果が12個、コムギの炭化穎果が2個(No.7)、イネの籾(内外穎)が324個(No.7~9)、アサの果実が2個(No.7)、ソバの果実が1個(No.7)確認された。栽培の可能性は、イヌビエ属の果実が3個確認された。オオムギが最も多く、大型植物遺体群全体の約8割を占め、概ね丘陵部からの出土である。次いでイネが多く、D区第2-5層出土曲物内(No.7)からの多産に特徴づけられる。以下、試料別状況を記す。

C-3区 SK-1

No.4-1(土壌14.1g)は、オオムギ253個、オオムギ?148個、炭化材0.27g(最大15.3mm)、炭化材主体0.35g、植物片0.07g、土粒・岩片主体6.6gが確認された。

No.4-2(土壌140g)は、オオムギ1,219個、オオムギ?124個、穀類(おそらくオオムギ)主体0.96g、炭化材1.37g(最大25.5mm)、炭化材主体2.78g、植物片0.03g、土粒・岩片主体51.2gが確認された。残試料175gも土粒・岩片主体である。

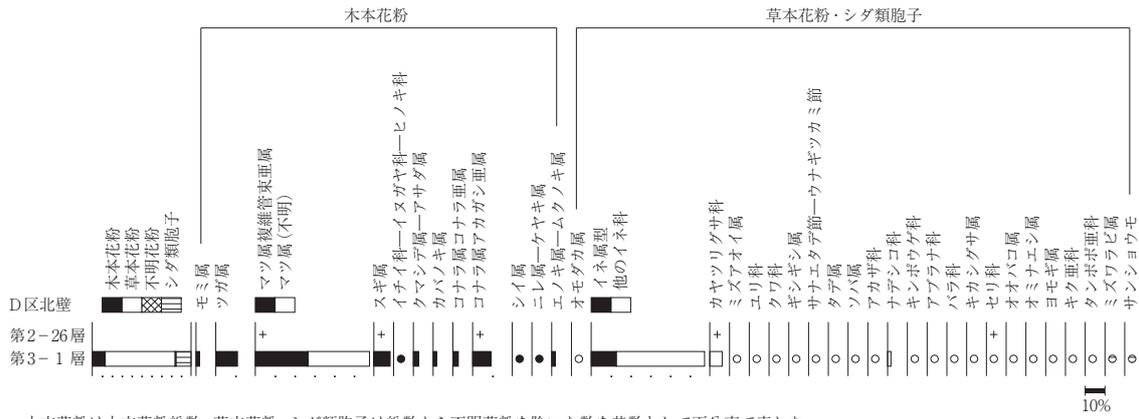
オオムギは、内外穎が癒着した穎果が多いことから皮麦(hulled barley)と推測される。No.4-2の状態良好な100個の計測値は、長さが最小4.73~最大7.66(平均5.84±標準偏差0.56)mm、幅が2.26~3.59(平均2.87±0.28)mm、厚さが1.75~3.15(平均2.32±0.29)mmである。

C-3区 豎堀1

埋土4(No.5)(土壌8.4g)は、オオムギ37個、オオムギ?6個、穀類(おそらくオオムギ)主体8個、炭化材2.03g(最大15.7mm)、炭化材主体0.20g、植物片0.03g、土粒・岩片主体4.7gが確認された。

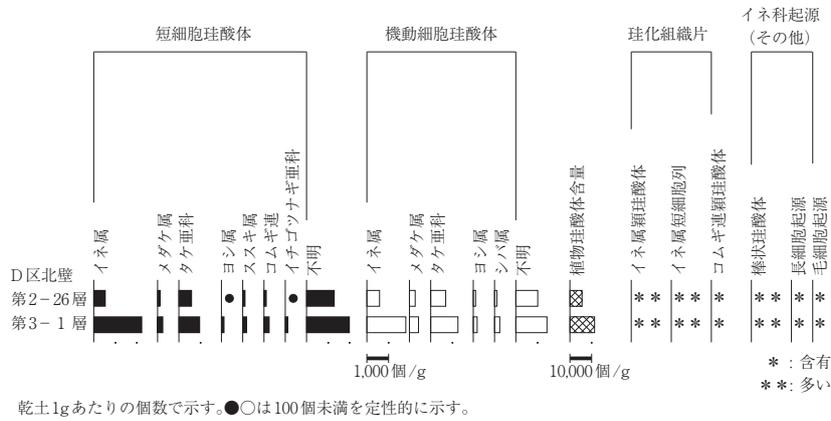
埋土6(No.6-3)は、オオムギ21個が確認された。

西バンク第13層(No.6-4)は、オオムギ21個、オオムギ?14個、炭化材2個0.01g(最大5.8mm)、土粒・岩片主体0.08gが確認された。



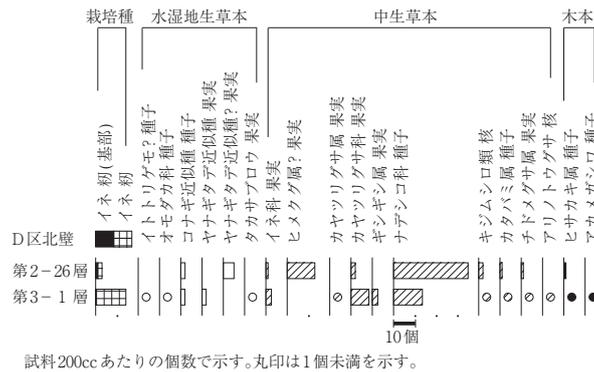
木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。
丸印は1%未満、+は木本花粉100個未満の試料において検出された種類を示す。

図267 花粉化石群集



乾土1gあたりの個数で示す。●○は100個未満を定性的に示す。

図268 植物珪酸体含量



試料200ccあたりの個数で示す。丸印は1個未満を示す。

図269 種実遺体群集

C-3区 ピット

P-15(No.6-1)は、種実は確認されず、炭化材3個0.01g未満(最大5.2mm)が確認された。

P-21(No.6-2)は、オオムギ6個が確認された。

C-4区 南壁第17層

No.6-5-1は、オオムギ4個、オオムギ?4個、炭化材7個0.01g未満(最大4.8mm)が確認された。

3. 結果

No.6-5-2は、オオムギ1個が確認された。

No.6-5-3は、オオムギ1個、オオムギ-コムギ1個が確認された。

No.6-5-4は、オオムギ4個、オオムギ?12個が確認された。

No.6-5-5は、オオムギ1個、炭化材3個0.02g(最大6.2mm)が確認された。

D区 第2-5層

出土曲物内 (No.7) は、栽培植物のイネ粉321個、オオムギ4個、オオムギ-コムギ11個、コムギ2個、アサ2個、ソバ1個、栽培の可能性のあるイヌビエ属3個、湿生植物のミゾソバ果実31個、ヤナギタデ近似種果実4個、中生植物のナデシコ科種子5個、常緑つる性草本または籐本のハスノハカズラ1個、常緑高木のマツ属複雑管束亜属種子1個、スギ種子2個、クスノキ科葉2個、落葉高木のムクノキ核1個、エノキ属種子1個、アカメガシワ種子4個、ミズキ核1個、合計400個が確認された。広葉樹の葉片3個と不明種実A 11個は同定ができなかった。不明種実Aはマツ属複雑管束亜属種子よりも大型で表面は微細粒状を呈す。

最も多く確認されたイネ粉(内外類)の状態良好な100個の計測値は、長さが最小5.73~最大9.43(平均7.74±標準偏差1.02)mm、幅が2.50~3.99(平均3.24±0.30)mm、厚さが0.31~1.36(平均0.71±0.19)mmである。

D区

第3-1層 (No.8) (土壌310cc 577.8g) は、栽培植物のイネ粉22個、沈水植物のイトトリゲモ?種子1個、抽水植物のオモダカ科種子1個、コナギ近似種種子3個、湿生植物のヤナギタデ近似種果実3個、タカサブロウ果実1個、中生植物のイネ科果実1個、カヤツリグサ属果実1個、カヤツリグサ科果実13個、ギシギシ属果実4個、ナデシコ科種子21個、キジムシロ類核1個、カタバミ属種子1個、チドメグサ属果実1個、アリノトウグサ核1個、落葉高木のアカメガシワ種子1個、常緑小高木~低木のヒサカキ属種子1個、植物片、虫片、二枚貝類、土粒・岩片類が確認された。草本種実主体でイネ、ナデシコ科が多く、カヤツリグサ科が次ぐ。

第2-26層 (No.9) (土壌200cc 345.2g) は、栽培植物のイネ粉3個、抽水植物のコナギ近似種種子2個、湿生植物のヤナギタデ近似種?果実5個、中生植物のイネ科果実1個、ヒメクグ属?果実13個、カヤツリグサ科果実2個、ナデシコ科種子35個、キジムシロ類核2個、カタバミ属種子1個、チドメグサ属果実1個、常緑小高木~低木のヒサカキ属種子1個、葉片、植物片、二枚貝類、土粒・岩片類が確認された。草本種実主体でナデシコ科が多い。

(5) 貝同定

結果を表10に示す。試料はいずれも土塊状である。

表6 植物珪酸体含量 (個/g)

分類群	D区 北壁	
	第3-1層 No.8	第2-26層 No.9
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ属	2300	500
メダケ属	200	100
タケ亜科	1000	600
ヨシ属	100	<100
ススキ属	200	100
コムギ連	200	100
イチゴツナギ亜科	100	<100
不明	2000	1300
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ属	1800	600
メダケ属	400	300
タケ亜科	1300	700
ヨシ属	200	100
シバ属	200	100
不明	1500	1000
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	6100	2800
イネ科葉身機動細胞珪酸体	5400	2800
植物珪酸体含量	11500	5600
珪化組織片		
イネ属珪酸体	**	**
イネ属短細胞列	**	**
コムギ連類珪酸体	*	*
イネ科起源(その他)		
棒状珪酸体	**	**
長細胞起源	*	*
毛細胞起源	*	*

- (1) 含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。
- (2) 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。
- (3) <100:100個/g未満。
- (4) -:未検出、*:含有、**:多い。

3. 結果

表8 主な種実遺体の計測値 1

No.	出土地点	種名	枝番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	図版 番号	No.	出土地点	種名	枝番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	図版 番号		
4-1	C-3区 SK-1	オオムギ	1	5.68	3.03	2.68	-		C-3区 SK-1	オオムギ	74	5.43	2.76	2.10	22		
		オオムギ	2	5.40	2.70	2.07	-			オオムギ	75	6.26	3.34	2.84	22		
		オオムギ	3	5.19	2.68	2.24	-			オオムギ	76	5.46	3.04	2.61	22		
		オオムギ	4	5.53	2.36	1.54	-			オオムギ	77	5.61	2.75	2.00	22		
		オオムギ	5	4.84	2.46	2.02	-			オオムギ	78	5.77	2.91	2.57	22		
		オオムギ	6	4.04	2.08	1.41	-			オオムギ	79	6.68	3.26	2.58	22		
4-2	C-3区 SK-1	オオムギ	1	6.80	3.25	2.63	21,22	4-2	C-3区 SK-1	オオムギ	80	5.16	2.50	2.01	22		
		オオムギ	2	6.27	2.99	2.28	22			オオムギ	81	4.94	2.50	2.05	22		
		オオムギ	3	5.67	3.07	2.52	22			オオムギ	82	4.83	2.76	2.14	22		
		オオムギ	4	5.36	2.85	2.20	22			オオムギ	83	5.70	3.12	2.41	22		
		オオムギ	5	6.22	3.09	2.71	22			オオムギ	84	5.57	2.46	2.01	22		
		オオムギ	6	6.57	3.27	2.64	22			オオムギ	85	5.37	2.66	2.13	22		
		オオムギ	7	6.69	3.36	2.73	22			オオムギ	86	5.49	2.95	2.19	22		
		オオムギ	8	6.08	3.16	2.54	22			オオムギ	87	5.25	2.55	2.13	22		
		オオムギ	9	6.91	3.14	2.59	22			オオムギ	88	6.30	2.85	2.56	22		
		オオムギ	10	6.03	2.55	2.22	22			オオムギ	89	5.98	3.02	2.63	22		
		オオムギ	11	5.37	2.63	2.19	22			オオムギ	90	6.43	3.32	2.33	22		
		オオムギ	12	6.11	3.06	2.25	22			オオムギ	91	6.44	2.64	1.83	22		
		オオムギ	13	5.92	2.97	2.13	22			オオムギ	92	4.87	2.26	1.75	22		
		オオムギ	14	6.12	2.94	2.54	22			オオムギ	93	5.64	2.57	2.07	22		
		オオムギ	15	7.05	2.63	2.39	22			オオムギ	94	5.11	2.70	2.48	22		
		オオムギ	16	5.95	2.71	2.11	22			オオムギ	95	5.32	2.73	2.13	22		
		オオムギ	17	6.09	2.79	2.38	22			オオムギ	96	5.16	2.63	2.33	22		
		オオムギ	18	5.73	2.92	2.53	22			オオムギ	97	5.36	2.46	1.96	22		
		オオムギ	19	5.82	3.09	2.44	22			オオムギ	98	5.38	2.54	2.16	22		
		オオムギ	20	6.18	2.74	2.51	22			オオムギ	99	5.39	3.02	2.11	22		
		オオムギ	21	5.31	2.56	2.04	22			オオムギ	100	5.79	2.82	2.26	22		
		オオムギ	22	5.80	2.77	2.21	22			最小	4.73	2.26	1.75				
		オオムギ	23	5.58	2.82	2.35	22				最大	7.66	3.59		3.15		
		オオムギ	24	6.59	3.59	3.15	22				平均	5.84	2.87		2.32		
		オオムギ	25	5.23	2.59	1.93	22				標準偏差	0.56	0.27		0.29		
		オオムギ	26	6.27	2.90	2.48	22				標本数	100	100		100		
		オオムギ	27	5.95	3.22	2.26	22			5	C-3区 竪堀1埋土4	オオムギ	1	6.83	3.01	2.33	23
		オオムギ	28	6.61	3.43	2.86	22					オオムギ	2	6.15	2.88	2.30	-
		オオムギ	29	6.62	3.24	2.53	22					オオムギ	3	5.90	3.12	2.25	-
		オオムギ	30	6.11	3.28	2.49	22					オオムギ	4	5.95	3.33	2.65	-
		オオムギ	31	5.85	2.85	1.92	22					オオムギ	5	5.35	3.02	2.58	-
		オオムギ	32	5.99	3.10	2.57	22					オオムギ	6	5.24	3.09	2.52	-
		オオムギ	33	6.50	3.23	2.94	22					オオムギ	7	5.93	2.99	2.24	-
		オオムギ	34	6.26	3.06	2.52	22			6-2	C-3区 P-21	オオムギ	1	6.45	3.43	2.49	24
		オオムギ	35	6.70	3.10	2.57	22					オオムギ	2	5.61	2.82	2.12	-
		オオムギ	36	5.39	3.00	2.23	22					オオムギ	3	5.59	3.04	2.37	-
		オオムギ	37	6.16	3.01	2.19	22			6-3	C-3区 竪堀1埋土6	オオムギ	1	6.01	3.58	2.59	-
		オオムギ	38	5.39	2.71	2.04	22					オオムギ	2	5.64	2.75	1.57	-
		オオムギ	39	5.89	3.21	2.43	22					オオムギ	3	5.74	2.67	1.80	-
		オオムギ	40	7.66	3.26	2.79	22			6-4	C-3区 西バンク第13層	オオムギ	4	5.47	2.93	1.95	-
		オオムギ	41	5.10	2.56	2.31	22					オオムギ	1	6.93	3.16	2.31	25
		オオムギ	42	5.10	2.75	2.21	22					オオムギ	2	5.46	3.07	2.54	-
オオムギ	43	6.59	2.90	2.72	22	オオムギ	3	5.52	3.00			2.26	-				
オオムギ	44	5.41	2.52	2.11	22	オオムギ	4	6.17	3.19			2.68	-				
オオムギ	45	6.23	2.99	2.12	22	オオムギ	5	6.24	3.17			2.78	-				
オオムギ	46	5.97	2.77	1.96	22	オオムギ	6	5.07	2.78			2.25	-				
オオムギ	47	6.66	3.09	2.27	22	オオムギ	7	5.26	3.27			2.35	-				
オオムギ	48	5.44	2.51	1.92	22	オオムギ	8	5.38	2.71			2.40	-				
オオムギ	49	5.52	2.65	2.03	22	オオムギ	9	6.17	3.47			2.56	-				
オオムギ	50	4.96	2.65	2.17	22	オオムギ	10	6.01	2.77	2.09	-						
オオムギ	51	6.47	2.69	2.22	22	6-5	C-4区 南壁第17層	オオムギ	1	5.34	2.67	1.81	19				
オオムギ	52	5.36	2.54	1.97	22			オオムギ	2	5.17	3.35	2.05	-				
オオムギ	53	4.73	2.42	1.81	22			オオムギ	3	5.96	2.64	1.88	-				
オオムギ	54	5.21	2.47	1.79	22			オオムギ	-	5.65	2.82	2.41	20				
オオムギ	55	6.10	2.89	2.58	22	7	D区 北壁第2-5層	オオムギ	1	4.96	2.79	2.11	18				
オオムギ	56	5.29	2.67	2.25	22			オオムギ	2	4.54	3.10	2.11	-				
オオムギ	57	5.59	2.78	2.22	22			オオムギ	3	5.36	2.41	2.13	-				
オオムギ	58	5.48	2.77	2.50	22			オオムギ	4	2.46+	3.09	2.32	-				
オオムギ	59	5.99	2.90	2.41	22			コムギ	1	3.81	2.61+	2.81	17				
オオムギ	60	6.24	3.08	2.48	22			コムギ	2	4.56	3.42	2.56	-				
オオムギ	61	5.26	2.86	2.31	22			イネ(糊)	1	8.87	3.07	0.59	15,16				
オオムギ	62	5.59	2.58	1.79	22			イネ(糊)	2	8.73	2.95	0.76	15				
オオムギ	63	6.42	2.82	2.67	22			イネ(糊)	3	8.77	3.07	0.58	15				
オオムギ	64	5.37	2.81	2.65	22			イネ(糊)	4	8.97	2.97	0.52	15				
オオムギ	65	6.03	2.94	2.42	22			イネ(糊)	5	7.33	3.63	0.58	15				
オオムギ	66	5.95	2.92	2.63	22			イネ(糊)	6	8.24	3.11	0.50	15				
オオムギ	67	5.85	3.32	2.70	22			イネ(糊)	7	7.46	3.69	0.54	15				
オオムギ	68	5.81	2.76	2.19	22	イネ(糊)	8	8.41	3.08	0.57	15						
オオムギ	69	6.31	3.14	2.79	22	イネ(糊)	9	9.22	3.11	0.60	15						
オオムギ	70	5.37	2.72	2.07	22	イネ(糊)	10	6.76	3.39	0.64	15						
オオムギ	71	6.27	2.67	1.75	22	イネ(糊)	11	6.90	3.55	0.86	15						
オオムギ	72	5.00	2.31	1.75	22	イネ(糊)	12	8.27	2.86	1.36	15						
オオムギ	73	5.66	2.85	2.44	22	イネ(糊)	13	8.93	3.04	0.46	15						

表9 主な種実遺体の計測値2

No	出土地点	種名	枝番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	図版 番号	No	出土地点	種名	枝番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	図版 番号
7	D区 北壁第2-5層	イネ(糊)	14	8.31	2.96	0.75	15	7	D区 北壁第2-5層	イネ(糊)	27	9.03	3.03	0.77	15
		イネ(糊)	15	8.91	3.08	0.93	15			イネ(糊)	28	9.15	3.48	0.55	15
		イネ(糊)	16	7.06	3.29	0.54	15			イネ(糊)	29	9.43	3.25	0.53	15
		イネ(糊)	17	8.40	2.50	0.56	15			イネ(糊)	30	9.30	3.18	0.50	15
		イネ(糊)	18	9.27	3.46	0.57	15			イネ(糊)	31	8.59	3.09	0.85	15
		イネ(糊)	40	6.42	3.33	1.12	15			イネ(糊)	32	6.79	3.40	0.76	15
		イネ(糊)	41	6.81	2.82	1.18	15			イネ(糊)	33	6.22	3.45	0.38	15
		イネ(糊)	42	8.85	2.98	0.83	15			イネ(糊)	34	8.34	2.93	0.76	15
		イネ(糊)	43	6.29	3.14	0.90	15			イネ(糊)	35	8.99	3.28	0.57	15
		イネ(糊)	44	7.30	3.33	0.44	15			イネ(糊)	36	8.01	2.59	0.95	15
		イネ(糊)	45	8.84	3.21	0.66	15			イネ(糊)	37	6.10	3.54	0.86	15
		イネ(糊)	46	6.97	3.07	0.80	15			イネ(糊)	38	8.39	3.31	0.31	15
		イネ(糊)	47	5.73	2.95	1.12	15			イネ(糊)	39	6.45	2.60	1.24	15
		イネ(糊)	48	6.11	3.27	0.71	15			イネ(糊)	74	7.78	3.99	0.70	15
		イネ(糊)	49	6.27	3.65	0.67	15			イネ(糊)	75	7.15	3.87	0.78	15
		イネ(糊)	50	6.76	3.10	0.73	15			イネ(糊)	76	6.58	3.79	0.81	15
		イネ(糊)	51	6.26	3.58	0.42	15			イネ(糊)	77	7.11	3.61	0.76	15
		イネ(糊)	52	6.82	3.49	0.61	15			イネ(糊)	78	7.25	3.55	0.65	15
		イネ(糊)	53	7.10	3.18	0.47	15			イネ(糊)	79	8.45	3.38	0.66	15
		イネ(糊)	54	6.78	3.47	0.80	15			イネ(糊)	80	7.40	3.52	0.48	15
		イネ(糊)	55	8.63	3.43	0.53	15			イネ(糊)	81	7.18	3.77	0.79	15
		イネ(糊)	56	7.06	3.35	0.58	15			イネ(糊)	82	6.38	3.33	0.74	15
		イネ(糊)	57	6.72	2.92	0.96	15			イネ(糊)	83	8.68	3.49	0.83	15
		イネ(糊)	58	7.31	2.89	0.78	15			イネ(糊)	84	6.81	3.11	0.74	15
		イネ(糊)	59	8.71	3.55	0.87	15			イネ(糊)	85	7.42	3.67	0.84	15
		イネ(糊)	60	7.87	2.50	0.56	15			イネ(糊)	86	8.66	3.23	0.52	15
イネ(糊)	61	8.39	3.19	0.89	15	イネ(糊)	87	8.60	2.84	0.87	15				
イネ(糊)	62	8.79	3.26	0.89	15	イネ(糊)	88	8.49	3.18	0.78	15				
イネ(糊)	63	7.46	2.91	0.88	15	イネ(糊)	89	6.77	3.21	0.75	15				
イネ(糊)	64	8.69	2.72	1.05	15	イネ(糊)	90	7.72	3.61	0.79	15				
イネ(糊)	65	6.87	3.37	0.79	15	イネ(糊)	91	6.38	3.44	0.59	15				
イネ(糊)	66	5.96	3.03	0.46	15	イネ(糊)	92	6.92	3.48	0.92	15				
イネ(糊)	67	6.71	3.32	0.65	15	イネ(糊)	93	6.96	3.79	0.69	15				
イネ(糊)	68	7.17	3.52	0.54	15	イネ(糊)	94	8.49	2.91	0.75	15				
イネ(糊)	69	7.43	3.18	0.78	15	イネ(糊)	95	8.24	3.01	0.79	15				
イネ(糊)	70	7.25	3.85	0.82	15	イネ(糊)	96	8.94	3.06	0.79	15				
イネ(糊)	71	6.42	3.32	0.57	15	イネ(糊)	97	8.43	3.45	0.81	15				
イネ(糊)	72	6.91	2.98	0.58	15	イネ(糊)	98	8.71	3.29	0.53	15				
イネ(糊)	73	6.65	3.20	0.87	15	イネ(糊)	99	8.81	3.17	0.63	15				
イネ(糊)	19	8.76	3.14	0.53	15	イネ(糊)	100	9.03	3.14	0.61	15				
イネ(糊)	20	8.75	3.21	0.36	15	最小	5.73	2.50	0.31						
イネ(糊)	21	9.27	3.07	0.70	15	最大	9.43	3.99	1.36						
イネ(糊)	22	8.91	2.87	0.98	15	平均	7.74	3.24	0.71						
イネ(糊)	23	7.32	3.41	0.77	15	標準偏差	1.02	0.30	0.19						
イネ(糊)	24	9.03	3.46	0.40	15	標本数	100	100	100						
イネ(糊)	25	7.99	2.93	0.72	15	アサ	-	4.34	3.52	2.14	28				
イネ(糊)	26	6.38	3.26	0.62	15	ソバ	-	6.43	3.58	3.47	30				

(1) 計測はデジタルノギスを使用、欠損は残存値に「+」で示す。

第2-11層、第2-25層は、いずれもイシガイ目(Order Unionoida)と判断でき、カワシンジュガイ科(Family Margaritiferidae)カワシンジュガイ(Margaritifera laevis)の可能性がある。

第2-11層は、殻皮が表面に残る。殻頂部が中央より左側にあることから、左殻が表面となっているとみられる。殻長95mm程度となる可能性がある。

第2-25層は、2試料あり、殻皮だけでなく、殻自体も残存する。1点は大きな破片が3点程度あり、左右殻の破片とみられる。もう1点は、内面が上側であり、殻頂部の位置より、右殻とみられる。殻長70mm程度となる可能性がある。

(6) 土壌理化学分析

結果を表11に示す。C-3区の試料を見ると、有機炭素から算出される腐植含量は、P-62、P-65で5.60%~5.88%と同様であり、P-64では7.36%、SK-1では21.4%、堅堀1埋土4では17.3%と試料間での差異は大きく、SK-1、堅堀1埋土4で特徴的に多い。全窒素含量は堅堀1埋土4で0.51%と多く、他の試料は0.30%~0.41%である。C/N比はP-62、P-64、P-65で9~10と一般的であり、SK-1では41と特徴的に多く炭素の割合が大きく、堅堀1埋土4では20と炭素

4. 考察

表 10 貝同定結果

No.	出土地点		種類	部位	左	右	状態	数量	備考
12-1	D区(裾部)	湿地 北壁第2-11層	カワシンジュガイ?	殻皮	左		破片	1	土塊状,殻長95±mm
12-2	D区(裾部)	湿地 北壁第2-25層	カワシンジュガイ?	殻	左	右	破片	1+	土塊状
			カワシンジュガイ?	殻		右	破片	1+	土塊状,殻長70±mm

表 11 土壌化学分析結果

No.	出土地点		土色	土性	有機炭素 (%)	腐植 (%)	全窒素 (%)	C/N	全リン酸 (mg/g)	全カルシウム (mg/g)
1	C-3区(丘陵部)	P-62	25Y3/3 暗オリーブ褐	SiCL	3.41	5.88	0.36	9	4.39	4.53
2	C-3区(丘陵部)	P-64	25Y3/2 黒褐	SiCL	4.27	7.36	0.41	10	2.74	3.52
3	C-3区(丘陵部)	P-65	25Y3/2 黒褐	SiCL	3.25	5.60	0.37	9	3.19	4.15
4	C-3区(丘陵部)	SK-1	25Y2/1 黒	SiL	12.4	21.4	0.30	41	1.43	4.00
5	C-3区(丘陵部)	堅堀1埋土4	25Y2/1 黒	SiL	10.0	17.3	0.51	20	1.26	4.43

(1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

(2) 土性: 土壌調査ハンドブック改訂版(日本ペドロジー学会編, 1997)の野外土性による。

SiL …シルト質壤土(粘土0~15%, シルト45~100%, 砂0~55%)

SiCL …シルト質埴壤土(粘土15~25%, シルト45~85%, 砂0~40%)

(3) 腐植: 有機炭素×1.724。

(4) C/N: 有機炭素/全窒素。

の割合がやや大きい。

全リン酸はP-62で4.39mg/gと多く、P-64では2.74mg/g、P-65では3.19mg/gとやや多く、SK-1では1.43mg/g、堅堀1埋土4では1.26mg/gと少ない。カルシウム含量は3.52mg/g~4.53mg/gとほぼ同様の結果であった。

4. 考察

(1) C区(丘陵部)

土壌に含まれる炭素含量は、主に植生繁茂の指標として用いられ、その炭素の集積量は主に植物遺体供給量に規定される。気候的要因による植生の繁茂状態が、炭素含量に大きく影響を与えているとされる。そして、リン酸の多くが植物に由来することが知られている。リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

また、土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが(Bowen 1983, Bolt・Bruggenwert 1980, 川崎ほか 1991, 天野ほか 1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g(川崎ほか 1991)という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1~50mg/g(藤貫 1979)といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壌中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

C-3区の埋葬に使用したとみられる江戸時代の火鉢内の土壌や山城に伴う遺構の土壌についてみると、土壌理化学分析の結果では、P-62、P-65においてリン酸の天然賦存量を超える結果が得られた。また、P-64においてもリン酸が2.74mg/gとやや多い結果となっている。ただし、これら3試料において、C/N比が9~10と一般的な割合であるが、腐植が多く含まれていることや、植物根などの混入が多くみられたことから、植物遺体成分が多く混入していると考えられる。また、これら3試料では、カルシウム含量がリン酸含量と比例して多くなる傾向にあり、動物遺体成分によるリン酸含量の増加という結果の解釈も考えられるが、その含量は特徴的な値ではない。ただし、P-62とP-65ではP-64より腐植含量が少ないながら、リン酸含量がP-64より多く含まれていることから、P-62、P-65では埋葬に伴う動物遺体成分の混入の可能性が大きくなるが、今後、地山試料を比較試料として、再度検証することが望まれる。また、P-64についてもその可能性は挙げられるが、比較試料の存在がないことや、植物遺体成分が多いこと、リン酸やカルシウムが特徴的に多いというわけではないことから、具体的な言及は難しい。また、SK-1、豎堀1埋土4試料では、リン酸含量が少なく、遺体成分の混入の可能性は少ないと考えられるが、C/N比の結果や炭化物の混入程度から、未分解有機物が多く、なんらかを燃やしていたことは想定されるが、その利用用途について具体的な言及は難しい。

一方、微細物分析・種実分析の結果をみると、C-3区のSK-1や豎堀1、P-21、C-4区の南壁第17層から、炭化した栽培植物のオオムギが多量確認された。穀類のオオムギは、利用された植物質食糧と示唆される。内外穎が癒着した穎果が多い保存状態から皮麦と推測され、脱稃(^{だっぶ} 初穀を取り去る)前の段階で火を受けて炭化したとみなされる。多量の炭化オオムギ出土と上述の理化学分析結果は調和的である。ただし、遺構内で火を受けたか、別の場所で火を受けたものが遺構内に移動したかは不明のため、調査所見とともに検討する必要がある。

(2) D区(裾部)

まず、山城裾部の低湿地とみられる土壌の堆積環境を検討する。珪藻分析の結果をみると、低湿地の底に堆積していた土壌とされる第3-1層からは、珪藻化石が豊富に産出し、特徴的に産出した種は淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula* var. *lineata*、*Cymbella turgidula*等である。種の生態性について述べると、好流水性種の*Cocconeis placentula* var. *lineata*は、河川等の流水域の基物(礫等)に大型の藻類と共に付着生育する種である。Asai and Watanebe(1995)は、清浄な水域に生育する種であることから、好清水性種としている。流水性種の*Cymbella turgidula*は中~下流性河川指標種群(安藤 1990)と呼ばれ、河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現するとされる。以上のことから、第3-1層の堆積環境は、河川の影響を受ける湿地環境であったと推測される。

一方、第2-3層~第2-26層の3試料からは、珪藻化石が1個体も確認されなかった。そのため、珪藻化石の生態性や群集の生育特性による、直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好氣的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。以上のことから、堆積時に取り込まれた珪藻化石は、堆積後に分解が進んで消失した可能性が高い。

また、第2-11層および第2-25層で検出された貝は、カワシンジュガイの可能性のあるイシガイ目であった。カワシンジュガイは、水質のきれいな流水中で砂礫や石礫質の河床に殻を半分ほど埋めて直立した状態で生息する。今回の試料の最小個体数は3個体となる。いずれにしても、淡

4. 考察

水生の二枚貝であるイシガイ目には間違いなく、本地点およびその周辺が淡水域となっていたことを裏付けるものである。

次に当時の植生について検討する。花粉分析結果を見ると、第3-1層では草本花粉の占める割合が高く、微細物分析・種実分析の結果でも第2-5層、第2-26層、第3-1層で草本類の種類数・個数が多い。花粉化石ではイネ科が特徴的に多産し、カヤツリグサ科、ナデシコ科などを伴う。また、抽水植物のオモダカ属、ミズアオイ属、ミズワラビ属、浮漂植物のサンショウモなども確認された。植物珪酸体では、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、シバ属などを含むイネ科が認められる。種実遺体でも、沈水植物のイトトリゲモ？、抽水植物のオモダカ科、コナギ近似種、湿生植物のミゾソバ、ヤナギタデ近似種、タカサブロウ、中生植物のイネ科、ヒメクグ属？、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、ギシギシ属、ナデシコ科、キジムシロ類、カタバミ属、チドメグサ属、アリノトウグサなどが確認された。これらは調査地内やその周囲の明るく開けた草地や湿地、林縁などに生育していたと考えられる。後述するように、栽培種のイネ(属)の共伴を考慮すると、水湿地生植物は水田雑草に由来する可能性も充分考えられる。

一方、木本類についてみると、花粉化石ではマツ属が最も多く産出し、ツガ属、スギ属などの針葉樹、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹を伴う。種実遺体では、常緑高木のマツ属複雑管束亜属、スギ、クスノキ科、落葉高木のムクノキ、エノキ属、アカメガシワ、ミズキ、常緑小高木～低木のヒサカキ属が確認された。これらの木本類には有用材も含まれることから、植栽の可能性を含めて近辺の河畔や林縁、二次林などに生育していたと考えられる。

最後に栽培植物についてみると、植物珪酸体分析では、第2-26層、第3-1層から栽培種のイネ属が検出された。安定した稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量(植物珪酸体密度)が高くなる。水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当り5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山2000)。この例と比較すれば、第3-1層で1,800個/g、第2-26層で600個/gの機動細胞珪酸体含量は少ないと言える。ただし、第3-1層、第2-26層ではイネ属が他の分類群よりも多い傾向を示し、珪化組織片のイネ属類珪酸体やイネ属短細胞列も多く検出される点と、花粉分析でも多産するイネ科花粉中にイネ属型が認められる点、種実分析でもイネ(稲粃)が確認され、特に第2-5層より出土した曲物内から多産した点を考え合わせると、D区内あるいは近傍などで稲作が行われており、植物体として稲粃殻や稲藁が混入していたと推測される。

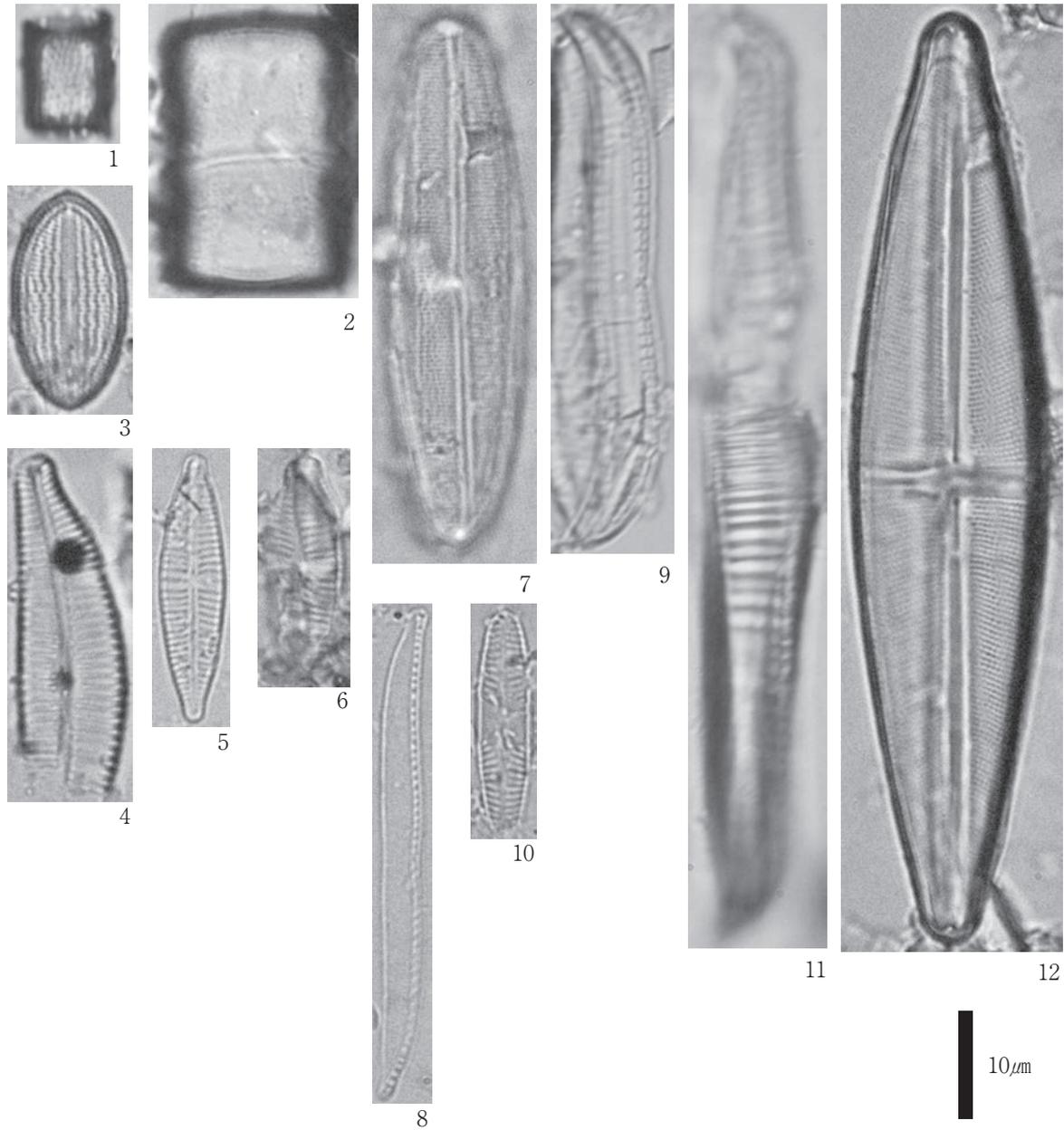
イネ以外では、穀類のオオムギ、コムギ(連)、ソバ(属)などの種実、花粉化石、植物珪酸体が確認され、周囲で栽培された可能性がある。オオムギ、コムギの穎果は炭化していることから、火を受けたとみなされる。この他、種実が確認されたアサは、果実が食用や油料、繊維が衣料や縄等に利用される。栽培の可能性は、イヌビエ属が雑穀類のヒエに由来する場合、周囲で栽培された可能性がある。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 1991「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』
安藤一男 1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』

- Asai, K. and Watanabe, T. 1995「Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa」『Diatom』
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M. 1980『土壤の化学』
- Bowen, H. J. M. 1983『環境無機化学－元素の循環と生化学－』
- Desikachary, T. V. 1987「Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at T.T. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras - 600044. 1 - 13」『Plates』
- 土壤環境分析法編集委員会編 1997『土壤環境分析法』
- 土壤標準分析・測定法委員会編 1986『土壤標準分析・測定法』
- 藤木利之・小澤智生 2007『琉球列島産植物花粉図鑑』
- 藤貫 正 1979「カルシウム」『地質調査所化学分析法』
- Hustedt, F. 1930「Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7」『Leipzig, Part 1』
- Hustedt, F. 1937 - 1938「Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen - Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III」『Arch. Hydrobiol. Suppl』
- Hustedt, F. 1959「Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7」『Leipzig, Part 2』
- Hustedt, F. 1961 - 1966「Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres - gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7」『Leipzig, Part 3』
- 伊藤良永・堀内誠示 1989「古環境解析からみた陸生珪藻の検討 - 陸生珪藻の細分 -」『日本珪藻学会第10回大会講演要旨集』
- 伊藤良永・堀内誠示 1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『日本珪藻学誌』
- 川崎 弘・吉田 滯・井上恒久 1991「九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量」『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』
- 近藤鍊三 2010『プラント・オパール図譜』
- 小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』
- Krammer, K. and Lange - Bertalot, H. 1985『Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, 9』
- Krammer, K. and Lange - Bertalot, H. 1986『Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(1)』
- Krammer, K. and Lange - Bertalot, H. 1988『Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2)』
- Krammer, K. and Lange - Bertalot, H. 1990『Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3)』
- Krammer, K. and Lange - Bertalot, H. 1991『Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4)』
- Lange - Bertalot, H. 2000「ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange - Bertalot, Dittmer Metzeltin」『Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1』
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子 2011『日本産花粉図鑑』
- 中村 純 1980『日本産花粉の標徴 I II (図版)』
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2010『日本植物種子図鑑(2010年改訂版)』
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967『新版標準土色帖』
- 奥谷喬司・窪寺恒己・黒住耐二・斎藤 寛・佐々木猛智・土田英治・土屋光太郎・長谷川和範・濱谷 巖・速水 格・堀 成夫・松隈明彦 2000『日本近海産貝類図鑑』
- 奥谷喬司編著 2004『改訂新版 世界文化生物大図鑑 貝類』
- ペドロジー学会編 1997『土壤調査ハンドブック改訂版』
- 島倉巳三郎 1973『日本植物の花形形態』
- 杉山真二 2000「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と自然科学3 考古学と植物学』
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文 2018『草木の種子と果実 - 形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂 - ネイチャーウォッチングガイドブック』

図版1 珪藻化石



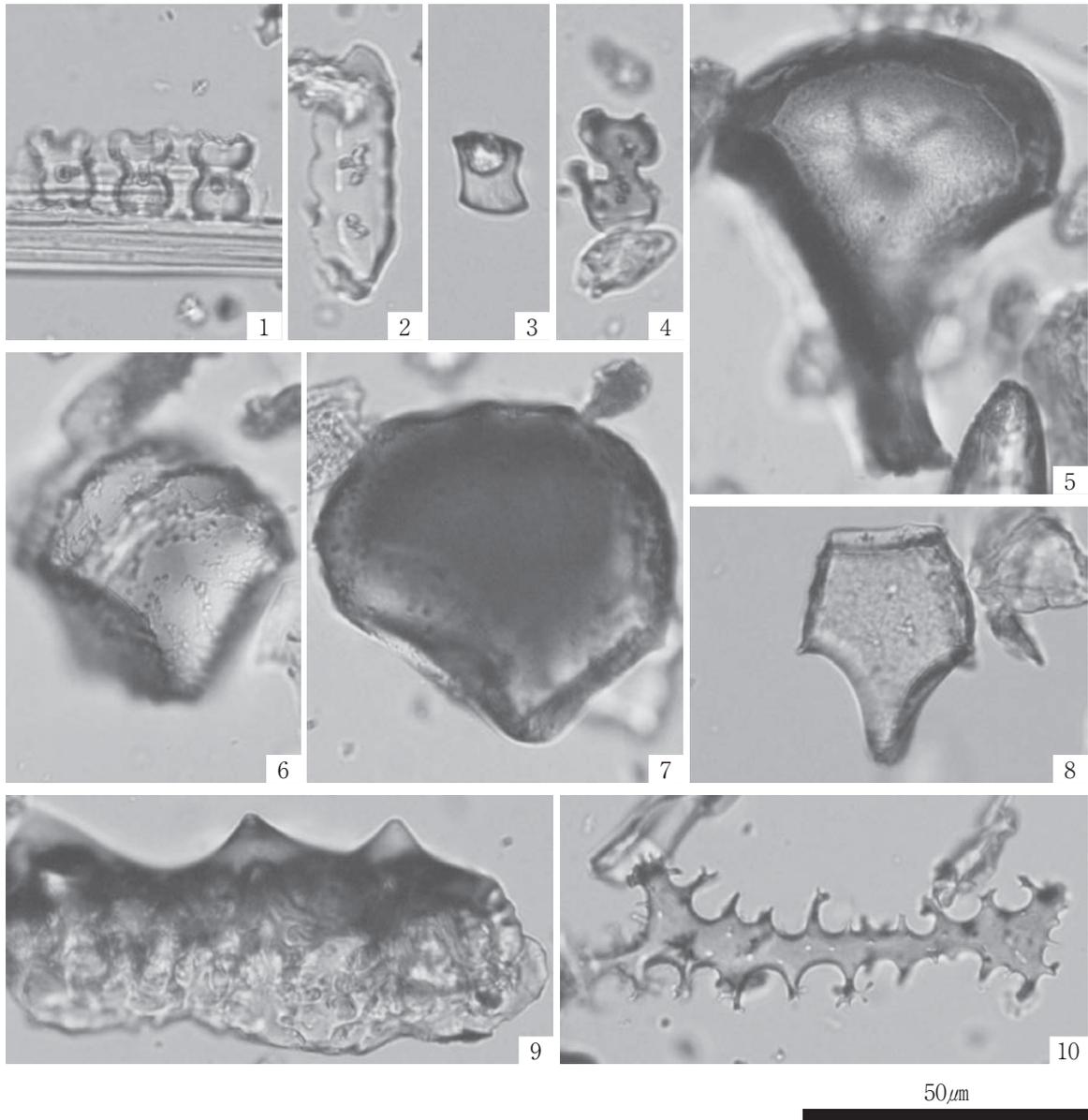
1. *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (D区 北壁第3-1層; 8)
2. *Melosira varians* C. Agardh (D区 北壁第3-1層; 8)
3. *Cocconeis placentula* var. *lineata* (Ehr.) Cleve (D区 北壁第3-1層; 8)
4. *Cymbella turgidula* Grunow (D区 北壁第3-1層; 8)
5. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (D区 北壁第3-1層; 8)
6. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (D区 北壁第3-1層; 8)
7. *Neidium ampliatus* (Ehr.) Krammer (D区 北壁第3-1層; 8)
8. *Nitzschia brevissima* Grunow (D区 北壁第3-1層; 8)
9. *Nitzschia levidensis* (W. Smith) Grunow (D区 北壁第3-1層; 8)
10. *Pinnularia subcapitata* Gregory (D区 北壁第3-1層; 8)
11. *Rhopalodia gibba* (Ehr.) Mueller (D区 北壁第3-1層; 8)
12. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (D区 北壁第3-1層; 8)

図版2 花粉化石



- | | |
|-----------------------------|----------------------------|
| 1. ツガ属(D区 北壁第3-1層:8) | 6. カヤツリグサ科(D区 北壁第3-1層:8) |
| 2. マツ属(D区 北壁第3-1層:8) | 7. イネ科(イネ属型)(D区 北壁第3-1層:8) |
| 3. スギ属(D区 北壁第3-1層:8) | 8. ソバ属(D区 北壁第3-1層:8) |
| 4. コナラ属アカガシ亜属(D区 北壁第3-1層:8) | 9. ナデシコ科(D区 北壁第3-1層:8) |
| 5. イネ科(D区 北壁第3-1層:8) | 10. ヨモギ属(D区 北壁第3-1層:8) |

図版3 植物珪酸体



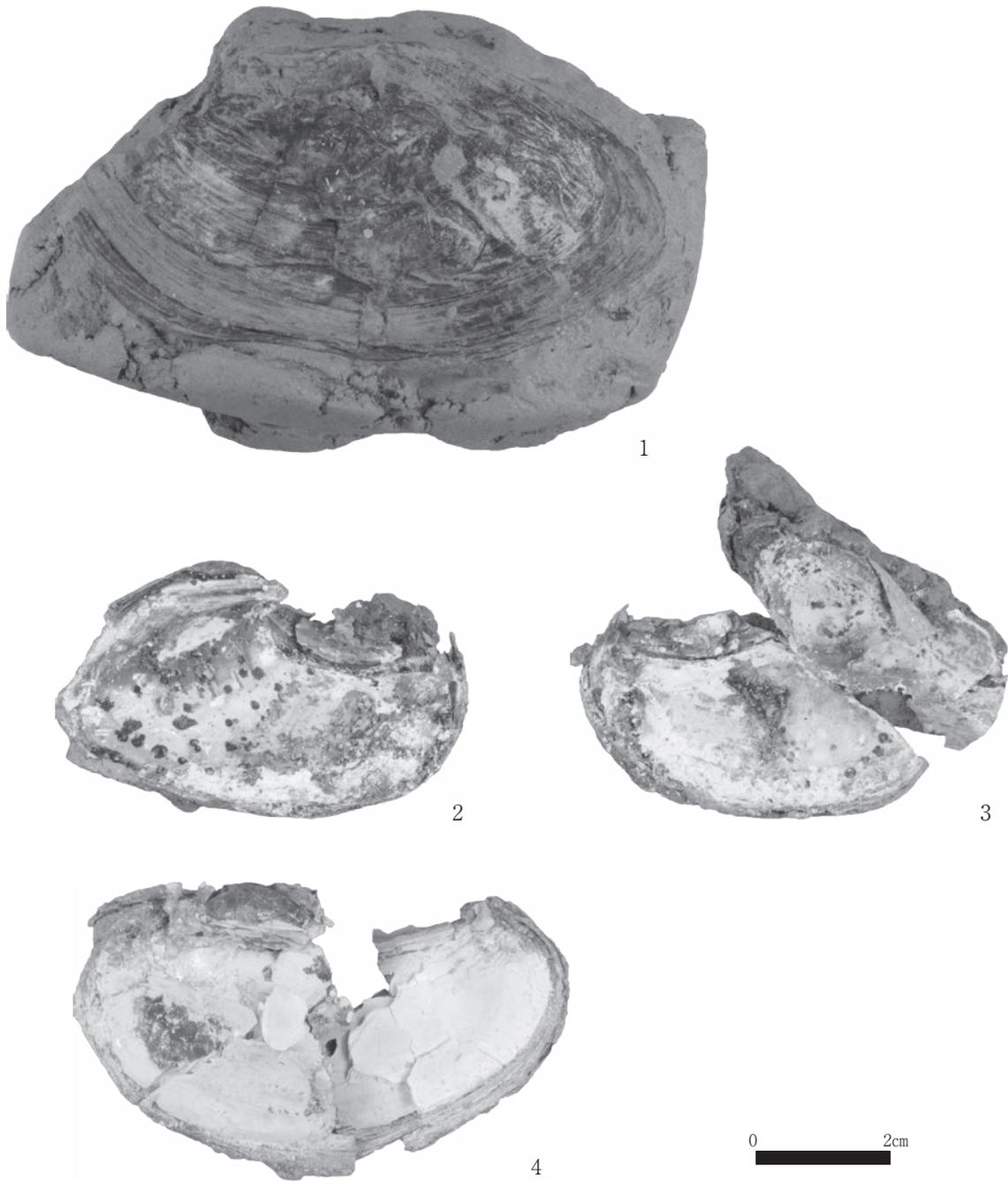
- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1. イネ属短細胞列(D区 北壁第3-1層:8) | 6. メダケ属機動細胞珪酸体(D区 北壁第3-1層:8) |
| 2. コムギ連短細胞珪酸体(D区 北壁第3-1層:8) | 7. ヨシ属機動細胞珪酸体(D区 北壁第3-1層:8) |
| 3. メダケ属短細胞珪酸体(D区 北壁第3-1層:8) | 8. シバ属機動細胞珪酸体(D区 北壁第3-1層:8) |
| 4. ススキ属短細胞珪酸体(D区 北壁第3-1層:8) | 9. イネ属穎珪酸体(D区 北壁第3-1層:8) |
| 5. イネ属機動細胞珪酸体(D区 北壁第3-1層:8) | 10. コムギ連穎珪酸体(D区 北壁第3-1層:8) |

図版4 大型植物遺体



- | | | |
|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------------|
| 1. マツ属複維管束亜属 種子(D区 北壁第2-5層:7) | 14. イヌビエ属 果実(内外穎)(D区 北壁第2-5層:7) | 26. カヤツリグサ科(ヒメクグ属?) 果実(D区 北壁第2-26層:9) |
| 2. スギ 種子(D区 北壁第2-5層:7) | 15. イネ 籾(内外穎)(D区 北壁第2-5層:7) | 27. カヤツリグサ科 果実(D区 北壁第2-26層:9) |
| 3. ムクノキ 核(D区 北壁第2-5層:7) | 16. イネ 籾(内外穎)(D区 北壁第2-5層:7) | 28. アサ 果実(D区 北壁第2-5層:7) |
| 4. エノキ属 種子(D区 北壁第2-5層:7) | 17. コムギ 穎果(D区 北壁第2-5層:7) | 29. ミゾソバ 果実(D区 北壁第2-5層:7) |
| 5. クスノキ科 葉(D区 北壁第2-5層:7) | 18. オオムギ 穎果(D区 北壁第2-5層:7) | 30. ヤナギタデ近似種 果実(D区 北壁第2-5層:7) |
| 6. クスノキ科 葉(D区 北壁第2-5層:7) | 19. オオムギ 穎果(C-4区 南壁第17層:6-5-1) | 31. ソバ 果実(D区 北壁第2-5層:7) |
| 7. ヒサカキ属 種子(D区 北壁第2-26層:9) | 20. オオムギ 穎果(C-4区 南壁第17層:6-5-4) | 32. ナデシコ科 種子(D区 北壁第2-26層:9) |
| 8. アカメガシワ 種子(D区 北壁第2-5層:7) | 21. オオムギ 穎果(C-3区 SK-1:4-2) | 33. ハスノハカズラ 核(D区 北壁第2-5層:7) |
| 9. ミズキ 核(D区 北壁第2-5層:7) | 22. オオムギ 穎果(C-3区 SK-1:4-2) | 34. カタバミ属 種子(D区 北壁第2-26層:9) |
| 10. オモダカ科 種子(D区 北壁第3-1層:8) | 23. オオムギ 穎果(C-3区 縦堀1埋土4:5) | 35. チドメグサ属 果実(D区 北壁第2-26層:9) |
| 11. コナギ近似種 種子(D区 北壁第2-26層:9) | 24. オオムギ 穎果(C-3区 P-21:6-2) | |
| 12. イネ科 果実(D区 北壁第2-26層:9) | 25. オオムギ 穎果(C-3区 西バンク第13層:6-4) | |
| 13. イヌビエ属 果実(内外穎)(D区 北壁第2-5層:7) | | |

図版5 貝



- 1.カワシンジュガイ?左殻(D区 北壁第2-11層:12-1)
- 2.カワシンジュガイ?左殻(D区 北壁第2-25層:12-2)
- 3.カワシンジュガイ?右殻(D区 北壁第2-25層:12-2)
- 4.カワシンジュガイ?右殻(D区 北壁第2-25層:12-2)

第Ⅵ章 まとめ

1. 森山城跡

(1) 遺構について

森山城跡の詰の標高は23.6m、裾部は東西及び南北とも約70mを測り、極めて小規模な平山城である。今回の調査範囲は森山城跡北斜面と西斜面の一部であり、森山城跡丘陵部の約四分の一の範囲となる。限られた範囲の調査ではあったが、曲輪2では二面の遺構面が確認され、城跡として機能した時期が14世紀後葉～15世紀前葉の下面と16世紀前半の上面の二時期があることが明らかになった。図270は遺構平面図と縄張図、地形図を元に作成した森山城跡の概要図である。

① 曲輪1・堀切1

今回の調査地内では2箇所曲輪を確認した。曲輪1は詰の下の帯曲輪で、今回の調査で最も高い場所に位置し、標高約18.0mを測り、詰の西側に南北に細長く伸びる。曲輪1の北に突出し大きく広がった箇所が調査範囲となっており、建物跡等が確認されることが予想されたが、堀切が確認され、建物跡は確認されなかった。堀切1は曲輪1を東西に横切り、両端を上面の時期に造られた切岸によって切られていることから、堀切1が造られたのは下面の時期とみられる。曲輪1では建物跡が確認されていないことや堀切1からは16世紀の出土遺物がみられることから、上面の時期にも曲輪1と堀切1が機能していたものとみられる。

② 平場1・平場2

平場1・2は曲輪1と同じ尾根の突端に位置し、一連の遺構とみられる。標高約18.0mの曲輪1から標高約17.0mの平場1、標高約15.8mの平場2と階段状に下がっている。平場1は三角形、平場2は帯状を呈し、いずれも岩盤を削平して平場を造り出している。平場1の土層堆積(図171)では、第33層には炭化物を非常に多く含んでおり、一時期この面で機能していたものとみられる。第33層からは16世紀の土師質土器が出土しており、上面の時期と考えられる。また、第34層から岩盤までの出土遺物は15世紀の範疇で収まるものとみられ、岩盤上が下面の時期の遺構面と考えられる。これらの平場の両側には上面の時期に切岸が造られ、下面の時期の平場は一部が削平された可能性もある。上面と下面のいずれの時期もピットが検出され、堆積層からは鉄釘が出土している。平場では建物跡が確認されなかったが、何らかの構造物が存在した可能性がある。

③ 下面の遺構

上面の時期には大規模な改修を行っており、下面の時期の遺構が削平を受けた可能性があるが、曲輪2で建物跡等が確認された。下面の時期の曲輪2は丘陵北斜面に東西方向に帯状に伸びる。地山の岩盤を削平して曲輪を造り出しており、西端は幅が3.16m、東端は0.46mを測り、東に向かって幅が細くなっており、東は調査区外へ続く。西端の幅が広く突出した箇所では1間×1間の小型建物跡であるSB-1が確認された。曲輪2の西端は上面の時期に竪堀が造られ一部が削平されており、SB-1が1間×2間であった可能性もある。SB-1は尾根状に突出した場所に位置することや小型であることから物見櫓の様な用途の建物であったものとみられる。またSB-1の周辺では炭化物層が広がっており、炭化物層より100点以上の鉄釘が出土していることから、SB-1は焼失したものであると思われる。この炭化物層からは鉄製の小札4点も出土している。

1. 森山城跡

SB-1の東側では大型土坑であるSX-1が確認された。SX-1は曲輪2を遮るように造られており、SX-1のある箇所は曲輪2の幅が22cmを測る狭い通路状になっていることから、防御のために造られた遺構とみられる。SX-1からは古瀬戸や青磁等が出土しており、14世紀後葉から15世前葉の遺構とみられる。

④ 上面の遺構

上面の遺構は曲輪2と豎堀1・2、土塁、堀1・2、切岸などがある。曲輪1では下面の遺構を再利用していたとみられるが、曲輪1以下では大規模な改修を行っていた。曲輪1と曲輪2の間の斜面部には切岸を造っている。

i 曲輪2

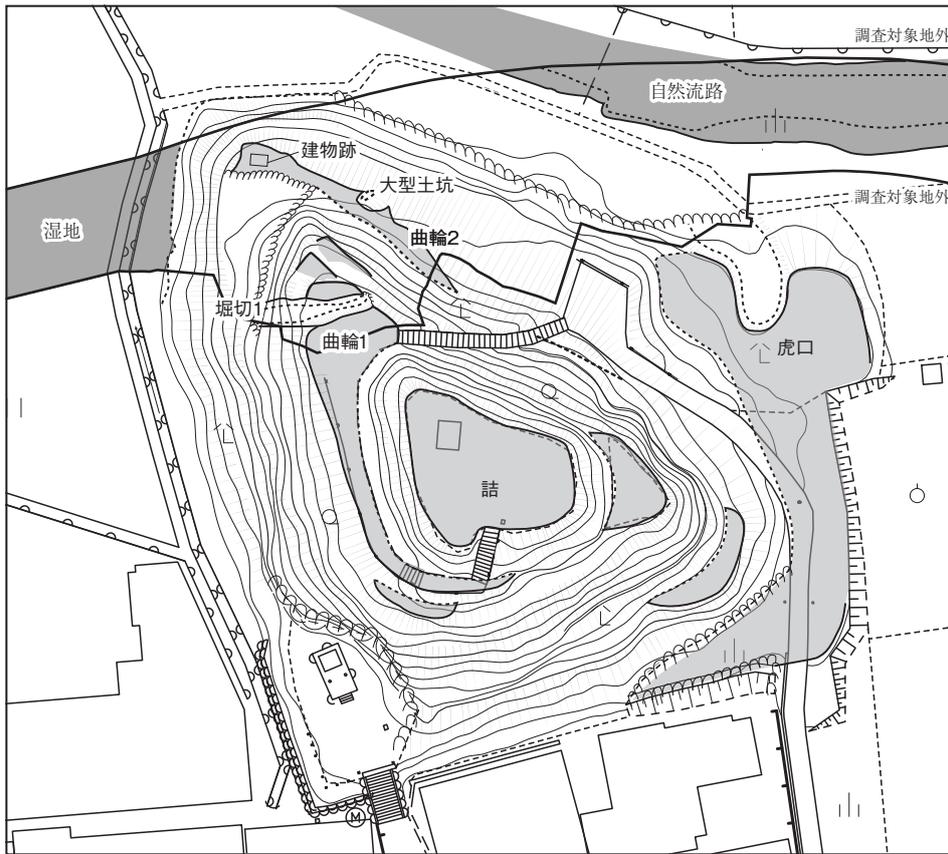
曲輪2は丘陵北側から西側に掛けてL字状に伸び、両端は調査区外へ続く。西側部分は岩盤を掘削することにより、下面の時期にはなかった曲輪と2区の切岸を造り出している。検出面からは端反の白磁皿(545)などが出土しており、16世紀前半とみられる。北側部分は、下面の時期の幅46cmを測る細い通路状の曲輪の上に、盛土をすることにより広い曲輪を造り出していた。造成の範囲は検出長35.56m、検出幅5.11～6.16m、高さ6.89mに及び、調査区外へ続いているためさらに広がる。造成土は地山である岩盤の割石とみられる礫が多量に含まれており、丘陵上部を掘削した土や礫を使用したものとみられる。造成土の上面の土質は砂質シルトでやや粘性があり、礫層の上に意図的に敷いた可能性がある。この面では切岸裾部で塀または柵列とみられる柱穴がみられたが、建物跡は確認できなかった。盛土をした箇所の西部では炭化物と焼土が検出され、被熱したものとみられる。盛土の堆積は非常に厚く、また礫を多く含むため脆く、調査区壁面が崩壊する危険性が高いため、盛土の下面はトレンチでの確認であり、一部のみの調査であったが、盛土からは12世紀から15世紀前半の遺物が出土している。土師質土器のほか、備前焼と常滑焼が多くみられ、白磁壺や小札も出土している。盛土により曲輪を広げる事例は、県内では城ノ台城跡や姫野々城跡、岡豊城跡、吉良城跡で確認されている。⁽¹⁾ 岡豊城跡では厚さ2m以上の盛土を20mの範囲に行っており、森山城跡と同様な大規模な造成であり、岡豊城跡においても造成された曲輪では建物跡は確認されていない。岡豊城跡や他の城跡とは規模や時期が異なるが、建物のない広い曲輪を造る目的としては、兵員の駐屯や物資を集積するための空地とする意見もある。⁽²⁾

ii 豎堀・通路状遺構

豎堀は西斜面で2条が確認され、豎堀2の上端から豎堀1まで通路状遺構が伸びており、同時期の遺構と考えられる。通路状遺構については、平坦な曲輪に岩盤を掘削してまで造り出しており、移動のための通路とは考え難く、細い通路へ敵を誘導する目的、あるいは排水も兼ねていた溝と思われる。豎堀については、調査範囲が限られてはいるが西斜面でのみ確認されている。西斜面は傾斜が急であり、曲輪1より堀切1が伸びるなど西に遺構が集中している。森山城跡からは西に仁淀川を望むことができ、仁淀川あるいは対岸の高岡地域からの侵攻を警戒していた可能性がある。

iii 大型土坑跡

曲輪2では大型土坑であるSX-2を確認した。曲輪2の造成土上からの掘り込みが確認され、隅丸方形を呈し、長辺2.45m、短辺2.28m、深さ3.46mを測る。上部は盛土、下部は地山の岩盤を掘削することにより造り出し、ほぼ垂直に掘り込まれていた。豎堀1の東端で確認され、防御のために造られた可能性がある。また、岡豊城跡⁽³⁾のように雨水を貯める溜井である可能性もあるが、標



下面



上面

図270 森山城跡概要図(S=1/800)

1. 森山城跡

高10mの地点であり、裾部には自然流路が流れていることから防御のために造られ、水溜としても利用されたものと思われる。

iv 土塁

土塁は樹木を伐採した段階で確認できており、西は調査区外へ続く。調査区外へは低くなりながら約4m伸び、現在の水路に切られ耕作地へ続くため、削平を受けたものとみられ、土塁西端の様相は不明であるが、D区で湿地が確認されたことから湿地と繋がっていた可能性が高い。土塁は断面が半円形を呈し、盛土によって造られていた。盛土は残存高1.20mを測り、土質は丘陵部の土を使用した曲輪2の盛土とは異なり、砂質シルトまたは粘土質シルトで平地部の土を用いている。おそらく曲輪2と土塁の間の堀1を掘削した際の廃土を盛ったものとみられる。土塁の盛土は曲輪2の盛土の上に構築されており、上面の時期の遺構と考えられる。土塁東端は近世に削平されたものとみられ、当時の様子は明らかではないが、おそらく南北方向に伸びる堀2まで続いていたものと思われる。

v 堀跡

堀は曲輪2と土塁の間に東西方向に伸びる堀1と、堀1の東端に繋がる南北方向に伸びる堀2を確認し、堀1と堀2はL字状に繋がる。堀1も土塁と同様に樹木を伐採した段階で確認でき、埋土上層からは近世の遺物が多量に出土した。堀1の基底面は西が浅く、東へ向かって深くなっており、基底面の標高差は約1.60mを測る。堀1西端は調査区外へ続くため明らかではないが、土塁と同様にD区の湿地に繋がっていたのではないかとみられる。堀1の東端は断面がV字型を呈する薬研堀で、防御力が高められていた。東端の検出時の深さは1.26mを測り、土塁が堀2まで伸びていたと想定すると、堀1の東端では土塁頂部から堀の底まで2.86mとなる。

堀2は北端が自然流路であるSR-1とほぼ垂直に繋がる。堀2と自然流路の基底面の高さは同じで平坦となっており、基底面の高さが同じであることから、堀2は自然流路の水を引き込んだ水堀であったと考えられる。堀2は虎口とみられる部分へ向かって造られているが、虎口へは続かず直角に曲がって堀1に繋がる。堀1と堀2の結合部の基底面の高さは堀2が5cm深く、堀1は堀2の接合部である東が最も深く、西に向かって浅くなることから、堀1東端には水量により水が入っていたとみられるが、大半は空堀であったと考えられる。堀2の底では丸太材と板材、杭を使用した遺構を確認した。意図的に基底面を高く掘り残して造った帯状の高まりの上に、丸太3本を寝かせ、自然流路側に杭を立て板材を打ち付けていた。自然流路は検出幅が9.74m、深さ1.22mと小規模であり、水量はそれほど多いとは考えられず、平時の際は自然流路から入る水量を調節し、奥まで水が入らないようにしていたものとみられる。⁽⁴⁾堀2は堀1や土塁と一連の遺構とみられ、上面の時期の遺構とみられる。

⑤ 近世の遺構

丘陵上の曲輪2で検出したP-62・64・65からは瓦質土器火鉢をピットに据え置いた状態で出土し、P-62・64は瓦で蓋をしていた。これらの遺構は近い位置で確認されており、時を経ず置かれたものとみられる。また、丘陵裾部の土塁西端では遺構は確認できなかったものの、堆積層より土師器火鉢(673)や瓦質土器火鉢(725・735・736)が比較的近い位置より口縁部を上にした状態で出土している。これらの火鉢の埋土からは、骨片の出土はなく植物根の混入が多く、土壤理化学分析の結果からも埋葬に使用したことを裏付けることはできなかったが、江戸では火消壺を土器棺として

利用している事例も多く、人骨も確認されている。東京都崇源寺・正見寺跡⁽⁵⁾では火消壺より出生前後や乳幼児の骨が確認されており、胞衣壺の可能性も示唆されている。今回の調査で出土した火鉢は、ほぼ完存し、口を上にした状態で出土していること、纏まって出土している状況や丘陵上で周辺に生活の痕跡が少ない場所であることなどから、胞衣壺や骨蔵器として使用された可能性が高いとみられる。

(2) 森山城跡裾部の様相について

森山城跡北側では自然流路が確認され、西側では湿地が確認された。県内での山城の調査において、裾部の状況が判明している事例は少ない。春野町では芳原城跡⁽⁶⁾で裾部の調査を行っており、堀状地形が確認され、城の周囲が湿地で囲まれていたと考えられている。木塚城跡⁽⁷⁾においても西側裾部の調査が行われており、湿地であったと推定されている。森山城跡や芳原城跡、木塚城跡はいずれも吾南平野中央低地の丘陵に立地し、谷や湿地が入り込んだ地形となっており、森山城跡の南東に位置する森山南城跡の裾部は、現在も湿地である。森山城跡を含むこれらの城跡では、自然地形を利用し、湿地や自然流路を天然の堀として築城にかかる労力を省いたものとみられる。

(3) 出土遺物について

① 山城以前の遺物

弥生時代の遺構は確認されていないが、今回の調査で最も標高が高い1区より弥生時代の遺物が出土している。堀切1より弥生時代中期末とみられる弥生土器壺(755)、平場2の上面で検出したピットより石斧(792)が出土した。また、丘陵裾部の上面の造成土最下層から弥生土器壺(681)、近世の遺構であるSX-4からも石斧(917)が出土している。山城を造成する際に削平された可能性があるが、弥生時代中期末頃に丘陵上である1区より高い箇所、弥生時代の遺構が存在した可能性が高い。県内でも山城で弥生時代の遺構や遺物が確認される事例は多く、春野町では木塚城跡で丘陵上の平場より弥生時代中期末の遺物が出土している。木塚城跡は森山城跡と同様に吾南平野の丘陵に造られた山城であり、森山城跡と同時期の弥生時代の遺物が出土しており、遺構も確認されている。春野町は仁淀川やその支流である新川川の氾濫が著しく、低湿地が多くみられる地域であり、木塚城跡や森山城跡の裾部でも湿地が確認されていることから、浸水の影響を受けない丘陵上に居住していたことが推定される。

隣接する二ノ堀遺跡では10世紀後半から16世紀までの遺物が一定量出土している。森山城跡では山城として機能する以前の10世紀後半から11世紀の遺物は、丘陵裾部の堀1で土師器甕(861)が確認されているものの、丘陵上では確認されていない。丘陵上で確認されている遺物は12世紀以降で、出土量は少なく、2区の切岸堆積土より出土した白磁碗(507)や曲輪2の造成土内より出土した青白磁合子(689・717)や白磁碗(708)などが挙げられる。13世紀になると出土量が少しずつ増え、瓦器や東播系須恵器、青磁の出土がみられ、13世紀後葉からは古瀬戸や備前焼、常滑焼などの陶器の出土が一定量みられる。遺物の出土量からみると、10世紀後半から13世紀前半にかけては丘陵で生活していたとは捉え難く、生活の本拠地は二ノ堀遺跡であったとみられる。

② 山城期の遺物

森山城跡の調査面積は1,062㎡で山城の約四分の一にあたるものの、古代から中世の総遺物点数は2,894点を数える。図271は近世の遺物を除いた遺物の破片数の割合を示したもので、その60%は土師質土器であるが、破片が大半で時期が判る遺物は少ない。次いで多い器種は金属製品で10%

1. 森山城跡

に上り、鉄釘が多く出土したことによるものである。その他の金属製品では鉄製の小札が7点、武具の部品である鞆1点、武器である鉄鎌が2点、刀の部品である銅製の切羽2点、鯉口金具1点などがみられ、武器と武具の出土も確認された。今回の調査では丘陵上の1～5区のすべての調査区で600点以上の河原石が出土した。河原石は径10cm以内のものが多く、つぶてとして使用されたものとみられる。上面のSX-3は河原石の集石遺構で、効果的な位置に配備していたものとみられる。

また、土錘が69点出土しており、3c区と4a区では纏まって出土している。城跡から土錘が出土することは知られており、城で軍役を努める兵員が日々の生活で漁労活動をしていたとする見解もあるが⁽⁸⁾、纏まって出土した地点では焼土や炭化物の堆積が認められ、戦いの場であったことが想定される。漁労活動をする兵員が丘陵を登ってくる敵に対して、投網を用い防御したことも考えられよう。

土師質土器以外の土器では、備前焼が5%、常滑焼7%、瀬戸・美濃陶器1%など陶器の出土が目立つ。備前焼は播鉢、壺、甕が出土し、3a期～5期⁽⁹⁾のものがみられ、3期の遺物が多く、14世紀後葉～15世紀とみられる。常滑焼は甕の体部片の出土が多く、個体数は減るとみられる。6a期～9期の遺物がみられ、7・8期の遺物は少なく、13世紀中葉～15世紀前半の遺物がみられる。⁽¹⁰⁾瀬戸・美濃陶器は26点が出土し、1点は大窯期、その他は古瀬戸で時期が明らかな遺物は概ね中IV期～後II期⁽¹¹⁾のもので、14世紀中葉～15世紀初頭のものである。古瀬戸は供膳具が65%、袋物が35%で、袋物の出土の割合が高いことも注目される。古瀬戸の出土は木塚城跡で多く58点に上る。時期的には前IV期から中III期とされ、森山城跡より遡る時期となっている。陶器は時期が判明しているものでは16世紀の遺物が少なく、下面に伴う遺物が多いものとみられる。これらの遺物より中世下面の遺物は14世紀後葉から15世紀前葉を主体とすると考えられる。

上面に伴う遺物としては白磁や青花などの貿易陶磁器が目立つ。丘陵部出土の貿易陶磁器は144点で、遺物の4.6%を占め、その内訳は白磁45%、青磁44%、青白磁1%、青花10%である。供膳具以外の器形としては前項で記載した青白磁合子のほか、白磁香炉(840・841)、白磁壺(665・666・688・695・696・709・720・768)と青磁水注(638)がみられる。白磁香炉は上面の遺構である堅堀2より出土したもので、胎土が濃い灰色を呈し、透明感のない白磁釉を厚く施すもので、産地は明らかではない。白磁壺は8点がみられ、いずれも上面の曲輪2の造成土より出土した。青磁水注は堆積層より出土したもので、残存部が僅かで明らかではないが、径が小さいため注口の一部と思われる。白磁は65点が出土し、碗は11～12世紀のIV類とVIII3類⁽¹²⁾が大半で、764は14世紀のピロースクタイプとみられる。皿はすべてE-2類⁽¹³⁾で、体部全体が外反する541・545と見込が無釉の509・766・767が出土しており、16世紀のものである。その他、14～15世紀の口禿の杯(765)と高台をアーチ状に挟む杯(846)なども出土している。青磁は63点が出土した。同安窯系の碗や皿では劃花文や鎬蓮弁文を持つ12～13世紀に遡るものが少量含まれる。その他の碗はB類が約5割、D類が約3割で、C・E類⁽¹⁴⁾は少量の出土がみられ、14～16世紀にかけての時期幅が広い遺物がみられる。青花は14点出土し、碗C群3点、皿B1群6点、皿C群1点、時期不明及び細片4点で、16世紀前半に収まる。これらの遺物をみると、15世紀後半の遺物はやや希薄であり、中世上面は16世紀前半を主体

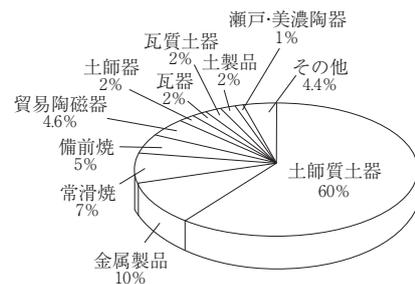


図271 森山城跡出土器種組成図

とする時期で、16世紀中葉には廃城となったものとみられる。

2. 二ノ堀遺跡

(1) 出土遺物について

古代以前の出土遺物としてはB区の中世の遺構であるSK-92より弥生時代後期の細片1点と堆積層より弥生土器片1点が出土している。また、A区の中世のSD-1と近世のSX-1より須恵器蓋(22・44)が出土している。いずれも7世紀後半から8世紀初頭にかけての遺物とみられる。この時期の遺物は今回の調査では二ノ堀遺跡で出土したこの2点のみである。

一定量の遺物が出土するのは10世紀後半からで、17世紀までの遺物が連綿と出土する。この時期の遺物はA区からD区までのすべての調査区でみられたが、特にB-1区では出土量が多く、中世前期の遺構も確認されている。広域流通品としては、瓦器や東播系須恵器、古瀬戸、備前焼、常滑焼、播磨型土師器釜、河内型瓦質土器釜などが出土している。その他、SD-20より紀伊型の土師器釜(201)が出土している。紀伊型の土師器は極めて限定的な出土状況を示すとされ、県内では太平洋沿岸部の遺跡に限られ、港津やその周辺で出土している¹⁶⁾。なお、今回の調査では森山城跡裾部でも紀伊型の土師器釜(733)と土師器釜(881)が出土している。紀伊型の土師器が出土したSD-20は、森山城跡に隣接する屋敷を囲む溝跡で、奈良火鉢(213)も出土している。奈良火鉢や紀伊型

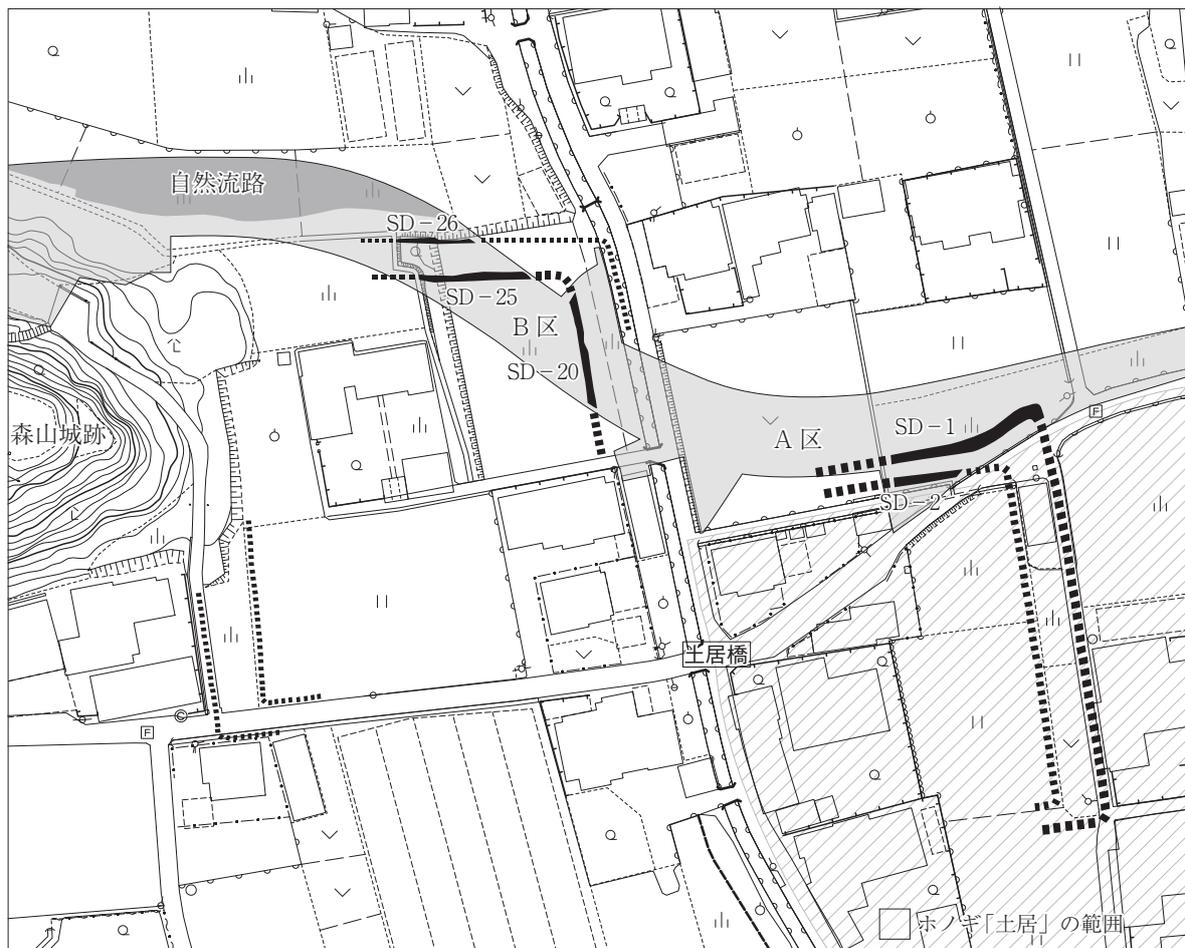


図272 二ノ堀遺跡溝跡推定位置図(S=1/800)

2. 二ノ堀遺跡

の土師器は木塚城跡でも出土しており、古瀬戸の出土が多いことなど、木塚城跡と出土遺物の傾向は類似している。特殊な遺物としては、A区で常滑焼鉢(74)が出土しており、県内では上ノ村遺跡⁴⁷⁾でのみ出土が確認されている。仁淀川の対岸にある港津であり、紀伊を經由した舟の寄港が想定されている上ノ村遺跡と、城跡である森山城跡や木塚城跡が少なからず関連していたものと考えられる。

(2) 検出遺構について

今回の調査で最も東に位置するA区では、中世と近世の遺構を検出した。中世では12世紀の遺物の出土が確認されているが、遺構は15世紀を中心とする。A区と森山城跡の間に位置するB区では、中世の遺構面が2面みられ、10世紀後半から15世紀の中世下面と16世紀から17世紀初頭の中世上面が確認された。

古代末の遺物は一定量がみられるものの、この時期の明確な遺構は少なく、B-1区で確認されたSK-79・80・96, SX-12・18, P-92・106・111が該当する。中世を通して連綿と遺構が造られ、削平を受けたものとみられる。

中世の遺構ではA区とB区で屋敷を方形に囲んでいたとみられる溝跡が確認された。A区のSD-1はL字状に屈曲する溝で、北東のコーナー部が検出され、一部では断面がV字形を呈していた。また、SD-1の内側にも平行するSD-2がみられ、二重の溝で囲まれた屋敷が存在したものとみられる。これらの溝で囲まれた屋敷の中心は、調査区外で調査は行っていないが、ホノギは「土居」である。B区ではSD-20・25が屋敷を囲んでいた溝跡とみられる。コーナー部は調査区外であり確認できていないが、これらの溝は位置や規模、断面がV字形を呈するなど類似しており、繋がっていた可能性が高い。SD-25の北側にはSD-26が平行に伸びる。SD-26の北側には自然流路があり、この溝跡の北側に屋敷地が存在したとは考えられず、SD-20・25と一連のものである可能性が高い。SD-26の東は調査区外へ続き、調査区東側に流れる近世に造られた用水路の所を南に折れたものと思われる。A区のSD-1・2の間には土塁が存在したものとみられ、調査区外の土塁が存在したとみられる箇所は、現在も帯状の細い地割が残っており、A区の屋敷地は約60m四方と推測できる。B区においても、用水路に沿って帯状の細い地割がみられることから、土塁が存在した可能性が高い。調査区周辺で帯状の細い地割を探してみると、森山城跡の東に隣接する箇所に確認することが出来る。この地割までが一つの屋敷地と考えると、B区の屋敷地は約75m四方と推定される。溝跡に伴う屋敷跡は確認できなかったが、溝跡の出土遺物はSD-1からは16世紀前半、SD-20・25からは15世紀前半のものがみられる。B区でも15世紀前半の遺物は出土しており、SD-1が15世紀前半と16世紀前半の二時期に渡って使用されていた可能性もあり、森山城跡が機能していた時期に、森山城跡東側に複数の屋敷地があったものとみられる。B区のSD-20・25については、森山城跡下面の時期と捉えることができ、屋敷の規模、森山城跡に隣接していることなど、森山城築城に関わった城館である可能性が高い。

B区ではSD-20・25の埋土上に構築されたSB-12~16を確認した。掘立柱建物跡は切り合いがみられ、方形の柱穴であるSB-12が円形の柱穴であるSB-14を切っており、時期差があるものと考えられる。出土遺物にはいずれも近世の遺物を含んでおり、廃絶時期は近世とみられる。機能していた時期は、森山城跡上面と同時期の16世紀前半、あるいは森山城廃城後の遺構と考えられる。天正17(1589)年の仲村郷森山地検帳⁴⁸⁾では、森山城跡のホノギである「二ノ堀」には「詰ノタイ」

がみられ、「富家出雲守給 森山分 久アレ畠下々」とあり、城としての機能が失われていたことがわかる。富家出雲守は、長宗我部元親の弟の香宗我部氏に養子に入った香宗我部親泰の家臣であり、一部は長宗我部氏の給地となっている。さらに、森山城跡の東約600mには当時、妙見社と言われた星神社があり、その元亀3(1572)年の棟札には「妙見社当地頭源親安」とある。この「親安」とは香宗我部親泰とされることから¹⁹⁾、1572年には香宗我部氏が森山に入っていたとみられる。森山城廃城後にあたる遺構は、香宗我部氏家臣の屋敷地であったものと思われる。また、A区とB区の間には流れる用水路に掛かる橋は「土居橋」と言われ、A区の屋敷地のホノギが「土居」であることから、『長宗我部地検帳』の時期の「土居」はA区の南ではないかと推測する。

(3) 森山城跡との関係について

遺構や遺物の時期からみると二ノ堀遺跡で10世紀後半に生活の痕跡が認められる。それ以前の遺物は極端に少なく、10世紀後半になり突如として現れた遺跡と言える。二ノ堀遺跡では、その後17世紀初頭まで遺構と遺物が連綿と確認されており、15世紀と16世紀前半には二重の溝で囲まれた屋敷がみられる。それに対し森山城跡は、遺物の出土量からみると、13世紀後半から出土量が増加してくるが、それ以前は活動していたとは言い難い。13世紀後半から14世紀半ばまでは遺物量が増加するものの、遺構は確認されておらず、二ノ堀遺跡を生活の場としながら、丘陵部での活動が増えて来た時期と捉えることが出来る。森山城跡で最も遺物量が多い時期は14世紀後半から15世紀前半で、中世下面の時期である。この時期には二ノ堀遺跡のB区で二重の溝で囲まれた屋敷が存在したとみられ、森山城跡と二ノ堀遺跡は一連の遺跡と言える。また、B区の屋敷の居住者が森山城を築城した可能性が高いとみられる。森山城跡は以前より森山氏の居城とされていたが²⁰⁾、森山氏の実態については明らかではない。森山城跡の詰には城山神社があるが、『皆山集』など²¹⁾によると、出雲国島根郡美穂郷森山村に鎮座する神社に由来し、この事よりこの地が森山と言われるようになった。その後、中世領主が城を築き、鎮守のためこの神社を新たに祀り、詰八幡あるいは城八幡と称した。また、中世領主はこの丘陵に馬屋城を築き、詰ノ城と呼んだとされているとあり、この中世領主が森山氏と推定できるのではないだろうか。さらに二ノ堀遺跡では10世紀後半から遺物がみられ、この時期から森山氏が躍動していた可能性がある。

3. 春野町における森山城跡

中世の春野町については「古城伝承記」や「吉良物語」など後世の軍記物などでしか知ることはできないが、春野町には吉良氏、木塚氏、森山氏、小島氏などの国人が存在したとされ、中でも吉良氏は有力国人として最盛期には戦国土佐の七守護の一人となり勢力を誇った。15世紀末から16世紀初め頃には本山氏が朝倉城を拠点として南下し、吾南平野は吉良氏と本山氏の抗争の場となる。これらの抗争については軍記物により知るところではあるが、森山城と朝倉城の間に位置する荒倉神社の棟札には「天文九大檀那清茂」とあり、天文9(1540)年には弘岡に本山氏が入っており、本山氏によって吉良氏は滅ぼされたとみられる。²²⁾その後、弘岡は本山氏の支配となるが、芳原と西畑・仁ノ・森山は西から進出してきた一條氏が従えた。吾川郡南部は本山氏と一條氏との抗争の場となり、弘治3(1557)年に本山氏は一條氏を吾川郡南部から駆逐し、支配を確立したとされる。さらに、永禄3(1560)年、長宗我部氏に攻められた本山氏は吾川郡南部を撤退する。²³⁾当時の春野がこの様な状況であったとするならば、森山城跡下面の時期である14世紀後葉から15世紀前半に森山城を抑え

3. 春野町における森山城跡

ていたのは、吉良氏の傘下にあった森山氏ではないだろうか。また、上面の時期である16世紀前半に城を改修し大造成を行ったのは、本山氏あるいは一條氏の可能性が高い。

森山城跡下面の時期に機能していた城跡としては木塚城跡がある。また、上面の時期に機能していたのは芳原城跡である。木塚城跡とは規模や出土遺物の傾向等、類似する点も多く、連携を取る様な関係であったのではないだろうか。芳原城跡は規模や遺構、遺物が春野町の中では別格であり、「政所」などのホノギが残っていることから、吉良氏が芳原城にいた可能性も唆されている。²⁴⁾ 芳原城と森山城が終焉を迎えるのは16世紀中葉であり、いずれも『長宗我部地検帳』の時期には廢城となっており、いずれも長宗我部氏によって滅ぼされたとみられる。吉良氏が芳原城にいたとするならば、森山城も少なからず影響を受けていたものとみられる。位置的にみると、森山城跡から木塚城跡と芳原城跡を直接見ることはできない。森山城跡の背後には森山南城跡がある。森山南城跡は発掘調査が行われておらず、機能していた時期は明らかではないが、標高100mを超える丘陵上に位置し、森山南城跡からは太平洋を望むことができ、木塚城跡と芳原城跡も眼下に捉えることができる。森山城跡と森山南城跡の関係は明らかではないものの、森山南城跡の裾には二ノ堀遺跡が拡がり、森山城築城に関わる屋敷の存在などから、二ノ堀遺跡が森山南城跡に大きく関与していたことは疑いようがないものと思われる。

森山城廢城後には、二ノ堀遺跡では香宗我部氏家臣の屋敷跡が存在したとみられるが、『長宗我部地検帳』には森山だけでなく、喜津賀西分、仁ノなどの近隣の地に「森山分」がみられる。森山氏の旧所領地は、一部は香宗我部氏のものとなるが、直分や給地、百姓地など様々な形態を取り、残っていることから、森山氏は長宗我部氏に服属し森山周辺になお残っていたものとみられる。²⁵⁾

註

- (1) 宮里修 2019「中世山城の築造技術と年代について」『海南史學』第57号 高知海南史学会
- (2) 千田嘉博 2003「戦国期城郭の空間構成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集
- (3) 高知県教育委員会 1990『高知県 岡豊城跡－第1～5次発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財調査報告書第31集
- (4) 中井均氏に御教示頂いた。
- (5) 宗教法人明治神宮・大成エンジニアリング株式会社 2005『崇源寺・正見寺跡－南元町複合施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- (6) 春野町教育委員会 1984『芳原城跡発掘調査報告書 高知県吾川郡春野町中央地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(春野町教育委員会 1985『高知県春野町 中世の城跡』所収)
- (7) 春野町教育委員会 2004『木塚城跡Ⅱ 温浴施設建設に伴う発掘調査報告書』春野町埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
- (8) 中井均 2020『城館研究叢書I 中世城館の実像』高志書院
- (9) 乗岡実 2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
- (10) 中野晴久 1995「中世陶器[2]常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- (11) 藤澤良祐 1996「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～ 資料集』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム
- (12) 山本信夫 1995「貿易陶磁器[2]中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- (13) 續伸一郎 1995「貿易陶磁器[3]中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- (14) 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- (15) 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- (16) 池澤俊幸 2019「四国南岸にみる河内・播磨・紀伊産の土器と水運」『港津と権力』中世都市研究会編

- (17) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012『上ノ村遺跡V－波介川河口導流事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第129集
- (18) 高知県立図書館 1963『長宗我部地検帳 吾川郡下』
- (19) 朝倉慶景 2008「長宗我部氏と室町幕府の関係について」『土佐史談』237号 土佐史談会
朝倉慶景 2008「戦国期の香宗我部氏について」『土佐史談』238号 土佐史談会
- (20) 春野町 1976『春野町史』春野町史編纂委員会編
中山巖水 2016「土佐国編年紀事略」『土佐國群書類従拾遺 傳記部 卷四』高知県立図書館編
- (21) 高知県立図書館 1978「神社志」『皆山集 第一巻』
高知県立図書館 2011『吾川郡神社明細帳』六冊の内二
- (22) (6)に同じ
- (23) (20)に同じ
- (24) 松田直則 2019「土佐における城郭考古学の現状と課題」『海南史學』第57号 高知海南史学会
- (25) 山本大 1962「解説」『長宗我部地検帳 吾川郡上』高知県立図書館

参考文献

- 春野町教育委員会 1993『高知県春野町 芳原城跡Ⅱ－第2～4次発掘調査報告書－』春野町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集

遺物觀察表

遺物観察表凡例

1. 計測単位はcmまたはgで示している。重量で1kgを超えるものはkgで示している。
2. 数値は重量を除き復元値を含む。()は残存値を表している。
3. 回転ナデ調整などの調整の文字は省略している。

遺物観察表1

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉薬	調整・文様・特徴	備考
1	A-1区堆積層	第1層	青磁碗	-	(2.4)	4.4	-	1/4	灰白色	透明感強い明緑色の青磁釉	外面は鎗蓮弁文。高台は小さく、削り出し、無釉。	中国産龍泉窯系
2	A-1区堆積層	第1層	近世陶器皿	10.0	3.4	4.3	-	ほぼ完存	灰黄色	灰オリープ色の灰釉	唐津系灰釉陶器。丸皿。高台は削り出し、無釉。高台内は輪状に砂付着。	1610~1630年代
3	A-1区堆積層	第2層	備前焼播鉢	-	(4.6)	-	-	一部残存	浅黄橙色	-	回転ナデ。播目が僅かに残る。口縁部に重ね焼痕。口縁部は直立。	
4	A-1区堆積層	第2層	白磁碗	-	(2.1)	7.9	-	1/2	灰白色	内面白磁釉	外面は無釉。高台は低く幅広い、削り出し。	
5	A-2区堆積層	第1層	近世磁器猪口	6.0	2.3	2.8	-	1/4	灰白色	透明釉	外面に笹文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産か江戸後期
6	A-2区堆積層	第4層	陶器碗	-	(4.4)	-	-	一部残存	灰白色	鉄釉	天目形。	肥前産か1590~1610年代か
7	A-3区堆積層	第1層	白磁碗	-	(2.0)	-	-	一部残存	灰白色	白磁釉	口縁部を横へ細く摘む。	
8	A-3区堆積層	第1層	青花碗	-	(3.5)	-	-	一部残存	灰白色	透明釉	外面に三葉状の斑点文の染付。	
9	A-3区堆積層	第1層	近世陶器碗	11.6	6.5	5.5	-	底部完存	灰白色	白化粧土のち透明釉貫入が入る	広東形。陶胎染付。太白手。見込に五弁花、内面に圏線の染付。外面は呉須と鉄錆の宝文と圏線。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産19世紀
10	A-3区堆積層	第1層	近世磁器碗	-	(4.0)	4.8	-	底部完存	灰白色	透明釉	見込に五弁花。内面に圏線。外面は土坡と草、笹、樹文、圏線の染付。見込を蛇ノ目釉ハギ、刷毛状の痕跡と輪状に砂付着。	幕末
11	A-3区堆積層	第1層	金属製品銭貨	銭径1.78	内径1.61	銭厚0.11	重量1.9	完存	-	-	旭日十銭銀貨。表面は菊花紋章と菊枝、桐枝、「十銭」。側面に刻目。裏面は旭日と桜。「明治四十年」と「SEN」。明治40(1907)年製造。	明治40(1907)年~大正6(1917)年発行
12	A-3区堆積層	第2層	金属製品銭貨	銭径2.40	内径1.91	銭厚0.13	重量2.3	完存	-	-	銅銭。寛永通寶。新寛永。孔径0.61cm。	1697年以降
13	A-3区堆積層	第2層	金属製品銭貨	銭径2.31	内径2.10	銭厚0.14	重量2.9	ほぼ完存	-	-	一銭銅貨。桐一銭青銅貨。表面は菊と唐草、「一銭」。裏面は桐と桜。「大日本」、「大正十年」。大正10(1921)年製造。	大正5(1916)年~昭和13(1938)年発行
14	A-1区中世	SB-3 P-1	土師質土器皿	10.0	3.1	4.7	-	2/3	にぶい橙色	-	著しく摩耗し調整不明。	
15	A-1区中世	SB-3 P-1	土師質土器皿	-	(2.5)	4.1	-	底部完存	にぶい橙色	-	著しく摩耗し調整不明。	
16	A-1区中世	SB-4 P-3	瓦質土器鍋	24.5	(4.6)	-	(27.2)	一部残存	灰色	-	著しく摩耗し調整不明瞭。内外面に僅かに指頭圧痕残る。内面に炭素吸着なし。	
17	A-1区中世	SB-4 P-3	備前焼播鉢	-	(2.5)	-	-	一部残存	灰白色	-	回転ナデ。底部外面は無調整。内面に縦方向と斜方向の播目。	17世紀前葉か
18	A-1区中世	SB-5 P-3	備前焼播鉢	-	(7.8)	-	-	一部残存	灰赤色	-	播目なし。器壁薄い。	
19	A-1区中世	P-4	瓦質土器釜	-	(5.3)	-	-	一部残存	黄灰色	-	扁平な鈔を貼付。口縁部は横ナデ。体部はナデか、摩耗し不明瞭。体部外面に指頭圧痕。	
20	A-2区中世	SB-7 P-1	瀬戸・美濃陶器皿	10.4	(1.8)	-	-	一部残存	浅黄橙色	灰釉	折縁皿。内面に丸彫の菊弁文。	大窯期
21	A-2区中世	SD-1 上層	土師質土器杯	-	(2.0)	6.0	-	底部完存	にぶい橙色	-	著しく摩耗し調整不明。底部は回転糸切り。器壁は非常に薄い。	
22	A-2区中世	SD-1 上層	須恵器蓋	-	(1.8)	-	-	一部残存	褐灰色	-	回転ナデか。外面は摩耗し調整不明。かえりが付く。	古代
23	A-2区中世	SD-1 上層	須恵器甕	-	(5.5)	-	-	肩部一部残存	灰白色	-	内面は青海波文の当て具痕のちナデ。頸部は横方向のナデ。外面は平行タタキ。	
24	A-2区中世	SD-1 上層	白磁皿	-	(1.5)	4.5	-	一部残存	灰白色	白磁釉	切高台。釉は薄い。見込に重ね焼痕。	
25	A-2区中世	SD-1 上層	青磁碗	-	(2.1)	-	-	一部残存	灰白色	やや黄色味帯びた青磁釉	口縁部外面に片彫の小さな蓮弁文。蓮弁は凸。器壁薄い。口縁部の一部を除き施釉。	

遺物観察表2

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
26	A-2区 中世	SD-1 上層	備前焼 播鉢	-	(5.0)	-	-	一部 残存	灰赤色	-	回転ナデ。播目の一部残る。口縁部外面に重ね焼痕。口縁部は薄く直立、下方は細く揃む。	
27	A-2区 中世	SD-1 上層	備前焼 播鉢	-	(7.1)	13.6	-	1/5	橙色	-	回転ナデのち外面の一部にナデ。底部は無調整。摩耗した8条単位の播目が3箇所。	
28	A-2区 中世	SD-1 上層	備前焼 甕か	-	(7.1)	-	-	一部 残存	灰赤色	-	内外面ともナデ。外面に線刻の文様の一部残る。	
29	A-2区 中世	SD-1 上層	備前焼 壺か	-	(3.2)	4.9	-	1/4	灰白色	-	小型。回転ナデ。底部は回転糸切りのちナデ。	
30	A-2区 中世	SD-1 下層	備前焼 播鉢	21.3	9.3	12.0	-	1/6	灰色	-	回転ナデ。片口の内面に指頭圧痕。11条単位の播目。底部は無調整。	
31	A-2区 中世	SD-2	土師器 釜	18.1	(4.8)	-	最大径 24.2	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	口縁部外面に凹線状の段。内面は横方向の板ナデ。外面は横方向のナデ。体部外面は煤付着し調整不明。	和泉・河内型 畿内産
32	A-2区 中世	SD-2	須恵器 甕か	-	(6.4)	17.2	-	底部 一部 残存	灰白色	-	内面は横方向のナデ。体部外面は回転ナデ。底部外面は無調整、板状圧痕残る。	
33	A-2区 中世	P-5	青磁 碗	-	(3.2)	-	-	一部 残存	灰白色	黄色味帯びた 青磁釉	外面の一部に陰刻の雷文帯か。口縁部は肥厚。	
34	A-2区 中世	P-11	土師質 土器 杯	15.9	4.9	10.1	-	1/3	灰白色	-	回転ナデか、摩耗し調整不明。底部は回転糸切り、板状圧痕残る。器壁厚い。	
35	A-2区 中世	P-17	青花 皿	-	(1.2)	6.8	-	1/2	灰白色	透明釉	見込に玉取獅子と圏線、外面に唐草文と圏線の染付。高台は削り出し、高台内に放射線状の鈍痕。畳付は無釉、砂付着。	
36	A-2区 中世	P-21	土師器 甕	27.8	(3.6)	-	-	口縁 一部 残存	にぶい 橙色 砂粒多	-	横ナデ、外面に縦方向の粗いハケ。口縁部は肥厚。	
37	A-2区 中世	P-24	土師質 土器 杯	-	(1.7)	6.4	-	一部 残存	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
38	A-3区 中世	SK-3	土師質 土器 碗	-	(1.6)	6.0	-	1/4	灰黄 褐色	-	輪高台を貼付、断面は方形。著しく摩耗し調整不明。	
39	A-3区 中世	SK-4	土師質 土器 碗	-	(1.2)	6.8	-	一部 残存	浅黄 橙色	-	細い輪高台を貼付、断面は方形。著しく摩耗し調整不明。見込にコテ当ての痕跡残る。	
40	A-3区 中世	P-25	土師器 釜	22.2	(6.0)	-	最大径 28.2	一部 残存	にぶい 橙色 砂粒多	-	口縁部に鏝を水平の貼付、断面は方形。全面に横方向のナデ。	摂津型
41	A-1区 近世	SK-8 埋土1	青花 碗	-	(3.1)	6.1	-	1/4	白色	透明釉	見込に「福」字と二重圏線、外面に圏線の染付。高台は高く、削り出し、無釉。見込に指頭圧痕の様な凹み。	
42	A-1区 近世	SK-8 埋土2	近世陶器 皿	-	(2.4)	3.7	-	1/2	にぶい 褐色	内面から 外面高台付近 灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕が3箇所。外面は回転ケズリ、一部に釉が付着。高台は太く低い、削り出し。釉は灰オリーブ色。	1590~1610年代
43	A-1区 近世	SD-5	近世陶器 皿	11.0	2.7	3.9	-	1/3	にぶい 褐色	内面から 体部外面灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕が1箇所。体部外面は回転ナデ、高台付近は回転ケズリ。底部は削り出し。	1590~1610年代
44	A-1区 近世	SX-1 埋土1	須恵器 蓋	8.3	(1.4)	-	-	口縁 一部 残存	灰白色	-	回転ナデ。天井部外面は回転ケズリ。	古代
45	A-1区 近世	P-26	近世陶器 皿	15.3	4.3	8.0	-	1/3	灰白色	内面から 体部外面灰釉	高台は削り出し、無釉。見込に重ね焼痕。	
46	A-2区 近世	SK-15	青磁 碗	-	(4.1)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	外面に片彫の蓮弁文。口縁部は薄い。	
47	A-2区 近世	SK-15	青磁 碗	-	(2.2)	5.4	-	1/4	灰白色	青磁釉	内面に陰刻の文様。外面は無文。高台内を輪状に釉ハギ。高台は低く、器壁薄い。	
48	A-2区 近世	SK-15	近世陶器 碗	-	(3.6)	4.8	-	1/2	灰白色	灰釉	外面下部は回転ケズリ。高台は削り出し。高台内は挟り浅く、釉は薄い。粗砂付着。畳付に溶着物の剥離痕。	肥前産か 1610~ 1650年代か
49	A-2区 近世	SK-15	土製品 土錘	全長 4.7	全幅 1.2	全厚 1.2	重量 5.8	完存	にぶい 褐色	-	円柱形。全面ナデか、著しく摩耗し調整不明瞭。孔径0.4cm。	
50	A-2区 近世	SK-15	石製品 砥石	全長 (4.3)	全幅 (5.6)	全厚 2.6	重量 106.6	一部 残存	-	-	残存面の4面に使用痕。1面には縦方向の深い使用痕。	花崗岩か

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
51	A-2区 近世	SK-16 上層	備前焼 播鉢	-	(3.8)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	口縁部外面 自然釉	回転ナデ。重ね焼痕が残る。播目なし。口縁部は肥厚、上下に拡張。	
52	A-2区 近世	SK-19	土師質 土器 小皿	-	(1.4)	4.0	-	1/3	橙色	-	回転ナデ。著しく摩耗し不明瞭。底部は回転糸切り。	
53	A-2区 近世	SD-7	土師器 釜	-	(3.0)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	外面に鈔を貼付。断面は三角形。横ナデまたは横方向のナデ。鈔の下面に煤付着。	播磨型
54	A-2区 近世	SX-2 中層	近世陶器 皿	-	(1.7)	-	-	1/6	にぶい 褐色	外面は底部 付近まで灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下部は回転ナデ。見込に胎土目痕が1箇所。釉は灰オリーブ色。	1590～ 1610年代か
55	A-3区 近世	SX-5	白磁 碗	-	(2.1)	6.0	-	1/6	灰白色	内面白磁釉 著しく貫入が 入る	内面に陰刻の花文。外面は回転ケズリまたは削り出し、無釉。器壁厚い。高台は太く、断面は台形。	
56	A-3区 近世	SX-5	近世陶器 碗	-	(2.6)	4.9	-	1/2	にぶい 橙色	体部外面の 一部灰釉	唐津系灰釉陶器。内面は回転ナデ。無釉。外面は回転ナデ。高台は太く、削り出し、断面は台形。	17世紀前半
57	A-3区 近世	SX-5	近世陶器 皿	-	(1.5)	4.6	-	1/4	にぶい 黄橙色	内面 濃緑色の灰釉	唐津系灰釉陶器。外面は回転ケズリ。無釉。底部は削り出し。高台は低い。	1590～1610年代
58	A-3区 近世	SX-5	近世磁器 皿	-	(2.2)	4.0	-	1/3	灰白色	内面から 高台外面 白磁釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。高台は削り出し、断面は台形。畳付と釉ハギ箇所に砂付着。	波佐見産か 17世紀後葉～ 18世紀前半か
59	A-2区 近世	P-31	土師質 土器 杯	-	(1.4)	8.1	-	1/3	灰白色	-	回転ナデで、見込にナデを加える。底部は回転糸切り。板状圧痕残る。底径は大きく、器壁薄い。	
60	A-2区 近世	P-34	土師器 釜	-	(3.2)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	足釜の口縁か。鈔欠損。口縁部は横ナデ。体部は横方向のナデ。口縁部は肥厚。	
61	A-2区 近世	P-36	土師質 土器 杯	13.0	3.5	8.2	-	一部 残存	灰白色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。底径は大きく、器高低い。	
62	A-2区 近世	P-36	土師器 甕	-	(3.0)	-	-	一部 残存	橙色 砂粒多	-	横ナデまたは横方向のナデ。	搬入品
63	A-2区 近世	P-37	備前焼 播鉢	-	(3.9)	15.6	-	一部 残存	にぶい 赤褐色	-	回転ナデ。底部外面は無調整。播目は摩耗。	
64	A-2区 近世	P-38	土師質 土器 杯	-	(2.6)	6.8	-	1/3	灰色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
65	A-2区 近世	P-39	白磁 皿	11.7	2.9	6.0	-	1/6	灰白色	透明感ない 白磁釉	端反形。高台は削り出し、無釉。断面は三角形。	
66	A-2区 近世	攪乱1	近世磁器 鉢	13.6	6.4	6.7	-	1/6	白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。口縁部に挟り、輪花状。内面に丸文など、外面に梅花文などと圏線。高台に「×」文。高台中心を除き釉ハギ。	能茶山窯か 19世紀
67	A-2区 近世	攪乱2	近世陶器 碗	-	(2.4)	5.5	-	1/2	灰白色	白化粧土のち 透明釉	広東形。陶胎染付。太白手。見込は五弁花文と圏線。高台外面に圏線2条の染付。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産 19世紀
68	A-2区 近世	攪乱2	近世陶器 台付 灯明受皿	6.1	4.4	4.2	-	一部 欠損	にぶい 橙色	内面から 底部付近鉄釉	受皿体部は回転ナデ。底部は回転糸切り。	
69	A-2区 近世	攪乱2	近世磁器 碗	-	(2.2)	4.6	-	底部 完存	灰白色	透明釉	見込に染付の圏線と花文か。外面に圏線と染付の一部。高台内に方形枠内に「茶」銘。畳付は釉ハギ。見込に3箇所ピン痕。	能茶山窯 1820年代～幕末
70	A-2区 近世	攪乱2	瓦 平瓦	全長 (5.1)	全幅 (5.1)	全高 (1.9)	重量 39.4	一部 残存	灰白色	-	凹面は横方向のナデ。凸面は縦または横方向のナデ。側面に方形枠内に「土佐長半」の刻印。瓦厚1.8cm。	
71	A-3区 近世	SK-28	備前焼 播鉢	28.7	(8.0)	-	-	一部 残存	灰赤色	-	回転ナデ。8条単位の播目。外面に接合痕。口縁部は直立し、外面に重ね焼痕。	
72	A-3区 近世	SK-28	近世磁器 皿	9.4	2.0	5.0	-	3/5	白色	透明釉 貫入が入る	小皿。見込に二重圏線。内外面に染付の花文か。畳付は釉ハギ。器壁薄い。	
73	A-3区 近世	SK-30	近世磁器 碗	11.8	6.9	5.6	-	1/2	白色	透明釉	広東形。見込に「寿」字。内面に二重圏線。外面に花文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	江戸後期
74	A-3区 近世	SK-31	常滑焼 片口鉢	37.2	(7.0)	-	-	一部 残存	灰褐色	-	回転ナデ。口縁部は横ナデ。内面は横方向のナデ。外面は縦方向のナデ。口縁部は外へ摘み出す。	
75	A-3区 近世	SK-31	青磁 碗	-	(1.7)	6.8	-	1/3	灰白色	オリーブ灰色 の青磁釉	見込に陰刻の草花文。高台内を輪状に釉ハギ。高台は径が大きく、低い。	

遺物観察表4

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
76	A-3区 近世	SK-32	石製品 砥石	全長 (7.4)	全幅 (5.6)	全厚 (2.4)	重量 159.5	一部 欠損	-	-	残存部で3面に使用痕。	砂岩
77	A-3区 近世	SK-49	土製品 土錘	全長 4.0	全幅 1.5	全厚 1.2	重量 5.0	完存	明赤 褐色	-	紡錘形。小型。著しく摩耗し調整不明。孔径 0.4cm。	
78	A-3区 近世	SK-56	金属製品 簪	全長 19.3	全幅 1.3	全厚 0.2	重量 7.9	完存	-	-	銅製。身部は薄く、断面は方形。上端は耳搔 き。錆化。	
79	A-3区 近世	SK-58 下層	瓦 平瓦	全長 (8.3)	全幅 (8.1)	全高 (2.2)	重量 96.7	一部 残存	灰色	-	凹面は縦方向のナデ。凸面は縦または横方 向のナデ。キラ粉。側面に方形枠内に「アキ □」の刻印。瓦厚1.6cm。	
80	A-3区 近世	SK-58 上層	瓦 平瓦	全長 (6.3)	全幅 (8.4)	全高 (2.3)	重量 81.8	一部 残存	灰白色	-	凹面は横方向のナデ。凸面は縦または横方 向のナデ。側面に方形枠内に「仁ノ源」の刻 印。瓦厚1.7cm。	
81	A-3区 近世	SK-62 上層	土師質 土器 椀	-	(1.6)	5.3	-	1/2	にぶい 黄橙色	-	輪高台を貼付、断面は半円形。見込を指圧し 外へ押し出す。著しく摩耗し調整不明。	
82	A-3区 近世	SK-62 上層	瓦器 椀	13.4	(4.2)	-	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	内面はナデ。口縁部は横ナデ。外面はナデ、 指頭圧痕残る。炭素吸着。ミガキなし。	
83	A-3区 近世	SK-62 最下層	石製品 砥石	全長 (10.1)	全幅 4.2	全厚 1.4	重量 105.2	一部 欠損	-	-	SK-63出土の砥石と接合。割れた状態で使用。 残存部の4面に加工や使用痕。それぞれ 厚さ異なる。	粘板岩か
84	A-3区 近世	SK-63 上層	近世磁器 紅皿	4.8	1.5	1.2	-	1/2	白色	内面から 口縁部外面 白磁釉	型押成形。外面は型で貝殻状の文様、体部は 無釉。高台は小さい。	肥前産 19世紀
85	A-3区 近世	SK-67	備前焼 擂鉢	-	(5.0)	-	-	一部 残存	橙色	-	回転ナデ。擂目残る。口縁部はやや外傾、上 端は細く摘み上げ、下端は外へ摘み出す。	
86	A-3区 近世	SK-67	青磁 碗	-	(4.9)	5.0	-	底部 完存	灰白色	青磁釉	見込にスタンプの印字文、目痕。外面にヘラ 描の細蓮弁文。高台内は輪状に釉ハギ。高台 は径が小さく、直立。	中国産 龍泉窯系
87	A-3区 近世	SK-67	近世陶器 皿	-	(2.1)	5.4	-	底部 完存	灰白色	内面から 外面高台付近 銅緑釉	外面下部から高台内は削り出し。高台は太 く、断面は方形。	
88	A-3区 近世	SK-67	近世陶器 甕	20.6	(7.0)	-	(29.4)	一部 残存	灰色	内面から口縁 端部は錆釉 外面灰釉	回転ナデ。口縁部は大きく肥厚、端部の水平 面に凹線状の浅い溝。	丹波産か
89	A-3区 近世	SK-67	近世陶器 火入	9.8	(5.3)	-	-	1/4	明赤 褐色	口縁部から外 面に白化粧土 のち透明釉	陶胎染付。外面に山水風景文かと圏線の染 付。体部内面は回転ナデ、無釉。口縁部は直 立、端部は丸い。	
90	A-3区 近世	SK-72	土師質 土器 杯	11.7	3.4	6.0	-	1/2	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ、外面下部に回転ケズリ。底部は回 転糸切り。	
91	A-3区 近世	SX-7 埋土1	備前焼 甕	-	(4.7)	-	-	一部 残存	灰赤色	-	回転ナデ。口縁部は折り返し、断面は方形。	
92	A-3区 近世	SX-7 埋土1	青磁 碗	14.4	(2.9)	-	-	一部 残存	灰白色	暗オリーブ色 の青磁釉	内面に陰刻の草花文。外面に片彫の蓮弁文。 器壁厚い。口縁部は外反。釉は厚い。	
93	A-3区 近世	SX-7 埋土2	備前焼 甕	-	(8.8)	-	-	一部 残存	灰赤色	-	回転ナデ。口縁部の接合箇所で剥離。	
94	A-3区 近世	SX-8	土師質 土器 杯	-	(2.8)	-	-	1/4	橙色	-	二重高台。著しく摩耗し調整不明。	
95	A-3区 近世	SX-11 埋土1	東播系 須恵器 片口鉢	-	(4.9)	-	-	一部 残存	灰白色	-	回転ナデ。内面は摩耗し不明。口縁部は肥 厚、下端に段。	
96	A-3区 近世	SX-11 埋土1	近世陶器 皿	-	(5.1)	7.7	-	底部 完存	赤橙色	内面から体部 外面は透明感 ない灰釉か	中皿。内面は白化粧土の刷毛目文。見込は蛇 ノ目釉ハギ、細かい砂付着。外面体部下半か ら高台内は削り出し、無釉。	肥前産か 江戸後期
97	A-3区 近世	P-46	土師質 土器 小皿	-	(1.6)	5.0	-	1/3	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
98	A-3区 近世	P-48	白磁 碗	-	(2.3)	-	-	一部 残存	灰白色	白磁釉	口縁部は玉縁。	
99	A-3区 近世	P-58	備前焼 擂鉢	22.0	(5.7)	-	-	一部 残存	灰赤色	-	回転ナデ。擂目なし。口縁部は内傾、上端と 下端を摘む。	
100	A-3区 近世	P-65	金属製品 煙管	全長 (8.0)	全幅 0.8	全厚 0.8	重量 4.5	一部 欠損	-	-	銅製。吸口。側面に接合痕。内に木質残る。 錆化。	

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉薬	調整・文様・特徴	備考
101	A-3区 近世	攪乱4	土師質 土器 皿	120	1.6	6.5	-	3/4	淡橙色	-	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、板状圧痕残る。器壁は非常に薄い。	近世
102	A-3区 近世	攪乱4	近世磁器 猪口	7.9	5.5	5.8	-	1/3	灰白色	透明釉	桶形。蛇ノ目凹形高台。見込に岩波文。内面に帯線と圏線。外面は海浜風景文と圏線の染付。底部外面を輪状に釉ハギ。	肥前産か 幕末
103	A-3区 近世	攪乱4	石製品 砥石	全長 (6.8)	全幅 (5.0)	全厚 (2.4)	重量 101.1	一部 残存	-	-	方形か。残存部の5面に使用痕。	石材不明
104	A-3区 近世	攪乱4	瓦 軒平瓦	全長 (11.0)	全幅 (24.8)	瓦当高 (10.1)	重量 823.9	1/4	灰白色	-	角瓦か。中心飾は左巻の三巴文。方形枠内に「あき岩」の刻印。凹凸面に横方向のナデ、キラ粉。文様区幅16.0cm、文様区高3.5cm。	高知県 安芸市産
105	A-3区 近世	攪乱4	瓦 軒平瓦	全長 (8.2)	全幅 (8.3)	瓦当高 (6.8)	重量 184.3	一部 残存	灰色	-	瓦当に唐草文の一部、左側に方形枠内に「や(ヤ)ス孫」の刻印。凹凸面にキラ粉。文様区幅(4.5)cm、文様区高(3.2)cm。	高知県香南市 夜須町産
106	A-3区 近世	攪乱4	瓦 軒平瓦	全長 (13.8)	全幅 (19.7)	瓦当高 (7.9)	重量 493.4	1/5	灰色	-	中心飾は丁字文。凹面が横方向のナデ、凸面が縦方向または横方向のナデ。凹凸面にキラ粉。文様区幅(11.0)cm、文様区高3.5cm。	
107	A-3区 近世	攪乱4	瓦 軒棧瓦	全長 (10.6)	全幅 (25.5)	瓦当高 8.5	重量 648.3	1/4	黄灰色	-	中心飾は三花文。凹面が縦方向または横方向、凸面が横方向のナデ。凹凸面と瓦当にキラ粉。文様区幅14.5cm、文様区高2.9cm。	
108	A-3区 近世	攪乱4	瓦 軒棧瓦	全長 (26.2)	全幅 (23.8)	瓦当高 8.6	重量 1.198 kg	1/2	灰白色	-	中心飾は左巻の巴文。右側に「王子定」の刻印。凹凸面に縦または横方向のナデ、キラ粉。文様区幅(15.1)cm、文様区高2.8cm。	高知県香南市 夜須町産
109	A-3区 近世	攪乱4	瓦 軒棧瓦	全長 (21.2)	全幅 (17.0)	瓦当高 (7.1)	重量 964.3	1/4	灰白色	-	瓦当に唐草文の一部、右側に方形枠内に「王子定」の刻印。凹凸面にキラ粉。文様区幅(5.8)cm、文様区高(3.1)cm。	高知県香南市 夜須町産
110	A-3区 近世	攪乱4	瓦 平瓦	全長 (10.3)	全幅 (10.0)	全高 (2.6)	重量 216.7	一部 残存	灰色	-	凹面は横方向のナデ。凸面は縦または横方向のナデ。側面に「片常」の刻印。瓦厚1.7cm。	
111	A-3区 近世	攪乱4	瓦 平瓦	全長 (8.5)	全幅 (11.0)	全高 (2.7)	重量 147.2	一部 残存	灰色	-	凹面は横方向のナデ。凸面は縦または横方向のナデ。側面に「布直」の刻印。瓦厚1.8cm。	高知県高知市 布師田産
112	A-3区 近世	攪乱4	瓦 平瓦	全長 (17.7)	全幅 (14.7)	全高 (2.8)	重量 528.7	1/4	灰白色	-	凹面はナデ。凸面は縦または横方向のナデ。凹凸面にキラ粉。側面に方形枠内に「王稚」の刻印。瓦厚1.6cm。	
113	A-3区 近世	攪乱4	瓦 平瓦	全長 (7.2)	全幅 (11.2)	全高 (2.2)	重量 163.0	一部 残存	灰白色	-	凹凸面は横方向のナデ、キラ粉。側面に方形枠内に「□子吉」の刻印。瓦厚1.7cm。	
114	A-3区 近世	攪乱4	瓦 平瓦	全長 (14.9)	全幅 (12.9)	全高 (2.4)	重量 279.6	一部 残存	灰白色	-	凹面は横方向のナデ。凸面は縦または横方向のナデ。凹凸面にキラ粉。側面に方形枠内に「宝□」の刻印。瓦厚1.6cm。	
115	A-3区 近世	攪乱4	瓦 平瓦	全長 (7.9)	全幅 (10.3)	全高 (2.6)	重量 125.1	一部 残存	黄灰色	-	凹面は横方向のナデ。凸面は縦または横方向のナデ。側面に「天柳」の刻印。瓦厚1.8cm。	
116	A-3区 近世	攪乱4	瓦 平瓦	全長 (5.5)	全幅 (5.8)	全高 (2.0)	重量 61.8	一部 残存	灰白色	-	凹面は横方向のナデ。凸面は縦または横方向のナデ。側面に「山馬」の刻印。瓦厚1.7cm。	
117	A-3区 近世	攪乱4	瓦 棧瓦	全長 (12.2)	全幅 (12.0)	全高 (2.5)	重量 254.0	一部 残存	灰白色	-	凹凸面は横方向のナデ。側面に方形枠内に「□キ光」の刻印。瓦厚1.6cm。	高知県 安芸市産
118	A-3区 近世	攪乱4	瓦 棧瓦	全長 (19.5)	全幅 (15.4)	全高 (4.4)	重量 705.8	1/4	灰白色	-	凹面は横方向のナデ。凸面は縦または横方向のナデ。凹凸面にキラ粉。側面に方形枠内に「王子定」の刻印。瓦厚1.8cm。	高知県香南市 夜須町産
119	A-3区 近世	攪乱4	瓦 棧瓦	全長 (16.6)	全幅 (10.1)	全高 (2.7)	重量 368.3	1/6	灰白色	-	凹凸面は縦または横方向のナデ、キラ粉。側面に「新安(南か)子」とみられる刻印。瓦厚2.0cm。	
120	A-3区 近世	攪乱4	瓦 棧瓦	全長 (10.1)	全幅 (12.4)	全高 (2.9)	重量 322.6	1/8	灰色	-	凹凸面は縦または横方向のナデ、キラ粉。側面に「ニノイ」とみられる刻印。瓦厚1.8cm。	
121	A-3区 近世	攪乱5	近世磁器 皿	8.9	2.4	5.0	-	3/5	灰白色	白濁した 透明釉	小皿。輪花形。型打成形。見込は花文と格子文の染付。口鏝。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
122	A-3区 近世	攪乱6	土師質 土器 椀	-	(1.9)	5.8	-	1/3	にぶい 黄橙色	-	輪高台を貼付。断面は台形。内面はヘラナデ、ヘラの圧痕が同心円状に残る。外面は回転ナデ。高台内は横方向のナデ。	
123	A-3区 近世	攪乱6	瓦 平瓦	全長 (12.2)	全幅 (5.6)	全高 (1.9)	重量 124.4	一部 残存	灰色	-	凹面は縦または横方向のナデ。凸面はナデ、キラ粉。側面に方形枠内に「アキ□」の刻印。瓦厚1.7cm。	高知県 安芸市産
124	A-3区 近世	攪乱6	瓦 平瓦	全長 (8.2)	全幅 (11.2)	全高 (2.2)	重量 198.4	一部 残存	灰白色	-	凹凸面は縦または横方向のナデ、キラ粉。側面に「アキ和」の刻印。瓦厚1.6cm。	高知県 安芸市産
125	A-3区 近世	攪乱6	瓦 平瓦	全長 (9.3)	全幅 (19.2)	全高 (4.4)	重量 304.0	一部 残存	灰色	-	凹凸面は縦または横方向のナデ。凹面にキラ粉。側面に方形枠内に「寶玉」の刻印。瓦厚1.8cm。	

遺物観察表6

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
126	A-3区 近世	掘乱6	瓦 棧瓦	全長 (13.8)	全幅 (11.7)	全高 (3.4)	重量 270.4	1/8	灰色	-	凹凸面は縦または横方向のナデ、キラ粉。側面に方形枠内に「アキ政」の刻印。瓦厚1.8cm。	高知県 安芸市産
127	A-3区 近世	掘乱6	瓦 棧瓦	全長 (23.6)	全幅 (18.2)	全高 (4.5)	重量 984.9	1/3	灰白色	-	凹凸面は縦または横方向のナデ、キラ粉。側面に方形枠内に「山南要」の刻印。瓦厚1.8cm。	
128	B-1区 堆積層	第1層	土師質 土器 杯	-	(2.3)	7.9	-	一部 残存	浅黄 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
129	B-1区 堆積層	第1層	土師質 土器 杯	-	(2.4)	8.0	-	1/4	灰白色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
130	B-1区 堆積層	第1層	須恵器 杯	-	(1.1)	6.5	-	1/4	灰色	-	平底。回転ナデ。底部は回転ヘラ切り。	
131	B-1区 堆積層	第1層	青磁 碗	-	(2.7)	5.3	-	3/4	灰白色	内面から 高台外面 青磁釉	見込に印花文。外面は片彫の蓮弁文。底部は削り出し。高台は低く太い。豊付の一部にも釉。釉は黄色味を帯びる。	中国産 龍泉窯系
132	B-1区 堆積層	第1層	近世陶器 搦鉢	27.7	(5.3)	-	-	一部 残存	赤褐色	-	回転ナデ。口縁部外面に2条の沈線。描目は11条単位で密。口縁部に重ね焼痕。	備前焼 近世初期か
133	B-1区 堆積層	第1層	近世磁器 蓋	10.1	2.7	笠部 10.3	摘径 5.7	3/4	白色	透明釉	薄手。天井部に蓄文。摘み内と外面に桜文の染付。摘み端部は釉ハギ。	肥前産または肥 前系 18世紀末 ～19世紀初か
134	B-1区 堆積層	第1層	近世磁器 蓋	8.8	2.9	笠部 8.9	摘径 3.8	1/4	白色	透明釉	端反形。天井部に環状の松竹梅文、口縁部内面に雷文と圏線、外面に丸文と花文、圏線の染付。摘み内に方形枠に「茶」銘。	能茶山窯 1820年代～幕末
135	B-1区 堆積層	第1層	近世磁器 瓶	5.4	(8.8)	-	-	口縁 完存	灰白色	頸部内面から 外面透明釉	肩部内面は回転ナデ、無釉。外面に染付の一部。頸部は細く締まり、口縁部は開いて内湾。	幕末か
136	B-1区 堆積層	第1層	瓦 平瓦	全長 (10.6)	全幅 (8.7)	全高 (2.0)	重量 194.3	一部 残存	黄灰色	-	凹面はナデ、凸面は横方向のヘラナデ及び縦方向のナデ。側面に「アキ」の刻印。瓦厚1.8cm。	高知県 安芸市産
137	B-1区 堆積層	第1層	石製品 五輪塔	全高 12.8	全幅 26.7	全厚 27.2	重量 14.315 kg	ほぼ 完存	-	-	火輪。笠部先端は僅かに反り、丸い。全面に加工痕。上面中央に径8.5cm、深さ2.8cmの円形の柄穴、加工痕顕著。器高は低い。	砂岩
138	B-1区 堆積層	第1層	金属製品 銭貨	銭径 2.44	内径 1.85	銭厚 0.11	重量 2.9	完存	-	-	銅製。寛永通寶。新寛永。孔径0.55cm。	1697年以降
139	B-1区 堆積層	第1層	金属製品 銭貨	銭径 2.24	内径 1.84	銭厚 0.08	重量 1.7	完存	-	-	銅製。寛永通寶。新寛永。薄い。孔径0.60cm。	1697年以降
140	B-1区 堆積層	第3層	土師質 土器 小皿	7.2	0.9	4.6	-	1/3	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器高は低い。	
141	B-1区 堆積層	第3層	白磁 碗	16.5	(4.2)	-	-	一部 残存	灰白色	白磁釉	口縁部は玉縁。口縁部内面に釉が厚く垂れる。	
142	B-1区 堆積層	第3層	近世陶器 小皿	7.2	1.0	2.8	-	一部 残存	灰色	口縁部外面 錆釉	回転ナデ。器壁は非常に薄い。	備前焼
143	B-1区 堆積層	第3層	瓦 軒平瓦	全長 (8.1)	全幅 (18.1)	瓦当高 (7.4)	重量 374.6	1/8	灰白色	-	凹面はナデ、キラ粉。凸面は横方向のナデ。中心飾は花文。瓦当左側に「アキ卯平」の刻印。文様区幅(12.8)cm。文様区高(2.9)cm。	高知県 安芸市産
144	B-1区 堆積層	第4層	土師質 土器 杯	-	(2.2)	4.3	-	1/3	橙色	-	内面は回転ナデ、ロクロ目顕著。外面は回転ナデか、摩耗し不明瞭。底部は回転糸切り。底径は小さい。	
145	B-1区 堆積層	第4層	土師質 土器 碗	-	(1.6)	6.1	-	1/4	黄灰色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。高台は低い。	
146	B-1区 堆積層	第4層	土師質 土器 碗	-	(1.3)	5.9	-	底部 完存	にぶい 橙色	-	平高台。内面は回転ナデか、ロクロ目が残る。その他は著しく摩耗し調整不明。高台側面は内傾。	
147	B-1区 堆積層	第4層	土師質 土器 碗	-	(1.4)	6.5	-	底部 完存	浅黄 橙色	-	平高台。見込はナデ。底部は回転糸切り、火櫛が入る。高台側面は内傾。	
148	B-1区 堆積層	第4層	土師質 土器 碗	-	(1.4)	7.0	-	1/2	灰白色	-	輪高台を貼付、断面は方形。著しく摩耗し調整不明。	
149	B-1区 堆積層	第4層	土師質 土器 小皿	9.7	2.0	6.5	-	1/5	灰色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。若干摩耗する。	
150	B-1区 堆積層	第4層	土師器 堿	-	(1.8)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	内面は摩耗し調整不明。外面は横ナデ。器壁薄い、口縁部は大きく開く。	

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
151	B-1区 堆積層	第4層	土師器 釜	-	(2.5)	-	-	一部 残存	褐灰色 砂粒多	-	断面方形の銕を水平に貼付。横方向のナデ。	摂津型
152	B-1区 堆積層	第4層	黒色土器 椀	-	(4.7)	5.7	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	-	内黒。輪高台を貼付。断面は台形。内面はミガキ。外面は体部上部がナデ後ミガキ、下部が回転ケズリ。高台内は回転糸切り後ナデ。	在地産
153	B-1区 堆積層	第4層	瓦質土器 鍋	-	(5.7)	-	-	一部 残存	灰白色	-	口縁部は横ナデ。胴部は横方向のナデ。外面に指頭圧痕が顕著。	
154	B-1区 堆積層	第4層	瓦質土器 播鉢	-	(4.1)	-	-	片口 一部 残存	灰白色	-	外面に指頭圧痕。著しく摩耗し調整不明。播目なし。器壁薄い。口縁端部は面をなす。	
155	B-1区 堆積層	第4層	陶器 甕か	-	(3.8)	16.2	-	一部 残存	赤灰色	-	内面は強いナデ。胴部外面は回転ナデ。底部外面はヘラナデ。	
156	B-1区 堆積層	第5層	土師質 土器 杯	-	(2.3)	7.4	-	1/3	褐灰色	-	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、一部にナデ。体部はやや内湾、底部の器壁厚い。	
157	B-1区 堆積層	第5層	土師質 土器 杯	-	(1.8)	6.8	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。内面にクロロ目。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
158	B-1区 堆積層	第5層	土師質 土器 椀	-	(2.0)	6.7	-	1/4	褐灰色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。見込は凹む。	
159	B-1区 堆積層	第5層	土師質 土器 椀	-	(2.8)	6.1	-	底部 一部 欠損	にぶい 橙色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。高台は非常に厚く、体部は大きく開く。	
160	B-1区 堆積層	第5層	土師質 土器 小皿	7.9	1.6	5.3	-	1/3	橙色	-	著しく摩耗し調整不明。	
161	B-1区 堆積層	第5層	土師器 釜	-	(3.1)	-	-	一部 残存	灰褐色	-	銕を水平に貼付。断面は方形。横方向のナデ。銕下面に多数の工具の圧痕。	摂津型
162	B-1区 堆積層	第5層	須恵器 杯	-	(1.0)	8.8	-	1/5	灰白色	-	内面は回転ナデ。高台は横方向のナデ。高台内はナデ。器壁薄い。断面方形の高台貼付。	
163	B-1区 堆積層	第5層	須恵器 椀	-	(2.0)	7.1	-	2/3	灰白色	-	輪高台を貼付。幅太く、断面は方形。内面は放射状のミガキ。外面は緻密な分割ミガキ。高台内は横方向のナデ。	
164	B-1区 堆積層	第5層	須恵器 椀	-	(2.2)	6.5	-	1/4	灰白色	-	輪高台を貼付。幅細く、断面は台形。内面はナデ。工具の圧痕残る。体部外面は回転ケズリ。高台は横方向のナデ。高台内はナデ。	
165	B-1区 堆積層	第5層	瓦器 小皿	6.8	1.1	4.4	-	1/6	灰白色	-	見込はナデ。口縁部は横ナデ。底部外面はナデ。指頭圧痕残る。全面に炭素吸着。	
166	B-1区 堆積層	第5層	青磁 碗	-	(3.4)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	外面に鎬蓮弁文。	中国産 龍泉窯系
167	B-1区 堆積層	第5層	青磁 皿	-	(1.4)	-	-	一部 残存	灰白色	内面から 体部外面 青磁釉	平底。見込に櫛描のジグザグ文。底部外面はケズリ、無釉。	中国産 同安窯系
168	B-1区 堆積層	第5層	土製品 土鉢	全長 4.3	全幅 1.3	全厚 1.4	重量 5.8	完存	黒褐色	-	円柱形。全面ナデ。指頭圧痕残る。全面に黒斑。孔径0.5cm。	
169	B-2区 堆積層	第1層	土師質 土器 椀	-	(2.7)	5.9	-	1/4	黄灰色	-	平高台。著しく摩耗し調整不明。器壁薄い。	
170	B-2区 堆積層	第1層	須恵器 椀	-	(2.5)	5.8	-	3/4	灰白色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。見込は凹む。	
171	B-2区 堆積層	第1層	備前焼 播鉢	34.0	(9.0)	-	-	一部 残存	黄灰色	-	回転ナデ。播目なし。口縁部は直立。頸は外へ摘み出す。	
172	B-2区 堆積層	第1層	白磁 碗	-	(2.6)	7.4	-	1/2	灰白色	内面白濁した 白磁釉	外面は削り出し、無釉。高台は幅広く低い。	
173	B-2区 堆積層	第1層	青磁 皿	-	(1.3)	5.2	-	1/4	灰白色	内面から体部 外面黄色味を 帯びた青磁釉	平底。見込は櫛とヘラ描の文様。底部外面は回転ケズリ、釉ハギ、無釉。	中国産 同安窯系
174	B-2区 堆積層	第1層	近世磁器 碗	-	(3.2)	7.0	-	底部 完存	灰白色	透明釉	広東形。見込に「米」字と圏線の染付。3箇所のピン痕。外面に土坡と圏線の染付。高台内に「サ」銘。豊付を釉ハギ。	能茶山窯 1820年～幕末
175	B-2区 堆積層	第6層	瓦器 椀	-	(0.8)	4.9	-	1/2	にぶい 褐色	-	小さい高台を貼付。断面は三角形。見込はナデか。摩耗し不明。外面はナデ。見込に平行暗文。内外面に炭素吸着。	畿内産

遺物観察表8

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
176	B-2区 堆積層	第6層	青磁 碗	-	(3.1)	5.7	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	内面から 高台内側 青磁釉	外面に細蓮弁文。高台内は削り出し、無釉、 鉄分付着。高台は細く直立。	中国産 龍泉窯系
177	B-1区 中世 下面	SK-79	土師質 土器 碗	-	(2.1)	5.4	-	1/4	にぶい 橙色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転ヘラ切りか、 摩耗し不明瞭。	
178	B-1区 中世 下面	SK-80	土師質 土器 碗	-	(2.1)	6.6	-	底部 完存	灰色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。	
179	B-1区 中世 下面	SK-81	土師質 土器 碗	-	(1.6)	6.2	-	1/3	浅黄 橙色	-	輪高台を貼付。断面は台形。内面は摩耗し調 整不明。外面は横方向のナデ。	
180	B-1区 中世 下面	SK-81	土師質 土器 小皿	8.9	1.8	5.7	-	1/4	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
181	B-1区 中世 下面	SK-82	土師器 釜	24.2	(4.8)	-	最大径 290	一部 残存	橙色	-	銕を水平に貼付。断面は方形。内面は斜方向 のヘラナデ。口縁部は横ナデ。胴部外面はナ デ、銕下に指頭圧痕残る。	摂津型
182	B-1区 中世 下面	SK-84	土師質 土器 杯	-	(1.9)	6.0	-	1/6	灰褐色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
183	B-1区 中世 下面	SK-84	瓦器 碗	-	(1.1)	4.6	-	1/4	にぶい 橙色	-	底部に小さな高台を貼付。断面は三角形。内 外面にナデ。見込に平行暗文。炭素吸着な し。器壁薄い。	
184	B-1区 中世 下面	SK-86	土師質 土器 杯	-	(5.6)	8.6	-	1/3	浅黄 橙色	-	二重高台。「ハ」の字状に開く高台を貼付。体 部下部に断面三角形の突帯を貼付。回転ナ デ。高台は横方向のナデ。高台内はナデか。	
185	B-1区 中世 下面	SK-88	土師質 土器 碗	-	(2.0)	5.9	-	底部 完存	灰色 砂粒多	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。	
186	B-1区 中世 下面	SK-89	土師質 土器 杯	-	(2.2)	7.6	-	1/6	浅黄 橙色 砂粒多	-	回転ナデ。底部は静止糸切り。	
187	B-1区 中世 下面	SK-89	土師質 土器 杯	14.0	(3.5)	-	-	1/6	浅黄 橙色	-	回転ナデ、ロクロ目顕著に残る。	
188	B-1区 中世 下面	SK-89	土師質 土器 杯	13.4	4.6	6.7	-	1/8	橙色 砂粒多	-	ロクロ水挽成形。回転ナデか、摩耗し不明 瞭。底部は回転糸切り。	
189	B-1区 中世 下面	SK-89	土師質 土器 小皿	8.8	1.6	7.2	-	1/3	浅黄 橙色 砂粒多	-	内面は回転ナデのちナデか、摩耗し不明瞭。 口縁部は横ナデ。底部は回転糸切り、板状圧 痕残る。	
190	B-1区 中世 下面	SK-89	須恵器 碗	-	(2.0)	6.6	-	1/5	灰白色	-	低い輪高台を貼付。断面は方形。回転ナデ。外 面にミガキ。高台内は回転ヘラ切りのちナ デか、摩耗し不明瞭。	
191	B-1区 中世 下面	SK-90	土師質 土器 小皿	10.2	2.3	6.3	-	底部 完存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
192	B-1区 中世 下面	SK-90	須恵器 碗	13.8	(3.8)	-	-	1/4	灰白色	-	回転ナデ。口縁部内面に火襷。器壁薄い。口 縁部は内湾。	
193	B-1区 中世 下面	SK-91	土師質 土器 碗	-	(2.7)	5.8	-	1/4	灰色	-	低い輪高台を貼付。断面は方形。回転ナデ。 内面と外面上部に丁寧なナデ。底部外面は 横方向のナデ。	
194	B-1区 中世 下面	SK-92	土師質 土器 杯	14.1	(3.9)	-	-	1/4	橙色 砂粒多	-	回転ナデ。器壁厚い。口縁部はやや内湾。	
195	B-1区 中世 下面	SK-92	土師質 土器 小皿	9.2	2.5	5.8	-	1/3	にぶい 橙色	-	著しく摩耗し調整不明。底部は回転ヘラ切 りか、摩耗し不明瞭。	
196	B-1区 中世 下面	SK-92	土師器 釜	30.0	5.3	-	最大径 34.3	1/8	灰黄 褐色 砂粒多	-	銕を貼付。断面は方形。内面は横方向のナ デ。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦方向のハ ケ。口縁部は僅かに内湾。	摂津型
197	B-1区 中世 下面	SK-96	須恵器 碗	-	(1.4)	6.7	-	1/6	にぶい 黄橙色	-	輪高台を貼付。「ハ」の字状。断面は方形。内 面はナデ。高台内は回転糸切りのち横方向 のナデ。	
198	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	土師質 土器 杯	-	(2.1)	7.5	-	1/3	浅黄 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
199	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	土師質 土器 杯	12.2	4.8	6.6	-	1/3	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は摩耗し不明。	
200	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	土師器 甕か	-	(9.4)	-	-	胴部 一部 残存	橙色 砂粒多	-	内面は粗いナデ。指頭圧痕残る。外面は矢羽 根状のタタキ目残る。器壁厚い。	搬入品か

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉薬	調整・文様・特徴	備考
201	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	土師器 釜	248	(15.7)	-	295	1/4	橙色 雲母含	-	内面はヘラナデ及び丁寧なナデ。口縁部は横ナデ。胴部外面はナデか、おこげ付着。頸部は「く」の字状に屈曲。	紀伊型
202	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	土師器 釜	164	(6.8)	-	最大径 21.4	一部 残存	にぶい 褐色 長石含	-	鏝を水平に貼付。断面は方形。内面はナデ。口縁部は横ナデ。鏝下面から胴部外面は粗雑な横方向のナデ。口縁部内面に煤付着。	摂津型
203	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	須恵器 椀	-	(2.4)	6.5	-	1/3	灰白色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転ヘラ切り。器壁薄い。	
204	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	東播系 須恵器 片口鉢	247	(4.4)	-	-	一部 残存	灰色	-	回転ナデ。口縁部外面に重ね焼痕。口縁端部は上下に拡張。	
205	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	東播系 須恵器 片口鉢	-	(3.4)	9.7	-	1/5	にぶい 橙色	-	体部外面は回転ナデ。その他は摩耗し調整不明。	
206	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	東播系 須恵器 甕	293	(5.5)	-	-	1/4	灰白色	-	頸部外面に平行のタタキ目残る。その他は摩耗し調整不明。焼成不良。頸部は大きく外反。口縁部は肥厚。	
207	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	瓦質土器 鍋	160	(5.3)	-	18.2	1/8	灰白色	-	内面は横方向のナデ。口縁部は横ナデ。頸部外面から胴部外面はナデ。指頭圧痕残る。口縁部は直立。	
208	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	瓦質土器 鍋	178	(4.5)	-	(21.0)	1/8	灰白色	-	内面は横方向のナデ。口縁部は横ナデ。頸部外面から胴部外面はナデ。指頭圧痕残る。胴部内面に炭素吸着なし。口縁部は直立。	
209	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	瓦質土器 鍋	223	(7.8)	-	25.0	1/3	灰白色	-	内面は横方向のナデ。口縁部は横ナデ。頸部外面から胴部外面はナデ。指頭圧痕残る。胴部外面下半に煤付着。口縁部は直立。	
210	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	瓦質土器 鍋	187	(4.6)	-	18.4	一部 残存	灰白色	-	内面は摩耗し調整不明。口縁部は横ナデ。胴部外面はナデ。指頭圧痕残る。口縁部は外反。	
211	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	瓦質土器 釜	226	(10.2)	-	最大径 29.8	1/4	灰白色	-	鏝を水平に貼付。胴部内面は横方向のハケ。胴部外面は幅広い横方向のヘラケズリ。下部は縦方向のヘラケズリ。煤付着。	和泉・河内型 畿内産
212	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	瓦質土器 描鉢	246	(10.6)	12.8	-	4/5	灰白色	-	内面は横方向のナデ。体部外面はナデ。横方向に指頭圧痕。底部外面はナデ。一部煤付着。櫛描の描目が放射状に6条。	
213	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	瓦質土器 火鉢	-	(4.1)	-	-	一部 残存	灰白色 長石含	-	奈良火鉢。浅鉢か。ナデ。外面に菊花の印花文。	
214	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	瓦質土器 風炉 または火鉢	-	(4.6)	-	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	内面と脚部はナデ。底部は板作り。外面に砂付着。胴部は方形か。脚は貼付。上部は断面円形。接地面は方形。	搬入品か
215	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	瓦質土器 甕か	-	(6.6)	24.6	-	1/3	灰褐色 雲母含	-	胴部外面に断面半円形の小さな突帯を貼付。内面は粗いナデ。指頭圧痕残る。底部外面はナデ。砂付着。	搬入品か
216	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	古瀬戸 壺または 瓶子	-	(7.2)	-	-	胴部 一部 残存	灰白色	外面灰釉	内面は縦または横方向の粗いナデ。無釉。外面に櫛描文。	
217	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	備前焼 描鉢	299	11.3	15.2	-	1/6	灰色	-	内面から体部外面は回転ナデ。底部外面は無調整。描目は6条単位。体部は緩やかに内湾。口縁端部は外へ僅かに揃む。	
218	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	常滑焼 甕	-	(5.9)	28.8	-	1/8	黄灰色	-	内面はナデ。外面は縦方向のナデ。底部外面は無調整。	
219	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	青磁 碗	-	(3.9)	-	-	一部 残存	灰白色	青味を帯びた 透明感強い 青磁釉	外面に鎗蓮弁文。幅狭く、先端尖る。	
220	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	土製品 土錘	全長 3.2	全幅 1.1	全厚 1.0	重量 2.6	完存	赤灰色	-	小型。円柱形。全面ナデ。孔径0.5cm。	
221	B-1区 中世 下面	SD-20 上層	石製品 石鍋	全長 (4.7)	全幅 (3.0)	全厚 (1.7)	重量 20.9	一部 残存	-	-	口縁部に鏝。断面は台形。破片を砥石として再利用。断面含め4面に使用痕。	滑石
222	B-1区 中世 下面	SD-20 中層	常滑焼 甕	-	(46.4)	-	74.6	1/8	にぶい 黄橙色	-	粘土帯積上げ成形。内面はナデ。肩部に指頭圧痕。外面は胴部が縦方向の板ナデまたはヘラナデ。上部に押印文。肩部は横方向のナデ。	
223	B-1区 中世 下面	SD-20 下層	土師質 土器 杯	-	(1.9)	8.0	-	1/8	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
224	B-1区 中世 下面	SD-23	土師質 土器 杯	-	(1.6)	5.7	-	3/4	褐灰色	-	回転ナデ。底部は静止糸切り。	
225	B-1区 中世 下面	SD-23	土師質 土器 椀	194	(4.6)	-	-	1/6	灰白色	-	著しく摩耗し調整不明。外面下部は回転ケズリか。	

遺物観察表10

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
226	B-1区 中世 下面	SD-23	土師質 土器 椀	-	(2.0)	5.5	-	一部 残存	浅黄 橙色	-	平高台。摩耗し調整不明。底部は回転糸切り。	
227	B-1区 中世 下面	SD-23	土師質 土器 椀	-	(1.7)	5.5	-	底部 完存	浅黄 橙色	-	平高台。摩耗し調整不明。底部は回転糸切り。	
228	B-1区 中世 下面	SD-23	土師質 土器 小皿	10.9	2.5	6.6	-	1/6	にぶい 橙色	-	口縁部は内湾。回転ナデ。底部は回転糸切り。	
229	B-1区 中世 下面	SD-23	土師器 釜	全長 (9.1)	全幅 (5.4)	全厚 (2.0)	-	脚の 一部 残存	浅黄 橙色	-	ナデ。指頭圧痕残る。	
230	B-1区 中世 下面	SD-23	須恵器 椀	-	(1.4)	5.7	-	1/3	灰白色	-	低い輪高台を貼付。断面は方形。内面はナデ。体部外面は横方向のミガキ。高台と高台内はナデ。	
231	B-1区 中世 下面	SD-23	黒色土器 椀	-	(2.5)	6.1	-	1/8	にぶい 黄橙色	-	回転台成形。両黒。直立する輪高台を貼付。内面はナデ。体部外面は回転ナデのち横方向のミガキ。高台と高台内は横方向のナデ。	在地産
232	B-1区 中世 下面	SD-25 上層	土師質 土器 杯	-	(2.1)	7.9	-	1/3	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
233	B-1区 中世 下面	SD-25 上層	土師質 土器 杯	-	(3.1)	7.9	-	1/3	橙色	-	回転ナデ。摩耗し不明瞭。底部は回転糸切り。体部下層は器壁厚い。	
234	B-1区 中世 下面	SD-25 上層	須恵器 甕	35.2	(5.1)	-	-	一部 残存	灰色	口縁部内面 自然釉	内面にナデ。頸部は外面が格子状のタタキのち回転ナデ。頸部は大きく外反。口縁部は肥厚、四角。	
235	B-1区 中世 下面	SD-25 上層	東播系 須恵器 片口鉢	26.1	(3.9)	-	-	一部 残存	灰白色	-	回転ナデ。口縁部外面に重ね焼痕。口縁部は肥厚、上下に拡張。	
236	B-1区 中世 下面	SD-25 下層	土師質 土器 杯	-	(2.7)	9.0	-	1/8	橙色 砂粒多	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。底径は大きい。	
237	B-1区 中世 下面	SD-25 下層	土師質 土器 小皿	8.4	1.6	5.7	-	1/4	にぶい 黄橙色	-	著しく摩耗し調整不明。口縁部は器壁薄い。	
238	B-1区 中世 下面	SD-26	土師質 土器 杯	13.6	4.0	6.3	-	1/3	褐灰色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。底径は小さい。	
239	B-1区 中世 下面	SD-26	瓦質土器 鍋か	-	(3.6)	-	-	一部 残存	灰白色	-	口縁部は横ナデ。頸部は内面にナデ、外面は横方向の強いナデ。口縁部は受け口状、直立。	
240	B-1区 中世 下面	SD-26	備前焼 甕	38.4	(8.6)	-	-	1/8	赤灰色	-	口縁部は大きな玉縁。断面は楕円形。口縁部は横ナデ。頸部は横方向のナデ。外面の玉縁下部は強い横ナデ、凹む。	
241	B-1区 中世 下面	SX-12	土師質 土器 杯	-	(1.1)	6.7	-	1/4	褐灰色	-	回転ナデのち見込をナデ。底部は回転ヘラ切り。	
242	B-1区 中世 下面	SX-12	土師質 土器 小皿	9.4	2.1	6.6	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部は内湾。	
243	B-1区 中世 下面	SX-12	土師器 甕	-	(2.5)	-	-	一部 残存	橙色	-	横ナデのち内面に横方向のハケ。口縁部は外反、端部を細く摘み上げる。	
244	B-1区 中世 下面	SX-12	須恵器 椀	15.6	(2.9)	-	-	一部 残存	灰白色	-	摩耗し調整不明。焼成不良、褐色に近い色調。	
245	B-1区 中世 下面	SX-15	土師質 土器 椀	-	(1.6)	6.3	-	一部 残存	灰白色	-	輪高台を貼付。断面は方形。内面はナデのちミガキ。外面は回転ナデのち高台を貼付。	
246	B-1区 中世 下面	SX-15	土師質 土器 小皿	9.9	2.5	6.3	-	1/4	オリ ブ黒色	-	回転ナデ。底部外面に僅かに板状圧痕か。底部は摩耗。器高は高い。口縁部は内湾。	
247	B-1区 中世 下面	SX-15	須恵器 椀	-	(2.2)	7.0	-	一部 残存	灰黄色	-	平高台。回転ナデ。内外面に火襷。底部は回転糸切り。	
248	B-1区 中世 下面	SX-15	土製品 土錘	全長 4.7	全幅 1.2	全厚 1.2	重量 5.9	ほぼ 完存	明黄 褐色	-	紡錘形。全面ナデか、摩耗し不明。孔径0.4cm。	
249	B-1区 中世 下面	SX-16	黒色土器 椀	-	(1.3)	7.0	-	1/5	にぶい 黄橙色	-	内黒。直立する低い輪高台を貼付。内面に密なミガキ。高台は横方向のナデ。高台内はナデ。	在地産
250	B-1区 中世 下面	SX-18	土師質 土器 椀	14.5	(4.1)	-	-	一部 残存	灰白色	-	回転ナデのち内外面にミガキ。体部は内湾。口縁部は短く外傾。	

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉薬	調整・文様・特徴	備考
251	B-1区 中世 下面	SX-18	土師質 土器 小皿	9.2	2.1	5.9	-	1/4	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
252	B-1区 中世 下面	P-67	須恵器 甕	-	(2.5)	15.0	-	一部 残存	褐灰色	-	平底。回転ナデ、内面の一部にナデ。底部外面は無調整。	
253	B-1区 中世 下面	P-70	土師器 釜	23.0	(6.2)	-	最大径 28.4	1/6	灰白色	-	銕を水平に貼付、断面は方形。胴部内面は横方向のナデ。口縁部が横ナデ。胴部外面は縦方向のハケ。内面の一部に煤付着。	摂津型
254	B-1区 中世 下面	P-70	須恵器 碗	15.0	5.8	6.9	-	1/3	にぶい 黄橙色	-	平高台。回転ナデか、摩耗し不明。底部は回転糸切り、器壁薄い。口縁部は外傾。	
255	B-1区 中世 下面	P-71	青磁 碗	-	(4.1)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	外面に鎬蓮弁文。	
256	B-1区 中世 下面	P-76	土師質 土器 杯	14.0	4.0	7.1	-	1/2	灰白色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り、底部外面に板状圧痕残る。	
257	B-1区 中世 下面	P-76	土師質 土器 碗	-	(3.9)	5.9	-	底部 完存	橙色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り、器壁厚い。体部は内湾。	
258	B-1区 中世 下面	P-76	土師質 土器 碗	-	(1.9)	5.4	-	1/6	褐灰色	-	「ハ」の字状に開く低い輪高台を貼付。摩耗し調整不明。見込に工具の圧痕残る。	
259	B-1区 中世 下面	P-76	土師器 釜か	-	(5.4)	-	-	一部 残存	にぶい 褐色	-	内面は摩耗し調整不明。外面は斜方向のハケ、突帯もしくは銕が剥離した痕跡。	搬入品か
260	B-1区 中世 下面	P-83	土師質 土器 小皿	8.3	1.9	5.6	-	1/6	灰白色	-	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りのち一部にナデ。器高は高い。	
261	B-1区 中世 下面	P-90	土師質 土器 碗	-	(2.4)	7.3	-	1/4	にぶい 黄褐色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転ヘラ切りか、不明瞭。底部外面は黒斑。見込が凹む。	
262	B-1区 中世 下面	P-90	土師質 土器 碗	-	(1.9)	5.7	-	底部 完存	黄灰色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り、板状圧痕残る、器壁厚い。	
263	B-1区 中世 下面	P-92	土師質 土器 杯	-	(3.1)	-	-	1/6	浅黄 橙色	-	二重高台。体部下部に突帯を貼付、断面は半円形。回転ナデか、摩耗し不明。	
264	B-1区 中世 下面	P-106	土師質 土器 小皿	10.3	2.3	6.3	-	1/6	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器高は高い。口縁は肥厚。	
265	B-1区 中世 下面	P-108	白磁 碗	17.1	(2.7)	-	-	一部 残存	灰白色	白磁釉	口縁端部は短く外へ摘む。	
266	B-1区 中世 下面	P-111	土師質 土器 小皿	10.0	1.8	6.1	-	1/8	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部は器壁薄い。	
267	B-1区 中世 下面	P-112	土師質 土器 杯	-	(3.6)	6.8	-	1/3	にぶい 橙色	-	回転ナデ、見込にナデ。底部は回転糸切り、板状圧痕か。	
268	B-1区 中世 下面	P-112	土師質 土器 小皿	-	(0.6)	4.2	-	1/3	黄灰色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
269	B-1区 中世 下面	P-120	土師質 土器 碗	-	(1.3)	4.9	-	2/3	黄灰色	-	平高台。内面はナデ。体部外面は回転ナデ。底部は回転糸切り、板状圧痕残る。高台は低い。	
270	B-1区 中世 下面	P-124	土師質 土器 杯	-	(2.1)	6.2	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ、見込にナデ。底部は回転糸切り、板状圧痕残る。器壁薄い。	
271	B-1区 中世 下面	P-125	土師質 土器 杯	-	(1.6)	8.8	-	1/4	暗灰色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り、一部にケズリ。底径は大きい。	
272	B-1区 中世 下面	P-129	瓦器 小皿	8.8	1.6	5.1	-	1/3	灰白色	-	丸底。内面はナデのち横方向のミガキ。口縁部は横ナデ。底部外面はナデ、指頭圧痕残る。	
273	B-1区 中世 下面	P-133	土師質 土器 杯	14.7	3.9	5.4	-	1/3	灰色	-	回転ナデ。体部下部は回転ケズリ。口縁部を除き黒斑。器壁薄い。	
274	B-1区 中世 下面	P-134	瓦器 碗	-	(2.7)	4.0	-	1/6	灰褐色	-	扁平な高台を貼付、断面は三角形。内面はヘラナデ、工具の圧痕残る。外面はナデ、指頭圧痕残る。内外面に薄く炭素吸着。	在地産か
275	B-1区 中世 下面	P-135	瓦器 碗	15.2	(4.1)	-	-	1/5	灰白色	-	内面はナデのちミガキ、摩耗し不明瞭。口縁部は横ナデ、体部外面はナデ、指頭圧痕残る。内外面に薄く炭素吸着。	

遺物観察表12

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
276	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	土師質 土器 杯	-	(1.7)	7.9	-	1/4	灰色	-	回転ナデか、摩耗し不明。底部は回転糸切り。	
277	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	土師質 土器 椀	-	(1.4)	6.2	-	底部 完存	褐灰色	-	扁平な輪高台を貼付、断面は台形。器面は著しく摩耗し調整不明。底部の器壁厚い。	
278	B-1区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	土師質 土器 椀	-	(3.0)	6.3	-	3/4	灰白色	-	低く太い輪高台を貼付、断面は三角形。器面は著しく摩耗し調整不明。底部の器壁厚い。	
279	B-1区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	土師器 釜	-	(4.4)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	小さな鋳を貼付、断面は三角形。内面はナデ。口縁部は横ナデ。胴部外面は斜方向の平行タタキ、煤付着。	掃磨型
280	B-1区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	土師器 鍋	-	(3.5)	-	-	一部 残存	橙色	-	横方向のナデ。口縁部は横ナデ。外面に煤付着。口縁部は直立、端部は肥厚。	
281	B-1区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	東播系 須恵器 椀	16.8	(3.0)	-	-	一部 残存	灰白色	-	回転ナデ。口縁部外面に重ね焼痕。口縁部は僅かに肥厚。	
282	B-1区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	瓦質土器 鍋	18.0	(6.8)	-	21.1	1/4	灰黄 褐色	-	内面は摩耗し調整不明。口縁部外面から頸部はナデ、指頭圧痕残る。胴部外面は煤と付着物で調整不明。	
283	B-1区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	瓦質土器 搦鉢	24.0	(9.3)	-	-	一部 残存	灰白色	-	調整は摩耗し不明。放射状に搦指の描目が6条。外面に指頭圧痕が横方向に5段。体部は内湾。口縁部は四角。	
284	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	瀬戸・ 美濃陶器 皿	10.6	(2.1)	-	-	1/8	灰白色	透明感ない 灰釉	折縁皿。内面に丸彫の菊弁状の文様。器面荒れる。	大窯期
285	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	備前焼 壺	-	(9.4)	10.3	15.3	1/4	灰赤色	-	見込から体部外面は横方向の粗いナデ。内面は器面が荒れ不明瞭。底部外面はナデ。胴部は内湾。	
286	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	青磁 碗	17.1	(5.2)	-	-	1/8	灰白色	オリーブ色の 青磁釉	内面に劃花文。体部は緩やかに内湾、端部は細い。	
287	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	青磁 碗	-	(3.5)	5.2	-	底部 完存	灰白色	透明感ない 褐色の青磁釉	見込にスタンプ文。高台は削り出し、高台内は無釉。焼成不良。高台は高く、径は小さい。	
288	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	青磁 皿	-	(1.0)	4.8	-	1/4	灰白色	黄色味帯びた 青磁釉	内面はヘラと搦状工具のジグザグ文。底部外面は釉を掻き取り無釉、工具痕残る。	中国産 同安窯系
289	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	青花 皿	-	(1.7)	5.7	-	一部 残存	灰白色	白濁した 透明釉	見込の文様は不明。外面に唐草文の染付。高台は低く、断面は台形。壺付は無釉。	
290	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	土師質 土器 杯	-	(2.5)	8.6	-	1/3	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。底径は大きい。	
291	B-1区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	土師器 鍋	28.0	(4.9)	-	30.1	一部 残存	褐灰色	-	内面はナデのち縦方向の板ナデ。口縁部は横ナデ。外面はナデ。口縁部は内湾、端部は凹む。	
292	B-1区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	瓦質土器 釜	-	(3.8)	-	-	一部 残存	灰白色	-	胴部は内面が横方向のヘラナデ、頸部は横方向のナデ、外面が強い横方向のナデ。肩部に円孔の一部。	
293	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	瓦質土器 釜	-	(4.4)	-	最大径 25.7	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	鋳が付く、断面は三角形。内面は横方向のハケ。鋳は横ナデ。胴部外面は横方向のケズリか。鋳下面に煤付着。	畿内系
294	B-1区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	備前焼 搦鉢	-	(7.1)	-	-	片口 一部 残存	明赤 褐色	-	回転ナデ、片口はナデ。2条単位の描目が1箇所残る。口縁部は四角。	
295	B-1区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	白磁 碗	-	(2.0)	5.9	-	一部 残存	灰白色	内面から 外面高台付近 白磁釉	見込を蛇ノ目釉ハギ。高台は削り出し、無釉。高台は直立、断面は方形。	
296	B-2区 中世 下面	SR-1 東部 最上層	青磁 碗	-	(2.7)	5.5	-	1/3	灰白色	内面から壺付 青磁釉	内面に劃花文。高台は低く、削り出し、断面は方形。底部は器壁厚い。	
297	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 最上層	土師質 土器 杯	-	(2.2)	6.8	-	3/4	灰褐色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。底部外面にタール状の黒い付着物。体部は僅かに内湾。底部は器壁厚い。	
298	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 最上層	土師質 土器 椀	-	(1.6)	7.6	-	1/6	灰色	-	平高台。回転ナデか、内面は摩耗し不明瞭。底部は回転糸切り。見込は凹む。	
299	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 最上層	土師質 土器 椀	-	(1.5)	5.5	-	底部 完存	灰白色	-	平高台。内面はナデのち放射状の板ナデ。外面は回転ケズリ。底部は回転糸切り、板状圧痕残る。器壁薄い。	
300	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 最上層	瀬戸・ 美濃陶器 皿	-	(1.1)	5.8	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	内面から 高台内面灰釉	内禿皿。見込を釉ハギ。底部外面は回転ケズリ、無釉。重ね焼痕。高台は小さく、断面は三角形。壺付は釉ハギ。	大窯期

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
301	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 上層	常滑焼 甕	-	(9.2)	24.9	-	一部 残存	灰白色	-	内面は横方向のナデ。外面は横方向のナデのち上部に縦方向のヘラナデ。底部外面は横方向のナデ、一部に鉄分付着。	
302	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 上層	白磁 碗	-	(1.7)	-	-	一部 残存	灰白色	白磁釉	口縁部は小さな玉縁。器壁薄い。	
303	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 上層	白磁 碗	14.7	(4.9)	-	-	1/6	灰白色	内面から 体部外面 白磁釉	口縁部は大きな玉縁。見込と玉縁の下に浅い段。外面体部下部は回転ナデ、無釉。器壁薄い。	
304	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 上層	青磁 碗	-	(2.8)	4.7	-	1/2	灰白色	オリーブ色の 青磁釉	見込に印花文。内面は圏線。畳付と高台内は削り出し、無釉。高台は直立、断面は方形。	中国産 龍泉窯系
305	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	土師質 土器 杯	-	(2.2)	7.4	-	1/4	暗灰色 砂粒多	-	回転ナデ。内面は摩耗し不明瞭。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
306	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	土師質 土器 杯	-	(1.6)	5.2	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	-	柱状高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。	
307	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	土師質 土器 碗	-	(2.1)	6.0	-	1/6	褐灰色	-	平高台。体部はナデ、外面の一部にヘラナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
308	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	土師器 鍋	-	(6.5)	-	-	一部 残存	にぶい 褐色	-	口縁部は横ナデ。体部は横方向のナデ。頸部外面に煤付着。口縁部は胴部より屈曲、端部は丸い。	
309	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	備前焼 播鉢	-	(7.7)	-	-	一部 残存	橙色	-	回転ナデ。播目残る。口縁部は肥厚、端部は上方へ揃む。	
310	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	備前焼 壺	-	(5.7)	-	-	一部 残存	明褐 灰色	-	四耳壺。肩部に帯状の耳貼付。内面は横方向のナデ。指頭圧痕残る。外面は回転ナデか、器面が荒れ不明。	
311	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	常滑焼 甕	-	(4.7)	29.2	-	1/8	暗灰色	-	内面は横方向のナデ。外面は縦または横方向のナデ。底部外面はナデ。	
312	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	白磁 碗	-	(2.1)	6.9	-	1/6	灰白色	内面白磁釉	外面は回転ケズリ、無釉。高台は低く、幅広い。	
313	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	白磁 皿	12.6	2.2	7.2	-	1/4	白色	口縁部 光沢ある 白磁釉	端反形。回転ナデ。見込みは無釉。底部外面は削り出し、無釉。高台は低く、断面は台形。	
314	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	土製品 土鉢	全長 3.5	全幅 0.9	全厚 0.9	重量 2.6	完存	灰黄 褐色	-	小型。円柱形。全面ナデか、摩耗し不明瞭。孔径0.4cm。	
315	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	土製品 土鉢	全長 3.6	全幅 1.1	全厚 1.1	重量 4.2	完存	にぶい 赤褐色	-	小型。円柱形。全面ナデか、摩耗し不明瞭。孔径0.5cm。	
316	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 中層	石製品 石臼	全長 26.9	全幅 (26.5)	全高 8.5	重量 9.400 kg	一部 欠損	-	-	上臼。播目は8分割。周縁内側に溝状の敲打痕。中央より外側に円孔。側面の1箇所に水平に方形の孔。下面中央に円孔。	砂岩
317	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 下層	土師質 土器 杯	-	(1.6)	6.8	-	1/5	灰色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
318	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 下層	青磁 碗	-	(2.7)	4.5	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	黄色味帯びた 青磁釉	見込にスタンプ文。底部外面は削り出し、高台内は無釉。底部は器壁厚い。高台は細く直立。	
319	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 下層	青花 碗	12.1	(3.4)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	端反形。口縁部内面に雷文帯、外面に唐草文と圏線の染付。	
320	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 最下層	須恵器 甕	-	(5.0)	-	-	頸部 残存	灰白色	-	内面は摩耗し調整不明。頸部外面は横方向のナデ。肩部外面は格子目タタキ。頸部は大きく外反。	
321	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 最下層	瓦質土器 釜	全長 (6.6)	全幅 (3.9)	全厚 (2.3)	-	脚の 一部 残存	にぶい 黄褐色	-	内面は摩耗し調整不明。脚部は縦方向のナデ。	畿内系
322	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 最下層	備前焼 播鉢	29.0	(3.9)	-	-	一部 残存	灰褐色	-	回転ナデ。僅かに播目。口縁部は肥厚、端部は上下に揃む。	
323	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 最下層	常滑焼 甕	40.6	(7.6)	-	-	一部 残存	灰色	外面自然釉	回転ナデ。内面の一部に指頭圧痕。外面は不明。口縁縁部幅は2.5cm。頸部は大きく外反。	
324	B-2区 中世 下面	SR-1 西部 最下層	白磁 皿	-	(1.1)	5.0	-	1/4	灰白色	内面白磁釉	小型。見込を蛇ノ目軸ハギ。外面は削り出し、無釉。器壁薄い。高台の断面は台形。	
325	B-1区 中世 上面	SB-12 P-1	土師質 土器 杯	-	(2.1)	7.4	-	1/4	褐灰色	-	ロクロ水挽成形。回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	

遺物観察表14

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
326	B-1区 中世 上面	SB-12 P-2 掘方	土師質 土器 杯	-	(2.5)	5.6	-	1/3	浅黄 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁厚い。底 径は小さい。	
327	B-1区 中世 上面	SB-12 P-9	近世陶器 皿	12.4	(3.1)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	内面から 口縁部外面 灰釉	唐津系灰釉陶器。回転ナデ、外面下部を回転 ケズリ。	
328	B-1区 中世 上面	SB-12 P-9 埋土5	瓦質土器 鍋	21.6	(3.9)	-	(25.4)	一部 残存	灰白色	-	胴部内面はナデか、摩耗し不明瞭。外面に指 頭圧痕残る。肩部張り、口縁部は直立。	
329	B-1区 中世 上面	SB-12 P-9 埋土5	石製品 砥石	全長 14.1	全幅 7.3	全厚 4.1	重量 378.9	ほぼ 完存	-	-	台形。4面使用。使用面は凹み、平滑。1面に多 数の工具圧痕の凹み。	砂岩
330	B-1区 中世 上面	SB-12 P-10	土師質 土器 碗	-	(1.5)	5.9	-	底部 完存	灰白色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。	
331	B-1区 中世 上面	SB-12 P-10 埋土2	土師器 釜	-	(3.0)	-	-	一部 残存	赤橙色	-	銚を貼付。端部を上方へ摘む。横方向のナ デ。口縁部内面は強い横方向のナデ、凹む。 口縁部は直立。	摂津型
332	B-1区 中世 上面	SB-12 P-12	土師質 土器 杯	-	(1.5)	6.2	-	1/3	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
333	B-1区 中世 上面	SB-13 P-3 埋土2	須恵器 碗	-	(3.0)	7.8	-	1/6	灰白色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。体部 内外面と見込、底部に火樫。高台は低い。	
334	B-1区 中世 上面	SB-13 P-3 埋土3	瀬戸・ 美濃陶器 皿	9.9	1.9	5.7	-	1/3	灰白色	灰釉 貫入が入る	内禿皿。荜笥底。見込を釉ハギ。口縁部は外反。	大窯期
335	B-1区 中世 上面	SB-13 P-7	土師器 釜	-	(2.4)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	銚を水平に貼付。横方向のナデ。口縁部は 内湾。	摂津型
336	B-1区 中世 上面	SB-14 P-2 柱痕	東播系 須恵器 片口鉢	-	(3.4)	-	-	一部 残存	灰白色	-	回転ナデか、内面は摩耗し不明。口縁部に 重ね焼痕。口縁部は肥厚。	
337	B-1区 中世 上面	SB-14 P-7 掘方	白磁 皿	9.6	(2.3)	-	-	一部 残存	灰白色	白磁釉	口禿。口縁部を釉ハギ。口縁部は僅かに外傾。	
338	B-1区 中世 上面	SB-15 P-3	土製品 土錘	全長 4.4	全幅 1.3	全厚 1.1	重量 4.6	完存	にぶい 橙色	-	紡錘形。ナデ。孔径0.5cm。	
339	B-1区 中世 上面	SB-16 P-2	土師質 土器 杯	-	(1.9)	8.0	-	1/4	灰白色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り、板状圧痕残る。	
340	B-1区 中世 上面	SB-16 P-2 柱痕	須恵器 壺	-	(5.9)	13.1	-	1/5	褐灰色	外面自然釉	輪高台を貼付、断面は方形。内面は回転ナ デ、一部に強いナデ。外面は回転ナデか、器 面が荒れ不明。	
341	B-1区 中世 上面	SB-16 P-3	須恵器 碗	-	(2.2)	6.3	-	1/5	灰白色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁 薄い。高台は低い。	
342	B-1区 中世 上面	SB-16 P-3	瓦器 碗	-	(3.1)	-	-	一部 残存	灰白色	-	内面はナデのち横方向のミガキ。口縁部に 横ナデを1段。外面はナデ、指頭圧痕残る。器 壁薄い。体部は内湾。	和泉型
343	B-1区 中世 上面	SA-6 P-2	土師器 釜	20.8	(2.8)	-	最大径 26.0	一部 残存	橙色	-	銚をやや上方に貼付。横方向のナデ。銚下 に指頭圧痕残る。口縁部は直立。	摂津型
344	B-1区 中世 上面	SK-102	土師質 土器 杯	-	(1.7)	7.5	-	1/4	灰白色	-	回転ナデか、摩耗し不明瞭。底部は回転糸 切り。	
345	B-1区 中世 上面	SK-102	瓦質土器 釜	23.6	(3.4)	-	最大径 26.5	一部 残存	灰色	-	小さな銚を貼付、断面は三角形。内面は横方 向のナデ。外面はナデか、摩耗し不明。口縁 部は内湾、端部は四角。	
346	B-1区 中世 上面	SK-105	須恵器 壺	-	(2.6)	9.0	-	1/4	灰白色	-	小さな高台を貼付、断面は方形。回転ナデ、内 面の一部にナデ。高台内はナデ。器壁厚い。	
347	B-1区 中世 上面	SK-106	瓦器 碗	-	(2.9)	-	-	一部 残存	灰白色	-	内面はナデのちミガキ。口縁部外面に1段の 横ナデ。体部外面はナデ、指頭圧痕残る。全 面に炭素吸着。	和泉型
348	B-1区 中世 上面	SD-28	常滑焼 甕	-	(10.5)	40.0	-	1/5	にぶい 橙色	-	見込は横方向のナデ。体部は内面が粗いナ デ、外面が縦方向の板ナデ、下端は横方向の ナデ。底部外面はナデ。	
349	B-1区 中世 上面	SD-31	青磁 碗	-	(2.3)	-	-	一部 残存	灰白色	黄色味帯びた 青磁釉	内面に1条の圏線。外面に縦方向の櫛描文。	中国産 同安窯系
350	B-1区 中世 上面	SD-31	近世陶器 皿	9.0	2.9	3.7	-	1/2	灰白色	透明感ない 灰釉	唐津系灰釉陶器。高台は削り出し、低く、不 明瞭。見込と高台に砂目痕。	1610~1630年代

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉薬	調整・文様・特徴	備考
351	B-1区 中世 上面	P-137	土師質 土器 碗	-	(2.2)	-	-	一部 残存	にぶい 黄橙色 赤礫含	-	輪高台を貼付。回転ナデか、摩耗し不明瞭。高台はナデ。	
352	B-1区 中世 上面	P-142	土師質 土器 杯	-	(2.3)	7.4	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り、器壁薄い。	
353	B-1区 中世 上面	P-152	近世陶器 碗	-	(2.7)	4.4	-	1/4	褐灰色	内面と 外面一部 鉄釉	唐津系陶器。外面は回転ナデ、体部下半に回転ケズリ。	1590～1610年代
354	B-1区 中世 上面	P-157	土師質 土器 小皿	6.4	1.1	4.3	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
355	B-1区 中世 上面	P-158	土師質 土器 小皿	9.8	1.8	7.5	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
356	B-1区 中世 上面	P-165	白磁 皿	-	(1.3)	7.1	-	1/5	灰白色	光沢ある 白磁釉	畳付は無釉、砂付着。器壁薄い。高台はやや内傾。	
357	B-1区 中世 上面	P-166	土師質 土器 碗	-	(2.5)	5.9	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	-	平高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。	
358	B-1区 中世 上面	P-168	土師質 土器 小皿	6.0	1.3	4.9	-	ほぼ 完存	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部は短い。	
359	B-1区 中世 上面	P-170	青花 皿	10.2	(1.5)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	粗製。内面に四方襷文か、外面に圏線の染付。釉は厚い。口縁部は内湾。	華南系か
360	B-1区 近世後期 以降	SK-115	近世磁器 皿	7.4	2.3	4.6	-	完存	白色	白濁した 透明釉	角皿。型打成形。高台を貼付。見込に楼閣山水文の染付。口縁部は口鑄風に呉須。高台内に方形枠に「茶」銘。畳付は釉ハギ。443と同文。	能茶山窯 1820年代～幕末
361	B-1区 近世後期 以降	SK-117	須恵器 碗	-	(1.5)	6.8	-	1/2	灰白色	-	輪高台。「ハ」の字状に開く高台を貼付。断面は方形。回転ナデ、見込にナデ。高台内に回転糸切り痕。	
362	B-1区 近世後期 以降	SK-118	土師質 土器 小皿	8.8	2.0	5.9	-	1/5	褐灰色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
363	B-1区 近世後期 以降	SK-118	東播系 須恵器 片口鉢	-	(3.3)	-	-	一部 残存	灰白色	-	回転ナデ、内面の一部にナデ。口縁端部は肥厚。	
364	B-1区 近世後期 以降	SK-121	瀬戸・ 美濃陶器 皿	10.2	(1.7)	-	-	1/8	灰白色	灰釉	口縁部は外反、端部に抉り、稜花風。	大窯期
365	B-1区 近世後期 以降	SK-121	近世陶器 播鉢	30.4	(6.3)	-	-	一部 残存	灰赤色	-	回転ナデ。斜方向の播目。口縁部は直立、顎が出る。	備前焼 17世紀初頭
366	B-1区 近世後期 以降	SK-121	石製品 砥石	全長 9.2	全幅 7.0	全厚 3.5	重量 313.8	完存か	-	-	残存部で4面使用。使用面は中央部が著しく凹む。	細粒砂岩
367	B-2区 近世後期 以降	SK-123	土師質 土器 小皿	8.5	1.5	5.5	-	1/6	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
368	B-2区 近世後期 以降	SK-123	瓦器 碗	-	(1.6)	4.4	-	1/3	灰白色	-	扁平な高台を貼付。断面は台形。体部はナデ、見込に平行暗文。外面に指頭圧痕残る。全面に炭素吸着。	和泉型
369	B-2区 近世後期 以降	SK-123	瓦器 小皿	8.6	1.7	4.0	-	1/3	灰白色	-	口縁部は横ナデ。底部外面はナデ、指頭圧痕残る。内面はナデか、摩耗し不明瞭、煤付着。底部は丸い。	
370	B-2区 近世後期 以降	SK-123	東播系 須恵器 片口鉢	32.2	(6.0)	-	-	一部 残存	灰色	-	回転ナデ、外面の一部にナデ。器壁薄い。	
371	B-2区 近世後期 以降	SK-124	青磁 碗	15.3	(2.7)	-	-	一部 残存	灰白色	光沢ある 灰オリーブ色 の青磁釉	輪花形。口縁端部に小さな抉り。	
372	B-2区 近世後期 以降	SK-125	土師質 土器 杯	-	(1.9)	7.4	-	1/4	黒色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
373	B-2区 近世後期 以降	SK-127	瓦器 碗	-	(1.5)	4.8	-	1/4	にぶい 黄橙色	-	小さな高台を貼付。断面は三角形。体部はナデ、内面は摩耗し不明瞭、外面に指頭圧痕、一部に炭素吸着。	
374	B-2区 近世後期 以降	SK-128	近世陶器 碗	-	(3.8)	5.6	-	1/5	にぶい 橙色	内面から 高台外面 鉄釉	天目形。唐津系陶器。高台は削り出し、断面は方形。畳付と高台内は無釉。	1590年代～ 17世紀前半
375	B-1区 近世後期 以降	SD-33	土師質 土器 杯	-	(2.5)	7.8	-	1/3	浅黄 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。体部は緩やかに内湾。	

遺物観察表16

図版番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 葉	調整・文様・特徴	備 考
376	B-1区 近世後期 以降	SD-35	近世陶器 碗	11.7	(4.8)	-	-	1/3	灰白色	鉄釉	天目形。口縁部は僅かに内傾、端部は屈曲、短く外傾。	肥前産 1610～1650年代
377	B-1区 近世後期 以降	SD-35	近世陶器 碗	-	(6.4)	3.9	-	1/3	灰白色	内面から 外面体部下 部鉄釉	天目形。外面体部下 部から高台内は削り出 し、無釉。高台は低く、明瞭。	肥前産 1590～1610年代
378	B-1区 近世後期 以降	SD-35	近世陶器 皿	12.8	2.7	8.3	-	3/4	灰白色	灰釉	溝縁皿。見込に陰刻の 圏線2条、3箇所にピン 痕。高台内に重ね焼痕。 高台は低く、断面は半 円形。	
379	B-1区 近世後期 以降	SD-36	土師質 土器 椀	-	(2.0)	6.9	-	1/4	にぶい 橙色	-	平高台。著しく摩耗し調整不明。	
380	B-1区 近世後期 以降	SD-37	土師質 土器 小皿	7.5	1.6	4.2	-	底部 完存	浅黄 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸 切り。口縁部は内湾。	
381	B-1区 近世後期 以降	SD-37	土師器 釜	21.8	(5.4)	-	(25.3)	一部 残存	にぶい 橙色	-	小さな鐙を貼付、断面 は三角形。内面は横方 向のナデ。口縁部は横 ナデ。胴部外面は斜方 向の平行タタキ。	播磨型
382	B-1区 近世後期 以降	SD-37	東播系 須恵器 片口鉢	-	(3.4)	-	-	一部 残存	灰白色	-	ナデ、口縁部は横ナデ。 口縁部は僅かに外反、 端部は肥厚、四角。	
383	B-1区 近世後期 以降	SD-37	瓦質土器 鍋	19.5	(5.5)	-	21.4	一部 残存	灰白色	-	ナデ、口縁部は横ナデ、 胴部外面に指頭圧痕残 る。内面に炭素吸着なし。 口縁部は短く直立。	
384	B-1区 近世後期 以降	SD-37	白磁 皿	9.7	2.9	4.6	-	底部 完存	灰白色	内面から 口縁部外面 白磁釉	高台の4箇所に抉り、 体部外面から高台内は 回転ケズリ、無釉。見 込に4箇所の目痕。口 縁端部は四角。	
385	B-1区 近世後期 以降	SD-37	白磁 皿	13.4	2.5	8.4	-	1/6	灰白色	白濁した 白磁釉 貫入が入る	端反形。回転ナデ、外 面体部下半は回転ケズ リ。見込と底部は無釉。 高台は幅広い。	
386	B-1区 近世後期 以降	SD-37	青磁 碗	-	(3.7)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	外面に菊蓮弁文。	
387	B-1区 近世後期 以降	SD-37	近世陶器 皿	-	(1.9)	4.0	-	1/3	明褐 灰色	内面 緑色に発色 する灰釉	唐津系灰釉陶器。内面 に胎土目痕。体部外面 は回転ナデ。底部外面 は回転ケズリ。底部の 器壁厚い。高台は低い。	肥前産 1590～1610年代
388	B-1区 近世後期 以降	SD-37	近世陶器 皿	12.9	3.6	4.3	-	2/3	灰白色	内面銅緑釉 体部外面灰釉	輪高台。断面は台形。 見込は蛇ノ目軸ハギ、 砂目痕残る。体部下 半は回転ケズリ、無 釉。畳付の4箇所に砂 目痕。	内野山窯 17世紀後半
389	B-1区 近世後期 以降	SD-37	近世陶器 鉢	12.1	8.5	13.2	15.6	2/3	褐灰色	外面の一部 自然釉	焼締陶器。内面から 体部外面は回転ナデ、 内面の一部にナデ、 外面下部にケズリ、 刻印あり。底部外面 はナデ。	
390	B-1区 近世後期 以降	SD-37	近世陶器 搦鉢	-	(4.7)	-	-	一部 残存	橙色	-	回転ナデ。口縁部外 面に重ね焼痕。口縁 端部と頸は細く揃む。	備前焼 17世紀初頭
391	B-1区 近世後期 以降	SD-37	近世陶器 甕	-	(11.8)	22.2	-	1/4	褐灰色	体部内外面 鉄釉	内面が格子状のタタ キのち横方向のナデ、 外面が横方向のナデ、 一部に回転ケズリ。底 部外面は無調整、中央 に蓆状の圧痕、無釉。	肥前産か
392	B-1区 近世後期 以降	SD-37	近世磁器 小杯	-	(2.1)	2.3	-	底部 完存	白色	内面から 体部外面 白磁釉	外面に丸彫で菊弁状 の文様。高台は削り出 し、無釉、断面は三角 形。	肥前産 1630～1650年代
393	B-1区 近世後期 以降	SD-37	石製品 五輪塔	全高 10.6	全幅 16.7	全厚 18.5	重量 4.699 kg	一部 欠損	-	-	火輪。小型。長方形。 四隅は反り上がる。上 面は長方形、中央に楕 円形の柄穴。下面に溝 状のケズリ痕。一部被 熱。	砂岩
394	B-1区 近世後期 以降	P-177	土師質 土器 杯	-	(1.6)	5.8	-	一部 残存	浅黄 橙色	-	回転ナデ。底部は回 転糸切りか、摩耗し不 明瞭。	
395	B-2区 近世後期 以降	P-190	土師質 土器 釜	7.4	(3.4)	-	10.7	1/6	灰白色	-	小型。小さな鐙、断 面は三角形。回転ナ デ、外面の胴部下部に 回転ケズリ、煤付着。 胴部は大きく膨らみ、 扁平。実用か。	
396	B-2区 近世後期 以降	P-191	瀬戸・ 美濃陶器 碗	-	(3.6)	-	-	一部 残存	灰白色	鉄釉	天目形。	大窯期
397	B-1区 近世後期 以降	攪乱8	土師質 土器 椀	-	(2.1)	6.0	-	1/4	浅黄 橙色	-	平高台。回転ナデか、 底部は回転糸切りか、 著しく摩耗し、不明 瞭。見込は凹む。	
398	B-1区 近世後期 以降	攪乱9	近世陶器 蓋物	8.2	4.9	5.7	-	3/4	灰白色	内面から 体部外面 灰釉	底部外面は回転ケズ リ、墨書残る。口縁 部を軸ハギ。見込に 3箇所のピン痕。体 部は直立。口縁端部 は内へ揃む。	
399	B-1区 近世後期 以降	攪乱9	近世陶器 火鉢	-	(6.7)	12.4	(15.1)	1/6	灰白色	内面錆釉を 刷毛塗り 外面緑釉	内面は回転ナデ、外 面に押印文。高台外 面に雷文帯。高台内 は削り出し、無釉、 墨書残る。高台は 幅広い。	瀬戸・美濃産 19世紀前半
400	B-1区 近世後期 以降	攪乱9	近世磁器 紅皿	4.8	1.6	1.4	-	2/3	白色	内面から 口縁部外面 白磁釉	型押成形。外面は型 で貝殻状の文様。外 面体部から底部は無 釉。	肥前産 19世紀初

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉薬	調整・文様・特徴	備考
401	B-1区近世後期以降	攪乱9	石製品石臼	全長(18.6)	全幅(10.9)	全高(7.3)	重量1.729kg	1/8	-	-	上臼。上面周縁部は研磨し平滑。周縁部内側に斜方向の溝状の加工痕。中央に円孔。下面に斜方向の播目、やや摩耗。	砂岩
402	B-1区近世後期以降	攪乱9	石製品石臼	全長(15.8)	全幅(13.0)	全高(7.2)	重量1.852kg	1/8	-	-	下臼。上面に斜方向の播目。上面と下面は摩耗。	砂岩
403	B-1区近世後期以降	攪乱9	金属製品銭貨	銭径2.36	内径1.94	銭厚0.08	重量1.3	完存	-	-	銅製。寛永通寶。新寛永。背面は無文。薄い、摩耗。孔径0.65cm。	1697年以降
404	B-1区近世後期以降	攪乱10	近世磁器大皿	31.9	6.1	20.2	-	一部欠損	白色	透明釉	角皿。口縁端部は波縁状。内面に雷文帯、四方襷文地に宝文、外面は花唐草文などの染付。高台内に方形枠に「瑞」銘。補修痕残る。	肥前系江戸後期
405	B-1区近世後期以降	攪乱10	近世磁器大皿	36.3	6.6	18.3	-	4/5	白色	透明釉	変形皿。口縁部は一部輪花形。内面に岩・松、四方襷文地に波文、外面は波、岩、松文などの染付。補修痕と見込に白玉描。	肥前産幕末
406	B-1区近世後期以降	攪乱10	近世磁器鉢	15.0	7.5	8.3	-	1/3	白色	透明釉	八角鉢。口縁部は八角形に型打。見込は宝文、口縁部内外は濃地に墨弾きの宝文、外面は山と樹文の染付。	肥前系
407	B-1区近世後期以降	攪乱10	近世磁器鉢	28.9	8.4	16.6	-	2/3	灰白色	透明釉	大型。口縁部は八角形を稜花形に型打成形。見込に人物と雪輪など、口縁部は唐草や宝文などの染付。高台内に銘。	肥前産江戸後期
408	B-1区近世後期以降	攪乱10	近世磁器瓶	1.8	10.5	4.0	5.0	完存	灰白色	口縁部内面から外面透明釉	瓶子形。外面に蜻唐草文と圏線の染付。畳付は軸ハギ。口縁部は短く直立。肩部は膨らむ。腰部は細く締まる。	肥前産1780年代～幕末
409	B-1区近世後期以降	攪乱10	瓦軒平瓦	全長(11.9)	全幅(17.6)	瓦当高(8.2)	重量555.8	1/8	灰白色	-	凹凸面に横方向のナデ。瓦当の中心飾は葛文。瓦当左側に「アキ卯平」の刻印。凹凸面と瓦当にキラ粉。文様区幅(12.2)cm。文様区高3.0cm。	高知県安芸市産
410	B-1区近世後期以降	攪乱10	瓦平瓦	全長(10.1)	全幅(11.2)	全高(2.7)	重量198.1	一部残存	灰白色	-	凹凸面に横方向のナデ。側面に「御瓦師卯平」の刻印。凹面にキラ粉。瓦厚1.7cm。	高知県安芸市産
411	B-1区近世後期以降	攪乱10	瓦棧瓦	全長(3.7)	全幅(15.1)	全高(3.5)	重量102.3	一部残存	暗灰色	-	凹面は縦または横方向のナデ。凸面は横方向のナデ。側面に「にろう」の刻印。瓦厚1.6cm。	高知県香美市香北町産
412	B-1区近世後期以降	攪乱11	瓦平瓦	全長(4.7)	全幅(5.8)	全高(2.1)	重量57.5	一部残存	灰色	-	凹凸面に横方向のナデ。側面に方形枠内に「安キ善」の刻印。瓦厚1.8cm。	高知県安芸市産
413	B-1区近世後期以降	攪乱12	瓦質土器焙烙	-	(4.2)	-	-	一部残存	にぶい黄橙色	-	内面は回転ナデ。外面は型成形。体部は内湾。口縁端部は四角。	讚岐産御厩系19世紀中葉
414	B-1区近世後期以降	攪乱12	瓦質土器焙烙	47.0	(4.0)	-	-	一部残存	灰黄色	-	内面は回転ナデ。外面は型成形。体部は内湾。口縁端部は四角。	讚岐産御厩系19世紀中葉
415	B-1区近世後期以降	攪乱12	瀬戸・美濃陶器碗	-	(1.2)	4.7	-	1/2	浅黄橙色	内面鉄釉	外面は削り出し、無釉。高台は低く、断面は方形。	大窯期
416	B-1区近世後期以降	攪乱12	備前焼播鉢	-	(6.6)	-	-	一部残存	灰黄褐色	-	回転ナデ。僅かに播目残る。口縁端部は上方へ細く摘み上げる。	
417	B-1区近世後期以降	攪乱12	備前焼播鉢	-	(4.2)	13.3	-	一部残存	灰色	-	回転ナデ、外面体部下端に回転ケズリ。播目は摩耗。底部は無調整。	
418	B-1区近世後期以降	攪乱12	近世陶器碗	11.8	6.0	5.4	-	1/3	にぶい赤褐色	内面から体部外面鉄釉	天目形。底部外面は無釉。体部は内湾。口縁端部は短く外傾。高台は低い。被熱。	肥前産か1610～1650年代か
419	B-1区近世後期以降	攪乱12	近世陶器碗	12.0	6.7	6.3	-	4/5	灰白色	白化粧土のち透明釉	陶胎染付。広東形。太白手。見込に五弁花文と圏線、外面は螺子文と圏線の染付。畳付は軸ハギ。	瀬戸・美濃産19世紀
420	B-1区近世後期以降	攪乱12	近世陶器甕	-	(5.4)	18.2	-	一部残存	灰赤色	-	見込は横方向のナデ。胴部内面と外面上部が格子状タタキ、のち内面は横方向のハケ、外面下部が回転ヘラケズリ。底部は無調整。	
421	B-1区近世後期以降	攪乱12	近世磁器色絵碗	7.8	6.5	4.4	-	1/2	白色	透明釉	筒形。見込に五弁花文と圏線、口縁部内面に四方襷文、外面は呉須と色絵の花文、体部外面の下面は唐草文と圏線の染付。	肥前産18世紀後半
422	B-1区近世後期以降	攪乱12	近世磁器碗	11.4	6.2	6.5	-	底部完存	灰白色	透明釉	広東形。見込と外面に桜文の染付。畳付は軸ハギ。	肥前系1780年代
423	B-1区近世後期以降	攪乱12	近世磁器碗	10.6	5.7	3.8	-	ほぼ完存	白色	透明釉	端反形。見込に岩波文、口縁部は内面に不明の文様、外面に区割に菊花文かの染付。畳付は軸ハギ。	瀬戸・美濃産19世紀
424	B-1区近世後期以降	攪乱12	近世磁器皿	13.8	3.9	8.2	-	底部完存	灰白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。見込と内面は土坡に草、雪輪文、外面は丸文と圏線、源氏香かの染付。高台内を蛇ノ目軸ハギ。	肥前系江戸後期
425	B-1区近世後期以降	攪乱12	近世磁器蓋	10.5	2.7	摘径5.9	-	2/3	白色	透明釉	内外面は桜文の染付。摘み端部は軸ハギ。	肥前産

遺物観察表18

図版番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 葉	調整・文様・特徴	備 考
426	B-1区 近世後期 以降	攪乱12	近世磁器 鉢	12.9	6.5	5.4	-	2/3	灰白色	透明釉	八角鉢。ロクロ成形のち八角形に型打。内面は岩に草花文、格子目に蝙蝠文など、外面は飛雲文の染付。高台内に方形枠に「茶山」銘。	能茶山窯 1820年代～幕末
427	B-1区 近世後期 以降	攪乱12	近世磁器 猪口	7.8	6.5	5.8	-	1/2	灰白色	透明釉	筒形。蛇ノ目凹形高台。内面に五弁花文、四方樓文など、外面に丸文に「寿」字と火焰文の染付。高台内を蛇ノ目軸ハギ。	肥前産 18世紀後半～ 19世紀
428	B-1区 近世後期 以降	攪乱12	瓦 平瓦	全長 (5.3)	全幅 (10.1)	全高 (2.1)	重量 94.3	一部 残存	灰白色	-	凹凸面に横方向のナデ。側面に方形枠内に「□□(々々)久合」の刻印。瓦厚1.4cm。	
429	B-1区 近世後期 以降	攪乱13	近世磁器 皿	19.9	4.4	10.1	-	1/2	白色	透明釉 外面は白濁	見込に五弁花文、内面に網干文か笹文、外面は土坡に草文かの染付。見込は蛇ノ目軸ハギ、置付に砂付着。口縁部は内湾。	波佐見産 18世紀後半～ 19世紀初
430	B-1区 近世後期 以降	攪乱13	瓦 平瓦	全長 (10.1)	全幅 (7.5)	全高 (1.9)	重量 154.0	一部 残存	黄灰色	-	凹凸面は縦または横方向のナデ。凹面にキラ粉。側面に「山河□(富か)」の刻印。瓦厚1.7cm。	
431	B-1区 近世後期 以降	攪乱14	土師質 土器 碗	-	(1.6)	5.6	-	1/2	灰白色	-	輪高台を貼付、断面は三角形。著しく摩耗し調整不明。	
432	B-1区 近世後期 以降	攪乱14	東播系 須恵器 片口鉢	-	(4.6)	-	-	片口 一部 残存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。焼成不良、橙色。口縁端部は上方へ細く揃み上げる。	
433	B-1区 近世後期 以降	攪乱14	近世陶器 小杯	5.1	3.8	2.8	-	一部 欠損	灰白色	-	平底。全面に鉄が溶解したような付着物、調整不明。体部は内湾。口縁端部は細い。	
434	B-2区 近世後期 以降	攪乱15	近世磁器 皿	9.0	2.3	5.2	-	1/2	白色	光沢ある 透明釉	小皿。輪花形。型打成形。口縁部内面は型で菊弁状の凹み、端部は口鉢。見込は圏線と蘭の染付。置付は軸ハギ。	江戸後期
435	B-1区 近世後期 以降	攪乱	須恵器 甕か	-	(3.5)	12.9	-	一部 残存	褐灰色	-	平底。内面はナデ。体部外面は回転ナデ。底部外面はナデ。	
436	B-1区 近世後期 以降	攪乱	瀬戸・ 美濃陶器 碗	-	(2.2)	4.4	-	底部 完存	灰白色	内面から 体部外面錆釉	天目形。底部外面は削り出し、無釉。高台断面は台形。	大窯期
437	B-2区 近世後期 以降	攪乱	備前焼 掃鉢	-	(6.5)	-	-	一部 残存	灰赤色	-	回転ナデ。掃目残る。体部は緩やかに内湾。口縁端部は内外へ僅かに揃む。	
438	B-1区 近世後期 以降	攪乱	近世陶器 皿	-	(1.7)	4.1	-	1/3	灰白色	淡い緑色に 発色の灰釉	唐津系灰釉陶器。底部外面は削り出し、無釉。高台断面は台形。	肥前産
439	B-1区 近世後期 以降	攪乱	近世陶器 皿	-	(2.2)	4.1	-	底部 完存	にぶい 橙色	緑色に発色の 灰釉	唐津系灰釉陶器。体部外面は回転ナデ、下部に回転ケズリ。体部外面から底部は無釉。見込に胎土目痕。高台は低く扁平。	肥前産 1590～1610年代
440	B-2区 近世後期 以降	攪乱	近世磁器 碗	-	(4.4)	6.4	-	底部 完存	白色	透明釉	広東形。見込に「寿」字と圏線、外面は圏線と土坡に草文の染付。高台内に「サ」銘。置付は軸ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
441	B-1区 近世後期 以降	攪乱	近世磁器 碗	-	(5.2)	6.2	-	底部 完存	白色	透明釉	広東形。見込に「寿」字と圏線、外面に草花文と二重圏線の染付。見込に3箇所ピン痕。高台内に「サ」銘。置付は軸ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
442	B-1区 近世後期 以降	攪乱	近世磁器 碗	-	(4.4)	5.8	-	底部 完存	灰白色	透明釉	広東形。陶器質。見込に岩波文と圏線、外面に草文と圏線の染付。見込に3箇所ピン痕。高台内に「サ」銘。置付は軸ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
443	B-1区 近世後期 以降	攪乱	近世磁器 皿	7.4	2.3	4.6	-	1/2	白色	白濁した 透明釉	角皿。型打成形。高台は貼付か。見込に楼閣山水文の染付。口縁部は口鉢風に具須。高台内に方形枠に「茶」銘。360と同文。置付は軸ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
444	B-1区 近世後期 以降	攪乱	近世磁器 紅皿	4.8	1.5	1.5	-	完存	白色	内面から 口縁部外面 白磁釉	型押成形。外面は型で貝殻状の文様。底部外面は無釉。	肥前産 18世紀末
445	B-1区 近世後期 以降	攪乱	近世磁器 紅皿	4.5	1.8	1.4	-	完存	灰白色	内面から 口縁部外面 白磁釉	型押成形。外面は型で貝殻状の文様。底部外面は無釉。	肥前産 18世紀末～ 19世紀初
446	B-2区 近世後期 以降	攪乱	瓦 棧瓦	全長 (19.3)	全幅 (15.7)	全高 (3.1)	重量 413.2	1/6	灰色	-	凹凸面に縦または横方向のナデ。側面に方形枠内に「葦生倉」の刻印。	高知県香美市 香北町産
447	C-1区 堆積層 第3層	西バンク 第3層	備前焼 掃鉢	-	(4.8)	-	-	一部 残存	にぶい 赤褐色	-	回転ナデ。1条の摩耗した掃目残る。口縁端部は四角。	
448	C-1区 堆積層 第3層	西バンク 第3層	近世磁器 瓶	-	(4.6)	2.6	2.9	底部 完存	灰白色	外面白味を 帯びた透明釉	小型。回転ナデ。外面に鉄釉と具須の梅文。線描は染付。高台内は削り出し、無釉。	19世紀
449	C-1区 堆積層 第4層	西バンク 第4層	瓦質土器 釜	全長 (7.1)	全幅 (3.1)	-	-	脚の 一部 残存	浅黄 橙色	-	著しく摩耗し調整不明。部分的に炭素残る。	
450	C-1区 堆積層 第11層	西バンク 第11層	土師質 土器 杯	-	(2.1)	4.8	-	1/5	にぶい 橙色	-	内面は著しく摩耗し調整不明。体部外面は回転ナデ。底部は回転糸切り。	

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
451	C-1区 堆積層	西バンク 第16層	土師質 土器 杯	-	(1.6)	4.5	-	1/4	褐灰色	-	回転ナデ、底部は回転糸切り。器壁厚い。	
452	C-1区 堆積層	西バンク 第16層	土師質 土器 杯	-	(2.2)	7.8	-	1/3	橙色	-	著しく摩耗し調整不明。	
453	C-1区 堆積層	西バンク 第16層	東播系 須志器 片口鉢	22.6	(3.3)	-	-	一部 残存	黄褐色	-	回転ナデか、煤付着し不明瞭。口縁部は肥厚、上方へ屈曲。	
454	C-1区 堆積層	西バンク 第16層	古瀬戸 皿	27.0	(2.4)	-	-	一部 残存	灰白色	灰釉	折縁深皿。口縁端部は肥厚し、丸く収める。内面は被熱。	
455	C-1区 堆積層	西バンク 第16層	青磁 碗	-	(3.9)	-	-	一部 残存	灰白色	オリーブ色の 青磁釉	外面は鑄蓮弁文。釉は厚い。器面は荒れ、被熱か。	中国産 龍泉窯系
456	C-1区 堆積層	西バンク 第16層	金属製品 不明	全長 (3.3)	全幅 (2.0)	全厚 (0.3)	重量 4.7	一部 残存	-	-	鉄製。板状、長方形。断面は方形。	
457	C-1区 堆積層	西バンク 第18層	備前焼 壺または 甕	-	(9.0)	16.3	-	1/4	黄灰色	-	内面はナデ、体部に指頭圧痕が横方向に2列。胴部外面は縦方向のヘラナデ。底部外面は無調整、砂付着。	
458	C-1区 堆積層	西バンク 第23層	土師質 土器 皿	-	(1.6)	8.6	-	1/6	灰黄 褐色	-	回転ナデか、内面は摩耗し不明瞭。底部は回転糸切り。	
459	C-1区 堆積層	西バンク 第23層	常滑焼 甕	-	(4.6)	-	-	一部 残存	灰色	-	口縁端部はN字状。口縁部は横ナデ。頸部は横方向のナデ。	
460	C-1区 堆積層	西バンク 第23層	常滑焼 甕	-	(11.3)	-	-	一部 残存	黄灰色	-	口縁端部はN字状。口縁部は横ナデ。体部はナデ、指頭圧痕が顕著。口縁縁部幅2.0cm。	
461	C-1区 堆積層	西バンク 第31層	常滑焼 甕	42.0	(26.0)	-	69.2	1/6	灰色	口縁部内面と 頸部外面 自然釉	横方向のナデ、内面胴部下部にヘラケズリ、肩部に指頭圧痕。外面肩部が縦方向のヘラケズリ、僅かにタタキ目。口縁縁部幅4.5cm。	
462	C-1区 堆積層	西バンク 第32層	青磁 碗	-	(3.0)	-	-	一部 残存	灰白色	オリーブ色の 青磁釉	外面に幅の狭い鑄蓮弁文。釉は厚い。被熱か、器面は荒れる。	中国産 龍泉窯系
463	C-1区 堆積層	西バンク 第32層	青磁 皿	12.0	(3.3)	-	-	一部 残存	灰白色	淡いオリーブ 色の青磁釉	稜花皿。内面は丸彫で菊弁状の文様。外面は片彫と線描の花弁文。花卉は肉厚。	
464	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(2.7)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。粘土紐巻き上げ成形か。	
465	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(2.2)	4.2	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。底径は小さい。	
466	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(1.7)	5.1	-	1/2	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
467	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(1.6)	5.2	-	1/4	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
468	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(1.8)	6.0	-	1/6	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
469	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(1.9)	7.3	-	1/6	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
470	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(1.6)	7.1	-	1/5	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り、後の板状圧痕残る。	
471	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(2.0)	7.2	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
472	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(2.0)	4.7	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部内面に指頭圧痕残る。底部は回転糸切り。器壁厚い。底径は小さい。	
473	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(2.7)	6.7	-	1/2	橙色	-	ロクロ水挽成形か。ロクロ目顕著。回転ナデ。底部は回転糸切り。	
474	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 杯	-	(3.4)	7.0	-	1/3	にぶい 橙色	-	ロクロ水挽成形か。ロクロ目顕著。回転ナデ。底部は回転糸切り。	
475	C-1区 堆積層	西バンク 第33層	土師質 土器 皿	-	(2.1)	9.1	-	1/6	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	

遺物観察表20

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
476	C-1区堆積層	西バンク第33層	東播系須恵器片口鉢	35.0	(8.1)	-	-	1/4	黒色	-	回転ナデか、内面は摩耗し不明。外面は僅かに煤付着。口縁部は直立。	
477	C-1区堆積層	西バンク第33層	古瀬戸壺または甕	-	(3.2)	10.1	-	1/3	浅黄橙色	灰釉	回転ナデ。底部は回転糸切り。釉は内面の一部に掛からず、外面は部分的に流れる。	
478	C-1区堆積層	西バンク第33層	備前焼播鉢	-	(4.5)	15.4	-	1/8	黄灰色砂粒多	-	回転ナデ。摩耗した播目が7条残る。底部は無調整。	
479	C-1区堆積層	西バンク第33層	石製品砥石	全長(7.2)	全幅3.8	全厚1.2	重量34.9	一部残存	-	-	方形。薄い。上面を著しく使用、凹む。下面に一部使用痕。赤褐色。硯か。	石材不明
480	C-1区堆積層	西バンク第33層	石製品砥石	全長(7.6)	全幅12.0	全厚5.9	重量875.0	一部残存	-	-	上面と下面と1側面の3面に使用痕。	石材不明
481	C-1区堆積層	西バンク第33層	金属製品釘	全長(3.8)	全幅0.5	全厚0.3	重量1.0	先端欠損	-	-	鉄製。小型。頂部はL字形。身部断面は方形。先端部は細い。頭幅0.5cm、身部幅0.4cm。	
482	C-1区堆積層	西バンク第33層	金属製品釘	全長(5.2)	全幅1.1	全厚0.5	重量5.1	先端欠損	-	-	鉄製。頂部はL字形。身部断面は方形。頂部から身部は湾曲。頭幅0.9cm、身部幅0.7cm。	
483	C-1区堆積層	西バンク第33層	金属製品釘	全長(5.2)	全幅0.9	全厚0.6	重量8.3	先端欠損	-	-	鉄製。頂部はL字形。身部断面は方形。頂部から身部は湾曲。身部幅0.6cm。	
484	C-1区堆積層	西バンク第34層	石製品砥石	全長(6.6)	全幅3.6	全厚0.8	重量28.0	一部欠損	-	-	方形。薄い。残存部の5面に使用痕。	石材不明
485	C-1区堆積層	西バンク第34層	金属製品釘	全長(4.4)	全幅1.0	全厚0.5	重量4.8	先端欠損	-	-	鉄製。頂部はL字形。身部断面は方形。頭幅(1.0)cm、身部幅0.6cm・厚さ0.5cm。	
486	C-1区堆積層	西バンク第34層	金属製品釘	全長(4.8)	全幅1.0	全厚0.8	重量5.6	両端欠損	-	-	鉄製。身部断面は方形。身部幅0.6cm・厚さ0.5cm。	
487	C-1区堆積層	西バンク第34層	金属製品不明	全長6.7	全幅0.7	全厚0.1	重量3.4	ほぼ完存	-	-	銅製。半筒形。薄い。断面は半円形。494・693と同形状。	
488	C-1区堆積層	西バンク第36層	土師質土器杯	14.0	(3.1)	-	-	1/6	にぶい橙色	-	回転ナデ。	
489	C-1区堆積層	西バンク第36層	土師質土器杯	14.5	(4.1)	-	-	1/8	にぶい橙色	-	回転ナデ。	
490	C-1区堆積層	西バンク第36層	土師質土器杯	-	(2.5)	7.0	-	1/6	にぶい橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
491	C-1区堆積層	西バンク第36層	土師質土器杯	-	(1.7)	7.3	-	1/6	にぶい橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
492	C-1区堆積層	西バンク第36層	土師質土器杯	11.3	4.5	7.0	-	1/2	にぶい橙色	-	小振り。回転ナデ。内面に指頭圧痕。底部は回転糸切り、後の板状圧痕残る。	
493	C-1区堆積層	西バンク第36層	土師質土器杯	12.0	5.0	6.9	-	1/3	にぶい橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器高は高い。	
494	C-1区堆積層	西バンク第36層	金属製品不明	全長(7.7)	全幅1.1	全厚0.1	重量4.5	一部欠損	-	-	銅製。半筒形。薄い。断面は半円形。487・693と同形状。	
495	C-1区堆積層	平場TR第33層以下	土師質土器杯	11.7	5.0	6.3	-	1/3	にぶい橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り、後の板状圧痕残る。	
496	C-1区堆積層	平場TR	備前焼播鉢	-	(5.3)	-	-	一部残存	灰黄褐色	-	回転ナデ。口縁部は四角、外へ細く拗む。	
497	C-2a区堆積層	南壁第1層	古瀬戸水注か	-	(6.3)	-	-	肩部一部残存	にぶい黄橙色	外面灰釉	外面の3箇所に印花文。内面は横方向の強いナデ。	
498	C-2a区堆積層	南壁第1層	備前焼甕	22.6	(4.0)	-	-	1/6	褐灰色	-	水屋甕か。回転ナデ。外面肩部と口縁部内面に胡麻。	
499	C-2a区堆積層	南壁第4層	土師質土器杯	-	(1.7)	6.5	-	1/4	橙色	-	著しく摩耗し調整不明。器壁厚い。	
500	C-2a区堆積層	南壁第4層	土師質土器小皿	-	(1.1)	2.4	-	1/6	灰色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。体部は内湾。底径は小さい。	

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
501	C-2a区 堆積層	南壁 第5層	瓦質土器 釜	-	(6.5)	-	-	一部 残存	灰色	-	銕を貼付、断面は三角形。口縁部と銕は横ナデ。その他はナデ。外面に指頭圧痕残る。外面にのみ炭素吸着。	畿内系
502	C-2a区 堆積層	南壁 第5層	金属製品 釘か	全長 (4.0)	全幅 (1.6)	全厚 (1.4)	重量 272	一部 残存	-	-	鉄製。円柱形。断面は隅丸方形。	
503	C-2a区 堆積層	南壁 第6層	土師質 土器 杯	-	(1.3)	5.2	-	底部 ほぼ 完存	にぶい 黄橙色	-	著しく摩耗し調整不明。底部は回転糸切り。器壁厚い。	
504	C-2a区 堆積層	南壁 第6層	瀬戸・ 美濃陶器 碗	12.1	(4.6)	-	-	1/8	灰白色	鉄釉		大窯期
505	C-2a区 堆積層	南壁 第9層	土師器 火鉢か	-	(2.8)	-	(11.4)	底部 ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	内面の胴部と底部境目は横方向の強いナデ。胴部は回転ナデ。底部外面はナデ。底部に方形の脚を3箇所貼付。	近世
506	C-2a区 堆積層	南壁 第9層	石製品 磨石また は砥石	全長 17.2	全幅 16.4	全厚 8.5	重量 2828 kg	完存	-	-	三角形。中央部に敲打痕と擦痕、凹む。使用面の周縁部は被熱。河原石。	細粒砂岩
507	C-2a区 堆積層	南壁 第10層	白磁 碗	-	(3.1)	-	-	一部 残存	灰白色	黄色味帯びた 白磁釉	口縁部は玉縁。器壁薄い。	
508	C-2a区 堆積層	南壁 第13層	近世磁器 皿	-	(1.1)	7.6	-	1/8	灰白色	透明釉	見込に不明の文様、内面に圏線の染付。外面は無文。高台外面にケズリ痕。畳付は釉ハギ。	
509	C-2a区 堆積層	南壁 第15層	白磁 皿	12.6	(1.9)	-	-	一部 残存	白色	口縁部内外面 のみ光沢ある 白磁釉	端反形。見込は回転ナデ。外面体部下半は回転ケズリ。見込と外面下部は無釉。	
510	C-2a区 堆積層	南壁 第15層	瓦 軒棧瓦	全長 (18.5)	全幅 (19.0)	瓦当高 (8.2)	重量 693.0	1/3	黒色	-	凹凸面はナデ。瓦当裏面は横方向のナデ。中心飾は葛文か。文様区幅(8.5)cm。文様区高(2.5)cm。	
511	C-2a区 堆積層	南壁 第16層	瓦 棧瓦	全長 (11.8)	全幅 (15.6)	全高 (3.8)	重量 463.0	1/6	灰白色	-	凹面は横方向のナデ。凸面は縦または横方向のナデ。凹凸面にキラ粉。側面に「山馬」の刻印。瓦厚1.9cm。	
512	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	土師質 土器 杯	-	(2.1)	6.0	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
513	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	東播系 須恵器 片口鉢	-	(2.9)	-	-	一部 残存	黒色	-	回転ナデ。被熱か。口縁部は幅狭い。	
514	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	古瀬戸 皿	12.1	3.1	6.8	-	底部 完存	灰白色	内面から 体部外面緑釉	緑釉小皿。回転ナデ。底部は回転糸切り。見込に3箇所の胎土目痕。	
515	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	備前焼 播鉢	-	(2.5)	-	-	一部 残存	灰色	-	回転ナデ。底部外面は無調整。播目残る。	
516	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	備前焼 播鉢	-	(4.3)	15.0	-	1/4	褐灰色	-	回転ナデ。底部外面は無調整。10条単位の播目、摩耗。	
517	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	常滑焼 甕	-	(45.4)	-	71.0	1/6	褐灰色	外面肩部 自然釉	内面は胴部下部が横方向のケズリのちナデ。外面は肩部がナデか、胴部がナデ、下部にヘラナデ。上部に押印文。	
518	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	常滑焼 甕	-	(3.9)	-	-	底部 一部 残存	黄灰色	-	ナデ。	
519	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	青磁 皿	15.8	(3.2)	-	-	1/6	灰白色	オリーブ灰色 の青磁釉	稜花皿。無文。口縁部は外反、口禿。	
520	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	近世陶器 碗	-	(3.3)	-	-	1/4	灰黄色	内面から 体部外面灰釉	外面体部下半は回転ケズリ。	
521	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	近世磁器 皿	13.3	3.5	8.2	-	1/4	灰白色	内面から 外面高台付近 透明釉	見込に二重十字文、口縁部内面に二重格子文と圏線の染付。見込は蛇ノ目釉ハギ。高台と高台内は削り出し、無釉。	19世紀前半
522	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	瓦 平瓦	全長 (7.9)	全幅 (9.5)	全高 (1.9)	重量 129.4	一部 残存	浅黄色	-	凹凸面はナデ。側面に刻印、解読不可能。523と同刻印。瓦厚1.5cm。	
523	C-2b区 堆積層	東バンク 第1層	瓦 平瓦	全長 (6.1)	全幅 (14.7)	全高 (2.6)	重量 146.6	一部 残存	灰白色	-	凹凸面はナデ。側面に刻印、解読不可能。522と同刻印。瓦厚1.5cm。	
524	C-2b区 堆積層	東バンク 第2層	古瀬戸 壺または 皿	-	(2.1)	15.0	-	1/3	灰黄色	内面一部灰釉	内面はナデか。外面は体部がヘラケズリ、底部がヘラケズリまたはヘラナデ、一部に砂付着。見込に2箇所の胎土目痕。	
525	C-2b区 堆積層	東バンク 第2層	備前焼 播鉢	33.4	(9.8)	-	-	1/5	橙色	-	回転ナデ、口縁部に横ナデ。外面に指頭圧痕。15条単位の播目。体部は内湾、口縁部は上下に僅かに揃む。	

遺物観察表22

図版番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
526	C-2b区 堆積層	東バンク 第2層	青磁 碗	-	(2.2)	-	-	一部 残存	灰白色	オリーブ色の 青磁釉	外面は鑄蓮弁文。釉は厚い。	中国産 龍泉窯系
527	C-2b区 堆積層	東バンク 第2層	青磁 碗	-	(2.4)	5.6	-	1/6	灰白色	青磁釉	無文。畳付は無釉。	
528	C-2b区 堆積層	東バンク 第2層	近世磁器 碗	-	(2.6)	4.2	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	透明釉	見込に岩と波文か、内面に圈線の染付。外面 に多重圈線と染付の一部。見込は疵ノ目釉 ハギ。畳付は釉ハギ。	19世紀前半
529	C-2b区 堆積層	東バンク 第2層	瓦 軒丸瓦	全長 (6.6)	瓦当厚 (2.2)	瓦当径 (5.7)	重量 308.0	瓦当 1/3	灰色	-	三巴文。凹凸面は縦方向のナデ。瓦当裏面は 横方向のナデ。径1.1cmの珠文6個。瓦当にキ ラ粉。	近世
530	C-2b区 堆積層	東バンク 第2層	瓦 軒平瓦	全長 (5.1)	全幅 (13.7)	瓦当高 (6.9)	重量 196.0	瓦当 1/2	灰黄色	-	中心飾は三巴文。瓦当にキラ粉。瓦当裏面と 凹凸面は横方向のナデ。瓦当右側に522・523 と同じ刻印、解読不可能。文様区幅(9.3)cm。	
531	C-2b区 堆積層	東バンク 第2層	瓦 棧瓦	全長 (9.4)	全幅 (10.8)	全高 (2.7)	重量 143.0	一部 残存	灰白色	-	凹凸面は横方向のナデ、キラ粉。側面に522・ 523・530と同じ刻印、解読不可能。瓦厚1.8cm。	
532	C-2b区 堆積層	東バンク 第2層	瓦 道具瓦	全長 (19.0)	全幅 (11.8)	全高 (5.0)	重量 554.0	一部 残存	灰白色	-	平瓦系道具瓦。凹凸面は縦方向のヘラナデ またはナデ。凸面に台形の粘土板を垂直方 向に貼付。凹面にキラ粉。	
533	C-2b区 堆積層	東バンク 第3層	備前焼 搦鉢	32.0	(7.5)	-	-	1/6	黄灰色	-	回転ナデ。7条単位の搦目。口縁端部を僅か に揃む。	
534	C-2b区 堆積層	東バンク 第4層	古瀬戸 皿	-	(2.3)	-	-	一部 残存	灰白色	内面から 口縁部外面 緑釉	緑釉小皿。回転ナデ。	
535	C-2b区 堆積層	東バンク 第4層	青磁 碗	-	(1.7)	4.6	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 外面光沢ない 青磁釉	文様の有無は不明。高台内は無釉、放射状の 鉋痕。底部の器壁厚い。高台は低い。	
536	C-2b区 堆積層	東バンク 第4層	青磁 杯	12.2	(3.4)	-	12.9	1/10	灰白色	透明感ない 青緑色の 青磁釉	外面に片彫の蓮弁文。釉は厚く、被熱か。口 縁部は水平に伸びる。	中国産 龍泉窯系
537	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	白磁 皿	13.0	(2.5)	-	-	一部 残存	灰白色	光沢ある 白磁釉	端反形。	
538	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	近世陶器 皿	-	(1.3)	3.8	-	1/2	灰白色	見込から 体部外面灰釉	回転ナデ。底部外面は回転ケズリ。	
539	C-2b区 堆積層	東バンク 第8層	土師質 土器 杯	-	(1.5)	6.4	-	1/6	灰白色	-	ロクロ水挽成形か。ロクロ目が顕著。回転ナ デ。底部は回転糸切り。	
540	C-2b区 堆積層	東バンク 第8層	金属製品 不明	全長 (7.0)	全幅 (9.7)	全厚 (0.3)	重量 53.0	一部 残存	-	-	鉄製。鉄鍋か。板状、湾曲。端部は肥厚、断面 は三角形。	
541	C-3b区 堆積層	南壁 第8層	白磁 皿	-	(1.9)	6.8	-	1/4	白色	白濁した 白磁釉	畳付は無釉。	
542	C-3a区 堆積層	南壁 第8層	近世磁器 碗	-	(1.9)	3.4	-	2/3	灰白色	透明釉	小碗。見込に花文の染付。高台内に「サ」銘。 畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
543	C-3a区 堆積層	南壁 第8層	瓦 棧瓦	全長 (16.5)	全幅 (22.0)	全高 (4.8)	重量 673.0	1/3	灰白色	-	隅に切り込み。凹面は横方向のナデ。凸面は 縦または横方向のナデ。凹凸面にキラ粉。側 面に方形枠内に「サイ松」の刻印。瓦厚1.9cm。	
544	C-3a区 堆積層	南壁 第11層	古瀬戸 瓶子	-	(4.1)	-	最大径 (14.8)	1/2	黄灰色	外面灰釉 内面一部灰釉	内面はナデ、指頭圧痕残る。頸部内面は横 ナデ。	
545	C-3a区 堆積層	南壁 第11層	白磁 皿	11.8	2.7	6.8	-	1/3	灰白色	畳付除き 白濁した 白磁釉	端反形。	
546	C-4c区 堆積層	西バンク 第3層	青磁 碗	14.0	(2.0)	-	-	1/6	灰白色	オリーブ色の 青磁釉	外面に鑄蓮弁文。釉は厚い。	
547	C-3c区 堆積層	西バンク 第6層	土師質 土器 杯	-	(1.2)	4.0	-	1/3	にぶい 橙色	-	ロクロ水挽成形。ロクロ目顕著。回転ナ デ。底部は回転糸切り。器壁薄い。底径は小 さい。	
548	C-3b区 堆積層	西バンク 第6層	土師質 土器 杯	-	(1.8)	5.4	-	1/5	橙色	-	体部は著しく摩耗し調整不明。見込にロク ロ目顕著。底部の器壁厚い。	
549	C-3c区 堆積層	西バンク 第6層	土師質 土器 杯	10.2	3.7	4.2	-	1/4	にぶい 橙色	-	小型。ロクロ水挽成形。回転ナデ。底部は回 転糸切り。	
550	C-3c区 堆積層	西バンク 第6層	土製品 土錘	全長 4.1	全幅 1.4	全厚 1.2	重量 4.9	完存	にぶい 橙色	-	円柱形。全面ナデ。孔径0.6cm。	

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
551	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	瓦質土器 鍋	20.7	(4.6)	-	230	1/10	灰色	-	著しく摩耗し調整不明。外面に炭素吸着。口縁は直立、端部の面は外傾する。	
552	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	白磁 皿	11.7	(2.2)	-	-	1/8	灰白色	透明感ない 白磁釉	端反形。	
553	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 3.9	全幅 1.2	全厚 1.2	重量 5.3	完存	橙色	-	円柱形。全面ナデ。孔径0.4cm。	
554	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 3.9	全幅 1.6	全厚 1.2	重量 6.7	完存	にぶい 橙色	-	円柱形。扁平。全面ナデ。孔径0.5cm。	
555	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 4.1	全幅 1.2	全厚 1.2	重量 5.0	完存	灰黄 褐色	-	円柱形で小型。全面ナデ。黒斑あり。孔径0.4cm。	
556	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 4.2	全幅 1.2	全厚 1.1	重量 3.7	完存	浅黄 橙色	-	円柱形。全面ナデ。孔径0.6cm。	
557	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 (4.1)	全幅 1.3	全厚 1.2	重量 6.3	一部 欠損	黒褐色	-	円柱形。全面ナデ。黒斑あり。孔径0.5cm。	
558	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 4.3	全幅 1.4	全厚 1.2	重量 6.4	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	円柱形。全面ナデ。摩耗。孔径0.5cm。	
559	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 (2.6)	全幅 1.2	全厚 1.1	重量 2.6	1/2	黒褐色	-	紡錘形。全面ナデ。黒斑あり。孔径0.5cm。	
560	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 (3.6)	全幅 1.3	全厚 1.2	重量 3.8	2/3	にぶい 赤橙色	-	紡錘形。全面ナデ。摩耗。孔径0.5cm。	
561	C-3c区 堆積層	西バンク 11層	土製品 土鍾	全長 4.1	全幅 1.6	全厚 1.4	重量 7.0	完存	にぶい 橙色	-	紡錘形。全面ナデ。摩耗。孔径0.6cm。	
562	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 4.6	全幅 1.2	全厚 1.2	重量 5.3	ほぼ 完存	黒褐色	-	紡錘形。全面ナデ。全面黒斑。摩耗。孔径0.4cm。	
563	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 4.8	全幅 1.2	全厚 1.2	重量 5.8	完存	黒褐色	-	紡錘形。全面ナデ。黒斑あり。孔径0.4cm。	
564	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	土製品 土鍾	全長 5.0	全幅 1.2	全厚 1.1	重量 4.9	完存	にぶい 褐色	-	紡錘形。全面ナデ。黒斑あり。孔径0.4cm。	
565	C-3c区 堆積層	西バンク 第11層	金属製品 不明	全長 (2.7)	全幅 (3.4)	全厚 (0.9)	重量 9.7	一部 残存	-	-	鉄製。板状。錆化が著しく形状不明。中央は膨らみ、厚い、端部は薄い。	
566	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	土師質 土器 杯	-	(2.2)	5.9	-	1/6	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁厚い。	
567	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	土師質 土器 杯	-	(4.1)	7.3	-	1/2	橙色	-	大振り。回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
568	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	土師質 土器 杯	13.0	(4.4)	-	-	1/6	橙色	-	大振り。回転ナデ。	
569	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	瓦質土器 鍋	-	(3.7)	-	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	口縁部は横ナデ、体部内面は摩耗し不明。外面はナデ、指頭圧痕残るが不明瞭。外面に煤付着。	
570	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 小札	全長 6.6	全幅 2.8	全厚 0.1	重量 8.9	一部 欠損	-	-	鉄製。長方形。径0.2cmの円孔が2列、左5個、右7個。孔間は縦列上部は0.7cm、下部が1.0cm。左右列間は1.0～1.1cm。	伊予札
571	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 小札	全長 6.5	全幅 2.9	全厚 0.1	重量 10.6	完存	-	-	鉄製。長方形。径0.2cmの円孔が7個2列。孔間は縦列は0.6～1.0cm、左右列間は1.1～1.2cm。	碓石頭伊予札
572	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 小札	全長 (3.1)	全幅 (2.9)	全厚 (0.2)	重量 2.7	一部 残存	-	-	鉄製。長方形。薄い。径0.2cmの円孔が2個2列。孔間は縦列間は0.9cm、左右列間は1.1cm。	
573	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 小札	全長 (4.5)	全幅 (2.6)	全厚 (0.2)	重量 3.0	1/2	-	-	鉄製。長方形。薄い。径0.2cmの円孔が2列、左右列3個残る。孔間は縦列は0.7～0.8cm、左右列間は1.1cm。	
574	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 釘	全長 6.6	全幅 1.0	全厚 0.6	重量 5.4	完存	-	-	鉄製。頂部はL字形、薄い。身部断面は方形。先端は細く尖る。	
575	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 釘	全長 6.2	全幅 0.9	全厚 0.6	重量 7.1	完存	-	-	鉄製。頂部はL字形、薄い。身部断面は方形。先端は細く尖る。	

遺物観察表24

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
576	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 釘	全長 (5.0)	全幅 1.4	全厚 0.8	重量 6.0	先端 欠損	-	-	鉄製。頂部はL字形、薄く幅広い。身部断面は 方形。	
577	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 釘	全長 (6.9)	全幅 1.4	全厚 0.8	重量 9.5	先端 欠損	-	-	鉄製。やや大型。頂部はL字形、薄い。身部は 太く、断面は方形。	
578	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 釘	全長 6.6	全幅 1.4	全厚 0.5	重量 5.8	完存	-	-	鉄製。環頭。身部断面は方形。先端は細く尖る。	
579	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 釘	全長 (5.5)	全幅 2.2	全厚 0.4	重量 8.2	一部 欠損	-	-	鉄製。環頭。身部断面は方形。頭幅1.5cm、身部 幅0.5cm、厚さ0.6cm。頭部に厚さ0.2cmの板状 の鉄が貫通。	
580	C-3c区 堆積層	西バンク 第13層	金属製品 不明	全長 (2.6)	全幅 (1.0)	全厚 (0.4)	重量 2.1	一部 残存	-	-	鉄製。薄い棒状。断面は方形。	
581	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	土師質 土器 杯	-	(1.5)	4.8	-	底部 完存	橙色	-	回転ナデ、摩耗し不明瞭。底部は回転糸切 り。器壁薄い。	
582	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	土師質 土器 杯	-	(3.2)	7.0	-	1/5	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。体部は大きく 内湾。底径は大きい。	
583	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	土師質 土器 小皿	6.9	1.6	3.5	-	底部 完存	橙色	-	小型。回転ナデ。内面にロクロ目顕著。底部 は回転糸切り。口縁部は外反。	
584	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	土師質 土器 小皿	6.6	2.1	3.5	-	4/5	橙色	-	小型。回転ナデ。底部は回転糸切り。器高は 高い。	
585	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	土師質 土器 小皿	6.5	2.2	3.9	-	完存	橙色	-	小型。回転ナデ。底部は回転糸切り。器高は 高い。	
586	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	古瀬戸 碗	16.4	(5.9)	-	-	1/3	浅黄色	内面から 体部外面灰釉	平碗。外面体部下は回転ケズリ、無釉。	
587	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	備前焼 播鉢	-	(6.1)	-	-	一部 残存	橙色	-	回転ナデ。播目残る。口縁部は四角、上下 に僅かに揃む。	
588	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	青磁 碗	-	(3.2)	5.8	-	1/4	灰白色	内面から 高台外面 青磁釉	見込は印花文。畳付と高台内は削り出し、無 釉。底部の器壁厚い。高台断面は台形。	中国産 龍泉窯系
589	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	土製品 土錘	全長 3.3	全幅 1.1	全厚 1.1	重量 3.5	完存	灰赤色	-	円柱形。小型。全面ナデ。摩耗。孔径0.6cm。	
590	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	土製品 土錘	全長 3.8	全幅 1.1	全厚 1.1	重量 3.7	完存	にぶい 黄橙色	-	紡錘形。全面ナデ。孔径0.5cm。	
591	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	土製品 土錘	全長 4.5	全幅 1.2	全厚 1.2	重量 5.9	完存	灰黄色	-	紡錘形。全面ナデ。黒斑あり。孔径0.6cm。	
592	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	金属製品 鎌か	全長 10.4	全幅 (4.5)	全厚 0.4	重量 81.5	ほぼ 完存	-	-	鉄製。板状、湾曲。先端は細い。	
593	C-3c区 堆積層	東バンク 第6層	金属製品 不明	全長 (4.6)	全幅 (0.8)	全厚 (0.7)	重量 2.9	一部 残存	-	-	銅製。中空、先端尖る。側面に接合痕。中に木 質残る。	
594	C-3c区 堆積層	東バンク 第21層	青磁 碗	-	(2.4)	5.2	-	1/2	灰黄色	内面から 高台外面 青磁釉	無文。畳付と高台内は削り出し、無釉。高台 は低い。	
595	C-3c区 堆積層	東バンク 第23層	備前焼 播鉢	-	(7.4)	-	-	体部 一部 残存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。11条単位の幅狭い播目。	
596	C-3c区 堆積層	東バンク 第25層	備前焼 壺	-	(7.8)	-	-	一部 残存	褐灰色	-	ナデ、内面に指頭圧痕残る。外面の一部ハケ のちナデ、肩部に5条の櫛描による直線文が 2条。	
597	C-3c区 堆積層	東バンク 第26層	土師質 土器 杯	-	(2.3)	6.4	-	1/3	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。体部は緩やか に外反。	
598	C-3d区 堆積層	東壁 第1層	瓦 軒平瓦	全長 (7.2)	全幅 (9.0)	瓦当高 (4.9)	重量 238.0	一部 残存	灰黄色	-	隅瓦か。ナデ。瓦当に唐草文の一部と木目 痕。瓦当右側に方形枠内に「王子定」の刻印。 瓦当と凹面にキラ粉。文様区幅(2.6)cm。	高知県香南市 香我美町産
599	C-3d区 堆積層	東壁 第3層	土師質 土器 杯	-	(1.3)	5.6	-	1/2	浅黄 橙色	-	著しく摩耗し調整不明。底部厚い。	
600	C-3d区 堆積層	東壁 第3層	瓦質土器 鍋	19.1	(3.7)	-	(18.6)	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	口縁部は横ナデ。頭部外面は強い横方向のナ デ。その他は摩耗し不明。頭部は「く」の字状 に屈曲。口縁部は丸い。	

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
601	C-3d区 堆積層	東壁 第3層	青磁 稜花皿	-	(2.0)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	口縁部は稜花形。口縁部内面に陰刻の文様。	中国産 龍泉窯系
602	C-3d区 堆積層	東壁 第3層	青磁 杯か	全長 (2.9)	全幅 (4.3)	全厚 (0.7)	-	底部 一部 残存	灰白色	青味を帯びた 青磁釉	内面に魚文を貼付。外面にロクロ目。器壁 薄い。	中国産 龍泉窯系
603	C-3d区 堆積層	東壁 第3層	青花 碗	-	(3.4)	-	-	1/6	灰白色	透明釉	見込に二重圏線と染付の一部。外面にアラ ベスク風の染付。	
604	C-3d区 堆積層	東壁 第3層	金属製品 釘	全長 (5.6)	全幅 1.6	全厚 0.7	重量 7.5	1/2	-	-	鉄製。頂部はT字形か。身部断面は方形。	
605	C-3d区 堆積層	東壁 第3層	金属製品 釘	全長 6.4	全幅 1.5	全厚 0.5	重量 7.5	完存	-	-	鉄製。頂部はL字形。身部断面は方形。先端は 細く尖る。	
606	C-3d区 堆積層	東壁 第3層	金属製品 釘	全長 (9.9)	全幅 0.9	全厚 0.6	重量 14.8	両端 欠損	-	-	鉄製。大型。身部断面は方形か。	
607	C-4a区 堆積層	南壁 第1層	近世磁器 碗	16.0	5.4	7.4	-	底部 完存	灰白色 長石含	光沢ある 透明釉	見込に人物と圏線の染付。外面は圏線と染 付の一部。高台内は削り出し、一部に釉。畳 付に初のような植物付着。	江戸後期
608	C-4a区 堆積層	南壁 第8層	土師器 釜	-	(3.6)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色 砂粒多	-	小さな罫。断面は方形。著しく摩耗し調整不 明。口縁は内湾。	播磨型か
609	C-4a区 堆積層	南壁 第8層	備前焼 播鉢	35.4	(11.2)	-	-	一部 残存	灰色	-	回転ナデ、外面の一部にナデ。口縁部は横ナ デ。6条単位の播目。口縁端部を上下に摘む。	
610	C-4a区 堆積層	南壁 第8層	近世磁器 碗	11.4	(3.8)	-	-	1/3	灰白色	透明釉	内面に帯線と圏線、外面に窓に草花文の染付。	19世紀か
611	C-4a区 堆積層	南壁 第8層	近世磁器 碗	11.2	6.5	6.3	-	1/3	灰白色	透明感ない 透明釉	広東形。見込に宝文、内面と高台に圏線、外 面に格子文と木葉文かの染付。高台内に方 形枠に「茶」銘。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
612	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	土師質 土器 杯	14.2	5.0	8.4	-	1/4	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
613	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	土師器 釜	-	(1.8)	-	-	一部 残存	にぶい 褐色	-	小さな罫。断面は三角形。内面はナデ。外面 は横方向のナデ。	播磨型
614	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	瓦質土器 鍋	19.0	(6.4)	-	19.6	1/3	灰色	-	口縁部は横ナデ。内面は摩耗し不明。外面は ナデ。頸部に指頭圧痕顕著。頸部は緩やかに 屈曲。	
615	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	瓦質土器 鍋	19.1	7.9	17.8	19.8	1/3	にぶい 黄橙色	-	型成形か。口縁部は横ナデ。外面はナデ。頸 部に指頭圧痕顕著。胴部内面の一部にヘラ ナデ。底部外面は煤付着。	
616	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	瓦質土器 釜	-	(2.1)	-	-	一部 残存	にぶい 黄橙色 長石含	-	水平に伸びる罫貼付。内面は横方向のハケ。 外面は横方向のナデ。	畿内系
617	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	常滑焼 甕	21.9	40.3	14.6	39.7	一部 欠損	にぶい 黄橙色	頸部内面 自然釉	小型。内面は横方向のナデ、一部にヘラナ デ。指頭圧痕と接合痕。外面はナデ。肩部外 面に「×」のヘラ記号。口縁縁部幅2.3cm。	
618	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	白磁 皿	-	(1.8)	-	-	一部 残存	灰白色	白磁釉 貫入が入る	端反形。	
619	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	白磁 壺か	-	(5.4)	-	-	1/6	灰白色	白磁釉	外面にロクロ目。	
620	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	青磁 碗	-	(2.8)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	透明感ない 青磁釉	無文。口縁端部は僅かに外反。焼成不良。	
621	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	青磁 碗	17.5	(3.9)	-	-	1/8	にぶい 橙色	暗灰黄色の 青磁釉 貫入が入る	口縁部内面に陰刻の圏線。口縁端部は僅か に外反。焼成不良。	中国産 龍泉窯系
622	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	土製品 土錘	全長 4.2	全幅 1.4	全厚 1.3	重量 6.0	完存	橙色	-	円柱形。全面ナデ。若干摩耗。孔径0.5cm。	
623	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	土製品 土錘	全長 4.5	全幅 1.1	全厚 1.0	重量 4.7	完存	にぶい 橙色 砂粒含	-	円柱形。全面ナデ。やや摩耗。孔径0.4cm。	
624	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	土製品 土錘	全長 4.9	全幅 1.4	全厚 1.3	重量 7.1	完存	橙色	-	円柱形。全面ナデか、摩耗し不明。黒斑あり。 孔径0.5cm。	
625	C-4a区 堆積層	南壁 第10層	土製品 土錘	全長 4.2	全幅 1.2	全厚 1.1	重量 4.2	完存	にぶい 黄橙色	-	紡錘形。全面ナデ。孔径0.4cm。	

遺物観察表26

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
626	C-4a区堆積層	南壁第10層	土製品土錘	全長4.4	全幅1.1	全厚1.1	重量4.4	完存	にぶい黄橙色	-	紡錘形。全面ナデ。孔径0.4cm。	
627	C-4a区堆積層	南壁第10層	土製品土錘	全長4.4	全幅1.3	全厚1.2	重量5.5	ほぼ完存	にぶい橙色	-	紡錘形。全面ナデ。孔径0.5cm。	
628	C-4a区堆積層	南壁第10層	土製品土錘	全長5.5	全幅1.1	全厚1.1	重量4.1	ほぼ完存	橙色	-	紡錘形。全面ナデ。黒斑あり。孔径0.4cm。	
629	C-4a区堆積層	南壁第10層	金属製品釘	全長(4.8)	全幅(1.1)	全厚0.7	重量5.7	両端欠損	-	-	鉄製。頂部はL字形。身部断面は方形。頭幅(1.0)cm, 身部幅0.5cm, 厚さ0.7cm。	
630	C-4a区堆積層	南壁第10層	金属製品釘	全長(5.0)	全幅(0.6)	全厚0.5	重量4.3	両端欠損	-	-	鉄製。身部断面は方形。	
631	C-4a区堆積層	南壁第10層	金属製品釘	全長(6.0)	全幅0.7	全厚0.4	重量7.6	両端欠損	-	-	鉄製。身部断面は方形。木材付着。	
632	C-4b区堆積層	南壁第10層	金属製品釘	全長(4.3)	全幅0.6	全厚(0.4)	重量2.7	頂部欠損	-	-	鉄製。身部は湾曲, 断面は方形。先端は細く尖る。身部幅(0.5)cm。	
633	C-4b区堆積層	南壁第10層	金属製品釘	全長(4.4)	全幅1.3	全厚0.4	重量3.8	先端欠損	-	-	鉄製。頂部はL字形。身部断面は方形。頭幅1.0cm, 身部幅0.5cm。	
634	C-4b区堆積層	南壁第10層	金属製品釘	全長(4.4)	全幅1.1	全厚0.5	重量3.2	先端欠損	-	-	鉄製。頂部はL字形。身部断面は方形。	
635	C-4a区堆積層	南壁第10層	金属製品釘	全長5.0	全幅1.4	全厚0.5	重量5.0	ほぼ完存	-	-	鉄製。頂部はL字形。身部は屈曲し捻れ, 断面は方形。先端は細く尖る。身部幅0.4cm。頂部に他の釘一部癒着。	
636	C-4b区堆積層	南壁第10層	金属製品釘	全長(13.0)	全幅1.4	全厚0.8	重量41.7	先端欠損	-	-	鉄製。大型。頂部はL字形, 幅広く、薄い。身部断面は方形。	
637	C-4b区堆積層	南壁第10層	金属製品鎌か	全長(9.7)	全幅1.1	全厚0.5	重量14.6	上端欠損	-	-	鉄製。棒状。上部は三角形, 径の太い箇所は断面円形。上端と下端断面は方形。上端は厚さ0.1cm。	
638	C-4a区堆積層	南壁第12層	青磁水注か	-	(2.6)	-	-	1/3	淡黄色	青緑色の青磁釉	筒形。釉は厚い。	中国産龍泉窯系
639	C-4a区堆積層	南壁第12層	土製品土錘	全長(4.3)	全幅1.3	全厚1.1	重量4.7	2/3	にぶい橙色	-	紡錘形。ナデか, 摩耗し不明。孔径0.5cm。	
640	C-4a区堆積層	南壁第12層	金属製品銭貨	銭径2.34	内径2.00	銭厚0.13	重量3.1	完存	-	-	銅製。至和元寶。篆書。両面著しく摩耗。孔径0.63cm。	初铸造年1054年
641	C-4a区堆積層	南壁第17層	土師質土器杯	-	(1.8)	6.6	-	1/5	にぶい橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
642	C-4a区堆積層	南壁第17層	土製品土錘	全長3.4	全幅1.1	全厚1.2	重量3.8	完存	橙色	-	円柱形。全面ナデ。短い, 一端の一部を斜めに切る。孔径0.5cm。	
643	C-4a区堆積層	南壁第17層	土製品土錘	全長4.3	全幅1.1	全厚1.1	重量4.3	完存	にぶい褐色	-	円柱形。全面ナデ。黒斑あり。孔径0.5cm。	
644	C-4a区堆積層	南壁第17層	土製品土錘	全長4.4	全幅1.3	全厚1.3	重量5.9	完存	橙色	-	円柱形。全面ナデ。孔径0.5cm。	
645	C-4a区堆積層	南壁第17層	土製品土錘	全長4.5	全幅1.3	全厚1.2	重量5.8	完存	橙色	-	円柱形。全面ナデ。孔径0.5cm。	
646	C-4a区堆積層	南壁第17層	土製品土錘	全長4.8	全幅1.5	全厚1.2	重量6.9	完存	灰黄褐色	-	円柱形。全面ナデ。黒斑あり。孔径0.5cm。	
647	C-4a区堆積層	南壁第17層	土製品土錘	全長4.1	全幅1.5	全厚1.4	重量5.7	完存	にぶい橙色	-	紡錘形。全面ナデ。孔径0.5cm。	
648	C-4a区堆積層	南壁第17層	土製品土錘	全長4.3	全幅1.2	全厚1.2	重量4.9	完存	にぶい橙色	-	紡錘形。全面ナデ。孔径0.4cm。	
649	C-4a区堆積層	南壁第17層	土製品土錘	全長4.7	全幅1.2	全厚1.1	重量5.1	完存	橙色	-	紡錘形。全面ナデ。孔径0.5cm。	
650	C-4a区堆積層	南壁第17層	土製品土錘	全長5.7	全幅1.3	全厚1.2	重量6.3	完存	にぶい黄橙色	-	紡錘形。全面ナデ。細く長い。黒斑あり。孔径0.4cm。	

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉薬	調整・文様・特徴	備考
651	C-4a区堆積層	南壁第17層	金属製品切羽	全長4.7	全幅2.6	全厚0.3	重量11.9	完存	-	-	銅製。楕円形の銅板に菊花形の銅板を接着。中央に二等辺三角形の孔。板厚は0.5mm。	
652	C-4a区堆積層	南壁第17層	金属製品切羽	全長4.8	全幅2.5	全厚0.3	重量9.3	完存	-	-	銅製。楕円形の銅板に菊花形の銅板を接着。中央に二等辺三角形の孔。板厚は0.5mm。	
653	C-4a区堆積層	南壁第17層	金属製品鯉口金具	全長4.5	全幅2.6	全高0.8	重量7.0	完存	-	-	銅製。刀の部位。楕円形。断面は「コ」の字形。	
654	C-4d区堆積層	東バンク第1層	常滑焼甕	-	(8.5)	-	-	肩部残存	黒色	外面上部自然釉	内面はナデ。指頭圧痕残る。外面は上部がヘラナデで、肩部に押印文。下部は横方向のナデ。	
655	C-4d区堆積層	東バンク第1層	常滑焼甕	240	(14.0)	-	最大径(408)	一部残存	灰白色	胴部外面自然釉	内面から口縁部外面は横方向のナデ。外面は頸部がナデ、胴部は不明。頸部はやや内傾。口縁縁部幅3.1cm。	
656	C-4d区堆積層	東バンク第1層	白磁皿	-	(1.4)	7.0	-	一部残存	灰白色	高台除き白磁釉	高台は削り出し、無釉、断面は三角形。	
657	C-4c区堆積層	東バンク第2層	土師質土器碗	-	(2.4)	5.6	-	1/4	橙色	-	輪高台を貼付、断面は半円形。著しく摩耗し調整不明。	
658	C-4d区堆積層	東バンク第2層	古瀬戸壺か	-	(6.8)	-	-	肩部残存	にぶい黄橙色	外面灰釉	内面は強い横方向のナデ。外面に4条の櫛描文。	
659	C-4d区堆積層	東バンク第2層	古瀬戸瓶子か	-	(10.7)	-	-	胴部残存	浅黄色	外面灰釉	横方向のナデ。	
660	C-4c区堆積層	東バンク第2層	備前焼播鉢	-	(4.3)	-	-	一部残存	灰色	-	回転ナデ。播目なし。口縁端部は肥厚、上方に僅かに摘む。	
661	C-4c区堆積層	東バンク第2層	備前焼壺	14.4	(9.5)	-	(21.8)	1/3	黄灰色	-	口縁部は玉縁。回転ナデ。頸部内面にナデ。肩部外面に1~3条のヘラ描の沈線3段。口縁部内面と肩部外面に胡麻。	
662	C-4d区堆積層	東バンク第2層	常滑焼甕	18.5	(6.2)	-	-	一部残存	にぶい黄橙色	口縁部内面から外面自然釉	小型。口縁端部はN字状。内面は横方向のナデ。釉の掛かる部分は調整不明。口縁縁部幅1.8cm。	
663	C-4c区堆積層	東バンク第2層	常滑焼甕	37.1	(8.1)	-	-	一部残存	黄灰色	口縁部内面自然釉	口縁部はN字状。回転ナデ、口縁部に横ナデ。口縁縁部幅2.0cm。	
664	C-4c区堆積層	東バンク第2層	常滑焼甕	-	(15.0)	-	-	肩部残存	黄灰色	外面自然釉	大型。内面は指頭圧の横方向の強いナデと斜方向のナデ。外面は斜方向のナデ、肩上部に格子状の押印文。	
665	C-4d区堆積層	東バンク第2層	白磁壺	11.7	(2.7)	-	-	1/4	灰白色	白磁釉	口縁部は屈曲、端部を下方へ摘む。709と同一個体か。	
666	C-4d区堆積層	東バンク第2層	白磁壺	-	(4.6)	-	-	肩部残存	灰黄色	白磁釉	肩部に耳を貼付。内面にロクロ目。	
667	C-4c区堆積層	東バンク第2層	青磁碗	12.6	(3.6)	-	-	一部残存	灰黄色	灰オリーブ色の青磁釉	口縁部外面に帯状の圏線。	中国産龍泉窯系
668	C-4d区堆積層	東バンク第2層	青花碗	-	(3.1)	-	-	一部残存	灰白色	透明釉	内外面に染付。	
669	C-4c区堆積層	東バンク第2層	青花碗	13.2	5.0	5.1	-	1/2	灰白色	畳付除き透明釉	連子碗。見込と外面は二重圏線と三葉状の斑点文の染付。内面と高台外面に圏線。内外面に虫喰。	
670	C-4d区堆積層	東バンク第2層	瓦棧	全長(23.2)	全幅(14.8)	全高(5.6)	重量836.0	1/3	灰黄色	-	隅に切り込み。凹凸面は縦方向のナデ、キラ粉。側面に「山口」の刻印。瓦厚1.9cm。	
671	C-4d区堆積層	東バンク第2層	金属製品釘	全長(9.8)	全幅1.4	全厚0.6	重量28.7	先端欠損	-	-	鉄製。大型。頂部はL字形。身部断面は矩形、幅広く薄い。先端は細くなる。	
672	C-4d区堆積層	東バンク第3層	白磁碗	-	(1.6)	-	-	一部残存	灰白色	白磁釉	口縁部内面に沈線1条。口縁端部は外へ短く摘む。	
673	C-4d区堆積層	東バンク第4層	土師器火鉢	17.9	8.9	15.2	最大径18.2	1/3	暗灰色	-	浅鉢形。胴部は型成形。内面はナデ。外面は型押で波文。底部はナデ、円柱形の脚を3箇所貼付。口縁部内面に煤付着。	江戸後期
674	C-4d区堆積層	東バンク第4層	瓦器碗	-	(2.0)	4.4	-	底部完存	浅黄色	-	扁平な高台を貼付。見込に格子状暗文。内面はナデのちミガキ。外面はナデ、指頭圧痕残る。底部はナデ、炭素吸着。	畿内産
675	C-4d区堆積層	東バンク第4層	常滑焼甕	420	(9.1)	-	-	一部残存	灰色	口縁部内面と頸部外面自然釉	横方向のナデ。頸部は大きく内傾。口縁縁部幅4.5cm。	

遺物観察表28

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 葉	調整・文様・特徴	備 考
676	C-4d区堆積層	東バンク第4層	白磁皿	-	(2.3)	-	-	一部残存	灰白色	白磁釉	端反形。	
677	C-4c区堆積層	東バンク第4層	金属製品 鎌か	全長 (7.7)	全幅 1.1	全厚 1.0	重量 13.8	両端欠損	-	-	鉄製。上部は三角形、断面は円形。基部断面は方形。	
678	C-4c区堆積層	東バンク第4層	金属製品 銭貨	銭径 2.33	内径 1.87	銭厚 0.11	重量 2.6	完存	-	-	銅製。元豊通寶か。著しく摩耗し、銭種は不明瞭。孔径0.51cm。	初铸造年 1078年
679	C-4c区堆積層	東バンク第5層	備前焼壺	12.6	(5.3)	-	(18.8)	1/4	灰黄色	-	回転ナデ。外面に櫛描の波状文。口縁部は直立。	
680	C-4c区堆積層	東バンク第5層	常滑焼甕	-	(6.2)	-	-	頸部残存	灰白色	外面自然釉	頸部は「く」の字状に屈曲。内面は横方向のナデ。外面は不明。	
681	C-4d区堆積層	東バンク第6層	弥生土器 壺	-	(2.3)	4.7	-	底部1/2残存	黒色 金雲母 含む	-	著しく摩耗し調整不明。	
682	C-4c区堆積層	東壁第5～20層	土師質土器 杯	-	(1.4)	5.7	-	底部完存	浅黄 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り、器壁厚い。	
683	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	土師質土器 杯	-	(1.8)	6.6	-	1/6	褐灰色	-	回転ナデ。内面にロクロ目顕著。底部は回転糸切り。	
684	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	土師質土器 杯	-	(1.8)	6.8	-	1/4	にぶい 褐色	-	回転ナデ。内面にロクロ目顕著。底部は回転糸切り。	
685	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	東播系 須恵器 片口鉢	-	(3.9)	11.0	-	1/6	灰白色	-	内面は摩耗し調整不明。外面は回転ナデのちナデか、摩耗し不明瞭。底部はナデ。	
686	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	備前焼壺	17.7	(7.0)	-	(24.8)	1/6	赤灰色	外面自然釉	口縁部は玉縁。内面は回転ナデ。外面は器面が荒れ調整不明。肩部に櫛描の波状文。	
687	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	常滑焼甕	-	(10.5)	15.8	-	1/2	黄灰色	内面と 外面一部 自然釉	内面は横方向のヘラナデやナデか、粘土塊が付着、不明瞭。外面は縦方向のヘラナデ。底部はナデ。	
688	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	白磁壺	-	(3.7)	-	-	胴部残存	灰黄色	白磁釉	内面にロクロ目、釉は薄い。	
689	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	青白磁 合子	-	(2.1)	-	-	一部残存	灰白色	外面 淡い青磁釉	型成形。内面はナデ、無釉。外面は型押で蓮弁文。高台は小さく、無釉。717と同一個体か。	
690	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	金属製品 小札	全長 (6.8)	全幅 3.2	全厚 0.2	重量 12.7	一部欠損	-	-	鉄製。大型。径0.3cmの円孔が2列、左列4個、右列5個。孔間は縦列が0.8～1.0cm、左右列間が1.2～1.3cm。	
691	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	金属製品 鎌	全長 (4.0)	全幅 (1.9)	全厚 (0.4)	重量 5.0	一部残存	-	-	鉄製。身部は扁平、菱形か。基部断面は方形。	
692	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	金属製品 不明	全長 1.8	全幅 1.9	全厚 0.3	重量 2.3	ほぼ完存	-	-	銅製。環状。中央に0.7cmの円孔。縁は薄い。全面錆化。	
693	C-4d区堆積層	東壁第5～20層	金属製品 不明	全長 (5.4)	全幅 0.6	全厚 0.1	重量 2.4	一部欠損	-	-	銅製。半筒形。断面は半円形。487・494と同形状。	
694	C-4d区堆積層	東壁第16層	備前焼壺	-	(6.8)	-	-	一部残存	褐灰色	頸部外面 自然釉	口縁端部は玉縁、断面は楕円形。頸部内面は横方向のナデ。口縁部は回転ナデ。端部は外傾。	
695	C-4d区堆積層	東壁第16層	白磁壺	11.5	(5.5)	-	-	1/6	灰白色	白磁釉	頸部は直立。口縁は頸部より屈曲。	
696	C-4d区堆積層	東壁第16層	白磁壺	-	(6.4)	-	最大径 20.0	肩部残存	灰白色	白磁釉	肩上部に耳貼付、耳の一部残る。肩部は屈曲。	
697	C-4d区堆積層	東壁第21層	備前焼 掃鉢	28.0	(7.4)	-	-	一部残存	にぶい 褐色	-	回転ナデ。掃目なし。口縁部は肥厚、四角、端部を上方へ摘む。	
698	C-4d区堆積層	東壁第22層	土師質土器 杯	14.0	(4.1)	-	-	1/4	橙色	-	回転ナデ。	
699	C-4d区堆積層	東壁第22層	土師質土器 杯	-	(1.9)	7.2	-	1/4	にぶい 黄橙色	-	回転ナデのち内面の一部にナデ。底部は回転糸切り、板状圧痕残る。	
700	C-4d区堆積層	東壁第22層	土師質土器 杯	-	(1.7)	6.6	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切りか、摩耗し不明、僅かな凹みは板状圧痕か。	

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
701	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	瓦質土器 鍋	17.6	(5.0)	-	17.4	一部 残存	黄灰色	-	内面はナデか、摩耗し不明。口縁部は横ナ デ。胴部外面はナデ、指頭圧痕残り、煤付着。 口縁部は外傾。	
702	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	備前焼 播鉢	-	(6.0)	-	-	一部 残存	灰褐色	-	回転ナデ。僅かに片口と播目残る。口縁端部 は肥厚、四角、上方へ揃む。	
703	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	備前焼 播鉢	-	(7.4)	17.2	-	1/8	灰褐色	-	内面と体部外面は回転ナデ。5条単位の播 目。底部外面は無調整。	
704	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	備前焼 壺	-	(11.5)	-	-	肩部 残存	褐灰色	外面肩上部 自然釉	回転ナデ。外面に櫛描の直線文が3条。	
705	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	備前焼 甕	-	(7.5)	-	-	一部 残存	灰白色	口縁部内面 自然釉	口縁端部は玉縁、断面は小さな楕円形。頸部 内面は横方向のナデ。口縁部内面と外面は回 転ナデ。口縁部は外傾。	
706	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	備前焼 甕	-	(8.5)	-	-	一部 残存	灰赤色	-	口縁端部は玉縁、上端は面、断面は楕円形。 頸部内面はナデ。口縁部内面と外面は回転 ナデ。口縁部は外傾。	
707	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	常滑焼 甕	22.7	(9.9)	-	-	1/8	灰黄色	-	頸部内面はナデ。頸部外面はナデのち口縁 内面から外面に回転ナデ。頸部は内傾。口縁 縁部幅2.0cm。	
708	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	白磁 碗	16.2	(3.9)	-	-	一部 残存	灰白色	白磁釉	口縁部は玉縁。器壁薄い。	
709	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	白磁 壺	-	(2.1)	-	-	一部 残存	灰黄色	光沢ない 白磁釉	口縁部は頸部より屈曲。665と同一個体か。	
710	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	青花 皿	11.0	(2.5)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	小型。内外面に圏線の染付。	
711	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	土製品 土錘	全長 3.9	全幅 1.2	全厚 1.2	重量 4.1	完存	橙色	-	小型。円柱形。全面ナデ。孔径0.6cm。	
712	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	土製品 土錘	全長 4.3	全幅 1.1	全厚 1.1	重量 4.1	完存	にぶい 橙色	-	小型。円柱形。全面ナデ。孔径0.6cm。	
713	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	土製品 土錘	全長 4.4	全幅 1.2	全厚 1.1	重量 4.8	ほぼ 完存	にぶい 黄橙色	-	小型。円柱形。全面ナデ。孔径0.6cm。	
714	C-4d区 堆積層	東壁 第22層	金属製品 不明	全長 (4.5)	全幅 (2.9)	全厚 (0.5)	重量 13.0	一部 残存	-	-	鉄製。板状。「く」の字状に屈曲。	
715	C-4d区 堆積層	東壁 第28層	土師質 土器 杯	-	(2.2)	7.2	-	1/3	褐灰色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
716	C-4d区 堆積層	東壁 第28層	備前焼 播鉢	25.8	(9.5)	-	-	一部 残存	灰褐色	-	回転ナデのち一部にナデ。6条単位の播目。 体部は内湾。口縁端部は上方へ揃む。	
717	C-4d区 堆積層	東壁 第28層	青白磁 合子	-	(2.2)	-	-	一部 残存	灰白色	淡い青磁釉	型成形。内面は横方向のナデ。無釉。外面は 型押で蓮弁文。高台は小さく、無釉。689と同 一個体か。	
718	C-4d区 堆積層	東壁 第29層	常滑焼 甕	32.7	(9.2)	-	-	一部 残存	褐灰色	頸部外面 自然釉	頸部は内面がナデ、指頭圧痕残り、外面は粘 土が付着し、不明。口縁部は回転ナデ。口縁 部はN字状。口縁縁部幅2.5cm。	
719	C-4d区 堆積層	東壁 第32層	土師質 土器 杯	-	(4.4)	8.4	-	一部 残存	橙色	-	大振り。回転ナデ。底部は回転糸切り。	
720	C-4d区 堆積層	東壁 第32層	白磁 壺	10.9	(4.1)	-	-	1/5	灰黄色	白磁釉	頸部は外反。口縁部は屈曲、端部を下方へ 揃む。	
721	C-4d区 堆積層	東壁 第32層	土製品 土錘	全長 4.1	全幅 1.1	全厚 1.1	重量 4.9	完存	赤褐色	-	円柱形。全面ナデ。一部に黒斑あり。孔径0.4cm。	
722	C-4d区 堆積層	東壁 第32層	土製品 土錘	全長 4.1	全幅 1.3	全厚 1.2	重量 5.1	ほぼ 完存	橙色	-	紡錘型。全面ナデか、摩耗し不明。孔径0.5cm。	
723	C-4d区 堆積層	東壁 第34層	青磁 皿	12.8	(3.1)	-	-	一部 残存	灰白色	光沢ある淡い オリブ色の 青磁釉	桜花皿。内面は菊弁状の丸彫。外面は線刻と片 彫の花弁文。花弁文は肉厚、盛り上がる。	
724	C-5b区 堆積層	東バンク 第1・2層	瓦器 小皿	8.8	2.2	3.5	-	1/2	淡黄色	-	見込はナデ。口縁部は横ナデ。底部外面はナ デ、指頭圧痕残る。見込に平行暗文。	
725	C-5a区 堆積層	東バンク 第1・2層	瓦質土器 火鉢	16.4	8.6	15.5	最大径 17.0	ほぼ 完存	灰白色	-	浅鉢形。内面は回転ナデ。胴部外面は型押で 波文、キラ粉付着。底部外面はナデ、円柱形 の低い脚を3箇所に貼付。	江戸後期

遺物観察表30

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 葉	調整・文様・特徴	備考
726	C-5b区堆積層	東バンク第1・2層	備前焼掃鉢	-	(5.4)	14.2	-	一部残存	灰色	-	内面と体部外面は回転ナデ。底部外面はナデ。掻目は8条単位、摩耗。	
727	C-5a区堆積層	東バンク第1・2層	青磁碗	-	(3.1)	4.7	-	底部完存	灰白色	内面から高台外面青磁釉	外面は線描の細蓮弁文。疊付と高台内は削り出し、無釉。高台内の抉り浅く、底部は厚い。	
728	C-5a区堆積層	東バンク第1・2層	青磁杯	18.0	(1.7)	-	-	一部残存	灰白色	明緑灰色の青磁釉	外面は片彫で僅かな鑄の蓮弁文。蓮弁の先はやや尖る。口縁部は体部より屈曲。釉は厚い。	
729	C-5a区堆積層	東バンク第1・2層	近世磁器碗	-	(3.3)	6.1	-	1/2	灰白色	透明釉	広東形。見込は帆掛舟。内面は圏線。外面は圏線と草花文かの染付。高台内に「サ」銘。疊付は釉ハギ。見込にピン痕。	能茶山窯 1820年代～幕末
730	C-5b区堆積層	東バンク第1・2層	近世磁器小皿	9.0	2.7	4.3	-	3/5	白色	透明釉	見込は波文か、内面に草文と圏線の染付。外面は無文。見込は蛇ノ目釉ハギ。疊付は釉ハギ、砂付着。	能茶山窯 1820年代～幕末
731	C-5b区堆積層	東バンク第1・2層	瓦軒棧瓦	全長(11.0)	全幅(17.7)	瓦当高(9.5)	重量495.0	1/8	淡黄色	-	瓦当の中心飾は右巻の三巴文と唐草。右側に刻印。凹凸面にキラ粉。刻印は522・523と同じ、解読不可能。文様区幅(8.3)cm。	
732	C-5a区堆積層	東バンク第1・2層	石製品五輪塔	全長(24.4)	全幅18.7	全厚18.7	重量9.515kg	一部欠損	-	-	空風輪。全面に小さな敲打痕。	砂岩
733	C-5b区堆積層	東バンク第2層	土師器釜	20.4	(3.2)	-	-	一部残存	にぶい黄橙色	-	口縁部は横ナデ。頸部はナデ。頸部外面に工具痕。頸部は「く」の字状に屈曲。口縁部は内へ丸める。	紀伊型
734	C-5a区堆積層	東バンク第3・4層	金属製品銭貨	銭径2.57	内径2.03	銭厚0.12	重量2.6	完存	-	-	銅銭。寛永通寶。新寛永。孔径0.60cm	1697年以降
735	C-5a区堆積層	東バンク第12層	瓦質土器火鉢	16.0	7.8	15.3	最大径16.8	完存	灰色	-	浅鉢形。内面は回転ナデ。外面は型押で文様。底部外面はナデ、円柱形の低い脚を3箇所貼付。	江戸後期
736	C-5a区堆積層	東バンク第12層	瓦質土器火鉢	15.5	8.3	15.3	最大径16.7	ほぼ完存	灰白色	-	浅鉢形。内面は回転ナデ。外面は型押で文様。キラ粉付着。底部外面はナデ、円柱形の低い脚を3箇所貼付。	江戸後期
737	C-5b区堆積層	東バンク第12層	金属製品不明	全長(3.7)	全幅(3.1)	全厚(0.5)	重量16.6	一部残存	-	-	鉄製。板状。	
738	C-5b区堆積層	東バンク第12層	金属製品不明	全長2.0	全幅6.3	全厚0.5	重量8.3	ほぼ完存か	-	-	鉄製。板状。三角形。断面は方形。中央に径0.3cmの円孔。端部は薄く、厚さ0.3cm。	
739	C-5b区堆積層	東壁第1層	常滑焼甕	-	(4.9)	43.6	-	1/8	灰白色	-	内面は横方向のナデ。胴部外面は縦方向のハケのちケズリとナデ。底部外面はハケ。底部は大きく凹む。	
740	C-5c区堆積層	東壁第1層	青磁碗	16.5	(5.7)	-	-	1/6	灰白色	オリーブ色の青磁釉	内面に片彫の割花文。	中国産 龍泉窯系
741	C-5b区堆積層	東壁第4層	青磁碗	-	(2.5)	4.6	-	1/2	黄灰色	内面から外面透明感ない青磁釉	疊付と高台内は削り出し、無釉。底部の器壁厚い。	中国産 龍泉窯系
742	C-5b区堆積層	東壁第4層	青花碗	-	(3.4)	-	-	1/8	灰白色	透明釉	見込に2条の圏線。外面に三葉状の斑点文の染付。	
743	C-5b区堆積層	東壁第4層	近世陶器皿	10.0	(2.2)	-	-	1/6	明赤褐色	透明感ない灰釉	唐津系灰釉陶器。回転ナデ。	17世紀前葉
744	C-5b区堆積層	東壁第4層	瓦棧瓦	全長(9.8)	全幅(11.8)	全高(3.8)	重量197.0	一部残存	灰色	-	凹凸面にキラ粉。側面に方形枠内に「ヤ(ヤ)ス□(孫か)」の刻印。瓦厚1.7cm。	高知県香南市夜須町産
745	C-5b区堆積層	東壁第4層	石製品五輪塔	全長25.0	全幅16.9	全厚17.3	重量9.360kg	完存	-	-	空風輪。全面に敲打痕。	砂岩
746	C-5c区堆積層	東壁第4層	金属製品銭貨	銭径2.45	内径1.95	銭厚0.13	重量2.3	完存	-	-	銅銭。寛永通寶。新寛永。孔径0.63cm	1697年以降
747	C-5c区堆積層	東壁第7層	近世磁器小碗	8.7	4.5	2.8	-	1/2	灰白色	透明釉	小丸形。内面は無文。外面は海、土坡、草、鳥文と圏線。高台は圏線の染付。疊付は釉ハギ、砂付着。	肥前産
748	C-5c区堆積層	東壁第9層	土師器釜	-	(5.1)	-	-	一部残存	灰黄色	-	小さな鑄を貼付。断面は台形。内面はナデ。口縁部は横ナデ。外面は横方向のナデ。口縁部は直立。	
749	C-5c区堆積層	東壁第9層	陶器甕	-	(4.0)	-	-	一部残存	明褐灰色	頸部外面自然釉	内面は器面が荒れ調整不明。口縁部外面は回転ナデ。口縁部は外反のち屈曲、短く直立。	
750	C-5c区堆積層	東壁第9層	近世陶器皿	-	(1.1)	7.7	-	1/3	浅黄色	白濁した長石釉か貫入が入る	丸皿か。疊付は釉ハギ。	志野焼か 16世紀末～ 17世紀初か

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
751	C-5c区 堆積層	東壁 第9層	近世陶器 瓶か	-	(4.1)	13.7	16.0	1/5	灰色	外面錆釉	回転ナデ。	
752	C-5c区 堆積層	東壁 第9層	近世磁器 碗	-	(4.0)	6.2	-	2/3	白色	透明釉	広東形。見込は水と舟か、内面は圏線、外面は圏線と染付の一部。高台内に「サ」銘。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
753	C-5c区 堆積層	東壁 第9層	瓦 平瓦	全長 (7.8)	全幅 (11.6)	全高 (3.0)	重量 224.0	一部 残存	灰白色	-	隅に切り込み。凹凸面は縦または横方向のナデ。側面に「御口」の刻印。凹凸面にキラ粉。瓦厚2.0cm。	
754	C-5c区 堆積層	東壁 第9層	瓦 平瓦	全長 26.9	全幅 25.6	全高 4.9	重量 1652 kg	3/4	灰白色	-	凹凸面は縦または横方向のナデ。凸面中央に墨書、解説不可能。側面に方形枠内に「前金」の刻印。凸面にキラ粉。瓦厚1.7cm。	
755	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	弥生土器 壺	-	(2.0)	-	-	一部 残存	暗灰 黄色 礫含	-	口縁部に粘土帯を貼付。外面に縦方向の長い刻目。	南四国型
756	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	土師質 土器 杯	-	(1.7)	5.5	-	1/3	灰黄 褐色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
757	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	土師質 土器 杯	-	(1.0)	7.5	-	1/2	橙色	-	ロクロ水挽成形か。回転ナデ。底部は回転糸切り。見込にロクロ目顕著。	
758	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	土師質 土器 杯	-	(1.9)	6.0	-	1/6	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切りか、摩耗し不明瞭。	
759	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	備前焼 播鉢	31.0	(5.5)	-	-	一部 残存	灰色 石英含	-	回転ナデのち口縁部に横ナデ、播目が5条残る。口縁部は四角、上下に僅かに揃む。口縁部に重ね焼痕。	
760	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	備前焼 播鉢	34.1	(5.5)	-	-	一部 残存	黄灰色	-	回転ナデのち口縁部は横ナデ、内面の一部にナデ。播目が3条残る。	
761	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	備前焼 壺	22.6	(8.8)	-	35.0	1/10	褐灰色	肩部外面 自然釉	口縁端部は玉縁状。回転ナデ。接合痕あり。	
762	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	備前焼 甕	-	(5.2)	-	-	肩部 一部 残存	灰黄 褐色	外面自然釉	内外面は横方向のナデ。	
763	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	陶器 茶入か	9.6	(3.2)	-	-	1/8	灰白色	口縁部内面 から外面鉄釉	頸部内面は回転ナデ、無釉。口縁部は器面が荒れる。被熱か。口縁部と内面の一部に釉が厚く溜る。	中国産か
764	C-1区 中世 下面	堀切1 下層	白磁 碗	16.4	(3.6)	-	-	1/8	灰白色	白磁釉	口縁部は外反。	
765	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	白磁 杯	10.2	3.1	5.6	-	1/3	灰白色	光沢ある 白磁釉	口禿。平底。底部外面は回転ケズリ。口縁部内面は釉ハギ。口縁部は僅かに外反。底部外面の一部に釉。	
766	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	白磁 皿	12.2	2.2	6.5	-	1/2	白色	口縁部内外面 光沢ある 白磁釉	端反形。見込は回転ナデ、無釉。底部外面は回転ケズリ、無釉。見込に輪状の重ね焼痕、砂付着。器高は低い。	
767	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	白磁 皿	12.4	2.3	6.6	-	4/5	白色	口縁部内外面 光沢ある 白磁釉	端反形。見込は回転ナデ、無釉。底部外面は回転ケズリ、無釉。見込に輪状の重ね焼痕。器高は低い。	
768	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	白磁 壺	-	(3.1)	-	-	肩部 一部 残存	灰白色	白磁釉	耳を貼付。	
769	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	青磁 稜花皿	11.1	2.8	4.5	-	3/5	浅黄 橙色	内面から外面 透明感ない 青磁釉	腰が折れ、口縁端部に抉り。底部外面は回転ケズリ、無釉、無文。高台断面は方形。器壁厚い。	
770	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	青磁 皿	-	(4.6)	9.8	-	一部 残存	灰白色	濃緑色の 青磁釉	見込に圏線。外面に蓮弁文。畳付は無釉。釉は厚い。高台は細く、直立。	
771	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	青花 皿	16.0	(1.7)	-	-	一部 残存	浅黄 橙色	透明釉	内面に圏線。外面に染付の一部。口縁部はやや内湾。胎土に透明感なし。	
772	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	金属製品 小札	全長 (5.9)	全幅 3.3	全厚 0.1	重量 8.1	一部 欠損	-	-	鉄製。大型。径0.2cmの円孔が3列、左列7個、右列6個、中央下部3個。孔間は左右列が0.8～2.0cm、縦列が0.6～1.0cm。	
773	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	金属製品 小札	全長 (5.9)	全幅 3.3	全厚 0.2	重量 10.3	一部 欠損	-	-	鉄製。大型。径0.2cmの円孔が3列、両端列6個、中央下部に3個。孔間は左右列が0.9～1.1cm、縦列が0.7～0.9cm。	
774	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	金属製品 不明	全長 (3.1)	全幅 (1.7)	全厚 (0.4)	重量 3.8	一部 残存	-	-	鉄製。板状。三角形。断面は方形。	
775	C-1区 中世 下面	堀切1 上層	金属製品 鞆	全長 4.0	全幅 1.2	全厚 0.4	重量 6.9	完存	-	-	銅製。板状。紡錘形。径0.7cmの円孔が2箇所。	

遺物観察表32

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
776	C-1区 中世 下面	P-5	土師質 土器 杯	-	(1.9)	8.1	-	4/5	浅黄 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
777	C-1区 中世 下面	P-6	土師質 土器 杯	-	(2.5)	-	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。口縁部の1箇所が片口状。	
778	C-1区 中世 下面	P-6	瓦質土器 鍋	16.8	(4.1)	-	16.1	1/8	黄灰色	-	口縁部は横ナデ。胴部は内面が横方向のナデ、外面がナデ、指頭圧痕残る。頸部は屈曲。	
779	C-1区 中世 下面	P-12	土師質 土器 皿	15.4	(2.1)	-	-	一部 残存	黄灰色	-	回転ナデ。器壁薄い。	
780	C-1区 中世 下面	P-15	青磁 碗	-	(4.4)	-	-	体部 一部 残存	灰白色	光沢ある オリーブ色の 青磁釉	外面は蓮弁文。	中国産 龍泉窯系
781	C-1区 中世 下面	P-17	土師質 土器 杯	-	(2.5)	5.8	-	1/6	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
782	C-3区 中世 下面	SK-1	金属製品 釘	全長 (5.0)	全幅 (0.5)	全厚 0.3	重量 1.4	1/2	-	-	鉄製。小型。身部断面は方形。先端は細く尖る。	
783	C-3区 中世 下面	SK-1	金属製品 釘	全長 4.3	全幅 0.8	全厚 0.7	重量 6.0	ほぼ 完存	-	-	鉄製。頂部はL字形、薄い。身部断面は方形、湾曲。錆化が著しい。	
784	C-3区 中世 下面	SX-1 埋土1	土師質 土器 皿	-	(0.9)	8.2	-	1/4	橙色	-	内面は回転ナデ。外面は著しく摩耗し不明。底部は回転糸切り。	
785	C-3区 中世 下面	SX-1 埋土1	古瀬戸 皿	-	(1.7)	-	-	一部 残存	灰白色	内面から 口縁部外面 緑釉	緑釉小皿。回転ナデ。	
786	C-3区 中世 下面	SX-1 埋土1	金属製品 釘	全長 (5.7)	全幅 (0.9)	全厚 0.5	重量 8.1	両端 欠損	-	-	鉄製。大型。身部断面は矩形。著しく錆化。	
787	C-3区 中世 下面	SX-1 埋土2	古瀬戸 瓶子	-	(6.0)	9.0	-	2/3	灰白色	外面灰釉 内面と見込の 一部に灰釉	小さな平底。回転ナデ、内面の一部に強いナデ。見込に粘土塊付着。底部外面は無調整か。	
788	C-3区 中世 下面	SX-1 埋土3	土師質 土器 杯	-	(1.4)	6.3	-	1/4	褐灰色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
789	C-3区 中世 下面	SX-1 埋土3	青磁 碗	15.3	(3.7)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	外面に片彫の蓮弁文。蓮弁文は幅狭く、密。器壁薄い。	
790	C-3区 中世 下面	SX-1 埋土3	青磁 碗	-	(4.6)	-	-	一部 残存	灰白色	透明感強い 明緑灰色の 青磁釉	外面に片彫の蓮弁文。蓮弁文は幅狭く、先端尖る。	
791	C-1区 中世 上面	P-32	土師質 土器 杯	-	(1.7)	7.0	-	1/3	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
792	C-1区 中世 上面	P-34	石製品 石斧	全長 (5.3)	全幅 (5.5)	全厚 (1.2)	重量 47.0	基部 欠損	-	-	扁平片刃石斧。磨製。刃部は弧状。両面に使用痕。両側面に加工痕。	弥生時代 頁岩
793	C-3区 中世 上面	竖堀1 埋土3	青磁 稜花皿	-	(1.2)	-	-	一部 残存	灰色	深いオリーブ 色の青磁釉	口縁部は外反、端部は稜花形。内面に3条の圈線。	
794	C-3区 中世 上面	竖堀1 埋土6	土師質 土器 杯	-	(1.9)	4.8	-	1/3	灰白色	-	回転ナデか、著しく摩耗し不明。	
795	C-3区 中世 上面	竖堀1 埋土6	瓦器 小皿	6.4	1.1	4.8	-	一部 残存	灰白色	-	小型。見込はナデ。口縁部は横ナデ。底部外面はナデ、指頭圧痕残る。全面に炭素吸着。	
796	C-3区 中世 上面	竖堀1 埋土6	備前焼 播鉢	-	(10.2)	-	-	片口 一部 残存	褐灰色	-	回転ナデ。片口と播目が一部残る。口縁部は四角。上下に僅かに摘む。	
797	C-3区 中世 上面	竖堀1 埋土7	備前焼 播鉢	-	(5.5)	-	-	一部 残存	褐灰色	-	回転ナデ。播目が一部残る。口縁部は四角。上下に僅かに摘む。	
798	C-3区 中世 上面	竖堀1 埋土7	金属製品 釘	全長 (3.7)	全幅 (0.4)	全厚 0.3	重量 0.8	頂部 欠損	-	-	鉄製。小型。頂部はL字形、薄い。身部断面は方形。先端は細く尖る。	
799	C-3区 中世 上面	竖堀1 埋土7	金属製品 釘	全長 (3.1)	全幅 (0.5)	全厚 0.3	重量 0.9	頂部 一部 欠損	-	-	鉄製。小型。頂部はL字形、薄い。身部断面は方形。先端は細く尖る。	
800	C-3区 中世 上面	竖堀1 埋土7	金属製品 釘	全長 (3.7)	全幅 (0.7)	全厚 0.3	重量 0.7	先端 欠損	-	-	鉄製。小型。頂部はL字形、薄い。身部断面は方形。	

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
801	C-3区 中世 上面	竪堀1 埋土7	金属製品 釘	全長 (4.6)	全幅 (0.9)	全厚 0.5	重量 3.4	先端 欠損	-	-	鉄製。小型。頂部はL字形、薄い。身部断面は 方形。	
802	C-3区 中世 上面	竪堀1 埋土7	金属製品 釘	全長 (4.4)	全幅 (0.8)	全厚 0.4	重量 3.7	一部 欠損	-	-	鉄製。中型。頂部はL字形。身部断面は方形。	
803	C-3区 中世 上面	竪堀1 埋土7	金属製品 釘	全長 (6.3)	全幅 (0.7)	全厚 0.6	重量 7.5	両端 欠損	-	-	鉄製。中型。頂部はL字形、薄い。身部断面は 矩形。	
804	C-3区 中世 上面	竪堀1 埋土7	金属製品 釘	全長 (10.5)	全幅 (0.9)	全厚 0.6	重量 33.2	両端 欠損	-	-	鉄製。大型。頂部はL字形。身部断面は矩形。	
805	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	土師質 土器 小皿か	4.1	1.3	3.2	-	ほぼ 完存	褐灰色	-	小型。著しく摩耗し調整不明。底部厚い。口 縁部は短い。	
806	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	東播系 須恵器 片口鉢	23.9	(3.1)	-	-	一部 残存	灰褐色	-	回転ナデか、全面に煤付着、調整不明。	
807	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	瓦質土器 鍋	21.4	(4.7)	-	21.4	一部 残存	灰白色	-	粘土帯巻き上げ成形か。内面は横方向のハ ク。口縁部は横ナデ。胴部外面はナデ、指頭 圧痕残る。口縁端部は四角。	
808	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	白磁 皿	11.6	(2.2)	-	-	一部 残存	灰白色	白磁釉	端反形。	
809	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	青花 皿	12.9	(1.8)	-	-	1/3	灰白色	透明釉	端反形。内面に圏線、外面に唐草文と圏線の 染付。	
810	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	青花 皿	13.4	(2.5)	-	-	1/5	灰白色	透明釉	端反形。内面に圏線、見込に文様の一部、外 面は唐草文と圏線の染付。	
811	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	青花 皿	13.3	(2.0)	-	-	1/6	灰白色	透明釉	端反形。内面に幅太の圏線、外面は丁寧な唐 草文と圏線の染付。	
812	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	青花 皿	13.5	3.1	8.4	-	1/3	灰白色	透明釉	端反形。見込に玉取獅子文と圏線、内面に圏 線、外面に唐草文と圏線の染付。高台内に放 射状の鉋痕。畳付は無釉。	
813	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	青花 皿	13.1	3.1	7.5	-	4/5	灰白色	透明釉	端反形。見込は玉取獅子文と圏線、内面に圏 線、外面は唐草文と圏線の染付。高台内に放 射状の鉋痕。畳付は無釉。	
814	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	金属製品 釘	全長 (3.8)	全幅 (0.9)	全厚 0.4	重量 3.9	先端 欠損	-	-	鉄製。小型。頂部はL字形。身部断面は方形。	
815	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土1	金属製品 釘	全長 (8.1)	全幅 (1.2)	全厚 0.7	重量 12.2	両端 欠損	-	-	鉄製。大型。身部断面は方形。	
816	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土2	土師質 土器 杯	-	(2.0)	6.0	-	1/2	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部の切り離しは摩耗し不明。	
817	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土2	土師質 土器 小皿	-	(1.3)	4.1	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
818	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土2	常滑焼 甕	42.0	(9.4)	-	-	一部 残存	灰色	外面自然釉	内面は回転ナデ。外面は不明。頸部は大きく 外反。口縁部は直立。口縁縁部幅4.5cm。	
819	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土2	青花 碗	-	(3.1)	-	-	体部 一部 残存	灰白色	透明釉	内面に染付の一部。外面は唐草文かと圏線 の染付。	
820	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土2	土製品 土錘	全長 4.7	全幅 1.3	全厚 1.1	重量 5.3	完存	黒褐色	-	紡錘形。全面ナデ。全面黒斑。孔径0.4cm。	
821	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土2	金属製品 鏃	全長 (6.3)	全幅 (1.6)	全厚 0.5	重量 5.5	2/3	-	-	鉄製。身部は板状、菱形か。基部断面は方形。	
822	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土2	金属製品 釘	全長 7.0	全幅 0.8	全厚 0.7	重量 7.4	ほぼ 完存	-	-	鉄製。大型。頂部はL字形か、薄い。身部断面 は方形。先端尖る。	
823	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土2	金属製品 釘	全長 9.4	全幅 0.6	全厚 0.5	重量 4.8	ほぼ 完存	-	-	鉄製。身部断面は方形。先端が細く尖る。	
824	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土4	石製品 砥石	全長 (6.2)	全幅 (1.9)	全厚 (3.0)	重量 39.5	一部 残存	-	-	角錐形。4面を使用。破片を再利用、剖面も 使用。上端と下端に横方向の浅い擦痕、両側 面に縦方向の深い擦痕。	粘板岩か
825	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土6	土師質 土器 杯	-	(1.1)	5.3	-	底部 完存	橙色	-	小型。回転ナデ。底部は回転糸切り。	

遺物観察表34

図版番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 葉	調整・文様・特徴	備 考
826	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土6	古瀬戸 碗	-	(4.3)	-	-	一部 残存	灰白色	灰釉	平碗。口縁端部は細い。	
827	C-4d区 中世 上面	SX-2 埋土6	常滑焼 甕	-	(9.1)	42.0	-	一部 残存	灰褐色	見込自然釉	見込は調整不明。内面は横方向のナデ。胴部 外面は縦方向のハケと横方向のナデ。底部 外面はナデと板ナデ。	
828	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土6	土製品 土鍾	全長 4.1	全幅 1.0	全厚 1.0	重量 3.0	完存	にぶい 橙色	-	紡錘形。全面ナデ。孔径0.4cm。	
829	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土6	金属製品 釘	全長 (8.1)	全幅 (2.3)	全厚 0.6	重量 20.1	先端 欠損	-	-	鉄製。大型。頂部はL字形。薄い。身部断面は 矩形。錆化著しく形状不明瞭。	
830	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土9	石製品 五輪塔	全高 19.2	全幅 30.0	全厚 27.6	重量 31000 kg	ほぼ 完存	-	-	地輪。全面に加工痕。下面は粗い加工、凹凸 が著しい。上面中央部は摩耗、平滑。	砂岩
831	C-3区 中世 上面	SX-2 埋土10	石製品 五輪塔	全高 12.7	全幅 24.2	全厚 24.3	重量 13025 kg	完存	-	-	火輪。小型。笠部先端は僅かに反り、丸い。上 面中央に円形の柄穴、加工痕は側面が斜方 向、下面が線状。上下面中央は摩耗、平滑。	砂岩
832	C-3区 中世 上面	P-45	瓦質土器 鍋	21.8	(6.4)	-	24.0	1/2	灰白色	-	粘土帯巻き上げ成形か。口縁部は横ナデ。胴 部は内面が横方向のハケ、外面がナデ、指頭 圧痕残る。	
833	C-3区 中世 上面	P-50	土師質 土器 杯	11.5	(3.0)	-	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデ。	
834	C-3区 中世 上面	P-50	土師質 土器 小皿	6.1	2.0	3.8	-	一部 欠損	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部の一部 に僅かに煤付着。	
835	C-3区 中世 上面	P-55	青花 碗	-	(2.7)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	端反形。内面に圏線、外面に唐草文と圏線の 染付。	
836	C-3区 中世 上面	P-61	青磁 碗	10.3	(4.2)	-	-	一部 残存	灰白色	透明感ある 青磁釉	小振り。内面に文様の一部。外面はへら描の 細蓮弁文。	中国産 龍泉窯系
837	C-4区 中世 上面	竖堀2 上層	土師質 土器 杯	-	(1.8)	5.6	-	1/8	にぶい 橙色	-	内面の調整と底部切り離しは摩耗し不明。 外面は回転ナデ。体部は稜を持つ。	
838	C-4区 中世 上面	竖堀2 上層	東播系 須恵器 片口鉢	21.7	(3.3)	-	-	一部 残存	褐灰色	-	口縁部は玉縁状。回転ナデか、被熱し調整不 明。内外面に煤付着。	
839	C-4区 中世 上面	竖堀2 下層	備前焼 壺	-	(10.3)	-	23.0	1/3	にぶい 黄橙色	外面自然釉	内面は胴部が斜方向のハケのちナデ、肩部 から頸部は横方向のナデ、指頭圧痕残る。外 面は回転ナデ、肩部に2条の沈線が2段巡る。	
840	C-4区 中世 上面	竖堀2 下層	白磁 香炉	11.3	(5.0)	-	最大径 13.6	1/8	灰色	透明感ない 白磁釉	口縁部は受け口状。釉は厚い。841と同一個 体か。	
841	C-4区 中世 上面	竖堀2 下層	白磁 香炉	-	(4.5)	8.0	-	1/8	濃い 灰色	透明感ない 白磁釉	平底か。若干の歪み。釉は厚い。840と同一個 体か。	
842	C-5区 中世 上面	堀1 埋土1	備前焼 播鉢	-	(3.6)	-	-	一部 残存	灰褐色	-	回転ナデ。僅かに播目。口縁部は四角、上下 に揃む。	
843	C-5区 中世 上面	堀1 埋土1	常滑焼 甕	-	(9.9)	-	-	肩部 残存	灰黄 褐色	外面肩部 自然釉	横方向のナデ、外面肩部は釉で不明瞭。胴部 外面に押印文。	
844	C-5区 中世 上面	堀1 埋土1	常滑焼 甕	-	(23.6)	-	-	肩部 残存	灰褐色	外面自然釉	内面は横方向のナデ、一部に縦方向のナデ。 外面は横方向のナデ、肩部にへら描の記号 の一部残る。	
845	C-5区 中世 上面	堀1 埋土1	常滑焼 甕	-	(15.4)	29.6	-	1/8	にぶい 橙色	-	内面は横方向の板ナデ及び横方向のナデ。外 面は縦方向の板ナデのち横方向のナデ。底部 外面は板ナデのちナデ。	
846	C-5区 中世 上面	堀1 埋土1	白磁 杯	-	(1.7)	3.4	-	1/3	淡黄色	内面から 高台外面 白磁釉	高台は残存部で3箇所を弧状に扶る。置付と 高台内は無釉。胎土は透明感ない。	
847	C-5区 中世 上面	堀1 埋土1	青磁 皿	-	(1.3)	7.2	-	1/4	灰白色	内面から 体部外面 青磁釉	平底。見込に櫛描のジグザグ文。底部外面は ケズリ、釉を掻き取る。体部は屈曲。	中国産 同安窯系
848	C-5区 中世 上面	堀1 埋土1	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	重量 3.6	完存	橙色	-	上面と側面は型成形。上面に型押の「福」字。 下面はナデ。	
849	C-5区 中世 上面	堀1 埋土2	備前焼 壺	-	(5.1)	-	-	肩部 残存	灰黄色	外面自然釉	内面は回転ナデ。外面は回転ナデか、釉のた め不明、沈線が2条巡る。	
850	C-5区 中世 上面	堀1 埋土2	備前焼 壺	-	(5.2)	11.0	-	1/8	灰赤色	-	平底。回転ナデ。底部外面は無調整。	

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉薬	調整・文様・特徴	備考
851	C-5区中世上面	堀1埋土2	常滑焼甕	-	(14.5)	30.5	(41.8)	1/6	灰黄褐色	-	内面は横方向の板ナデ及び横方向のナデ。外面は縦方向の強いナデ。底部外面はナデ。	
852	C-5区中世上面	堀1埋土2	常滑焼甕	-	(8.3)	42.7	-	1/4	にぶい 橙色	-	内面はナデ。胴部下部は横方向の強いナデ。外面は縦方向のヘラナデ。胴部下部は横方向のナデ。底部外面は粗いナデ。	
853	C-5区中世上面	堀1埋土2	常滑焼甕	-	(5.2)	52.6	-	一部 残存	灰白色	-	見込は横方向のナデ。胴部は内面が横または縦方向のヘラナデ。外面は縦方向のヘラナデ。一部に横方向のナデ。底部外面はナデ。	
854	C-5区中世上面	堀1埋土2	近世陶器壺	11.6	(8.5)	-	19.8	1/5	灰白色	灰釉か	回転ナデか、釉のため不明。外面に櫛描文が2条。肩部は大きく張る。口縁部は短く直立。端部は四角、肥厚。	
855	C-5区中世上面	堀1埋土2	近世磁器碗	10.8	5.8	3.9	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	端反形。見込は松葉と圏線。内面は雷文かの文様と圏線。外面に扇文と木賊文かの文様と圏線の染付。畳付は釉ハギ、砂付着。	瀬戸・美濃系 1820年代～幕末
856	C-5区中世上面	堀1埋土2	近世磁器紅皿	4.6	(1.2)	-	-	1/3	灰白色	内面から 口縁部外面 白磁釉	型押成形。外面は型で貝殻状の文様。	肥前産 江戸後期
857	C-5区中世上面	堀1埋土2	瓦平瓦	全長 (13.0)	全幅 (14.5)	全高 (4.0)	重量 502.0	一部 残存	灰白色	-	凹凸面は縦または横方向のナデ。キラ粉。側面に「御瓦師」の刻印。瓦厚2.0cm。	
858	C-5区中世上面	堀1埋土2	瓦平瓦	全長 (6.5)	全幅 (6.5)	全高 (2.3)	重量 65.0	一部 残存	灰白色	-	凹凸面は縦または横方向のナデ。キラ粉。側面に方形枠内に「や(ヤ)ス□」の刻印。A区105の「や(ヤ)ス孫」と同じ刻印か。瓦厚1.7cm。	高知県香南市 夜須町産
859	C-5区中世上面	堀1埋土3	備前焼播鉢	28.9	(4.9)	-	-	一部 残存	灰黄色	-	回転ナデ。播目残る。口縁端部は四角、上方に揃む。	
860	C-5区中世上面	堀1埋土3	備前焼甕	32.6	(7.6)	-	-	1/4	褐灰色	外面自然釉	口縁部は玉縁。回転ナデ。頸部は直立。	
861	C-5区中世上面	堀1埋土4	土師器甕	-	(3.3)	-	-	一部 残存	にぶい 黄褐色	-	横ナデ。口縁端部は中央が凹む。	
862	C-5区中世上面	堀1埋土4	土師器釜	-	(3.1)	-	-	一部 残存	橙色	-	小さな鐙を貼付。断面は三角形。横ナデ。外面に煤付着。	
863	C-5区中世上面	堀1埋土4	土師器甕か	34.0	(5.4)	-	-	一部 残存	にぶい 黄褐色	-	内面はナデ。口縁部は横ナデのち外面に横方向のハケ。頸部外面は横方向のナデ。頸部は「く」の字状に屈曲。	
864	C-5区中世上面	堀1埋土4	土師器火鉢	15.3	7.9	14.5	16.3	完存	橙色	-	浅鉢形。胴部は型成形。外面に型押の波文。見込と内面は回転ナデ。底部外面はナデ。円柱形の低い脚を3箇所に貼付。	江戸後期
865	C-5区中世上面	堀1埋土4	土師器焙烙	42.9	(3.7)	-	-	一部 残存	にぶい 黄色	-	内面から口縁端部は回転ナデ。外面は調整不明。煤付着。口縁端部は肥厚、面は凹む。	讃岐産 御殿系 19世紀～幕末
866	C-5区中世上面	堀1埋土4	須恵器甕	-	(7.6)	16.4	-	一部 残存	灰白色	-	内面はヘラナデ及びナデ。外面は平行タタキ残る。底部外面はナデか。	
867	C-5区中世上面	堀1埋土4	備前焼甕	32.0	(6.2)	-	-	1/8	灰黄色	口縁部自然釉	口縁部は玉縁状。断面は楕円形。回転ナデ。頸部は直立。	
868	C-5区中世上面	堀1埋土4	常滑焼甕	-	(11.7)	33.0	-	1/4	にぶい 赤褐色	-	内面は見込から胴部下部まで横方向のナデ。胴部上部が横方向のヘラナデのち縦方向のナデ。外面と底部外面はナデ。	
869	C-5区中世上面	堀1埋土4	常滑焼甕	-	(4.0)	42.6	-	一部 残存	灰赤色	-	内面は見込が横方向のナデ。胴部は横方向の板ナデ。外面は横方向のナデ。底部はナデ。一部に板ナデ。	
870	C-5区中世上面	堀1埋土4	近世磁器蓋	9.2	3.3	摘径 3.8	-	3/5	灰白色	透明釉	端反形。内面に岩、樹、水文、雷文帯。外面は海浜風景文と漢詩の染付。摘み内は方形枠に「茶」銘と圏線の染付。端部は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
871	C-5区中世上面	堀2埋土1	瓦器椀	15.1	4.7	3.6	-	1/8	灰白色	-	高台は貼付。断面は台形。内面はナデ。僅かにミガキ。不明瞭。外面は口縁部に横ナデを2段。体部にナデ。指頭圧痕。	和泉型
872	C-5区中世上面	堀2埋土1	青白磁合子蓋	5.1	(1.7)	-	-	1/6	灰白色	口縁部 内面除き 淡い青磁釉	型押成形。口縁部外面は型で蓮弁文。天井部は型で陽出の花文か。口縁部は直立。天井部は平ら。	
873	C-5区中世上面	堀2埋土4	土師質土器杯	-	(1.7)	7.8	-	2/3	浅黄 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	
874	C-5区中世上面	堀2埋土7	土師質土器椀	-	(1.8)	6.0	-	1/2	橙色	-	平高台。摩耗し調整不明。底部は回転糸切り。底部の器壁厚い。	
875	C-5区中世上面	堀2埋土7	土師質土器椀	-	(1.9)	6.4	-	1/2	灰白色	-	輪高台を貼付。断面は台形。内面は丁寧なナデ及びヘラナデ。体部外面は回転ナデ。高台内はナデ。	

遺物観察表36

図版番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
876	C-5区 中世 上面	堀2 埋土7	須恵器 甕	-	(6.7)	14.5	-	1/6	灰白色	-	平底。内面は横方向のナデ。外面は回転ナデのち上部に斜方向の平行タタキ、下部に回転ケズリ。底部はナデ、粗い砂付着。	
877	C-5区 中世 上面	堀2 埋土7	東播系 須恵器 片口鉢	28.0	(3.7)	-	-	一部 残存	灰白色	-	回転ナデ。器壁薄い。口縁部は僅かに肥厚、上方へ揃む。	
878	C-5区 中世 上面	堀2 埋土7	白磁 碗	-	(3.4)	7.4	-	1/4	灰白色	内面から 外面体部上部 白磁釉	外面体部下部から底部は削り出し、無釉。高台は太く、低い。	
879	C-5区 中世 上面	堀2 埋土9	土師質 土器 椀	-	(2.4)	5.4	-	底部 ほぼ 完存	褐灰色 砂粒多	-	杯を椀に変形。輪高台を貼付、断面は台形。回転ナデか、内面は摩耗し不明。高台内はナデか。底部の器壁厚い。	
880	C-5区 中世 上面	堀2 埋土9	瓦質土器 釜	19.1	(3.2)	-	最大径 26.7	一部 残存	灰白色	-	幅広の銚を斜上方に貼付。内面は横方向のハケ及びナデ。口縁部は横ナデ。銚下面は摩耗し不明、煤付着。	和泉・河内型 畿内産
881	C-5区 中世 上面	堀2 埋土11	土師器 釜	-	(3.5)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	口縁部は横ナデ。頸部は横方向のナデ。外面に煤付着。頸部は大きく湾曲、外反。口縁端部は内傾、短く伸びる。	紀伊型
882	C-5区 中世 上面	堀2 埋土13	土師質 土器 杯	-	(2.0)	4.4	-	底部 完存	灰白色	-	柱状高台。回転ナデ。底部は回転糸切り。見込は大きく落ち込む。	
883	C-5区 中世 上面	堀2 埋土15	土師質 土器 杯	-	(1.9)	7.0	-	1/4	黒色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	
884	C-5区 中世 上面	堀2 埋土15	土師質 土器 杯	-	(1.6)	5.3	-	底部 完存	にぶい 黄橙色	-	回転ナデか、摩耗し不明瞭。底部は回転糸切り。底部の器壁厚い。径は小さい。	
885	C-5区 中世 上面	堀2 埋土15	土師器 鍋	34.9	(6.3)	-	-	一部 残存	灰黄 褐色	-	口縁部は横ナデ。胴部は横方向のナデ、外面に指頭圧痕。口径は大きい。口縁部は僅かに内湾。	
886	C-5区 中世 上面	堀2 埋土19	土師質 土器 小皿	7.9	1.9	5.8	-	1/3	浅黄 橙色	-	回転ナデか、摩耗し不明瞭。底部は回転糸切り。口縁部は僅かに外反。	
887	C-5区 中世 上面	堀2 埋土19	古瀬戸 瓶子 または壺	-	(7.1)	-	20.7	胴部 残存	灰白色	外面灰釉	内面は横方向の粗いナデ、無釉。外面上部に櫛指文。	
888	C-5区 中世 上面	堀2 埋土20	土師質 土器 皿	-	(2.3)	-	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ、外面体部下部にケズリ。外面は黒斑。口縁部は緩やかに外反。	
889	C-3区 近世	P-63	瓦質土器 火鉢	14.2	8.2	14.4	最大径 16.5	完存	灰色	-	浅鉢形。胴部は型成形。内面は回転ナデのち見込中央部にナデ。底部外面はナデ、円柱形の低い脚を3箇所に貼付。	近世
890	C-3区 近世	P-63	瓦 棧瓦	全長 (16.6)	全幅 (14.6)	全高 (2.6)	重量 529.0	1/4	灰白色	-	凹凸面はナデ。瓦厚1.7cm。	
891	C-3区 近世	P-65	瓦質土器 火鉢	14.5	8.4	16.6	最大径 17.2	ほぼ 完存	灰白色	-	浅鉢形。胴部は型成形。内面は回転ナデのち口縁部に横ナデ。底部外面は無調整、円柱形の低い脚を3箇所に貼付。	近世
892	C-3区 近世	P-65	瓦 棧瓦	全長 (15.1)	全幅 (25.3)	全高 (7.7)	重量 926.0	1/2	灰白色	-	隅に切り込み。凹凸面は縦または横方向のナデ。側面に方形枠内に「□イ松」かの刻印。瓦厚1.7cm。	
893	C-3区 近世	P-66	瓦質土器 火鉢	16.8	8.0	16.9	最大径 17.8	ほぼ 完存	暗灰色	-	浅鉢形。胴部は型成形。外面は型押で雷文。内面は回転ナデのち見込中央部にナデ。底部外面に円柱形の低い脚を3箇所に貼付。	近世
894	C-3区 近世	P-67	近世陶器 合子蓋	7.7	(0.8)	-	-	一部 残存	灰白色	外面灰釉	回転ナデ。口縁部直立。天井部は平ら。	
895	C-3区 近世	P-67	近世磁器 皿	-	(2.6)	-	-	一部 残存	灰白色	透明感ない 白磁釉	菊皿。内外面は型で菊弁状の文様。	
896	C-5区 近世	SK-3	土師質 土器 椀	-	(1.2)	6.8	-	1/4	灰黄色	-	輪高台を貼付、断面は方形。著しく摩耗し調整不明。	
897	C-5区 近世	SK-3	土師器 甕	33.8	(3.9)	-	-	一部 残存	橙色	-	内面から口縁端部外面は横ナデ、口縁部外面は横方向のハケ。	
898	C-5区 近世	SD-1	土師質 土器 椀	-	(2.3)	-	-	1/6	灰色	-	輪高台を貼付、断面は台形。著しく摩耗し調整不明。底部と体部の境目は器壁厚い。	
899	C-5区 近世	SD-3	近世陶器 碗	11.6	8.6	5.9	最大径 12.8	1/4	灰白色	内面から 体部外面灰釉	半球形。体部外面下部は回転ケズリ。高台と高台内は無釉。見込の1箇所にピン痕か。高台断面は方形。	
900	C-5区 近世	SD-3	近世陶器 皿	9.3	2.5	4.0	-	1/2	灰白色	内面から 口縁部外面 灰釉	小型。平底。体部外面は回転ケズリ。口縁部に煤付着。口縁部は内湾。灯明皿として使用か。	

図版番号	調査区遺構面	出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
901	C-5区 近世	SD-3	近世磁器 碗	8.0	(3.4)	-	-	1/4	灰白色	透明釉	小丸形。外面に鳥文の染付。	肥前産 18世紀前半
902	C-5区 近世	SX-4	土師質 土器 碗	-	(1.9)	6.2	-	1/4	浅黄 橙色	-	輪高台を貼付。断面は半円形。著しく摩耗し調整不明。底部と体部の境目は器壁厚い。	
903	C-5区 近世	SX-4	瓦器 小皿	7.8	2.1	3.4	-	1/3	灰白色	-	見込はナデのちミガキ。口縁部は横ナデ。底部外面はナデ。全面に炭素吸着。	
904	C-5区 近世	SX-4	白磁 碗	14.7	(4.1)	-	-	1/8	灰白色	内面から 口縁部外面 白磁釉	口縁部は玉縁。体部外面は回転ナデ。無釉。	
905	C-5区 近世	SX-4	青磁 碗	-	(2.9)	4.2	-	底部 完存	灰白色	内面から 高台内側 青磁釉	高台内はケズリ。無釉。見込は花文に「福」字のスタンプ文。底径は小さい。底部の器壁厚い。釉は淡い緑色。	中国産 龍泉窯系
906	C-5区 近世	SX-4	青磁 小皿	7.3	2.5	3.6	-	1/2	灰白色	灰オリーブ色 の青磁釉	高台内はケズリ。無釉。見込に圏線と花文のスタンプ。高台内に鉋痕。釉は厚い。口縁は内湾。端部は肥厚。丸い。	中国産 龍泉窯系
907	C-5区 近世	SX-4	近世陶器 碗	-	(2.4)	3.9	-	1/4	灰白色	内面から 体部外面鉄釉	唐津系陶器。底部外面は回転ケズリ。無釉。高台は低く、太い。	肥前産 16世紀末～ 17世紀初
908	C-5区 近世	SX-4	近世陶器 碗	-	(5.0)	5.4	-	底部 ほぼ 完存	灰黄色	灰釉 御本が入る	外面に鉄錆の文様の一部。見込にピン痕5箇所。畳付は釉ハギ。	
909	C-5区 近世	SX-4	近世陶器 碗	-	(2.5)	5.8	-	底部 完存	灰白色	白化粧土のち 透明釉	広東形。陶胎染付。太白手。外面に圏線と染付の一部。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃系 1780年代以降
910	C-5区 近世	SX-4	近世陶器 皿	-	(1.7)	4.7	-	3/4	にぶい 赤褐色	内面から 体部外面灰釉	唐津系灰釉陶器。絵唐津。底部外面は回転ケズリ。無釉。見込に鉄錆の草文。胎土目痕残る。	肥前産 1590～1610年代
911	C-5区 近世	SX-4	近世陶器 片口鉢	22.0	11.8	11.7	21.0	一部 欠損	明褐 灰色	内面から 胴部外面鉄釉	口縁部はL字状。半筒形の注口貼付。底部外面は回転ケズリ。無釉。口縁端部は釉ハギ。見込にピン痕。	
912	C-5区 近世	SX-4	近世陶器 壺	23.7	(12.6)	-	33.4	1/6	褐灰色	-	焼締。口縁部は受け口状。回転ナデ。体部内面の一部にナデ。	
913	C-5区 近世	SX-4	近世陶器 甕	-	(6.3)	21.2	-	1/8	にぶい 黄橙色	底部外面 自然釉	見込はナデ。胴部内面に同心円状の当て具痕。胴部外面はヘラナデ。横方向のヘラ状工具のナデまたはケズリの痕跡。	
914	C-5区 近世	SX-4	近世磁器 碗	-	(4.6)	6.1	-	1/2	灰白色	透明釉	広東形。見込に火焔文か、内面に圏線。外面に土坡に草文と圏線の染付。高台内に「サ」銘。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
915	C-5区 近世	SX-4	近世磁器 中皿	-	(2.1)	6.2	-	1/4	灰白色	青磁釉	青磁染付。碁笥底。見込に梅樹かの染付。畳付は釉ハギ。砂付着。底径は小さい。	波佐見産か
916	C-5区 近世	SX-4	瓦 棧瓦	全長 27.0	全幅 (23.7)	全高 (7.1)	重量 1.548 kg	2/3	灰白色	-	隅に切り込み。凹凸面は縦方向または横方向のナデ。キラ粉。側面に「徳常」の刻印。瓦厚2.0cm。	
917	C-5区 近世	SX-4	石製品 石斧	全長 12.1	全幅 5.9	全厚 2.0	重量 267.6	一部 欠損	-	-	扁平片刃石斧。基部は「ハ」の字状。刃部は弧状。僅かに使用痕。摩耗。	弥生時代 貝谷か
918	C-5区 近世	SX-4	金属製品 銭貨	銭径 2.13	内径 1.85	銭厚 0.12	重量 1.6	完存	-	-	銅製。寛永通寶。新寛永。湾曲。孔径0.66cm。	1697年以降
919	D区 堆積層	第1-1層	近世磁器 碗	-	(2.8)	-	-	1/4	灰白色	透明釉 貫入が入る	広東形。内面に圏線1条。見込は「寿」字か、外面に土坡と圏線の染付。高台内に「サ」銘。	能茶山窯 1820年代～幕末
920	D区 堆積層	第1-20層	近世磁器 鉢	-	(6.4)	8.2	-	1/4	灰白色	青磁釉	高台内は蛇ノ目釉ハギ。底部の器壁厚い。	肥前産 17世紀後半か
921	D区 堆積層	第2-1層	瓦質土器 釜	-	(4.8)	-	最大径 24.4	一部 残存	明褐 灰色	-	幅広の鑊を水平に貼付。内面は横方向のナデ。口縁部外面は板ナデか。鑊は横方向のナデ。胴部外面は横方向のヘラケズリ。	和泉・河内型 畿内産
922	D区 堆積層	第2-3層	土師器 釜	-	(3.3)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	鑊は小さく。断面は三角形。内面から鑊上面は横方向のナデ。鑊下面は煤付着。調整不明。口縁部は内傾。端部は四角。	播磨型
923	D区 堆積層	第2-3層	須恵器 碗	-	(1.2)	4.6	-	1/4	灰色	-	平高台。回転ナデのち内面はミガキ。底部は回転糸切り。器壁は薄い。	
924	D区 堆積層	第2-4層	木製品 漆器蓋	11.2	2.8	摘径 5.5	-	一部 欠損	-	内面赤塗 外面黒塗	外面は朱色の花文。摘み内は朱色で松葉文。内面は無文。摘みは低く直立。	
925	D区 堆積層	第2-5層	木製品 鑊か	全長 6.6	全幅 6.6	全厚 1.4	-	完存	-	-	板状。円形。中央に長径2.5cm、短径2.2cmの楕円形の孔。側面は横方向に加工。	榎目

遺物観察表38

図版 番号	調査区 遺構面	出土 地点	器種 器形	口径	器高	底径	胴径	残存	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
926	D区 堆積層	第2-6層	土製品 土錘	全長 5.2	全幅 1.6	全厚 1.5	重量 9.7	完存	淡赤 橙色	-	紡錘形。全面ナデか、摩耗し不明瞭。孔径0.5cm。	
927	D区 堆積層	第2-6層	金属製品 銭貨	銭径 2.29	内径 1.93	銭厚 0.19	重量 2.7	完存	-	-	銅銭。洪武通寶。無背。孔径0.56cm。	初鑄造年 1368年
928	D区 堆積層	第2-30層	備前焼 播鉢	34.4	(5.2)	-	-	一部 残存	灰褐色	口縁部外面 自然釉	回転ナデ。口縁部外面に重ね焼痕。播目なし。器壁薄い。口縁部は直立。	
929	D区 堆積層	第2-30層	青磁 碗	-	(2.1)	5.2	-	1/4	灰白色	高台外面まで 青味を帯びた 青磁釉	見込に僅かにスタンプ文。高台内と畳付は削り出し、無釉。底部の器壁厚い。高台は低く、断面は方形。	
930	D区 堆積層	第2-30層	近世陶器 皿	-	(3.1)	7.9	-	1/5	にぶい 黄橙色	内面から 外面体部上部 灰釉	外面体部下部から高台内は回転ケズリ、無釉。高台断面は台形。	江戸後期か
931	D区 堆積層	第2-30層	近世陶器 鉢か	-	(5.3)	-	-	胴部 一部 残存	黄灰色	内外面緑釉	外面に印花文、押圧により一部凹む。	瀬戸・美濃産 江戸後期
932	D区 堆積層	第2-30層	木製品 不明	全長 22.1	全幅 4.3	全厚 2.2	-	一部 欠損	-	-	滑車の一部か。板状、不整形。断面は五角形。両端に円孔。側面に貫通する円孔が2個。孔径0.8cm。基底部は平ら、上端は山形。	
933	D区 近世	SK-5	青磁 碗	-	(3.1)	-	-	一部 残存	灰白色	青味を帯びた 青磁釉	外面は口縁部直下に連続する弧線の線刻の細蓮弁文。口縁端部は丸い。	
934	D区 近世	SX-7	近世磁器 杯	7.6	(4.2)	-	-	1/4	白色	透明釉	端反形。外面に圏線と飛雲文かの染付。	肥前系
935	D区 近世	SX-7	石製品 砥石	全長 (18.3)	全幅 (5.4)	全厚 (7.6)	重量 939.9	一部 残存	-	-	割石を利用。残存部1面に使用痕。使用面の中央部は凹む。	塩基性凝灰岩
936	D区 近世	SX-7	木製品 不明	全長 23.3	全幅 4.5	全厚 2.0	-	ほぼ 完存	-	-	滑車の一部か。板状、不整形。1箇所に1.9cmの円孔。2箇所に1.3cmと1.6cmの方形の孔。断面は不整形方形。	

写真図版



A-1区下面遺構検出状態(北東より)



A-1区下面遺構完掘状態(北東より)



A-1区北壁セクション(南より)



A-2区遺構検出状態(東より)



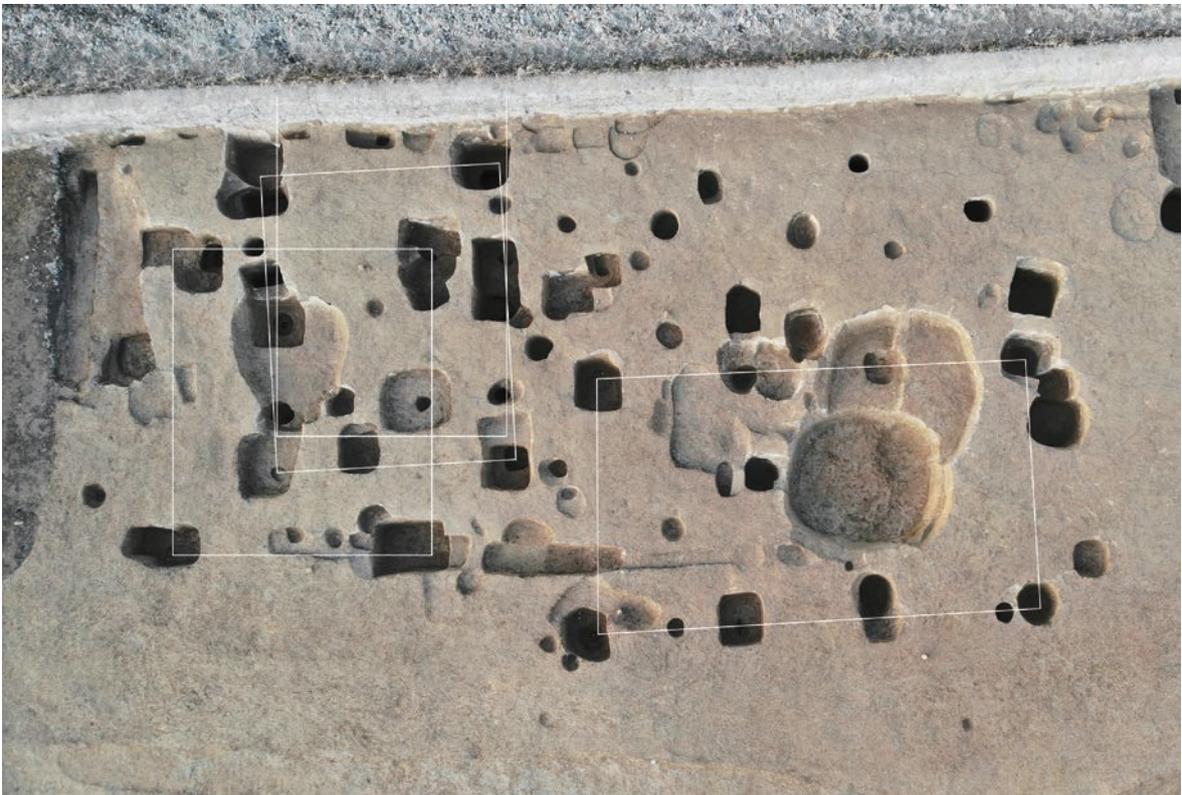
A-2区遺構完掘状態1(東より)



A-2区遺構完掘状態2(北上空より)



A-2区遺構完掘状態3(東上空より)



A-2区SB-7・8・10・11完掘状態(真上より)



A-2区SD-1完掘状態(西より)



A-2区SD-1バンクセクション(東より)



A-2区SD-1・2・4西壁セクション(東より)



A-3区上面遺構検出状態(西より)



A-3区上面遺構完掘状態(西より)



B-1区下面遺構検出状態(東上空より)

図版8



B-1区下面遺構完掘状態1(東上空より)



B-1区下面遺構完掘状態2(真上より)



B-1区上面遺構検出状態(東より)



B-1区上面遺構完掘状態1(東上空より)

図版10



B-1区上面遺構完掘状態2(西上空より)



B-1区北壁セクション(南より)



B-1区SB-12~15, SA-3~6完掘状態(真上より)



B-1区SD-20完掘状態(南より)

図版12



B-1区SD-20セクション(南より)



B-2区遺構完掘状態1(東上空より)



B-2区遺構完掘状態2(西上空より)



B-2区北壁セクション(南より)

図版14



C区中世下面遺構完掘状態1(北上空より)



C区中世下面遺構完掘状態2(北西より)



C区中世上面遺構完掘状態1(北西より)



C区中世上面遺構完掘状態2(北西上空より)



C区中世上面遺構完掘状態3(北西より)



C区中世上面遺構完掘状態4(北東より)



C-1区西バンクセクション(東より)



C-1区中世下面平場2遺構検出状態(南東より)



C-1区中世下面平場1・2遺構完掘状態(南東より)



C-1区堀切1完掘状態(西上空より)



C-1区堀切1セクション(西より)



C-1・2区中世上面曲輪1遺構完掘状態1(北西上空より)



C-1区中世上面曲輪1遺構完掘状態2(北上空より)



C-3区南壁セクション(北より)



C-3区西バンクセクション(北西より)



C-3区東バンクセクション(北より)



C-3区中世下面曲輪2遺構検出状態(北上空より)



C-3区SB-1完掘状態(北上空より)



C-3区中世上面遺構完掘状態(北上空より)



C-3区竪堀1セクション(西より)



C-3区通路状遺構完掘状態(北上空より)



C-3区SX-1・2完掘状態(北上空より)



C-4区東バンクセクション(北西より)



C-4a・4b区裾部遺構完掘状態(北より)



C-4c・4d区中世上面遺構完掘状態(西より)



C-4区豎堀2完掘状態(西より)



C-5区堀1, 土壘完掘状態(西より)



C-5区堀1 東部完掘状態(東より)



C-5区堀2完掘状態(北より)



C-5区堀1・2完掘状態1(北西上空より)



C-5区堀1・2完掘状態2(北上空より)



C-5区堀2セクション(南より)



C-5区堀2木材出土状態1(南より)



C-5区堀2木材出土状態2(南より)



D区遺構完掘状態(西上空より)



D区北壁セクション1(南西より)



D区北壁セクション2(南より)



D区SX-6吹出土状態(北西より)



D区SX-6呎③~⑤半裁状態(西より)



D区SX-7呎出土状態(東より)

図版34



A区調査前風景1(東より)



A区調査前風景2(西より)



A-1区上面遺構検出状態(西より)



A-1区上面遺構完掘状態(西より)



A-1区SB-2P-2完掘状態(北より)



A-1区SB-3P-1土師質土器皿(14・15)出土状態



A-1区SB-4・5完掘状態(東より)



A-1区SB-4P-2, SB-5P-2セクション(北西より)



A-1区SB-4P-3完掘状態(北より)



A-1区SB-4P-3セクション(東より)



A-1区SB-5P-3セクション(南より)



A-1区SB-9P-2セクション(南より)



A-1区SK-8セクション(東より)



A-1区SX-1セクション(南西より)



A-2区SB-8P-4セクション(西より)



A-2区SB-11P-1セクション(南より)



A-2区SK-20・21セクション(西より)



A-2区SD-1コーナー部完掘状態(西より)



A-2区SD-1南壁セクション(北より)



A-2区SD-1西壁セクション(東より)



A-2区SD-1 備前焼播鉢(27)出土状態



A-2区P-35セクション(南より)



A-3区北壁セクション(南西より)



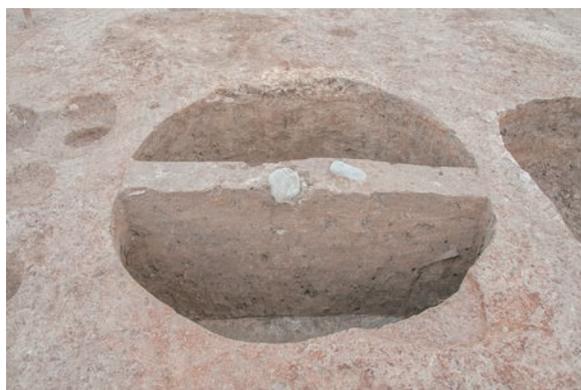
A-3区SK-26・27セクション(南東より)



A-3区SK-38焼土検出状態(南より)



A-3区SK-38セクション(南より)



A-3区SK-62セクション(西より)



A-3区SK-67青磁碗(86)出土状態



A-3区SX-5完掘状態(東より)



A-3区P-63集石検出状態(東より)



B-1区調査前風景(南東より)



B-2区調査前風景(南西より)



B-1区南壁セクション(北より)



B-1区SB-12P-1セクション(北より)



B-1区SB-12P-6セクション(南より)



B-1区SB-12P-7完掘状態(北より)



B-1区SB-12P-7セクション(東より)



B-1区SB-12P-8セクション(東より)



B-1区SB-12P-10, SK-90セクション(南より)



B-1区SB-12P-11セクション(北より)



B-1区SB-13P-1セクション(南より)



B-1区SB-13P-2セクション(南より)



B-1区SB-13P-3瀬戸・美濃陶器皿(334)出土状態



B-1区SB-13P-4, SB-16P-2完掘状態(西より)



B-1区SB-13P-4セクション(南より)



B-1区SB-14P-2, SD-35セクション(南より)



B-1区SB-14P-7セクション(南より)



B-1区SB-14P-8完掘状態(南西より)

図版40



B-1区SB-14P-9セクション(南より)



B-1区SB-15P-2セクション(南より)



B-1区SB-16P-2セクション(南より)



B-1区SB-16P-2須恵器壺(340)出土状態



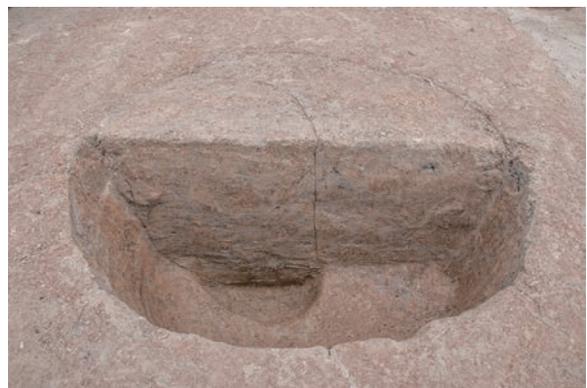
B-1区SA-5P-1セクション(北より)



B-1区SA-5P-3セクション(南より)



B-1区SA-6P-1セクション(東より)



B-1区SA-6P-5セクション(南より)



B-1区SK-79セクション(南より)



B-1区SK-81・82セクション(西より)



B-1区SK-83セクション(南より)



B-1区SK-84セクション(東より)



B-1区SK-89, SD-23等セクション(南より)



B-1区SK-99, P-116セクション(南より)



B-1区SK-116セクション(北西より)



B-1区SK-119セクション(東より)

図版42



B-1区SK-121完掘状態(南より)



B-1区SK-121, SD-36等セクション(東より)



B-1区SD-20・21完掘状態(南より)



B-1区SD-21・22セクション(南より)



B-1区SD-20上層土師質土器杯(199)出土状態



B-1区SD-20上層土師器釜(201)出土状態



B-1区SD-20上層遺物(206・215)出土状態



B-1区SD-20上層瓦質土器釜(211)出土状態



B-1区SD-25完掘状態(東より)



B-1区SD-25バンクセクション(西より)



B-1区SD-25・37完掘状態(西より)



B-1区SD-25・37バンクセクション(東より)



B-1区SD-26・31完掘状態(東より)



B-1区SD-28セクション(南より)



B-1区SD-35セクション(南より)



B-1区SD-35近世陶器碗(376)出土状態



B-1区SD-37土師質土器小皿(380)出土状態



B-1区SX-15土師質土器小皿(246)出土状態



B-1区P-99セクション(東より)



B-1区P-143セクション(南より)



B-1区P-155セクション(南より)



B-1区P-163セクション(北東より)



B-1区P-168セクション(南より)



B-1区P-183セクション(南より)



B-2区遺構検出状態1(東より)



B-2区遺構検出状態2(西より)



B-2区SR-1西部下層青花碗(319)出土状態



B-2区SR-1西部最下層常滑焼甕(323)出土状態



C区調査前風景1(西より)



C区調査前風景2(南東より)



C区伐採後風景1(西より)



C区伐採後風景2(北より)



C-1区中世下面曲輪1遺構完掘状態(北上空より)



C-1区南壁セクション(北より)



C-1区西バンクセクション(北西より)



C-1区西バンク第16層土師質土器杯(452)出土状態



C-1区西バンク第31層常滑焼甕(461)出土状態



C-1区堀切1完掘状態1(西より)



C-1区堀切1完掘状態2(南東より)



C-1区堀切1白磁皿(766)出土状態



C-1区堀切1 青磁皿(769)出土状態



C-1区堀切1 銅製品鞋(775)出土状態



C-1区P-14セクション(北より)



C-1区P-17完掘状態(南東より)



C-1区P-17炭化物検出状態(南東より)



C-1区P-34セクション(北より)



C-2区東バンクセクション(北西より)



C-3区東バンクセクション(北西より)



C-3区東壁セクション(西より)



C-3c区東バンク第6層土師質土器小皿(585)出土状態



C-3区SB-1P-2完掘状態(南より)



C-3区SB-1P-3完掘状態(西より)



C-3区SK-1炭化物検出状態(南より)



C-3区SK-1セクション(北東より)



C-3区SX-1完掘状態(東より)



C-3区SX-1セクション(北東より)



C-3区SX-1埋土2古瀬戸瓶子(787)出土状態



C-3区P-21セクション(南より)



C-3区P-22セクション(南より)



C-3区中世上面曲輪2遺構検出状態(東より)



C-3区中世上面焼土検出状態(北東より)



C-3区中世上面炭化物検出状態(西より)



C-3区SA-3P-6完掘状態(北より)



C-3区SA-3P-6セクション(北より)



C-3区通路状遺構検出状態(北より)



C-3区通路状遺構完掘状態(南より)



C-3区通路状遺構セクション(南より)



C-3区SX-2完掘状態(南より)



C-3区SX-2セクション(西より)



C-3区SX-2埋土1青花皿(812)出土状態



C-3区SX-2埋土2常滑焼甕(818)出土状態



C-3区SX-3集石検出状態(東より)



C-3区P-50土師質土器(833・834)出土状態



C-3区P-59セクション(北より)



C-3区P-62棧瓦(890)出土状態



C-3区P-62セクション(北西より)



C-3区P-63・64検出状態(南より)



C-3区P-65検出状態(西より)



C-4a区第10層炭化物検出状態(北西より)



C-4b区南壁第10層瓦質土器鍋(614)出土状態



C-4a区南壁第10層常滑焼甕(617)出土状態



C-4a区南壁第10層土製品土錘(622・624)出土状態



C-4a区南壁第17層銅製品切羽(652)出土状態



C-4a区南壁第17層銅製品鯉口金具(653)出土状態



C-4区豎堀2検出状態(西より)



C-4区豎堀2セクション(西より)



C-4区豎堀2下層白磁香炉(841)出土状態



C-5区東バンク第1・2層瓦質土器火鉢(725)出土状態



C-5区土塁セクション(北西より)



C-5区堀1完掘状態(東より)



C-5区堀1セクション1(西より)



C-5区堀1セクション2(東より)



C-5区堀2セクション(北西より)



C-5区堀2木材出土状態1(西より)



C-5区堀2木材出土状態2(南より)



C-5区堀2東播系須恵器片口鉢(877)出土状態

図版54



D区調査前風景(西より)



D区遺構検出状態(西より)



D区北壁セクション1(南より)



D区北壁セクション2(南より)



D区トレンチ北壁セクション(南東より)



D区第2-4層木製品漆器蓋(924)出土状態



D区第2-30層備前焼播鉢(928)出土状態



D区第2-30層集石出土状態(南東より)



D区SX-6 ①・②出土状態(西より)



D区SX-6 ②出土状態(北より)



D区SX-6 ③～⑤出土状態(南西より)



D区SX-6 ③・④出土状態(南より)



D区SX-6 ③結目出土状態(南より)



D区SX-6 ④・⑤出土状態(南より)



D区SX-6 ⑤出土状態(南より)



D区SX-7 出土状態(北東より)



土師器(釜), 古瀬戸(壺または瓶子), 備前焼(播鉢), 近世磁器(大皿・瓶)



497



609



617



655



813



925

古瀬戸(水注か), 備前焼(挿鉢), 常滑焼(甕), 青花(皿), 木製品(鐙か)



土師器(甕か), 須恵器(椀), 瓦質土器(釜), 青磁(碗), 青花(碗・皿), 近世磁器(蓋)

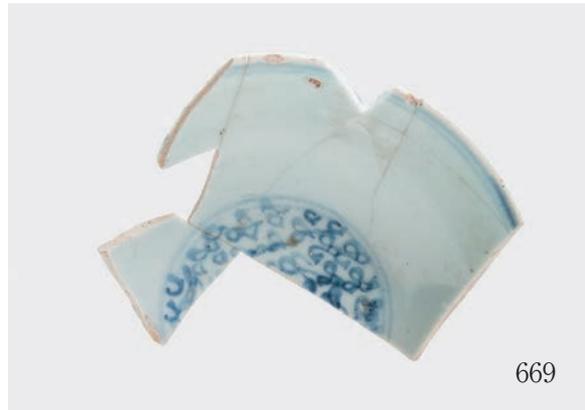


土師器(釜), 瓦質土器(播鉢・風炉または火鉢), 常滑焼(甕), 白磁(皿), 近世陶器(碗)

図版60



土師質土器(杯), 備前焼(挿鉢), 常滑焼(甕), 近世磁器(色絵碗), 金属製品(切羽)

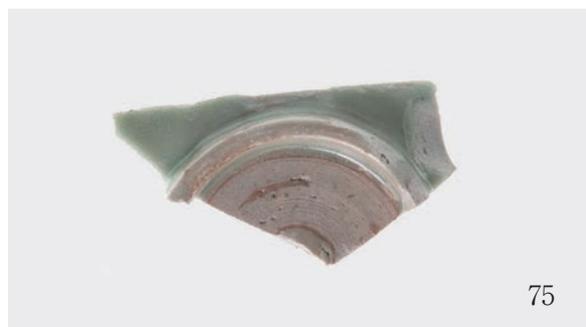
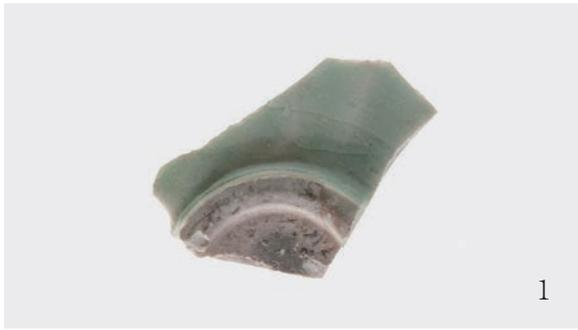


瓦質土器(鍋), 古瀬戸(瓶子), 常滑焼(甕), 青花(碗), 金属製品(鯉口金具)

図版62



土師器(火鉢), 瓦質土器(火鉢), 備前焼(壺), 常滑焼(甕), 白磁(香炉), 青磁(碗), 石製品(石斧)など



土師質土器(杯・碗・皿)，須恵器(蓋)，白磁(皿)，青磁(碗)，近世陶器(皿)

図版64



土師質土器(小皿), 須恵器(杯・碗), 黒色土器(碗), 瓦質土器(鍋・甕), 白磁(皿), 青磁(碗・皿)など



439



445



454



461



463



463



473



476



477



479

土師質土器(杯), 東播系須恵器(片口鉢), 古瀬戸(皿・壺または甕), 常滑焼(甕), 青磁(皿)など

図版66



古瀬戸(皿・壺または皿), 備前焼(播鉢・甕), 白磁(碗), 青磁(碗・皿), 石製品(砥石)など



536



544



545



545



546



549



552



553

561

564



570



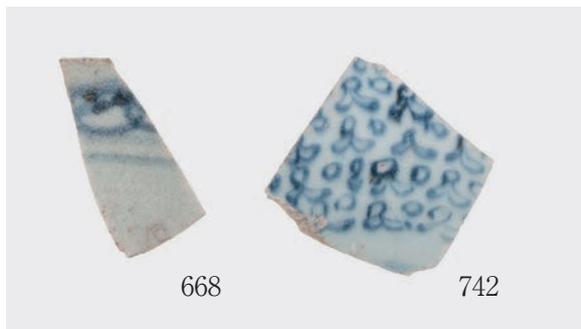
571

土師質土器(杯), 古瀬戸(瓶子), 白磁(皿), 青磁(碗・杯), 土製品(土錘), 金属製品(小札)

図版68

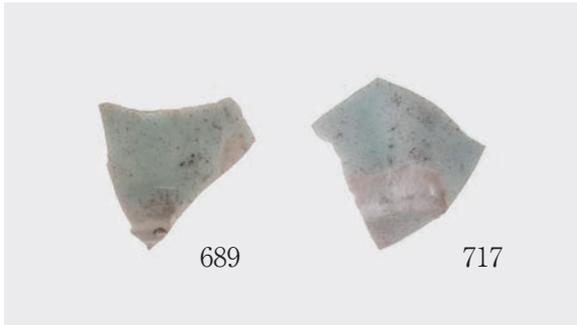


土師質土器(小皿), 瓦質土器(鍋), 古瀬戸(碗), 青磁(碗・杯か), 近世磁器(碗), 土製品(土錘)など



瓦器(椀), 備前焼(壺), 常滑焼(甕), 白磁(壺), 青磁(水注か), 青花(碗), 土製品(土錘)

図版70



備前焼(播鉢・壺・甕), 常滑焼(甕), 白磁(碗), 青白磁(合子), 青花(皿), 金属製品(鏃・鏃か)



土師器(釜), 備前焼(播鉢), 陶器(茶入か), 白磁(碗・杯・皿), 青磁(皿), 青花(皿)

図版72



古瀬戸(皿), 備前焼(播鉢), 青磁(碗), 青花(皿), 金属製品(小札・鞋)



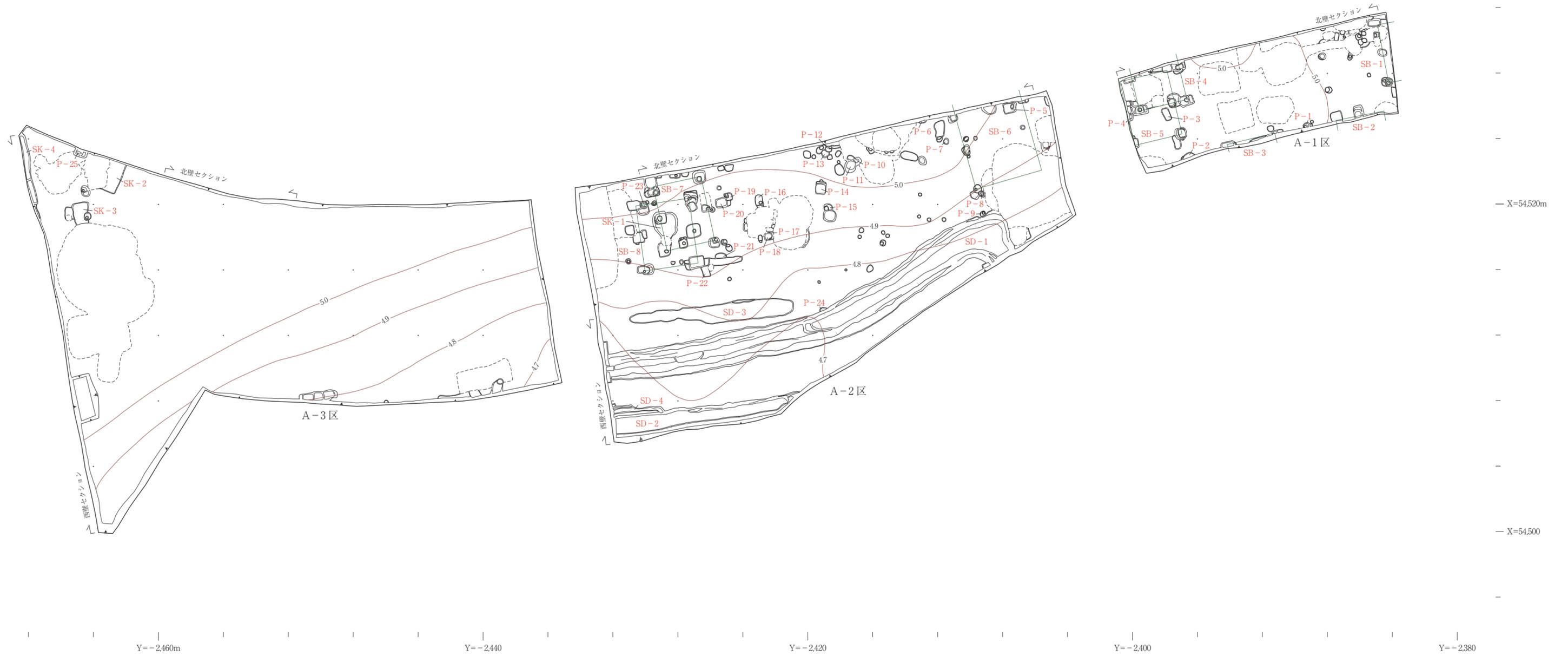
須恵器(甕), 備前焼(壺), 常滑焼(甕), 白磁(杯・香炉), 青磁(皿), 青花(皿), 石製品(砥石)など



備前焼(甕), 白磁(碗), 青磁(碗・小皿), 近世陶器(壺・鉢か), 近世磁器(蓋), 木製品(漆器蓋・不明)

報告書抄録

ふりがな		もりやまじょうせき・にのへいいせき						
書名		森山城跡・二ノ堀遺跡						
副書名		県道甲殿弘岡上線建設に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第158集						
編著者名		徳平涼子						
編集機関		公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原1437-1						
発行年月日		2023年3月10日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇'〃	東経 〇'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もりやまじょうせき 森山城跡	〒781-0325 こうちけんこうちし 高知県高知市 はるのちょうもりやまなか 春野町森山中	392014	340026	33° 29' 30"	133° 28' 19"	2020.5.7 } 2021.1.22 2021.10.8 } 2021.12.2	1,062㎡	記録保存調査
にのへいいせき 二ノ堀遺跡	〒781-0325 こうちけんこうちし 高知県高知市 はるのちょうもりやまなか 春野町森山中	392014	340027	33° 29' 30"	133° 28' 24"	2020.11.4 } 2020.12.19 2021.5.6 } 2021.10.19	2,490㎡	記録保存調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
もりやまじょうせき 森山城跡	城跡	中世	堀切 縦堀 土塁 通路状遺構 掘立柱建物跡 大型土坑跡 堀跡	1条 2条 1条 1条 1棟 2基 2条	土師質土器 東播系須恵器 古瀬戸 備前焼 常滑焼 貿易陶磁器 小札・鉄鏃	城跡に伴う遺構や曲輪を確認し、機能した時期が二時期あることが明らかとなった。		
にのへいいせき 二ノ堀遺跡	集落	古代 中世 近世	掘立柱建物跡 堀・柵列跡 土坑跡 溝跡 大型土坑跡 ピット	16棟 6基 123基 37条 18基 1,126個	土師質土器 東播系須恵器 瓦質土器 古瀬戸 備前焼 常滑焼 貿易陶磁器	二重の溝跡で囲まれた中世の屋敷跡を確認し、森山城跡と同時期に存在したことが判明した。		
要約	<p>森山城跡 城跡の北及び西斜面の調査を行い、14世紀後葉から15世紀前半と16世紀前半の二時期に機能したことが明らかとなった。上面の時期には大掛かりな造成を行い、広い曲輪を造り出していた。裾部では堀跡を確認し、自然流路と繋がっていたことも明らかとなった。</p> <p>二ノ堀遺跡 10世紀後半から17世紀にかけての遺構・遺物を確認した。中世では森山城跡が機能していた時期の二重の溝跡で囲まれた屋敷跡を確認した。また、森山城廃城後とみられる時期の屋敷跡や幕末の遺構も確認した。</p>							



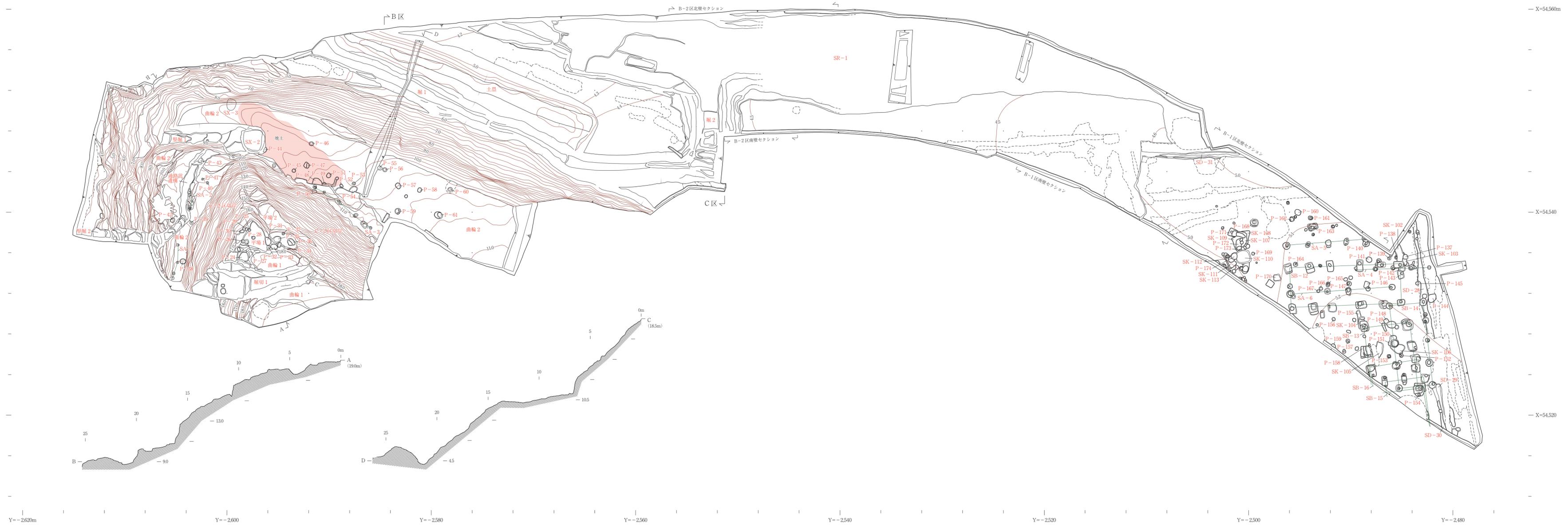
付図1 ニノ堀遺跡A区下面遺構平面図 (S=1/200)



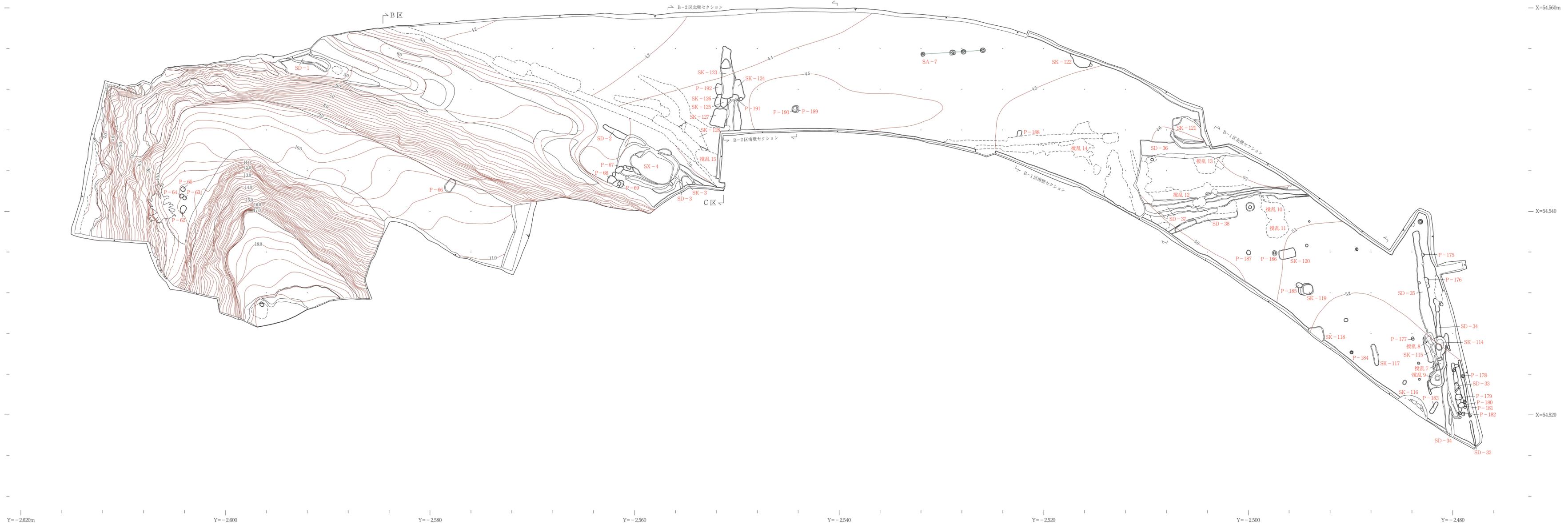
付図2 ニノ堀遺跡A区上面遺構平面図 (S=1/200)



付図3 ニノ堀遺跡・森山城跡B・C区中世下面遺構平面図 (S=1/200)



付図4 ニノ堀遺跡・森山城跡B・C区中世上面遺構平面図 (S=1/200)



付図5 ニノ堀遺跡・森山城跡B・C区近世遺構平面図 (S=1/200)

本書作成データ

システム：MacOS X (11.4)

ソフト：Adobe Photoshop®23.5.3, Adobe Illustrator®27.0.1, Adobe Indesign®18.0など

フォント：モリサワOTF基本7書体, Times New Roman Italicなど

データ：すべてデジタルデータで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第158集

森山城跡・二ノ堀遺跡

県道甲殿弘岡上線建設に伴う発掘調査報告書

2023年3月10日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社

